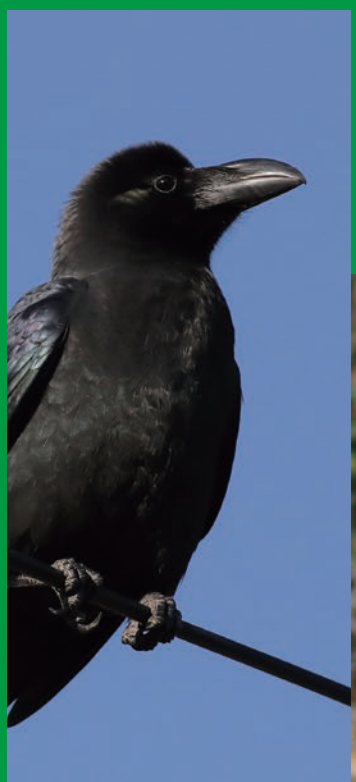
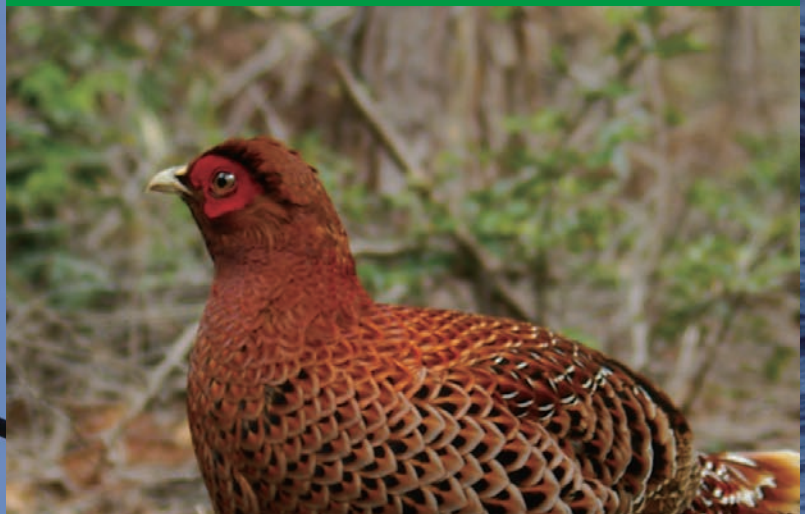
全国鳥類繁殖分布調査報告

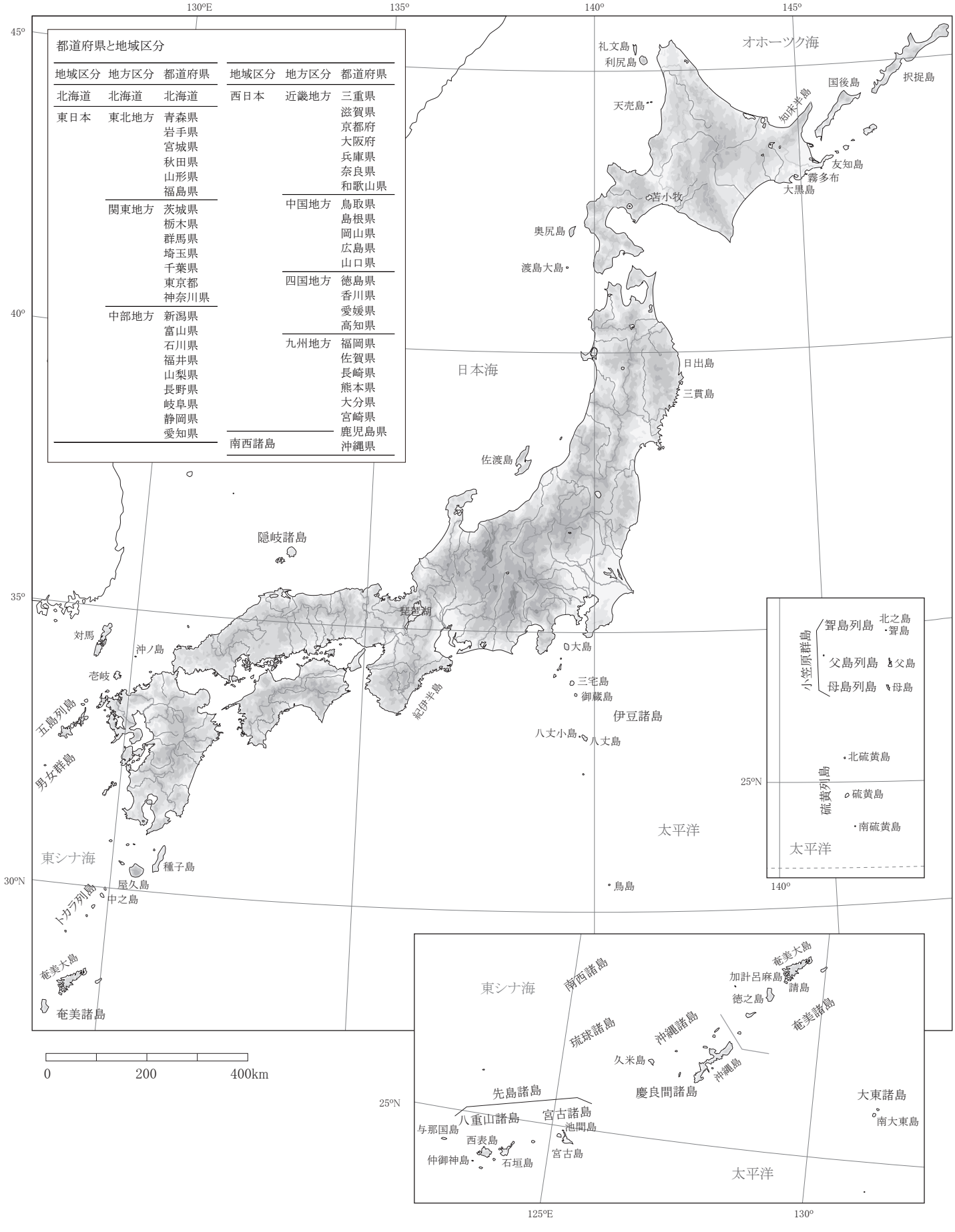
日本の鳥の今を描こう

2016-2021年

bird-atlas.jp

本書で使用した地名と地域区分



全国鳥類繁殖分布調査は，これまでに，環境省（環境庁）により第 2 回自然環境保全基礎調査（1974-1978 年実施。以下，1970 年代調査とする）および第 6 回自然環境保全基礎調査（1997-2002 年実施。以下，1990 年代調査とする）において行われ，今回の調査は 3 回目として実施したものです。全国に設置した 2,344 地点での現地調査およびアンケート調査により，繁殖鳥類の現状およびその変化について明らかにすることを目指しました。今回の調査は NGO が中心となり，環境省生物多様性センターも加わった「鳥類繁殖分布調査会」を組織して 2016-2021 年（2021 年は補足調査を実施）に実施しました。

5 年間で得られた調査の結果をもとに，日本で繁殖記録のある（あるいは可能性のある）278 種（+3 亜種）について分布図を作成することができました。また，増加している鳥，減少している鳥も明らかにすることができました。この成果は，今後，レッドリストの改定，保護区の選定など，自然環境保全施策に役立てられ，さらに解析を進め，学術研究にも貢献するものです。

今回の調査は，過去とは異なりボランティア調査の枠組で実施しました。多くの団体，個人の協力なしに，これだけの成果を上げることはできませんでした。現地調査に参加いただいた皆様，観察情報を提供いただいた皆様，調査の実施に協力いただいた共同実施団体，調査協力団体の皆様へ，ここに厚く御礼申し上げます。

2021 年 10 月　鳥類繁殖分布調査会

要約

2016年から2021年に，2,106人の調査参加者の協力の元，全国の2,344地点の調査を行った。また，全国から243,080件のアンケート調査結果が届いた。その結果，379種（うち21種は意図的・非意図的を問わず人為的に導入された外来鳥）が記録され，過去の記録も含め，日本で繁殖記録のある（あるいは可能性のある）278種（+3亜種）について分布図を作成し，とりまとめを行った。

日本国内では，北ほど記録種数が増加する傾向があり，夏鳥が占める割合も高くなった。記録個体数については，そのような傾向はなかった。

記録されたメッシュ数の最も多い種は，1970 年代調査（1974–1978 年），1990 年代調査（1997–2002年）と同様に，ウグイスであった。2010年代調査（2016–2021年）ではハシブトガラス，ヒヨドリがそれに次いだ。北海道は全国とは異なり，アオジが最も多かった。

1970年代調査から記録されたメッシュ数の経年変化をみると，1970年代調査は2位だったホオジロの順位が下がった。記録メッシュ数上位 10 種に占めるホオジロ，ハシボソガラス，スズメ，カワラヒワ，モズといった開けた場所に生息する種の種数は，1970年代調査は5種だったが，1990年代調査は4種，2010年代調査は3種と減り，逆に樹林性の種が増えていた。

2010年代調査で記録個体数の多い種はヒヨドリで，ウグイス，スズメと続いた。

比較可能な現地調査地点1,947地点の結果をもとに，1990年代調査と2010年代調査の結果を記録地点数の変化および総個体数の変化でまとめた。ガビチョウ，ソウシチョウの外来鳥を含んだ樹林性の鳥が上位を占めており，これまで減少が心配されていた夏鳥も増加している種が多かった。カワウなどの大型の魚食性の鳥も増加していた。

逆にコアジサシ，コサギなどの小型の魚食性の鳥は，記録地点数が減少しており，ハリオアマツバメ，アマツバメ，ツバメなどの飛行採食性の鳥，アマサギ，ツバメ，ムクドリ，スズメなど農地など開けた場所を利用する種は総個体数が減少していた。環境省レッドリスト2020掲載種ではアカモズとコアジサシが急激に減少，ヤイロチョウ，オジロワシ，クマゲラ，サンショウクイ，ミサゴは顕著に増加していた。また，環境省レッドリスト2020非掲載種で減少が顕著な種としては，アマサギ，コサギ，ゴイサギ，ササゴイ，ハリオアマツバメ，バンなどがあげられた。

アオジ，ビンズイなどの分布変化から，気候変動の影響が鳥の分布にも表れている可能性が示唆された。

目次

調査の概要 5
　調査の体制 5
　調査の方法 6
調査結果 9
　分布図について 9
　分布図の公開制限 9
　分布図ページのみかた 10

分布図
　エゾライチョウ 11
　ライチョウ 11
　ウズラ 12
　ヤマドリ 12
　キジ 13
　オシドリ 13
　オカヨシガモ 14
　ヨシガモ 14
　マガモ 15
　カルガモ 15
　ハシビロガモ 16
　シマアジ 16
　コガモ 17
　ホシハジロ 17
　キンクロハジロ 18
　シノリガモ 18
　ミコアイサ 19
　カワアイサ 19
　カイツブリ 20
　アカエリカイツブリ 20
　カンムリカイツブリ 21
　アカオネッタイチョウ 21
　シラオネッタイチョウ 22
　カラスバト 22
　キジバト 23
　キンバト 23
　アオバト 24
　ズアカアオバト 24
　コアホウドリ 25
　クロアシアホウドリ 25
　アホウドリ 26
　シロハラミズナギドリ 26
　オオミズナギドリ 27
　オナガミズナギドリ 27
　セグロミズナギドリ 28
　アナドリ 28
　クロコシジロウミツバメ 29
　ヒメクロウミツバメ 29
　コシジロウミツバメ 30
　オーストンウミツバメ 30
　コウノトリ 31
　アカアシカツオドリ 31
　カツオドリ 32
　ヒメウ 32
　チシマウガラス 33
　カワウ 33
　ウミウ 34
　サンカノゴイ 34
　ヨシゴイ 35
　オオヨシゴイ 35
　リュウキュウヨシゴイ 36
　ミゾゴイ 36
　ズグロミゾゴイ 37
　ゴイサギ 37
　ササゴイ 38
　アカガシラサギ 38
　アマサギ 39
　アオサギ 39
　ムラサキサギ 40
　ダイサギ 40
　チュウサギ 41
　コサギ 41
　クロサギ 42
　トキ 42
　タンチョウ 43
　シマクイナ 43
　オオクイナ 44
　ヤンバルクイナ 44
　クイナ 45
　シロハラクイナ 45
　ヒメクイナ 46
　ヒクイナ 46
　バン 47
　オオバン 47
　オニカッコウ 48
　ジュウイチ 48
　ホトトギス 49
　セグロカッコウ 49
　ツツドリ 50
　カッコウ 50
　ヨタカ 51
　ハリオアマツバメ 51
　アマツバメ 52
　ヒメアマツバメ 52
　タゲリ 53
　ケリ 53
　イカルチドリ 54
　コチドリ 54
　シロチドリ 55
　セイタカシギ 55
　ヤマシギ 56
　アマミヤマシギ 56
　オオジシギ 57
　アカアシシギ 57
　イソシギ 58
　タマシギ 58
　ミフウズラ 59
　ツバメチドリ 59
　クロアジサシ 60
　ヒメクロアジサシ 60
　ウミネコ 61
　オオセグロカモメ 61
　オオアジサシ 62
　コアジサシ 62
　マミジロアジサシ 63
　セグロアジサシ 63
　ベニアジサシ 64
　エリグロアジサシ 64
　アジサシ 65
　ウミガラス 65
　ケイマフリ 66
　ウミスズメ 66
　カンムリウミスズメ 67
　ウトウ 67
　エトピリカ 68
　ミサゴ 68
　ハチクマ 69
　カタグロトビ 69
　トビ 70
　オジロワシ 70
　カンムリワシ 71
　チュウヒ 71
　ツミ 72
　ハイタカ 72
　オオタカ 73
　サシバ 73
　ノスリ 74
　クマタカ 74
　オオコノハズク 75
　コノハズク 75
　リュウキュウコノハズク 76
　フクロウ 76
　アオバズク 77
　トラフズク 77
　コミミズク 78
　アカショウビン 78
　カワセミ 79
　ヤマセミ 79
　ブッポウソウ 80
　アリスイ 80
　コゲラ 81

コアカゲラ 81
オオアカゲラ 82
アカゲラ 82
クマゲラ 83
アオゲラ 83
ヤマゲラ 84
ノグチゲラ 84
チョウゲンボウ 85
チゴハヤブサ 85
ハヤブサ 86
ヤイロチョウ 86
サンショウクイ 87
リュウキュウサンショウクイ 87
サンコウチョウ 88
チゴモズ 88
モズ 89
アカモズ 89
カケス 90
ルリカケス 90
オナガ 91
カササギ 91
ホシガラス 92
ハシボソガラス 92
ハシブトガラス 93
キクイタダキ 93
ハシブトガラ 94
コガラ 94
ヤマガラ 95
ヒガラ 95
シジュウカラ 96
ヒバリ 96
ショウドウツバメ 97
ツバメ 97
リュウキュウツバメ 98
コシアカツバメ 98
イワツバメ 99
シロガシラ 99
ヒヨドリ 100
ウグイス 100
ヤブサメ 101
エナガ 101
オオムシクイ 102
メボソムシクイ 102
エゾムシクイ 103
センダイムシクイ 103
イイジマムシクイ 104
メグロ 104
メジロ 105
マキノセンニュウ 105
シマセンニュウ 106
ウチヤマセンニュウ 106
オオセッカ 107
エゾセンニュウ 107
オオヨシキリ 108
コヨシキリ 108
セッカ 109
ゴジュウカラ 109
キバシリ 110
ミソサザイ 110
ムクドリ 111
コムクドリ 111
カワガラス 112
マミジロ 112
トラツグミ 113
オオトラツグミ 113
カラアカハラ 114
クロツグミ 114
シロハラ 115
アカハラ 115
アカコッコ 116
コマドリ 116
アカヒゲ 117
ノゴマ 117
コルリ 118
ルリビタキ 118
ジョウビタキ 119
ノビタキ 119
イソヒヨドリ 120
サメビタキ 120
コサメビタキ 121
キビタキ 121
オオルリ 122
イワヒバリ 122
カヤクグリ 123
ニュウナイスズメ 123
スズメ 124
イワミセキレイ 124
ツメナガセキレイ 125
キセキレイ 125
ハクセキレイ 126
セグロセキレイ 126
ビンズイ 127
カワラヒワ 127
オガサワラカワラヒワ 128
マヒワ 128
ベニマシコ 129
ギンザンマシコ 129
イスカ 130
ウソ 130
シメ 131
コイカル 131
イカル 132
ホオジロ 132
ホオアカ 133
ミヤマホオジロ 133
シマアオジ 134
ノジコ 134
アオジ 135
クロジ 135
コジュリン 136
オオジュリン 136
コジュケイ 137
インドクジャク 137
コリンウズラ 138
コクチョウ 138
コブハクチョウ 139
カワラバト（ドバト） 139
シラコバト 140
セキセイインコ 140
ホンセイインコ 141
ダルマインコ 141
オキナインコ 142
ヤマムスメ 142
サンジャク 143
ガビチョウ 143
ヒゲガビチョウ 144
カオグロガビチョウ 144
カオジロガビチョウ 145
ソウシチョウ 145
ハッカチョウ 146
インドハッカ 146
キンランチョウ 147
ベニスズメ 147
コシジロキンパラ 148
シマキンパラ 148
ギンパラ 149
キンパラ 149
ヘキチョウ 150
ブンチョウ 150
コウカンチョウ 151

日本の鳥の現状 152
増減種とその共通点 155
　増加した種 155
　減少した種 157
　ホオジロ類の変化 161
レッドリストについて 161
緯度標高と繁殖分布 166
成果公開とデータ利用 167
調査協力者 171

調査の概要

鳥類の繁殖状況および分布の調査である「全国鳥類繁殖分布調査」は，これまでに環境省の「自然環境保全基礎調査」の一環として 1974-1978 年に「第 1 回鳥類繁殖分布調査」（以下，1970 年代調査とする）」，1997-2002 年に「第 2 回鳥類繁殖分布調査」（以下，1990 年代調査とする）が行われている。

今回の「全国鳥類繁殖分布調査」は，自然環境保全基礎調査の一環として位置づけられるものであるが，NGO が中心となって，2014 年から準備を開始し，2016 年から 2021 年（2021 年は未調査コースでの補足調査を実施）に調査が行われた。

1. 調査の体制

野鳥観察者や研究者とのネットワークを持つ NGO 等 5 団体と環境省生物多様性センターからなる主催 6 団体で「鳥類繁殖分布調査会」を構成し実施した。また，都道府県単位での調査への参加の呼びかけ等を行う共同実施団体 5 機関，調査参加者の募集等を行う調査協力団体として 57 団体が参加した。さらに，調査結果の解析のため，15 人の専門家による解析ワーキンググループを構成した。

また，本調査は，バードリサーチ調査研究支援プロジェクト（2014-2016 年），サントリー世界愛鳥基金（2016-2018 年），自然保護助成基金（2017 年），セブン-イレブン記念財団（2019-2020 年），経団連自然保護基金（2020-2021 年）より支援を受け実施した。

主催団体

特非）バードリサーチ（事務局），公財）日本野鳥の会，公財）日本自然保護協会，日本鳥類標識協会，公財）山階鳥類研究所，環境省生物多様性センター

共同実施団体（法人格省略）

群馬県立自然史博物館，国立環境研究所，長野県環境保全研究所（自然環境部），福井県自然保護センター，酪農学園大学

調査協力団体（法人格省略）

日本野鳥の会秋田県支部，日本野鳥の会旭川支部，日本野鳥の会石川，日本野鳥の会茨城県，日本野鳥の会西表支部，日本野鳥の会愛媛，日本野鳥の会岡山県支部，日本野鳥の会香川県支部，日本野鳥の会鹿児島，日本野鳥の会神奈川支部，日本野鳥の会北九州，日本野鳥の会岐阜，日本野鳥の会熊本県支部，日本野鳥の会高知支部，日本野鳥の会郡山支部，日本野鳥の会埼玉，日本野鳥の会佐賀県支部，日本野鳥の会佐渡支部，日本野鳥の会札幌支部，日本野鳥の会滋賀，日本野鳥の会静岡支部，日本野鳥の会島根県支部，日本野鳥の会滝川支部，日本野鳥の会筑豊支部，日本野鳥の会千葉県，日本野鳥の会東京，日本野鳥の会遠江，日本野鳥の会徳島県支部，日本野鳥の会栃木，日本野鳥の会鳥取県支部，日本野鳥の会苫小牧支部，日本野鳥の会富山，日本野鳥の会奈良支部，日本野鳥の会新潟県，日本野鳥の会ひょうご，日本野鳥の会弘前支部，日本野鳥の会広島県支部，日本野鳥の会福井県，日本野鳥の会福岡支部，日本野鳥の会ふくしま，日本野鳥の会富士山麓支部，日本野鳥の会三重，日本野鳥の会南富士支部，日本野鳥の会宮城県支部，日本野鳥の会宮崎県支部，日本野鳥の会山形県支部，日本野鳥の会山口県支部，日本野鳥の会和歌山県支部，油山市民の

森自然観察センター，信州野鳥の会，八王子・日野カワセミ会，東三河野鳥同好会，エコリス，地域環境計画，東京環境工科専門学校，ホシザキグリーン財団，緑生研究所

解析ワーキンググループ

赤坂宗光（東京農工大学），姉崎智子（群馬県立自然史博物館），上野裕介（石川県立大学），大澤剛士（東京都立大学），片山直樹（農業環境技術研究所），曽我昌史（東京大学），高川晋一（公財 日本自然保護協会），直江将司（森林総合研究所），深澤圭太（国立環境研究所），深野祐也（東京大学），藤田 剛（東京大学），三上 修（北海道教育大学），宮下 直（東京大学），森本 元（公財 山階鳥類研究所），山浦悠一（森林総合研究所）

2. 調査の方法

本調査では，2016 年から 2021 年にかけて，現地調査とアンケート調査（文献や観察記録など）で情報を収集した。2020 年に調査を完了させる予定だったが，新型コロナウイルス感染症の流行もあって，現地調査を実施できない場所が生じたため，2021 年に現地調査未調査地において，補足調査を行った。

(1) 現地調査

現地調査は，全国に設置した 2,344 地点で調査を実施した（図 1）。各地点は約 3 kmの調査コースと 2 か所の定点からなっており，鳥類の繁殖期である 4-6 月にコースを時速 2km 程度で歩きながら，定点では 30 分滞在して，調査者から 50m 以内，それ以遠に分けて，種名と個体数を記録した。また，「繁殖の可能性と観察事項の判定基準」（表 1）を用いて，観察コードを記入した。これらのデータは，識別や記入の誤りを点検・問合せ・修正したのちにデータベースに登録した。

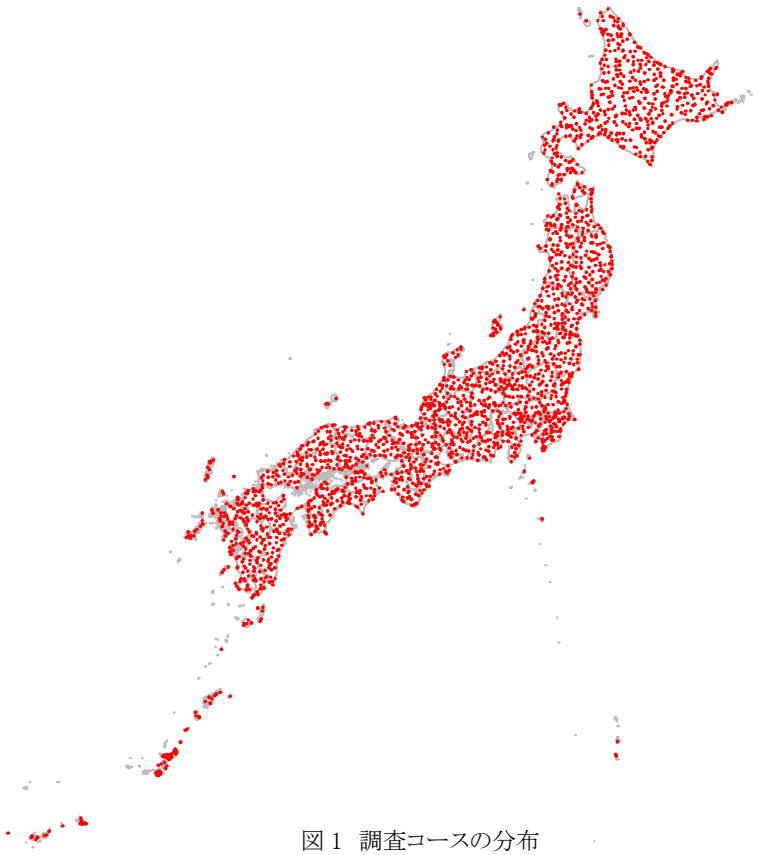


図 1 調査コースの分布

また，調査は基本的に，1990 年代調査と同じ調査コースで実施したが，20 年程度経過しており，環境変化等でコースが消失している場合があった。調査コースを変更せざるを得なかった場合は，変更後のコースや定点を記録し，変更割合を記録した。あわせて農地が放棄されたなど，前回からの環境の変化がわかる場合は環境変化についての情報も収集した。

表 1　繁殖の可能性と観察事項の判定基準

○繁殖の可能性の基準

繁殖ランク	繁殖可能性の基準
A	繁殖を確認した
B	繁殖の確認はできなかったが、繁殖の可能性がある
C	生息を確認したが、繁殖の可能性は、何ともいえない
D	姿・声を確認したが、繁殖の可能性は、おそらくない
E	生息は確認できなかったが、環境から推測して、繁殖期における生息が考えられる

○観察事項の判定基準

繁殖ランク	観察コード	観察事項
成鳥について		
A	10	成鳥が巣あるいは巣のあるらしい所にくり返し出入りしている
A	11	成鳥が抱卵又は抱雛している。あるいはしているようだ
A	12	成鳥が巣のあるらしい所にとびこむと同時にヒナの餌をねだる声がきかれた
A	13	成鳥がヒナのフンを運搬している
A	14	成鳥が巣のヒナに餌を運搬している（餌をくわえたまま観察者を警戒し移動する気配のない場合を含む）
A	15	擬傷をみた
B	30	その種が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずり（キツツキ類のドラミングを含める）を聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く
B	31	求愛行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く
B	32	交尾行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く
B	33	威嚇行動、警戒行動により、付近に巣又はヒナの存在が考えられる
B	34	巣があると思われる所に成鳥が訪れた。ただし、そこが塒（ねぐら）である場合は除く
B	35	造巣行動（巣穴堀りを含む）を見た
B	36	成鳥が巣材を運搬している。ただし、明らかに周囲に巣を構えていると思われる場合に限る
B	37	成鳥がヒナへの餌を運搬しているが、巣が周囲にあるかどうかわからない
C	50	その種が営巣し得る環境で繁殖期にその種を確認したが、他には繁殖の兆候が認められない。ただし冬鳥または旅鳥は過去にその地方で繁殖の記録があるもの
C	51	繁殖期に鳴き声を確認したが、さえずりかどうかわからない
D	60	その種の生息を確認したが、その周囲にその種が営巣し得る環境はないと思われる。例）アマツバメ類、ワシタカ類の上空通過を確認したが、その周囲には営巣可能な環境はないと考
D	61	冬鳥または旅鳥で、繁殖期に生息がみられたが、過去にその地方で繁殖の記録がないもの
巣について		
A	16	巣立ち後の巣がある。ただし2016 年以降に使用された巣であること
A	17	卵のある巣をみた
A	18	成鳥がおちついてすわっている巣の近くで、その種が営巣し得る環境でその種の卵殻がみつかった
B	38	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥がそこに来るのを認めなかった
ヒナについて		
A	19	ヒナのいる巣を見た
A	20	ヒナの声をきいた
A	21	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちビナを見た
B	39	かなり移動可能と思われる巣立ちビナを見た
B	40	家族群を見た
鳥類標識調査等において捕獲した場合		
A	22	鳥類標識調査等で腹中に卵を触れる雌成鳥を捕獲した。
A	23	鳥類標識調査等で顕著な抱卵斑（指標5）を持つ雌成鳥（場合によっては雄成鳥）を、繁殖期間中の異なった時期に複数回捕獲、もしくは同様の指標5の個体を複数捕獲した。
A	24	鳥類標識調査等で幼綿羽が残る、もしくは全身が幼羽の状態で、第一回冬羽への換羽がまだ始まっていない個体を捕獲した。
B	41	鳥類標識調査等で顕著な抱卵斑（指標5）を持つ雌成鳥（場合によっては雄成鳥）を1羽のみ、1回だけ捕獲した。
B	42	鳥類標識調査等で巣材をくわえた成鳥を捕獲した、もしくは捕獲個体の近くに明らかに巣材と思われるものがあった。
B	43	鳥類標識調査等で第一回冬羽へ換羽中の幼鳥を捕獲した。
C	52	鳥類標識調査等で総排泄腔の顕著な突出を見せる雄成鳥を捕獲した。

(2)アンケート調査

アンケート調査は，現地調査の前後に観察した種や任意の地点で観察した記録などについて，観察地点(2 次メッシュより詳細な位置情報)，種名，観察日，観察コード(表 1)を調査参加者から情報収集した。また，調査参加者以外の鳥類観察者からも情報を収集することができるように，ウェブサイト内のアンケートフォームからもデータを収集した。

また，文献情報やモニタリングサイト 1000 などの別調査のデータ，バードリサーチの野鳥観察データベースに登録された記録なども収集した。

これらのデータは，事務局で識別や記入の誤りをチェックしたのちに，データベースに登録した。

3. 分布図の作成

現地調査とアンケート調査のデータを 20 ㎞メッシュに集約し，もっとも観察コードの小さい(繁殖ランクの高い)ものを採用し，分布図にした。

分布図にはアンケート結果のデータが含まれているため，アンケートの努力量によっては，実際には分布は変化していないにもかかわらず，分布が拡大したり縮小したりしたようにみえてしまう危険性がある。1970 年代調査の結果は現地調査データなど，詳細なデータが残っておらず，メッシュ数以外の比較ができない。そのため，メッシュによる分布変化の検討も行ったが，1990 年代調査と今回の調査の比較においては，現地調査結果のみに基づく比較も行った。現地調査も，コースの変更の大きい場所では，鳥の増減ではなく，コースの変化を反映した結果になってしまう可能性がある。そこで，比較にあたっては，コース変更の度合いが 25％未満で，かつ，規定の方法で調査を行うことのできた 1,947 地点を対象として比較した。

調査結果

2016 年 1 月から 2021 年 7 月までに，合計 2,106 人の調査参加者が現地調査あるいはアンケート調査により，調査結果を報告した。現地調査は，全国の 2,344 地点で調査を行った。調査コースを変更なく調査できたコースが 1,617 コース(69.0%)，24%以下の変更が 344 コース(14.7%)，25-49%の変更が 143 コース(6.1%)，50%以上の変更が 129 コース(5.5%)，全面変更が 84 コース(3.6%)，新規コースが 27 コース(1.2%)だった。また，全国から 243,080 件のアンケート調査結果を得た。

その結果，379 種(うち 21 種は外来鳥)の鳥類が記録された。このうち，日本で繁殖記録のある(あるいは可能性のある)278 種(+3 亜種，リュウキュウサンショウクイ，オオトラツグミ，オガサワラカワラヒワ)について分布図を作成した。

(1)分布図について

今回の調査で，1990 年代調査の報告書(環境省自然環境局生物多様性センター 2004)では分布図が作られておらず，今回新たに掲載した種は，後述する公開制限に基づくものを除くと，アカオネッタイチョウ，シラオネッタイチョウ，コアホウドリ，シロハラミズナギドリ，オナガミズナギドリ，セグロミズナギドリ，アナドリ，アカアシカツオドリ，ヒメクロアジサシ，セグロアジサシ，カタグロトビ，コミミズク，オオムシクイ，カラアカハラ，ジョウビタキ，インドクジャク，コクチョウ，ダルマインコ，サンジャク，ヒゲガビチョウ，カオジロガビチョウ，インドハッカ，ギンパラ，キンパラである。そのうち，アカアシカツオドリ，カタグロトビ，コミミズク，カラアカハラ，ジョウビタキは 1990 年代調査以降に新たに(あるいは定常的に)日本で繁殖するようになった鳥である。今回新たに掲載された種の多くを占めている海鳥類は，離島で繁殖しているため，これまでも繁殖していたが情報収集が難しく，前回は掲載されていなかった種である。1990 年代調査以降，離島への海鳥ウォッチングクルーズや環境省のモニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が行われるようになり海鳥の情報が集まるようになったため，今回調査では分布図を作成することができた。なお，オオムシクイ，キンパラ，ギンパラは分類上の変更に基づき新たに掲載された種である。

逆にスズガモ，タシギ，オオモズ，ツグミ，カシラダカは 1990 年代調査の報告書では掲載されていたが，今回は掲載していない。これらの種については，これまでに国内での繁殖は記録されておらず，今回の調査でも繁殖の可能性のある情報は得られなかったためである。

(2)分布図の公開制限について

1990 年代調査の報告書では，記録された種でも，猛禽類などの希少種については，違法な捕獲や写真撮影等の「人による直接的な影響」により，対象種の存在が脅かされる可能性から分布図の掲載を制限した。本報告でも，イヌワシとシマフクロウについては，同様の観点から掲載しなかったが，コウノトリ，トキ，ウミスズメ，ミサゴ，ハチクマ，オジロワシ，カンムリワシ，チュウヒ，オオタカ，クマタカ，チゴハヤブサ，ハヤブサについては，20km メッシュレベルの分布図では保護上の問題は小さいとし，掲載することとした。

(3)分布図ページのみかた

分布図には 1970 年代調査(1974-1978 年), 1990 年代調査(1997-2002 年), そして 2010 年代調査(2016-2021 年)の水平分布図と 2010 年代調査の垂直分布図を示した。

水平分布図は, 現地調査とアンケート調査の全てのデータを用いて,

- A 繁殖を確認した
- B 繁殖の確認はできなかったが, 繁殖の可能性がある
- C 生息を確認したが, 繁殖の可能性は, 何ともいえない

のとおり繁殖ランクが示されている。

また, 2010 年代調査については

- D 生息を確認したが, 繁殖の可能性は, おそらくない

も示した。D ランクには冬鳥や旅鳥(観察コード 61)も含まれるが, これは図示せず, 周囲では繁殖の可能性はないが, 採食のために訪れた記録(観察コード 60)のみを図示した。

あわせて, A～C のメッシュ数および 1990 年代と今回の現地調査の確認地点数(コース変更が軽微で調査方法の不備なく現地調査を実施できた, 1,947 地点に基づく情報)を表として示した。

垂直分布図は, 調査地の標高がわかっている現地調査のデータを用いて示した。アンケート調査のデータは観察地点の標高が分からないため, 垂直分布図の作成には用いていない。そのため, 水平分布図で点がおちている場所に垂直分布図で点がおちていないことがある。

分布図は, ●で調査地の分布を示し, ●で観察された地点を示している。

QR コードからは, その鳥の鳴き声や, 生態等の詳細(バードリサーチの生態図鑑)といった追加情報を知ることができる。

各種の計測値(全長や翼長など)の出典は巻末の付表で確認することができる。各種の写真は, 巻末の付表に示した撮影者から提供いただいた。

注) 分布図に示されている繁殖ランク A はスズメのように巣内ヒナの鳴き声で巣に気づくような種を除き, 現地調査でそれを確認することは困難で, アンケート情報の多寡に依存する度合いが大きい。全般に 1970 年代に繁殖ランク A の記録が多い。1970 年代の詳細な記録が残されていないためはっきりしないが, アンケート情報の充実により, こうした傾向が出ている可能性が考えられる。

エゾライチョウ　分類:キジ目キジ科　Hazel Grouse　*Tetrastes bonasia*

全長:36cm　翼長:165–177mm　ふ蹠長:34–38mm　体重:♂339–432g ♀319–421g

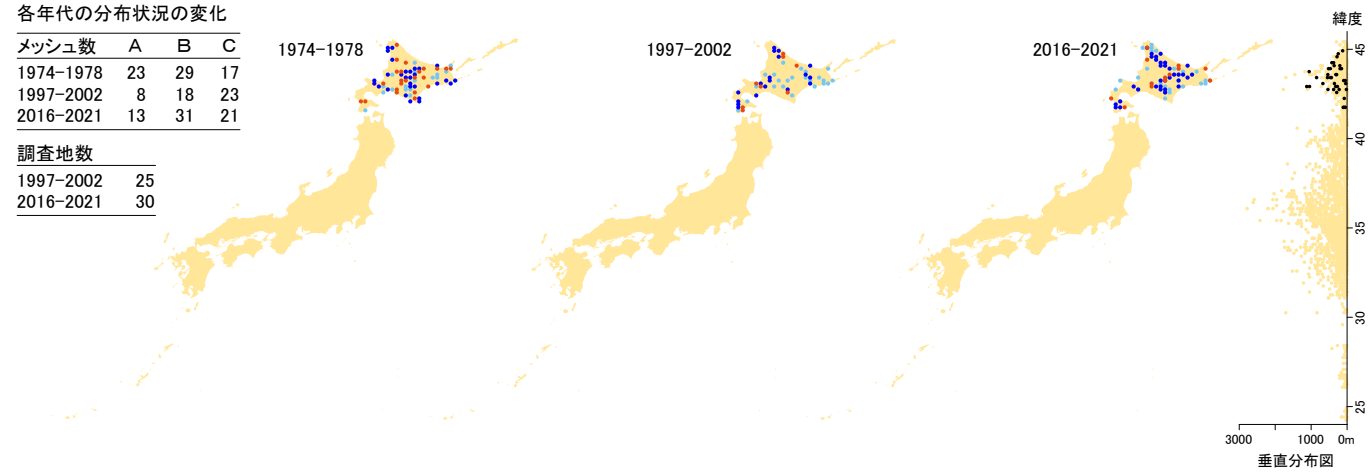
環境省レッドリスト:　情報不足

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	23	29	17
1997–2002	8	18	23
2016–2021	13	31	21

調査地数

1997–2002	25
2016–2021	30



北海道に留鳥として分布する。1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数が減少したが，2010 年代は再び増加している。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，エゾライチョウが記録できた地点数は，25 地点から 30 地点へと増加しており，近年は回復傾向にあるものと考えられる。

ライチョウ　分類:キジ目キジ科　Rock Ptarmigan　*Lagopus muta*

全長:35.0–37.8cm　翼長:175–197mm　ふ蹠長:30–37mm　体重:　424.9–604.1g

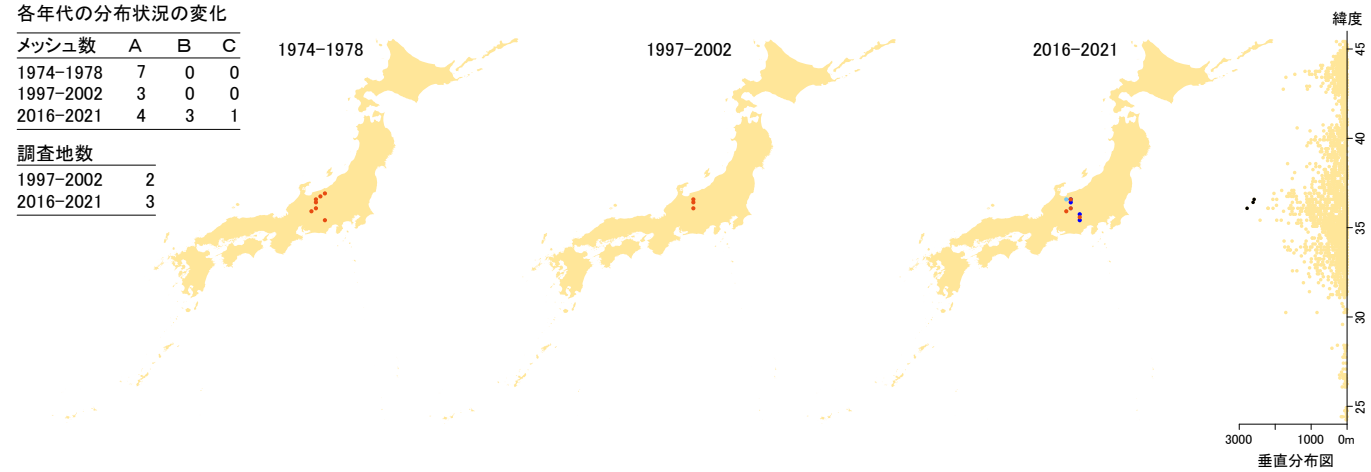
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	7	0	0
1997–2002	3	0	0
2016–2021	4	3	1

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	3



中部山岳地帯の高山帯に生息する。ハシブトガラスなど捕食者がライチョウの生息地へ分布を拡げていること，ニホンジカなどの分布拡大による高山植生の変化などで，個体数が減少している。分布図では 1990 年代と比べて分布域が広がっているが，アンケート調査の充実によるものであり，実際に分布が広がっているわけではないと考えられる。

ウズラ　分類:キジ目キジ科　Japanese Quail　*Coturnix japonica*

全長:17–19cm　翼長:97–108mm　ふ蹠長:♂31–34mm ♀32–35mm　体重:♂84–114g ♀90–115g

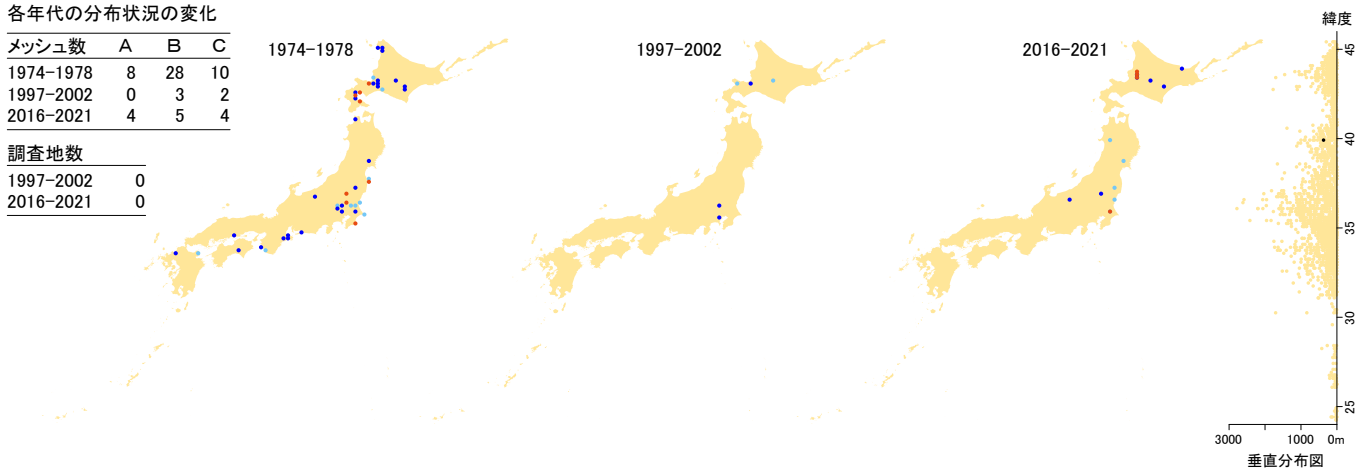
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	28	10
1997–2002	0	3	2
2016–2021	4	5	4

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



本州中部以北で繁殖し，湿地や草原に生息する。狩猟鳥獣だったが，個体数の減少にともない，2007 年から捕獲禁止措置がとられ，2013 年からは狩猟鳥獣から外された。この施策との因果関係はわからないが，ウズラの観察例は増えており，分布図にもそれが反映されている。

ヤマドリ　分類:キジ目キジ科　Copper Pheasant　*Syrmaticus soemmerringii*

翼長:♂205–230mm ♀192–219mm　ふ蹠長:♂57–69mm ♀53–60mm　体重:♂943–1348g ♀745–1000g

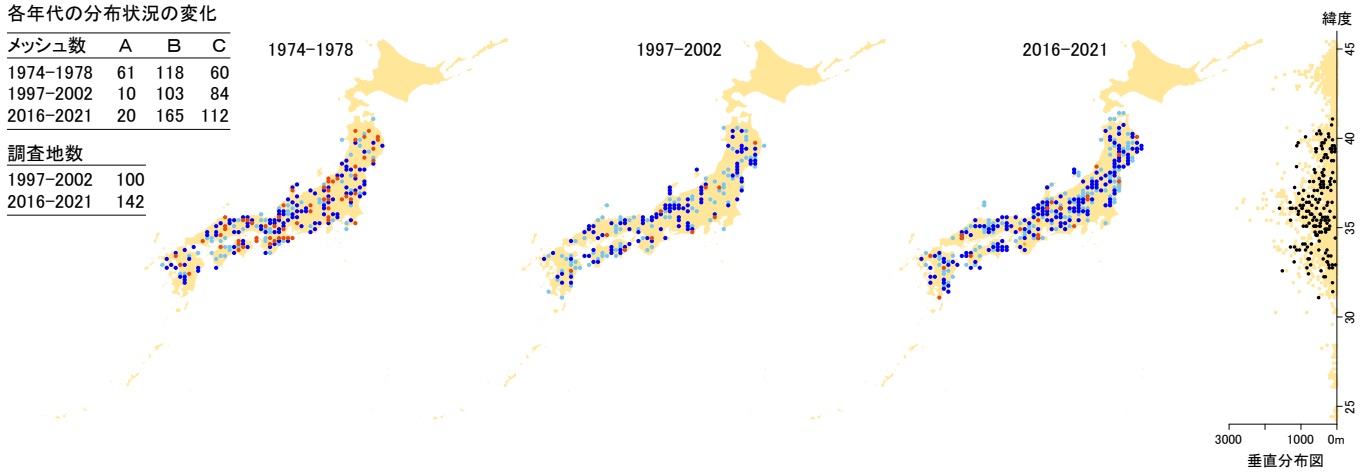
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧(亜種　アカヤマドリ，亜種　コシジロヤマドリ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	61	118	60
1997–2002	10	103	84
2016–2021	20	165	112

調査地数

1997–2002	100
2016–2021	142



本州，四国，九州に生息する。5 亜種に分けられ，2 亜種が準絶滅危惧に選定されている。1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数が減少したが，2010 年代は再び増加した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，ヤマドリが記録できた地点数は，100 地点から 142 地点へと増加しており，近年は回復傾向にあるものと考えられる。

キジ　分類:キジ目キジ科　Green Pheasant　*Phasianus colchicus*

翼長:♂ 215–240mm ♀ 195–207mm　ふ蹠長:♂ 64–73mm ♀ 55–64mm　体重:♂ 847–1387g ♀ 692–970g

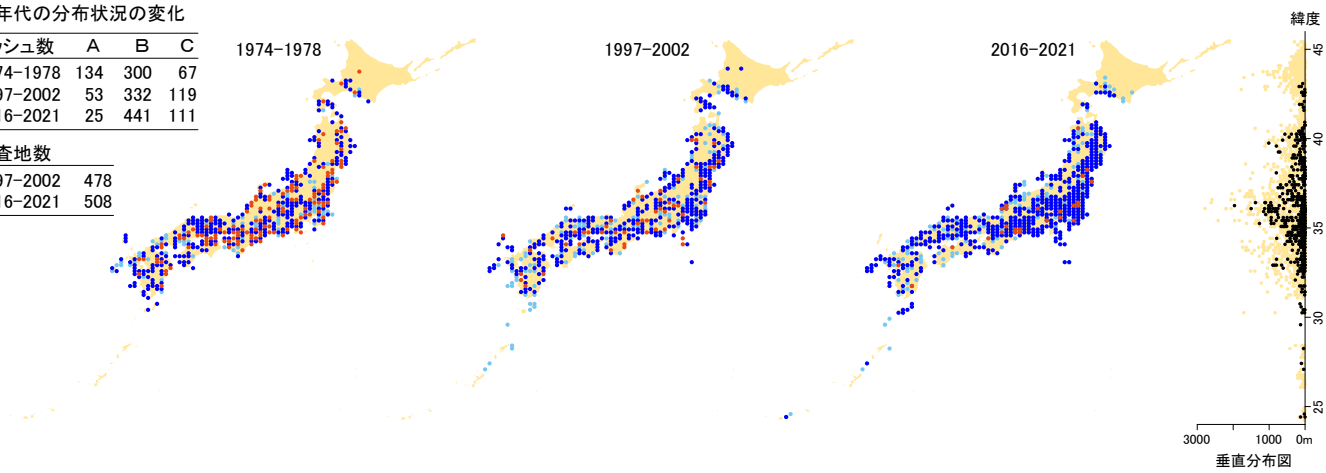
環境省レッドリスト: —

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	134	300	67
1997–2002	53	332	119
2016–2021	25	441	111

調査地数

1997–2002	478
2016–2021	508



本州，四国，九州の林縁や草地，農耕地に生息する。自然分布のほかに北海道や対馬，南西諸島，伊豆諸島に亜種コウライキジや亜種不明のキジが放鳥され，定着している。分布は拡大しており，特に北日本や日本海側，標高の高い場所で顕著である。地上性の鳥であるため，積雪の減少が影響している可能性が考えられる。

オシドリ　分類:カモ目カモ科　Mandarin Duck　*Aix galericulata*

全長:45cm　翼長:214–250mm　ふ蹠長:33–41mm　体重:443–550g

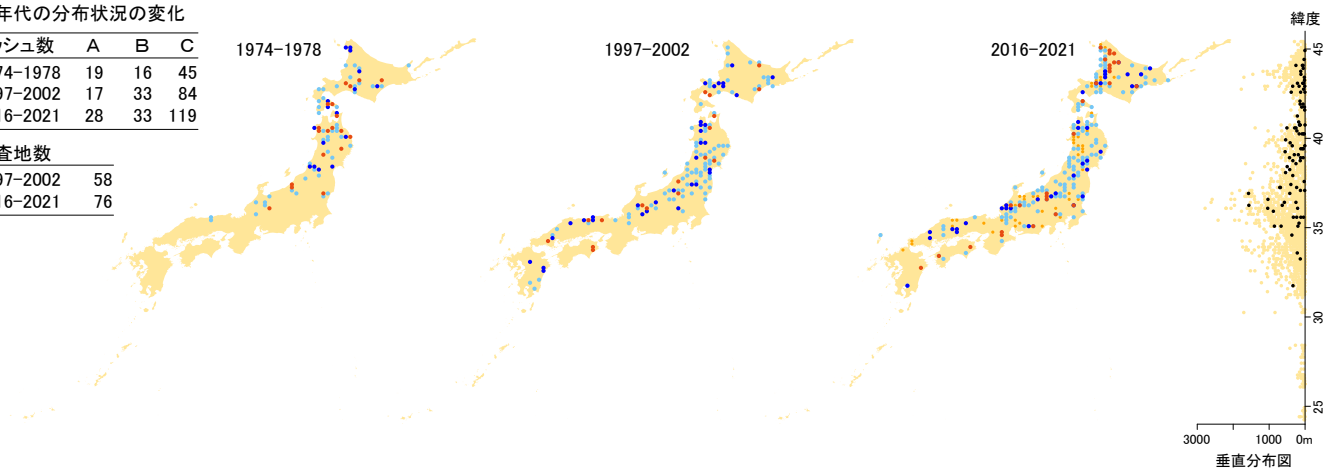
環境省レッドリスト: 情報不足

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	19	16	45
1997–2002	17	33	84
2016–2021	28	33	119

調査地数

1997–2002	58
2016–2021	76



九州以北で繁殖するが，本州中部以北に多い。1970 年代から分布は拡大しており，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，オシドリが記録できた地点数は，58 地点から 76 地点へと増加していた。樹林性の種は分布拡大傾向にあり，森林の成熟に伴い，オシドリが営巣するような樹洞も増えている可能性がある。

オカヨシガモ　分類:カモ目カモ科　Gadwall　*Anas strepera*

嘴峰長:41–47mm　翼長:♂242–280mm ♀240–260mm　ふ蹠長:37–43mm　体重:740–1150g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	1
1997–2002	0	0	3
2016–2021	1	0	2

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	4

主に冬鳥で，北海道や本州の一部で繁殖の記録がある。ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中緯度地域で繁殖する。これまでの記録でも，繁殖の可能性のある記録は北海道で数地点の記録があるのみだが，2010 年代でも道東オホーツク海側で繁殖記録や観察記録があった。

ヨシガモ　分類:カモ目カモ科　Falcated Duck　*Anas falcata*

全長:43.7–51.5cm　翼長:220–253mm　ふ蹠長:35–42mm　体重:566–865g

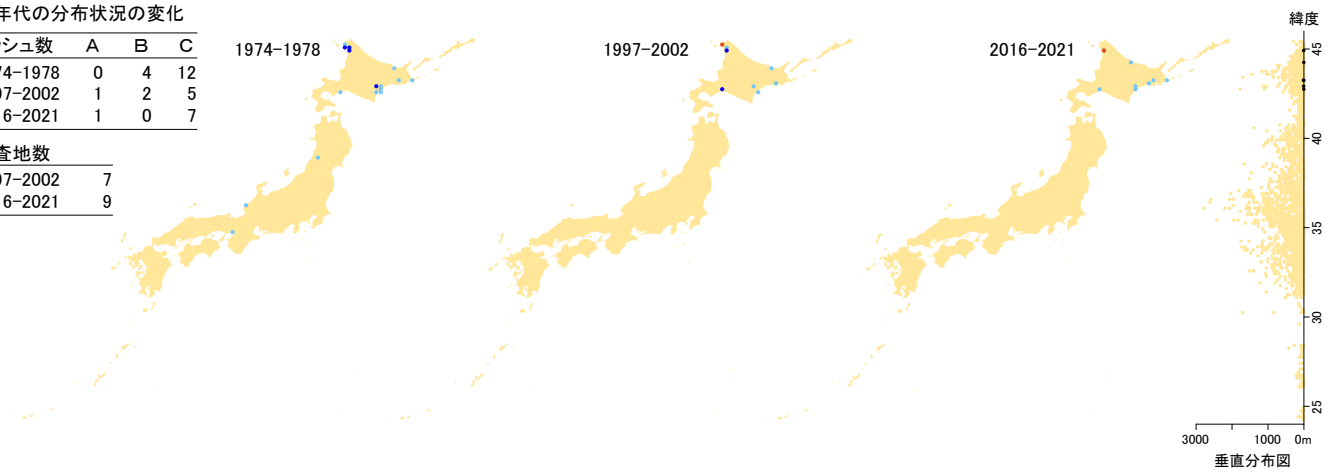
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	4	12
1997–2002	1	2	5
2016–2021	1	0	7

調査地数

1997–2002	7
2016–2021	9



主に冬鳥で，北海道の一部で繁殖し，ユーラシア大陸の中緯度地域で繁殖する。これまでの記録でも，繁殖の可能性のある記録は北海道を中心とした地域で数地点の記録があるのみだが，2010 年代の記録地点も北海道の 8 メッシュのみである。

マガモ　分類:カモ目カモ科　Mallard　*Anas platyrhynchos*

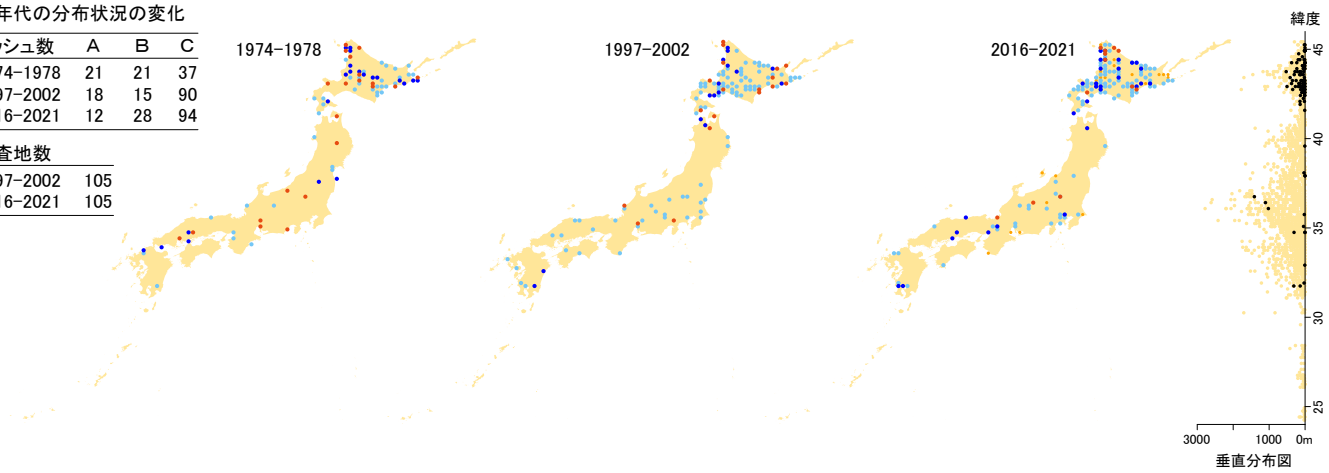
全長:56–65cm　翼長:239–300mm　ふ蹠長:40.0–51.5mm　体重:690–1500g

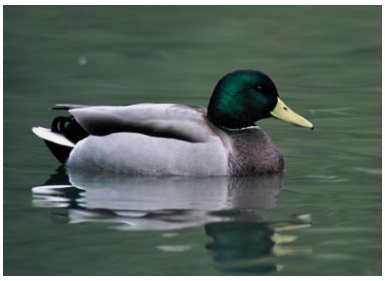
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	21	21	37
1997–2002	18	15	90
2016–2021	12	28	94

調査地数	
1997–2002	105
2016–2021	105





主に冬鳥で，北海道で繁殖し，本州の一部でも繁殖する。近年は「アイガモ」の野生化したものの繁殖例が増えており，マガモなのか「アイガモ」なのかの判断が困難になっているため増減についての判断は難しい。ただし，採食地として水のたまった水田を好み，農地整備により，そうした水田が減ったためか，環境省の「ガンカモ類の生息調査」で記録される越冬期の個体数は減少している。

カルガモ　分類:カモ目カモ科　Eastern Spot-billed Duck　*Anas zonorhyncha*

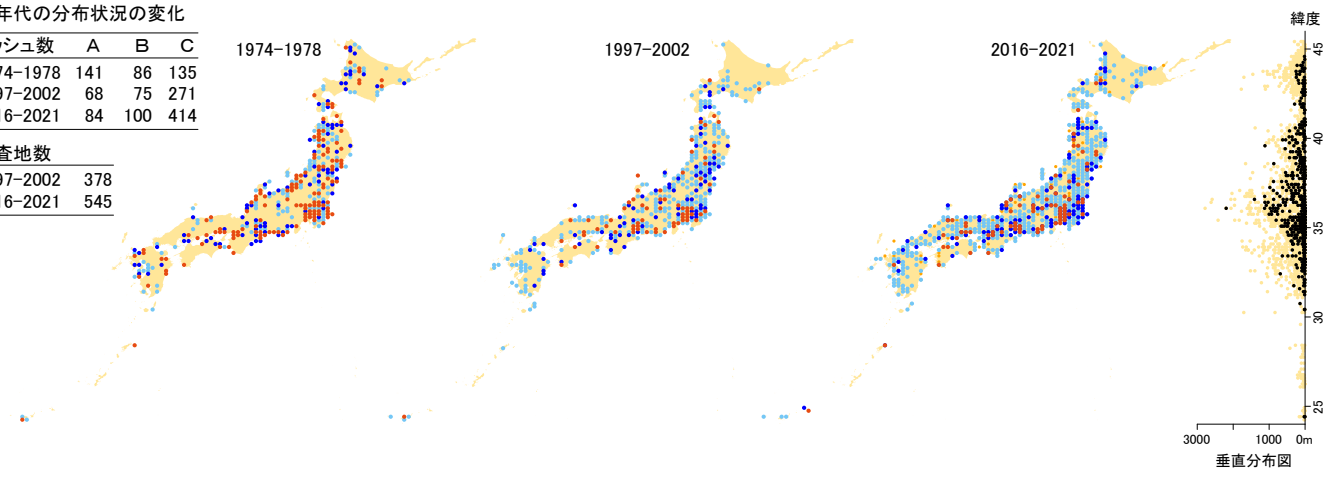
全長:51.5–64.5cm　翼長:245–292mm　ふ蹠長:41–51mm　体重:750–1156g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	141	86	135
1997–2002	68	75	271
2016–2021	84	100	414

調査地数	
1997–2002	378
2016–2021	545



本州以南では留鳥だが北海道では夏鳥。河川，湖沼，湿地，公園などの草むらや繁みの地上で営巣する。マガモやアイガモと交雑する例も見られる。分布は 1970 年代の 362 メッシュから 414 メッシュ，598 メッシュと拡大傾向にあり，特に西日本と北海道で顕著である。都市部での繁殖も広がっている。一方で，環境省の「ガンカモ類の生息調査」の越冬期の個体数は減少傾向にある。

ハシビロガモ　分類:カモ目カモ科　Northern Shoveler　*Anas clypeata*

全長:43.5–51.0cm　翼長:217–250mm　ふ蹠長:32–39mm　体重:453–827g

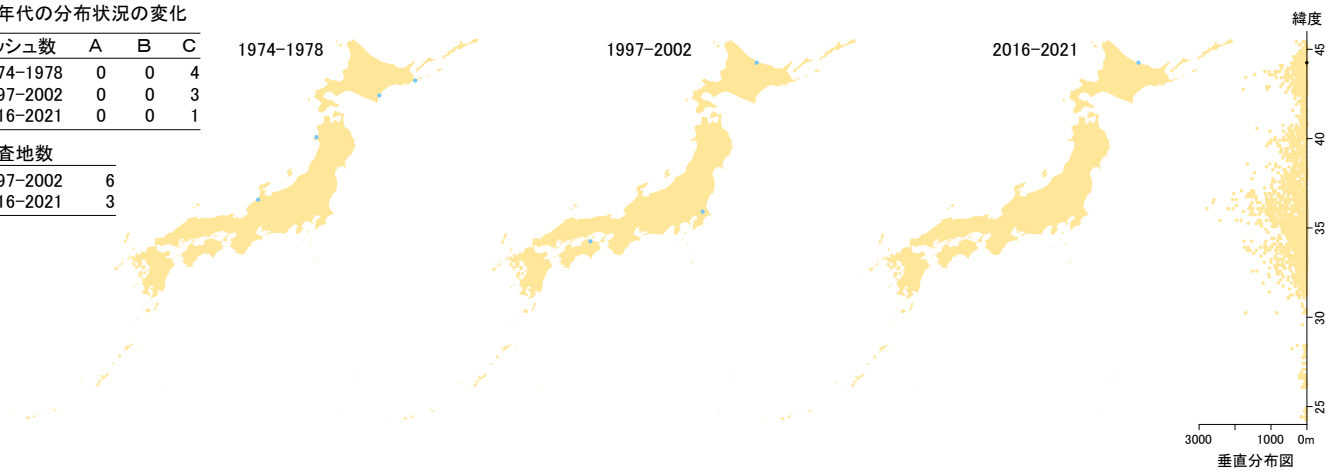
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	4
1997–2002	0	0	3
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	6
2016–2021	3



主に冬鳥で，北海道の一部で繁殖し，ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中高緯度地域で繁殖する。これまでの記録でも，繁殖の可能性のある記録は北海道を中心とした地域で数地点の記録があるのみだが，2010 年代の記録も 1 メッシュのみである。もともと多い種ではなく，繁殖状況の変化は明らかでない。

シマアジ　分類:カモ目カモ科　Garganey　*Anas querquedula*

全長:35.5–40.0cm　翼長:172–192mm　ふ蹠長:28–31mm　体重:270–462g

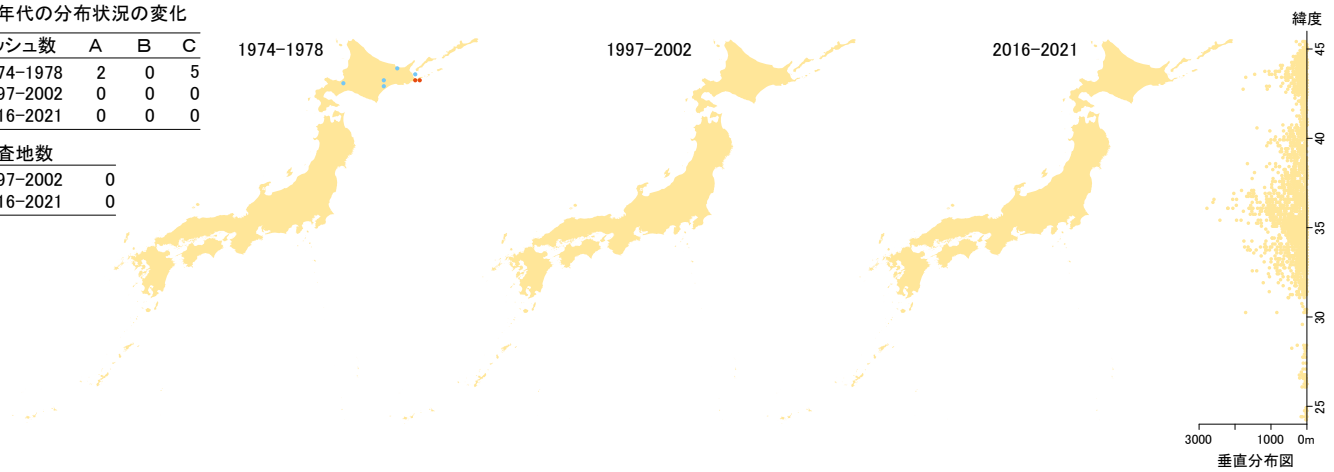
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	0	5
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



主に旅鳥として，春と秋に日本を通過する。北海道の一部で繁殖し，本州でも繁殖記録がある。ユーラシア大陸の中高緯度地域で繁殖し，水辺の草むらなどに営巣する。1970 年代には北海道で営巣が記録されているが 1990 年代と 2010 年代に記録はなかった。もともと多い種ではなく，繁殖状況の変化は明らかでない。

コガモ　分類:カモ目カモ科　Eurasian Teal　*Anas crecca*

全長:34.3–41.0cm　翼長:162–194mm　ふ蹠長:27–33mm　体重:241–453g

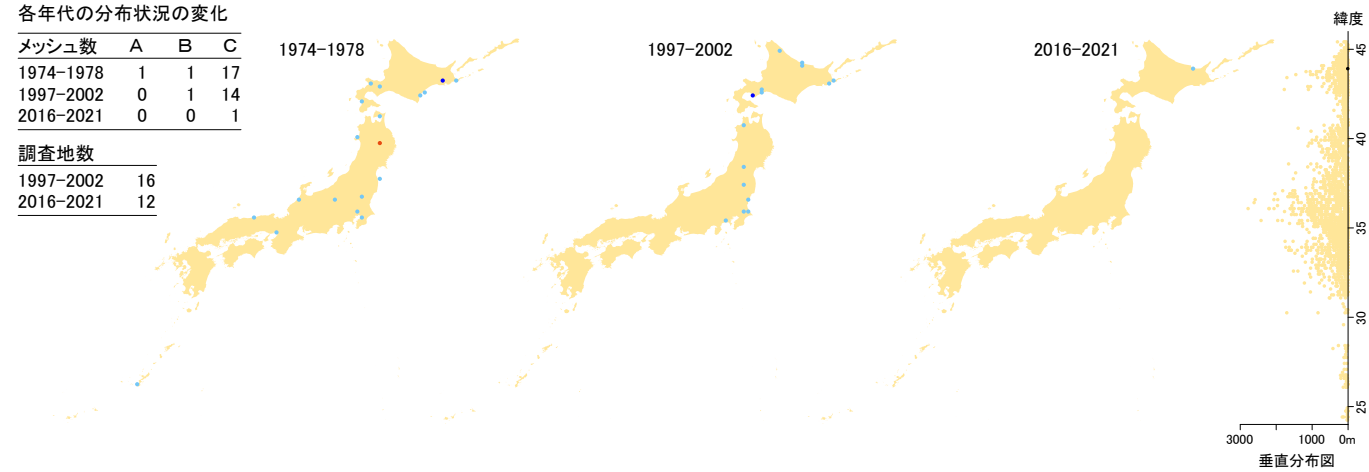
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	17
1997–2002	0	1	14
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	16
2016–2021	12



主に冬鳥で，北海道や本州の一部で繁殖する。ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中高緯度地域で繁殖し，主に小さな湖沼の水辺の草むらの中に営巣する。2010 年代の記録は北海道の 1 メッシュのみだが，もともと多い種ではなく，観察記録を越冬個体と判断するか，繁殖にかかわる個体と判断するかで，メッシュ数が大きく変化してしまうため，その増減の判断は難しく，繁殖状況の変化は明らかでない。

ホシハジロ　分類:カモ目カモ科　Common Pochard　*Aythya ferina*

全長:43.0–48.3cm　翼長:195–214mm　ふ蹠長:36–41mm　体重:678–939g

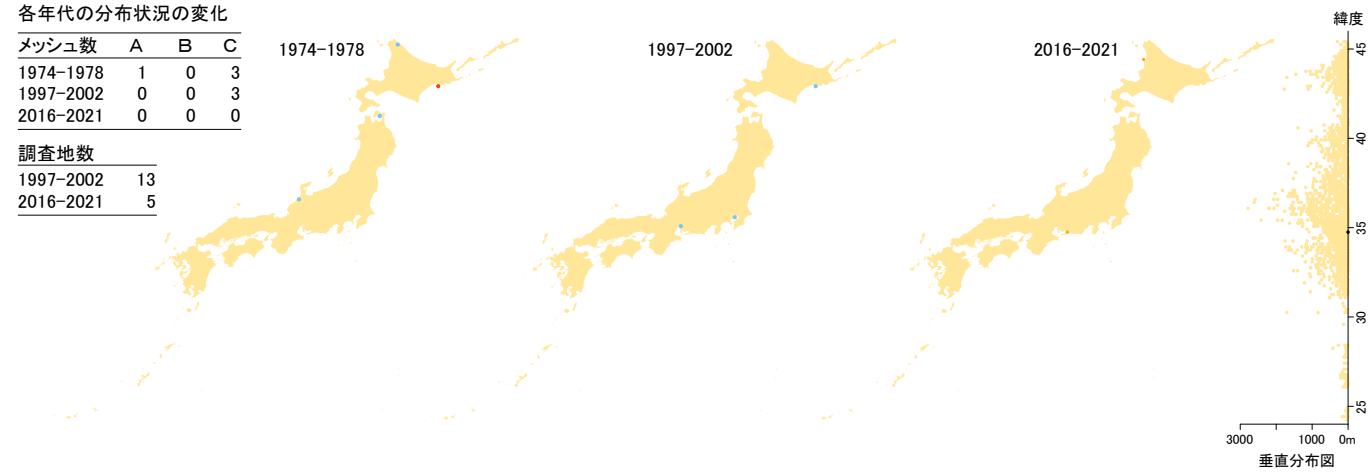
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	0	3
1997–2002	0	0	3
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	13
2016–2021	5



主に冬鳥で，北海道で繁殖例がある。ユーラシア大陸の中緯度地域で繁殖し，水辺の草地の地上に営巣する。日本国内での越冬数は急激に減少していることが知られている（神山　2017）。1970 年代と 1990 年代は北海道を中心とした地域で記録があったが，2010 年代は記録がなかった。もともと多い種ではなく，繁殖状況の変化は明らかでない。

キンクロハジロ　分類:カモ目カモ科　Tufted Duck　*Aythya fuligula*

全長:37.5–43.7cm　翼長:180–205mm　ふ蹠長:33–37mm　体重:564–1019g

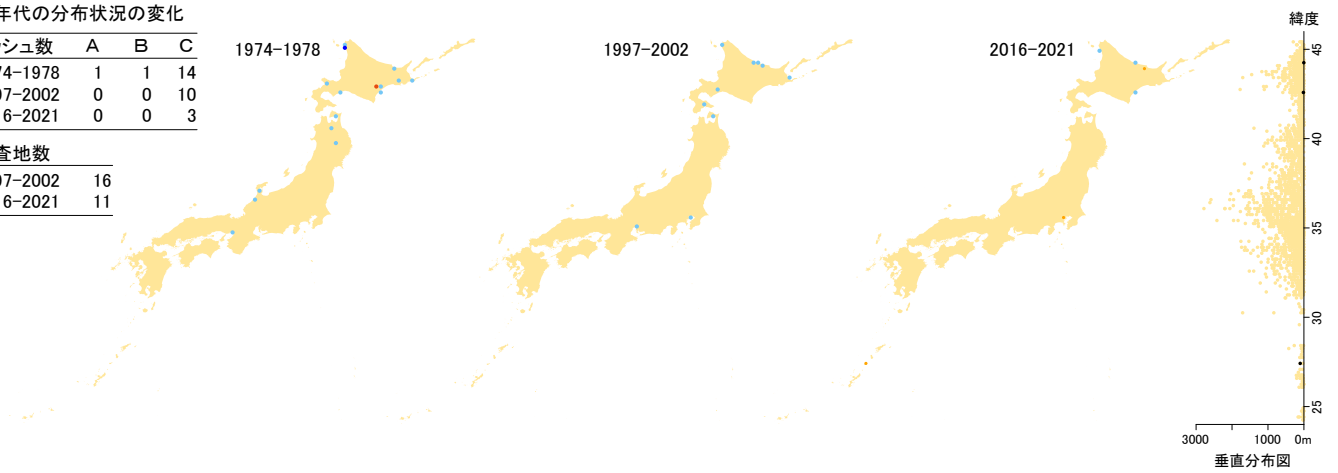
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	14
1997–2002	0	0	10
2016–2021	0	0	3

調査地数

1997–2002	16
2016–2021	11



主に冬鳥で，北海道で繁殖例がある。ユーラシア大陸の中高緯度地域で繁殖し，潜水して水生生物などを食べる。日本での越冬個体数は減少傾向にあることが知られている(神山 2019)。1970 年代と 1990 年代は北海道を中心とした地域で記録があったが，2010 年代は北海道で 3 メッシュの記録があった。もともと多い種ではなく，繁殖状況の変化は明らかでない。

シノリガモ　分類:カモ目カモ科　Harlequin Duck　*Histrionicus histrionicus*

嘴峰長:26–30mm　翼長:180–210mm　ふ蹠長:34–39mm　体重:491–698g

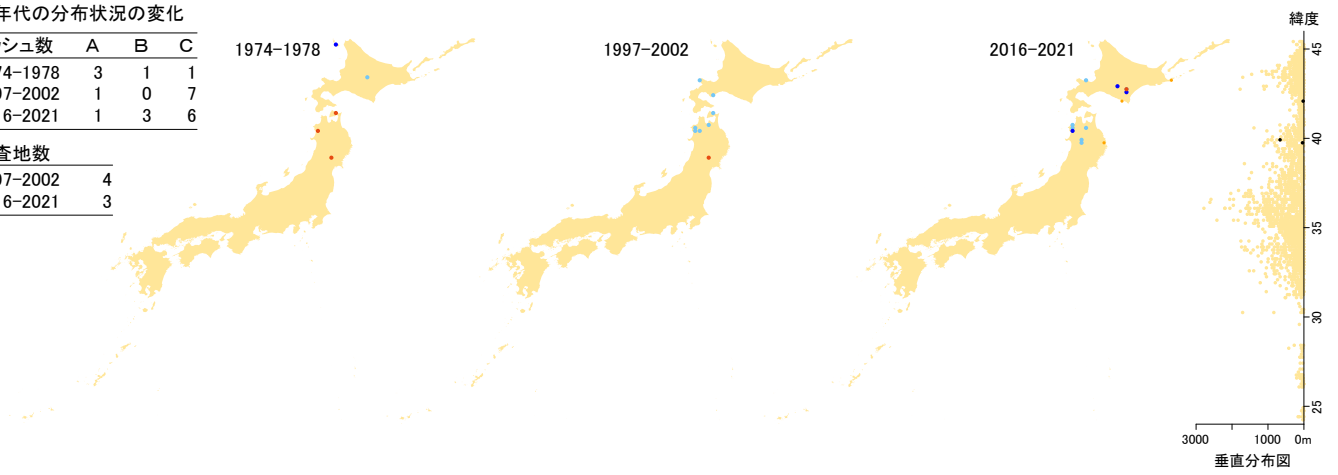
環境省レッドリスト:　絶滅のおそれのある地域個体群(東北地方以北のシノリガモ繁殖個体群)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	1	1
1997–2002	1	0	7
2016–2021	1	3	6

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	3



主に北日本を中心とした海岸で越冬し岩礁域で多く越冬するが，東北地方以北の内陸の森林内の渓流沿いの草むらや岩陰で繁殖している。ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中高緯度地域で繁殖する。2010 年代も 1970 年代や 1990 年代と同様に東北地方以北に分布し，10 メッシュで記録された。

ミコアイサ　分類:カモ目カモ科　Smew　*Mergellus albellus*

全長:38.5–44.2cm　翼長:172–195mm　ふ蹠長:28–33mm　体重:490–750 g

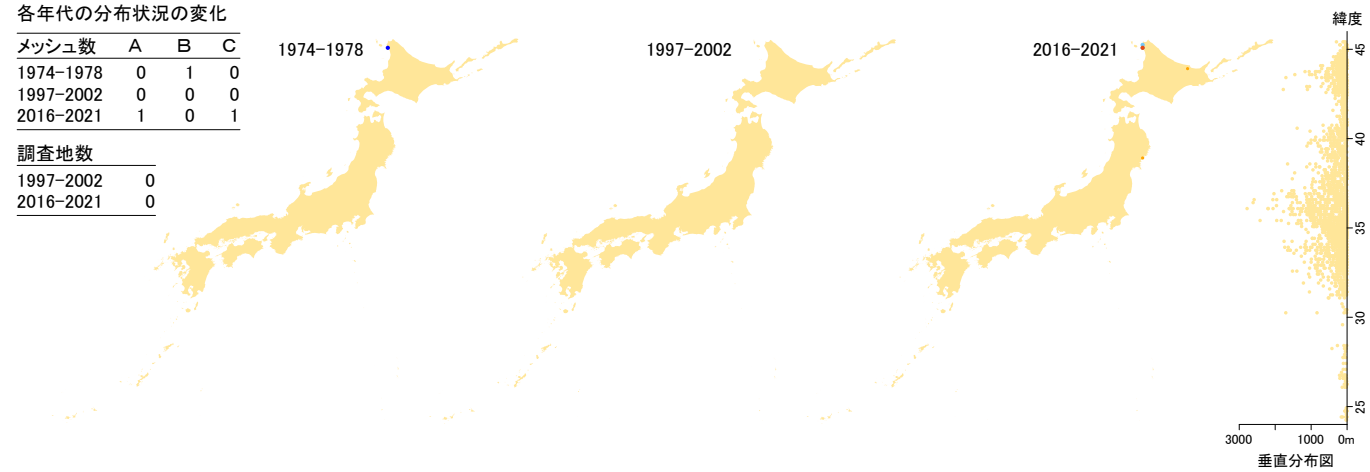
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	1	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



主に冬鳥で，北海道で繁殖例がある。ユーラシア大陸の中高緯度地域で繁殖し，潜水して魚類など水生生物を食べる。2010 年代は北海道の道北地域の 2 メッシュで記録されたが，もともと多い種ではなく，繁殖状況の変化は明らかでない。

カワアイサ　分類:カモ目カモ科　Common Merganser　*Mergus merganser*

全長:60.3–70.6cm　翼長:260–285mm　ふ蹠長:46–51mm　体重:1071–1824g

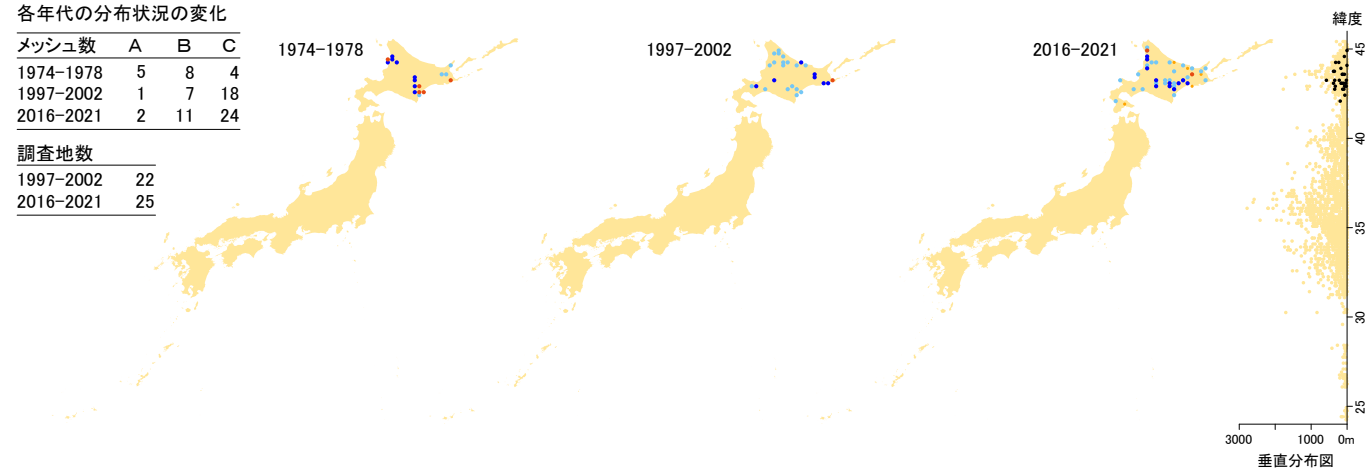
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	8	4
1997–2002	1	7	18
2016–2021	2	11	24

調査地数

1997–2002	22
2016–2021	25



主に冬鳥で，北海道で繁殖する。ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中緯度地域で繁殖し，森林内の河川や湖沼近くの樹洞や土中の穴などで営巣する。冬期には諏訪湖などで越冬個体数が増加し，ワカサギなどの漁業被害問題も生じている。記録メッシュ数は 1970 年代から増加しており，近年は本州でも越夏する個体が見られている。

カイツブリ　分類:カイツブリ目カイツブリ科　Little Grebe　*Tachybaptus ruficollis*

全長:26–33cm　翼長:91–105mm　ふ蹠長:35.6±1.7mm　体重:160–214g

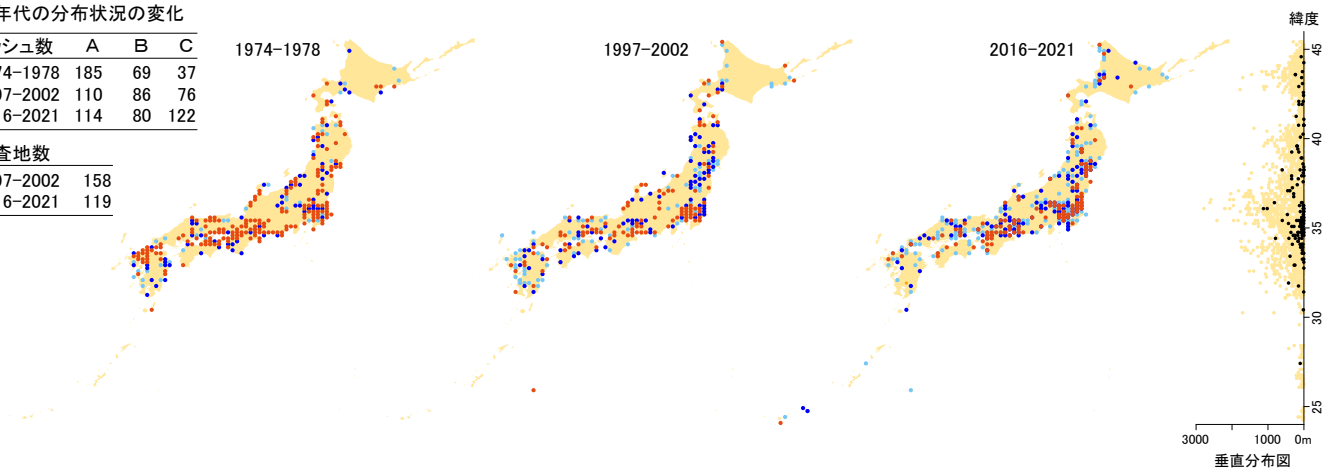
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	185	69	37
1997–2002	110	86	76
2016–2021	114	80	122

調査地数

1997–2002	158
2016–2021	119



本州中部以南で留鳥，以北では夏鳥。記録メッシュ数は 1970 年代から 1990 年代に減少した。2010 年代はやや増加したが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，記録できた地点数は，158 地点から 119 地点へと減少しており，カイツブリの減少は続いている可能性が高い。減少の原因としては，ブラックバスなどの外来魚の影響で小型の魚が減少していることなどが推測されている(佐原　2005)。

アカエリカイツブリ　分類:カイツブリ目カイツブリ科　Red-necked Grebe　*Podiceps grisegena*

全長:44.5–49.0cm　翼長:180–193mm　ふ蹠長:52–65mm　体重:578–872g

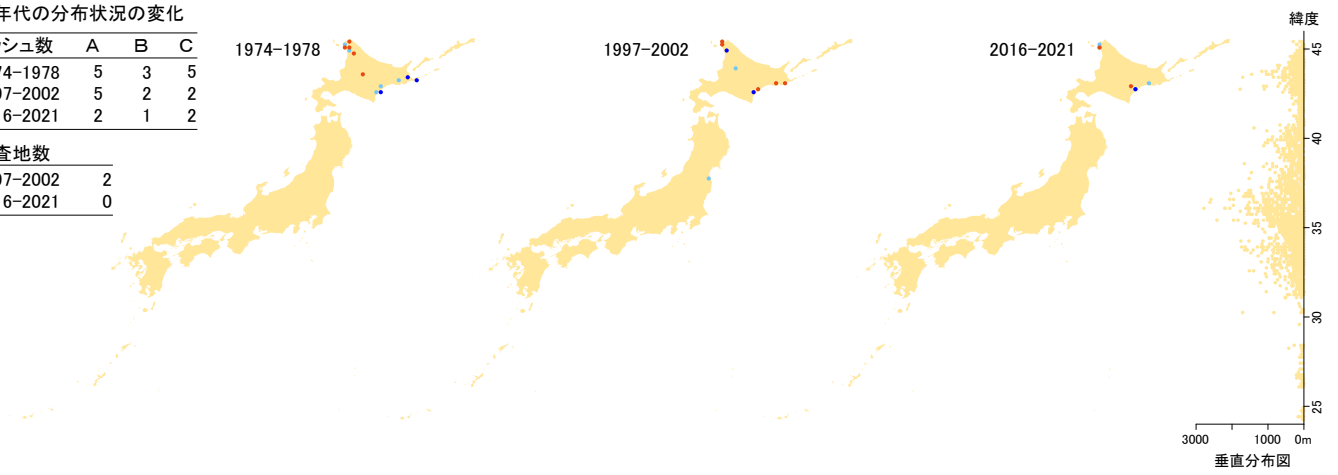
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	3	5
1997–2002	5	2	2
2016–2021	2	1	2

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	0



主に冬鳥で，北海道で繁殖する。ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中緯度地域で繁殖し，森林内の河川や湖沼近くの樹洞や土中の穴などで営巣する。北海道では湖沼で繁殖し，記録メッシュ数は減少しているが，もともと分布の限られている種のため，繁殖状況の変化は明らかでない。

カンムリカイツブリ　分類:カイツブリ目カイツブリ科　Great Crested Grebe　*Podiceps cristatus*

全長:46–51cm　翼長:♂175–209mm ♀168–199mm　ふ蹠長:♂59–65mm ♀57–65mm　体重:♂596–1490g ♀568–1380g

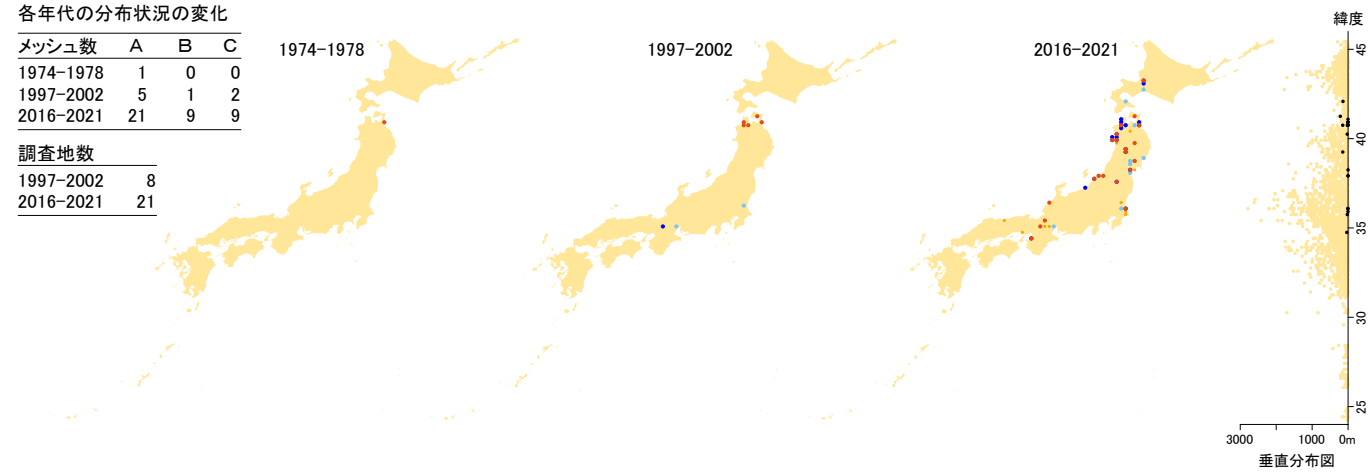
環境省レッドリスト:　絶滅のおそれのある地域個体群（青森県のカンムリカイツブリ繁殖個体群）

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	0	0
1997–2002	5	1	2
2016–2021	21	9	9

調査地数

1997–2002	8
2016–2021	21



主に冬鳥で，局所的に繁殖する。もともとは青森でのみ繁殖しており，絶滅のおそれのある地域個体群に指定されていたが，1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数が増加し，琵琶湖でも繁殖が確認された（中濱 2013）。2010 年代はさらに分布を拡大して近畿から東北にかけて局地的に繁殖が認められるようになった。日本の越冬個体数も増加傾向にある（中濱 2013）。

アカオネッタイチョウ　分類:ネッタイチョウ目ネッタイチョウ科　Red-tailed Tropicbird　*Phaethon rubricauda*

嘴峰長:55–65mm　翼長:317–326mm　ふ蹠長:27–30.5mm　尾長:357–412mm

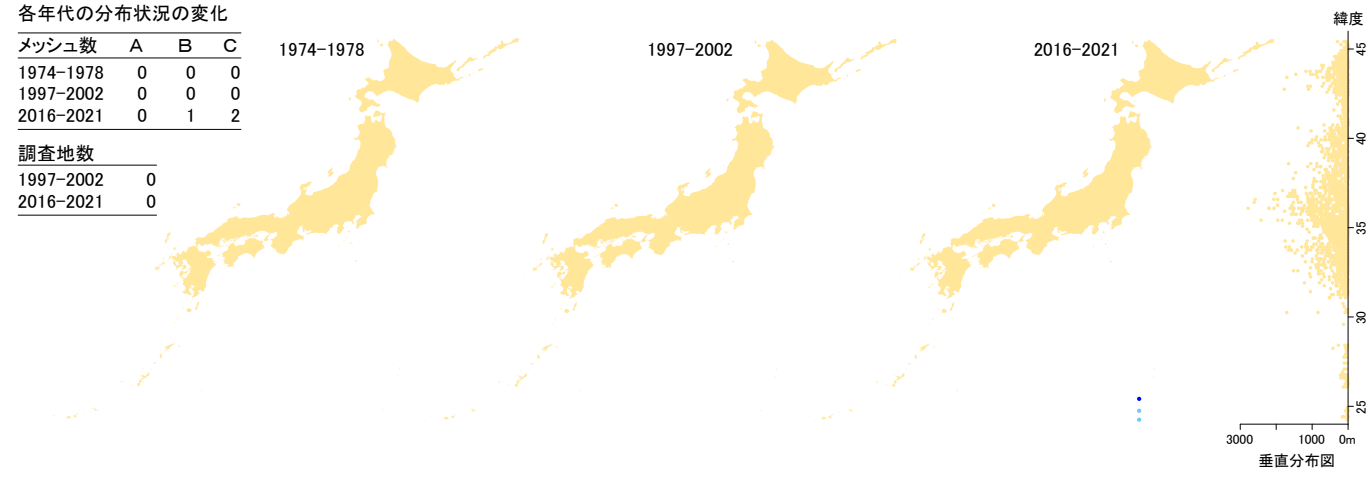
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	1	2

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



夏鳥として渡来し，南鳥島，硫黄列島で繁殖する。2010 年代では硫黄列島で記録された。1970 年代，1990 年代では記録はないが，これらの期間の調査で硫黄列島からの情報がなかったためで，2010 年代になって分布するようになったわけではないと考えられる。

シラオネッタイチョウ　分類：ネッタイチョウ目 ネッタイチョウ科　White-tailed Tropicbird　*Phaethon lepturus*

嘴峰長：43–50mm　翼長：239–272mm　ふ蹠長：19–23mm　尾長：297–485mm

環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	2

調査地数	
1997–2002	0
2016–2021	0

夏鳥として南鳥島，硫黄列島へ渡来する。繁殖しているかどうかは明らかになっていない。2010 年代では硫黄列島で記録された。1970 年代，1990 年代では記録はないが，これらの期間の調査で硫黄列島からの情報がなかったためで，2010 年代になって分布するようになったことを示すわけではないと考えられる。ただし，近年，硫黄列島では確認事例が増えている(真木ほか 2014)。

カラスバト　分類：ハト目ハト科　Japanese Wood Pigeon　*Columba janthina*

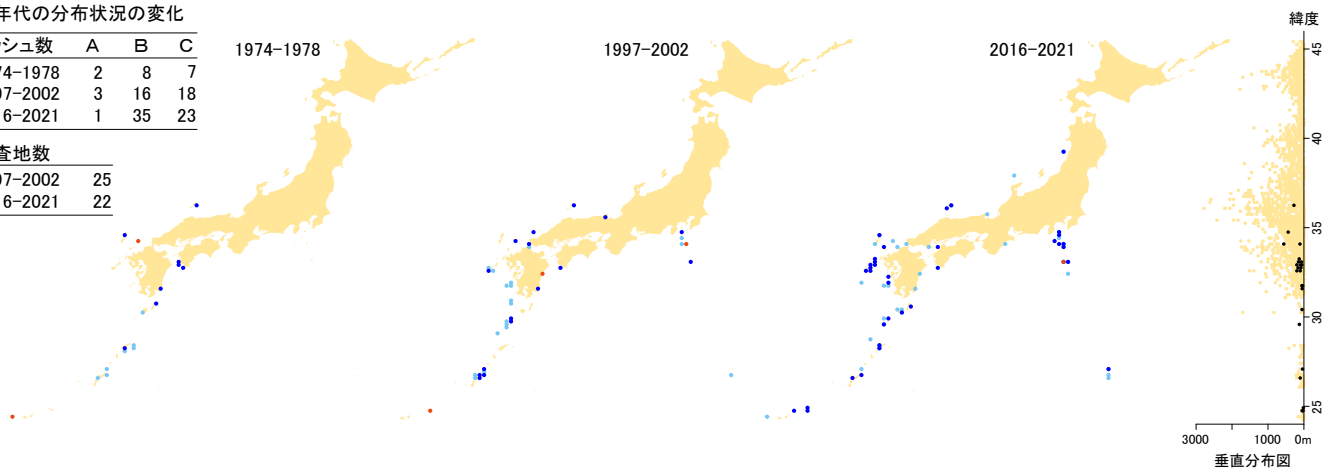
全長：37.0–43.5cm　翼長：213–246mm　ふ蹠長：30–37mm　体重：314.3–475.1 g

環境省レッドリスト：絶滅危惧 IA 類(亜種 アカガシラカラスバト)，絶滅危惧 IB 類(亜種 ヨナグニカラスバト)，準絶滅危惧(亜種 カラスバト)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	8	7
1997–2002	3	16	18
2016–2021	1	35	23

調査地数	
1997–2002	25
2016–2021	22



本州中部以南の島嶼および朝鮮半島南部の海岸，済州島，鬱陵島など，島でのみ留鳥として繁殖する。記録メッシュ数は年々増加しているが，島嶼部の調査が進んだための可能性があり，2010 年代については，伊豆諸島（東京）で重点的な調査が行なわれた影響も大きいと考えられる。ただし森林の生長や温暖化によって分布域が拡大する可能性も考えられ，記録メッシュ数の増加の要因は明らかでない。

キジバト　分類:ハト目ハト科　Oriental Turtle Dove　*Streptopelia orientalis*

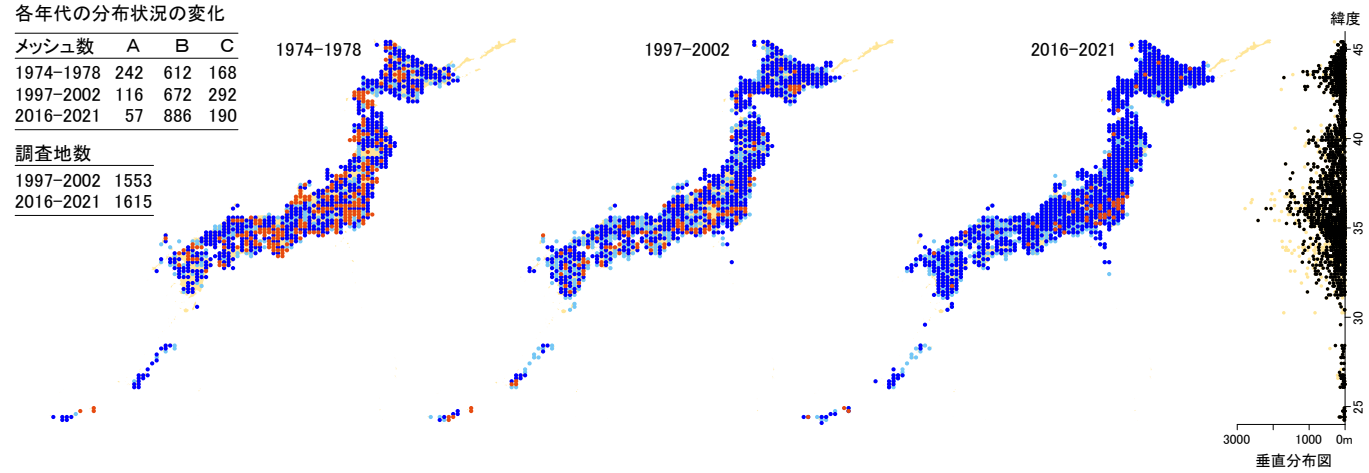
全長:33–35cm　翼長:♂192–201mm ♀188–196mm　ふ蹠長:♂25.5–29.1mm ♀24.7–29.3mm　体重:165–274g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	242	612	168
1997–2002	116	672	292
2016–2021	57	886	190

調査地数	
1997–2002	1553
2016–2021	1615



全国で留鳥として繁殖する。北海道では夏鳥。高山，亜高山帯には生息しないが，環境，標高を問わず生息し，日本でもっとも分布の広い鳥の 1 つである。総記録メッシュ数には大きな変化はないが，繁殖を確認した A ランクのメッシュ数が 1970 年代から減少しつづけている。ただし，繁殖の確認にあたる A ランクは，巣内ビナの声が目立つスズメなどとは異なり，キジバトの現地調査での確認は難しく，アンケート調査の努力量に依存するため，そうした努力量の違いの可能性がある。

キンバト　分類:ハト目ハト科　Common Emerald Dove　*Chalcophaps indica*

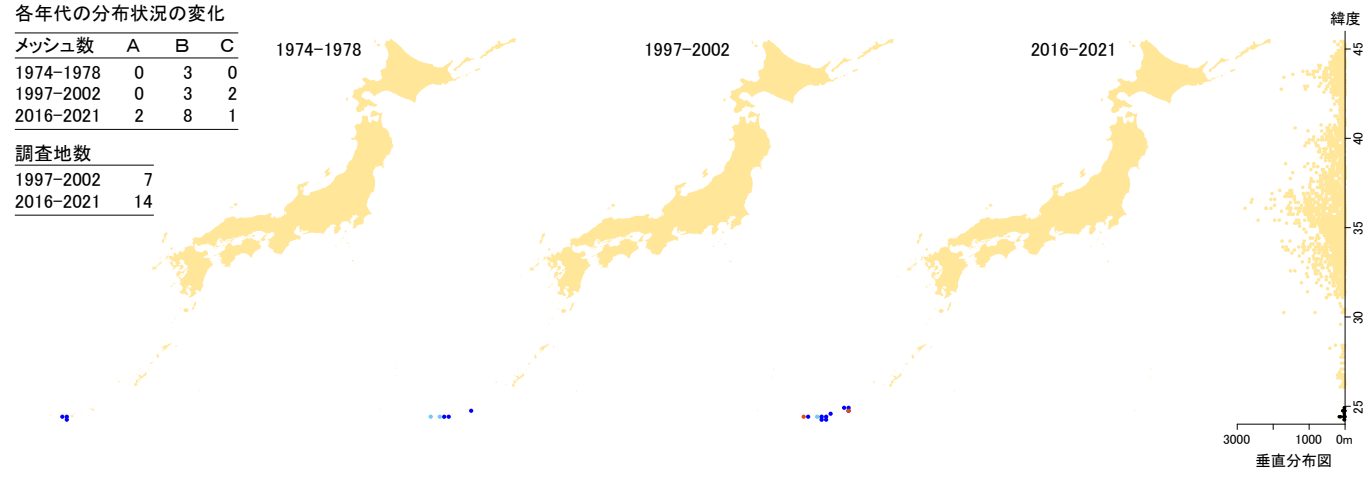
嘴峰長:17–20mm　翼長:138–152mm　ふ蹠長:25–29mm　尾長:84–91mm

環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	3	0
1997–2002	0	3	2
2016–2021	2	8	1

調査地数	
1997–2002	7
2016–2021	14



先島諸島で留鳥として繁殖する。記録メッシュ数は 1970 年代から増加している。島嶼部の調査が進んだためとも考えられるが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，記録できた地点数は，7 地点から 14 地点へと増加しており，実際に増加傾向にあることも推察される。

アオバト　分類:ハト目ハト科　White-bellied Green Pigeon　*Treron sieboldii*

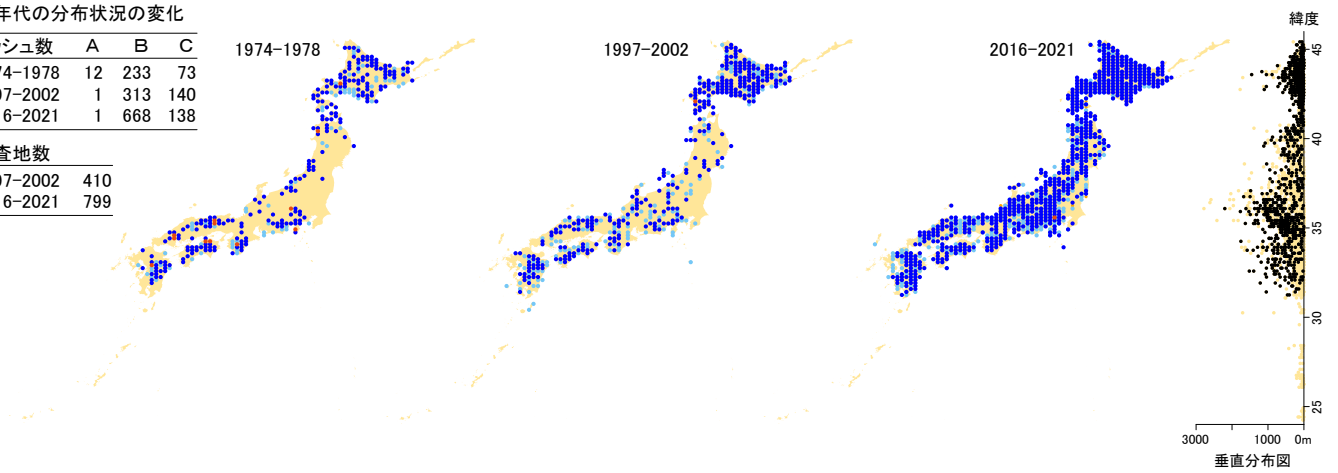
全長:31.5-34.8cm　翼長:♂183-196mm ♀177-187mm　ふ蹠長:24-28mm　体重:217-300 g

環境省レッドリスト: —

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	12	233	73
1997-2002	1	313	140
2016-2021	1	668	138

調査地数	
1997-2002	410
2016-2021	799



北海道から九州地方で繁殖する。南日本では留鳥だが，北日本では主に夏鳥。丘陵から山地の広葉樹林で樹上に営巣する。春から秋に群れで海水などの塩分を補給しに来る習性があり，鉱泉にも集まる。分布は 1970 年代から全国的に拡大しており，もっとも分布の拡大している種の 1 つである。森林の成熟が要因の 1 つとして考えられる。

ズアカアオバト　分類:ハト目ハト科　Whistling Green Pigeon　*Treron formosae*

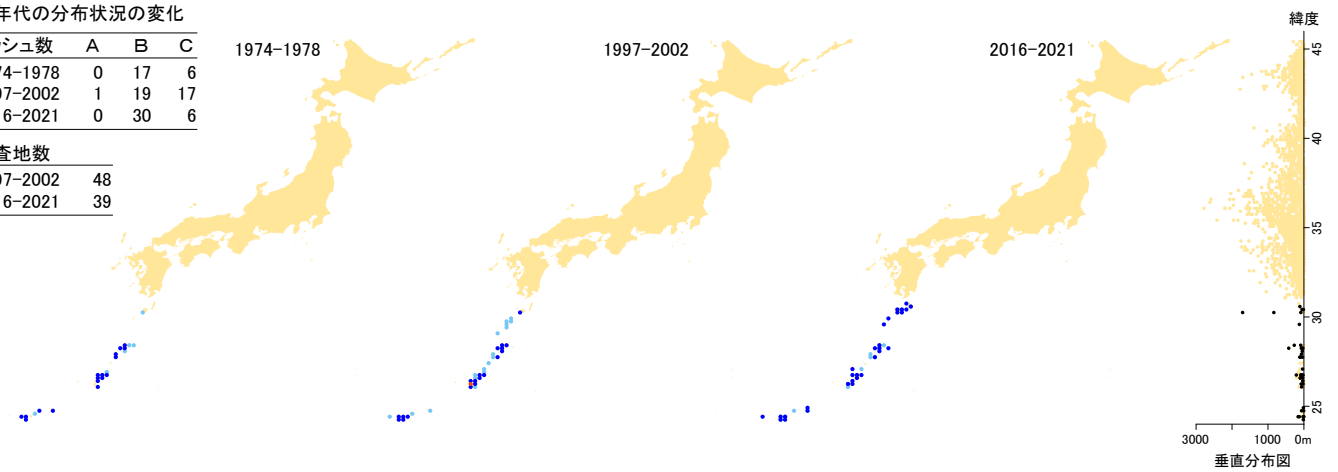
嘴峰長:18.5-21.5mm　翼長:193-207mm　ふ蹠長:25-29mm　体重:251-273g

環境省レッドリスト: —

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	0	17	6
1997-2002	1	19	17
2016-2021	0	30	6

調査地数	
1997-2002	48
2016-2021	39



屋久島，種子島以南の南西諸島で留鳥として繁殖する。常緑広葉樹林に生息し，樹上に営巣する。記録メッシュ数は 1970 年代から 1990 年代にかけて増加し，その後は変わっていない。1970 年代からの増加は，実際の分布の拡大ではなく，島嶼部の調査が進んだための可能性がある。

コアホウドリ　分類:ミズナギドリ目アホウドリ科　Laysan albatross　*Diomedea immutabilis*

嘴峰長:98.5–112mm　翼長:463–500mm　ふ蹠長:82–93mm　尾長:130–151mm

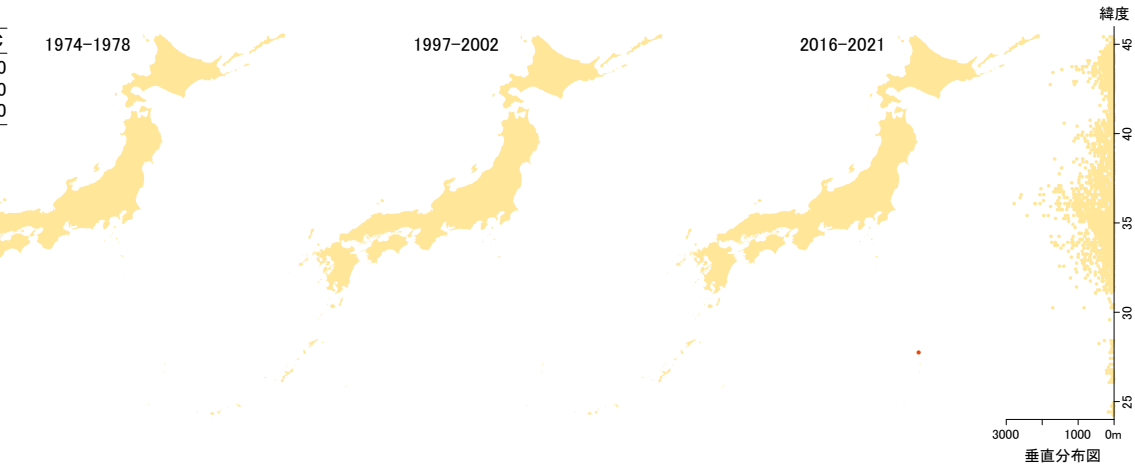
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



小笠原群島聟島列島で繁殖する。海上を飛びながら，魚，イカ，甲殻類や残滓などを採食する。情報の収集が困難な聟島列島が繁殖地であるため，過去の分布図では情報がないが，2010 年代の調査では海鳥クルーズでの観察記録が聟島列島鳥島より寄せられた。聟島列島鳥島では，1970 年代より繁殖が確認されており，2010 年代になって新たに繁殖するようになったわけではない。

クロアシアホウドリ　分類:ミズナギドリ目アホウドリ科　Black-footed Albatross　*Phoebastria nigripes*

全長:74.0–81.3cm　翼長:457–508mm　ふ蹠長:90–95mm　体重:2208–3324g

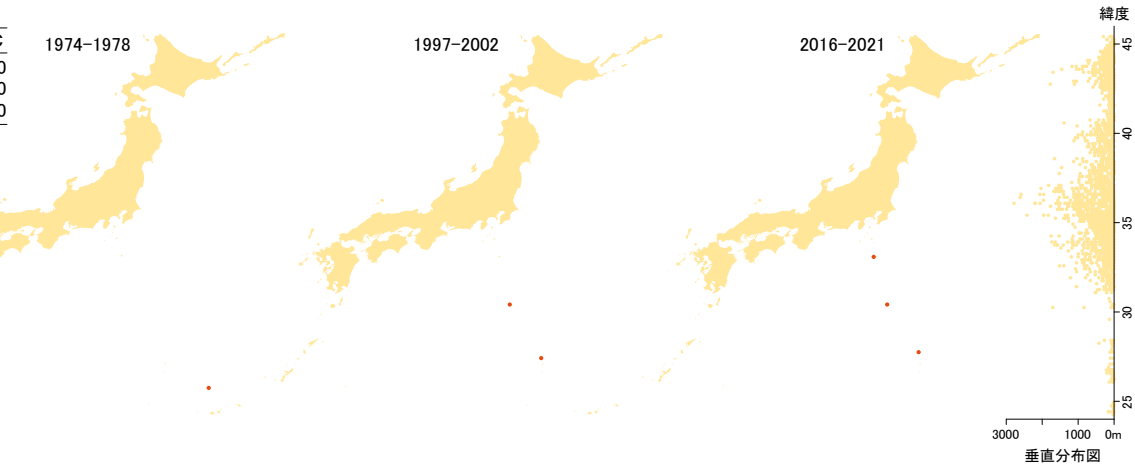
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	3	0	0
2016–2021	3	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



伊豆諸島鳥島，小笠原群島聟島，尖閣列島北小島などで繁殖する。海上を飛びながら，魚，イカ，甲殻類や残滓などを採食する。2010 年代の調査では伊豆諸島八丈小島で新たに繁殖が確認された。

アホウドリ　分類:ミズナギドリ目アホウドリ科　Short-tailed Albatross　*Phoebastria albatrus*

全長:84.0–91.0cm　翼長:530–570mm　ふ蹠長:82–95mm　体重:4000–5000g

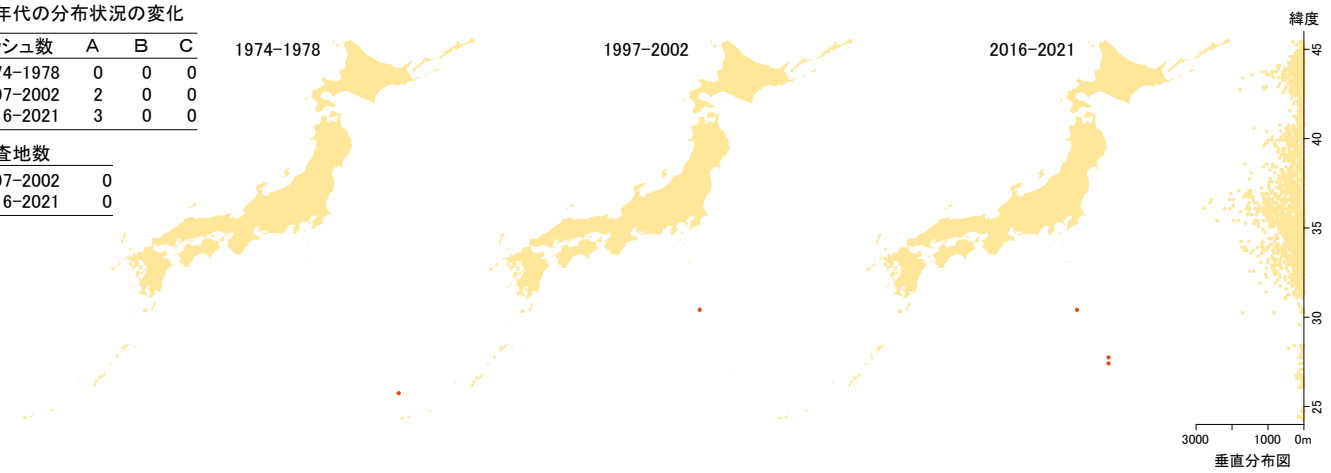
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	2	0	0
2016–2021	3	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



伊豆諸島鳥島および尖閣列島などで繁殖する。海上を飛びながら，魚，イカ，甲殻類や残滓などを採食する。1940 年代には一度絶滅したと考えられたが，その後の保護活動の成果で増加し，2018 年には総個体数は 5,000 羽を超えたと推定されている。また，聟島におけるアホウドリの新繁殖地形成事業の成功に伴い（Deguchi et al. 2014），2010 年代の分布図では新たな繁殖地として聟島列島が加わった。

シロハラミズナギドリ　分類:ミズナギドリ目ミズナギドリ科　Bonin Petrel　*Pterodroma hypoleuca*

嘴峰長:24–27mm　翼長:213–237mm　ふ蹠長:27–31mm　尾長:95–124mm

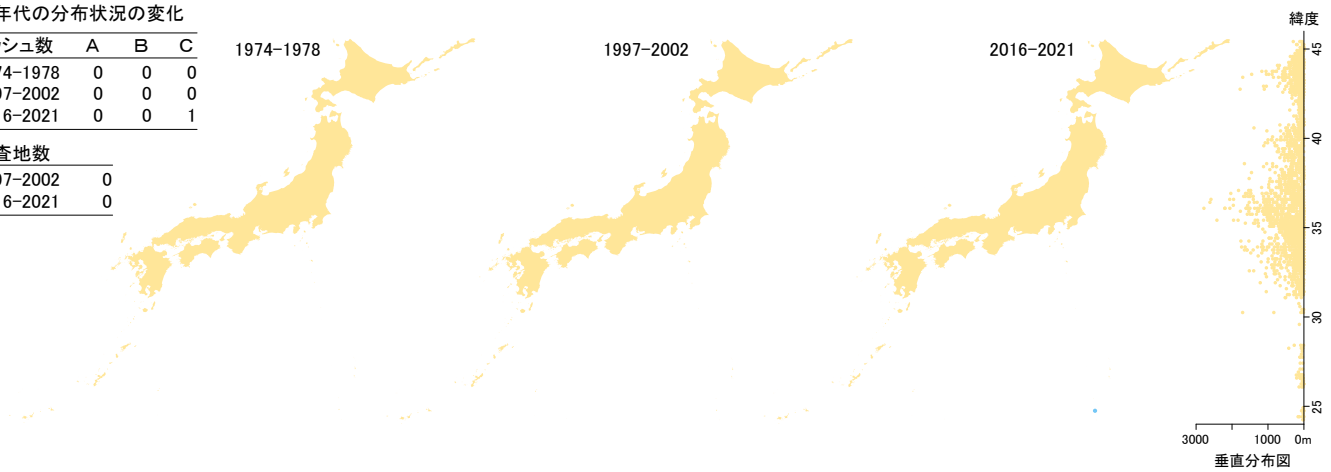
環境省レッドリスト:　情報不足

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



小笠原群島北之島，硫黄列島で繁殖する。魚類，軟体動物などを食べる。2010 年代では硫黄島で記録され，1970 年代，1990 年代では記録はないが，これらの期間の調査で硫黄列島からの情報がなかったためで，2010 年代になって分布するようになったことを示すわけではない。

オオミズナギドリ　分類:ミズナギドリ目ミズナギドリ科　Streaked Shearwater　*Calonectris leucomelas*

翼長:♂310.5±1.3mm ♀303.3±1.3mm　ふ蹠長:♂51.9±0.26mm ♀50.1±0.26mm　体重:♂549.4±27.4g ♀482.2±47.3g

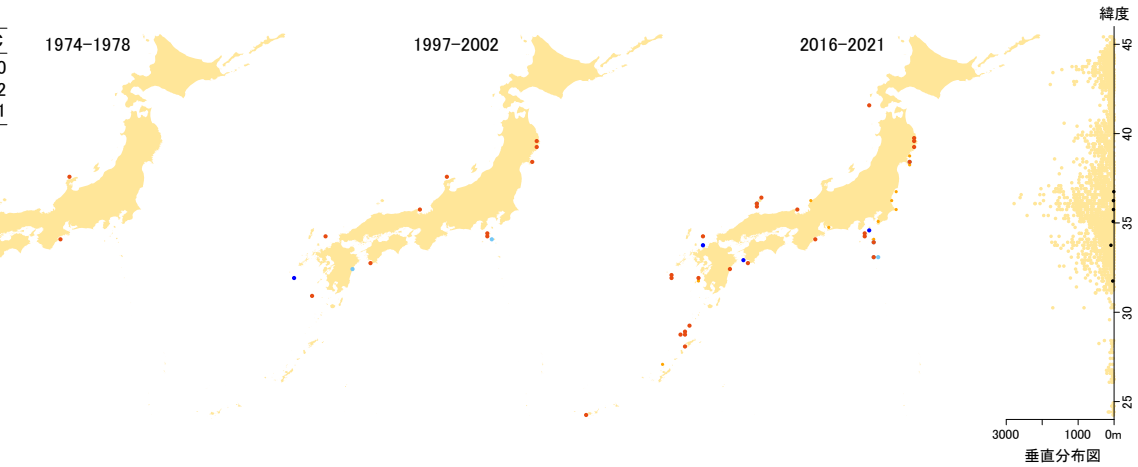
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	0	0
1997–2002	10	1	2
2016–2021	26	3	1

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	3



北海道渡島大島以南の全国の島嶼で繁殖する。GPSを使った移動追跡が各地で行われ，採食海域なども明らかになっている（Yamamoto et al. 2016）。記録メッシュ数は1970年代から増加しているが，こうした研究の進行や環境省によるモニタリングサイト1000小島嶼(海鳥)調査が始まったためと考えられる。また，世界最大の繁殖地である伊豆諸島御蔵島では，ノネコによる捕食により個体数が急減している(Azumi et al. 2021)。

オナガミズナギドリ　分類:ミズナギドリ目ミズナギドリ科　Wedge-tailed Shearwater　*Puffinus pacificus*

嘴峰長:37–41.5mm　翼長:276–302mm　ふ蹠長:46–50mm　体重:320g

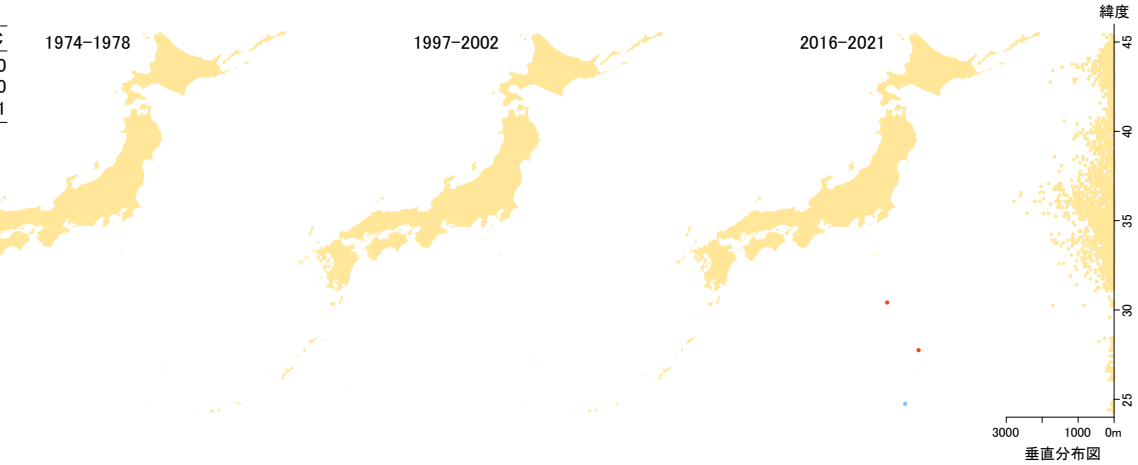
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	2	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



伊豆諸島鳥島，小笠原群島と硫黄列島で繁殖する。魚類，軟体動物などを食べる。2010年代では伊豆諸島鳥島，聟島列島，硫黄島で記録された。1970 年代，1990 年代では記録はないが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，2010 年代になって分布するようになったことを示すわけではない。

セグロミズナギドリ　分類:ミズナギドリ目ミズナギドリ科　Audubon's Shearwater　*Puffinus lherminieri*

全長:27–33cm　翼開長:64–74cm　体重:150–230g

環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0

小笠原群島東島，硫黄列島で繁殖する。魚類，軟体動物，動物プランクトンなどを食べる。2010 年代は硫黄島で記録され，1970 年代，1990 年代では記録はないが，これらの期間の調査で硫黄列島からの情報がなかったためで，2010 年代になって分布するようになったことを示すわけではない。

アナドリ　分類:ミズナギドリ目ミズナギドリ科　Bulwer's Petrel　*Bulweria bulwerii*

嘴峰長:23–24.5mm　翼長:190–216mm　ふ蹠長:25–29mm　尾長:104–119mm

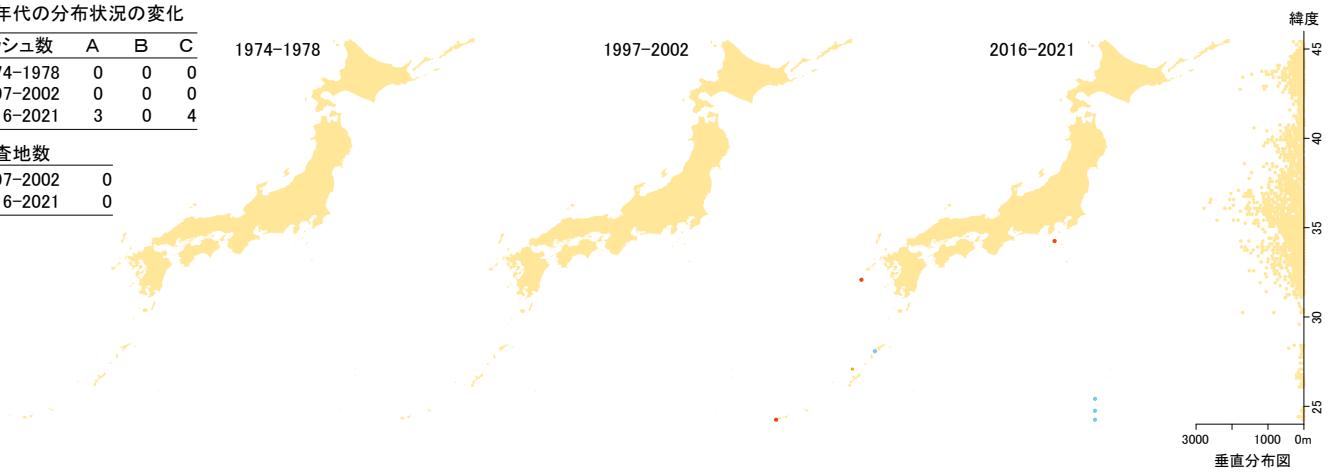
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	3	0	4

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



伊豆諸島，小笠原群島，硫黄列島，南西諸島などで繁殖する。2010 年代では伊豆諸島恩馳島，硫黄列島，男女群島，南西諸島で記録され，1970 年代，1990 年代では記録はないが，これらの期間の調査で硫黄列島からの情報がなく，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，2010 年代になって分布するようになったことを示すわけではない。

クロコシジロウミツバメ　分類:ミズナギドリ目ウミツバメ科　Band-rumped Storm Petrel　*Oceanodroma castro*

嘴峰長:13-16.5mm　翼長:143-163mm　ふ蹠長:19-23.5mm　尾長:64-78mm

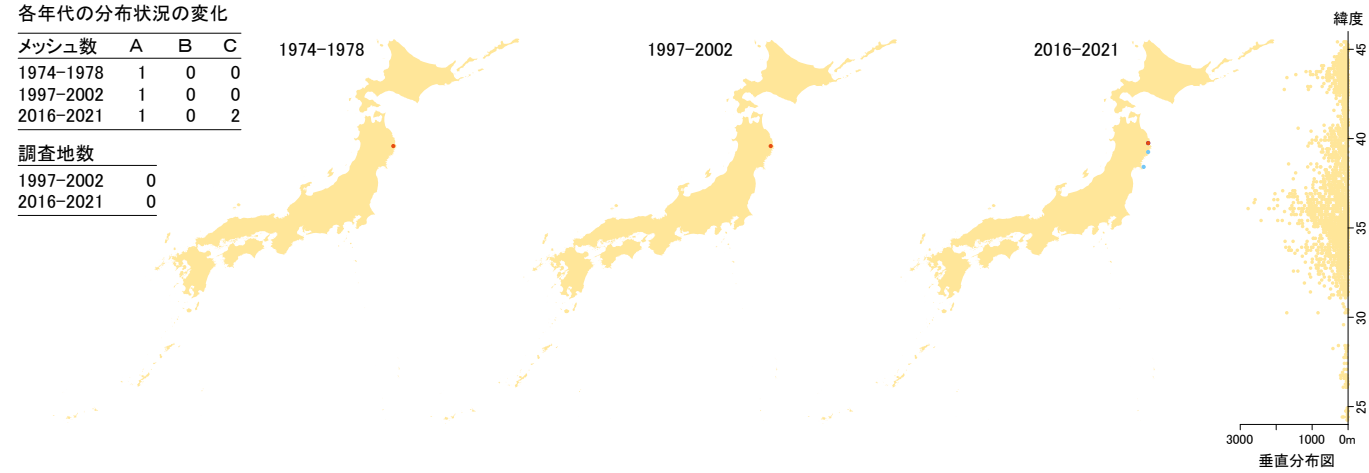
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	1	0	0
1997-2002	1	0	0
2016-2021	1	0	2

調査地数

1997-2002	0
2016-2021	0



岩手県日出島，三貫島などの三陸海岸の島で繁殖する。魚類，甲殻類，軟体動物などを食べる。1970 年代から分布は変化していないが，日出島では，1994 年の 2,206 巣から，2010 年の 63 巣へ急減していることが知られている。その原因としてはオオミズナギドリの営巣数の増加で林床植生が破壊され，ウミツバメが巣穴を掘ることのできる柔らかい腐葉土層が雨により流出したためと考えられている（山階鳥類研究所 2014）。

ヒメクロウミツバメ　分類:ミズナギドリ目ウミツバメ科　Swinhoe's Storm Petrel　*Oceanodroma monorhis*

全長:17.2-19.7cm　翼長:140-162mm　ふ蹠長:20-25mm　体重:29.3-42.8 g

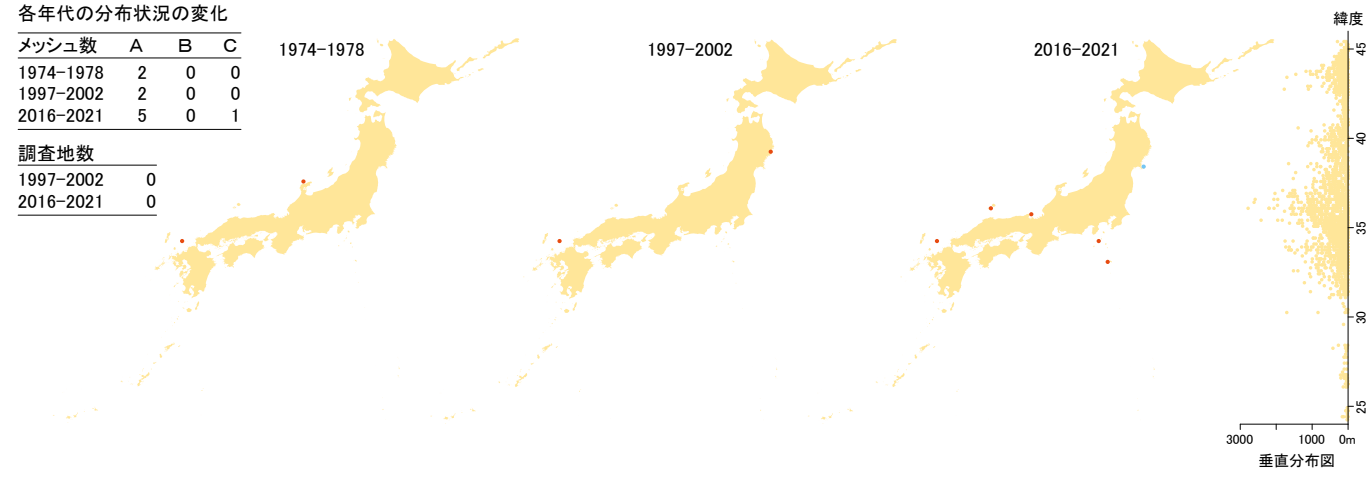
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	2	0	0
1997-2002	2	0	0
2016-2021	5	0	1

調査地数

1997-2002	0
2016-2021	0



主に日本海沿岸の島嶼や岩手県三貫島，伊豆諸島などで繁殖する。魚類，甲殻類などを食べる。1970 年代，1990 年代に比べて 2010 年代では記録メッシュ数が増加しているが，これはモニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査が始まったためで，2010 年代になって分布が拡大したことを示すわけではない。

コシジロウミツバメ　分類:ミズナギドリ目ウミツバメ科　Leach's Storm Petrel　*Oceanodroma leucorhoa*

翼長:♂157.0±3.4mm ♀160.0±2.5mm　ふ蹠長:♂24.7±0.6mm♀24.8±0.6mm　体重:抱卵期 47.2±3.8g

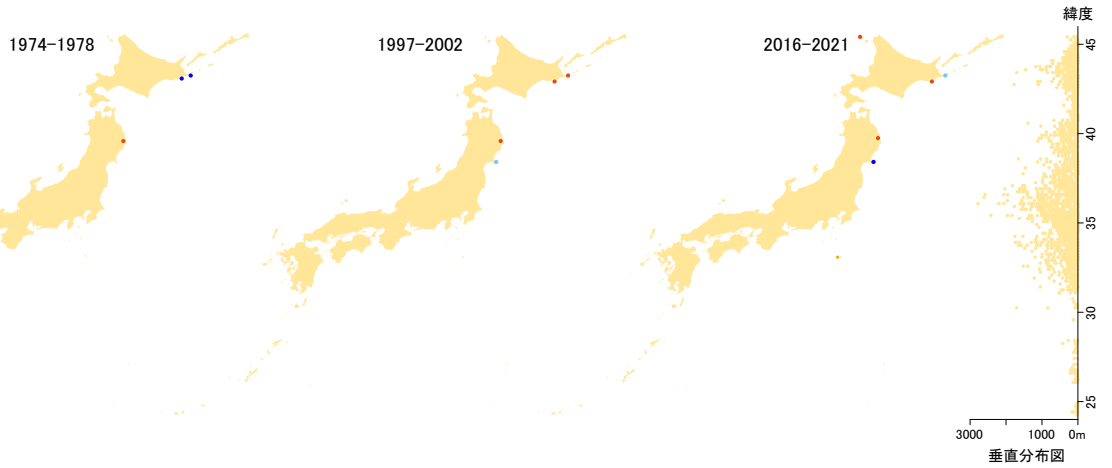
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	2	0
1997–2002	3	0	1
2016–2021	3	1	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



岩手県三陸海岸の島や北海道東部の大黒島，友知島などで，土中に30–40cm程度の穴を掘って繁殖する。魚類，甲殻類，軟体動物などを食べる。体サイズの小ささを考慮すると，ウミツバメ類は最も長寿なグループとして知られているが，コシジロウミツバメは最高で，36 歳の繁殖個体が確認されている(Brooke 2004)。分布には大きな変化は認められなかった。

オーストンウミツバメ　分類:ミズナギドリ目ウミツバメ科　Tristram's Storm Petrel　*Oceanodroma tristrami*

嘴峰長:17–20mm　翼長:168–189mm　ふ蹠長:25–30mm　体重:42–70g

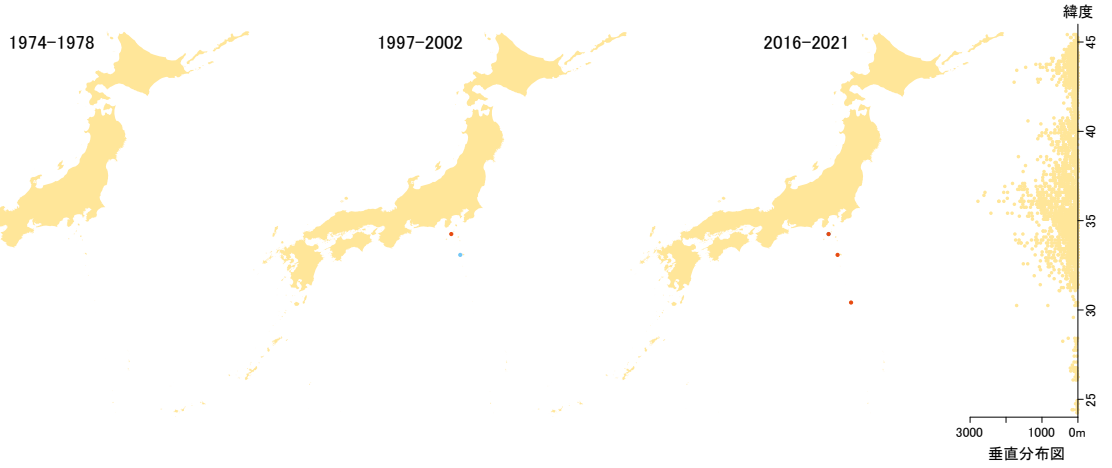
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	0	1
2016–2021	3	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



伊豆諸島，小笠原群島で繁殖する。魚類，甲殻類，軟体動物などを食べる。冬に渡来して繁殖を開始する点が，ほかのウミツバメ類とは異なっている。2010 年代では伊豆諸島鳥島で記録されたが，これはモニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，2010 年代になって分布が拡大したことを示すわけではない。

コウノトリ　分類:コウノトリ目コウノトリ科　Oriental Stork　*Ciconia boyciana*

全長:106.7–116.8cm　翼長:620–670mm　ふ蹠長:217–270mm　体重:3514–4693g

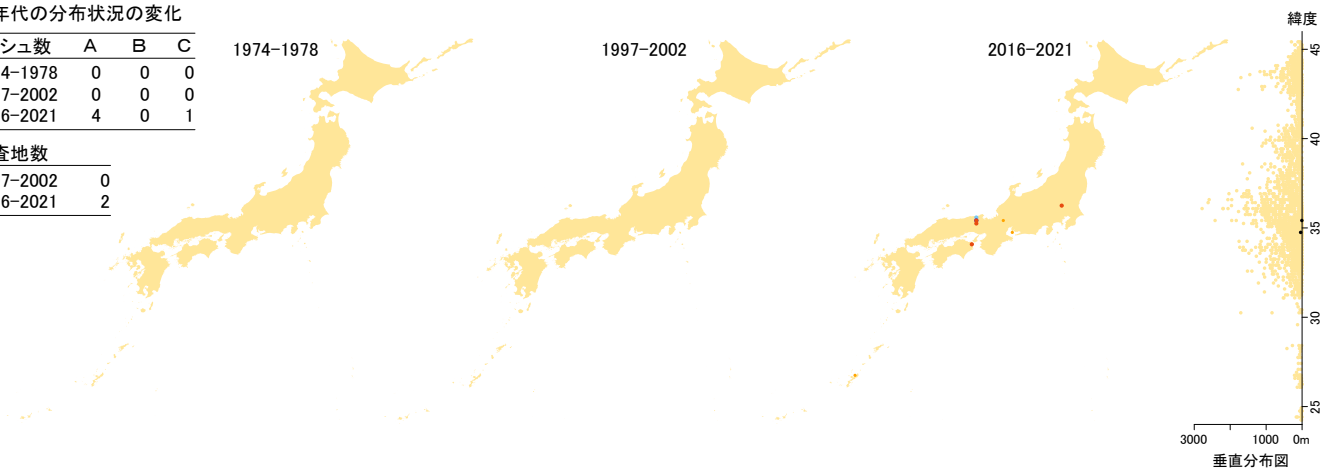
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	4	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	2



かつては全国に生息していたが，1971 年に日本の繁殖個体はいなくなり，絶滅した。2005 年より兵庫県豊岡市で飼育個体の野外放鳥がはじまり，それらの個体が定着し，野生繁殖をはじめており，2010 年代の分布図にはそれらが反映されている。

アカアシカツオドリ　分類:カツオドリ目カツオドリ科　Red-footed Booby　*Sula sula*

嘴峰長:78.5–89.5mm　翼長:361–387mm　ふ蹠長:32–39mm　尾長:210–238mm

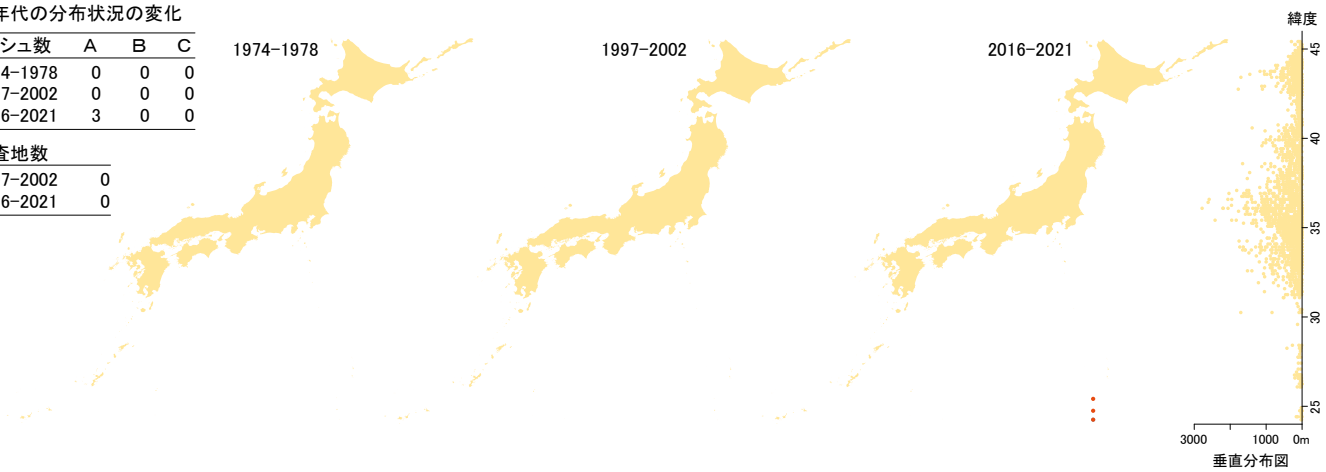
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	3	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



硫黄列島で繁殖し，八重山諸島の仲御神島でも繁殖記録がある。魚類，軟体動物などを食べる。2017 年に南硫黄島で初めて営巣が確認された(川上ほか 2018)。2010 年代の記録にはそれ以外にも，北硫黄島，硫黄島で記録されている。

カツオドリ　分類:カツオドリ目カツオドリ科　Brown Booby　*Sula leucogaster*

全長:73.1–83.0cm　翼長:♂379–428mm ♀385–440mm　ふ蹠長:♂40–44mm ♀44–47mm　体重:♂850–1190g ♀970–1480g

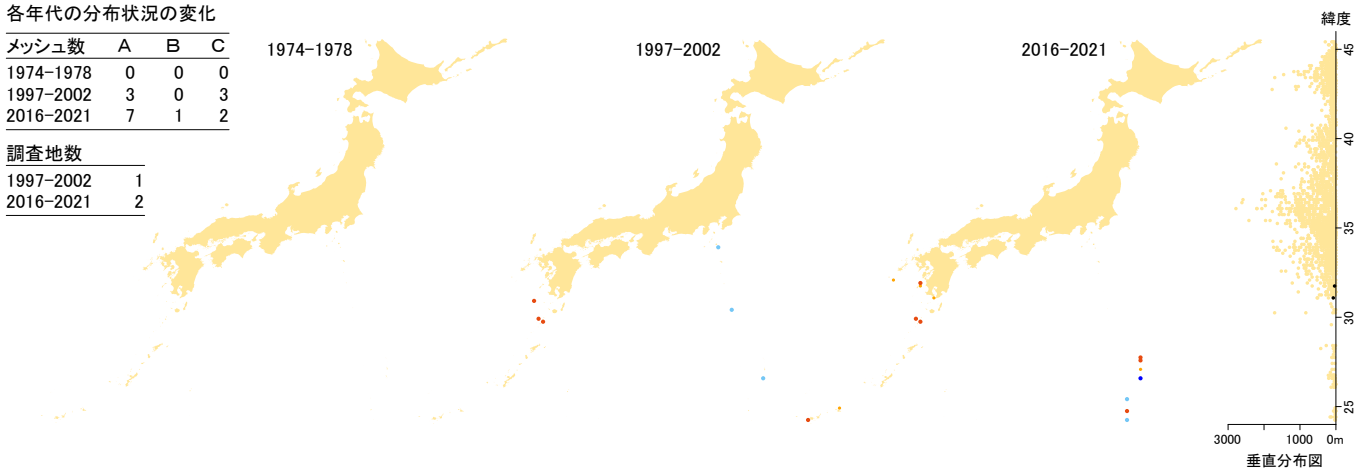
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	3	0	3
2016–2021	7	1	2

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	2



伊豆諸島，小笠原群島，硫黄列島，東シナ海の島嶼で繁殖する。魚類，軟体動物などを空中から水中に飛び込むようにして捕食する。2010 年代は記録メッシュ数が増加しているが，1970 年代と 1990 年代に情報のなかった硫黄列島からの情報が集まったことと，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，2010 年代になって分布が拡大したことを示すわけではない。

ヒメウ　分類:カツオドリ目ウ科　Pelagic Cormorant　*Phalacrocorax pelagicus*

全長:67.3–76.2cm　翼長:252–275mm　ふ蹠長:50–60mm　体重:1043–1643g

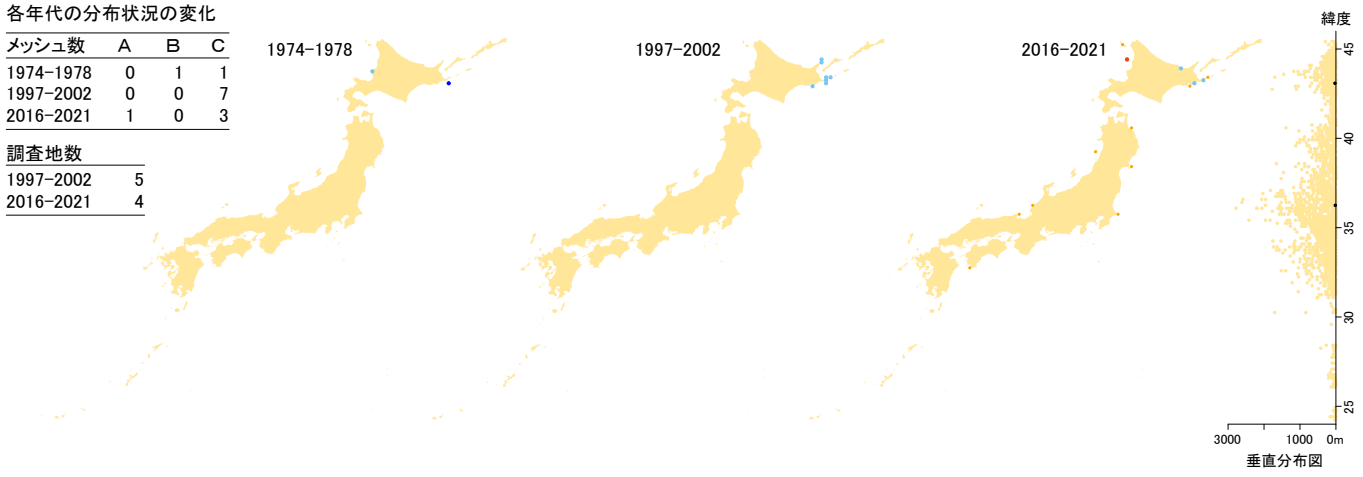
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	1	1
1997–2002	0	0	7
2016–2021	1	0	3

調査地数

1997–2002	5
2016–2021	4



全国の海岸で越冬し，北海道を中心とした北日本の海岸で繁殖する。北米沿岸，ベーリング海，オホーツク海，千島列島沿岸などで繁殖し，崖の岩棚で営巣する。潜水して魚や甲殻類を捕食する。道東に多く記録されるという分布傾向に変化はなく，確認された調査地点数も1990年代は5地点，2010年代は4地点と大きな変化はなかった。

チシマウガラス　分類:カツオドリ目ウ科　Red-faced Cormorant　*Phalacrocorax urile*

嘴峰長:52-54mm　翼長:270-285mm　ふ蹠長:54-55mm　尾長:160-173mm

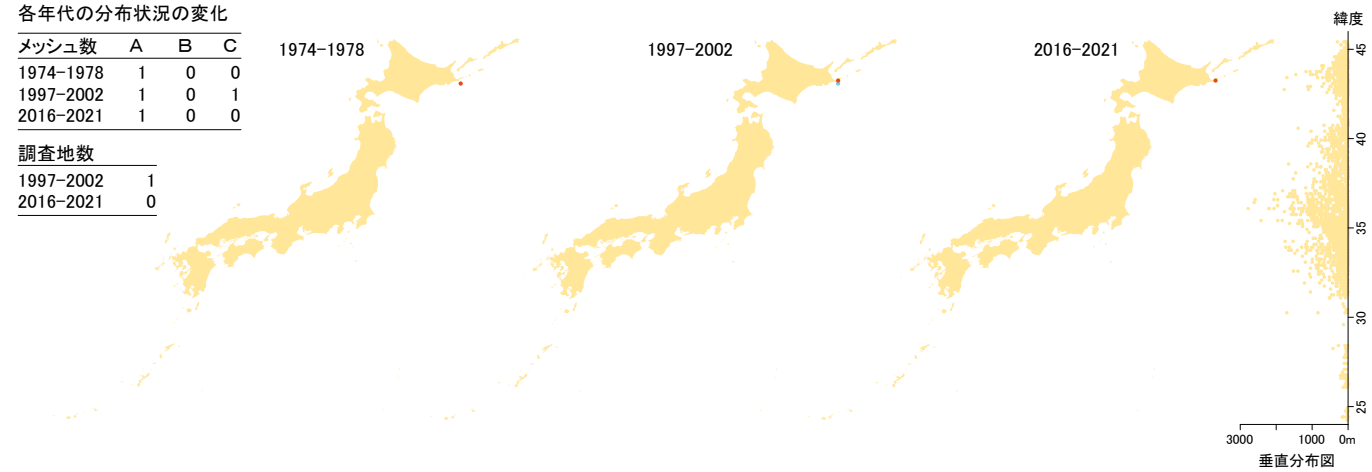
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	1	0	0
1997-2002	1	0	1
2016-2021	1	0	0

調査地数

1997-2002	1
2016-2021	0



主に冬鳥として本州北部以北の海岸に渡来する。アラスカ沿岸，アリューシャン列島沿岸，千島列島沿岸で繁殖する。崖の岩棚に集団で営巣する。以前は根室沖の離島で多数繁殖していたが，2010 年代の記録は1メッシュのみだった。

カワウ　分類:カツオドリ目ウ科　Great Cormorant　*Phalacrocorax carbo*

全長:80-90cm　翼長:300-360mm　ふ蹠長:57-60mm　体重:1400-2430g

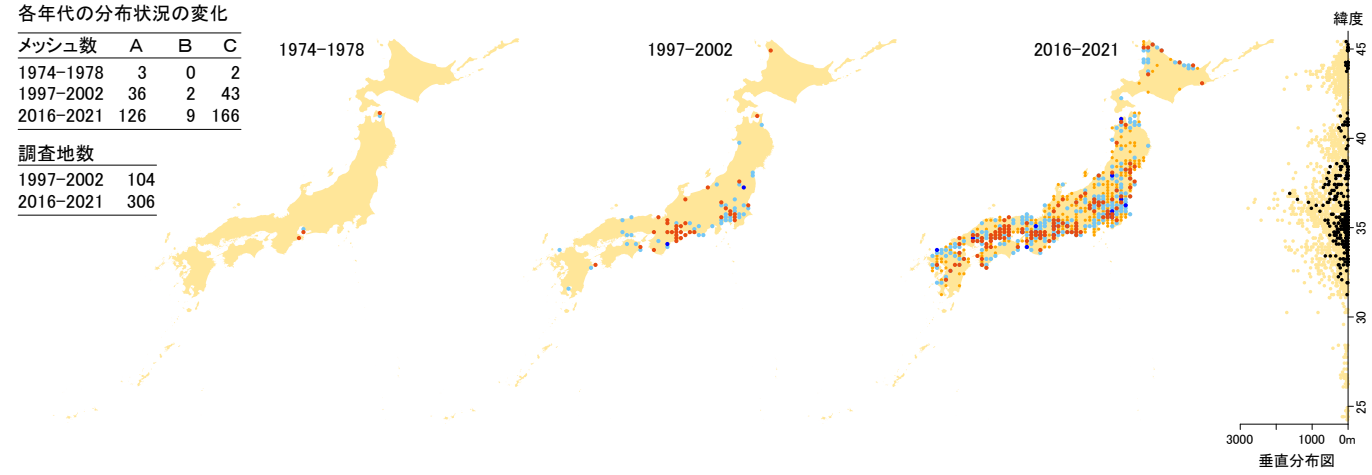
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	3	0	2
1997-2002	36	2	43
2016-2021	126	9	166

調査地数

1997-2002	104
2016-2021	306



全国の水辺の樹木で集団で繁殖する。北日本の個体は冬は南へ移動する。1970 年代時は数か所の集団繁殖地でしか確認されず，水質など採食環境の悪化などにより減少したと考えられていたが，その後回復し，最も分布の拡大した種の 1 つとなっている。分布の回復とともにアユなどの内水面漁業の被害問題，集団繁殖地やねぐらのフン害の問題が生じており，共存が課題となっている(環境省 2004)。

ウミウ　分類:カツオドリ目ウ科　Japanese Cormorant　*Phalacrocorax capillatus*

全長:80.0–86.5cm　翼長:315.9±8.9mm　ふ蹠長:66.9±4.4mm　体重:♂3100±180g ♀2500±180g

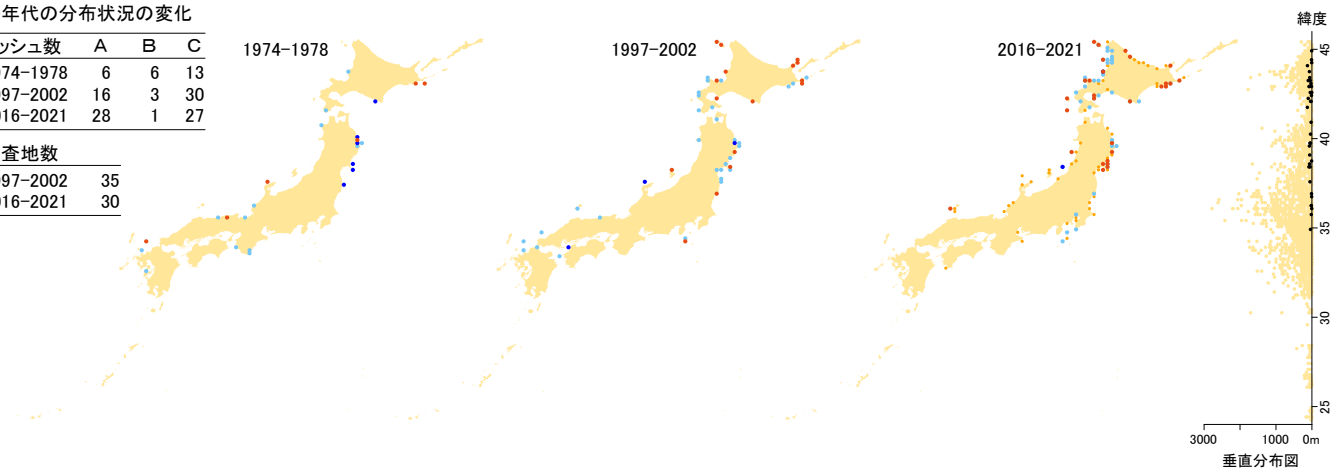
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	6	13
1997–2002	16	3	30
2016–2021	28	1	27

調査地数

1997–2002	35
2016–2021	30



主に本州中部以北の海岸の崖で繁殖し，西日本でも局所的に繁殖する。1970 年代以降，記録メッシュ数は増えている。2010 年代の増加は，モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査が始まった影響もあり，分布が拡大しているのかどうかは明らかでない。

サンカノゴイ　分類:ペリカン目サギ科　Eurasian Bittern　*Botaurus stellaris*

全長:63.8–72.0cm　翼長:290–350mm　ふ蹠長:90–106mm　体重:799–1139g

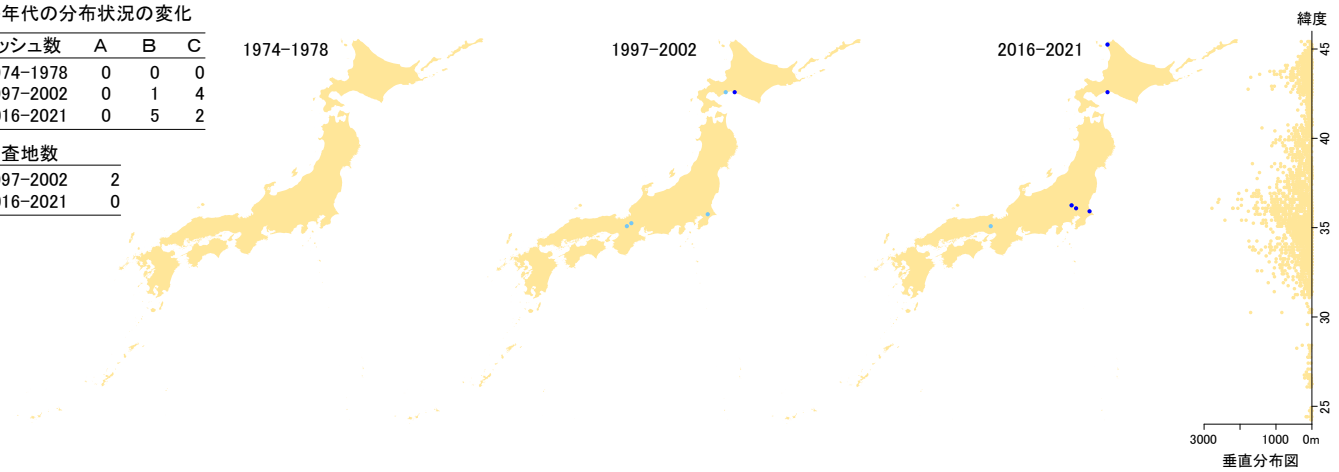
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	4
2016–2021	0	5	2

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	0



大規模なアシ原で局所的に繁殖する。ユーラシア大陸中緯度地域に分布する。分布は局所的であり，その増減ははっきりしない。繁殖地の 1 つである渡良瀬遊水地では生息数が減少しており，アシ原の乾燥化にともなうサンカノゴイの好む水の多いアシ原の減少が影響していると考えられている（平野 2018）。

ヨシゴイ　分類:ペリカン目サギ科　Yellow Bittern　*Ixobrychus sinensis*

全長:36.5cm　翼長:126–146mm　ふ蹠長:40–51mm　体重:113.1±2.7g

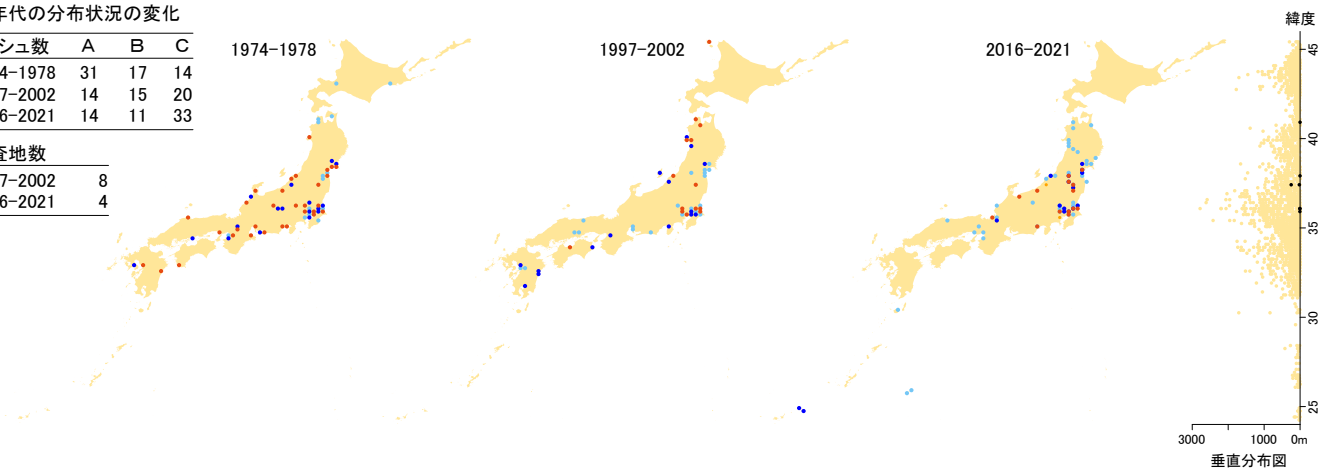
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	31	17	14
1997–2002	14	15	20
2016–2021	14	11	33

調査地数

1997–2002	8
2016–2021	4



夏鳥として全国に渡来するが，北海道では少ない。記録メッシュ数は 1970 年代から 1990 年代にかけて，62 メッシュから 49 メッシュに減少した。2010 年代にかけてはメッシュ数に大きな変化はないが，西日本の記録が減少した。湿地の減少およびブラックバスなどの外来魚の増加に伴う小魚の減少がその原因と考えられている(佐原 2013)。2010 年代には南大東島と宮古島，池間島で記録され，1990 年代までの記録はないが，その当時から生息しており，新たに分布するようになったわけではない。

オオヨシゴイ　分類:ペリカン目サギ科　Von Schrenck's Bittern　*Ixobrychus eurhythmus*

全長:37.0–40.8cm　翼長:130–160mm　ふ蹠長:45–55mm　体重:142–189g

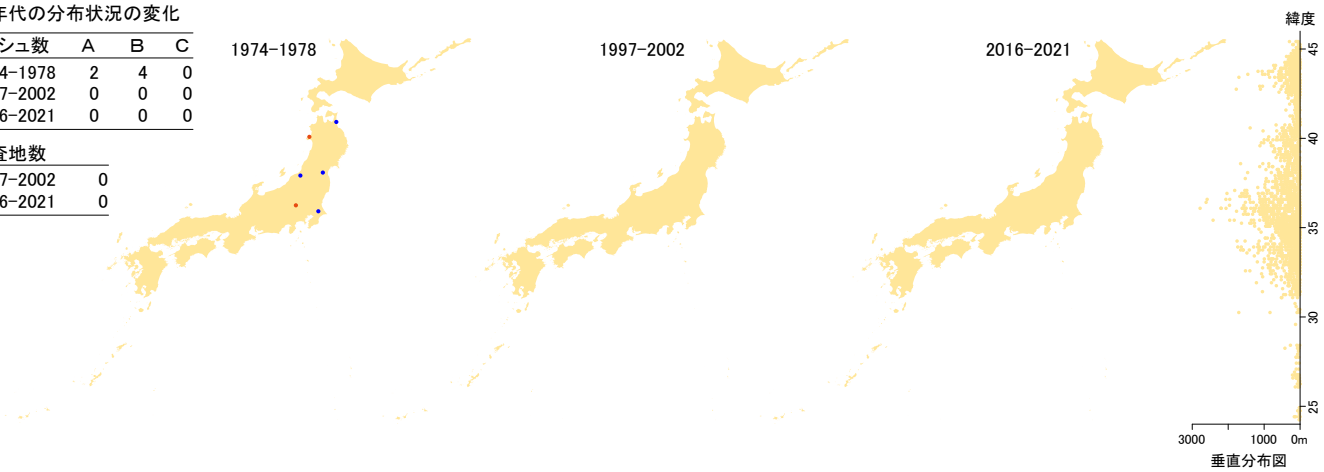
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	4	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



本州中部以北の湿地で局所的に繁殖する。東アジアの温帯から熱帯域に分布し，ヨシゴイに比べてやや乾燥した草原を好み，地上に営巣することが多い。魚や両生類を食べる。1970 年代には 6 メッシュで確認されたが，1990 年代，2010 年代には記録はなかった。なお，調査期間外だが 2014，2015 年に北海道小樽市で繁殖期の記録があり，2015 年には幼鳥が捕獲標識されている(大倉 2017)。

リュウキュウヨシゴイ　分類:ペリカン目サギ科　Cinnamon Bittern　*Ixobrychus cinnamomeus*

嘴峰長:46–54mm　翼長:139–147mm　ふ蹠長:46–52mm　体重:130–148g

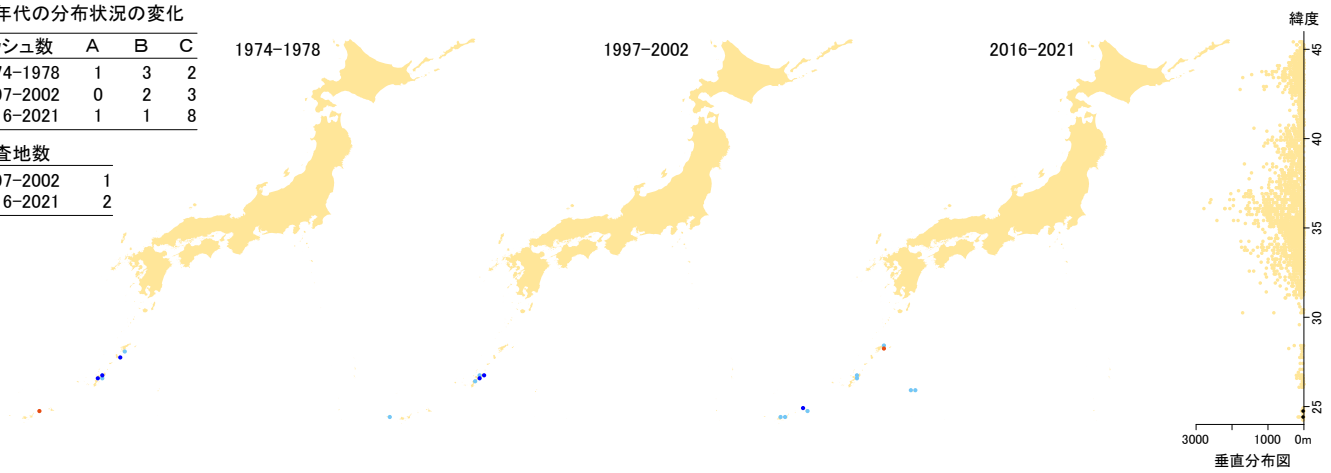
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	3	2
1997–2002	0	2	3
2016–2021	1	1	8

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	2



東南アジアに広く分布し，日本では南西諸島で留鳥として水田を含む湿地やアシ原で繁殖する。魚類，両生類，昆虫などを食べる。南大東島，宮古島，池間島には，ヨシゴイも生息しているが，そのような場所ではヨシゴイと同所的に生息している。

ミゾゴイ　分類:ペリカン目サギ科　Japanese Night Heron　*Gorsachius goisagi*

全長:49cm　翼長:240–288mm　ふ蹠長:64–73mm　体重:470–530g

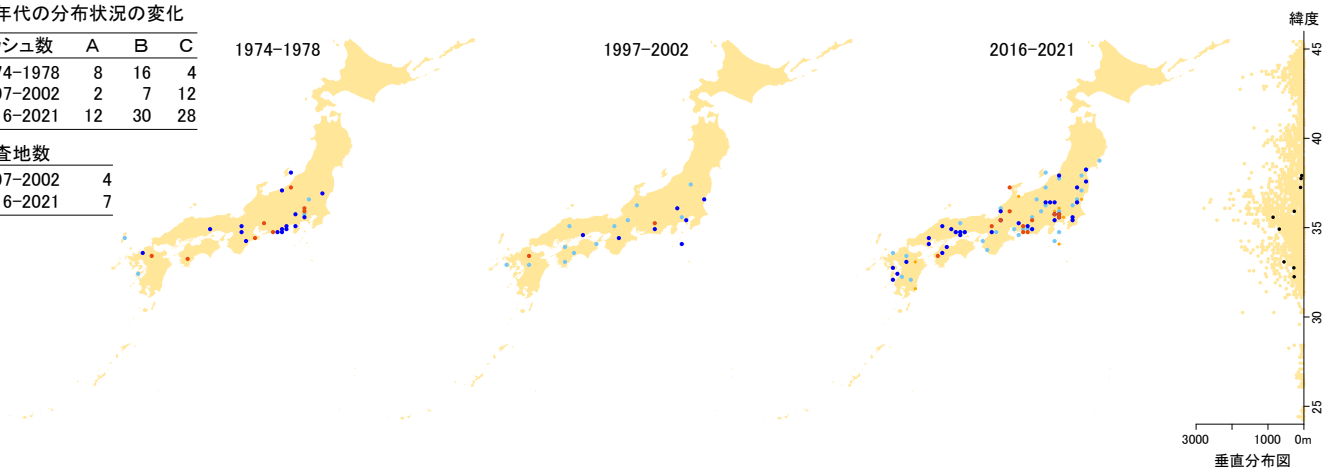
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	16	4
1997–2002	2	7	12
2016–2021	12	30	28

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	7



本州以南で夏鳥として繁殖する。2000 年代までは減少傾向にあると言われていたが，2010 年代は 1990 年代よりも記録メッシュ数が増加していた。環境省第 3 次レッドリスト(2007 年)で絶滅危惧 IB 類に選定され注目されるようになったことや，ミゾゴイの調査方法が確立したことが起因している可能性がある。ただし，放棄された谷戸田が森になったような場所が生息地になっており(浜口ほか 2014)，そうした場所の増加とともに生息地が増えている可能性もある。

ズグロミゾゴイ　分類:ペリカン目サギ科　Malaysian Night Heron　*Gorsachius melanolophus*

嘴峰長:42–45mm　翼長:240–255mm　ふ蹠長:63–68mm　尾長:80–105mm

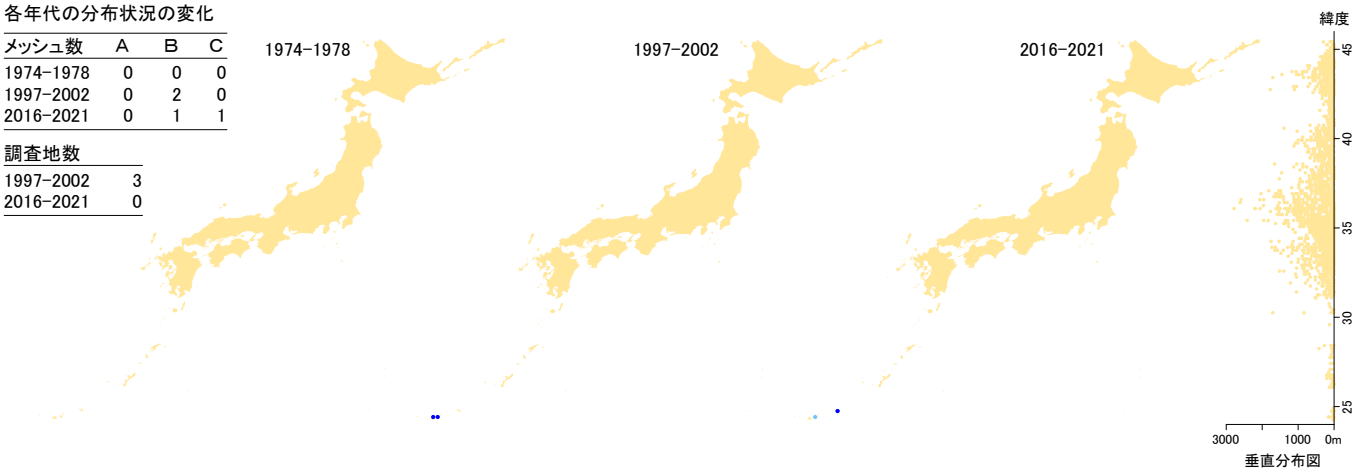
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	2	0
2016–2021	0	1	1

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	0



八重山諸島に留鳥として繁殖する。薄暗い林内で，薄暮時や夜間によく鳴き，森林中の沢や地上で両生類，昆虫類などの小動物を捕食する。1970 年代では記録されていないが，夜間の声で記録することができる鳥で，現地調査では記録されにくいためと考えられ，1990 年代から分布するようになったことを示すわけではない。

ゴイサギ　分類:ペリカン目サギ科　Black-crowned Night Heron　*Nycticorax nycticorax*

全長:57.5cm　翼長:259–310mm　ふ蹠長:63.5–79.5mm　体重:485–683g

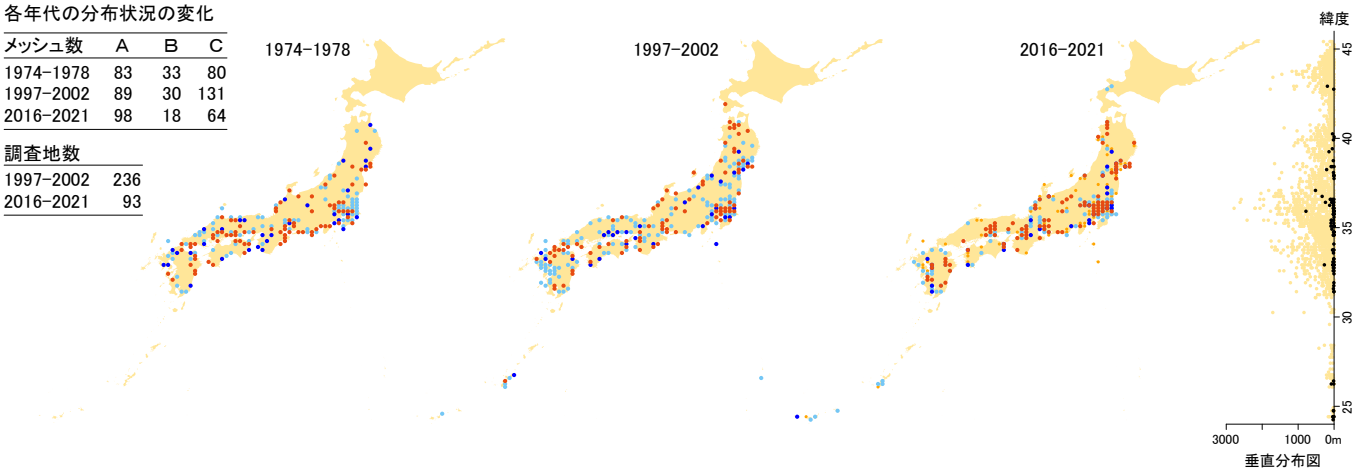
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	83	33	80
1997–2002	89	30	131
2016–2021	98	18	64

調査地数

1997–2002	236
2016–2021	93



留鳥として全国で繁殖する。東北地方以北は夏鳥として繁殖する。2010 年代では記録メッシュ数が大きく減少し，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，236 地点から 93 地点へと大きく減少しており，減少傾向が顕著である。2010 年代の調査で減少が顕著だった種には小型の魚を食べる種という共通点があるため，外来魚の増加に伴う小魚の減少や，圃場整備にともなう水田の水生生物の減少などの影響が懸念される(158 ページ参照)。

ササゴイ　分類：ペリカン目サギ科　Striated Heron　*Butorides striata*

全長：52.0cm　翼長：194–214mm　ふ蹠長：50–56mm　体重：135–300g

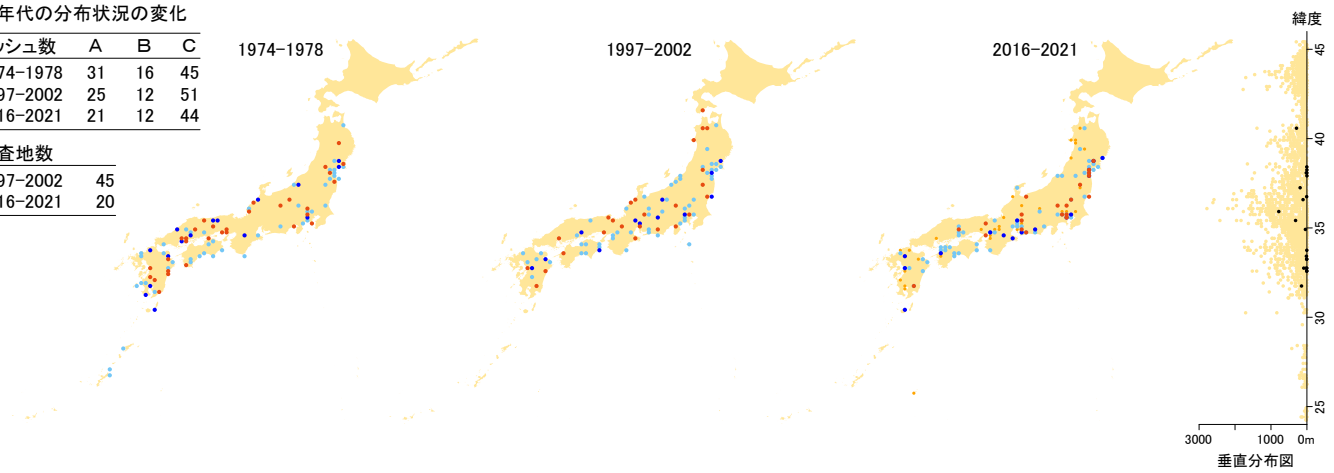
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	31	16	45
1997–2002	25	12	51
2016–2021	21	12	44

調査地数

1997–2002	45
2016–2021	20



夏鳥として本州以南で繁殖する。ほかのサギ類とは異なり，単独あるいはササゴイのみの小規模な集団繁殖地で繁殖することが多い。2010 年代には記録メッシュ数が減少し，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，45 地点から 20 地点へと大きく減少しており，減少傾向が顕著である。急減している種には小型の魚を食べる種という共通点があり，外来魚の増加に伴う小魚の減少などが影響している可能性がある。

アカガシラサギ　分類：ペリカン目サギ科　Chinese Pond Heron　*Ardeola bacchus*

嘴峰長：53–58mm　翼長：♂217–237mm ♀200–206mm　ふ蹠長：51–63mm　体重：220–380g

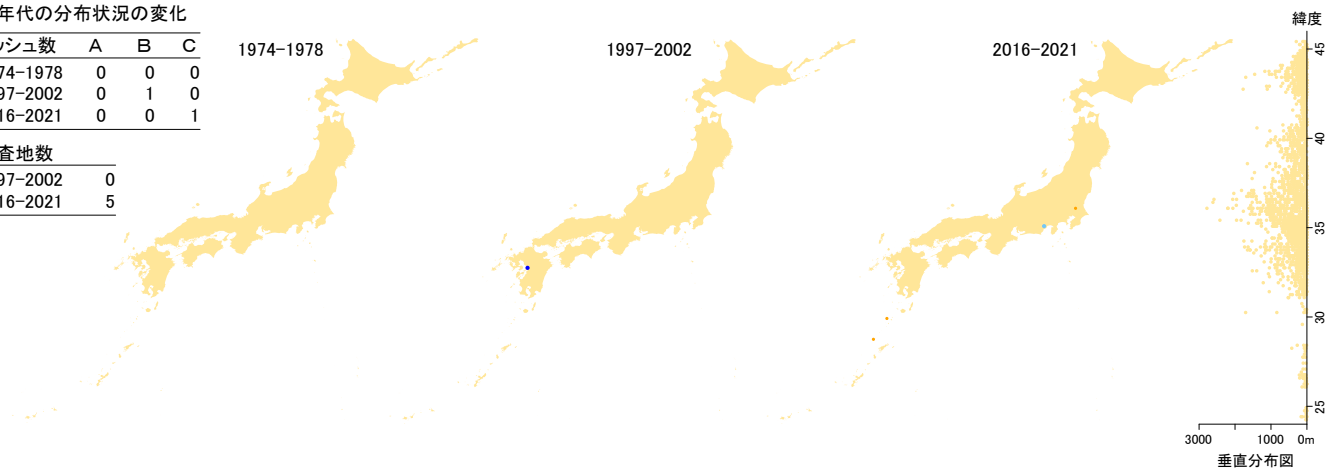
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	0
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	5



数少ない旅鳥として各地で記録される。サギ類の集団繁殖地で稀に繁殖することがある。東アジアの温帯から熱帯域に分布し，湿地や草地で魚，甲殻類，昆虫類を食べる。2010 年代も稀に繁殖するという状況に変化はなかった。

アマサギ　分類：ペリカン目サギ科　Eastern Cattle Egret　*Bubulcus ibis*

全長：46–56cm　翼長：♂253mm ♀248mm　ふ蹠長：♂77mm ♀76mm　体重：♂311g ♀304g

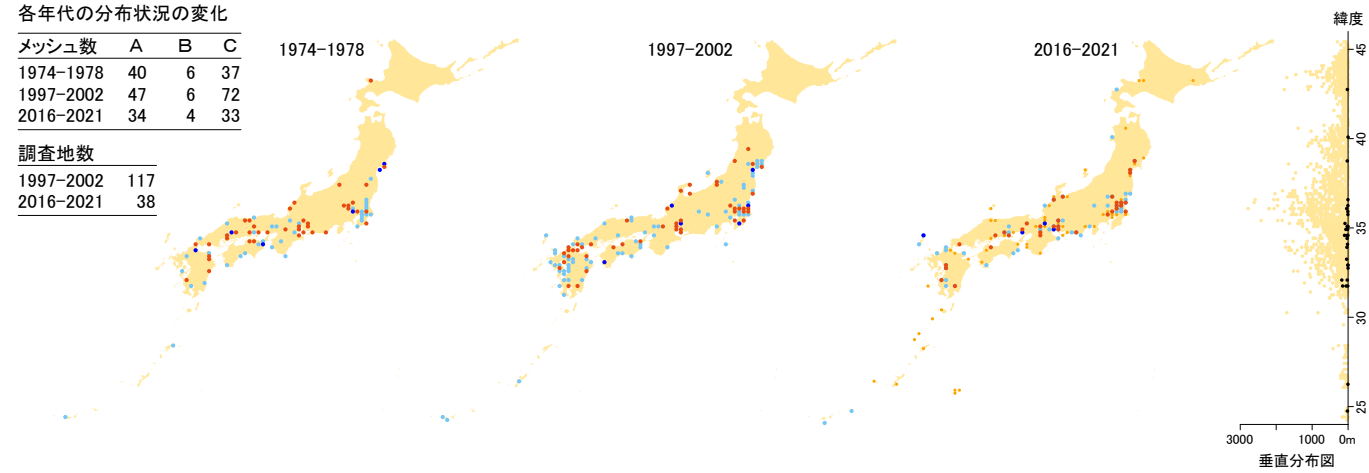
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	40	6	37
1997–2002	47	6	72
2016–2021	34	4	33

調査地数

1997–2002	117
2016–2021	38



主に本州以南で夏鳥として繁殖する。世界的にも全大陸の熱帯から温帯地域に広く分布し，20 世紀に分布を拡大したこと（藤岡 2006），水田で採食する場合も陸生のアマガエルを採るため，水生動物を多く採るチュウサギのように圃場整備の影響は受けないと考えられていたが 2010 年代では記録メッシュ数が大きく減少した。1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，117 地点から 38 地点へと激減しており，減少傾向が顕著である。

アオサギ　分類：ペリカン目サギ科　Grey Heron　*Ardea cinerea*

全長：90–98cm　翼長：♂440–485mm ♀428–463mm　ふ蹠長：♂136–172mm ♀132–153mm　体重：♂1071–2073g ♀1020–1785g

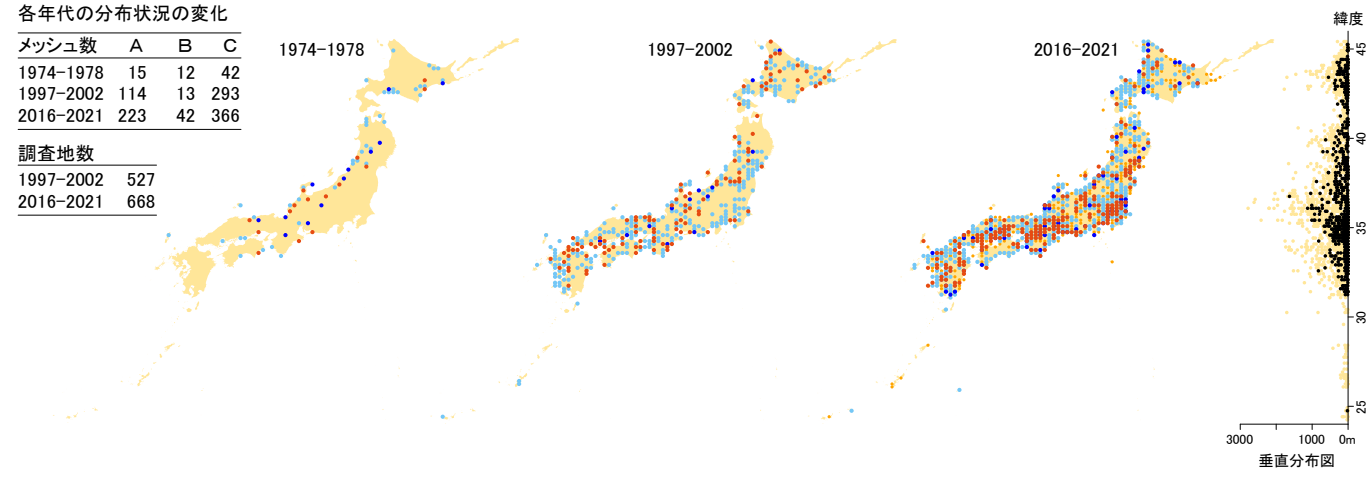
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	15	12	42
1997–2002	114	13	293
2016–2021	223	42	366

調査地数

1997–2002	527
2016–2021	668



留鳥として全国で繁殖する。北海道では夏鳥。ほかのサギ類に先がけて本州では 2 月から繁殖を開始する。1970 年代では主に北海道や日本海側で繁殖するサギだったが，その後分布を拡大し，現在は全国どこでも繁殖する鳥となっている。この傾向はアオサギだけでなく，大型の魚食性の鳥に共通する傾向である。大型の魚食性の鳥は，1970 年代に農薬や水質汚染で世界的に減少したことがしられており（Newton 1998），そこから回復していることが分布拡大の一因と考えられる。

ムラサキサギ　分類:ペリカン目サギ科　Purple Heron　*Ardea purpurea*

嘴峰長:120–141mm　翼長:333–402mm　ふ蹠長:119–146mm　尾長:120–150mm

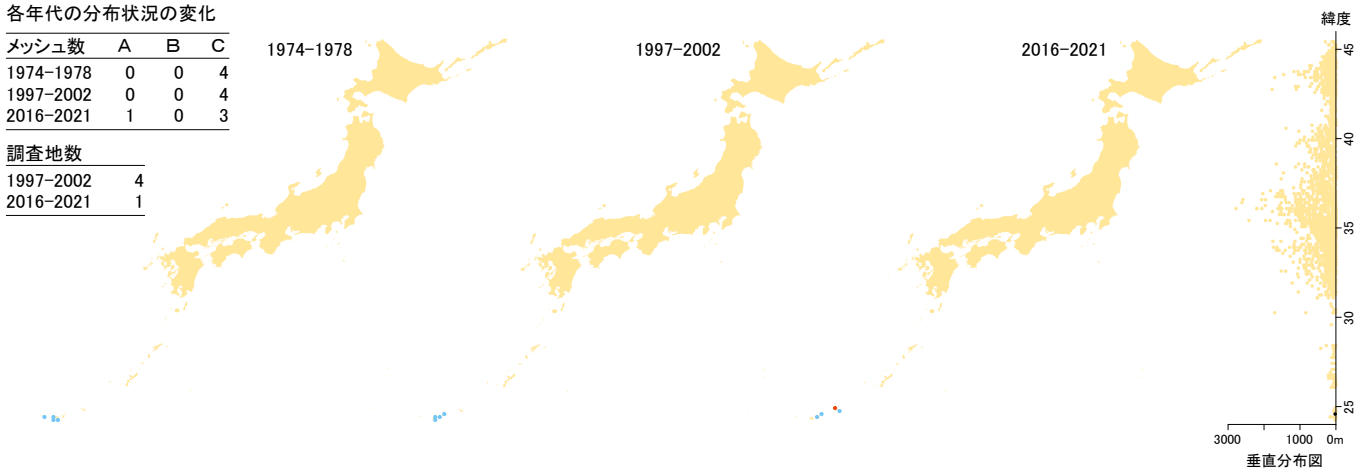
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	4
1997–2002	0	0	4
2016–2021	1	0	3

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	1



八重山諸島などの南西諸島に留鳥として生息し，繁殖する。東南アジアからアフリカまで分布し，水田や湿地，マングローブ林などで魚，両生類，昆虫類を捕食する。記録メッシュ数は 1970 年代以降，3 期とも 4 メッシュで，大きな変化は見られていない。

ダイサギ　分類:ペリカン目サギ科　Great Egret　*Ardea alba*

全長:83.8–94.0cm　翼長:324–390mm　ふ蹠長:135–160mm　体重:746–1122g

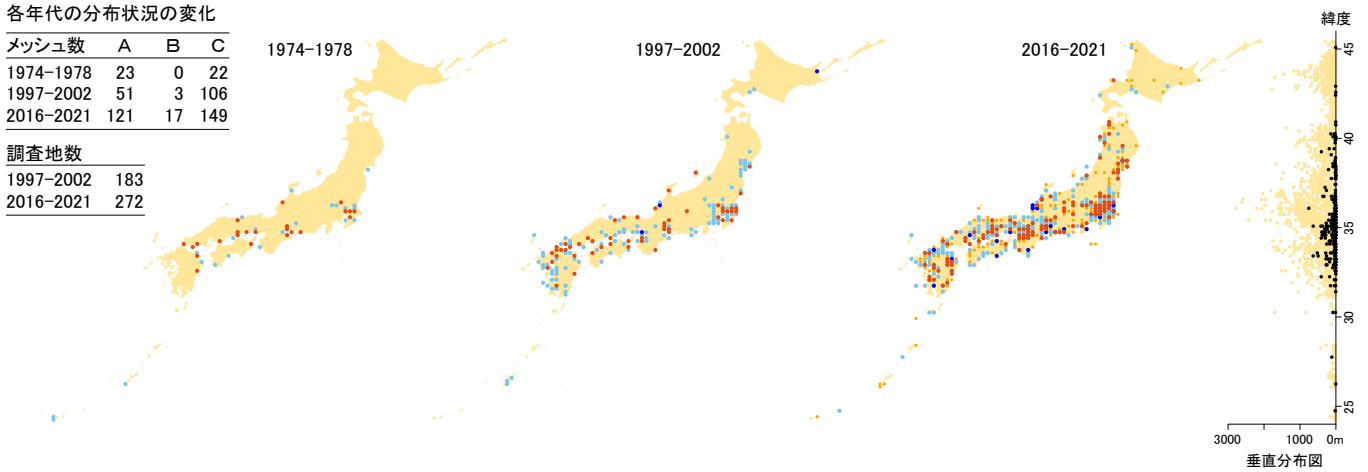
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	23	0	22
1997–2002	51	3	106
2016–2021	121	17	149

調査地数

1997–2002	183
2016–2021	272



主に本州以南で繁殖し，北海道でも繁殖する。冬は南方へ移動するものが多く，別亜種が冬鳥として大陸から渡来する。1970 年代以降，記録メッシュ数は増加している。この傾向はダイサギだけでなく，大型の魚食性の鳥に共通する傾向であり，1970 年代に農薬や水質汚染で世界的に減少し(Newton 1998)，そこから回復していることが分布拡大の一因と考えられる。

チュウサギ　分類:ペリカン目サギ科　Intermediate Egret　*Egretta intermedia*

全長:65–70cm　翼長:272–320mm　ふ蹠長:100–121mm　体重:430–630g

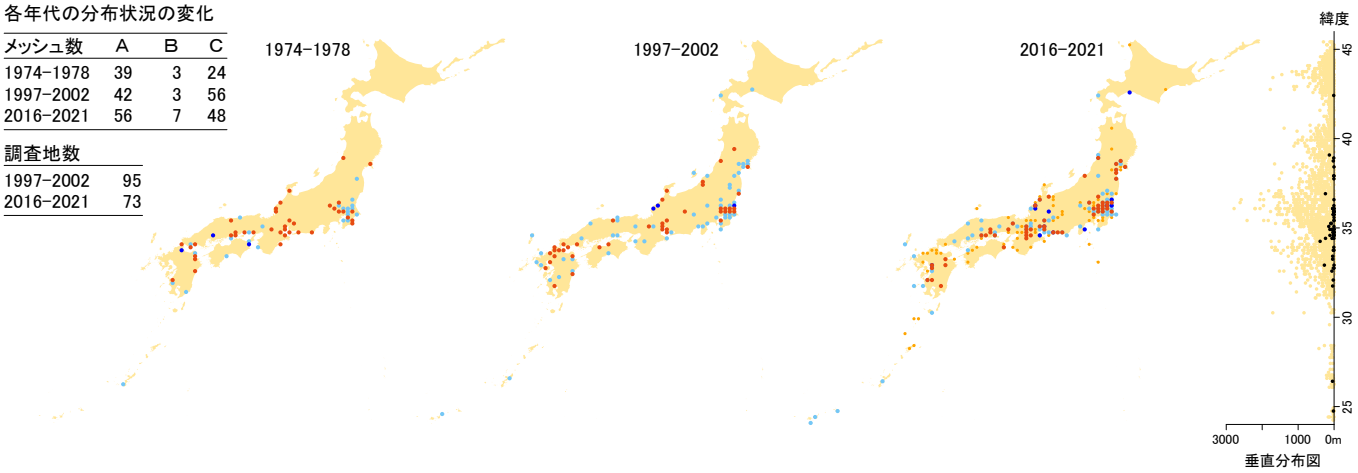
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	39	3	24
1997–2002	42	3	56
2016–2021	56	7	48

調査地数

1997–2002	95
2016–2021	73



主に本州以南で夏鳥として繁殖する。かつては日本のシラサギ類のなかでもっとも多かったが，1960 年から 1970 年にかけて急減した。宅地化による生息地の減少や農薬，圃場整備による水生生物の減少がその原因と考えられているが（成末 1992），1970 年代以降生息メッシュ数は減少しておらず，また，主要な生息地の 1 つである茨城県では，2000 年代以降，個体数は増加傾向にあることが知られている（Mashiko & Toquenaga 2013）。

コサギ　分類:ペリカン目サギ科　Little Egret　*Egretta garzetta*

全長:♂61.9cm ♀57.9cm　翼長:♂293.5mm ♀280.1mm　ふ蹠長:♂104.8mm ♀97.7mm　体重:♂604.5g ♀487.2g

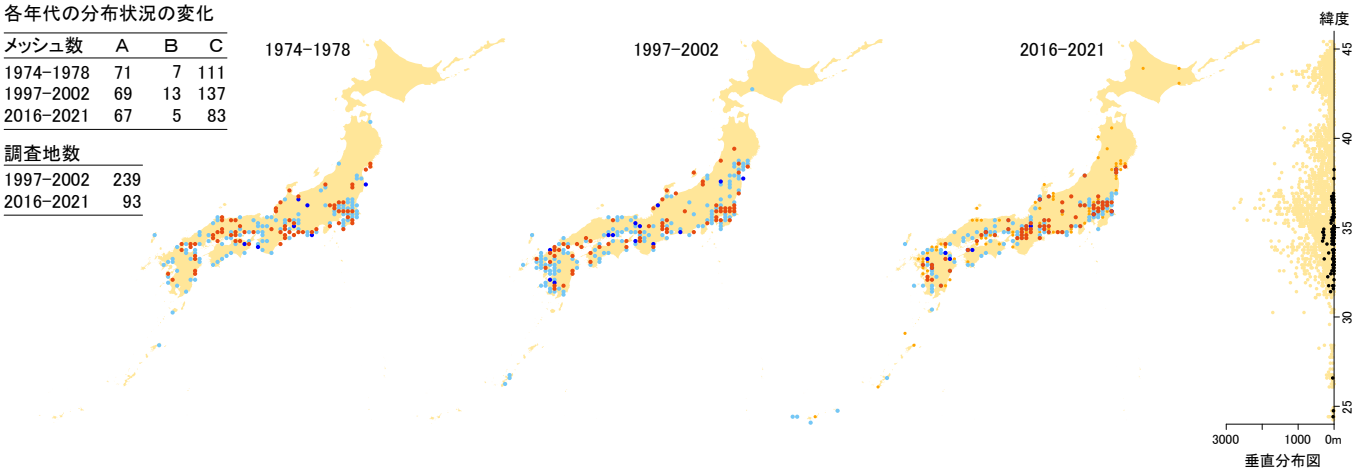
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	71	7	111
1997–2002	69	13	137
2016–2021	67	5	83

調査地数

1997–2002	239
2016–2021	93



主に本州以南で留鳥として繁殖する。近年各地でコサギの減少が報告されており，本調査でも 2010 年代では記録メッシュ数が減少しており，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，239 地点から 93 地点へと激減していた。埼玉県の事例では，その要因として外来魚の増加に伴う小魚の減少や，水田の圃場整備にともなう水田の水生生物の減少，オオタカなどの猛禽類の増加に伴う被捕食率の増加などが挙げられている（内田 2017）。

クロサギ　分類:ペリカン目サギ科　Pacific Reef Heron　*Egretta sacra*

全長:58.4–66.0cm　翼長:266–320mm　ふ蹠長:75–89mm　体重:477–626g

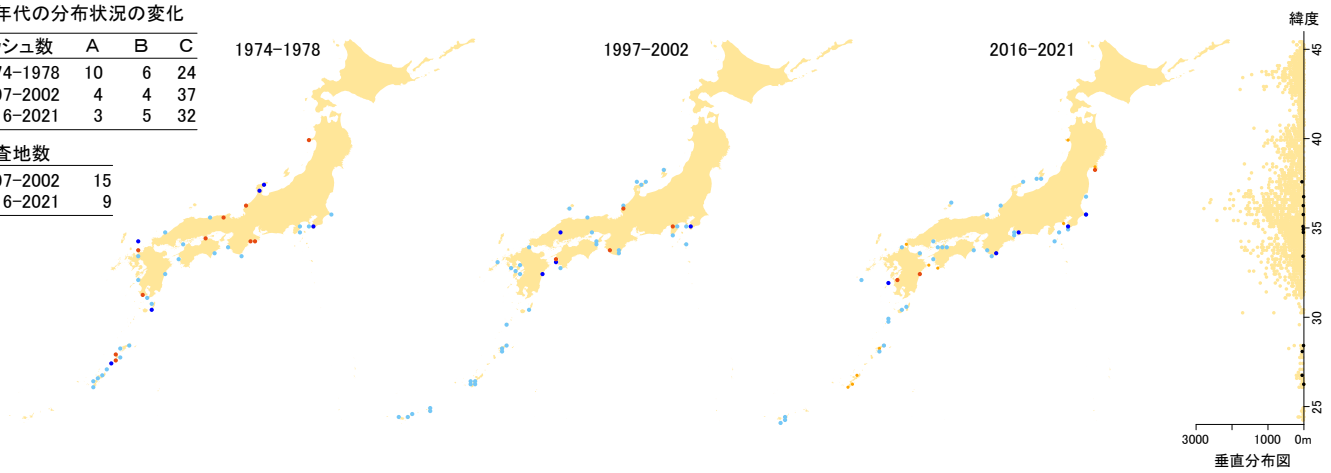
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	10	6	24
1997–2002	4	4	37
2016–2021	3	5	32

調査地数

1997–2002	15
2016–2021	9



本州以南の海岸で留鳥として局所的に繁殖する。ほかのサギ類とは異なり岩棚で単独で営巣する。黒色型と白色型があり，白色型は南西諸島以南に多い。1970 年代以降，記録メッシュ数に大きな変化はない。

トキ　分類:ペリカン目トキ科　Crested Ibis　*Nipponia nippon*

全長:♂77cm ♀73cm　翼長:♂412mm ♀392mm　ふ蹠長:♂89mm ♀86mm　体重:♂1775.9±120.1g ♀1545.3±107.2g

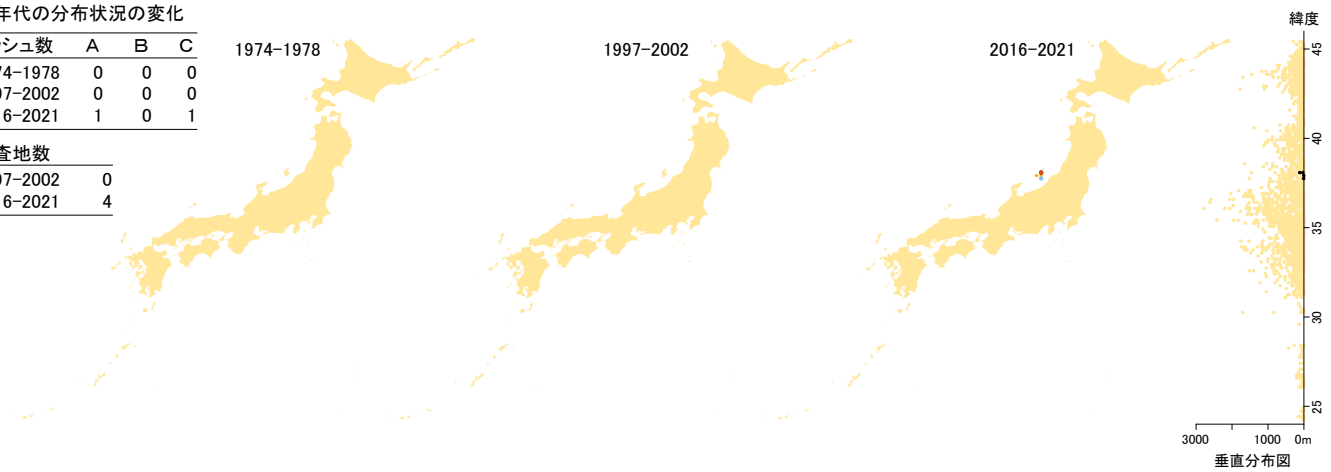
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	4



かつて，日本海側は島根県以東，太平洋側は関東以北の地域の水田などの湿地で魚類，両生類，昆虫などを食べて生息していた。しかし狩猟，生息地の改変，農薬などの影響で減少し，1981 年に佐渡島に残っていた 5 羽を飼育繁殖のために捕獲したことで野生絶滅となった。日本産トキは 2003 年に飼育個体が死亡し，絶滅したが，中国のトキの増殖に成功し，それらの個体が 2008 年に佐渡島に再導入された。2010 年代の分布はそれが定着して繁殖した記録である。

タンチョウ　分類:ツル目ツル科　Red-crowned Crane　*Grus japonensis*

全長:♂137cm ♀123cm　翼長:♂618 ♀589mm　ふ蹠長:♂296mm ♀276mm　体重:♂8137g ♀7321g

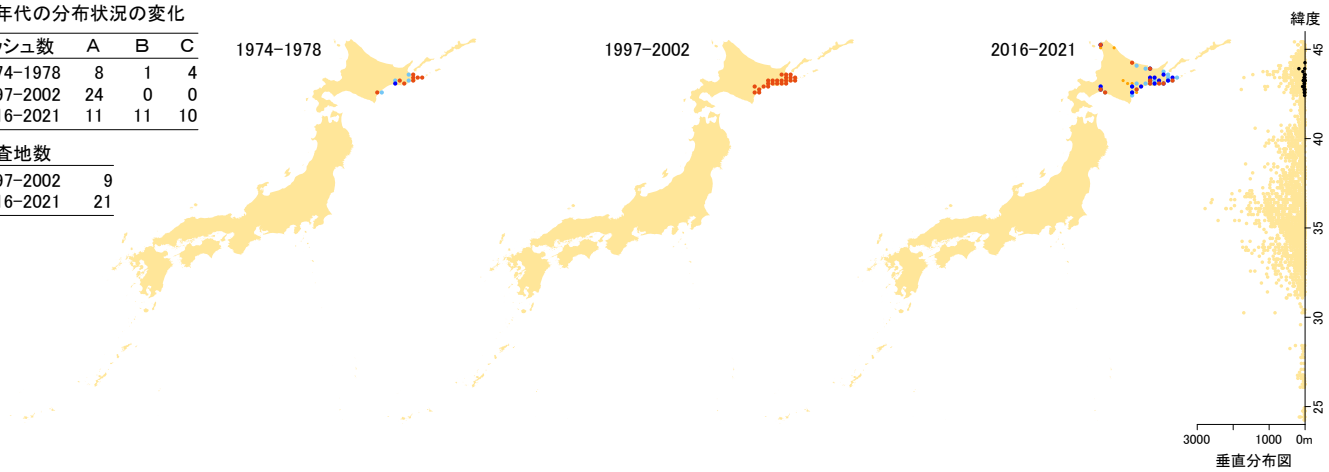
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	1	4
1997–2002	24	0	0
2016–2021	11	11	10

調査地数

1997–2002	9
2016–2021	21



主に北海道東部で留鳥として繁殖する。広大な湿地にすみ，湿地内の地上に営巣する。近年は繁殖分布も拡大しており，2010 年代では，北海道道北部や道央部でも繁殖が確認されている。

シマクイナ　分類:ツル目クイナ科　Swinhoe's Rail　*Coturnicops exquisitus*

嘴峰長:12–13mm　翼長:77–83mm　ふ蹠長:22–23mm　体重:81–127g

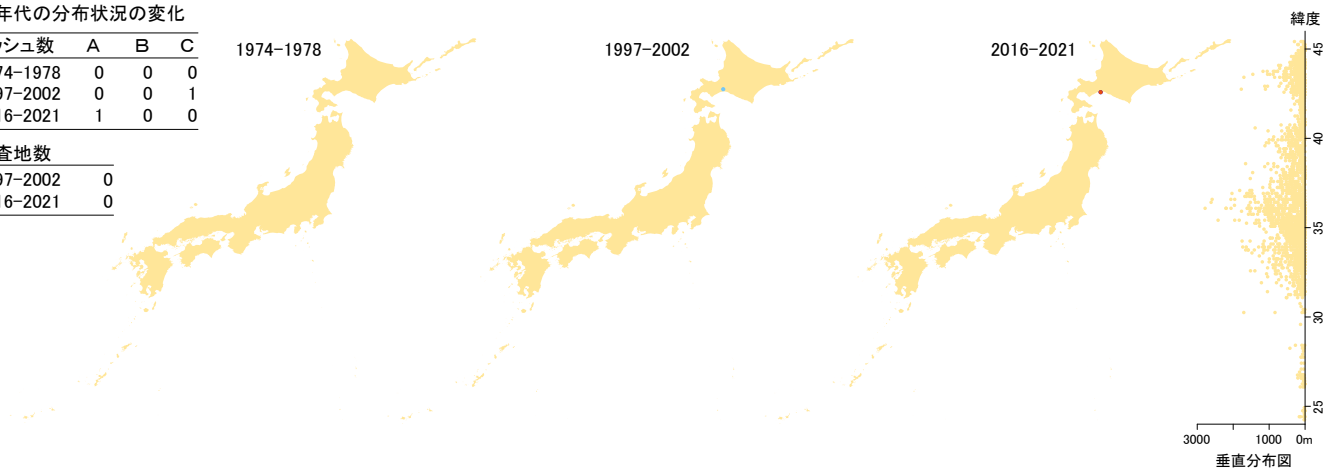
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	1
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



まれな冬鳥として日本に渡来すると考えられていたが，プレイバックによる調査手法が確立し，関東地方では広く越冬していることが明らかになってきた（高橋ほか 2018）。また，2010 年代の記録は 1 メッシュのみだが，北海道の湿地では複数地点に生息し，繁殖も確認されている（Senzaki et al. 2021）。湿地の中に潜み，目立たない鳥のため，以前から同様の分布をしていたのかどうかについては明らかでない。

オオクイナ　分類:ツル目クイナ科　Slaty-legged Crake　*Rallina eurizonoides*

嘴峰長:29–33mm　翼長:146–158mm　ふ蹠長:44–49mm　尾長:63–74mm

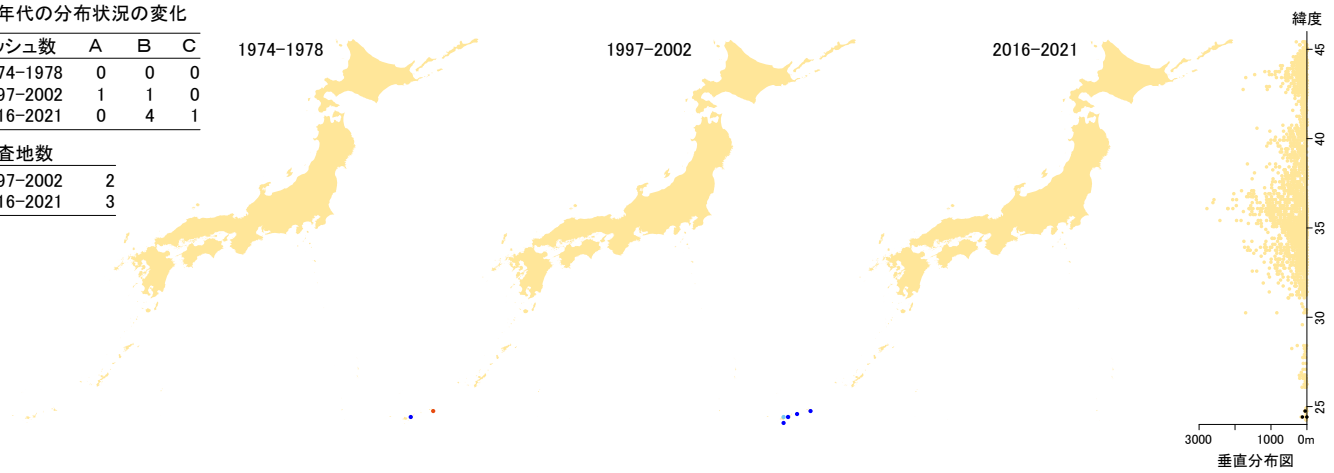
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	1	0
2016–2021	0	4	1

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	3



南西諸島南部で留鳥として生息する。常緑広葉樹林と隣接する草原に生息し，昆虫，軟体動物などの小動物と湿地の植物を食べる。2010 年代の記録メッシュ数は 2 メッシュから 6 メッシュと増加していたが，局所的に分布する種のため，その変化については明らかでない。

ヤンバルクイナ　分類:ツル目クイナ科　Okinawa Rail　*Gallirallus okinawae*

全長:30cm　翼開長:50cm　体重:433–435g

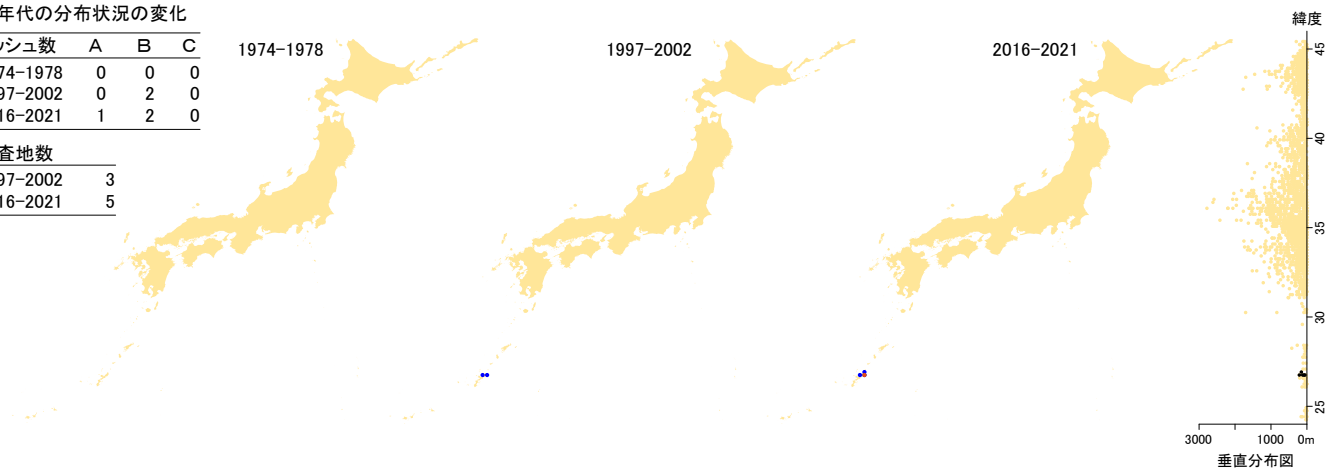
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	2	0
2016–2021	1	2	0

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	5



沖縄本島北部の森林で留鳥として生息する。マングースやノネコ，ハシブトガラスによる捕食の増加などで分布域が縮小し，道路開発に伴う交通事故の増加や側溝へのヒナの転落などで個体数が減少しており，その保護対策がすすめられている（長嶺 2003）。局所的に分布する種のため，その変化については明らかでない。

クイナ　分類:ツル目クイナ科　Water Rail　*Rallus aquaticus*

全長:26.9–30.9cm　翼長:115–130mm　ふ蹠長:36–42mm　体重:94–170g

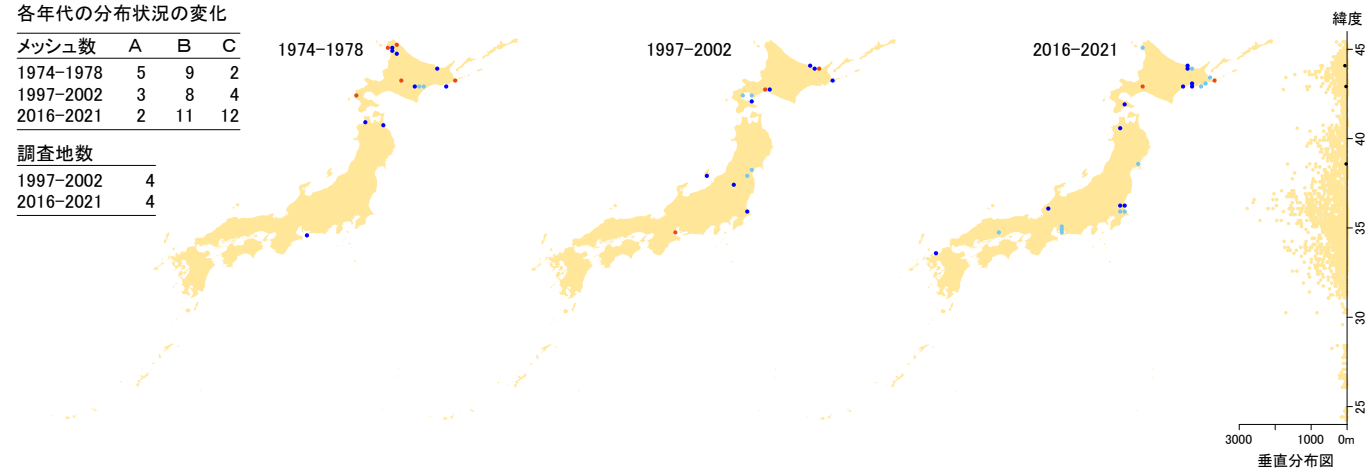
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	9	2
1997–2002	3	8	4
2016–2021	2	11	12

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	4



主に本州中部以北で夏鳥として繁殖し，南東北より温暖な地域で越冬する。湖沼などの湿地に生息し，アシの茂みに営巣する。記録メッシュ数は増加しているが，比較可能な現地調査地点での記録数は変化していない。目につきにくい鳥であり，アンケート情報への依存度が高いため，実際の生息分布の変化は不明である。

シロハラクイナ　分類:ツル目クイナ科　White-breasted Waterhen　*Amaurornis phoenicurus*

嘴峰長:♂38–41mm ♀34–375mm　翼長:♂165–174mm ♀152–162mm　ふ蹠長:♂55–60mm ♀52–58

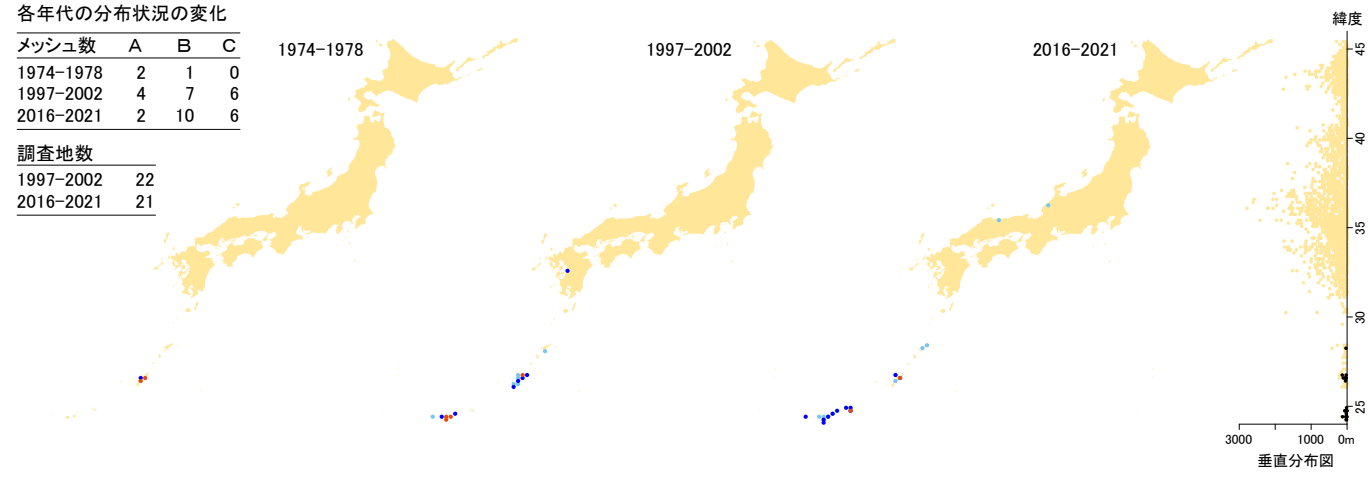
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	1	0
1997–2002	4	7	6
2016–2021	2	10	6

調査地数

1997–2002	22
2016–2021	21



南西諸島で留鳥として繁殖し，河口域のマングローブなどの湿地から山間部の竹林まで生息環境は広い。通常の分布域とは異なる九州以北に飛来し，繁殖することがあり，分布の北上が示唆されてきた(中村 1987)。2010 年代でも鳥取県，石川県で記録されているが，現時点までの記録は偶発的なもので，長期にわたって安定して生息している場所はない。

ヒメクイナ　分類:ツル目クイナ科　Baillon's Crake　*Porzana pusilla*

全長:18.0–20.0cm　翼長:84–90mm　ふ蹠長:27–30mm　体重:42–69g

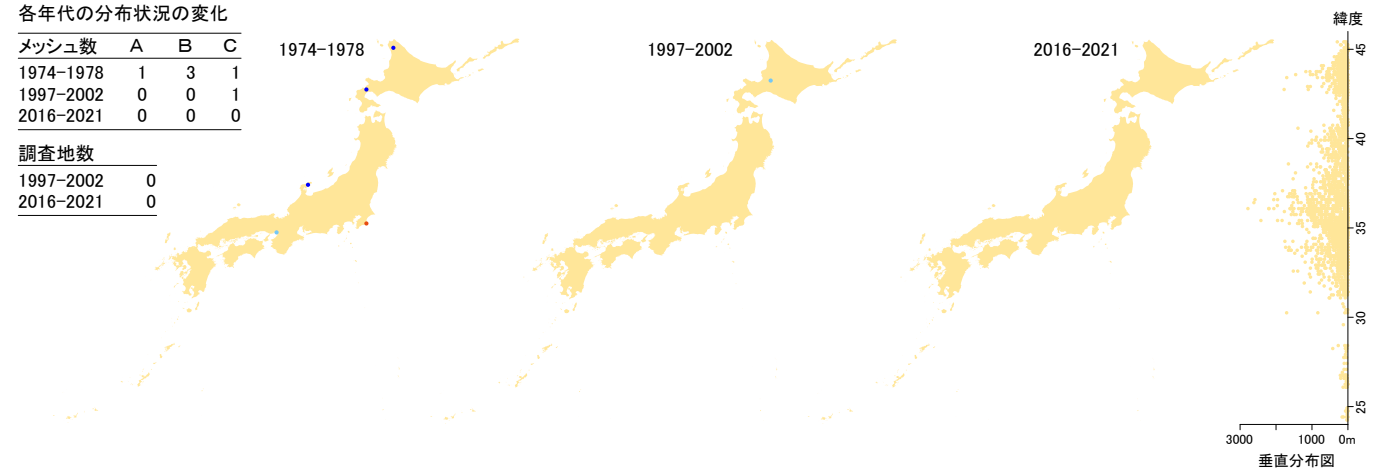
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	3	1
1997–2002	0	0	1
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



本州中部以北でまれに繁殖する。平地の水田や湿地に生息し，藪内の地上に営巣し水生昆虫や軟体動物などの小動物および植物の種子などを食べる。2010 年代の記録はないが，これまでも記録は少なく，その増減は明らかでない。

ヒクイナ　分類:ツル目クイナ科　Ruddy-breasted Crake　*Porzana fusca*

全長:21.5–23.6cm　翼長:100–120mm　ふ蹠長:33–37mm　体重:57.5–94.2g

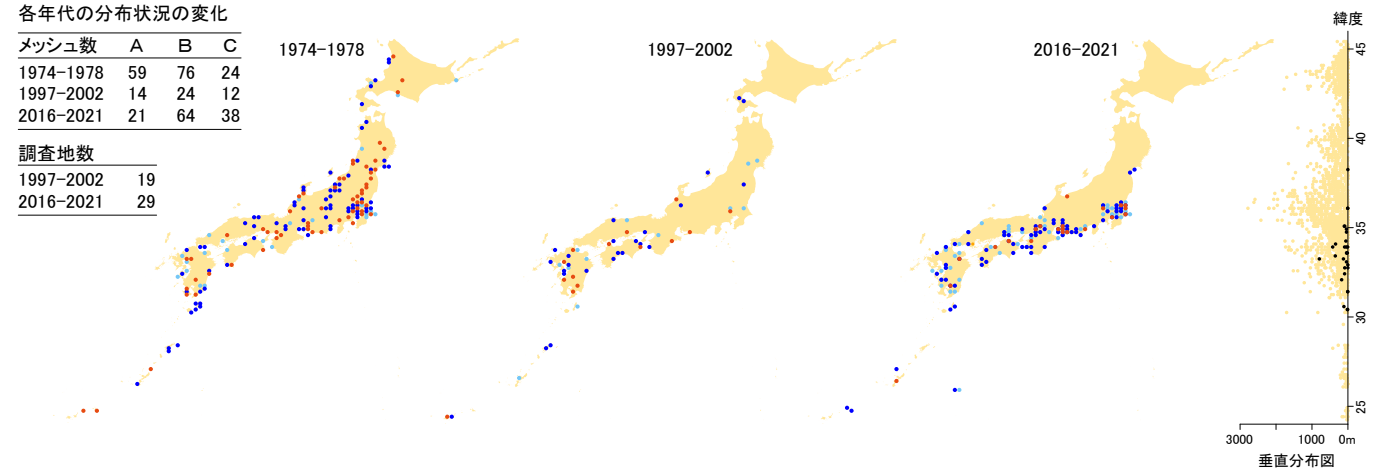
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	59	76	24
1997–2002	14	24	12
2016–2021	21	64	38

調査地数

1997–2002	19
2016–2021	29



全国の水辺の湿地性環境や水田で繁殖し，本州中部以北では主に夏鳥。1970 年代から 1990 年代にかけて，特に分布域の北側で記録メッシュ数が減少し，環境省第 3 次レッドリスト(2007 年)では絶滅危惧 II 類に選定された。しかし，2010 年代には，特に東日本で分布の確認が増加していた。調査方法の確立で調査が進んだことも寄与していると考えられるが，一方で，実際に分布や個体数が回復傾向にあることから，レッドリスト 2014 では準絶滅危惧となっている。

バン　分類:ツル目クイナ科　Common Moorhen　*Gallinula chloropus*

全長:29.6–35.0cm　翼長:158–170mm　ふ蹠長:45–50mm　体重:198–405g

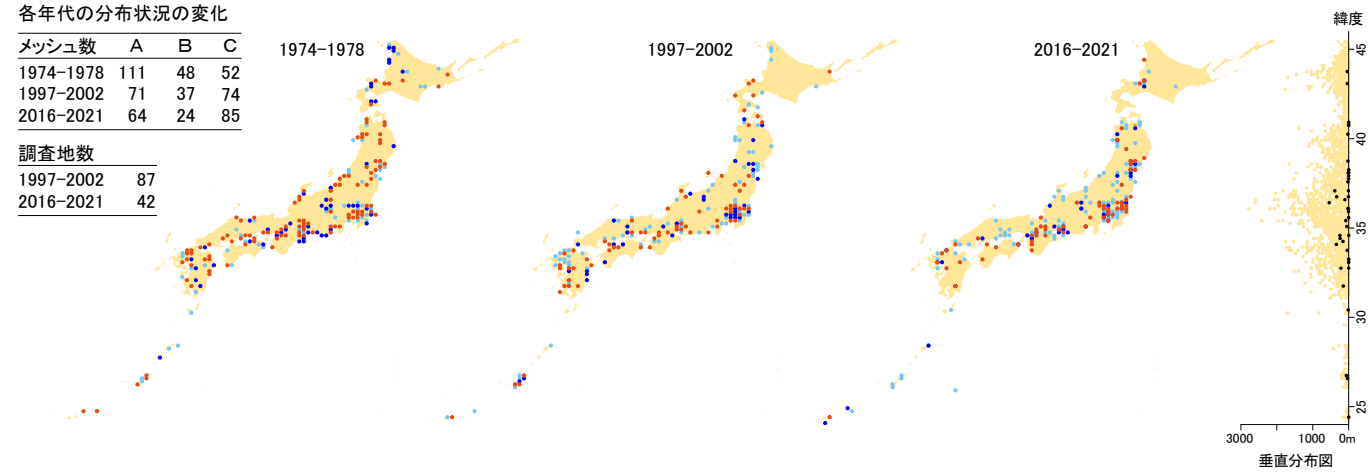
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	111	48	52
1997–2002	71	37	74
2016–2021	64	24	85

調査地数

1997–2002	87
2016–2021	42



全国で留鳥として繁殖する。北日本では夏鳥。1970 年代以降，記録メッシュ数は減少傾向にあり，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，87 地点から 42 地点へと減少していた。バン以外にも水田に依存している昆虫食の種には減少しているものが多く，水田の圃場整備や農地の質的な変化による水田の生物の減少などが影響している可能性がある(159 ページ参照)。

オオバン　分類:ツル目クイナ科　Eurasian Coot　*Fulica atra*

全長:36–45cm　翼長:♂211–229mm ♀197–213mm　ふ蹠長:♂59–65mm ♀54–60mm　体重:♂610–1200g ♀ 610–1150g

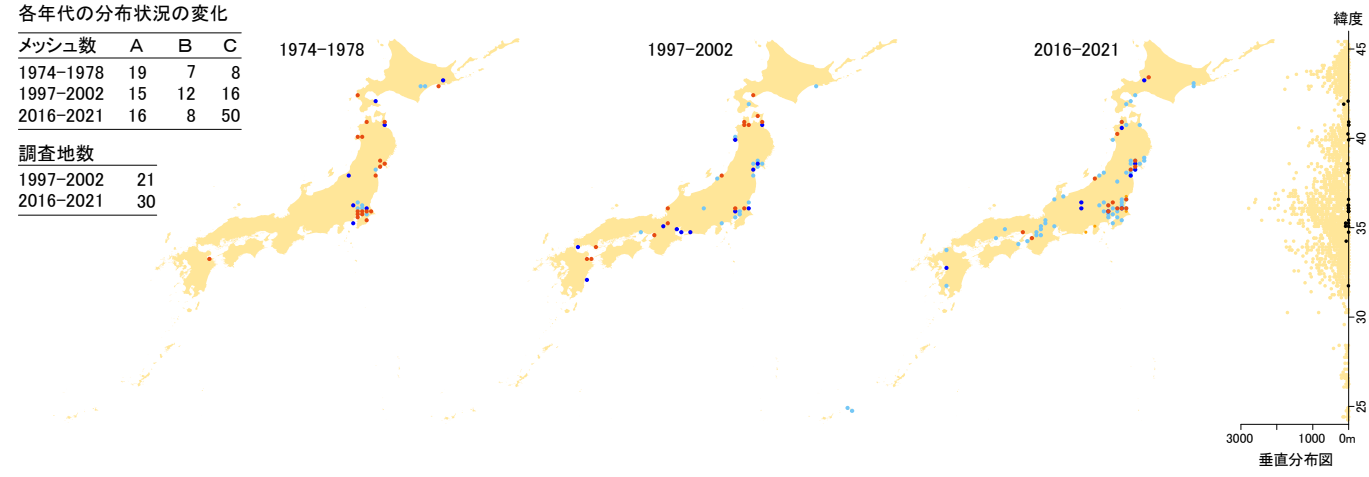
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	19	7	8
1997–2002	15	12	16
2016–2021	16	8	50

調査地数

1997–2002	21
2016–2021	30



主に本州中部以北の滞水または流れの緩い水域で局所的に繁殖し，全国で越冬する。越冬数が急激に増加しており，分布も北へと拡大している。繁殖分布も西日本へと拡大し，記録メッシュ数も増加しているが，越冬数のような増加は見られていない。越冬個体の増加は国外からの渡来数の増加に起因していると考えられている(橋本 2013)。

オニカッコウ　分類:カッコウ目カッコウ科　Asian Koels　*Eudynamys scolopaceus*

全長:39–46cm　体重:♂215g ♀234g

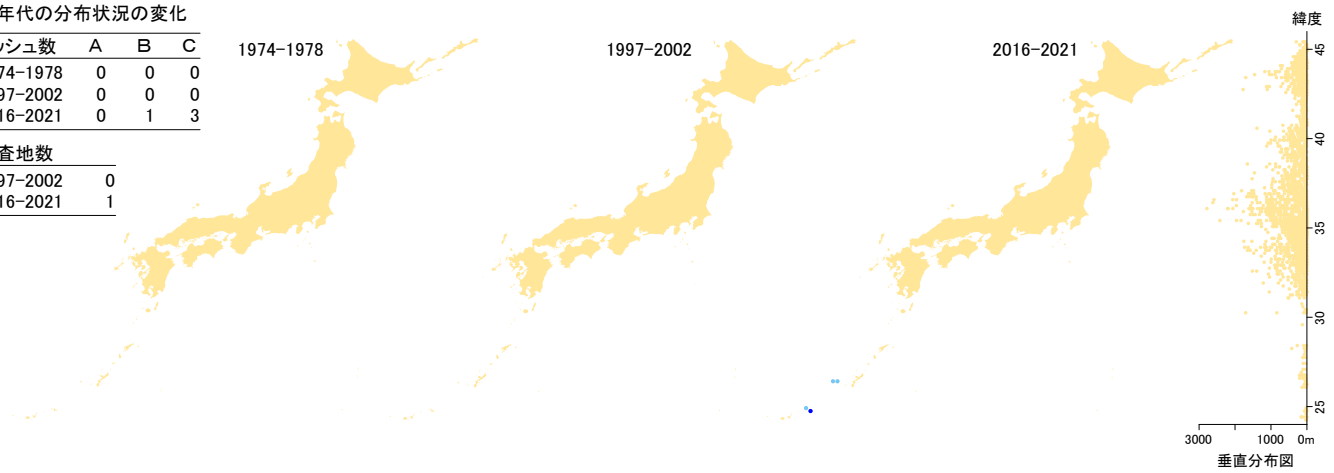
環境省レッドリスト:　—

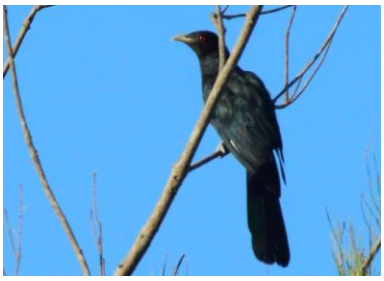
各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	1	3

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1





これまで，日本には迷鳥として渡来すると考えられてきたが，宮古島，久米島などで，繁殖期に雌雄が長期滞在する事例が出てきており(浜地ほか 2017)，また，2010 年代の調査でも記録され，繁殖している可能性がある。国外ではイエガラス，ハシブトガラス，スンダガラス，ハッカチョウに托卵することが知られており，日本でもこれらの島に生息しているハシブトガラスなどに托卵している可能性が考えられる。

ジュウイチ　分類:カッコウ目カッコウ科　Hodgson's Hawk-cuckoo　*Hierococcyx hyperythrus*

全長:30.5–33.0cm　翼長:180–210mm　ふ蹠長:22–24mm　体重:99.0–147.8g

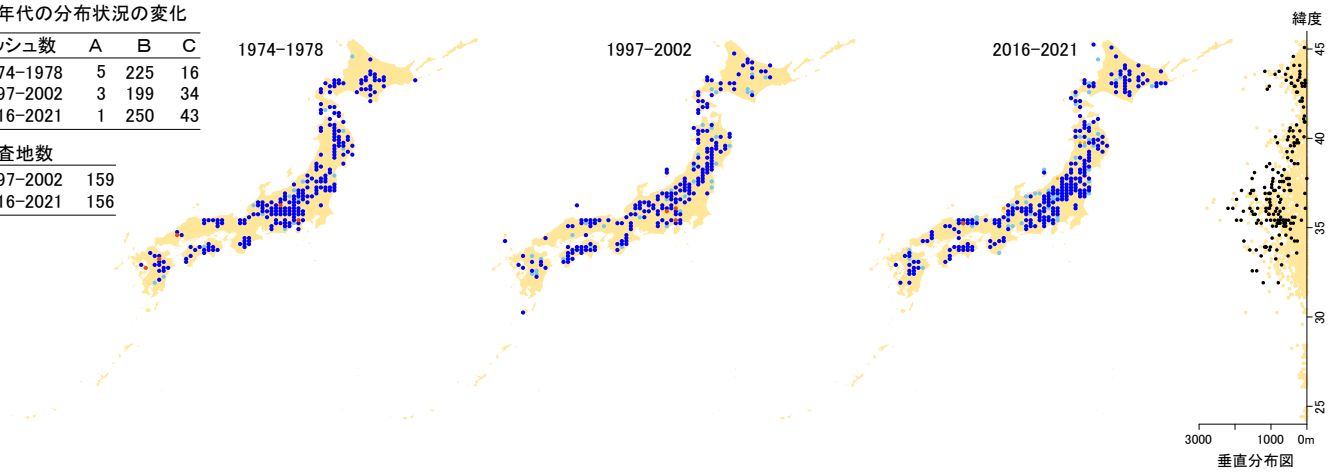
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	225	16
1997–2002	3	199	34
2016–2021	1	250	43

調査地数

1997–2002	159
2016–2021	156



北海道から九州までの山地で夏鳥として繁殖する。主にオオルリ，コルリ，ルリビタキに托卵する。ヒナは翼の裏側に羽根が生えておらず，口内と同じ鮮やかな黄色の皮膚がパッチ状に裸出している。これを宿主に見せて餌乞いをすることでより多くの給餌を引き出していると考えられている(田中 2011)。記録メッシュ数は 2010 年代に大きく増加した。

ホトトギス　分類:カッコウ目カッコウ科　Lesser Cuckoo　*Cuculus poliocephalus*

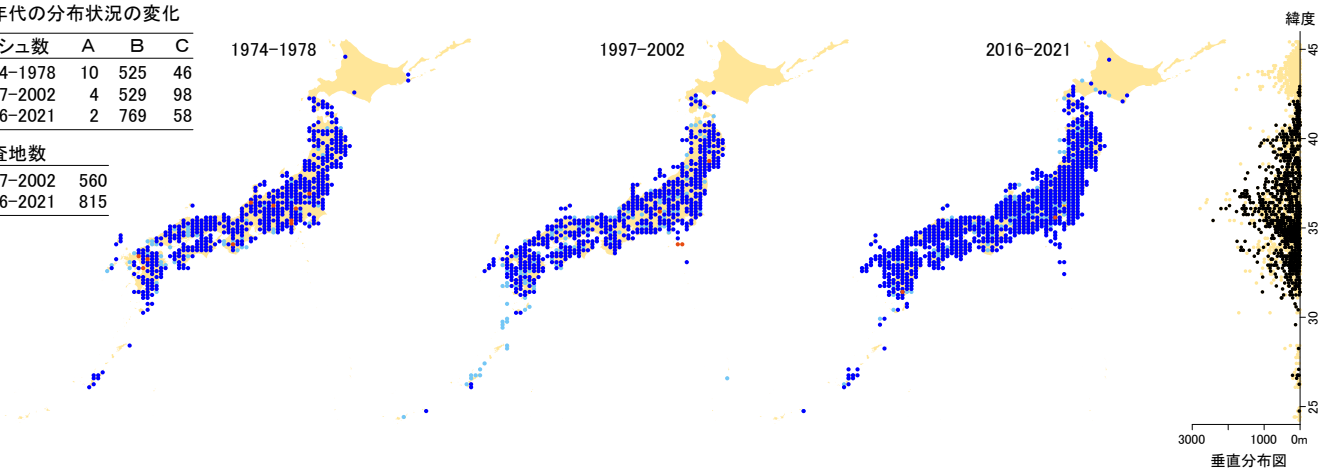
全長:26.1–28.7cm　翼長:150–163mm　ふ蹠長:17–19mm　体重:42–60g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	10	525	46
1997–2002	4	529	98
2016–2021	2	769	58

調査地数	
1997–2002	560
2016–2021	815



主に北海道南部より南の地域で夏鳥として繁殖し，ウグイスに托卵する。記録メッシュ数は 1970 年代以降増加しており，確認された現地調査の地点数も 2010 年代には 560 地点から 815 地点に増加した。その原因としては，人による雑木林が利用がなくなり，藪が増えたことで，藪を好む宿主のウグイスの分布が広がっていることなどが考えられる。反面，シカの影響で，山地部でウグイスが減少している場所があり，そうした場所ではホトトギスの減少もみられている(植田ほか 2019)。

セグロカッコウ　分類:カッコウ目カッコウ科　Indian Cuckoo　*Cuculus micropterus*

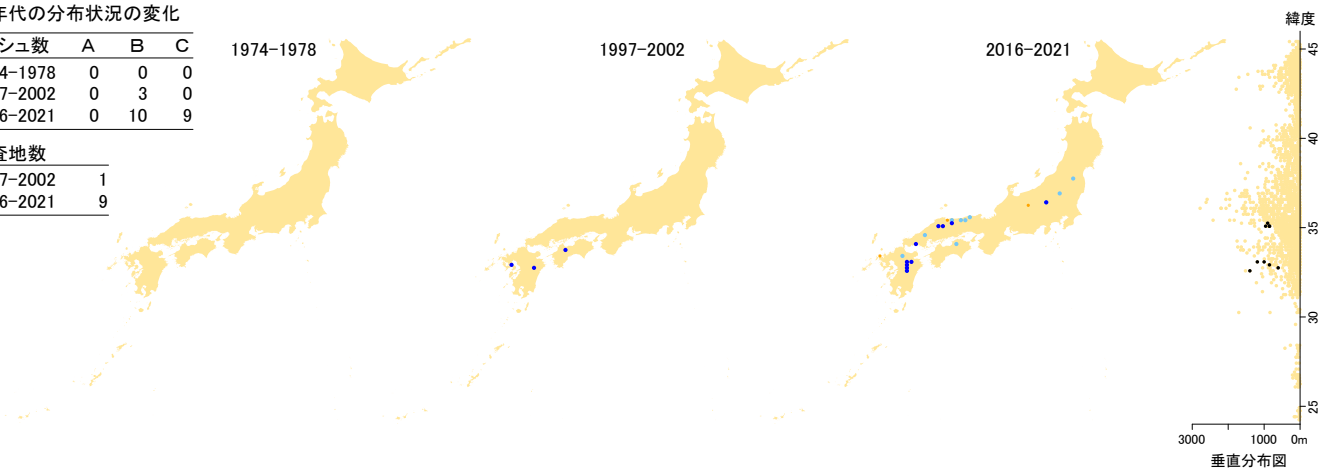
全長:32–33cm　体重:119g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	3	0
2016–2021	0	10	9

調査地数	
1997–2002	1
2016–2021	9



東アジアの中緯度地帯から亜熱帯にかけて繁殖し，日本へは数少ない旅鳥として渡来する。オウチュウの仲間，オナガ，アカモズなどに托卵する。現時点での日本での繁殖確認はないが，2010 年代の調査でも九州山地と中国山地に面的に分布しており，また繁殖期を通して複数個体が見られる場所が増えてきているため，おそらく繁殖しているものと思われる。

ツツドリ　分類:カッコウ目カッコウ科　Oriental Cuckoo　*Cuculus optatus*

全長:30.5–34.5cm　翼長:185–220mm　ふ蹠長:19–21mm　体重:71–107g

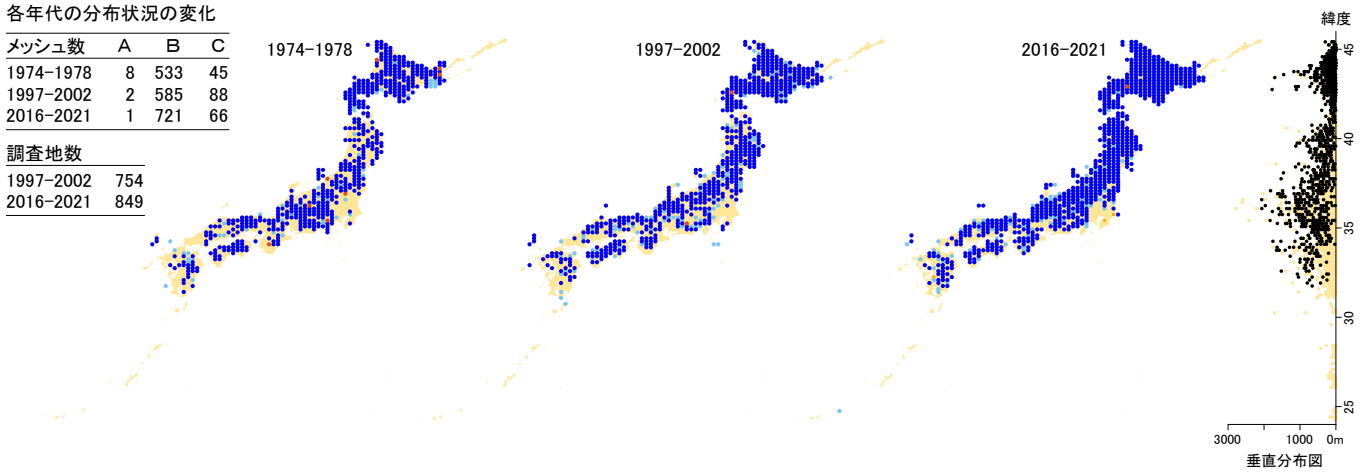
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	533	45
1997–2002	2	585	88
2016–2021	1	721	66

調査地数

1997–2002	754
2016–2021	849



九州以北で夏鳥として繁殖し，センダイムシクイなどのムシクイ類に托卵する。記録メッシュ数は 1970 年代以降増加しており，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，記録できた地点数は，754 地点から 849 地点へと増加していた。全体的には分布が拡大し，増加傾向にあると考えられるが，シカによる下層植生の食害の大きい場所では，ムシクイ類の減少とともにツツドリも減少傾向にある(植田ほか 2019)。

カッコウ　分類:カッコウ目カッコウ科　Common Cuckoo　*Cuculus canorus*

全長:32.5–36.5cm　翼長:200–230mm　ふ蹠長:19–22mm　体重:95–145g

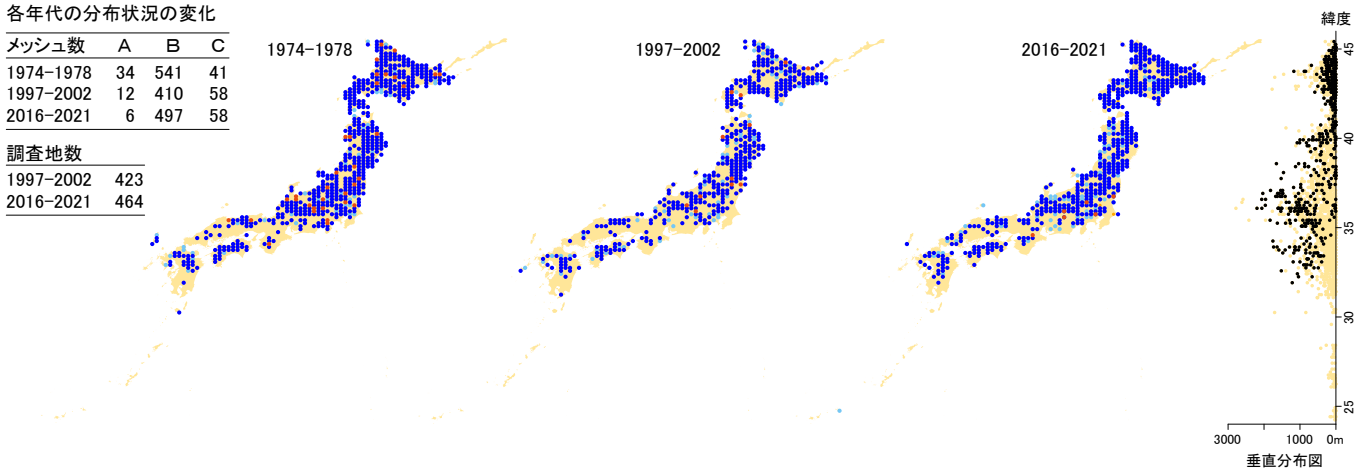
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	34	541	41
1997–2002	12	410	58
2016–2021	6	497	58

調査地数

1997–2002	423
2016–2021	464



九州以北で夏鳥として農耕地を含む草原や林縁などの開けた環境で繁殖し，ヨシキリ類，モズ類，ホオジロ類，オナガなどに托卵する。西日本では比較的標高の高い高原に生息するが，東日本では平地にも生息する。1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数は減少したが，2010 年代にかけては回復傾向にあり，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，423 地点から 464 地点へと増加していた。

ヨタカ　分類:ヨタカ目ヨタカ科　Grey Nightjar　*Caprimulgus indicus*

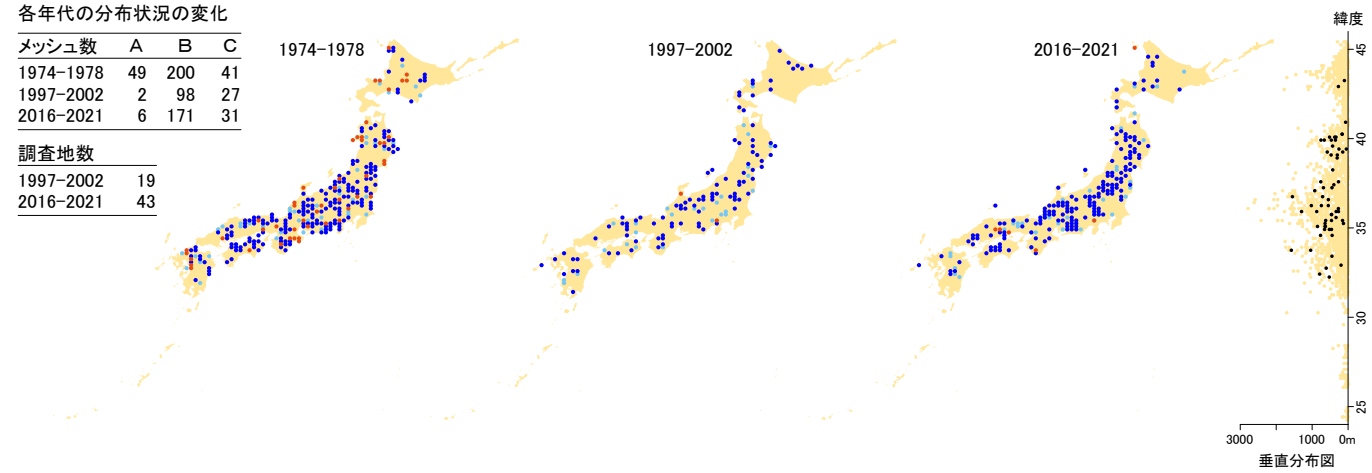
全長:29cm　翼長:200–225mm　ふ蹠長:15–18mm　体重:73–113g

環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	49	200	41
1997–2002	2	98	27
2016–2021	6	171	31

調査地数	
1997–2002	19
2016–2021	43



九州以北で夏鳥として繁殖する。1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数が減少し，第 3 次レッドリスト(2007 年)では絶滅危惧 II 類に選定された。2010 年代にかけては記録メッシュ数が増加し，比較可能な現地調査の記録を見ても，19 地点から 43 地点へと増加していた。回復傾向にあるものと考えられ，レッドリスト 2014 では準絶滅危惧になっているが，夜行性の鳥のため，記録できるかどうかは日の出前後に調査がされたかどうかに影響されるため，評価には注意が必要である。

ハリオアマツバメ　分類:アマツバメ目アマツバメ科　White-throated Needletail　*Hirundapus caudacutus*

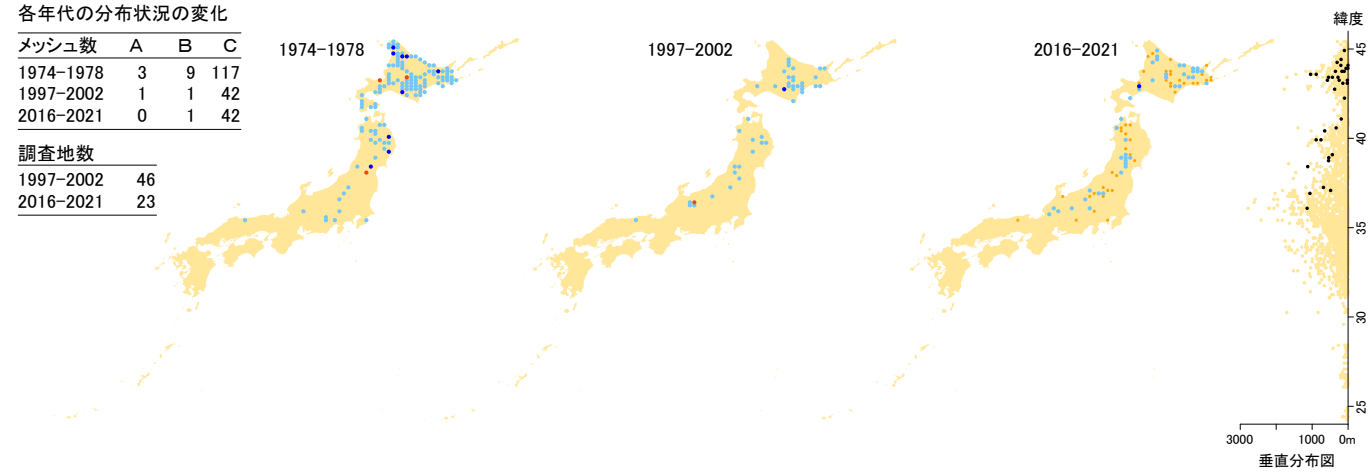
全長:20.0–21.5cm　翼長:200–210mm　ふ蹠長:17–19mm　体重:106–141g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	9	117
1997–2002	1	1	42
2016–2021	0	1	42

調査地数	
1997–2002	46
2016–2021	23



本州中部以北で夏鳥として繁殖する。1970 年代以降，記録メッシュ数は，全国的に急激に減少している。1990 年代と 2010 年代ではメッシュ数に違いはなかったが，ほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録は，46 地点から 23 地点へと減少しており，減少は続いていると考えられる。アマツバメ類，ツバメ類などハリオアマツバメ以外の飛翔昆虫を捕食する鳥も減少していることから，こうした昆虫が減ったことが，減少の原因になっている可能性がある(158 ページ参照)。

アマツバメ　分類:アマツバメ目アマツバメ科　Pacific Swift　*Apus pacificus*

全長:17.9–20.5cm　翼長:170–195mm　ふ蹠長:10–13mm　体重:39–56g

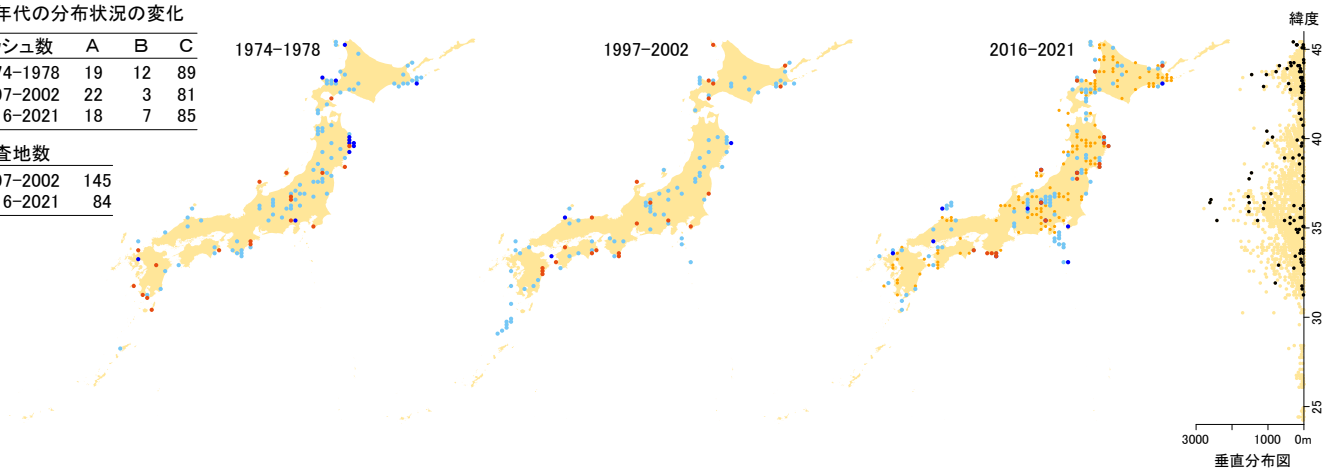
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	19	12	89
1997–2002	22	3	81
2016–2021	18	7	85

調査地数

1997–2002	145
2016–2021	84



全国の海岸や高山の崖で夏鳥として繁殖する。1970 年代以降，記録メッシュ数は，減少している。1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，145 地点から 84 地点へと減少していた。アマツバメ類，ツバメ類など飛翔昆虫を捕食する鳥が軒並み減少していることから，こうした昆虫が減ったことが，減少の原因になっていることが考えられる。

ヒメアマツバメ　分類:アマツバメ目アマツバメ科　House Swift　*Apus nipalensis*

全長:15cm　翼長:127±4mm　体重:28.8±2.5g

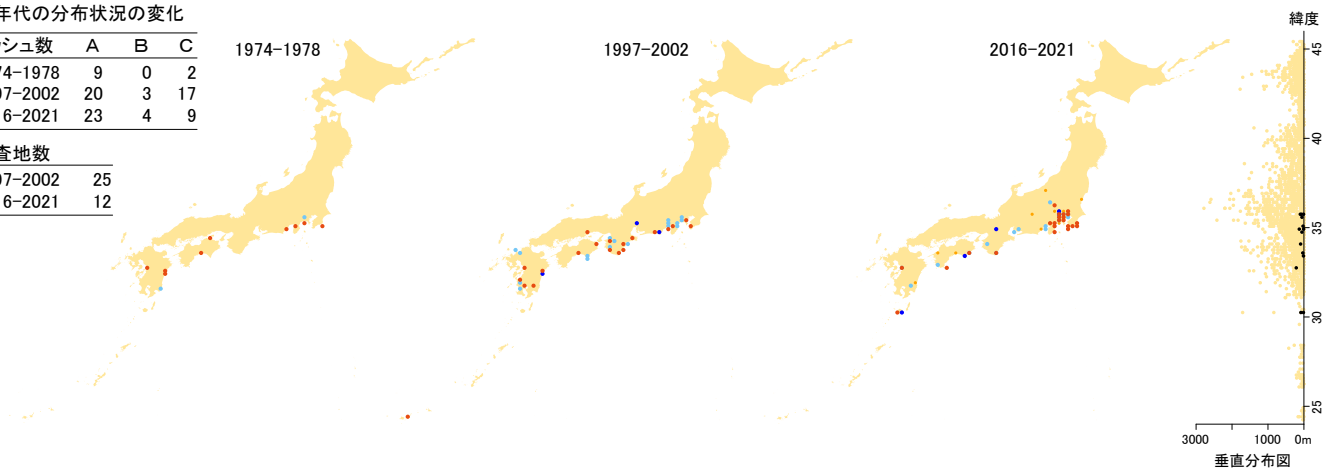
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	9	0	2
1997–2002	20	3	17
2016–2021	23	4	9

調査地数

1997–2002	25
2016–2021	12



関東以南の太平洋側の地域で留鳥として繁殖する。1970 年代から 1990 年代にかけては分布を拡大していたが，その後は縮小傾向にあるようで，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，25 地点から 12 地点へと減少していた。

タゲリ　分類:チドリ目チドリ科　Northern Lapwing　*Vanellus vanellus*

全長:29.8–33.0cm　翼長:212–236mm　ふ蹠長:41–50mm　体重:188–270g

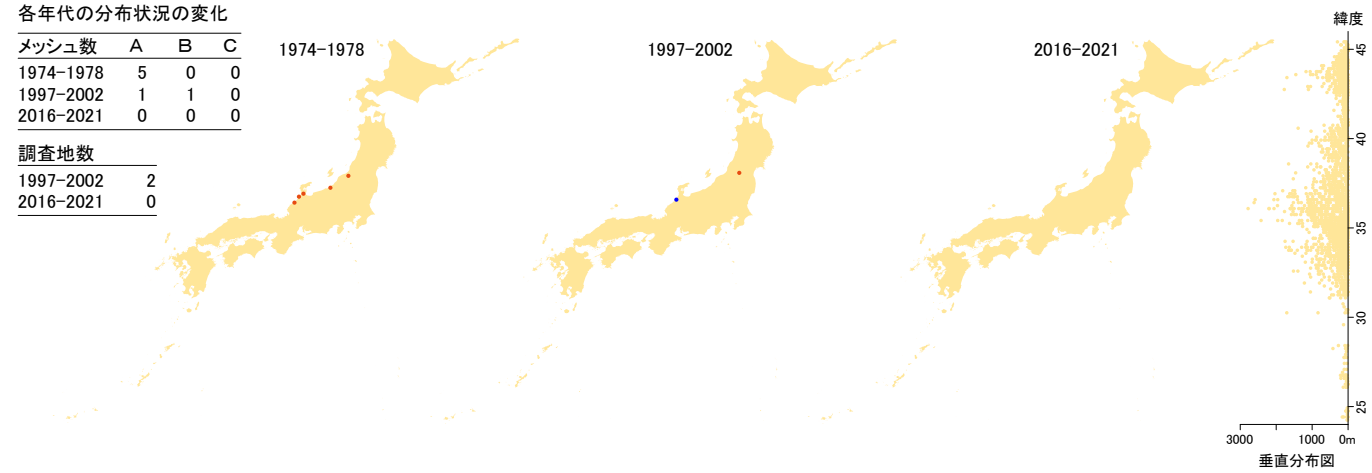
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	0	0
1997–2002	1	1	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	0



主に本州中部以南で冬鳥。北陸など日本海側の地域で繁殖記録があり，主にユーラシア大陸中緯度地域で繁殖する。1970 年代と 1990 年代では数か所の繁殖記録があったが，2010 年代には記録されなかった。

ケリ　分類:チドリ目チドリ科　Grey-headed Lapwing　*Vanellus cinereus*

全長:♂34.2cm ♀33.6cm　翼長:♂236.9mm ♀235.5mm　ふ蹠長:♂76.9mm ♀76.3mm　体重:♂280.1g ♀266.6g

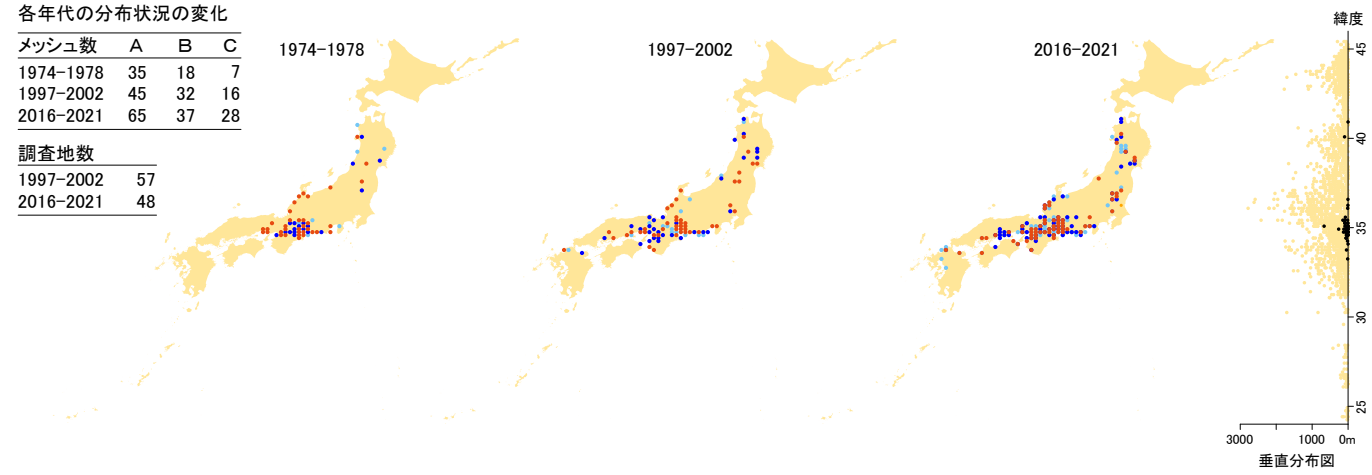
環境省レッドリスト:　情報不足

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	35	18	7
1997–2002	45	32	16
2016–2021	65	37	28

調査地数

1997–2002	57
2016–2021	48



本州以西の水田を含む浅い湿地で繁殖する。繁殖期は捕食者などに対して激しい防衛行動をとり，なわばりの隣接する個体が協同で防衛することもある。記録メッシュ数は 1970 年代以降増加しているが，個体数が減少している地域もある。田起こしや田植えなどの農作業が繁殖成績に大きく影響することが知られており（Takahashi & Ohkawara 2007），人間活動が与える影響にも注意する必要がある。

イカルチドリ　分類：チドリ目チドリ科　Long-billed Plover　*Charadrius placidus*

全長：19.7–22.2cm　翼長：♂142.6mm ♀144.2mm　ふ蹠長：♂32.4mm ♀32.5mm　体重：♂63.6g ♀68.1g

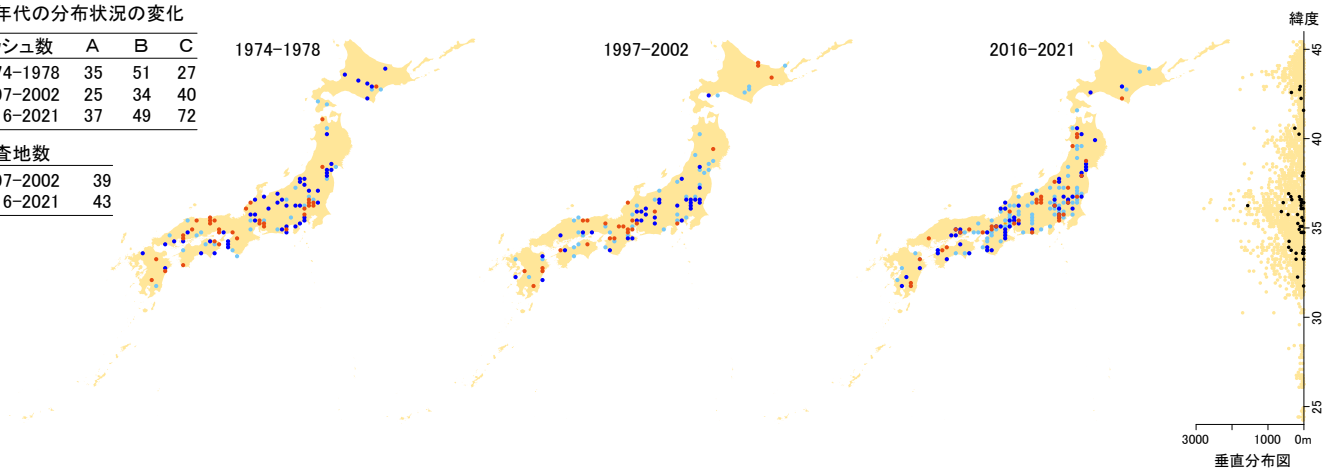
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	35	51	27
1997–2002	25	34	40
2016–2021	37	49	72

調査地数

1997–2002	39
2016–2021	43



全国の河川の河原などで留鳥として繁殖する。2010 年代には記録メッシュ数がやや増加傾向にあるが，イカルチドリが営巣する河原でのキャンプやバーベキューなどのレジャー活動で，繁殖の失敗が増えていることが知られており（内田 1992），注意が必要である。

コチドリ　分類：チドリ目チドリ科　Little Ringed Plover　*Charadrius dubius*

全長：14–17cm　翼長：♂110.1mm ♀110.6mm　ふ蹠長：♂25.0mm ♀25.0mm　体重：♂36.8g ♀38.4g

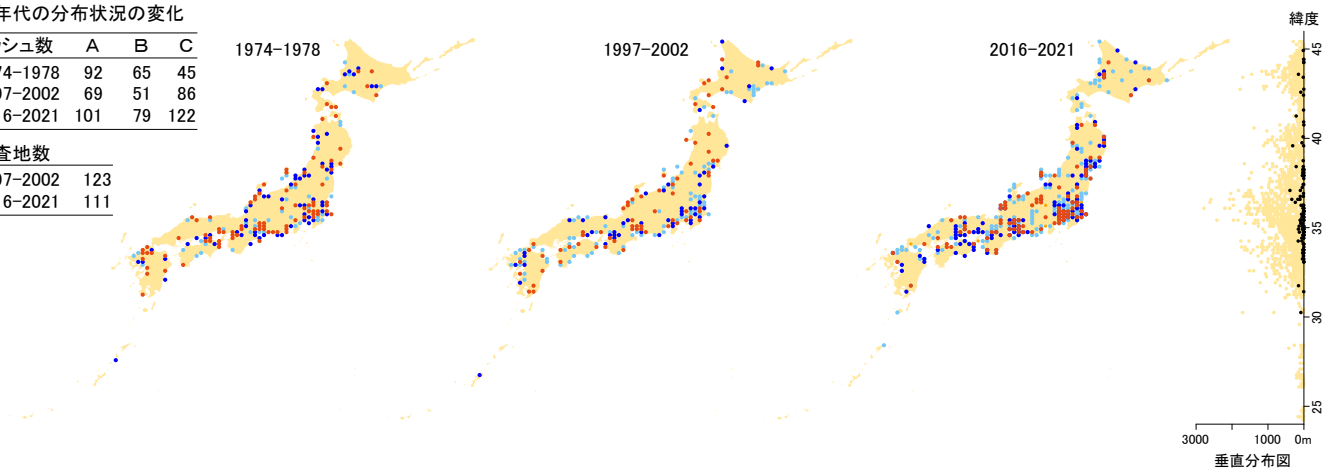
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	92	65	45
1997–2002	69	51	86
2016–2021	101	79	122

調査地数

1997–2002	123
2016–2021	111



夏鳥として全国で繁殖し，一部越冬するものもいる。砂浜，河原，埋め立て地などの裸地で営巣するが，駐車場や畑など，ほかのチドリ類と比べて生息地の幅が広い。そのためか，記録メッシュ数も大きく増加している。GPS を使った追跡調査の結果から，越冬期は繁殖期と異なり，水田を主要な生息地としていることがわかってきた（Kasahara et al. 2020）。

シロチドリ　分類:チドリ目チドリ科　Kentish Plover　*Charadrius alexandrinus*

全長:15.0–17.5cm　翼長:102–123mm　ふ蹠長:23–30mm　体重:32–56g

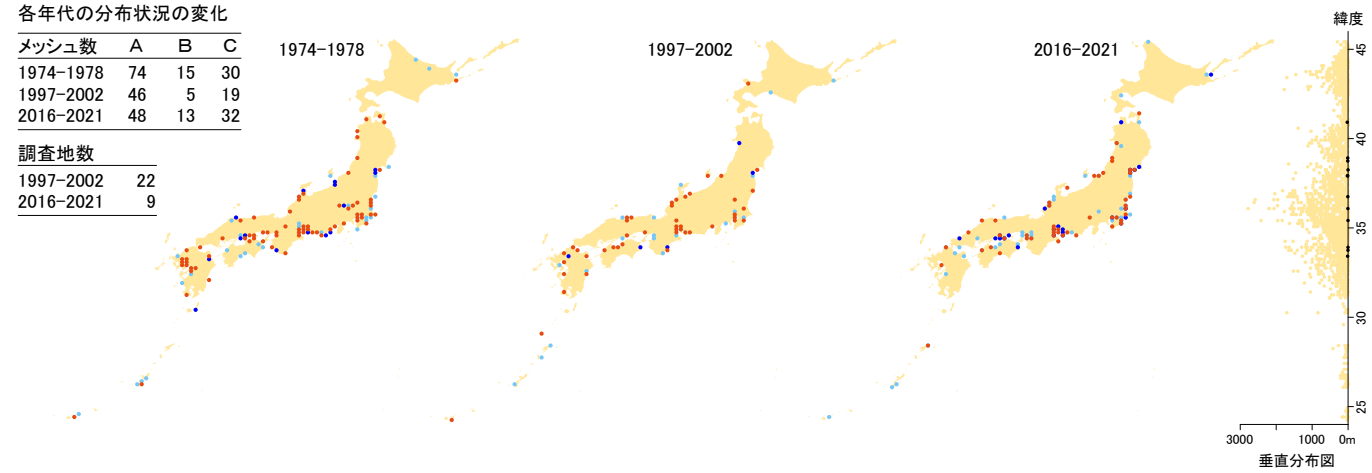
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	74	15	30
1997–2002	46	5	19
2016–2021	48	13	32

調査地数

1997–2002	22
2016–2021	9



全国の海岸や河川で繁殖する。1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数が減少し，2014 年には環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に選定された。2010 年代の記録メッシュ数はやや増加しているが，環境省モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査などの情報収集体制が充実したためと考えられ，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録は 22 地点から 9 地点へと減少していた。また，同調査の越冬期や渡り期の結果でも減少が続いている。

セイタカシギ　分類:チドリ目セイタカシギ科　Black-winged Stilt　*Himantopus himantopus*

嘴峰長:55–69mm　翼長:220–253mm　ふ蹠長:112–145mm　体重:160–200g

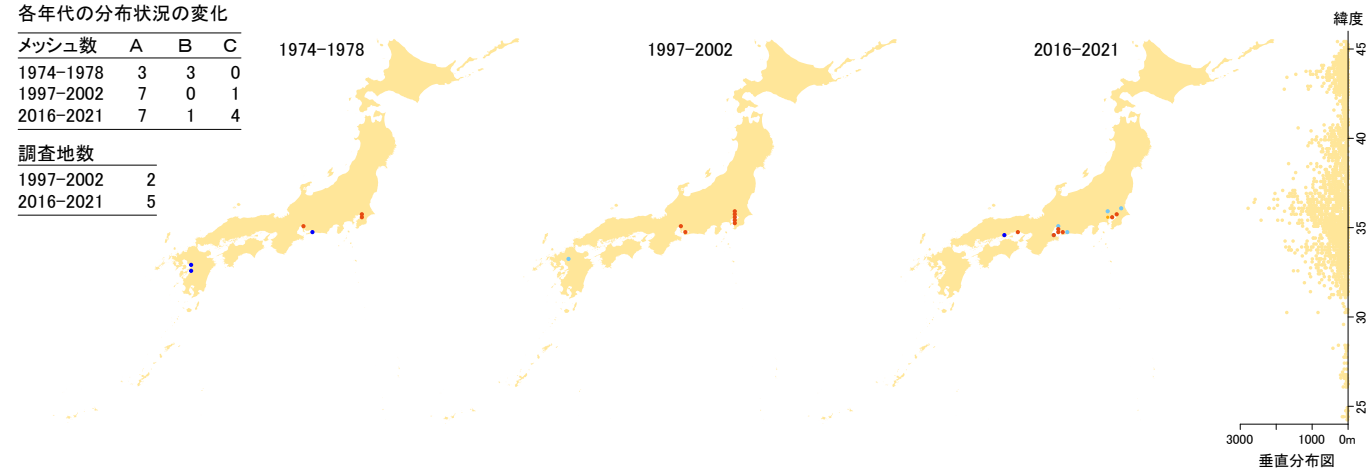
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	3	0
1997–2002	7	0	1
2016–2021	7	1	4

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	5



東京都，愛知県などで局所的に繁殖し，全国的には旅鳥として渡来する。ユーラシア大陸，北アメリカ大陸の中緯度地域で繁殖する。環境省モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査では，旅鳥として渡来する数は増加していることが明らかになっている。繁殖数は局所的に不安定に繁殖している種であるため，その動向については明らかでない。

ヤマシギ　分類:チドリ目シギ科　Eurasian Woodcock　*Scolopax rusticola*

全長:32.0–34.5cm　翼長 166–196mm　ふ蹠長:34.4–39.5mm　体重:271–375g

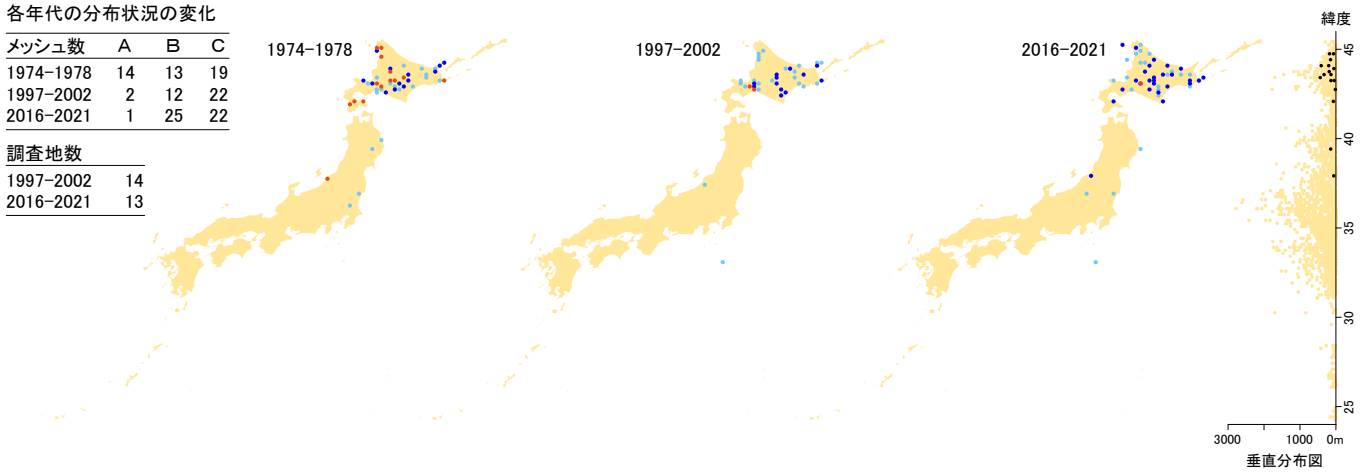
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	14	13	19
1997–2002	2	12	22
2016–2021	1	25	22

調査地数

1997–2002	14
2016–2021	13



本州中部以北，主に北海道で繁殖する。ほかの地域では冬鳥。森林に生息し，地上に営巣する。記録メッシュ数は 1990 年代に比べて増加しているが，夜行性の鳥で情報収集の難しい種であるため，その動向は明らかでない。狩猟個体数は急減しており，個体数が減少している可能性もある（小田谷　2014）。

アマミヤマシギ　分類:チドリ目シギ科　Amami Woodcock　*Scolopax mira*

全長:約　36cm　翼長:190–220mm　ふ蹠長:44–52mm　体重:400–500g

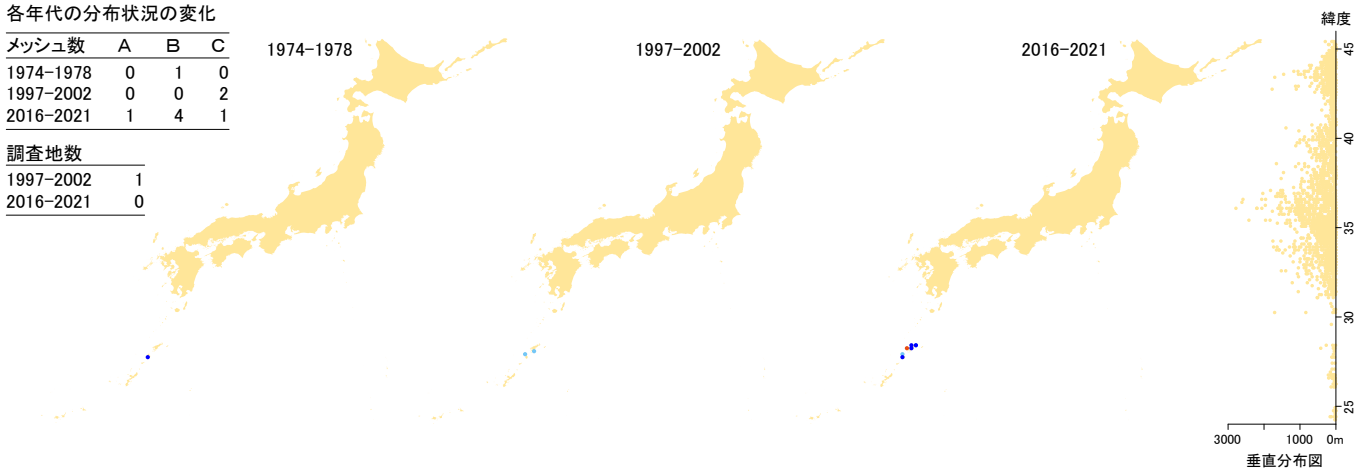
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	1	0
1997–2002	0	0	2
2016–2021	1	4	1

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	0



奄美諸島，沖縄島，慶良間諸島に分布し，なかでも奄美大島と加計呂麻島，徳之島には個体数が多く，留鳥として繁殖している。それ以外の島での繁殖状況は明らかでない。マングースやノネコによる捕食で個体数が減少し，分布が縮小していたが，その対策に伴い回復しつつあると考えられている（石田　2015）。

オオジシギ　分類:チドリ目シギ科　Latham's Snipe　*Gallinago hardwickii*

全長:28–33cm　翼長:♂148.7mm ♀149.2mm　ふ蹠長:♂36.4mm ♀38.3mm　体重:♂171.35g♀186.17g

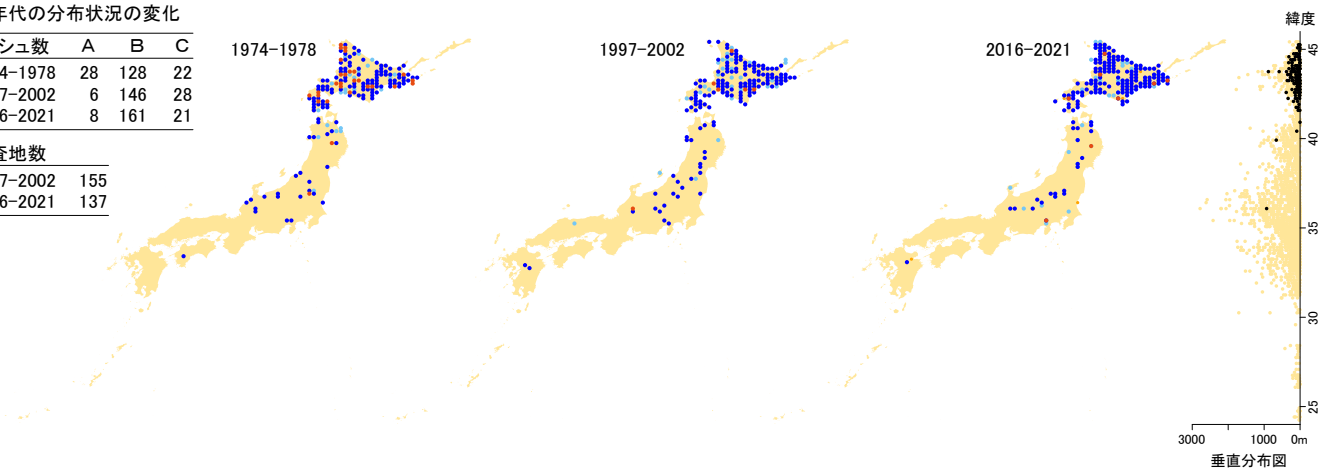
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	28	128	22
1997–2002	6	146	28
2016–2021	8	161	21

調査地数

1997–2002	155
2016–2021	137



主に本州中部以北で夏鳥として繁殖する。本州では 1970 年代以降分布が縮小しているが，北海道では分布に大きな変化は見られない。しかし，個体数は減少していることが明らかにされている(日本野鳥の会 online)。開発による生息地の減少や渡りの中継地の圃場整備による採食に適した環境の減少などが原因として考えられる。

アカアシシギ　分類:チドリ目シギ科　Common Redshank　*Tringa totanus*

全長:25.4–29.2cm　翼長:150–165mm　ふ蹠長:43–52mm　体重:106–158g

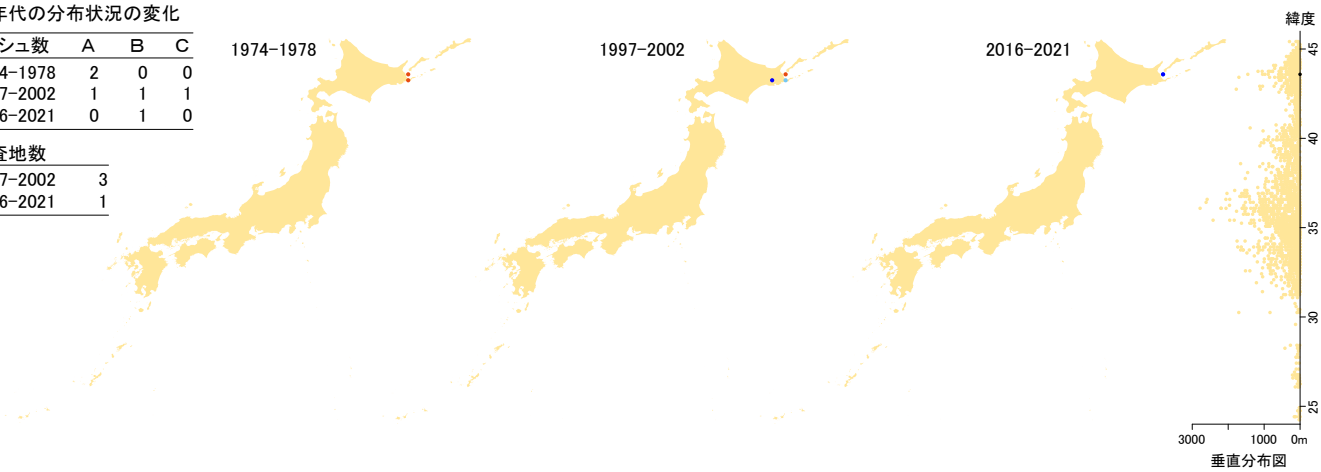
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	0	0
1997–2002	1	1	1
2016–2021	0	1	0

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	1



夏鳥として，北海道東部で局所的に繁殖する。それ以外の地域では旅鳥で，琉球諸島では越冬する。局所的に繁殖する状況に変化はないが，環境省モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査の結果からは，旅鳥として渡来する個体数は増加傾向にあることが明らかになっている。

イソシギ　分類:チドリ目シギ科　Common Sandpiper　*Actitis hypoleucos*

全長:17.8–21.0cm　翼長:100–118mm　ふ蹠長:22–25mm　体重:45–94g

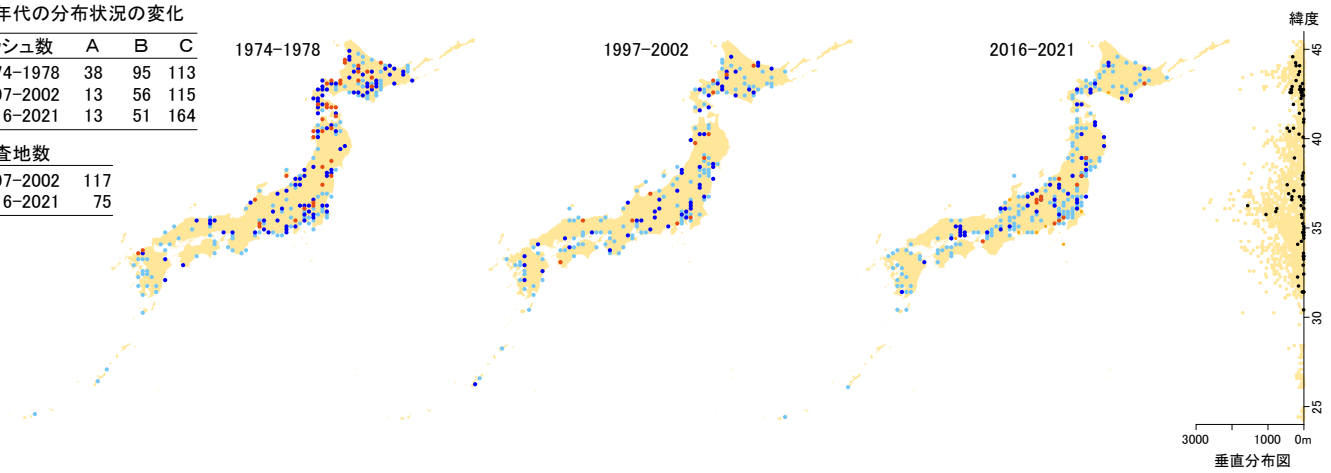
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	38	95	113
1997–2002	13	56	115
2016–2021	13	51	164

調査地数

1997–2002	117
2016–2021	75



全国で留鳥として繁殖する。東北以北のものは南へ移動して越冬する。1970 年代から 1990 年代にかけ記録メッシュ数が減少し，2010 年代にかけてはやや増加しているが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，117 地点から 75 地点へと減少しており，減少が続いている可能性がある。

タマシギ　分類:チドリ目タマシギ科　Greater Painted-snipe　*Rostratula benghalensis*

全長:22.5–25.0cm　翼長:♂115–128mm ♀123–134mm　ふ蹠長:♂38.7–42.5mm ♀40.8–45.1mm　体重:♂131–155g ♀151–242g

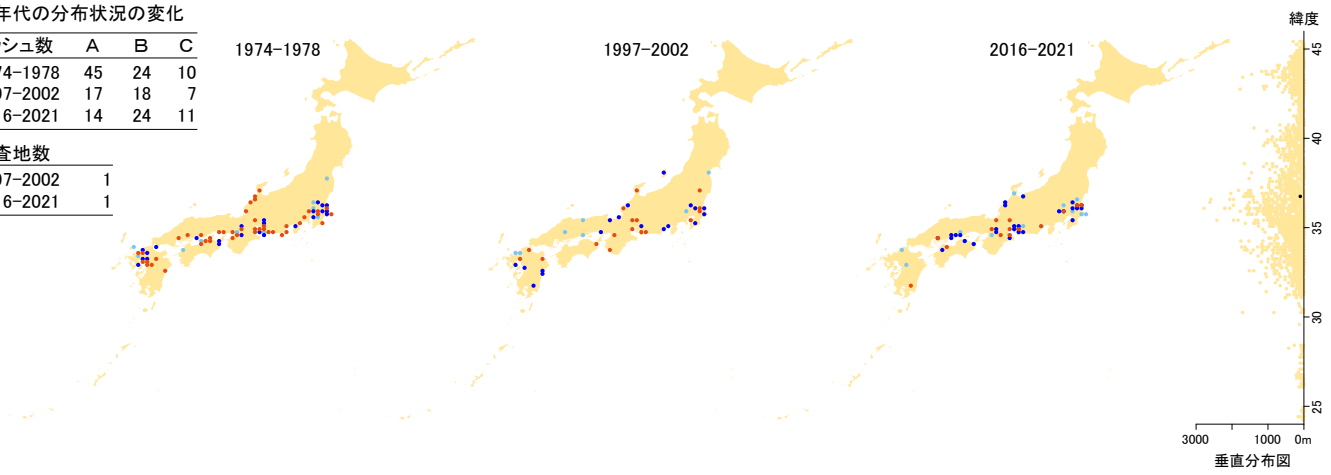
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	45	24	10
1997–2002	17	18	7
2016–2021	14	24	11

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	1



主に関東以南の水田などの湿地で繁殖する。雌雄の役割が逆転しており，雌がなわばりをつくり，雄が育雛をする。1970 年代から 1990 年代にかけて，記録メッシュ数は 79 メッシュから 42 メッシュに減少していた。こうした減少には，圃場の乾燥化と湛水休耕田の減少が関係していると考えられている(Katayama et al. 2020)。

ミフウズラ　分類：チドリ目ミフウズラ科　Barred Buttonquail　*Turnix suscitator*

嘴峰長：11–12mm　翼長：♂73–78mm ♀80–83mm　ふ蹠長：♂22–24mm ♀25mm　尾長：♂26–30mm ♀30–32mm

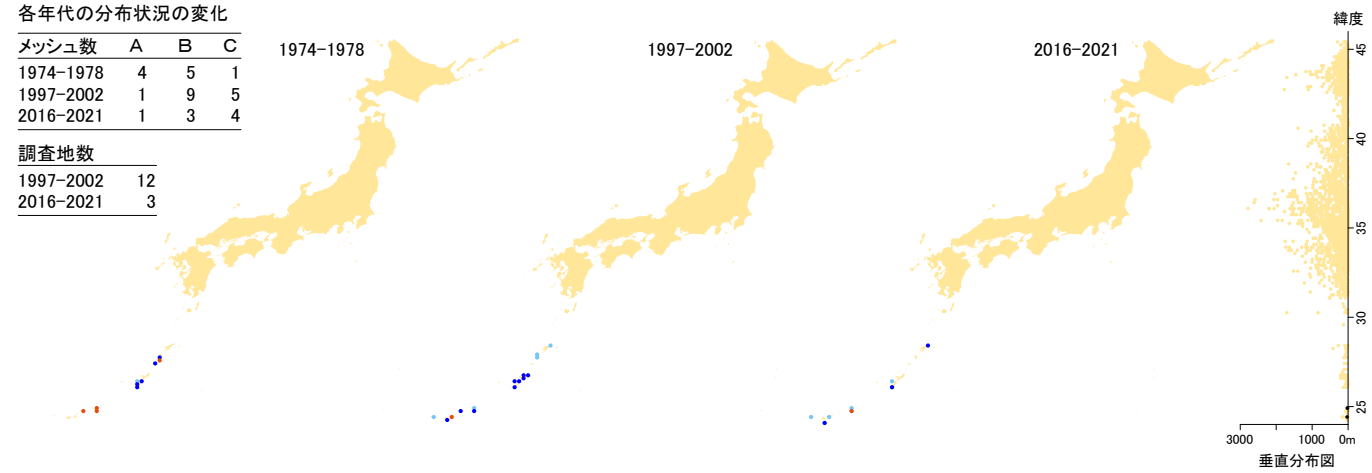
環境省レッドリスト：—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	4	5	1
1997–2002	1	9	5
2016–2021	1	3	4

調査地数

1997–2002	12
2016–2021	3



南西諸島で留鳥として繁殖する。国外にはインド，ネパールから東南アジアにかけて広く分布する。一妻多夫で繁殖し，雌の方が鮮やかな羽色をしていてさえずりも雌が行なう。雄が抱卵や育雛を行なう。2010 年代には記録メッシュ数は減少し，現地調査の記録地点数も減少していたが，局所的に分布する種のためその増減は明らかでない。

ツバメチドリ　分類：チドリ目ツバメチドリ科　Oriental Pratincole　*Glareola maldivarum*

全長：24.6–27.9cm　翼長：173–191mm　ふ蹠長：30–36mm　体重：113–186g

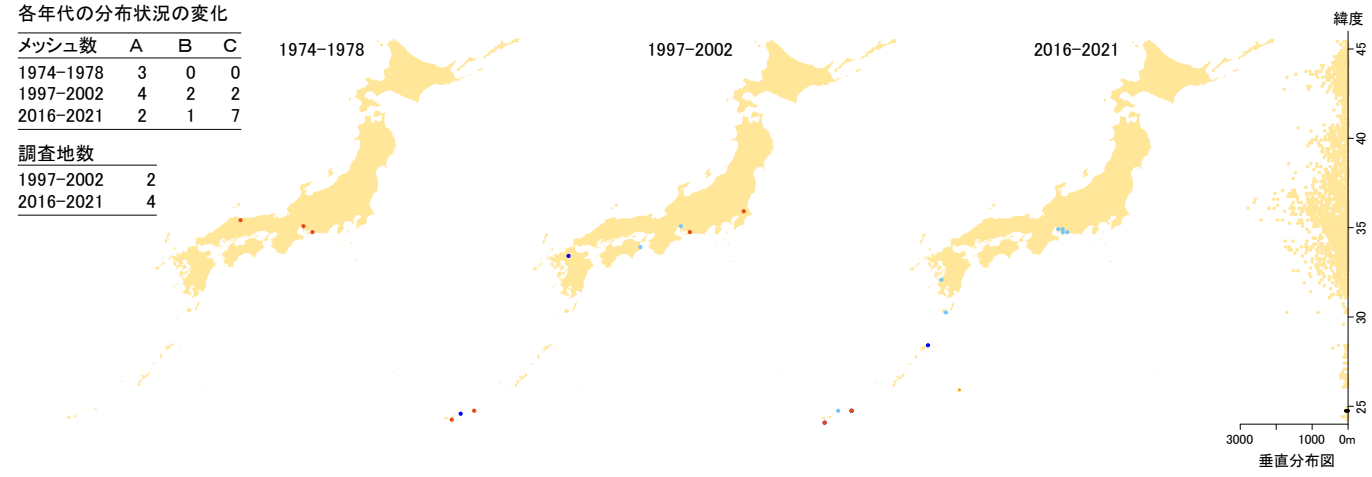
環境省レッドリスト：絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	0	0
1997–2002	4	2	2
2016–2021	2	1	7

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	4



主に旅鳥で，南西諸島を中心に繁殖し，関東以南で局所的な繁殖記録がある。局地的に繁殖し，1970 年代および 1990 年代では本州での繁殖記録があったが，2010 年代では観察記録のみで，繁殖記録は南西諸島の記録のみだった。

クロアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Brown Noddy　*Anous stolidus*

嘴峰長:37–41mm　翼長:260–283mm　ふ蹠長:22–25mm　尾長:145–165mm

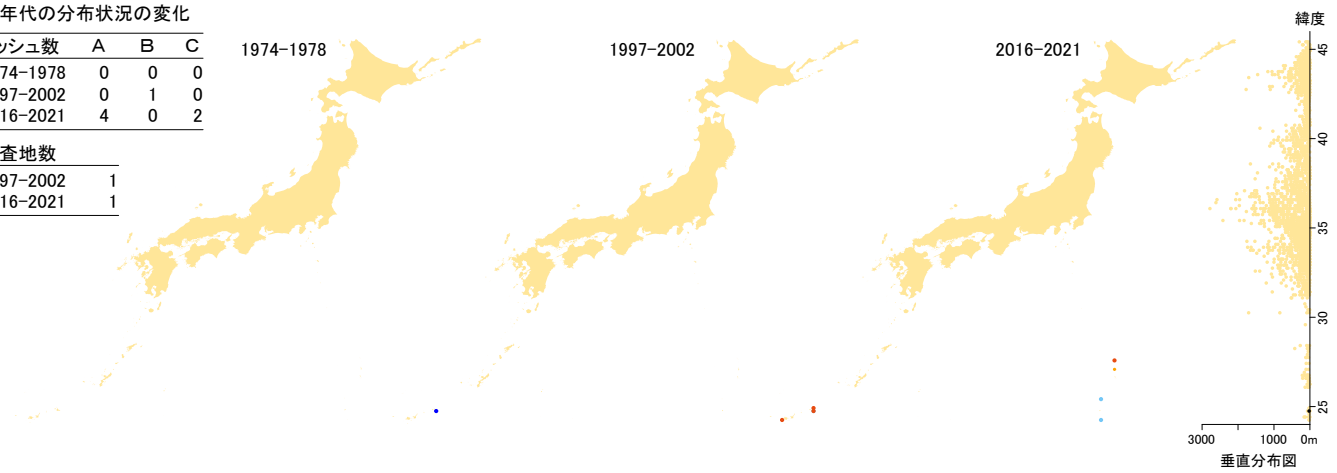
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	0
2016–2021	4	0	2

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	1



先島諸島，小笠原群島，硫黄列島，南鳥島などの亜熱帯域の島嶼で夏鳥として繁殖する。主に魚類をとる。2010 年代では記録メッシュ数が増えているが，海鳥観察クルーズによる硫黄列島からの情報があつまり，またモニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったことが影響していると考えられ，2010 年代になって分布するようになったことを示すわけではない。

ヒメクロアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Black Noddy　*Anous minutus*

嘴峰長:40–46mm　翼長:213–231mm　ふ蹠長:20–21mm　尾長:115–124mm

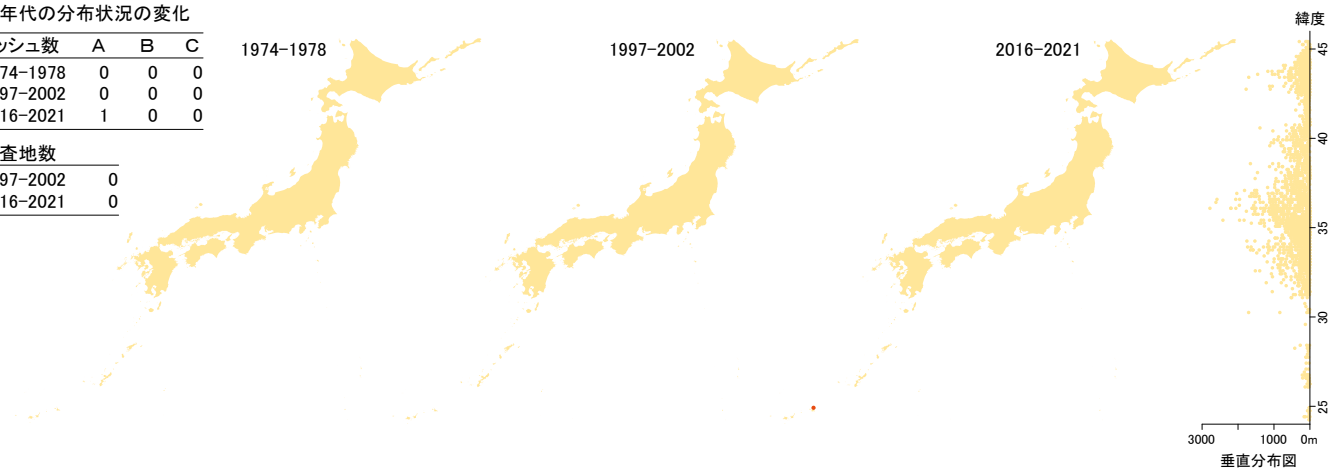
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



先島諸島，硫黄列島で夏鳥として繁殖する。主に魚類をとる。国内での最初の繁殖は 2000 年の硫黄島で(渡辺・時田 2003)，続いて，南西諸島でも確認され，繁殖分布が近年になって広がったと考えられている(水谷ほか 2019)。2010 年代の調査でも 1 メッシュで記録があった。

ウミネコ　分類:チドリ目カモメ科　Black-tailed Gull　*Larus crassirostris*

全長:44–47cm　翼長:♂390.1mm ♀373.9mm　ふ蹠長:♂57.62mm ♀53.19mm　体重:♂641.2g ♀537.5g

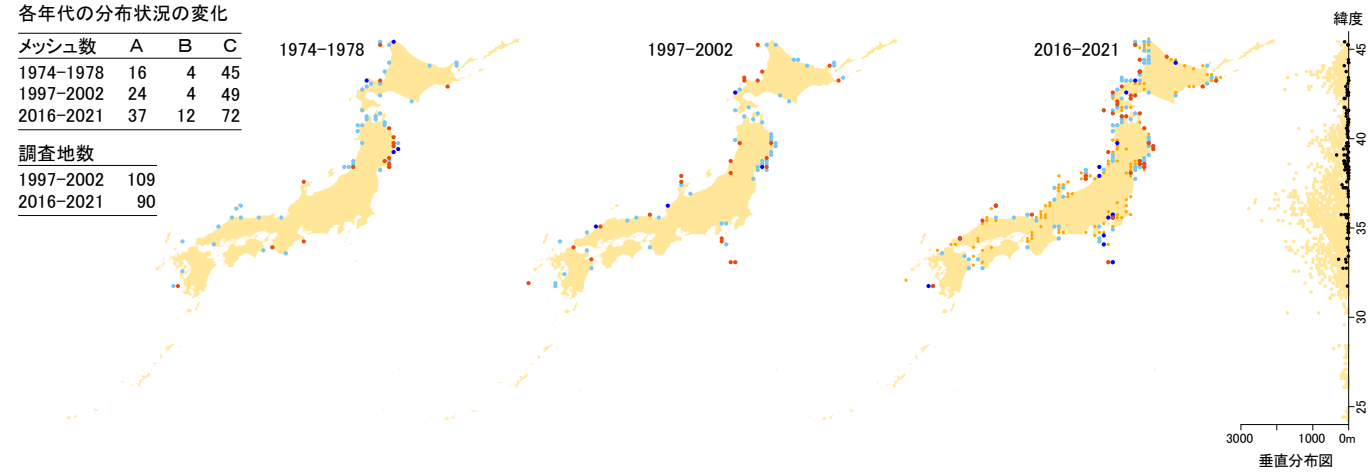
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	16	4	45
1997–2002	24	4	49
2016–2021	37	12	72

調査地数

1997–2002	109
2016–2021	90



日本沿岸で留鳥として繁殖する。海岸の崖や急斜面で集団繁殖地を形成して繁殖することが多いが，単独や小集団で繁殖することもあり，東京ではビルの屋上でも繁殖している。分布は 1970 年代以降拡大傾向にあるが，大規模な集団繁殖地では 1980 年と比べ 72%減少しているという研究もあり(Senzaki et al. 2019)，現地調査で記録された総個体数も 1990 年代と比べ，5,562 羽から 2,048 羽へと減少していた。したがって，分布は広がっているものの個体数は減少していると考えられる。

オオセグロカモメ　分類:チドリ目カモメ科　Slaty-backed Gull　*Larus schistisagus*

全長:55–67cm　翼長:♂447±14mm ♀422±9mm　ふ蹠長 57–71mm　体重:♂1350±110g ♀1110±110g

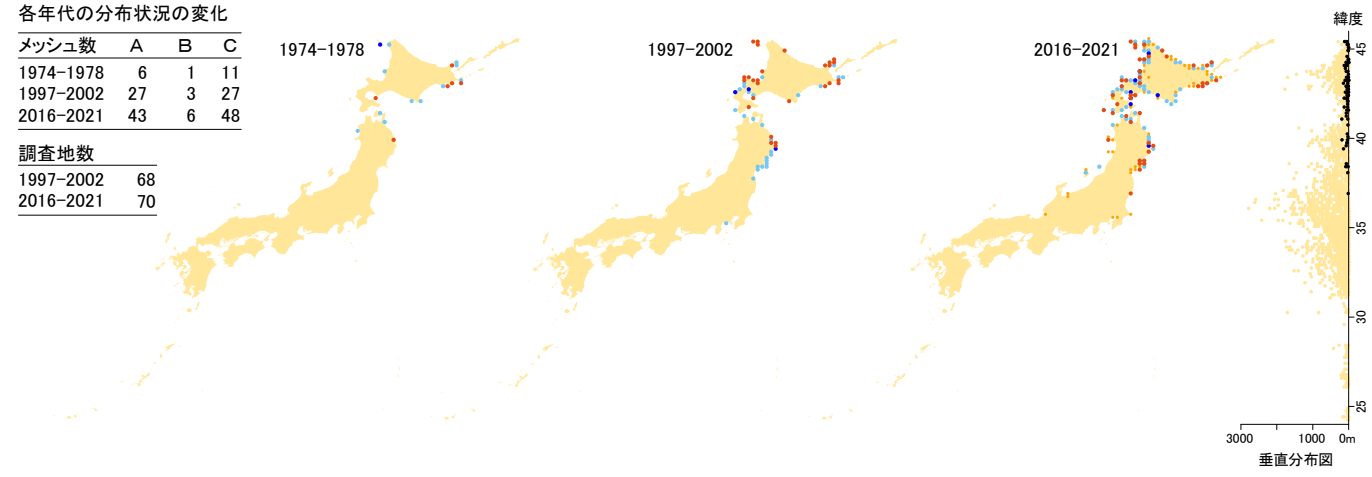
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	1	11
1997–2002	27	3	27
2016–2021	43	6	48

調査地数

1997–2002	68
2016–2021	70



東北地方から北海道の沿岸で留鳥として繁殖する。海岸の岩礁や崖で集団営巣し，建物の屋根やビルの屋上など人工構造物にも営巣する。分布は 1970 年代以降，拡大傾向にあるが，大規模な集団繁殖地では 1980 年と比べ 65%減少しているという研究もあり(Senzaki et al. 2019)，また，今回の現地調査で記録された総個体数も 1990 年代と比べ，3,470 羽から 780 羽に大きく減少していた。したがって，分布は広がっているものの個体数は減少している可能性がある。

オオアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Greater Crested Tern　*Sterna bergii*

嘴峰長:56–65mm　翼長:332–338mm　ふ蹠長:27–30mm　尾長:162–189mm

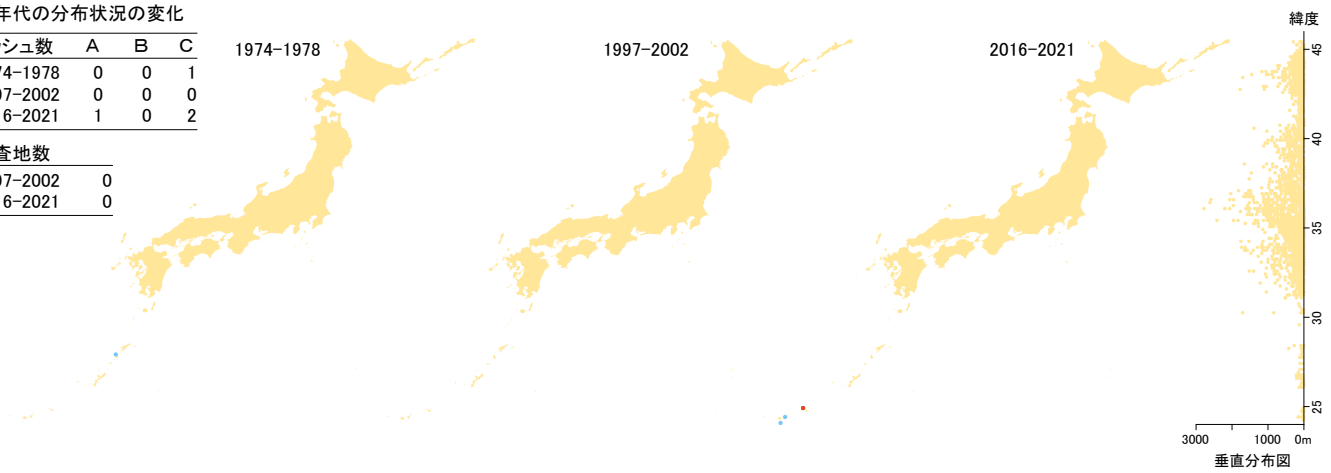
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	1
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	2

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



小笠原群島と尖閣列島でこれまでに繁殖記録がある。主に魚類，イカ，甲殻類を捕食する。2010 年代では先島諸島で繁殖および生息記録があった。

コアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Little Tern　*Sterna albifrons*

全長:24cm　翼長:♂168–187mm ♀167–183mm　ふ蹠長:♂15.6–17.8mm ♀15.1–17.8mm　体重:♂50–63g ♀44–68g

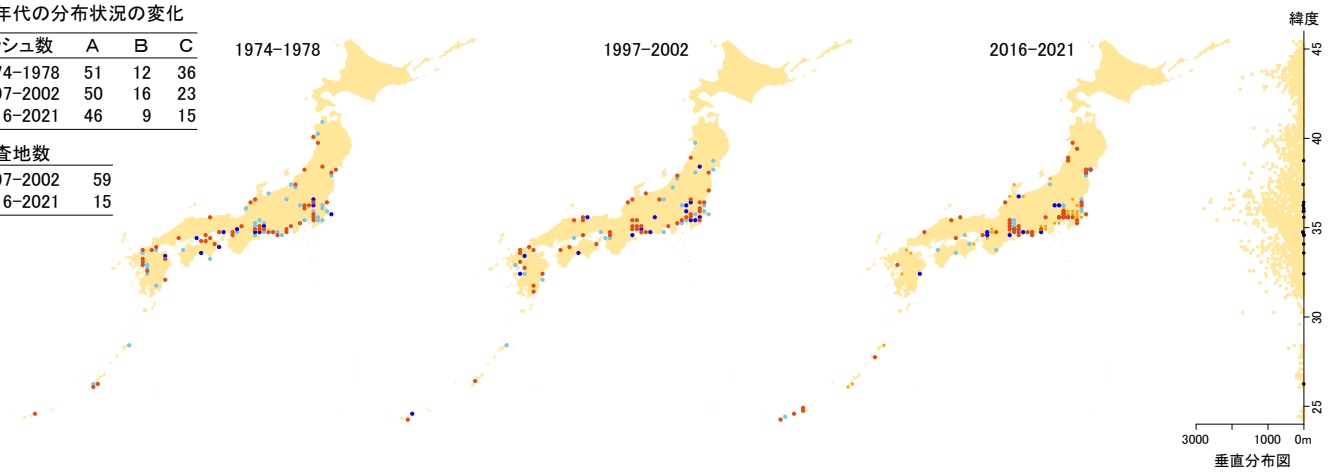
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	51	12	36
1997–2002	50	16	23
2016–2021	46	9	15

調査地数

1997–2002	59
2016–2021	15



本州以南で夏鳥として，砂浜，河原，埋め立て地などで集団で繁殖する。記録メッシュ数は 1970 年代以降減少しており，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，59 地点から 15 地点へと減少しており，最も減少率の大きい種だった。造成工事や遷移などにともなう営巣地の減少，カラス類やチョウゲンボウなどによる捕食の増加，人為的撹乱などがその原因として考えられており，各地で保護活動が行われている。

マミジロアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Bridled Tern　*Sterna anaethetus*

嘴峰長:39–44mm　翼長:243–275mm　ふ蹠長:17–22mm　尾長:124–190mm

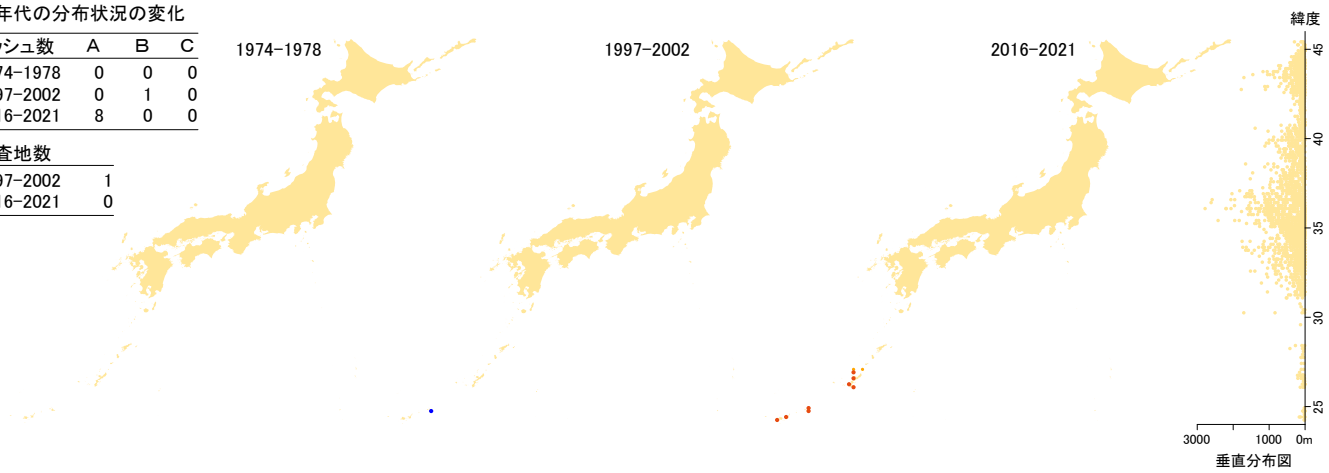
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	0
2016–2021	8	0	0

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	0



南西諸島で夏鳥として繁殖する。外洋の小島で集団繁殖し，岩礁や砂浜に営巣する。2010 年代では沖縄本島以南で記録されており，これは，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためだが，1980 年に仲ノ神島で繁殖が確認されて以降，マミジロアジサシの分布自体も北上していると言われており(真木ほか 2014)，分布自体も広がっていると考えられる。

セグロアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Sooty Tern　*Sterna fuscata*

嘴峰長:39–46mm　翼長:277–305mm　ふ蹠長:22–25mm　尾長:132–196mm

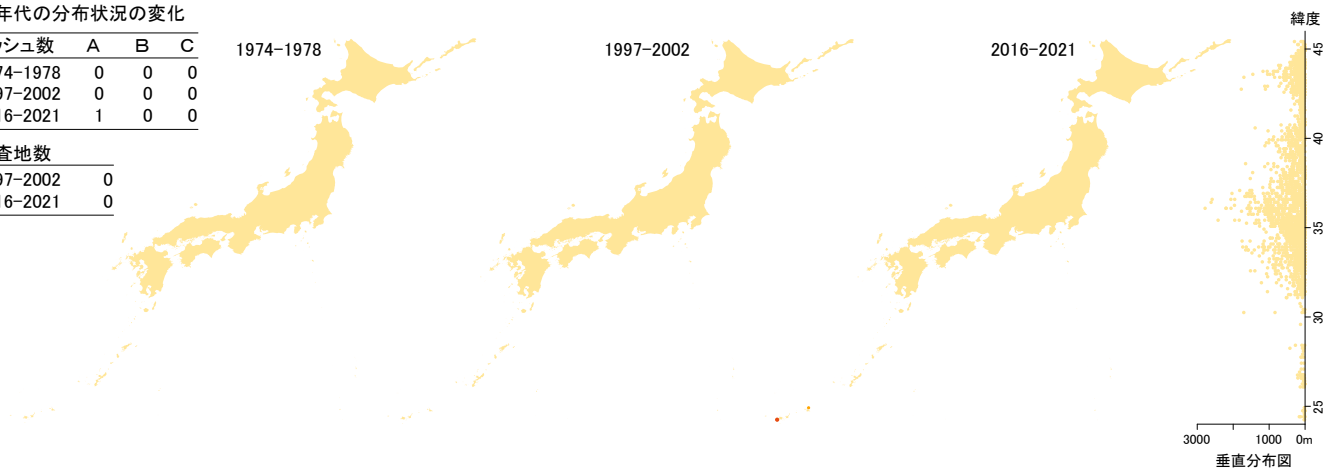
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



小笠原群島，硫黄列島，先島諸島で夏鳥として渡来し，草地，岩礁，砂浜などの地上で繁殖する。2010 年代にのみ記録されているが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，新たに分布するようになったわけではない。

ベニアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Roseate Tern　*Sterna dougallii*

嘴峰長:32–40.5mm　翼長:211–233mm　ふ蹠長:19–21mm　尾長:144–203mm

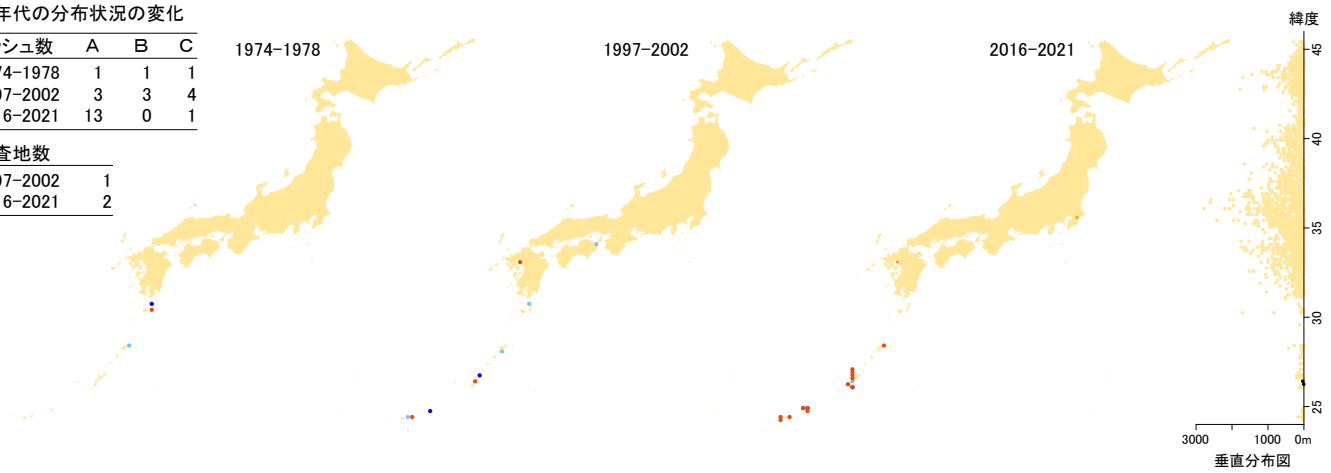
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	1
1997–2002	3	3	4
2016–2021	13	0	1

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	2



有明海，南西諸島で夏鳥として渡来し，岩礁，砂浜などの地上で繁殖する。2010 年代では有明海で個体は観察されているが繁殖は確認されなかった。

エリグロアジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Black-naped Tern　*Sterna sumatrana*

嘴峰長:31–40mm　翼長:211–226mm　ふ蹠長:18–20mm　尾長:131–151mm

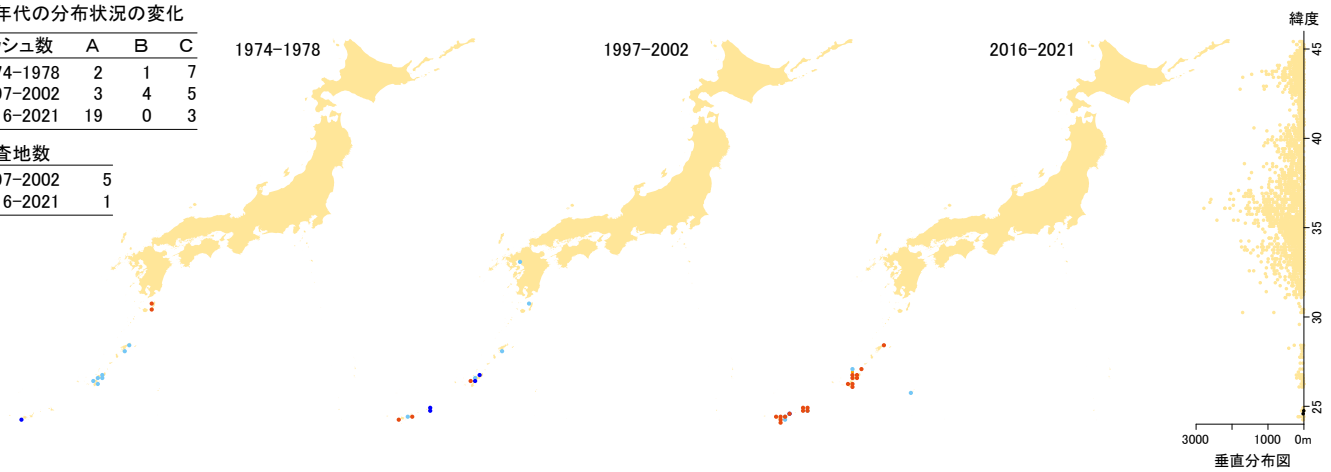
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	1	7
1997–2002	3	4	5
2016–2021	19	0	3

調査地数

1997–2002	5
2016–2021	1



夏鳥として南西諸島に渡来し，岩礁，砂浜などの地上で繁殖する。2010 年代では繁殖確認記録が増えているが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，繁殖が増えていることを示すわけではない。

アジサシ　分類:チドリ目カモメ科　Common Tern　*Sterna hirundo*

全長:30.2–38.1cm　翼長:267–287mm　ふ蹠長:18–21mm　体重:107–151g

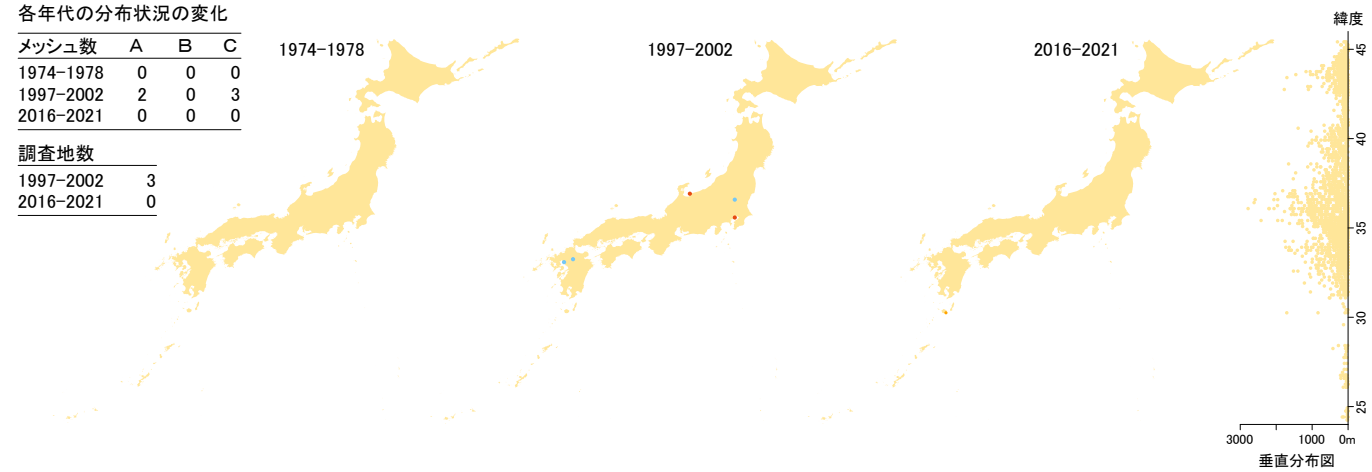
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	2	0	3
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	0



全国に旅鳥として渡来する。局所的な繁殖記録がある。2010 年代では繁殖に関わる情報はなかった。

ウミガラス　分類:チドリ目ウミスズメ科　Common Murre　*Uria aalge*

全長:42.0–47.2cm　翼長:205–235mm　ふ蹠長:37.3–42.4mm　体重:596–927g

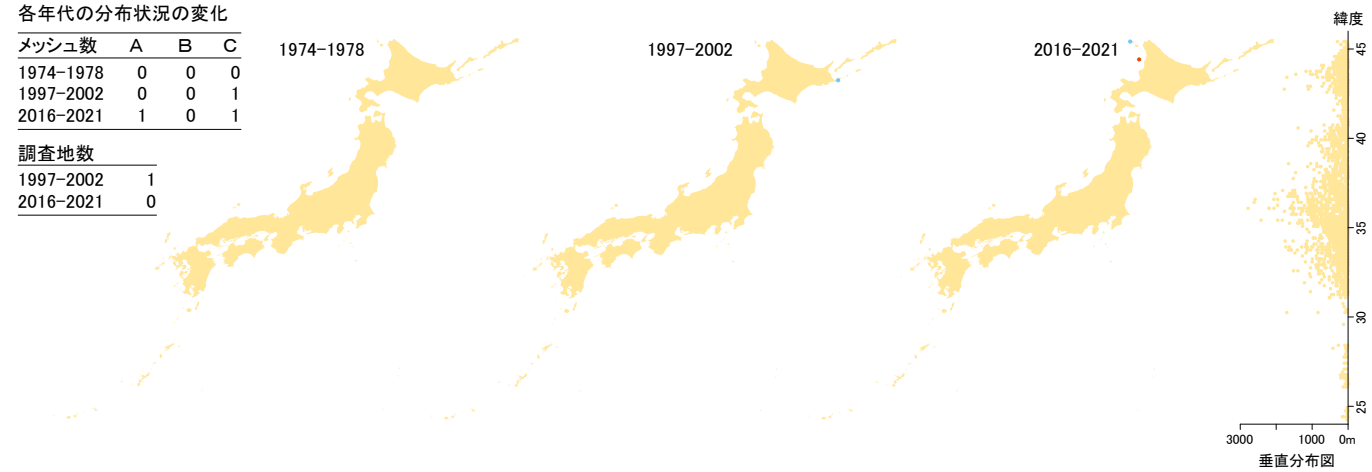
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	1
2016–2021	1	0	1

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	0



主に本州中部以北の海上に冬鳥として飛来し，北海道で局所的に繁殖する。1960 年代は天売島では 8,000 羽を超える集団繁殖地があったが，急激に減少し，2000 年代には繁殖地は消滅しかけた（長谷部 2015）。その後，環境省によりウミガラス保護増殖事業が実施され，デコイや音声による集団繁殖地の誘致，捕食者対策により，近年は個体数が増え，巣立ちヒナ数も増えている（長谷部 2015）。2010 年代の調査ではその天売島で記録された。

ケイマフリ　分類:チドリ目ウミスズメ科　Spectacled Guillemot　*Cepphus carbo*

全長:37cm　翼長:191.80–197.60mm　ふ蹠長:35.50–39.12mm　体重:576–760g

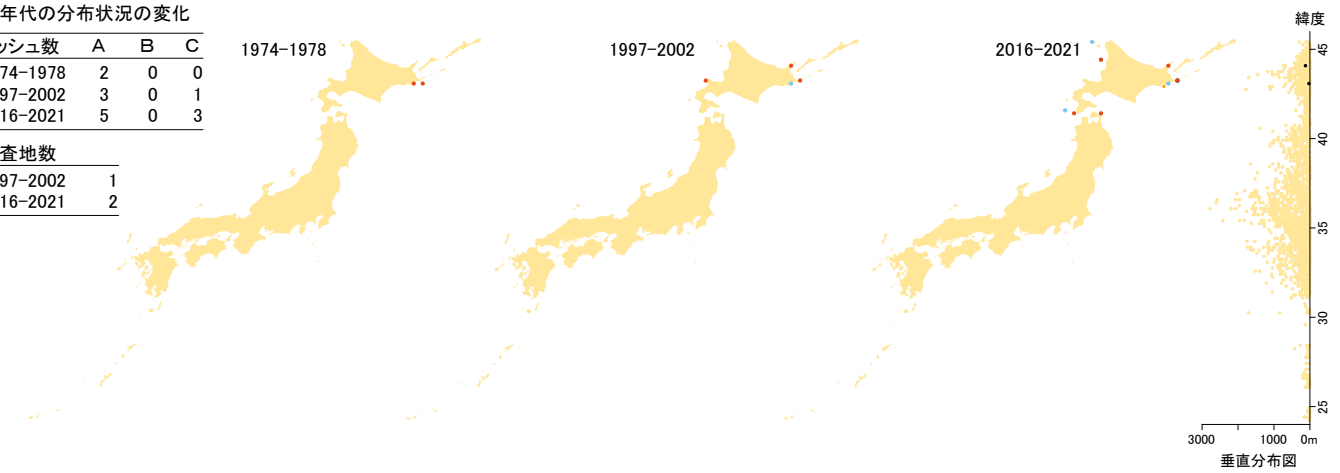
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	0	0
1997–2002	3	0	1
2016–2021	5	0	3

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	2



北海道から東北にかけての断崖の岩の隙間で繁殖する。2010 年代では記録メッシュ数が増加しているが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，増加していることを示すわけではない。天売島では，1949 年の 7,000 羽から 1994 年の 294 羽へと減少しており，知床半島でも 2000 年代に減少傾向にあることが知られている(福田 2010)。

ウミスズメ　分類:チドリ目ウミスズメ科　Ancient Murrelet　*Synthliboramphus antiquus*

全長:24.1–26.7cm　翼長:130–140mm　ふ蹠長:25–28mm　体重:191–295g

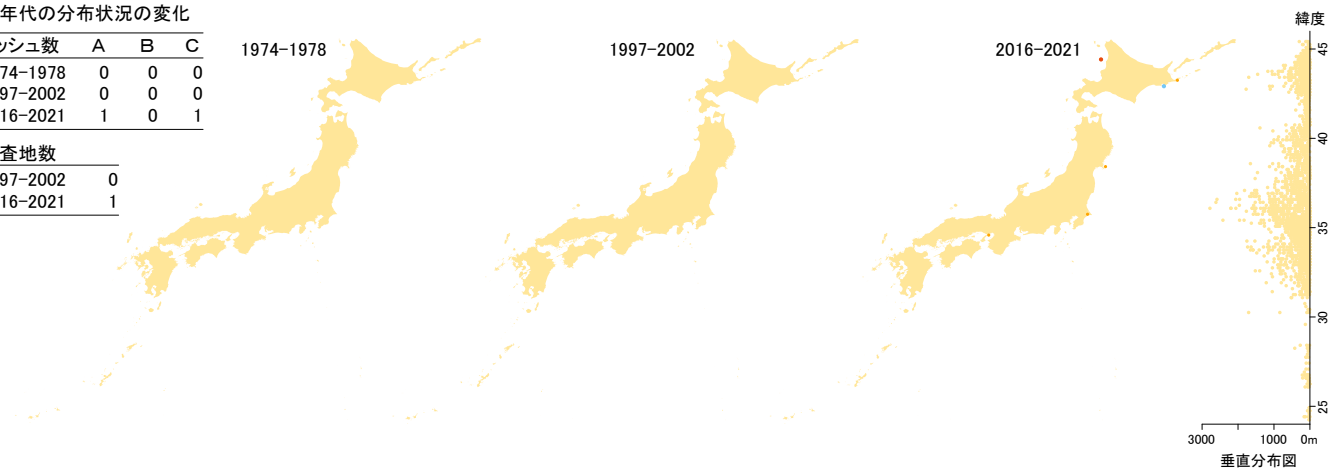
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



主に冬鳥として海上に渡来し，天売島や道東の島で少数が繁殖する。2010 年代でのみ記録されているが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，新たに分布するようになったわけではない。

カンムリウミスズメ　分類:チドリ目ウミスズメ科　Japanese Murrelet　*Synthliboramphus wumizusume*

全長:22.0–26.5cm　翼長:113–132mm　ふ蹠長:23.2–27.8mm　体重:139–213g

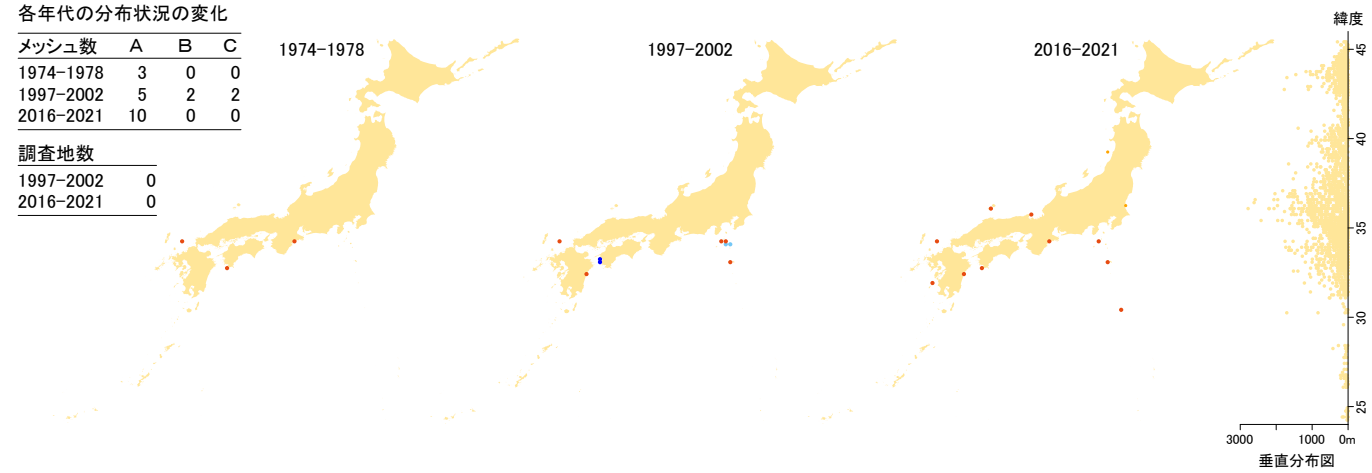
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	0	0
1997–2002	5	2	2
2016–2021	10	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



日本近海と韓国南部の離島や岩礁でのみ繁殖し，岩の隙間，土中の穴で繁殖する。2010 年代で分布域が広がっているが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，分布が広がっていることを示すわけではない。環境省レッドデータブック 2014 では，繁殖地でのハシブトガラスやドブネズミによる捕食の増加，漁網の混獲による減少が示唆されている。

ウトウ　分類:チドリ目ウミスズメ科　Rhinoceros Auklet　*Cerorhinca monocerata*

全長:35–38cm　翼長:♂181mm ♀179mm　ふ蹠長:♂31.43mm ♀30.68mm　体重:549±39g

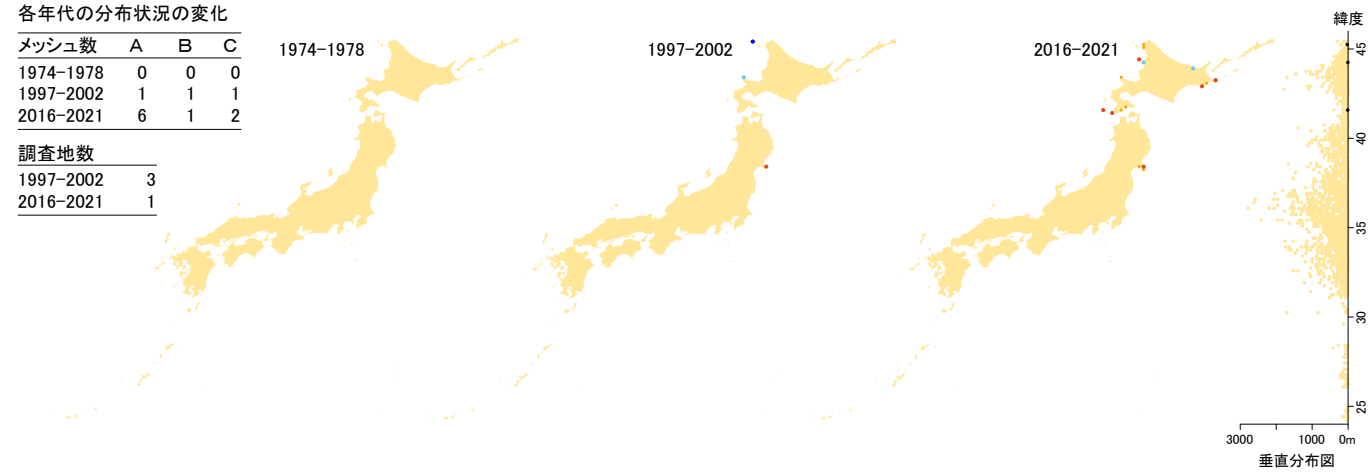
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	1	1
2016–2021	6	1	2

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	1



主に北海道で繁殖し，東北地方にも繁殖地がある。地面に 1–5m ほどの穴を掘って営巣する。2010 年代の記録メッシュは増えているが，モニタリングサイト 1000 小島嶼(海鳥)調査が始まったためで，分布が広がっていることを示すわけではない。

エトピリカ　分類:チドリ目ウミスズメ科　Tufted Puffin　*Fratercula cirrhata*

全長:37.1–40.6cm　翼長:180–205mm　ふ蹠長:28–36mm　体重:497–687g

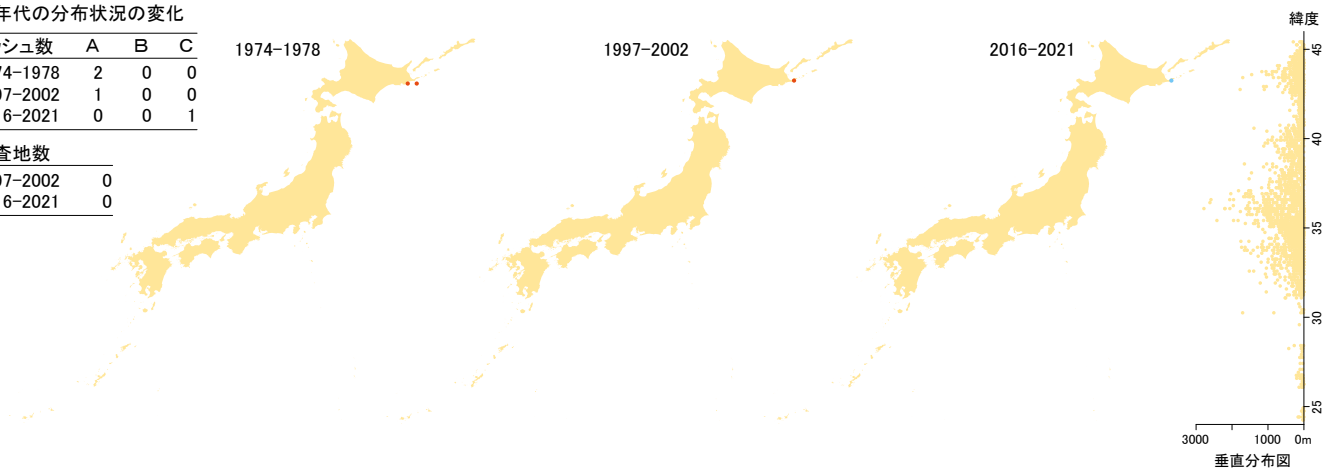
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	0	0
1997–2002	1	0	0
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



主に冬鳥として本州北部より北の海上で見られ，北海道東部で少数が繁殖する。千島列島から北アメリカ北部太平洋側で繁殖する。潜水して魚，イカ，甲殻類などをとる。霧多布などで保護活動が進められているが，分布の拡大はみられていない。

ミサゴ　分類:タカ目ミサゴ科　Western Osprey　*Pandion haliaetus*

全長:54.5–63.5cm　翼長:448–520mm　ふ蹠長:54–60mm　体重:1331–2219g

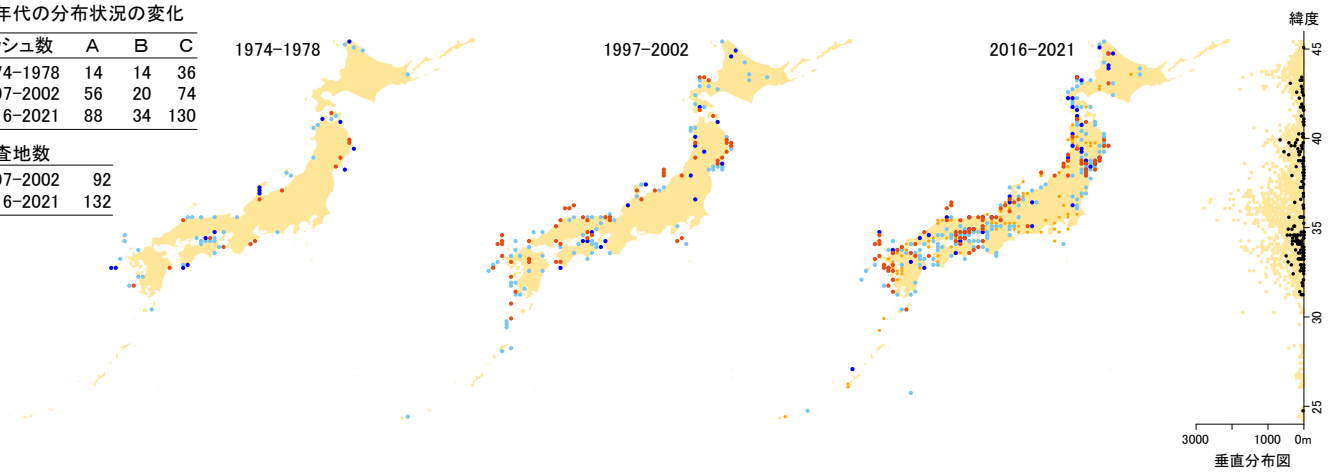
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	14	14	36
1997–2002	56	20	74
2016–2021	88	34	130

調査地数

1997–2002	92
2016–2021	132



全国の海岸の崖や樹上で繁殖するが，近年は内陸部での繁殖も増えてきている。1970 年代以降，記録メッシュ数は増加し続けており，比較可能な現地調査の記録をみても，92 地点から 132 地点へと増加していた。関東地方から中部地方太平洋側を除けば全国的に分布を拡大していた。ミサゴ以外も大型の魚食性の鳥の多くが増加しており(157 ページ参照)，1970 年代に農薬や水質汚染で世界的に減少し(Newton 1998)，そこから回復していることが分布拡大の一因と考えられる。

ハチクマ　分類:タカ目タカ科　Crested Honey Buzzard　*Pernis ptilorhynchus*

全長:♂52.7–61.5cm ♀55.1–64.5cm　翼長:♂393–447mm ♀411–480mm　体重:♂ 793–1305g ♀853–1582g

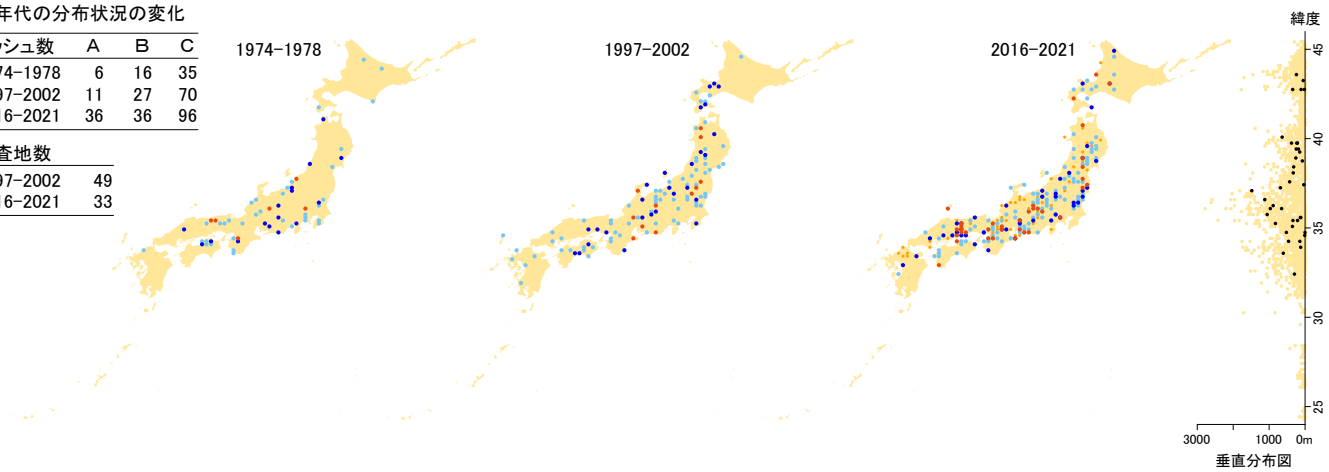
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	16	35
1997–2002	11	27	70
2016–2021	36	36	96

調査地数

1997–2002	49
2016–2021	33



九州以北の森林で夏鳥として繁殖する。発信機をもちいた追跡調査で，秋は，五島列島などから東シナ海を越えて大陸へと渡り，春は，その経路はとらず，大回りして朝鮮半島経由で渡ってくることが明らかになっている(Higuchi et al. 2005)。記録メッシュ数は増加しているが現地調査の確認地点数は減少しており，個体数の増減は明らかでない。

カタグロトビ　分類:タカ目タカ科　Black-winged Kite　*Elanus caeruleus*

全長:30cm　翼開長:84cm　体重:♂ 197–277g ♀219–343g

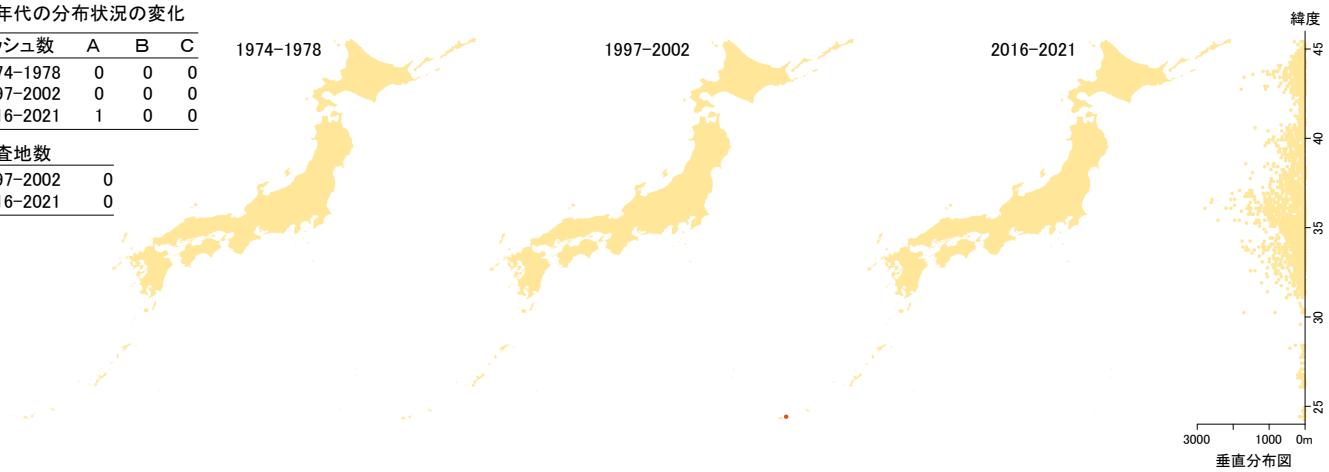
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



東南アジアからアフリカにかけて生息し，日本へは迷鳥として記録される鳥だったが，台湾，そして石垣島へと分布を広げ，2016 年から石垣島で繁殖が確認されている(越山ほか 2020)。農耕地帯の樹木に営巣し，ネズミ類，小型鳥類，昆虫などを捕食する。石垣島での生息個体数は増加しており，また，韓国での観察記録が増えており(越山ほか 2020)，今後さらに分布が拡大する可能性がある。

トビ　分類:タカ目タカ科　Black Kite　*Milvus migrans*

全長:♂60.4cm ♀62.5cm　翼長:♂466mm ♀473mm　ふ蹠長:♂59.8mm ♀61.7mm　体重:♂857g ♀1132g

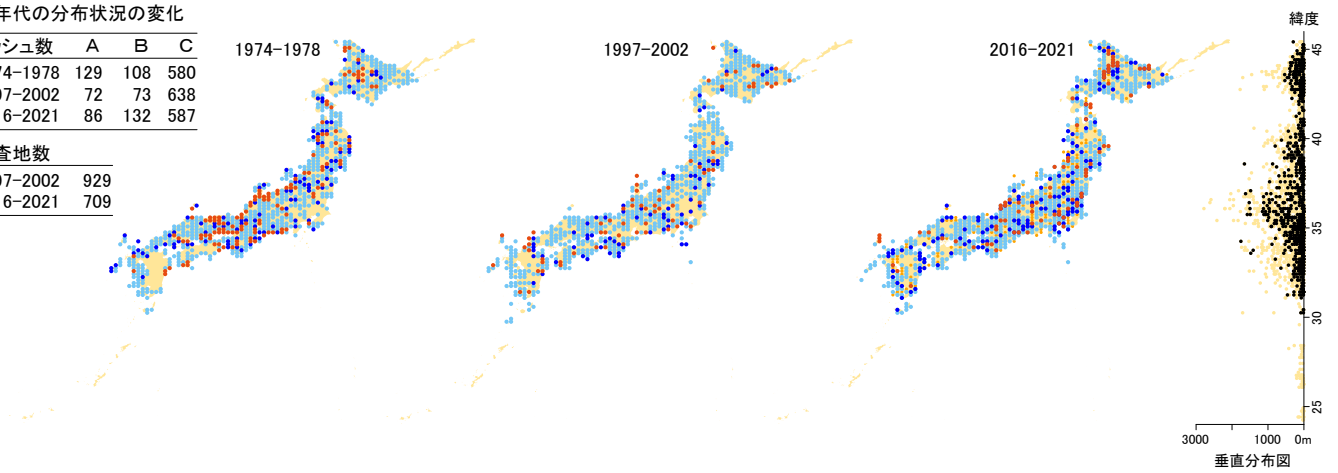
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	129	108	580
1997–2002	72	73	638
2016–2021	86	132	587

調査地数

1997–2002	929
2016–2021	709



全国で留鳥として繁殖する。海岸，湖沼や河川などの水辺に生息し，樹上で営巣する。分布に大きな変化は見られていないが，比較可能な現地調査の記録地点数は，929 地点から 709 地点へと減少しており，また記録個体数も大きく減少している。漁港やゴミ捨て場などでの生ゴミの管理が徹底されるようになって，トビが集中することがなくなったのか，それとも分布の縮小と減少がみられているのかについて，今後の変化に注意が必要である(160 ページ参照)。

オジロワシ　分類:タカ目タカ科　White-tailed Eagle　*Haliaeetus albicilla*

全長:70–90cm　翼長:♂552–640mm ♀621–715mm　ふ蹠長:♂92–97mm ♀95–101mm　体重:♂3075–5430g ♀4080–6920g

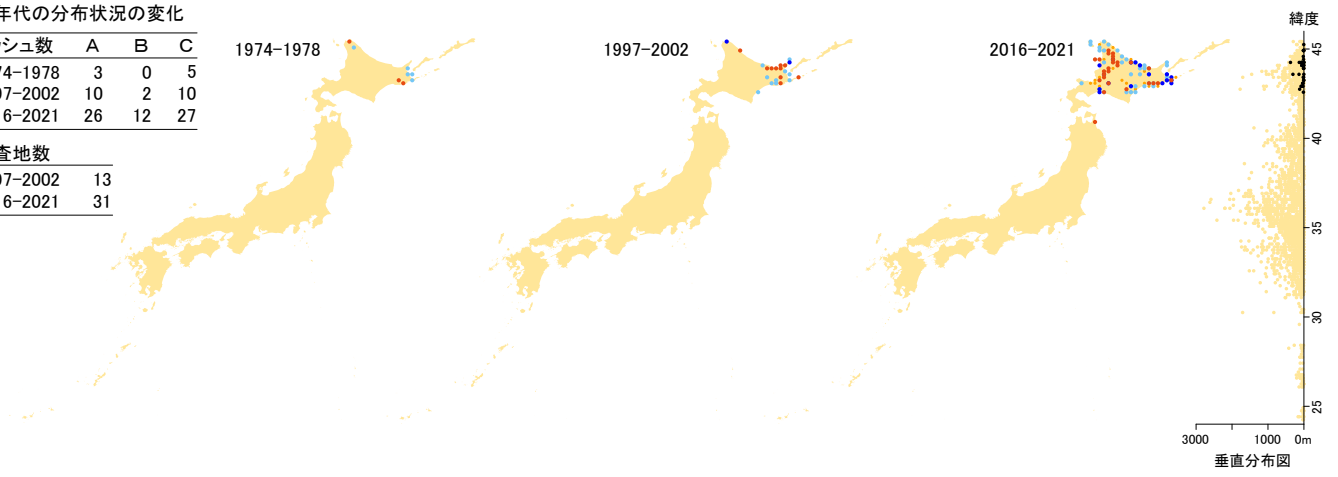
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	0	5
1997–2002	10	2	10
2016–2021	26	12	27

調査地数

1997–2002	13
2016–2021	31



北海道で留鳥として繁殖する。ロシアなどから越冬にくる個体も多く，冬期は個体数が増加する。繁殖分布は 1970 年代以降，拡大しており，2016 年には本州での繁殖も確認された(吉岡ほか 2017)。

カンムリワシ　分類:タカ目タカ科　Crested Serpent Eagle　*Spilornis cheela*

全長:♂51.3cm ♀52.2cm　翼長:♂353mm ♀357mm　ふ蹠長:♂79.4mm ♀78.7mm　体重:♂670–780g ♀700–840g

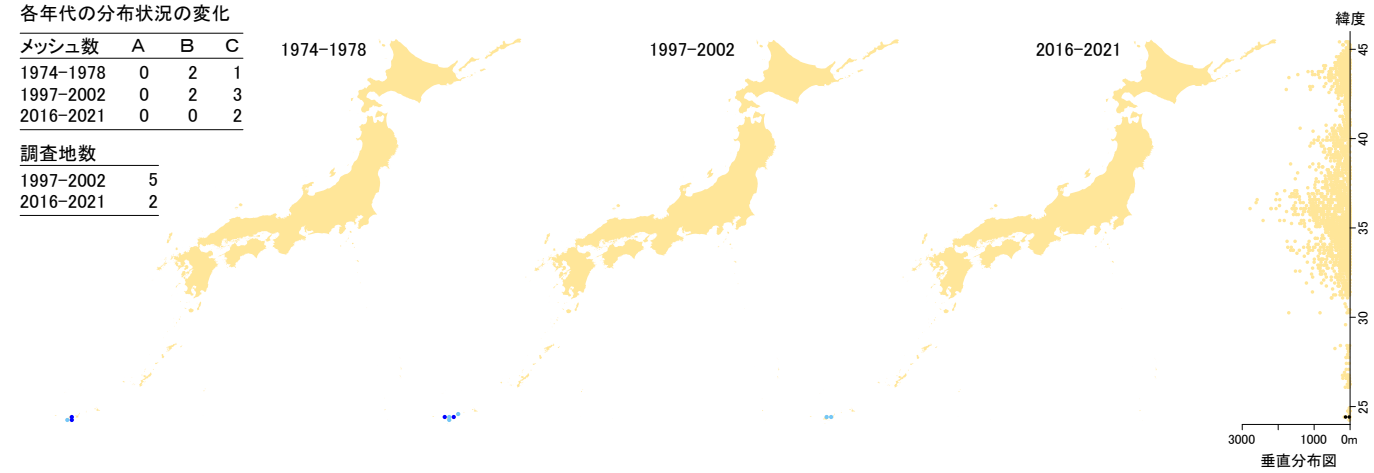
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	2	1
1997–2002	0	2	3
2016–2021	0	0	2

調査地数

1997–2002	5
2016–2021	2



石垣島と西表島で留鳥として繁殖している。分布やメッシュ数に変化はないが，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録地点数は，5 地点から 2 地点となっている。道路で交通事故により死んだ小動物を食べようとして，交通事故にあうカンムリワシが増加しており，減少が心配される(佐野　2012)。

チュウヒ　分類:タカ目タカ科　Eastern Marsh Harrier　*Circus spilonotus*

全長:♂48.0cm，♀58.2cm　翼長:380–430mm　ふ蹠長:85–91mm　体重:498–844g

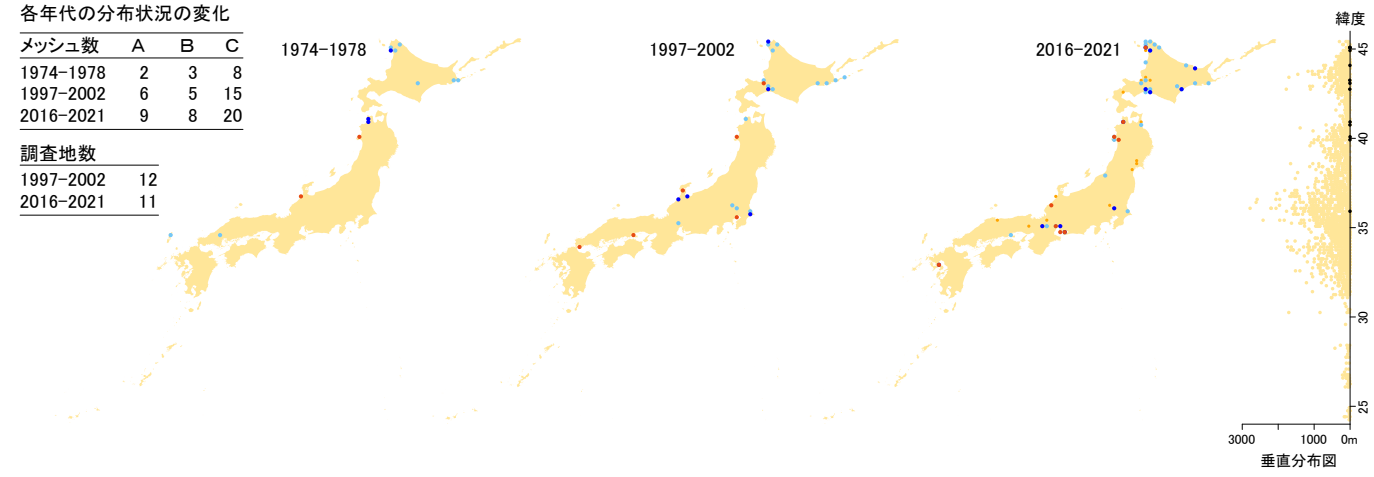
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	3	8
1997–2002	6	5	15
2016–2021	9	8	20

調査地数

1997–2002	12
2016–2021	11



冬鳥としてアシ原などに渡来する個体が多いが，九州以北の広大なアシ原で局所的に繁殖している。分布にも，現地調査での記録数にも大きな変化はないが，レッドデータブック 2014 では減少要因の一つとして湖沼・湿地開発が挙げられており，今後の変化に注意が必要である。

ツミ　分類:タカ目タカ科　Japanese Sparrowhawk　*Accipiter gularis*

全長:♂26.5cm，♀30.4cm　翼長:♂168.51±8.35mm ♀192.21±7.13mm　体重:♂90g ♀135.8g

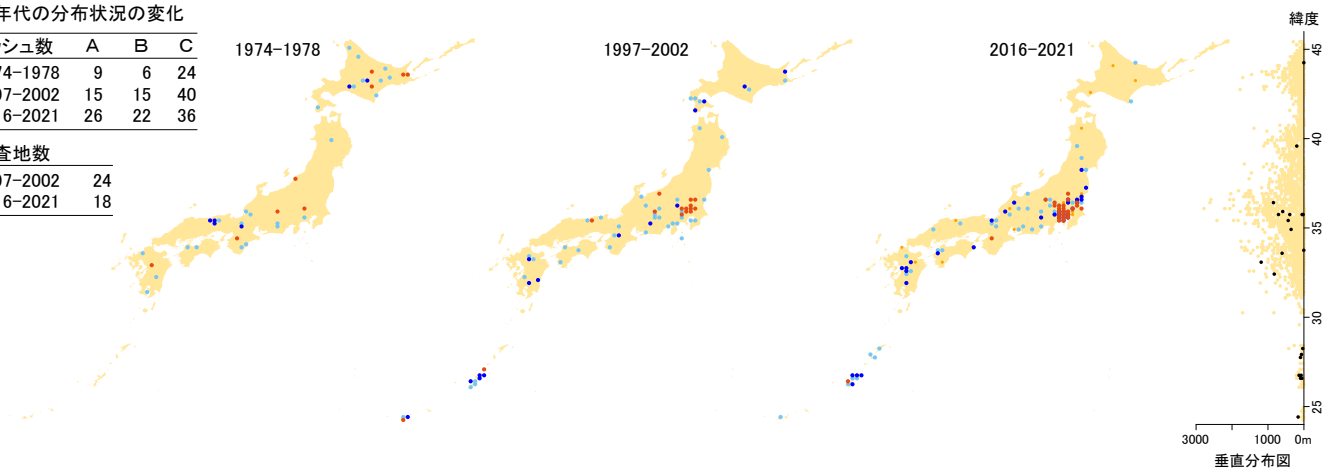
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類(亜種 リュウキュウツミ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	9	6	24
1997–2002	15	15	40
2016–2021	26	22	36

調査地数

1997–2002	24
2016–2021	18



全国の森林で留鳥あるいは夏鳥として繁殖する。八重山諸島には亜種リュウキュウツミが分布する。関東周辺では，1980 年代から住宅地の小規模な森林で繁殖するようになっており(植田 2013)，1990 年代と 2010 年代に関東周辺で記録メッシュが増えているのはそのような場所である。そうしたツミも 1990 年代後半から一時，ハシブトガラスによる繁殖の失敗で，拡大した分布が縮小したが，近年，再拡大している(植田 2013)。

ハイタカ　分類:タカ目タカ科　Eurasian Sparrowhawk　*Accipiter nisus*

全長:♂30.2–32.7cm ♀37.2–40.2cm 翼長:♂204–217mm ♀240–257mm ふ蹠長:♂52.0–56.5mm ♀57.0–63.6mm 体重:♂107–138g ♀206–264g

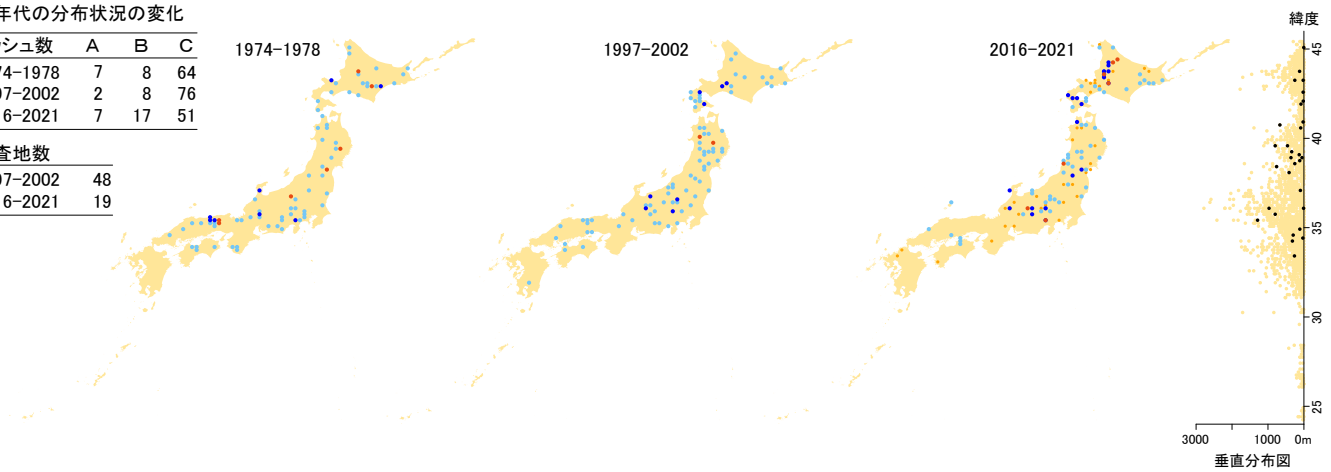
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	7	8	64
1997–2002	2	8	76
2016–2021	7	17	51

調査地数

1997–2002	48
2016–2021	19



本州以北の森林で留鳥として繁殖する。1990 年代から記録メッシュ数は減少しており，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録をみても，48 地点から 19 地点へと大きく減少していた。ハイタカはオオタカに捕食されることがあり，オオタカを避けてより樹木密度の高い場所で繁殖しており(Newton 1986)，オオタカの分布拡大の影響で減少している可能性や日本の樹林の成熟化で，営巣適地が減っている可能性などが考えられる。

オオタカ　分類:タカ目タカ科　Northern Goshawk　*Accipiter gentilis*

全長:♂47.5cm ♀54.2cm　翼長:♂275.0–305.0mm ♀310.0–340.0mm　ふ蹠長:♂67.2–78.0mm ♀73.0–90.1mm　体重:♂602–848g ♀929–1265g

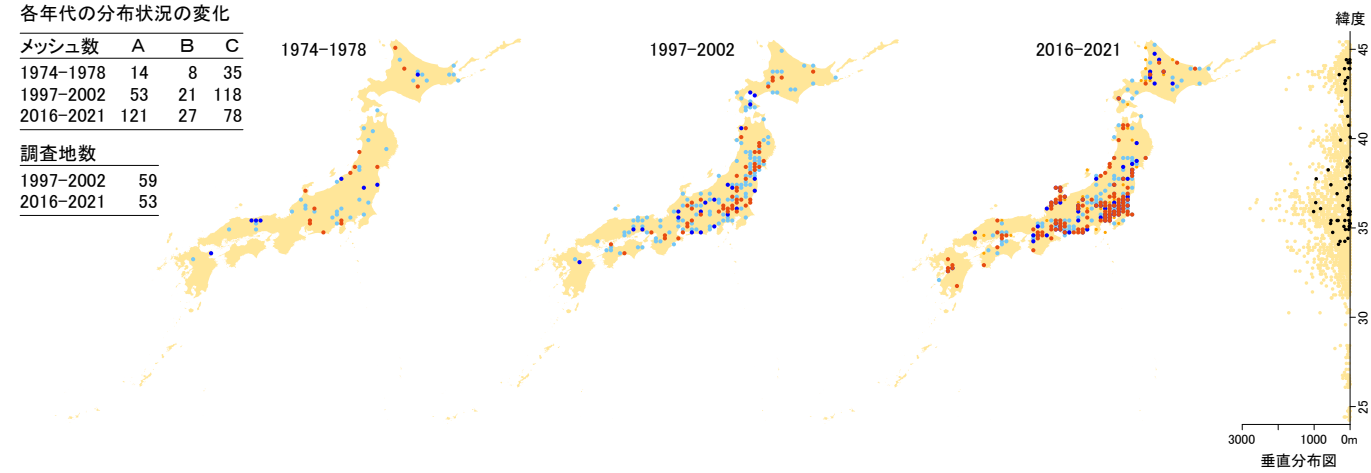
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	14	8	35
1997–2002	53	21	118
2016–2021	121	27	78

調査地数

1997–2002	59
2016–2021	53



九州以北の低地から森林で留鳥として繁殖するが，主な繁殖地は農耕地や草地など開けた環境と森林が混在する低地から丘陵地である。分布は 1970 年代から 1990 年代にかけて急激に拡大した。1990 年代から 2010 年代にかけては記録メッシュ数でも，現地調査の地点数でも大きな変化はなかった。生息個体数は 2000 年代をピークにやや減少傾向にあると考えられている(植田 2021)。

サシバ　分類:タカ目タカ科　Grey-faced Buzzard　*Butastur indicus*

全長:♂38.1–43.1cm ♀40.0–41.5cm　翼長:♂290–330mm ♀313–355mm　ふ蹠長:♂56–66mm ♀51–68mm　体重:♂390–500g ♀430–575g

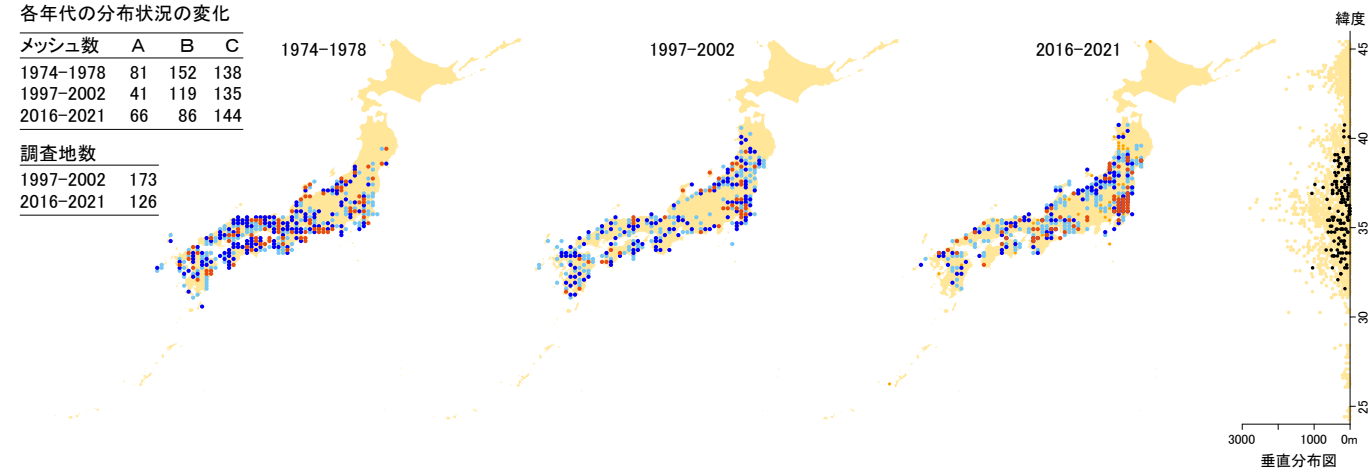
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	81	152	138
1997–2002	41	119	135
2016–2021	66	86	144

調査地数

1997–2002	173
2016–2021	126



本州から九州にかけて夏鳥として繁殖する。南西諸島では越冬する。里山や山の伐採地など開けた場所と林がある場所に生息する。1970 年代以降，北関東以南の地域では記録メッシュ数が減少している。反面，分布の北端は北上傾向にある。減少の原因としては，水田の整備に伴う，獲物となる生物の減少，耕作放棄による生息地の消失などが考えられる(野中ほか 2012)。

ノスリ　分類:タカ目タカ科　Eastern Buzzard　*Buteo buteo*

全長:♂50.3–53.0cm ♀53.5–59.5cm　翼長:♂349–360.9mm ♀364–392mm　ふ蹠長:♂59–74.5mm ♀67–74mm　体重:748–970g

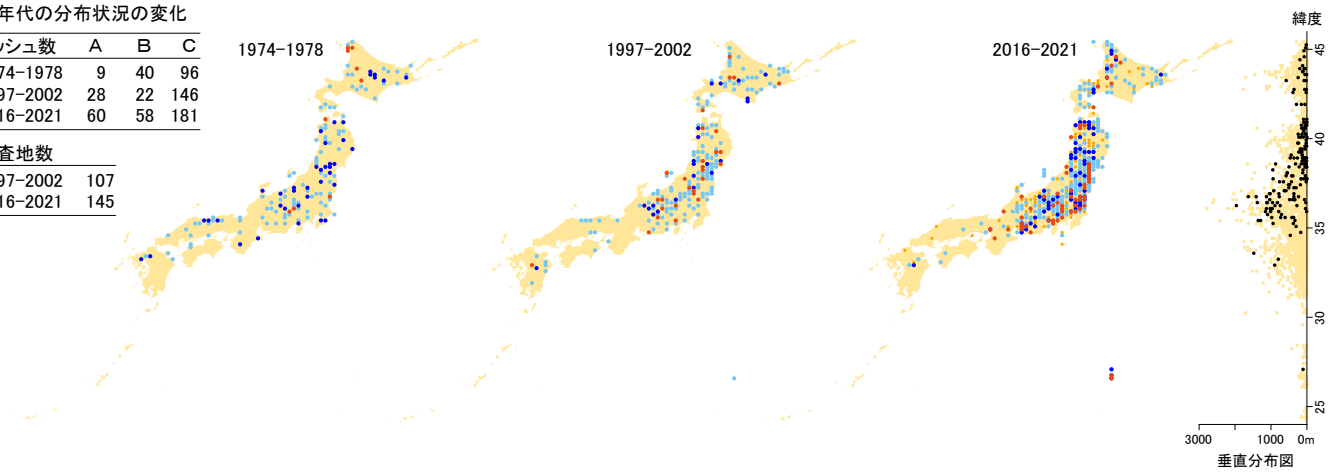
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類(亜種　オガサワラノスリ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	9	40	96
1997–2002	28	22	146
2016–2021	60	58	181

調査地数

1997–2002	107
2016–2021	145



全国で冬鳥として越冬し，東日本の山地で繁殖し，西日本でも局所的に繁殖している。小笠原群島には亜種オガサワラノスリが留鳥として生息する。1970 年代以降，分布は拡大傾向にあり，これまで繁殖の少なかった低地や西日本でも繁殖例が増えている。1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録をみても，107 地点から 145 地点へと増加していた。

クマタカ　分類:タカ目タカ科　Mountain Hawk-Eagle　*Nisaetus nipalensis*

全長:♂71.4cm ♀76.3cm　翼長:♂460–505mm ♀495–533mm　ふ蹠長:♂96.2–120.2mm ♀105.1–128.9mm　体重:♂2300–2700g ♀2500–3900g

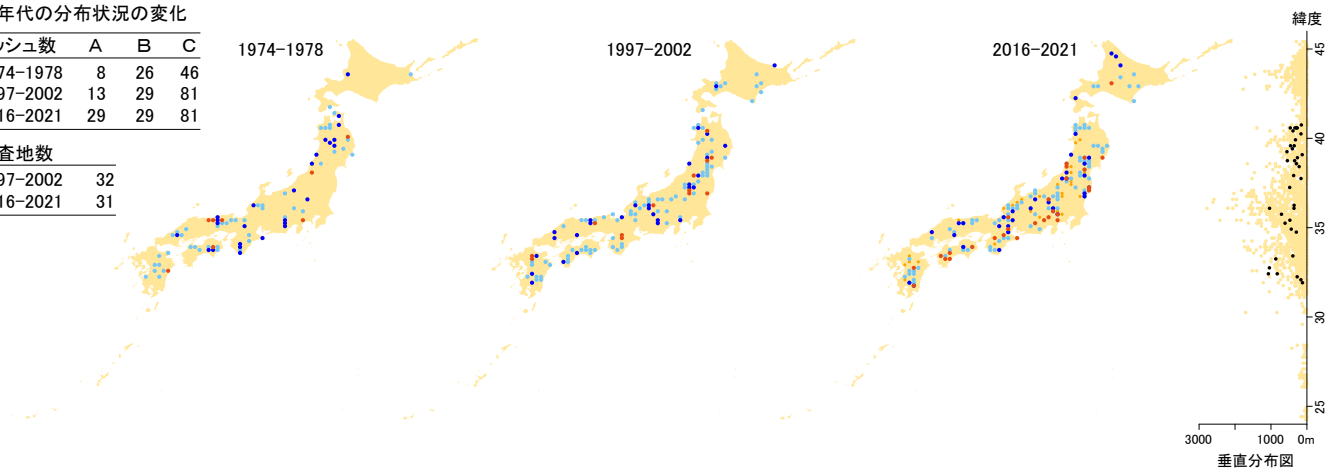
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	26	46
1997–2002	13	29	81
2016–2021	29	29	81

調査地数

1997–2002	32
2016–2021	31



九州以北の森林で留鳥として繁殖する。1990 年代と 2010 年代の記録メッシュ数やコース数に大きな変化はなかったが，繁殖成績が下がっている地域もあり(環境省自然環境局野生生物課　2012)，今後の変化に注意が必要である。

オオコノハズク　分類:フクロウ目フクロウ科　Japanese Scops Owl　*Otus lempiji*

全長:23.4–26.0cm　翼長:157–185mm　ふ蹠長:35–38mm　体重:117–158g

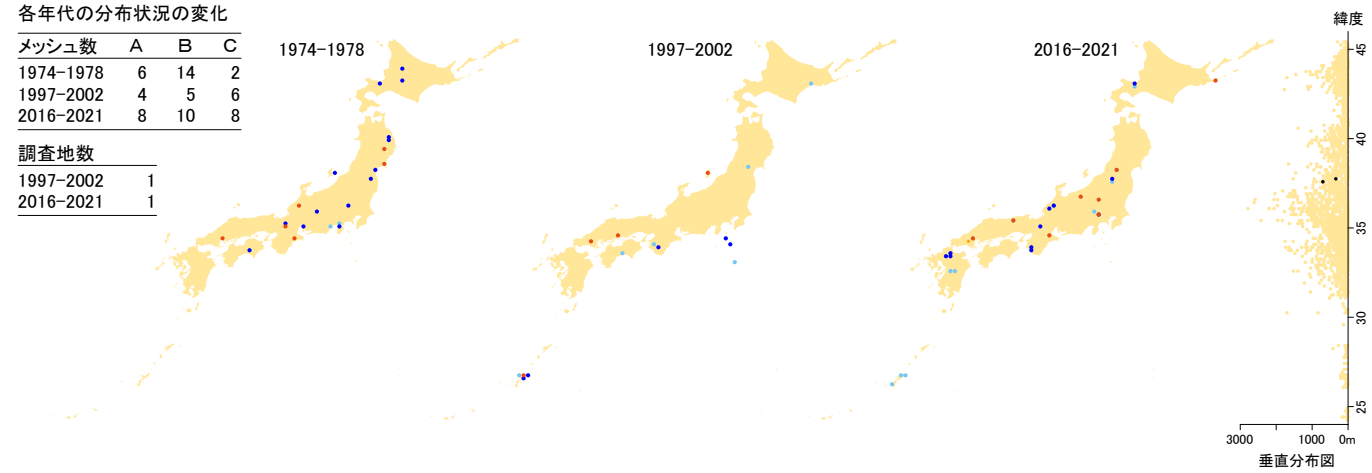
環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類(亜種 リュウキュウオオコノハズク)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	14	2
1997–2002	4	5	6
2016–2021	8	10	8

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	1



全国で留鳥として繁殖し，北海道の個体は冬期は南へ移動する。琉球諸島には亜種リュウキュウオオコノハズクが分布する。夜行性の鳥のため，夜の情報がどれだけアンケートとして寄せられたかに依存し，さらに鳴き声も低音で目立たないため，その生息状況の変化は明らかでない。

コノハズク　分類:フクロウ目フクロウ科　Oriental Scops Owl　*Otus sunia*

全長:18.6–21.5cm　翼長:140–155mm　ふ蹠長:24–29mm　体重:68–111g

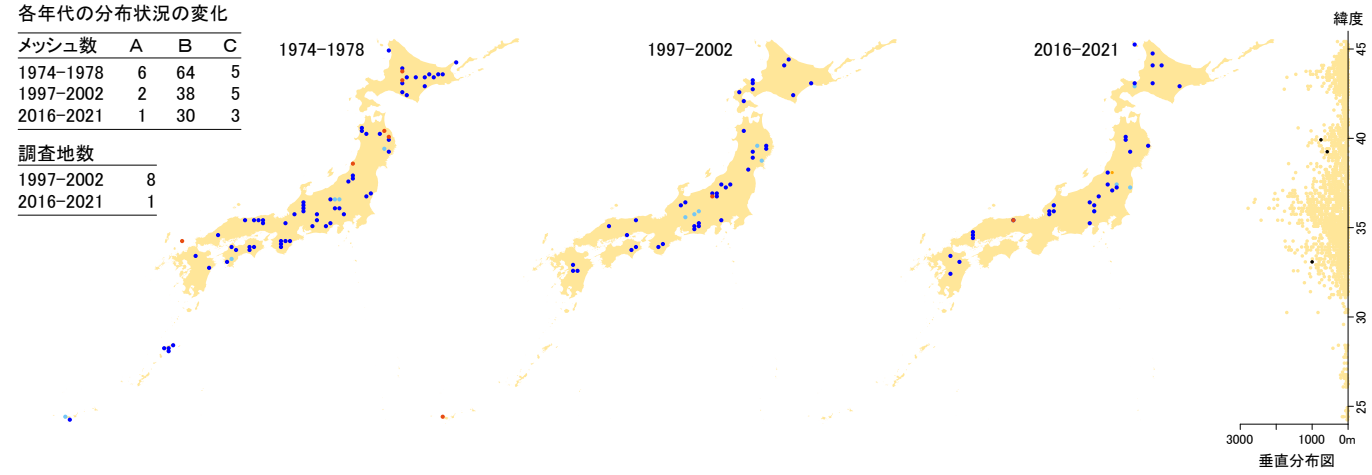
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	64	5
1997–2002	2	38	5
2016–2021	1	30	3

調査地数

1997–2002	8
2016–2021	1



九州以北で夏鳥として繁殖する。記録メッシュ数は 1970 年代以降減少を続けている。夜行性の鳥のため，夜の情報がどれだけアンケートとして寄せられたかに依存し，その変化の確度は明らかでないが，オオコノハズクと比べて目立つ声で鳴くため，ある程度は現状を把握できているものと考えられる。以前はリュウキュウコノハズクもコノハズクの亜種とされていたため，1970 年代と 1990 年代の南西諸島の記録はリュウキュウコノハズクの記録と考えられる。

リュウキュウコノハズク　分類:フクロウ目フクロウ科　Ryukyu Scops Owl　*Otus elegans*

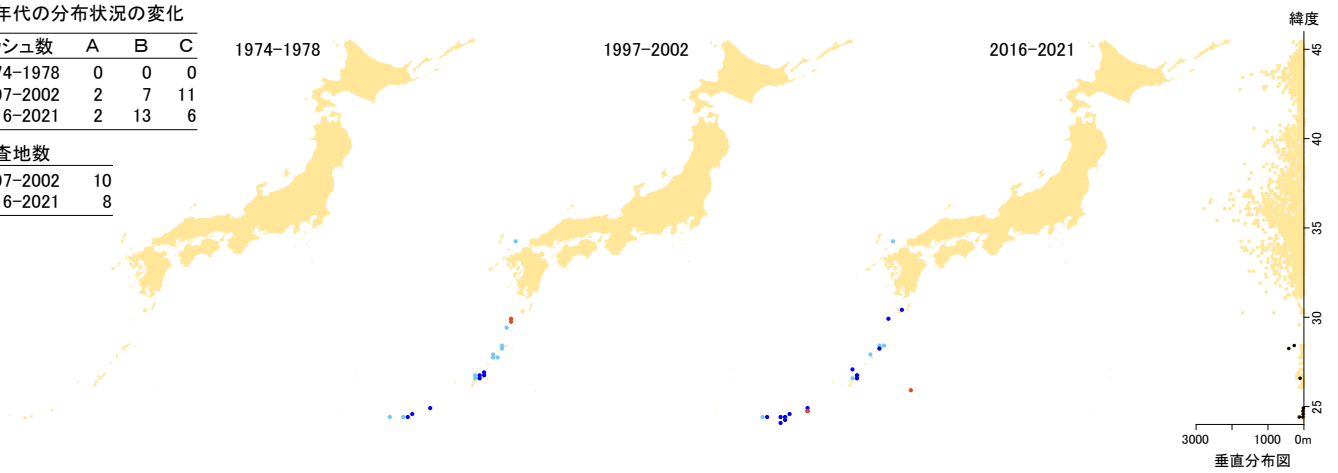
全長:18–20cm　翼長:♂148.5–165.5mm ♀149.0–165.0mm　ふ蹠長:♂28.13–31.74mm ♀28.05–31.77mm　体重:♂70.0–102.0g ♀78.0–111.5g

環境省レッドリスト:　絶滅危惧Ⅱ類(亜種　ダイトウコノハズク)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	2	7	11
2016–2021	2	13	6

調査地数	
1997–2002	10
2016–2021	8



留鳥として南西諸島で繁殖するほか，福岡県の沖ノ島にも分布する。南大東島には亜種ダイトウコノハズクが生息する。成熟した森林で繁殖するが，大東島では，サトウキビ畑にわずかに残された防風林で営巣している。以前はコノハズクの亜種とされていたため，1970 年代で記録がないのは，それが原因と考えられる。1990 年代と 2010 年代では大きな違いはなかったが，夜行性の鳥のため，夜の情報がどれだけアンケートとして寄せられたかに依存し，その変化の確度はわからない。

フクロウ　分類:フクロウ目フクロウ科　Ural Owl　*Strix uralensis*

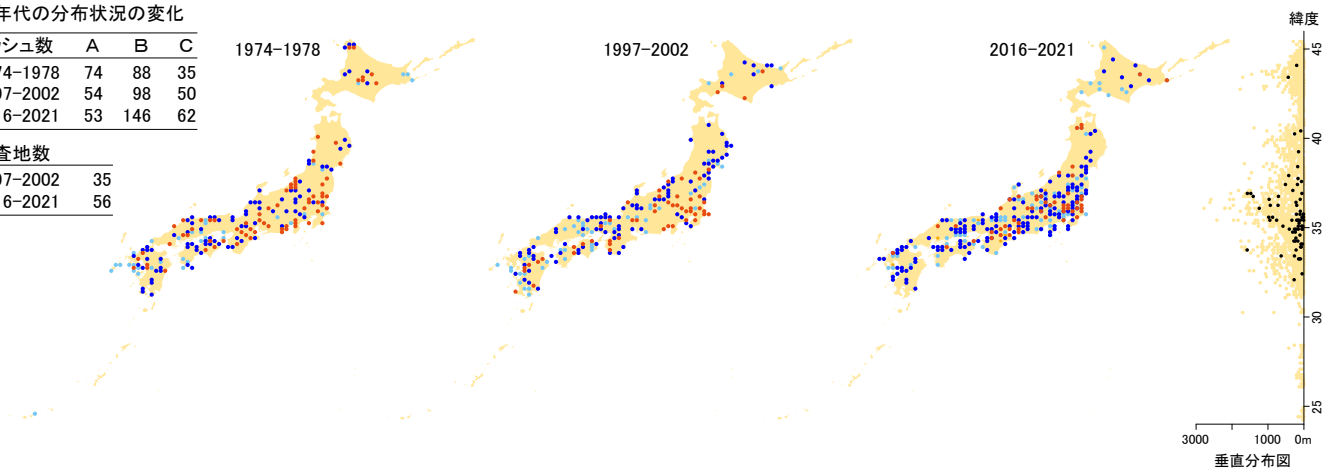
全長:47.7–52.0cm　翼長:300–330mm　ふ蹠長:50–55mm　体重:512–677g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	74	88	35
1997–2002	54	98	50
2016–2021	53	146	62

調査地数	
1997–2002	35
2016–2021	56



九州以北で留鳥として繁殖する。里地や森林の樹洞やカラスや猛禽類などの古巣に営巣する。夜行性の種のため，フクロウが記録されるかどうかは日の出前後に調査をしたかどうかに影響されるが，2010 年代には記録メッシュもやや増加しており，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録をみても，35 地点から 56 地点へと増加していたことから分布は拡大傾向にあるものと考えられる。

アオバズク　分類:フクロウ目フクロウ科　Northern Boobook　*Ninox scutulata*

全長:27.2–30.5cm　翼長:210–230mm　ふ蹠長:25–30mm　体重:148–236g

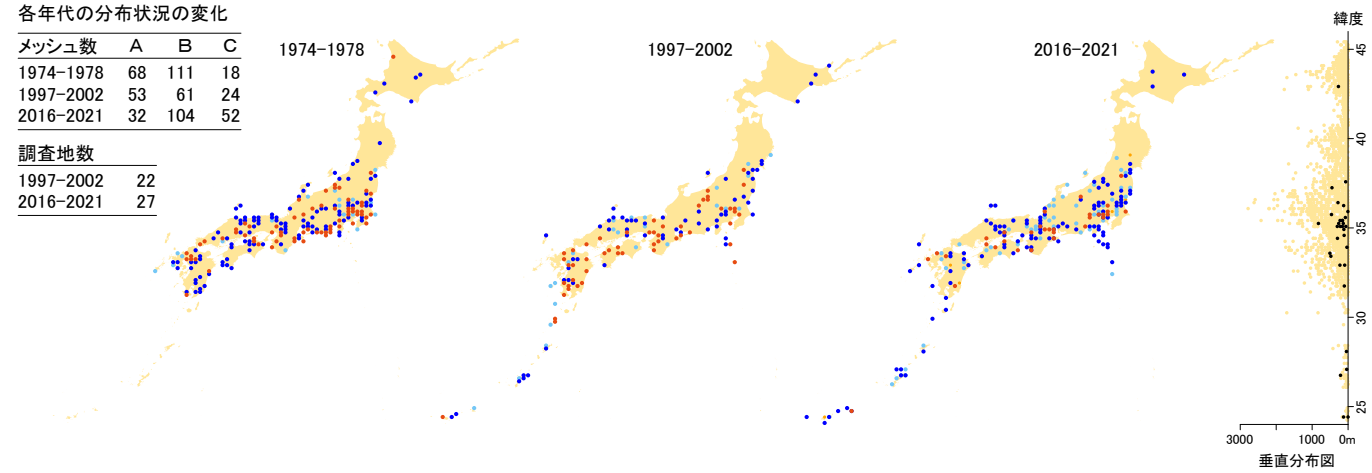
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	68	111	18
1997–2002	53	61	24
2016–2021	32	104	52

調査地数

1997–2002	22
2016–2021	27



夏鳥として全国で繁殖する。南西諸島の亜種リュウキュウアオバズクは留鳥。里地から低山の樹洞で繁殖する。1970 年代から 1990 年代にかけて記録メッシュ数が減少したが，1990 年代から 2010 年代にかけては，メッシュ数，現地調査の確認地点数ともに増加傾向にある。夜行性の鳥のため，アンケート情報の多寡の影響を受けやすく評価は難しいが，本調査の結果から減少がとまったか回復している可能性が示された。

トラフズク　分類:フクロウ目フクロウ科　Long-eared Owl　*Asio otus*

全長:34.8–40.0cm　翼長:285–310mm　ふ蹠長:35–46mm　体重:209–365g

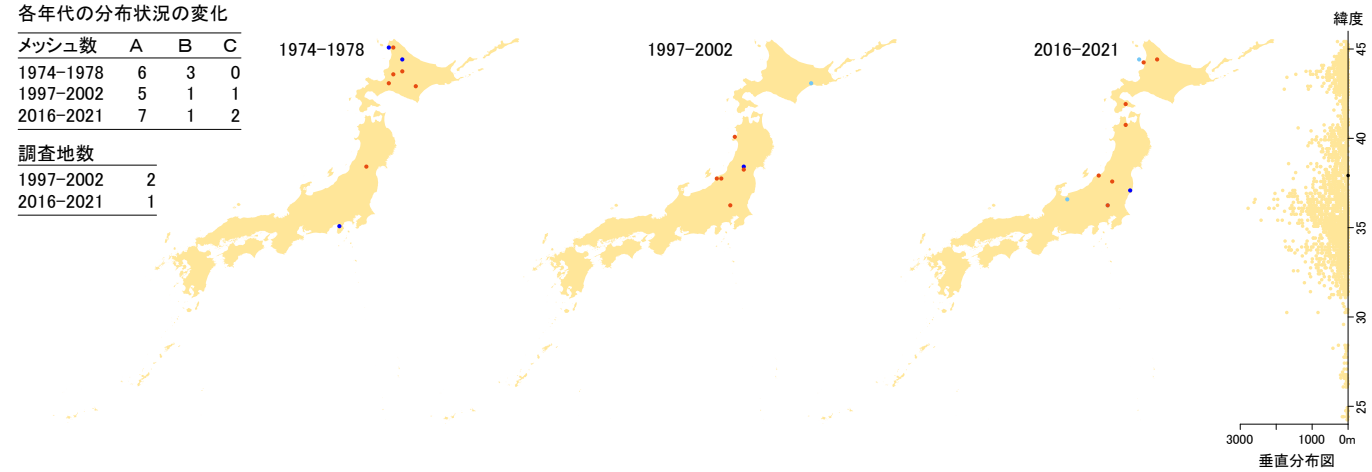
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	3	0
1997–2002	5	1	1
2016–2021	7	1	2

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	1



日本には冬鳥として渡来し，本州中部以北で局所的に繁殖する。樹洞やカラスなどの古巣を利用して営巣する。記録メッシュ数に大きな変化はないが，夜行性の鳥のため，夜の情報がどれだけアンケートとして寄せられたかに依存し，その変化の確度は明らかでない。

コミミズク　分類:フクロウ目フクロウ科　Short-eared Owl　*Asio flammeus*

全長:35.3-40.6cm　翼長:290-330mm　ふ蹠長:33-50mm　体重:225-392g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	0	0	0
1997-2002	0	0	0
2016-2021	1	0	0

調査地数

1997-2002	0
2016-2021	0

日本には冬鳥として全国のアシ原など草地に渡来する。これまで日本国内での繁殖記録はなかったが，2019 年に北海道大黒島での繁殖が確認された。草原の地上に営巣しており，7 卵と 5 羽の孵化が確認され，巣内にはエゾヤチネズミやコシジロウミツバメがあり，これらを食物に繁殖したと考えられる(田口ほか 2020)。

アカショウビン　分類:ブッポウソウ目カワセミ科　Ruddy Kingfisher　*Halcyon coromanda*

全長:25-27cm　翼長:♂116.5-126mm ♀114-127mm　ふ蹠長:♂16.1-20.7mm ♀15.7-20.1mm　体重:♂80-129g ♀94-147g

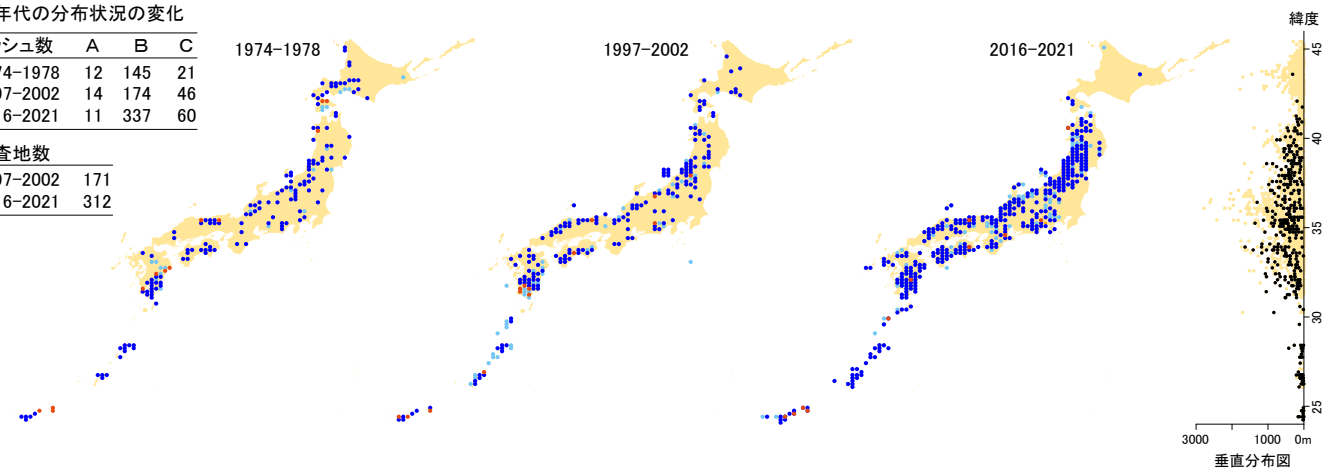
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	12	145	21
1997-2002	14	174	46
2016-2021	11	337	60

調査地数

1997-2002	171
2016-2021	312



全国の森林で夏鳥として繁殖する。渓流沿いなどの湿った森林を好み，朽ち木に穴を掘って営巣する。1970 年代以降，全国の分布は拡大傾向にあるが，北海道だけは減少傾向にある。1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の全国の記録では，171 地点から 312 地点へと増加していたのに対して，北海道では 11 地点から 3 地点に減少していた。

カワセミ　分類:ブッポウソウ目カワセミ科　Common Kingfisher　*Alcedo atthis*

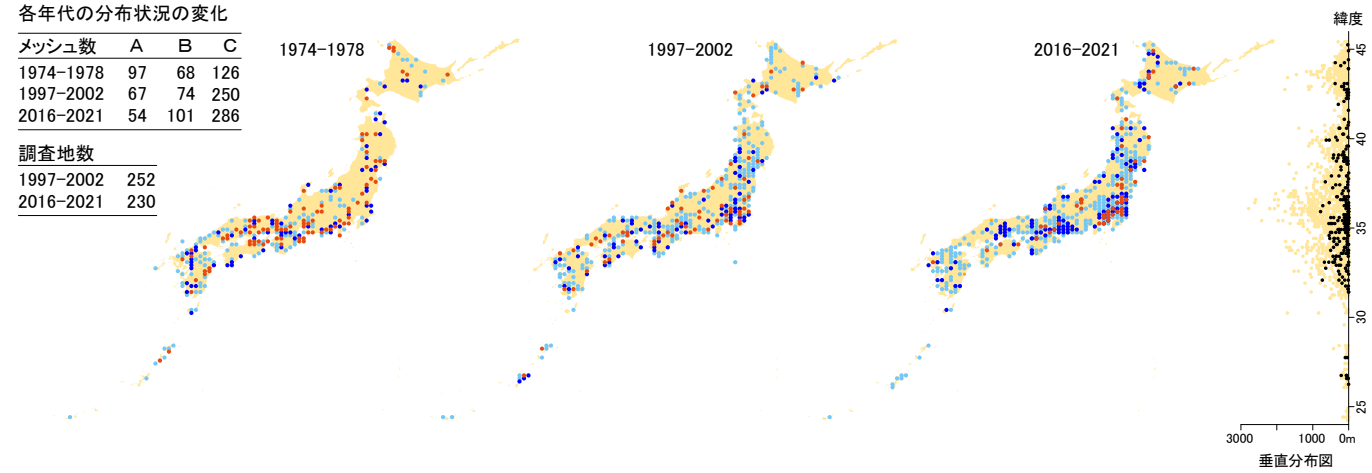
全長:16.0–17.6cm　翼長:68–75mm　ふ蹠長:9–10mm　体重:24.0–34.2 g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	97	68	126
1997–2002	67	74	250
2016–2021	54	101	286

調査地数	
1997–2002	252
2016–2021	230



全国で留鳥として繁殖し，北海道では夏鳥。河川や湖沼などの土手に穴を掘って繁殖する。1970 年代から 1990 年代にかけて分布が拡大し，都市部では公園などでも見られるようになったが，その後，2010 年代にかけては分布に大きな変化は見られていない。1970 年代からの分布の拡大は，水質が良くなったことに伴う小魚の増加と考えられている(日本野鳥の会東京支部 2015)。

ヤマセミ　分類:ブッポウソウ目カワセミ科　Crested Kingfisher　*Megaceryle lugubris*

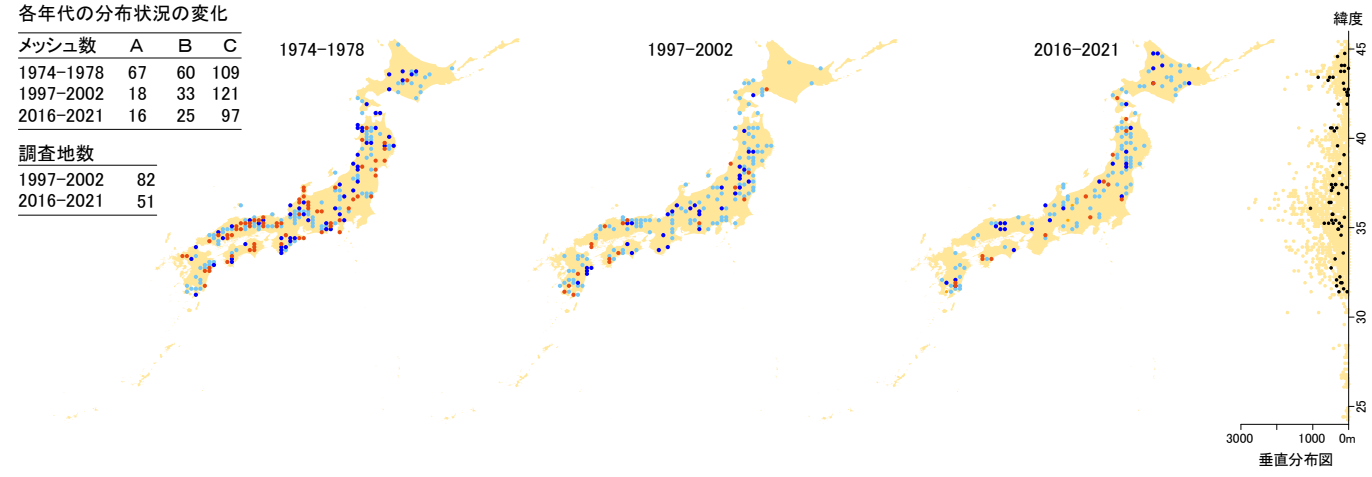
全長:41–43cm　翼長:179–196mm　ふ蹠長:12–15mm　体重:240–305g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	67	60	109
1997–2002	18	33	121
2016–2021	16	25	97

調査地数	
1997–2002	82
2016–2021	51



九州以北で留鳥として繁殖する。山地の渓流や湖沼沿いに生息する。1970 年代以降，分布は縮小を続けている。2010 年代でも，北海道を除き，その傾向は続いており，1990 年代と 2010 年代にほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録では，82 地点から 51 地点へと減少していた。小型の魚食性の鳥の多くが減少しており，小型の魚など食物の減少が考えられるが，ヤマセミでは，アユ釣りなどの釣り人の影響により，雛への給餌が減少することも報告されている(笠原・加藤 2007)。

ブッポウソウ　分類:ブッポウソウ目ブッポウソウ科　Oriental Dollarbird　*Eurystomus orientalis*

全長:27.8–30.5cm　翼長:180–200mm　ふ蹠長:18–20mm　体重:118.5–157.5g

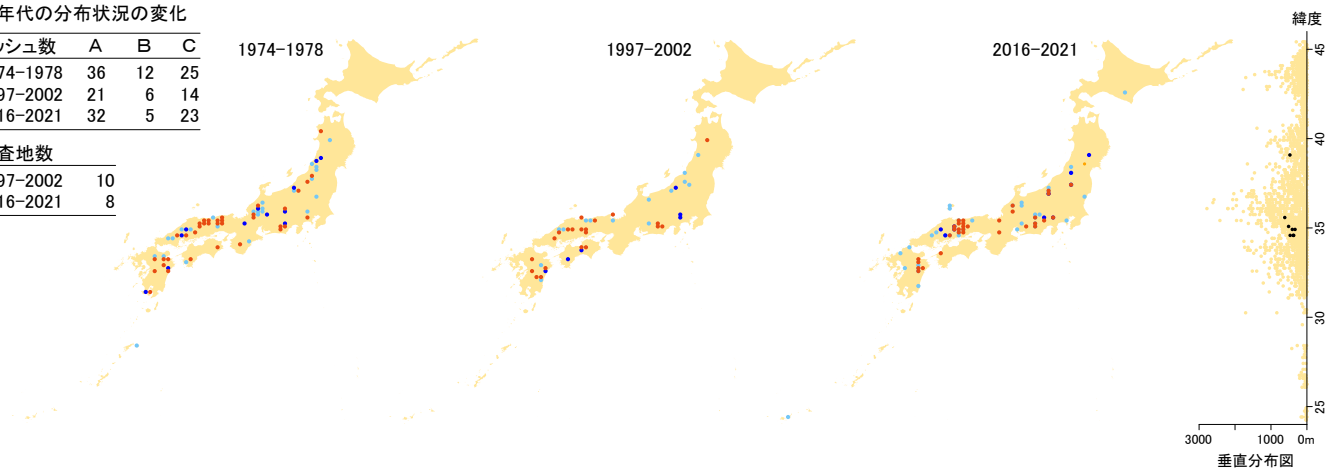
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	36	12	25
1997–2002	21	6	14
2016–2021	32	5	23

調査地数

1997–2002	10
2016–2021	8



本州以南に夏鳥として渡来するが北海道でも記録がある。樹洞で営巣し，巣箱も利用する。1970年代から1990年代にかけて減少したが，中国山地では巣箱をつかった保護活動により個体数が増加しており，その効果もあってか，2010年代には記録メッシュ数が増加した。

アリスイ　分類:キツツキ目キツツキ科　Eurasian Wryneck　*Jynx torquilla*

全長:16.4–18.3cm　翼長:♂74.6–79.2mm ♀75.6–80.0mm　ふ蹠長:♂19.7–21.9mm ♀19.3–23.1mm　体重:♂32.6–46.0g ♀37.7–42.4g

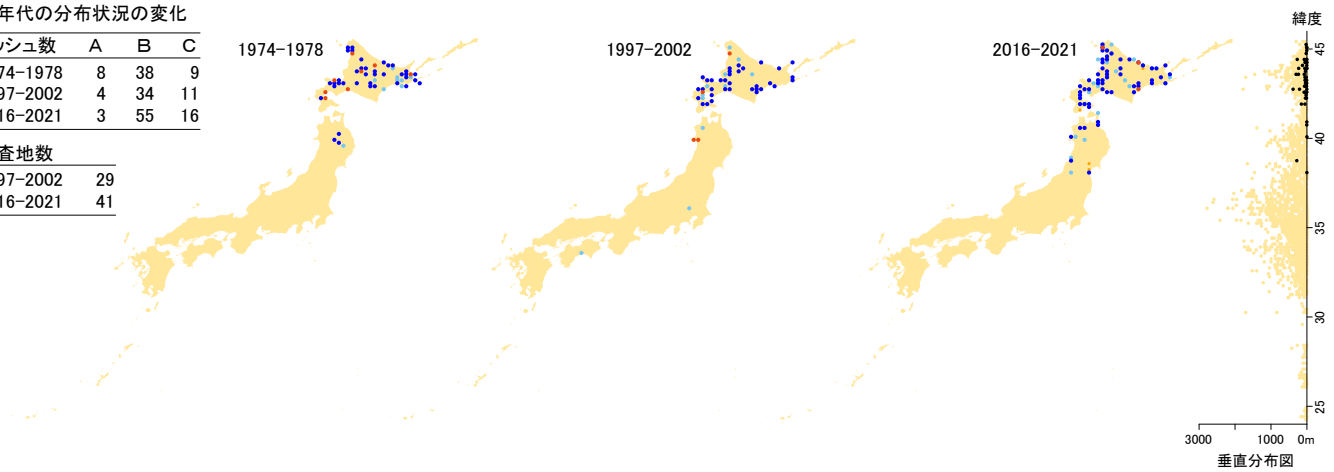
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	38	9
1997–2002	4	34	11
2016–2021	3	55	16

調査地数

1997–2002	29
2016–2021	41



本州北部以北で夏鳥，それ以南では冬鳥。樹洞やキツツキの古巣，巣箱などで営巣する。ヨーロッパでは 19 世紀の中頃以降に大幅に分布域が減少した(Monk 1963)。2010 年代では過去 2 回の調査と比べて記録メッシュ数が増えており，ほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，アリスイを記録した地点数は 29 地点から 41 地点へと増加していた。

コゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Japanese Pygmy Woodpecker　*Dendrocopos kizuki*

全長:15cm　翼長:♂76-88mm ♀79-91mm　ふ蹠長:♂13.4-15.7mm ♀13.7-16.3mm　体重:♂17.8-22.8g ♀19.3-26.4g

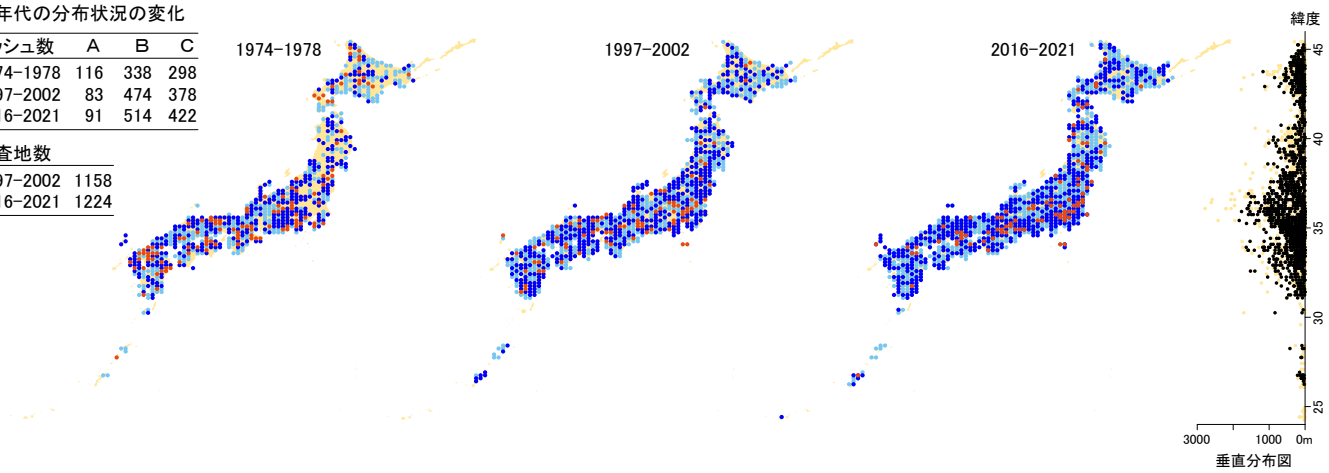
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	116	338	298
1997-2002	83	474	378
2016-2021	91	514	422

調査地数

1997-2002	1158
2016-2021	1224



全国に留鳥として分布する。西表島では生息密度が低い。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュは増加傾向である。特に 1990 年代以降は都市の緑地などで繁殖するようになって分布の拡大が顕著である(植田・佐藤 2021)。

コアカゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Lesser Spotted Woodpecker　*Dendrocopos minor*

嘴峰長:14-20mm　翼長:89-98mm　ふ蹠長:11-15mm　尾長:57-64mm

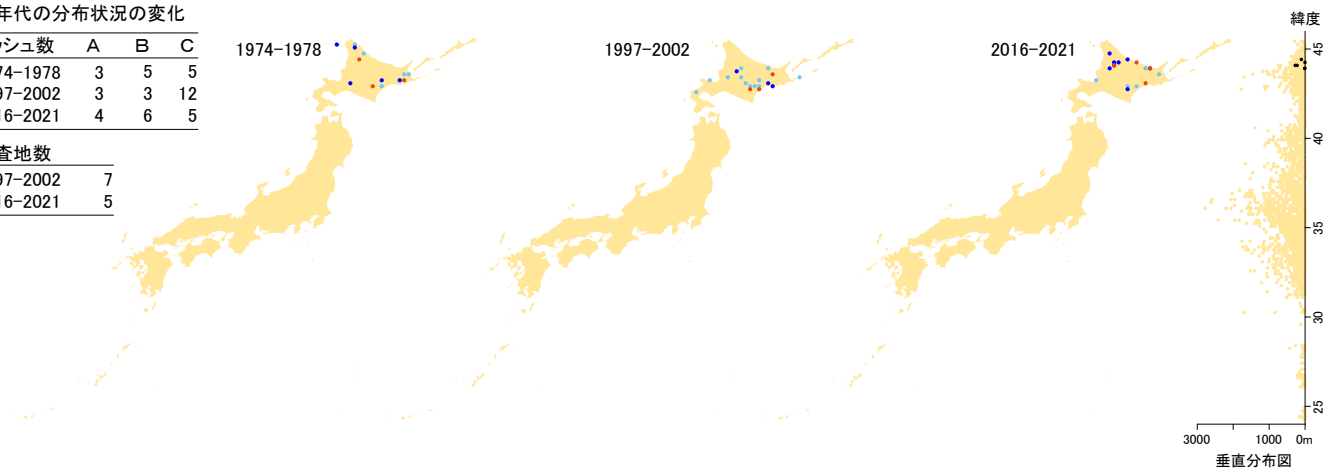
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	3	5	5
1997-2002	3	3	12
2016-2021	4	6	5

調査地数

1997-2002	7
2016-2021	5



主に北海道東部の標高 300m 以下の平野部にある都市の緑地，農耕地内の残存林，河畔林に留鳥として局所的に分布する。山地の森林には生息しない。局所的に分布し，記録メッシュ数も少ないため，分布の変化は不明である。

オオアカゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　White-backed Woodpecker　*Dendrocopos leucotos*

(オーストンオオアカゲラ)　翼長:♂149-161mm ♀147-152mm　ふ蹠長:♂25.2-30.0mm ♀27.7-30.3mm　体重:♂152.3g

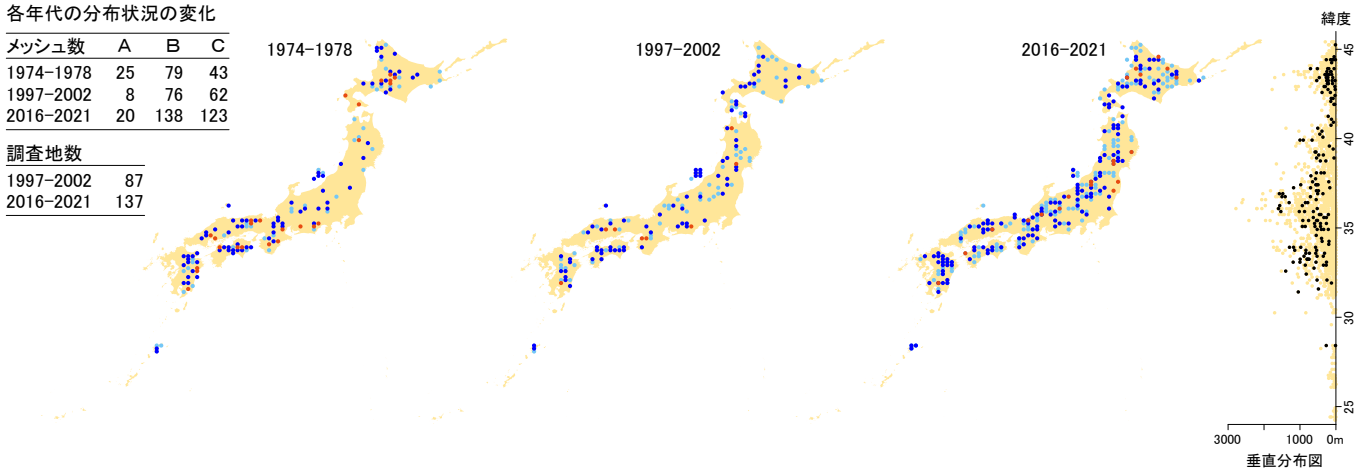
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類(亜種オーストンオオアカゲラ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	25	79	43
1997-2002	8	76	62
2016-2021	20	138	123

調査地数

1997-2002	87
2016-2021	137



北海道から奄美大島にかけて留鳥として分布する。亜種オーストンオオアカゲラは奄美大島のみに分布する。主に広葉樹林に生息する。1990 年代までと比べて分布は全国的に増加傾向にあり，ほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，オオアカゲラを記録した地点数は 87 地点から 137 地点へと増加していた。

アカゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Great Spotted Woodpecker　*Dendrocopos major*

全長:24cm　翼長:122.0-130.0mm　ふ蹠長:♂20.3-23.8mm ♀20.0-23.5mm　体重:61.0-86.0g

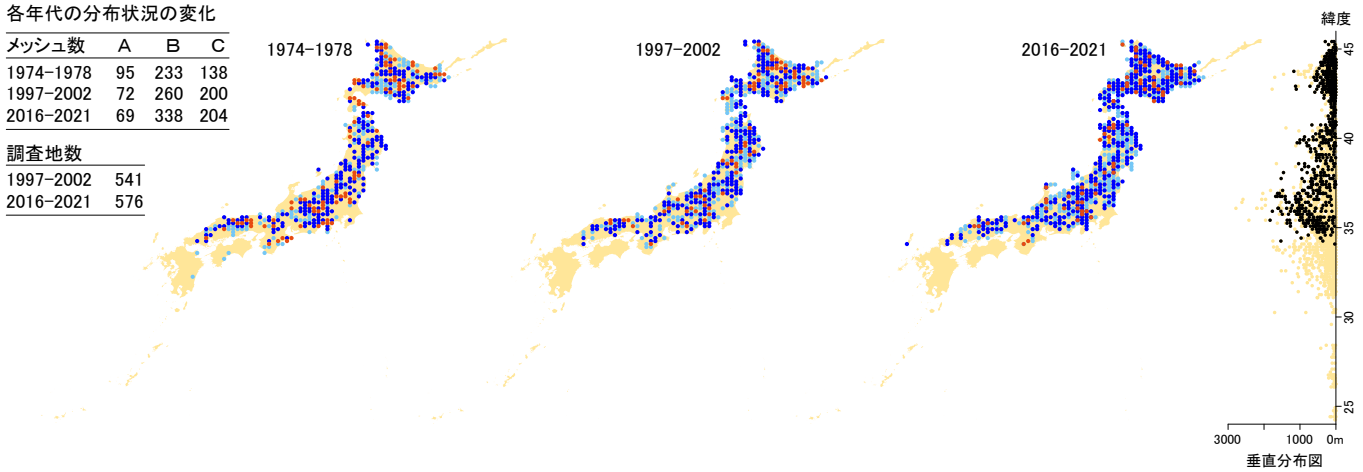
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	95	233	138
1997-2002	72	260	200
2016-2021	69	338	204

調査地数

1997-2002	541
2016-2021	576



北海道に亜種エゾアカゲラ，本州と佐渡，対馬に亜種アカゲラが留鳥として分布する。北海道では都市や農耕地の分断化された林にも生息する。1970 年代以降分布は拡大しており，確認メッシュ数は増加している。これは全国的な傾向だが分布域の西への拡大もみられている。

クマゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Black Woodpecker　*Dryocopus martius*

全長:45cm　翼長:♂233-258mm ♀228-254mm　ふ蹠長:34.0-38.5mm

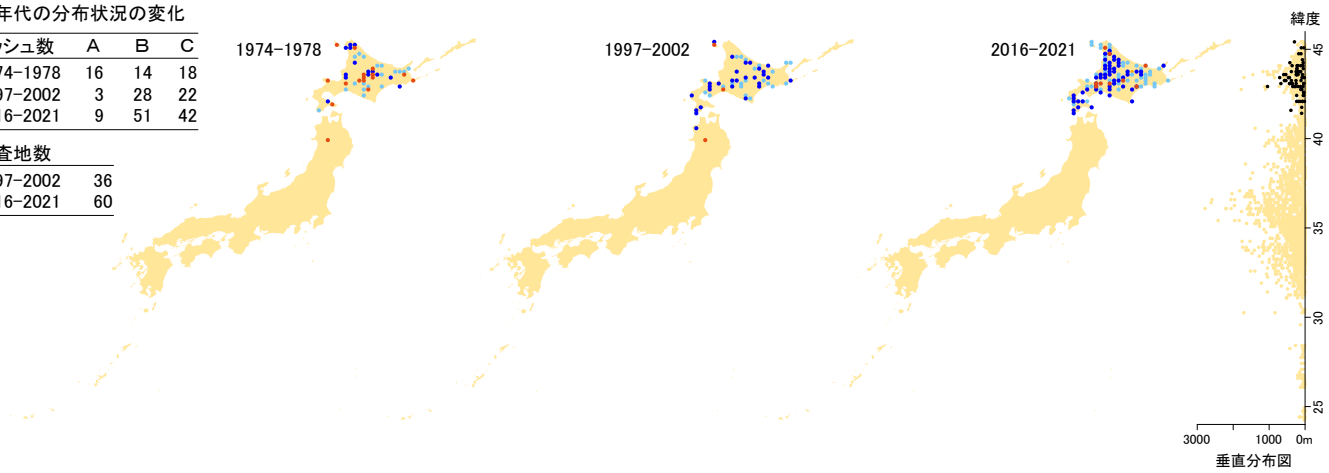
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	16	14	18
1997-2002	3	28	22
2016-2021	9	51	42

調査地数

1997-2002	36
2016-2021	60



本州ではブナ林に生息するが，北海道ではトドマツなどの針葉樹林に生息することが多い。本州での記録は 2010 年代にはなくなったが，北海道では記録メッシュ数が増え，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，36 地点から 60 地点へと増加していた。

アオゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Japanese Green Woodpecker　*Picus awokera*

全長:27.6-29.7cm　翼長:140-145mm　ふ蹠長:25-30mm　体重:103-138g

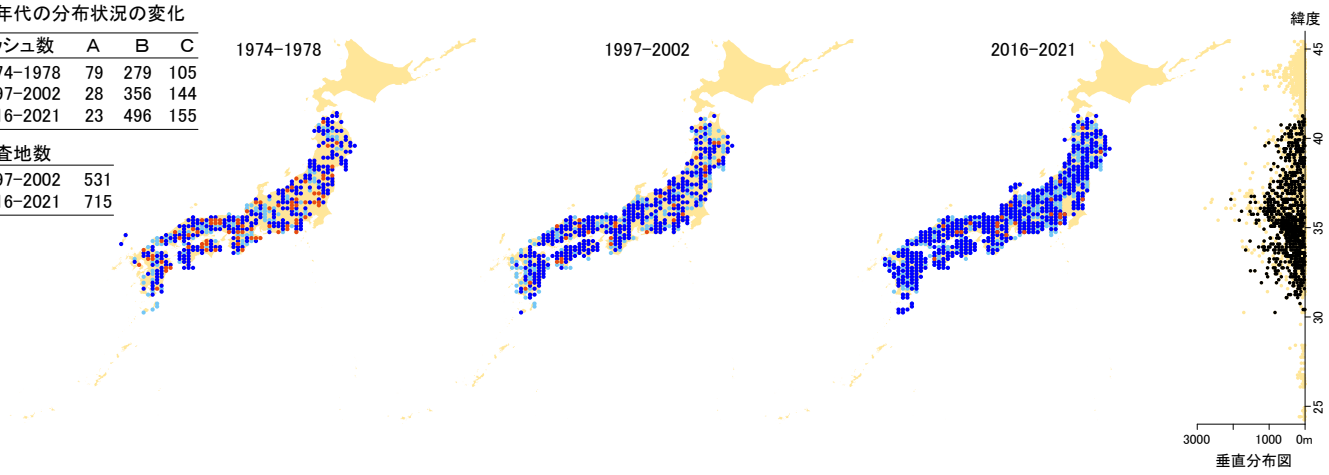
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	79	279	105
1997-2002	28	356	144
2016-2021	23	496	155

調査地数

1997-2002	531
2016-2021	715



本州以南の平野部から山地に留鳥として分布する。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュが増加傾向にあり，特に東北地方の分布拡大や，都市部での小規模な緑地への分布拡大が顕著である。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，アオゲラが記録できた地点数は，531 地点から 715 地点へと増加していた。

ヤマゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Grey-headed Woodpecker　*Picus canus*

環境省レッドリスト:　—

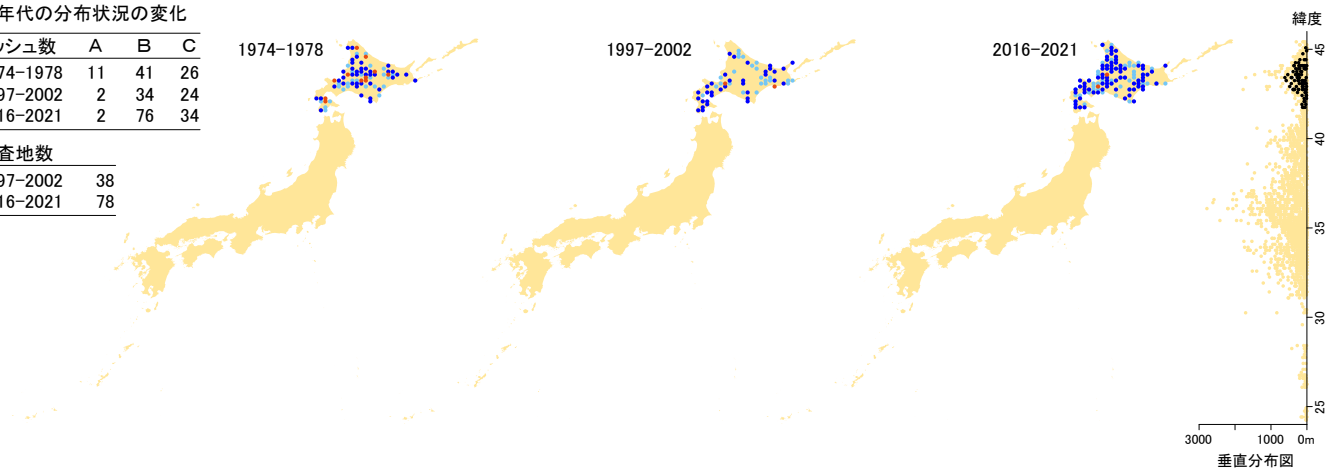
全長:28.3-30.7cm　　翼長:144-150mm　　ふ蹠長:25-29mm　　体重:118-168g

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	11	41	26
1997-2002	2	34	24
2016-2021	2	76	34

調査地数

1997-2002	38
2016-2021	78



北海道の離島を除く平野部から山地に留鳥として分布する。針広混交林や落葉広葉樹林に生息する傾向があり，常緑針葉樹林やカラマツの人工林での出現率は低く，ハイマツ林には生息しない。アカゲラと比べると山に近い森林に生息する傾向がある。2010 年代では記録メッシュ数は大幅に増加しており，1990 年代とほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，38 地点から 78 地点へと増加していた。

ノグチゲラ　分類:キツツキ目キツツキ科　Okinawa Woodpecker　*Sapheopipo noguchii*

全長:30cm　翼長:♂149.0-160.0mm ♀141.0-162.0mm　ふ蹠長:♂28.4-30.9mm ♀27.5-31.2mm　体重:♂133.0-162.0g ♀116.0-150.0g

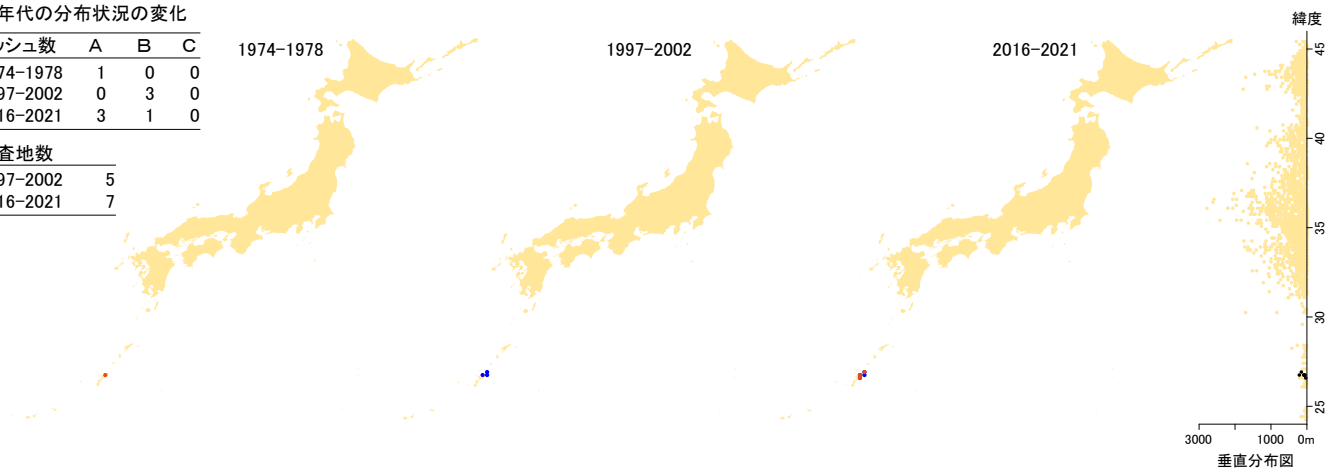
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	1	0	0
1997-2002	0	3	0
2016-2021	3	1	0

調査地数

1997-2002	5
2016-2021	7



沖縄島北部の樹齢 40 年以上の照葉樹林に分布する。イタジイ，タブノキなどの林に生息するが，近年では，二次林やマツノザイセンチュウの被害を受けたリュウキュウマツ林などでも営巣が確認されるようになってきている。2010 年代調査でも沖縄島北部で記録された。

チョウゲンボウ　分類:ハヤブサ目ハヤブサ科　Common Kestrel　*Falco tinnunculus*

全長:33.0–38.5cm　翼長:♂221–263mm ♀240–267mm　ふ蹠長:37–45mm　体重:♂170–210g ♀122–202g

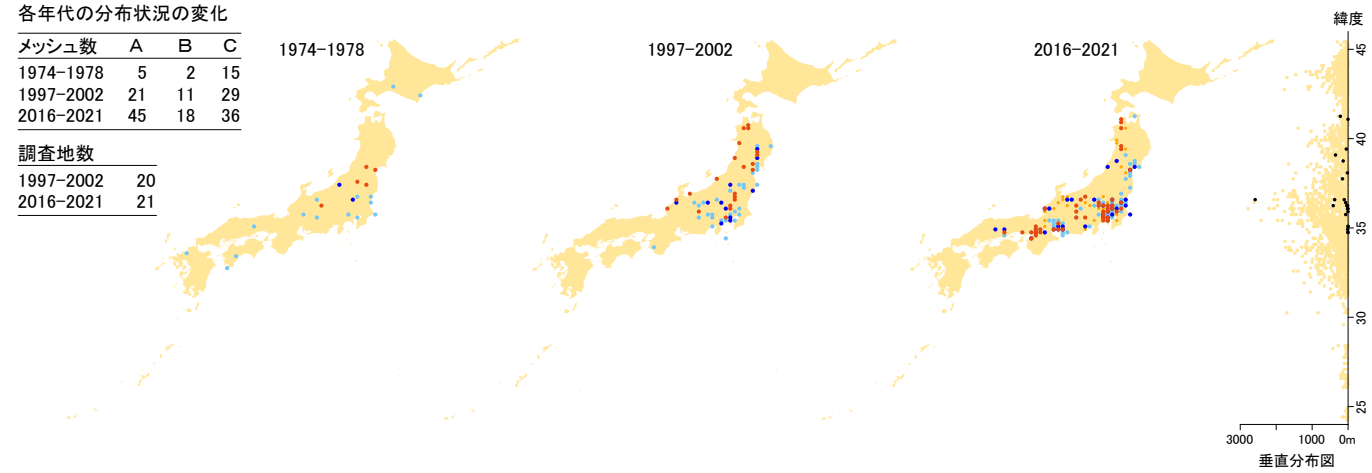
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	2	15
1997–2002	21	11	29
2016–2021	45	18	36

調査地数

1997–2002	20
2016–2021	21



主に東日本に留鳥として分布するが，北海道では珍しい。西日本には主に冬鳥として分布する。1970 年代では山地の崖に営巣していたが，1990 年代以降は平地の都市部にあるビルや橋などの人工物にも営巣するようになった。2010 年代では近畿地方や中国地方でも繁殖が確認された。

チゴハヤブサ　分類:ハヤブサ目ハヤブサ科　Eurasian Hobby　*Falco subbuteo*

嘴峰長:13mm　翼長:♂244–272mm ♀265–280mm ♀141.0–162.0mm　ふ蹠長:36–38mm　体重:150–222g

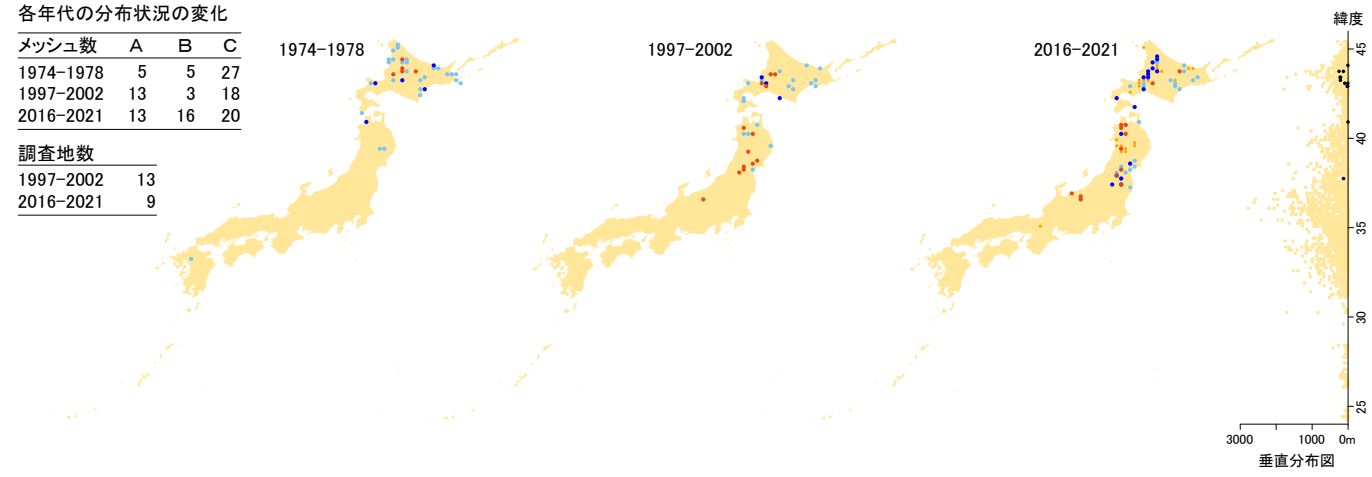
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	5	27
1997–2002	13	3	18
2016–2021	13	16	20

調査地数

1997–2002	13
2016–2021	9



北海道や本州中部以北にかけて夏鳥として分布する。草原や農耕地，疎林などに生息する。樹上のカラス類やカケス，ハイタカなどの鳥の古巣をつかって営巣する。北海道では繁殖確認数が減少しており，青森県西部でも 2000 年代から営巣地の数が半減していることが報告されているが(立石 2017)，福島などでは分布が南下していた。

ハヤブサ　分類:ハヤブサ目ハヤブサ科　Peregrine Falcon　*Falco peregrinus*

全長:♂35–40cm ♀45–50cm　翼長:♂305–333mm ♀348–378mm　ふ蹠長:♂43–48mm ♀52–57mm　体重:♂500–680g ♀800–1200g

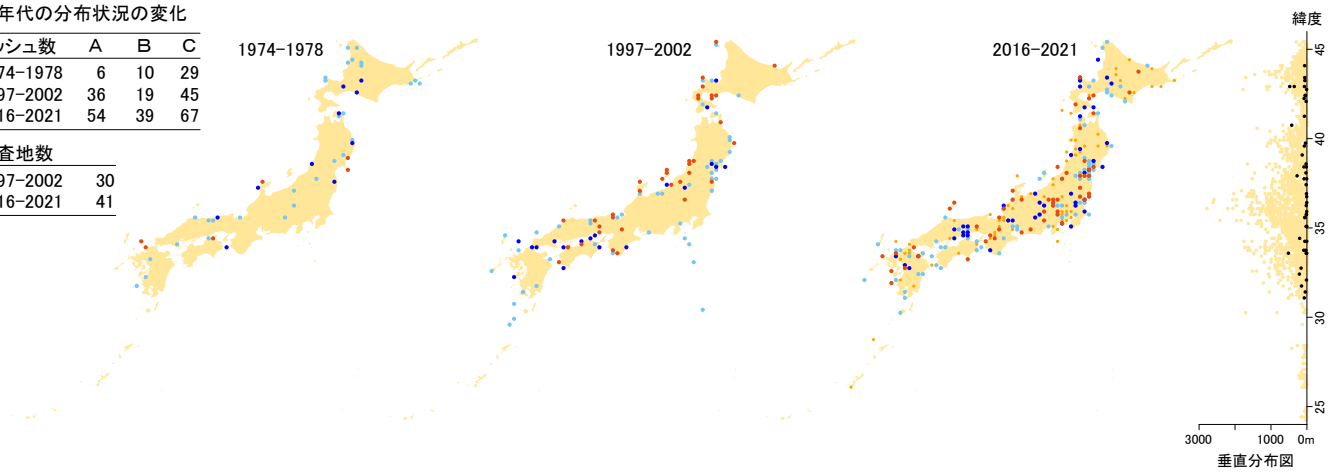
環境省レッドリスト:　絶滅(亜種シマハヤブサ, 絶滅危惧 II 類(亜種ハヤブサ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	6	10	29
1997–2002	36	19	45
2016–2021	54	39	67

調査地数

1997–2002	30
2016–2021	41



北海道から九州の平地から山地に留鳥として分布し, 海岸や山地の断崖で繁殖する。都市のビルなどの人工物で繁殖することもある。記録メッシュ数は 1970 年代から 1990 年代の間に大幅に増加し, 2010 年代もさらに増加した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても, ハヤブサが記録できた地点数は, 30 地点から 41 地点へと増加していた。伊豆諸島では 1990 年代には広く生息が確認されたが, 2010 年代にはほとんど記録されなかった。

ヤイロチョウ　分類:スズメ目ヤイロチョウ科　Fairy Pitta　*Pitta nympha*

全長:16.0–19.5cm　翼長:118–127mm　ふ蹠長:38–42mm　体重:67.5–155g

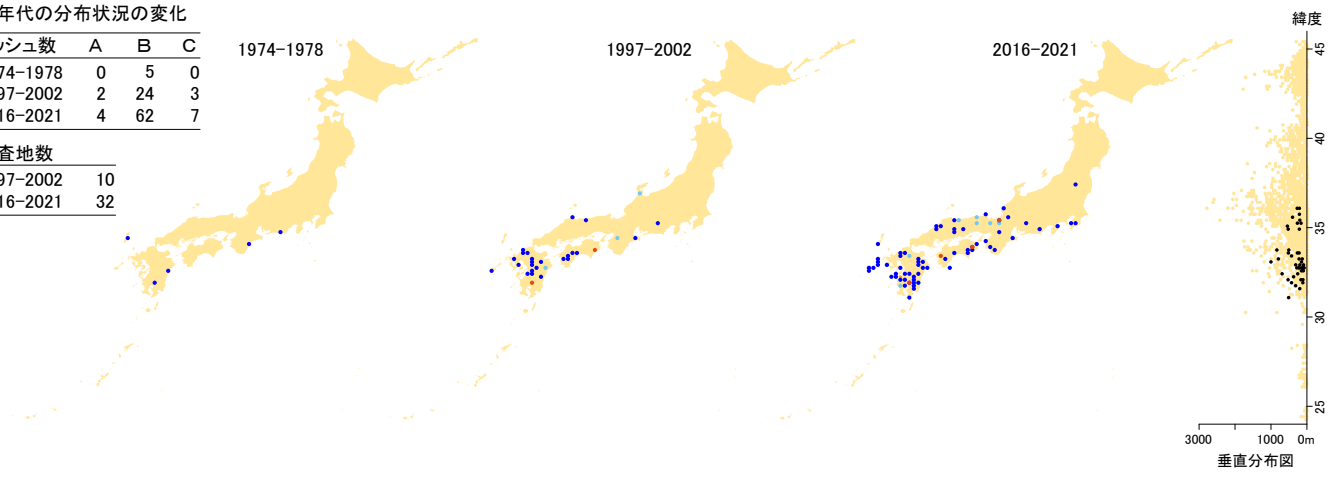
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	5	0
1997–2002	2	24	3
2016–2021	4	62	7

調査地数

1997–2002	10
2016–2021	32



主に本州中部から九州にかけて夏鳥として分布する。主に低山にある渓流沿いの広葉樹林に生息する。広葉樹林に隣接するスギやヒノキの植林地などで繁殖することもある。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数は増加傾向にあり, 分布が北上している。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても, ヤイロチョウが記録できた地点は, 10 地点から 32 地点へと増加していた。

サンショウクイ　分類:スズメ目サンショウクイ科　Ashy Minivet　*Pericrocotus divaricatus*

全長:18.9–20.5cm　翼長:93–100mm　ふ蹠長:15–17mm　体重:19–26g

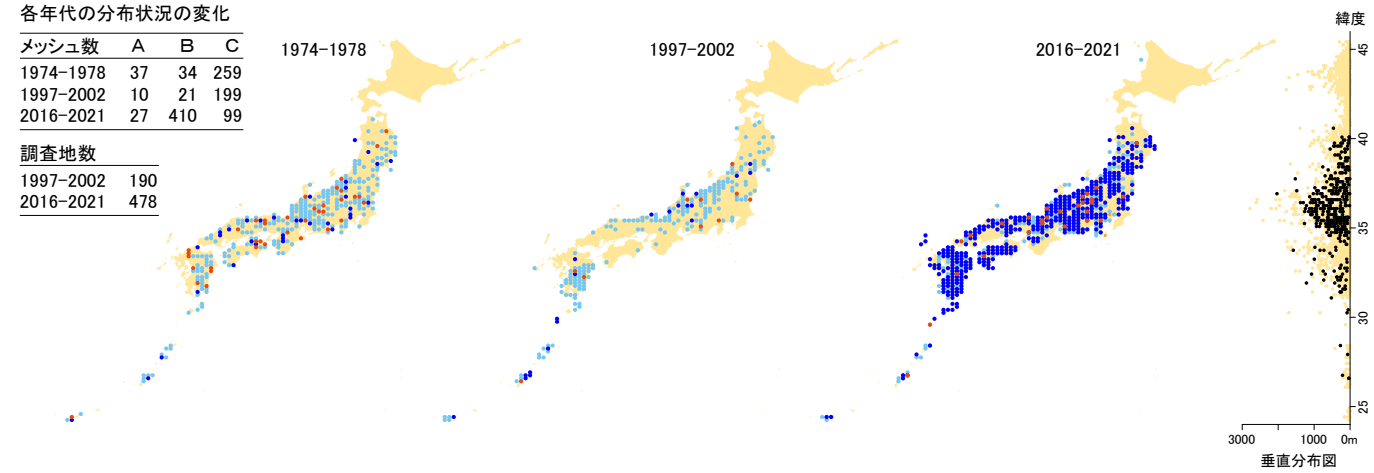
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	37	34	259
1997–2002	10	21	199
2016–2021	27	410	99

調査地数

1997–2002	190
2016–2021	478



北海道と伊豆諸島を除く全国に夏鳥として分布する。この分布図は種サンショウクイとして，示しているため，亜種リュウキュウサンショウクイのデータも含んだものである。1970 年代から 1990 年代にかけては，特に太平洋側で記録メッシュ数が減少したが，2010 年代は一転して記録メッシュ数が大幅に増加した。ただし，山陽地方や紀伊半島では記録メッシュが少ない。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，190 地点から 478 地点へと増加していた。

リュウキュウサンショウクイ　分類:スズメ目サンショウクイ科　Ryukyu Minivet　*P d tegimae*

嘴峰長:11.87±1.03mm　翼長:85.27±1.79mm　ふ蹠長:16.1±0.40mm　Mikami（2016）の沖縄のデータ

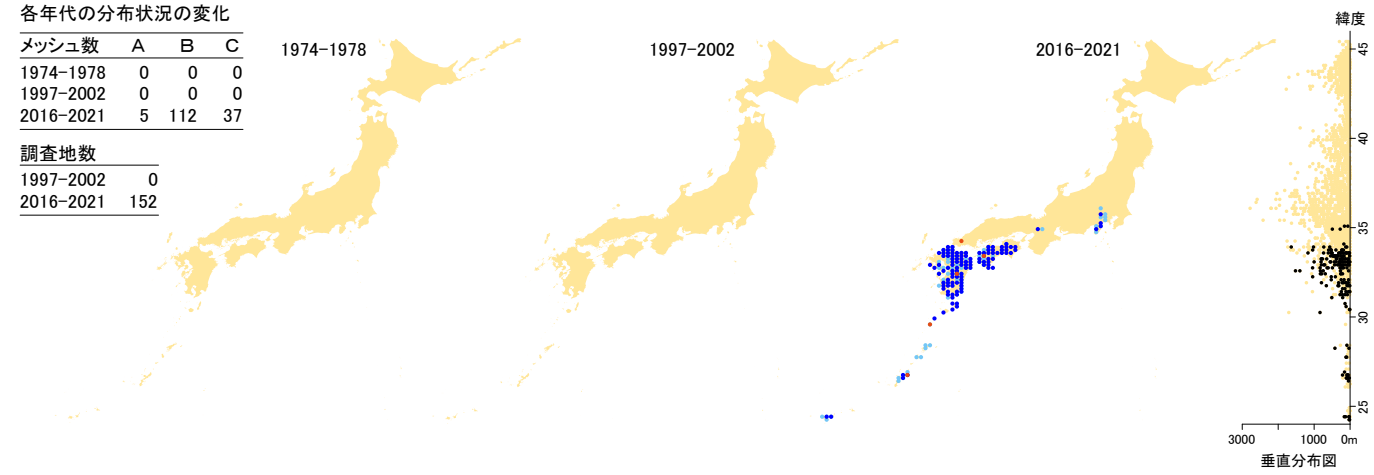
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	5	112	37

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	152



サンショウクイの亜種だが，別の分布図として示した。1970 年代と 1990 年代では亜種サンショウクイと亜種リュウキュウサンショウクイを区別して記録していなかったため，2010 年代しか示されていない。亜種リュウキュウサンショウクイは留鳥であるため，越冬期の分布を考えると，1990 年代までは，南九州に分布していたのが，2010 年代は太平洋側で分布を北上させたものと考えられる。1980 年代までに亜種サンショウクイが減少した場所に進出したと考えられている（三上・植田 2011）。

サンコウチョウ　分類:スズメ目カササギヒタキ科　Japanese Paradise Flycatcher　*Terpsiphone atrocaudata*

全長:17.3–44.7cm　翼長:84–95mm　ふ蹠長:13–16mm　体重:19–29g

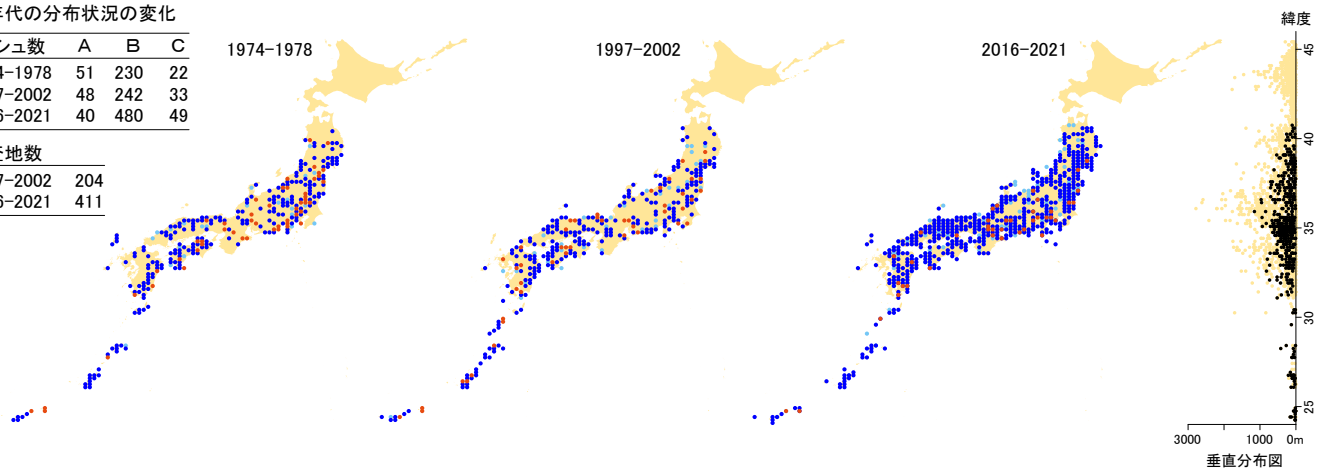
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	51	230	22
1997–2002	48	242	33
2016–2021	40	480	49

調査地数

1997–2002	204
2016–2021	411



亜種サンコウチョウが北海道を除く屋久島以北の地域に夏鳥として分布する。南西諸島には亜種リュウキュウサンコウチョウが夏鳥として分布する。1990 年代から 2010 年代にかけて記録メッシュ数が大幅に増加した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，サンコウチョウが記録できた地点は，204 地点から 411 地点へと増加していた。

チゴモズ　分類:スズメ目モズ科　Tiger Shrike　*Lanius tigrinus*

全長:16.4–18.4cm　翼長:81–90mm　ふ蹠長:21–24mm　体重:26–33g

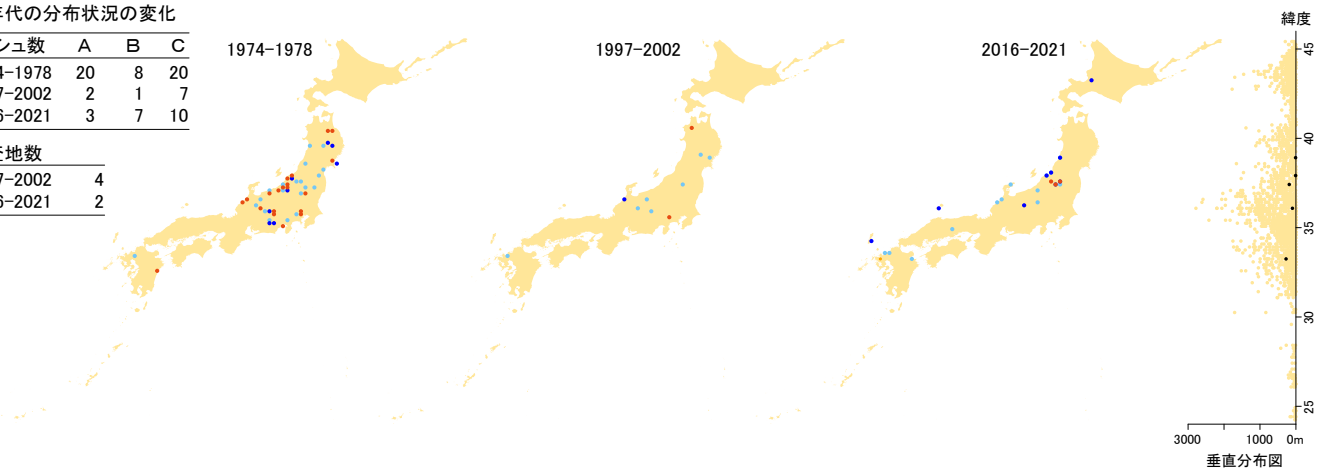
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	20	8	20
1997–2002	2	1	7
2016–2021	3	7	10

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	2



南西諸島と伊豆諸島を除く全国の平地から低山の林縁部や疎林に夏鳥として分布する。モズやアカモズと比べて樹木が茂る環境に生息する傾向がある。1970 年代では太平洋側にも記録があったが，その後 2 回の調査では記録メッシュ数が激減している。2010 年代では日本海側で記録メッシュ数が微増した。

モズ　分類:スズメ目モズ科　Bull-headed Shrike　*Lanius bucephalus*

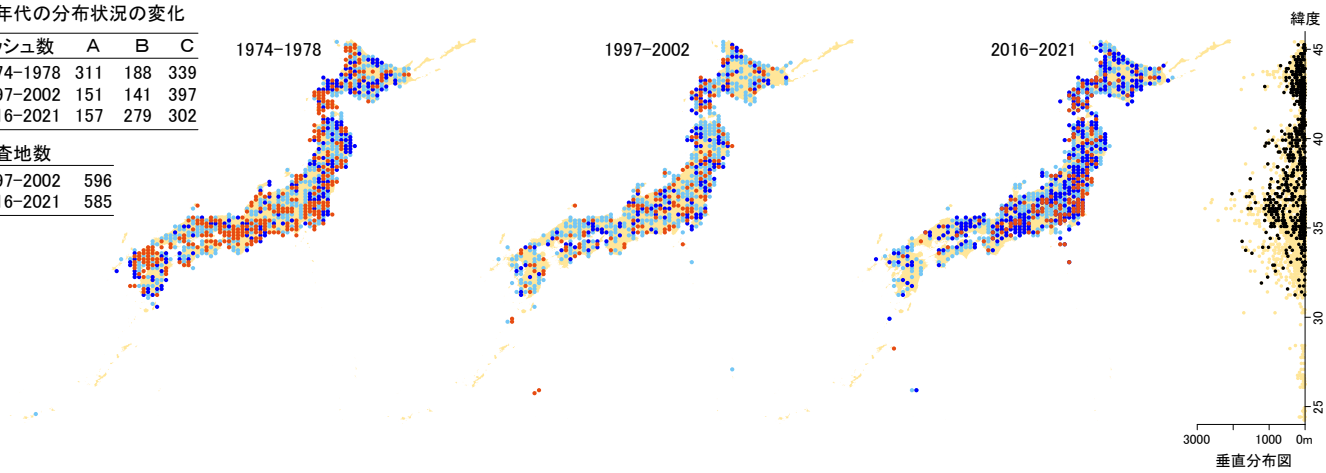
全長:18.5–21.2cm　翼長:♂80.7–89.5mm ♀80.2–88.4mm　ふ蹠長:♂24.2–28.3mm ♀24.1–27.8mm　体重:♂35–46g ♀34–52g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	311	188	339
1997–2002	151	141	397
2016–2021	157	279	302

調査地数	
1997–2002	596
2016–2021	585



全国の平地から山地の疎林，農耕地，市街地などに留鳥として分布する。低木に椀状の巣をつくって営巣する。九州・中国・四国地方では記録メッシュ数が減少傾向にある。小笠原群島では 1980 年代に初めてモズの繁殖が確認され，1990 年代では分布していたが，2010 年代では記録されなかった。

アカモズ　分類:スズメ目モズ科　Brown Shrike　*Lanius cristatus*

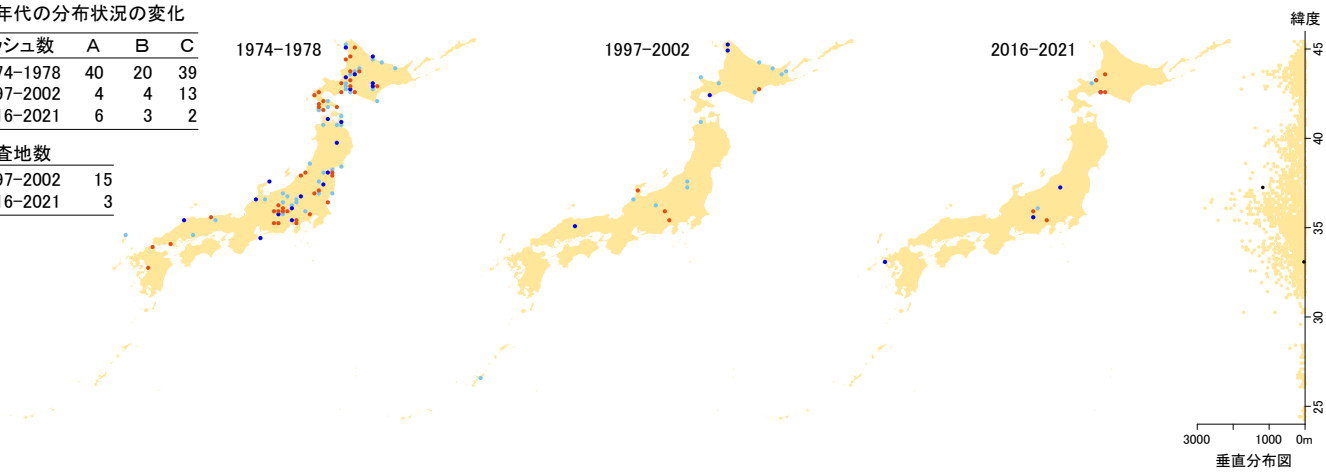
全長:20cm　翼長:♂86.5–90.3mm ♀82.1–89.2mm　ふ蹠長:♂23.1–24.4mm ♀23.1–24.9mm　体重:♂23.9–30.3g ♀24.8–35.0g

環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	40	20	39
1997–2002	4	4	13
2016–2021	6	3	2

調査地数	
1997–2002	15
2016–2021	3



南西諸島と伊豆諸島を除く全国の平地から山地の疎林，果樹林などに夏鳥として分布する。長野県ではリンゴ園に繁殖地が集中している。1970 年代以降，記録メッシュ数が激減した。越冬環境の悪化が減少の一因であると考えられているが，東京都などでは，生息に適した農耕地や里山の環境が消失したことで繁殖が確認されなくなった（植田・佐藤 2021）。

カケス　分類:スズメ目カラス科　Eurasian Jay　*Garrulus glandarius*

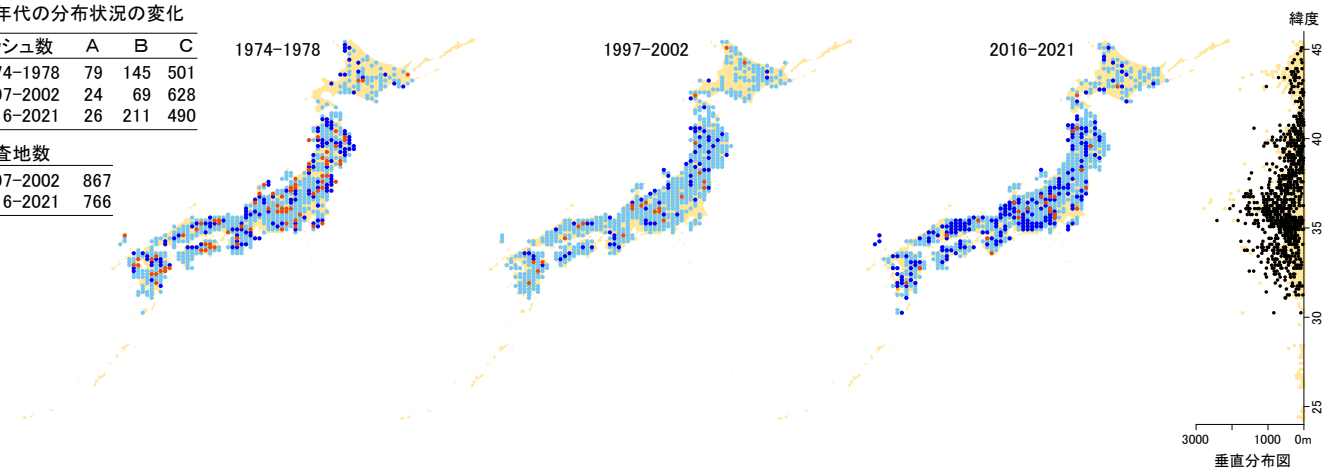
全長:31.5–34.0cm　翼長:155–173mm　ふ蹠長:38–41mm　体重:113–158g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	79	145	501
1997–2002	24	69	628
2016–2021	26	211	490

調査地数	
1997–2002	867
2016–2021	766



南西諸島と伊豆諸島を除く全国に留鳥として分布する。北海道には亜種ミヤマカケスが，佐渡には亜種サドカケスが，屋久島には亜種ヤクシマカケスが生息し，そのほかの地域には亜種カケスが生息する。3 回の調査を通じて，記録メッシュ数の増減はほとんどない。

ルリカケス　分類:スズメ目カラス科　Lidth's Jay　*Garrulus lidthi*

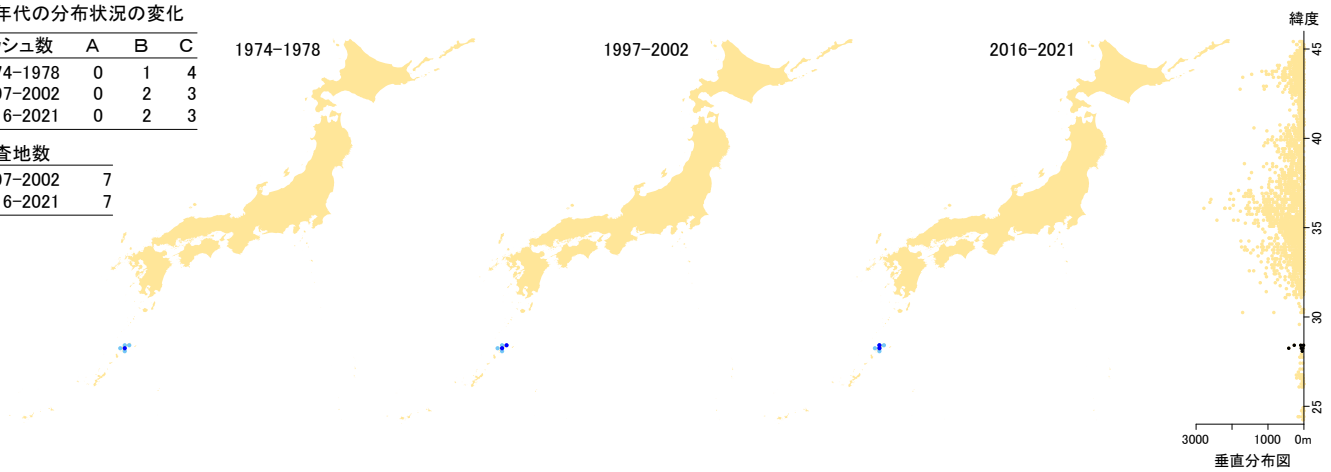
全長:38cm　翼長:169–178mm　ふ蹠長:42.1–46.3mm　体重:♂164.8–210.4g　♀170.5–194.7g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	1	4
1997–2002	0	2	3
2016–2021	0	2	3

調査地数	
1997–2002	7
2016–2021	7



奄美諸島の奄美大島，加計呂麻島，請島にのみ分布する。ジャワマングースの防除や森林環境の回復に伴って個体数が回復したことから，種の保存法の国内希少野生動植物種からも解除された。スダジイのドングリの結実量が繁殖成績に大きな影響を与える(石田 2010)。

オナガ　分類:スズメ目カラス科　Azure-winged Magpie　*Cyanopica cyanus*

全長:31.9–39.0cm　翼長:122–141mm　ふ蹠長:32–35mm　体重:69–96g

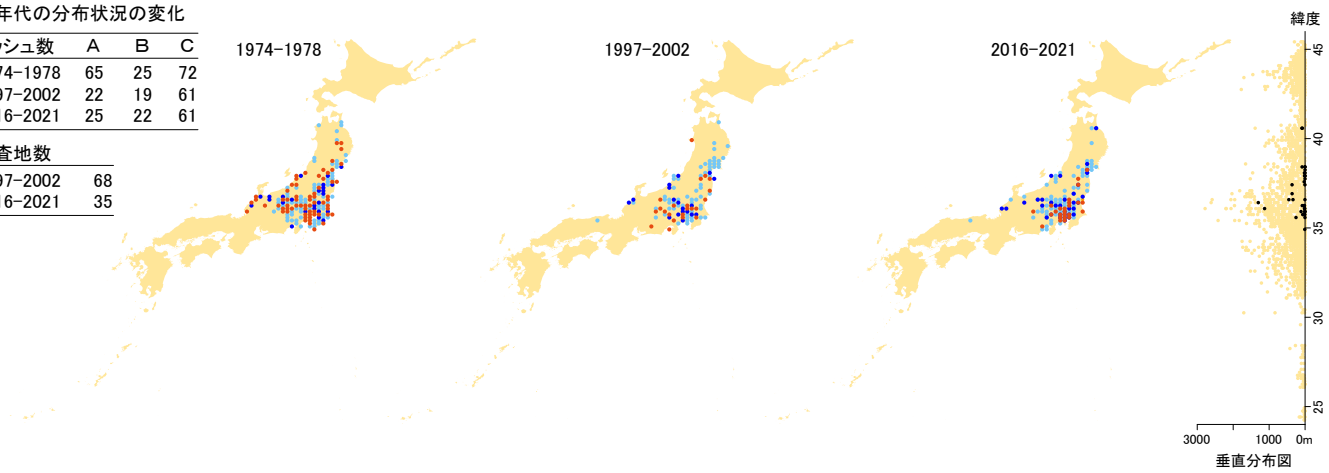
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	65	25	72
1997–2002	22	19	61
2016–2021	25	22	61

調査地数

1997–2002	68
2016–2021	35



本州中部以北の低地から山地の雑木林，市街地の公園などに留鳥として分布する。人家の庭や公園，街路樹に営巣する。緩やかな集団で営巣することが多い。1970 年代の 162 メッシュから 1990 年代には 102 メッシュに減少したが，その後は記録メッシュ数はほとんど変化していない。ただし 1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，68 地点から 35 地点へと減少しており，それも分布の中心域での減少が顕著であり，今後の変化に注意が必要である。

カササギ　分類:スズメ目カラス科　Eurasian Magpie　*Pica pica*

全長:40–48cm　翼長:186–221mm　ふ蹠長:47–55mm　体重:190–287g

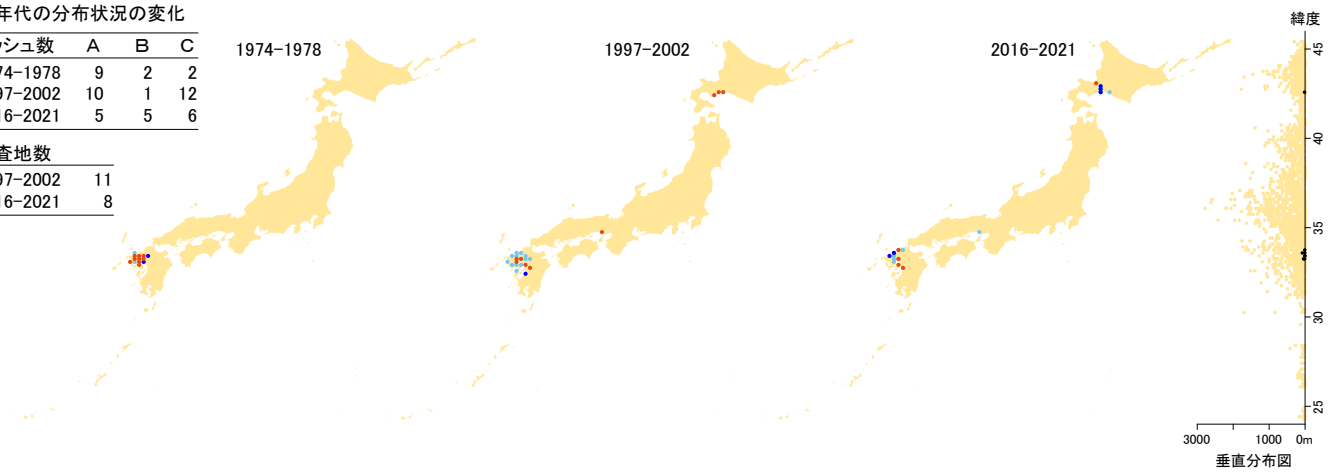
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	9	2	2
1997–2002	10	1	12
2016–2021	5	5	6

調査地数

1997–2002	11
2016–2021	8



九州北部と兵庫県の一部，北海道の苫小牧周辺に留鳥として分布する。北海道の集団はロシア由来であると考えられている。農耕地などに局所的に生息し，高木や電柱の上に枯れ枝や小枝を使ってボール状の巣をつくる。北海道では分布が拡大傾向にある（黒沢・堀本 2015）。

ホシガラス　分類:スズメ目カラス科　Spotted Nutcracker　*Nucifraga caryocatactes*

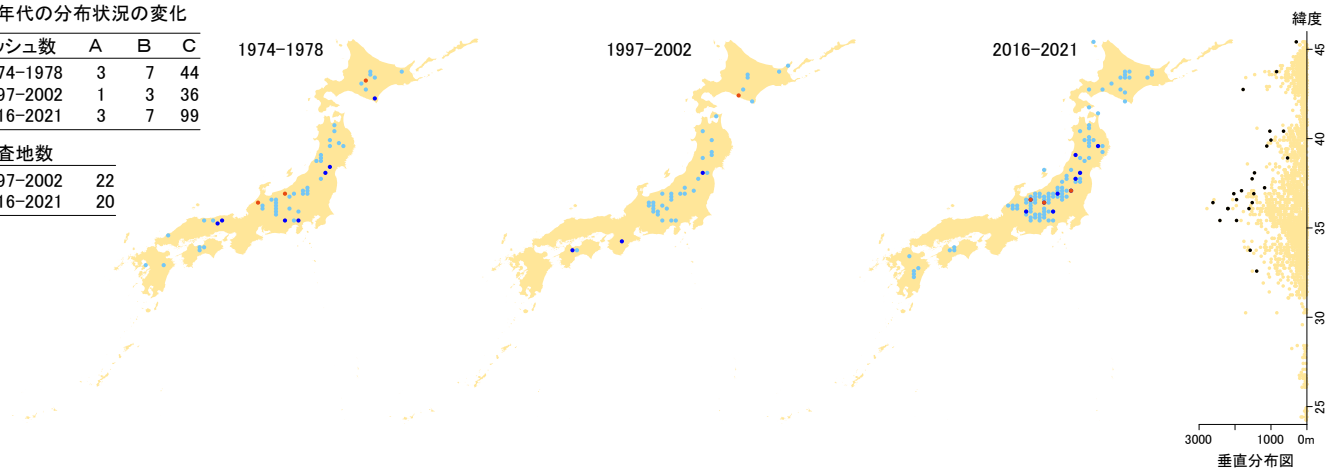
全長:32.5–36.5cm　翼長:178–195mm　ふ蹠長:39–42mm　体重:143–236g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	7	44
1997–2002	1	3	36
2016–2021	3	7	99

調査地数	
1997–2002	22
2016–2021	20



亜高山帯の針葉樹林やハイマツ帯に分布する。過去 2 回の調査と比べて 2010 年代では記録メッシュ数が大きく増加しているが，これは，バードリサーチが実施したホシガラス調査の結果が含まれているためで，1990 年代と2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査で記録できた地点は，22 地点と 20 地点で違いはなく，分布が広がったことを示しているわけではない。

ハシボソガラス　分類:スズメ目カラス科　Carrion Crow　*Corvus corone*

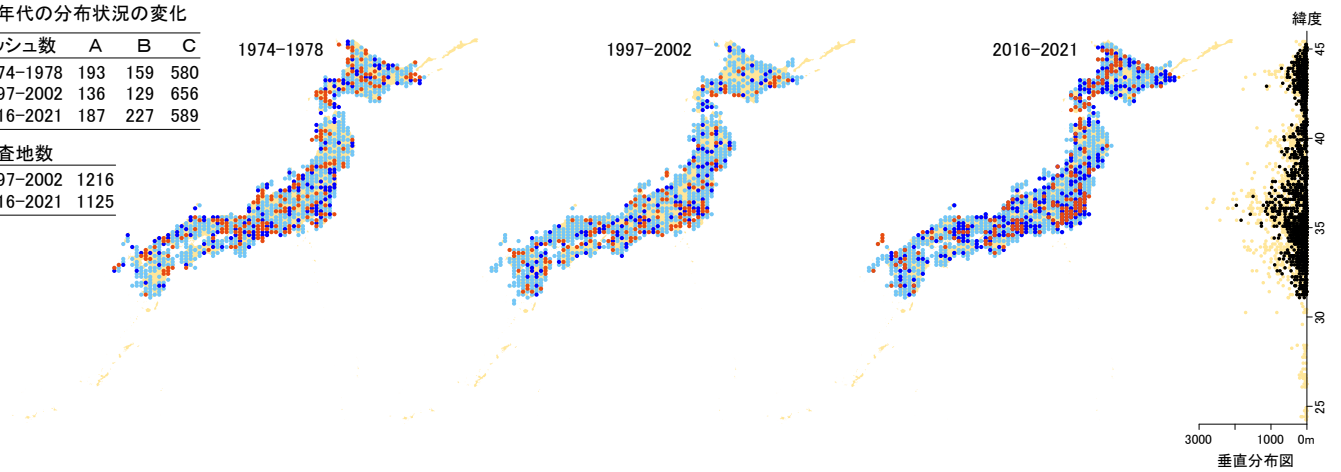
全長:46.2–54.0cm　翼長:♂313–370mm ♀286–354mm　ふ蹠長:♂53.5–68.0mm ♀45.0–65.0mm　体重:♂460–685 ♀370–620g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	193	159	580
1997–2002	136	129	656
2016–2021	187	227	589

調査地数	
1997–2002	1216
2016–2021	1125



南西諸島などの島嶼部を除く全国の市街地，農耕地などに留鳥として分布する。開けた環境を好み，樹上や鉄塔などに営巣する。記録メッシュ数は 2010 年代が最多であったが，現地調査で記録された個体数は 1990 年代の 10,060 羽から 2010 年代は 8,012 羽に減少しており，分布は拡がっていても個体数は減少している可能性がある。

ハシブトガラス　分類:スズメ目カラス科　Large-billed Crow　*Corvus macrorhynchos*

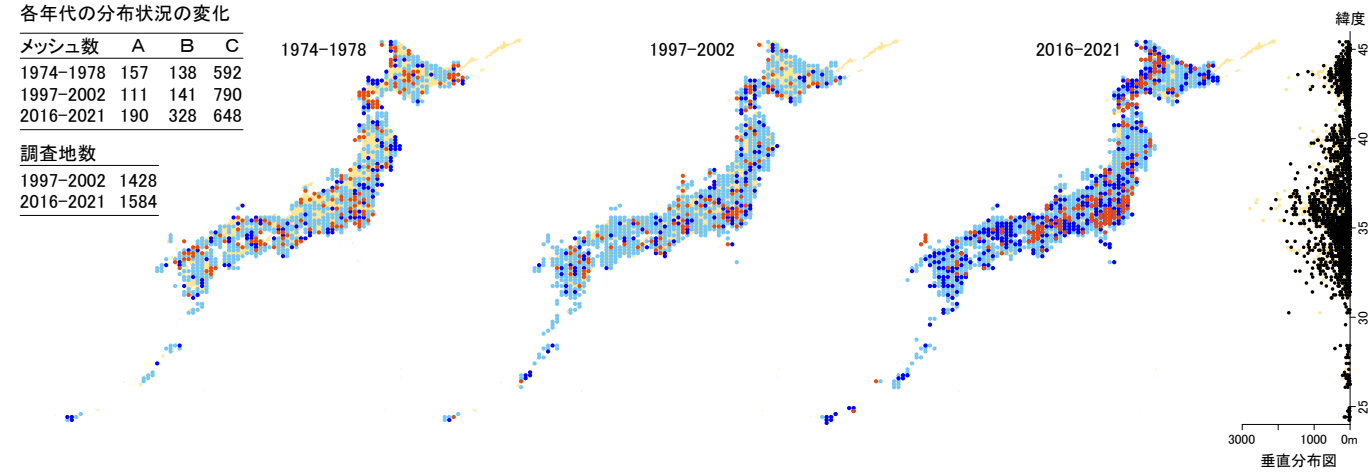
全長:54-60cm　翼長:316-400mm　ふ蹠長:52-69mm　体重:570-895g

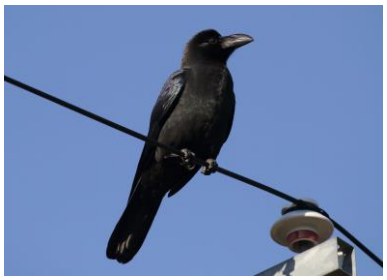
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	157	138	592
1997-2002	111	141	790
2016-2021	190	328	648

調査地数	
1997-2002	1428
2016-2021	1584





全国に留鳥として分布する。対馬に亜種チョウセンハシブトガラス，奄美諸島から宮古諸島にかけて亜種リュウキュウハシブトガラス，八重山諸島に亜種オサハシブトガラス，その他の地域に亜種ハシブトガラスが分布する。ハシボソガラスと比べて標高が高い場所にも生息する。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数は増加傾向にある。

キクイタダキ　分類:スズメ目キクイタダキ科　Goldcrest　*Regulus regulus*

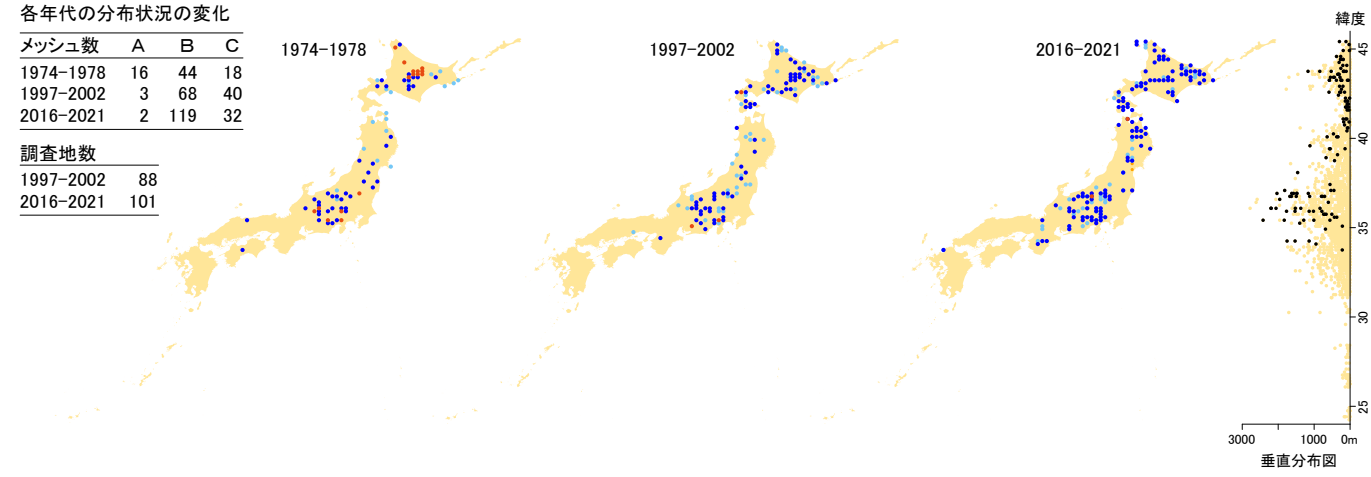
全長:8.9-10.8cm　翼長:52-58mm　ふ蹠長:15-18mm　体重:4.1-7.5g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	16	44	18
1997-2002	3	68	40
2016-2021	2	119	32

調査地数	
1997-2002	88
2016-2021	101



本州中部以北に留鳥として分布し，冬には全国の平地に移動する。北海道では 200m 以下の低地でも繁殖するが，標高 400m 以上の森林に多い。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数は増加しており，西の地域や標高の低い場所へ分布を拡大している傾向がある。

ハシブトガラ　分類:スズメ目シジュウカラ科　Marsh Tit　*Poecile palustris*

翼長:63.3±1.92mm　尾長:54-62mm　体重:12.1±0.7g

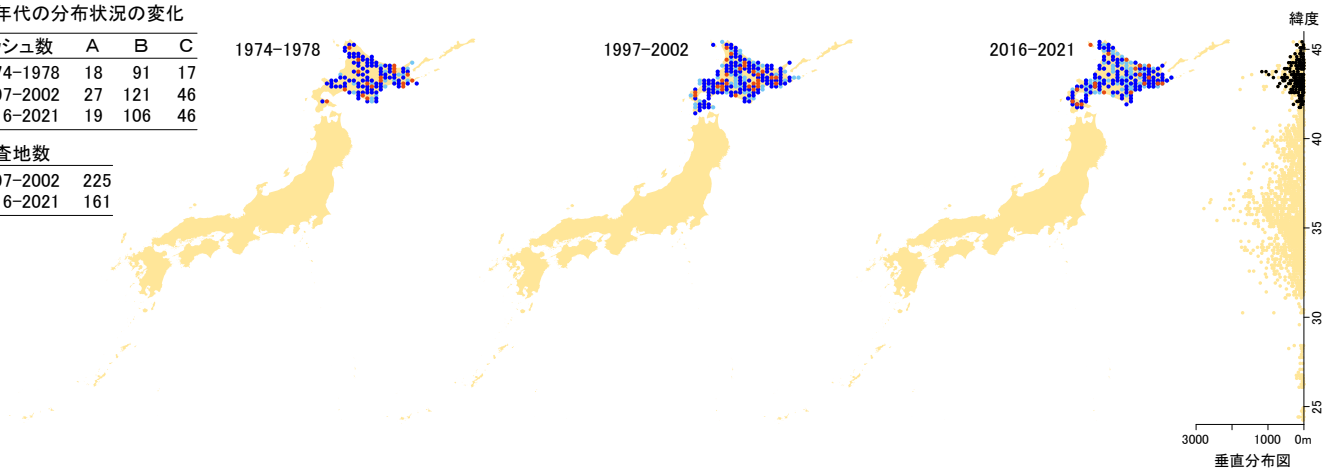
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	18	91	17
1997-2002	27	121	46
2016-2021	19	106	46

調査地数

1997-2002	225
2016-2021	161



北海道に留鳥として分布する。低地から山地まで様々な環境に生息し，特に低地の落葉広葉樹林や水辺の林を好む。記録メッシュ数は 1990 年代よりやや減少しており，1990 年代と2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，225 地点から161 地点へと減少していた。

コガラ　分類:スズメ目シジュウカラ科　Willow Tit　*Poecile montanus*

全長:11.9-12.8cm　翼長:61.5±1.5mm　ふ蹠長:18.5±0.6mm　体重:11.3±0.5g

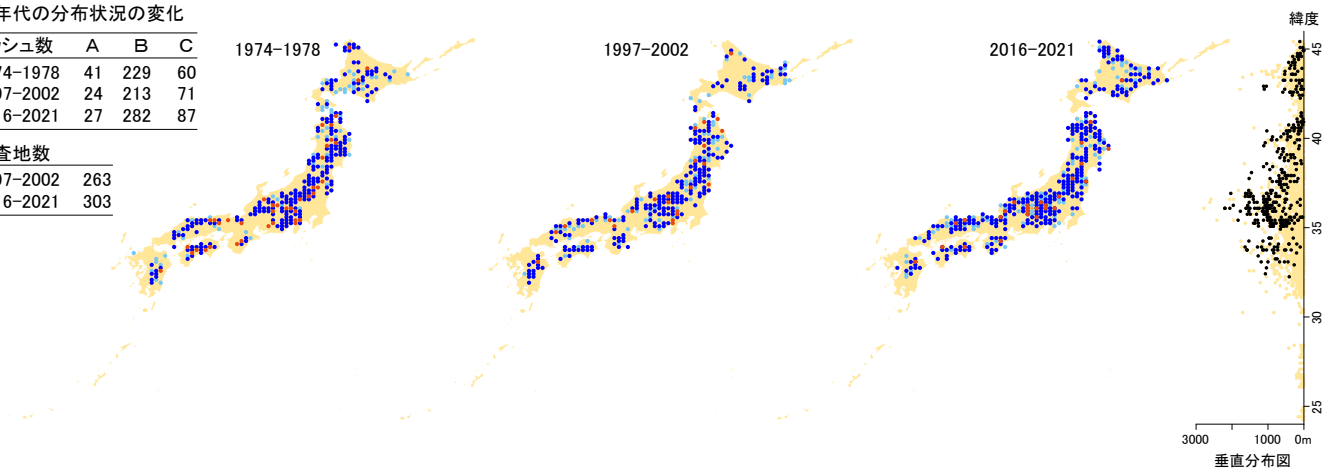
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	41	229	60
1997-2002	24	213	71
2016-2021	27	282	87

調査地数

1997-2002	263
2016-2021	303



離島を除く全国に留鳥として分布する。北海道では山地の針葉樹林に多く，本州以南では低山帯から亜高山帯の落葉広葉樹林，針葉樹林，針広混交林に多い。ほかのカラ類とは異なり，自ら樹に穴を掘って営巣する一次樹洞性鳥類である。2010 年代では過去 2 回の調査と比べて記録メッシュ数が増加した。

ヤマガラ　分類:スズメ目シジュウカラ科　Varied Tit　*Poecile varius*

全長:14cm　翼長:♂75.33±1.46mm ♀69.36±2.24mm　ふ蹠長:♂19.12±1.20mm ♀18.82±0.51mm　体重:♂16.33±1.07g ♀15.33±0.60g

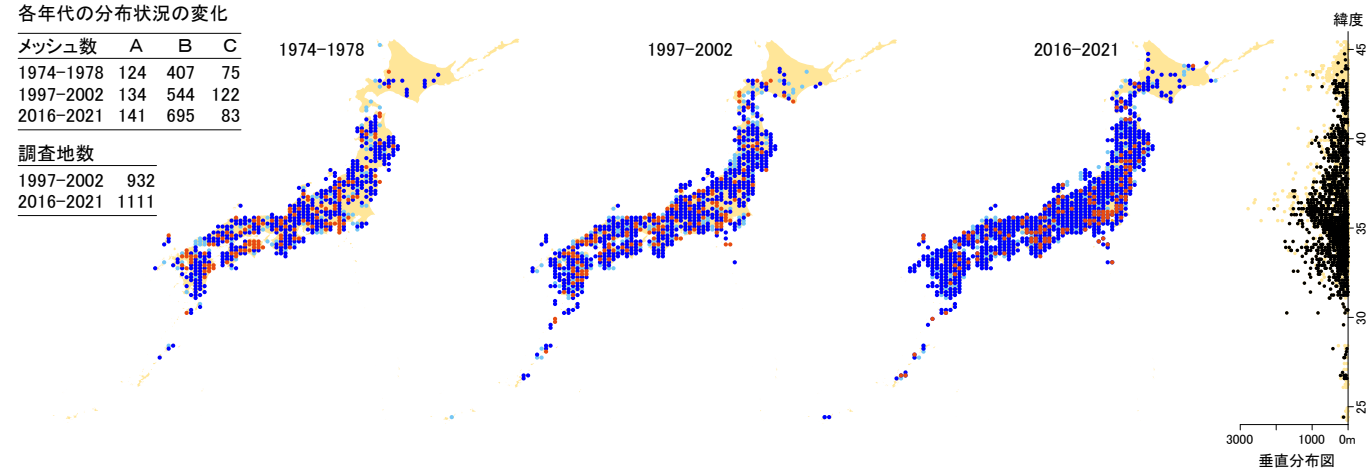
環境省レッドリスト:　絶滅(亜種ダイトウヤマガラ), 絶滅危惧 IB 類(亜種ナミエヤマガラ, 亜種オーストンヤマガラ), 準絶滅危惧(亜種オリイヤマガラ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	124	407	75
1997–2002	134	544	122
2016–2021	141	695	83

調査地数

1997–2002	932
2016–2021	1111



全国に留鳥として分布する。伊豆諸島に亜種ナミエヤマガラと亜種オーストンヤマガラ, 八重山諸島に亜種オリイヤマガラが分布する。主に常緑樹林に生息するが, 落葉広葉樹林や針広混交林にも生息する。記録メッシュ数は 3 期にわたって増加しており, 特に, 北海道では東部での確認記録の増加が顕著だった。

ヒガラ　分類:スズメ目シジュウカラ科　Coal Tit　*Periparus ater*

全長:9.9–11.5cm　翼長:56–64mm　ふ蹠長:15–17mm　体重:6–10g

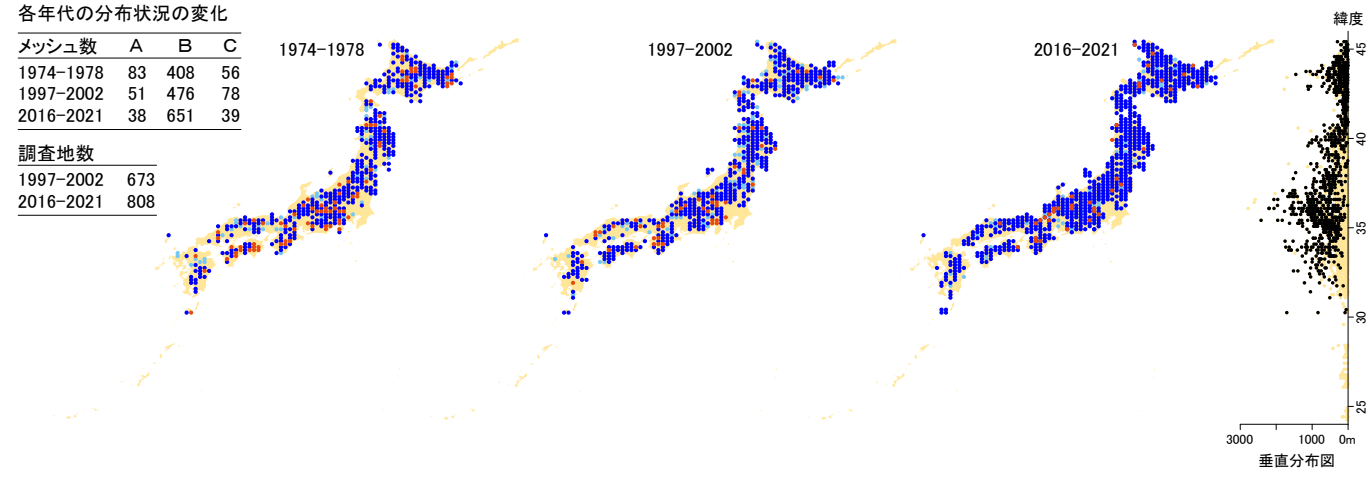
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	83	408	56
1997–2002	51	476	78
2016–2021	38	651	39

調査地数

1997–2002	673
2016–2021	808



北海道から屋久島までの成熟した常緑針葉樹林, 針広混交林に留鳥として分布する。1970 年代の 547 メッシュから 2010 年代の 728 メッシュまで記録メッシュ数が増加した。156 ページに記述したように, 1970 年代以降に人工林を含む森林の成熟が進んだことで, 分布域を広げたと考えられる。

シジュウカラ　分類:スズメ目シジュウカラ科　Japanese Tit　*Parus minor*

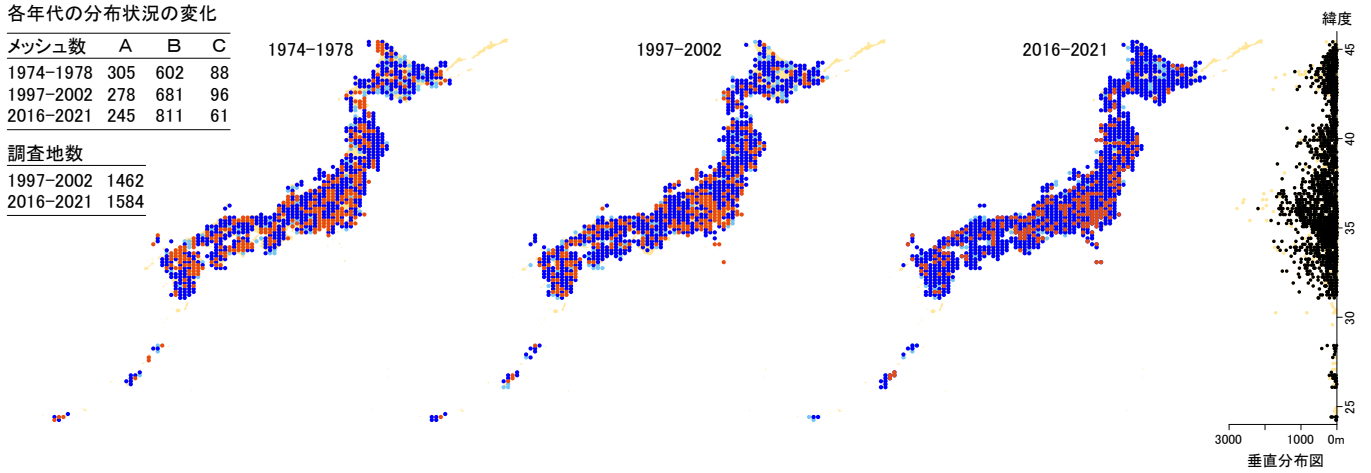
全長:13.7–14.8cm　翼長:♂69.3±1.5mm ♀ 65.9±1.8mm　ふ蹠長:♂17.9±0.5mm ♀17.4±0.5mm　体重:♂ 15.7±0.9g♀ 15.0±0.8g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	305	602	88
1997–2002	278	681	96
2016–2021	245	811	61

調査地数	
1997–2002	1462
2016–2021	1584



全国に留鳥として分布する。屋久島と種子島，トカラ列島などには分布しない。奄美諸島には亜種アマミシジュウカラが，沖縄諸島には亜種オキナワシジュウカラが，八重山諸島には亜種イシガキシジュウカラが，その他の地域には亜種シジュウカラが分布する。2010年代調査の結果でも，全国的に分布し，また標高も低いところから高いところまで生息する日本で最も分布の広い鳥の 1 つだった。

ヒバリ　分類:スズメ目ヒバリ科　Eurasian Skylark　*Alauda arvensis*

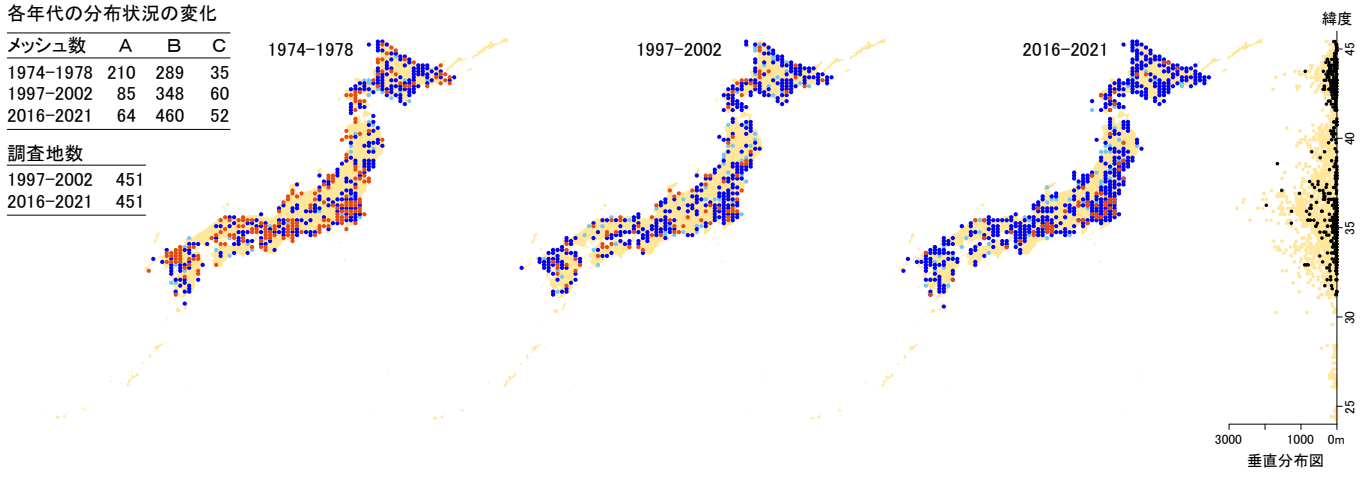
全長:16.1–17.2cm　嘴峰長:10–12mm　ふ蹠長:20–25mm　体重:29.2–37.5g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	210	289	35
1997–2002	85	348	60
2016–2021	64	460	52

調査地数	
1997–2002	451
2016–2021	451



北海道や本州の高標高地には夏鳥として分布し，その他の本州から九州にかけては留鳥として分布する。主に低地から高原にかけての草原や農耕地，海岸の草原などに生息する。富士山のガレ場など，高標高地に局所的に生息している。1970 年代から 1990 年代にかけては記録メッシュ数が大きく減少したが，2010 年代にかけては，記録メッシュ数は回復した。しかし，現地調査での記録地点数には変化は見られていない。

ショウドウツバメ　分類:スズメ目ツバメ科　Sand Martin　*Riparia riparia*

全長:11.6-13.1cm　翼長:98-107mm　ふ蹠長:9-12mm　体重:9.4-14.3g

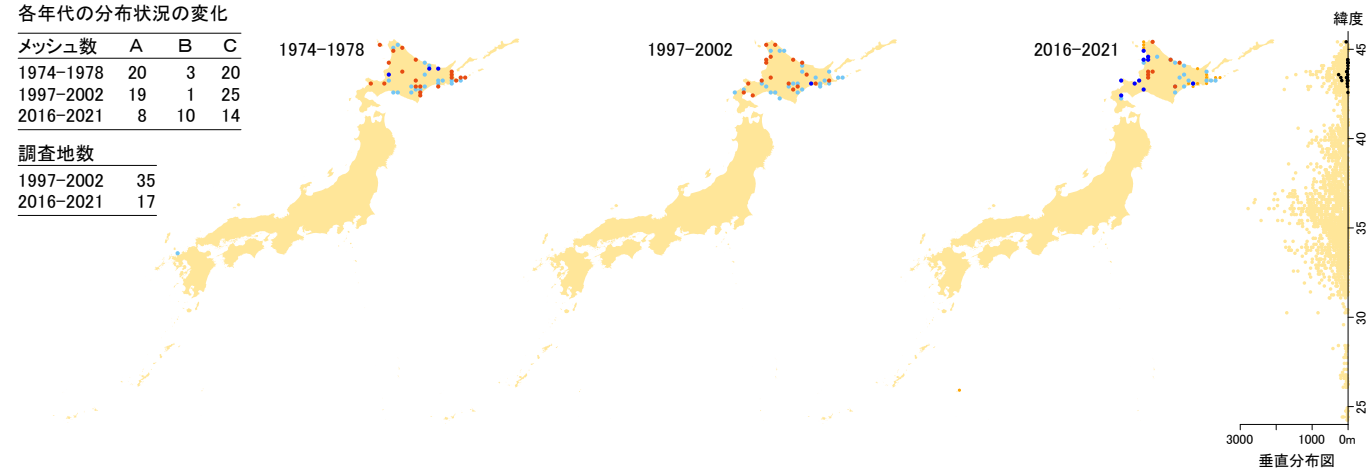
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	20	3	20
1997-2002	19	1	25
2016-2021	8	10	14

調査地数

1997-2002	35
2016-2021	17



北海道に夏鳥として分布し，渡り期にはそのほかの地域を通過する。平野部の河川沿いや湖沼の周辺に生息し，河岸や海岸や砂利採取場などにある砂や土の崖に最大 1m 程度の穴を掘って営巣する。2010 年代では過去 2 回の調査と比べて記録メッシュ数が少なく，特に繁殖確認メッシュが減った。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，記録された地点は，35 地点から 17 地点へと半減した。

ツバメ　分類:スズメ目ツバメ科　Barn Swallow　*Hirundo rustica*

全長:14.6-18.5cm　翼長:112-126mm　ふ蹠長:10-11.8mm　体重:15.6-24.0g

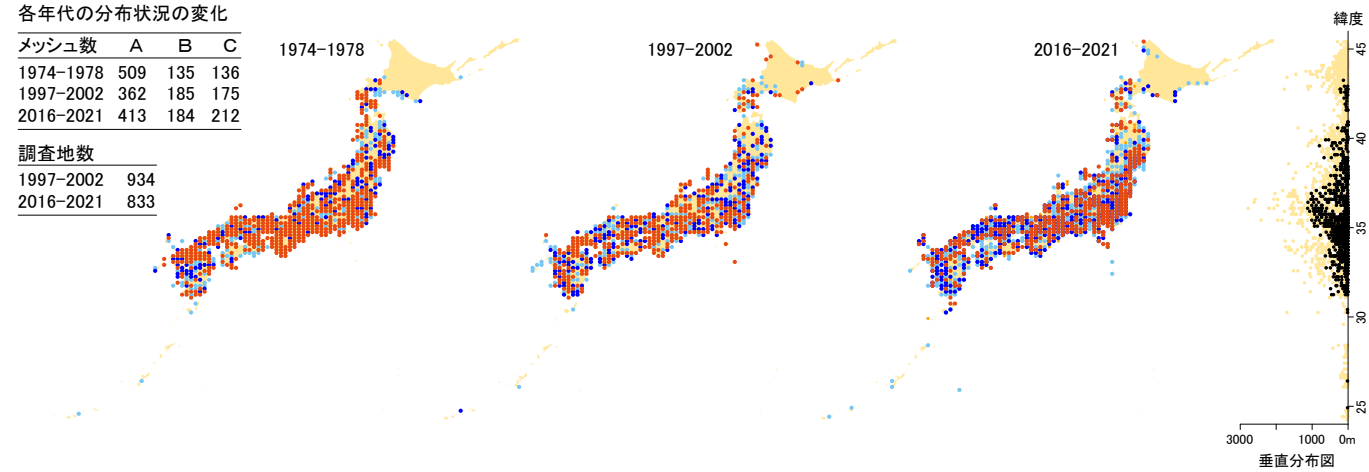
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	509	135	136
1997-2002	362	185	175
2016-2021	413	184	212

調査地数

1997-2002	934
2016-2021	833



北海道から奄美大島にかけて夏鳥として分布する。九州南部など暖地では越冬する。北海道では個体数が少なく，特に道東地域にはあまり分布しない。平地や山間部の農耕地や市街地，河川敷などに生息する。本州以南では人家に営巣するが，北海道では牛舎や厩舎に営巣することが多い。分布自体は大きな変化はないが，1990 年代と 2010 年代のほぼ同じルートで調査できた場所の総個体数を比べると，14,978 羽から 8,987 羽へと減少していた。

リュウキュウツバメ　分類:スズメ目ツバメ科　Pacific Swallow　*Hirundo tahitica*

嘴峰長:7-9mm　翼長:108-113mm　ふ蹠長:9.5-11mm　尾長:46-535mm

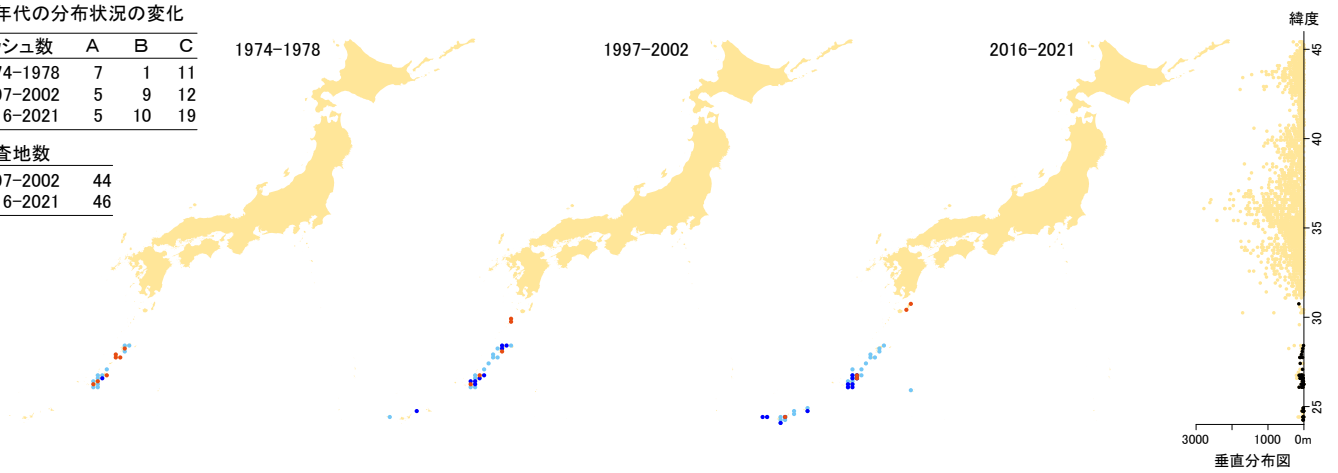
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	7	1	11
1997-2002	5	9	12
2016-2021	5	10	19

調査地数

1997-2002	44
2016-2021	46



奄美諸島以南の南西諸島に留鳥として分布する。従来の分布域の北側にある種子島や屋久島や中之島でも繁殖例がある。住宅地や河川，農耕地に生息し，橋梁，建物，牛舎などに営巣する。1990 年代はトカラ列島で，2010 年代には種子島で繁殖が確認されたメッシュがあった。記録メッシュ数は増加傾向にあったが，1990 年代と2010 年代でほぼ同じルートで調査できた場所で比較すると 44 地点から 46 地点と変化はなかった。

コシアカツバメ　分類:スズメ目ツバメ科　Red-rumped Swallow　*Hirundo daurica*

全長:16.8-19.8cm　翼長:110-125mm　ふ蹠長:12-15mm　体重:18-27g

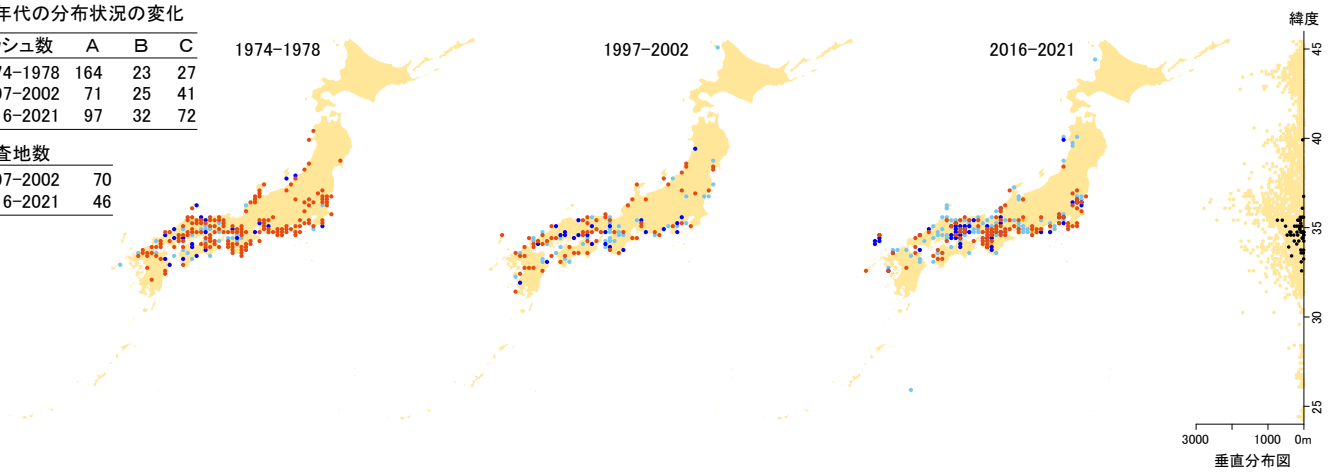
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	164	23	27
1997-2002	71	25	41
2016-2021	97	32	72

調査地数

1997-2002	70
2016-2021	46



西日本や関東以西の太平洋側を中心に，局所的に東北地方まで夏鳥として分布する。人家に営巣し，特に集合住宅や学校など，大きな建物に営巣する傾向がある。1970 年代と比較すると2010 年代での繁殖確認メッシュ数は減少しており，1990 年代と2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，コシアカツバメが記録できた地点は，70 地点から 46 地点へ，記録個体数は 318 から 216 に減少していた。

イワツバメ　分類：スズメ目ツバメ科　Asian House Martin　*Delichon dasypus*

全長：♂131.0mm ♀130.3mm　翼長：108.1±2.0mm ♀106.9±2.3mm　ふ蹠長：♂11.1±0.4mm ♀11.1±0.6mm　体重：♂18.1±1.0g ♀17.7±0.9g

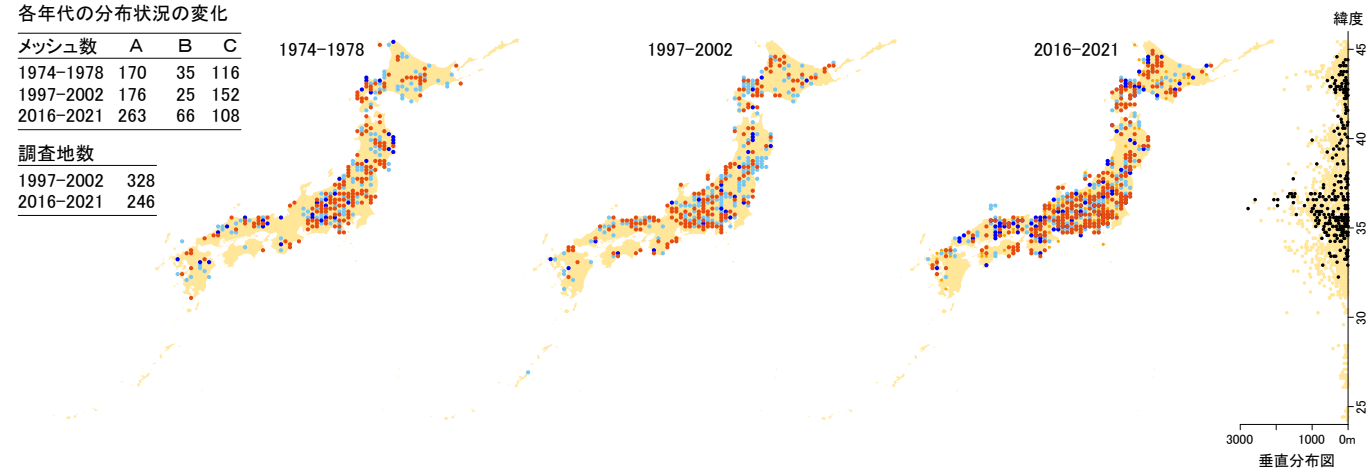
環境省レッドリスト：　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	170	35	116
1997–2002	176	25	152
2016–2021	263	66	108

調査地数

1997–2002	328
2016–2021	246



南西諸島と伊豆諸島を除く全国に夏鳥として分布する。西日本では越冬する個体もいる。過去3回の調査を通じて記録メッシュ数が増加しており，繁殖の確認されたメッシュ数も増加しているが，これは重点的な集団繁殖地の調査を行なったためで，現地調査で記録された地点は328地点から246地点と減少しており，1990年代からは減少していると考えられる。

シロガシラ　分類：スズメ目ヒヨドリ科　Light-vented Bulbul　*Pycnonotus sinensis*

嘴峰長：13–16mm　翼長：83–91mm　ふ蹠長：21–22mm　尾長：74–85mm

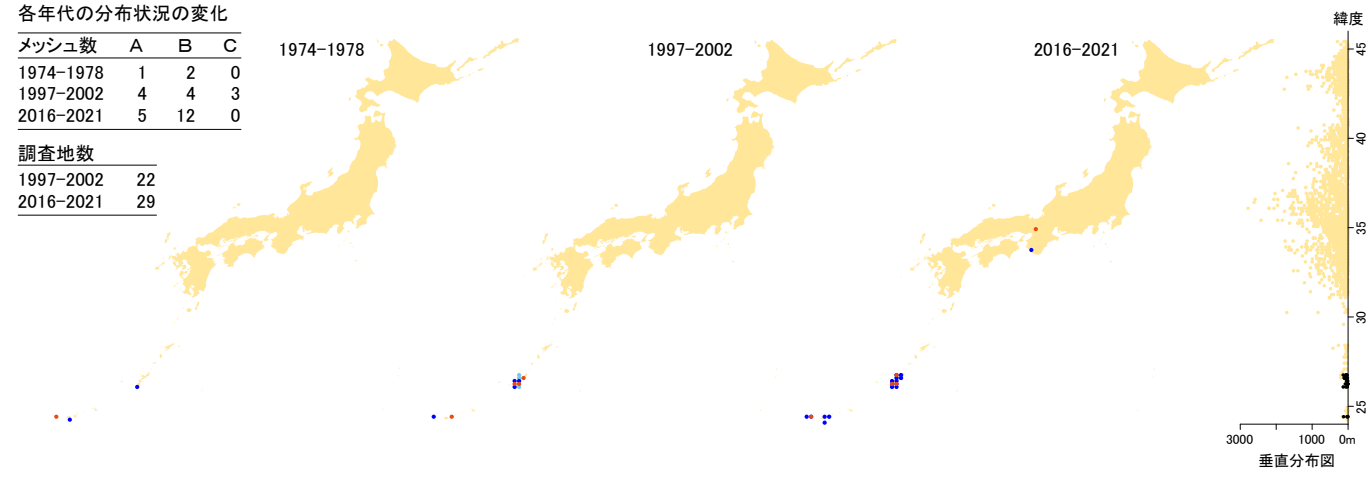
環境省レッドリスト：　—　総合対策外来種

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	2	0
1997–2002	4	4	3
2016–2021	5	12	0

調査地数

1997–2002	22
2016–2021	29



沖縄本島や八重山諸島に留鳥として生息する。農耕地や人家，市街地の公園，山地の林などに生息する。沖縄島では1970年代に南部より分布を広げ，現在は全島に分布している。2010年代には大阪府と和歌山県でも記録された。それ以外にも過去には千葉県，広島県，山口県，長崎県などでの記録もあり，これらは移入分布の可能性がある。

ヒヨドリ　分類:スズメ目ヒヨドリ科　Brown-eared Bulbull　*Hypsipetes amaurotis*

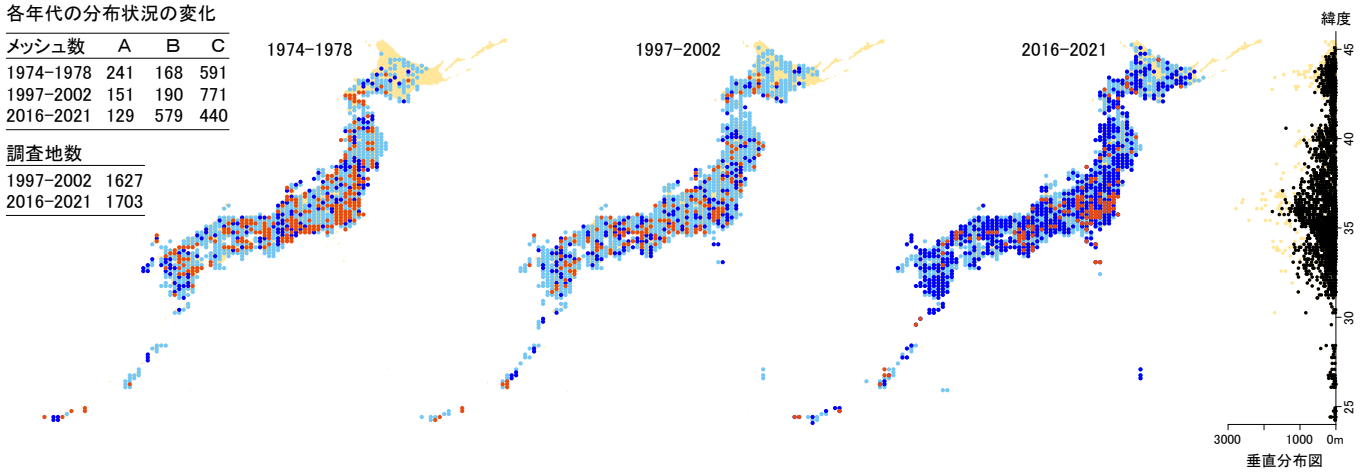
全長:24.9–29.0cm　翼長:125.9±5.7mm　ふ蹠長:22.9±1.3mm　体重:79.9±12.1g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	241	168	591
1997–2002	151	190	771
2016–2021	129	579	440

調査地数	
1997–2002	1627
2016–2021	1703



全国に留鳥または漂鳥として分布する。小笠原群島に亜種オガサワラヒヨドリが，硫黄列島に亜種ハシブトヒヨドリが，大東諸島に亜種ダイトウヒヨドリが，トカラ列島と奄美諸島に亜種アマミヒヨドリが，沖縄諸島と宮古諸島に亜種リュウキュウヒヨドリが，与那国島を除く八重山諸島に亜種イシガキヒヨドリが，与那国島に亜種タイワンヒヨドリが，その他の地域に亜種ヒヨドリが分布する。北海道東部では過去 3 回の調査の間に分布が広がった。

ウグイス　分類:スズメ目ウグイス科　Japanese Bush Warbler　*Cettia diphone*

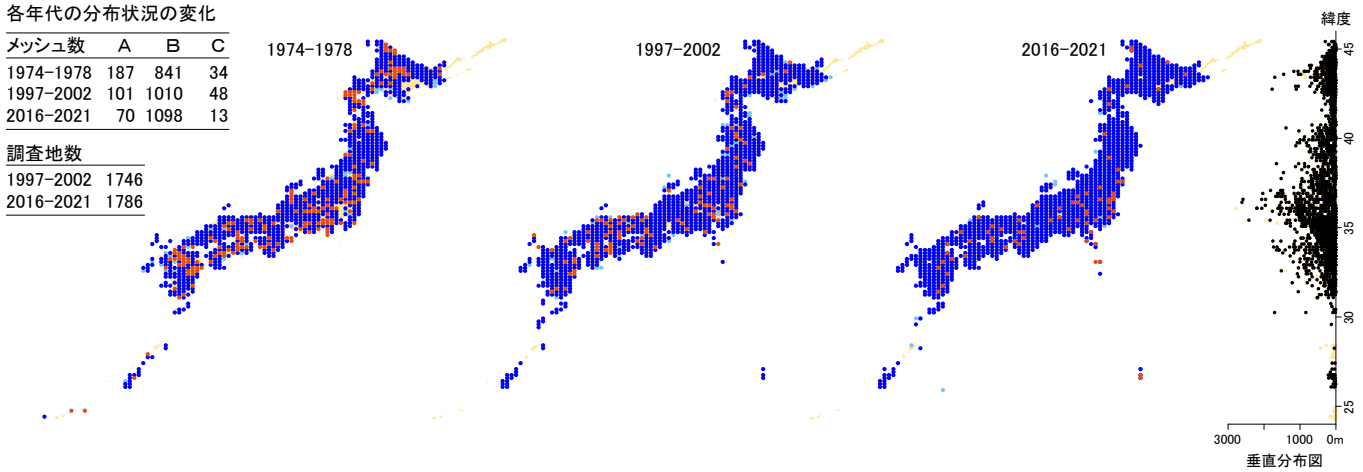
全長:14–15.5cm　翼長:♂62.2–67.7mm ♀51.3–57.0mm　ふ蹠長:♂24.5–27.1mm ♀21.4–23.2mm　体重:♂14.8–22.3g ♀10.0–13.7g

環境省レッドリスト:　情報不足(亜種ダイトウウグイス)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	187	841	34
1997–2002	101	1010	48
2016–2021	70	1098	13

調査地数	
1997–2002	1746
2016–2021	1786



全国に留鳥または漂鳥として分布する。小笠原群島および硫黄列島に亜種ハシナガウグイスが，奄美諸島，沖縄諸島に亜種ダイトウウグイスが，その他の地域に亜種ウグイスが分布する。海岸沿いから高山までのササや低木が茂る場所に生息し，藪の低い場所に営巣する。記録メッシュ数は増えているが，山地では個体数が減少し，平地では増加した場所が多い。シカによる摂食で下層植生が減少した場所では，ウグイスが見られなくなった場所がある(植田ほか 2019)。

ヤブサメ　分類:スズメ目ウグイス科　Asian Stubtail　*Urosphena squameiceps*

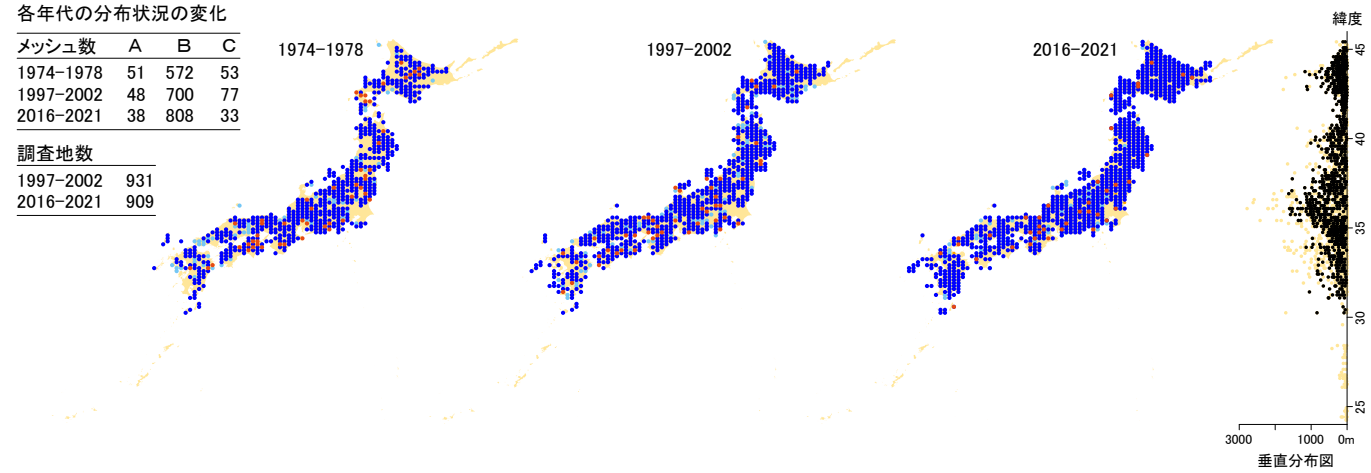
全長:10.5cm　翼長:♂52.7±1.2mm ♀51.5±1.2mm　ふ蹠長:♂19.2±0.4mm ♀19.1±0.6mm　体重:♂9.3±0.6g ♀ 9.3±0.6g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	51	572	53
1997–2002	48	700	77
2016–2021	38	808	33

調査地数	
1997–2002	931
2016–2021	909



屋久島以北に夏鳥として分布する低地から山地にある広葉樹林や針広混交林の，ササや低木が茂っていて地上に落葉層が堆積する場所に生息する。過去 3 回の調査の間に，本州中部以北，特に北海道で記録メッシュ数が増加していたが，西日本では記録できなくなった調査地も多かった。

エナガ　分類:スズメ目エナガ科　Long-tailed Tit　*Aegithalos caudatus*

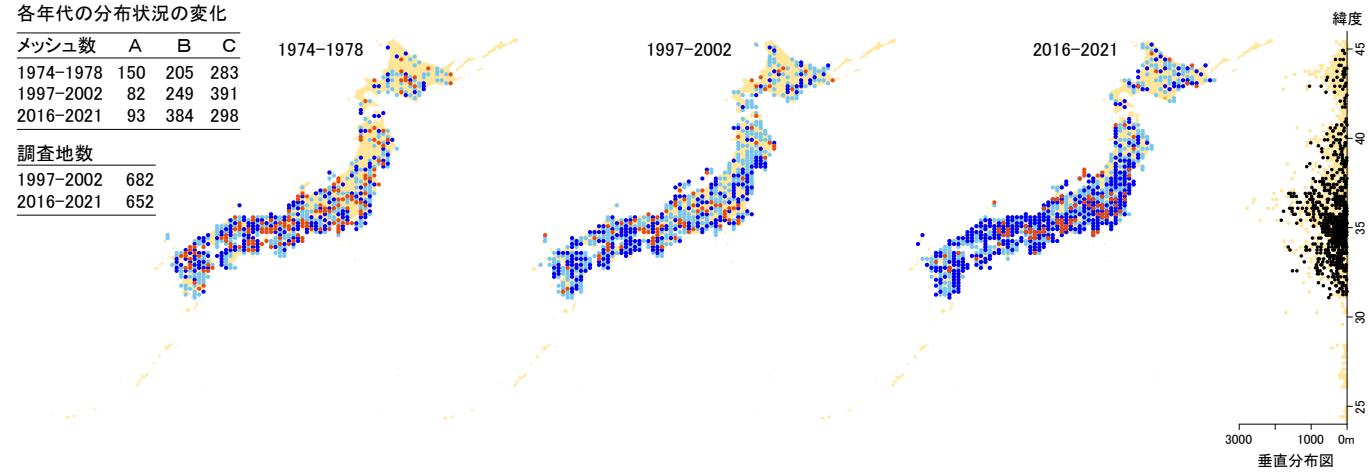
全長:12.5–14.5cm　翼長:♂58.25mm ♀56.65mm　ふ蹠長:♂18.28mm ♀17.80mm　体重:5.6–9.4g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	150	205	283
1997–2002	82	249	391
2016–2021	93	384	298

調査地数	
1997–2002	682
2016–2021	652



九州以北に留鳥として分布する。針広混交林や落葉樹林，照葉樹林の林縁，農地や河川敷のような小規模な林などに生息する。本州中部以北で記録メッシュ数が増加しており，また，市街地の緑地などへの分布の拡大がみられている。ただしモニタリングサイト 1000 森林のコアサイトでは個体数の減少が報告されており，環境によって動向に違いがある可能性がある。

オオムシクイ　分類:スズメ目ムシクイ科　Kamchatka Leaf Warbler　*Phylloscopus examinandus*

翼長:60.3–71.7mm　ふ蹠長:18.5–21.3mm　尾長:46.3–52.3mm　体重:9.0–13.0g

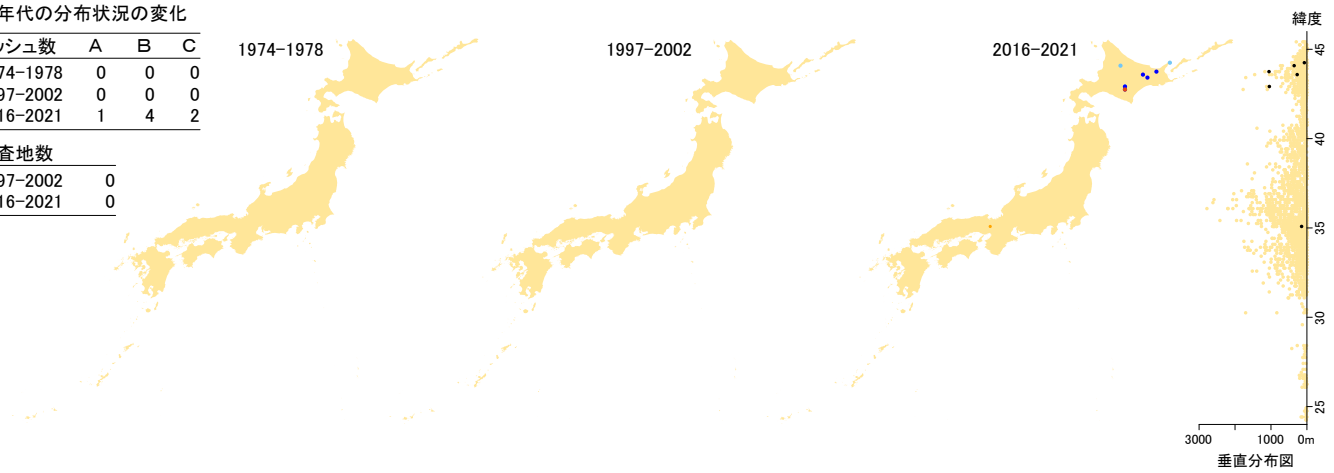
環境省レッドリスト:情報不足

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	4	2

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



北海道東部に夏鳥として分布する。亜高山帯の森林限界付近にあるダケカンバ・ハイマツ帯で繁殖する。1970 年代および 1990 年代は，メボソムシクイの亜種として扱われていたために，分布図には表示されておらず，2010 年代になって分布するようになったというわけではない。また，渡りの時期が 5 月下旬から 6 月中旬と遅く，中継地と繁殖地の判断が難しいため（高山 2020），分布が過小評価あるいは過大評価になっている可能性もある。

メボソムシクイ　分類:スズメ目ムシクイ科　Japanese Leaf Warbler　*Phylloscopus xanthodryas*

翼長:68.6–75.5mm　ふ蹠長:18.6–21.8mm　尾長:45.0–54.6mm　体重:9.8–13.0g

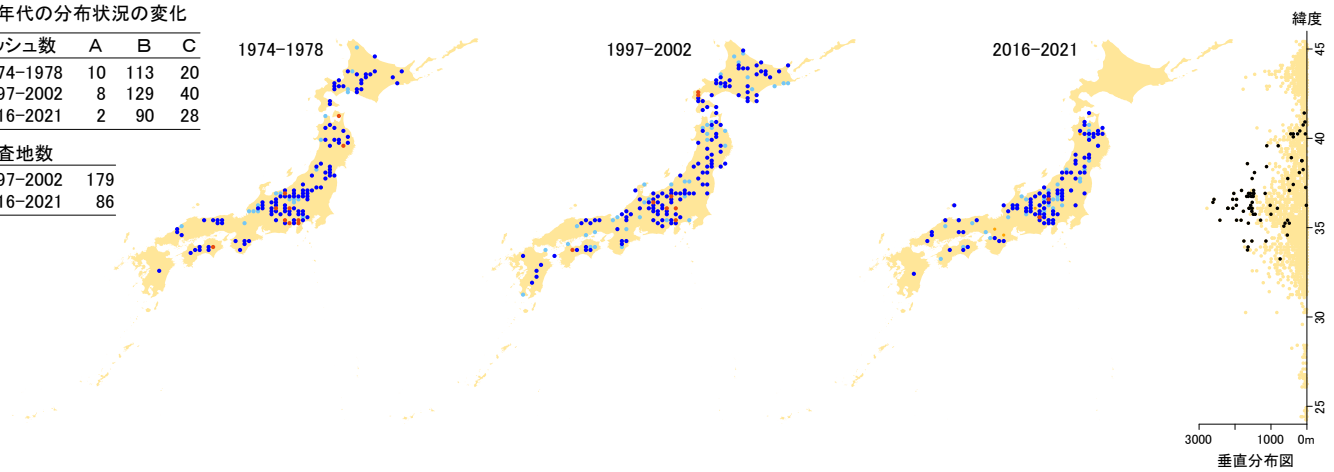
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	10	113	20
1997–2002	8	129	40
2016–2021	2	90	28

調査地数

1997–2002	179
2016–2021	86



九州から本州にかけて分布する。主に標高 1500m から 2500m の亜高山帯の針葉樹林や高山帯で繁殖する。1970 年代および 1990 年代はオオムシクイがメボソムシクイの亜種とされており，オオムシクイの記録が含まれているために，評価は難しいが，西日本を中心に分布が縮小していると考えられる。1970 年代，1990 年代の北海道の記録はオオムシクイの繁殖あるいは渡りの途中の記録と考えられる。

エゾムシクイ　分類:スズメ目ムシクイ科　Sakhalin Leaf Warbler　*Phylloscopus borealoides*

嘴峰長:9–12.5mm　翼長:61–68mm　ふ蹠長:18–20mm　体重:8–11g

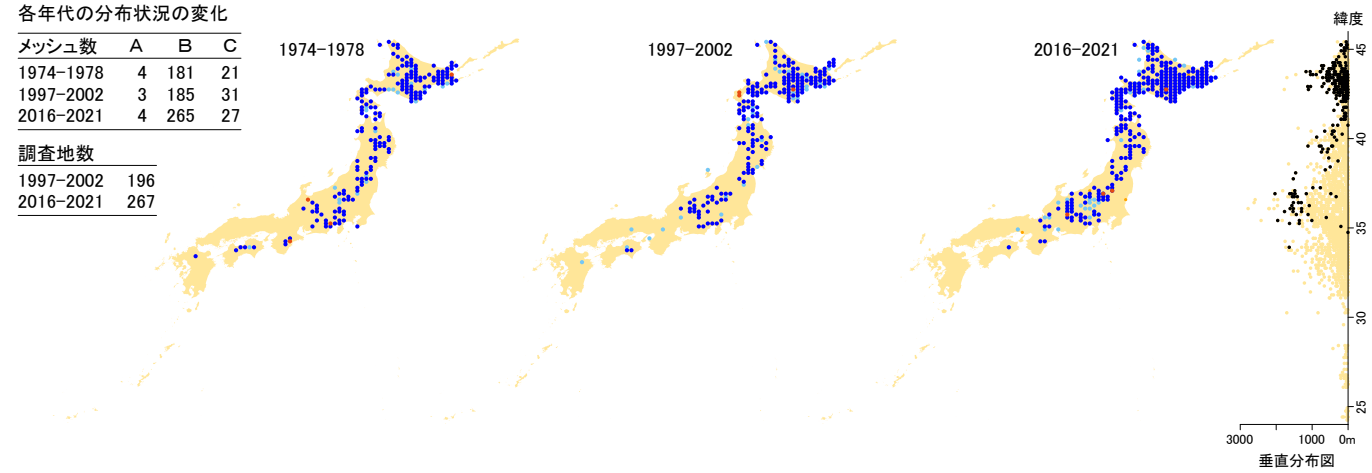
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	4	181	21
1997–2002	3	185	31
2016–2021	4	265	27

調査地数

1997–2002	196
2016–2021	267



四国，本州，北海道に夏鳥として分布する。記録メッシュ数が増加しており，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，エゾムシクイが記録できた地点は，196 地点から 267 地点へと増加していた。特に北海道の増加が顕著である。ただし，シカの増加とその摂食で林床植生が衰退した場所では，減少も報告されており，ウグイスやコマドリなどよりは遅れてその影響が出ているので(Ueta 2020)，今後の変化に注意が必要である。

センダイムシクイ　分類:スズメ目ムシクイ科　Eastern Crowned Warbler　*Phylloscopus coronatus*

全長:11.6–13.3cm　翼長:58–66mm　ふ蹠長:16–18mm　体重:8–12g

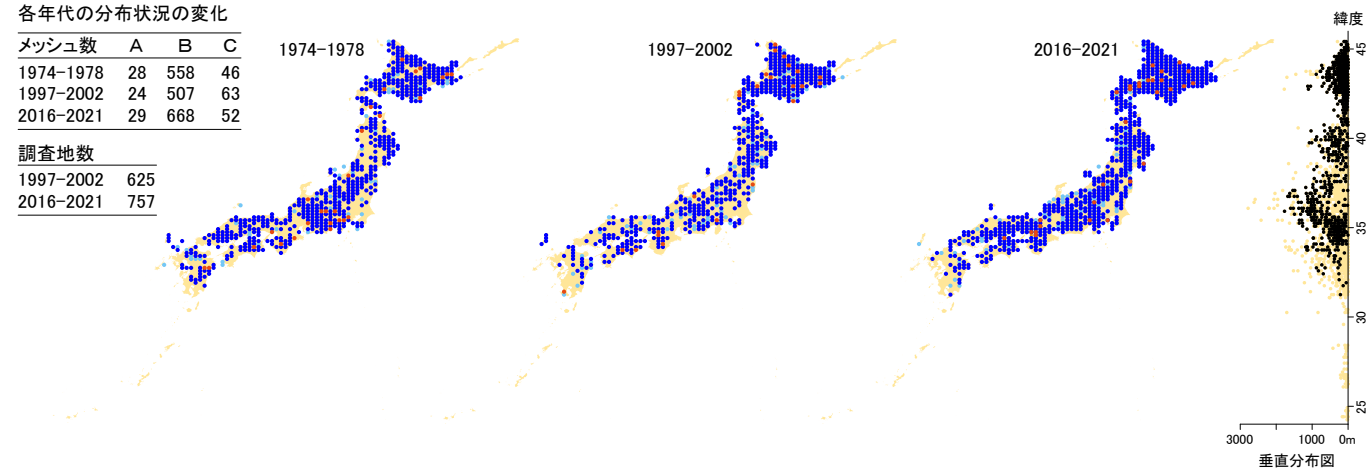
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	28	558	46
1997–2002	24	507	63
2016–2021	29	668	52

調査地数

1997–2002	625
2016–2021	757



九州以北の全国に夏鳥として分布する。1000m 以下の林に生息する。記録メッシュ数は 1990 年代と比べ増加しており，1990 年代と 2010 年代の比較可能な現地調査の記録を見ても，センダイムシクイが記録できた地点は，625 地点から 757 地点へと増加していた。ただし，エゾムシクイと同様にシカの増加とその摂食で林床植生が衰退した場所では，減少も報告されており，ウグイスやコマドリなどよりは遅れてその影響が出ているので(Ueta 2020)，今後の変化に注意が必要である。

イイジマムシクイ　分類:スズメ目ムシクイ科　Ijima's Leaf Warbler　*Phylloscopus ijimae*

嘴峰長:10–12mm　翼長:♂62–66.5mm ♀58–66mm　ふ蹠長:18–20mm　尾長:♂45–50mm ♀40.5–48mm

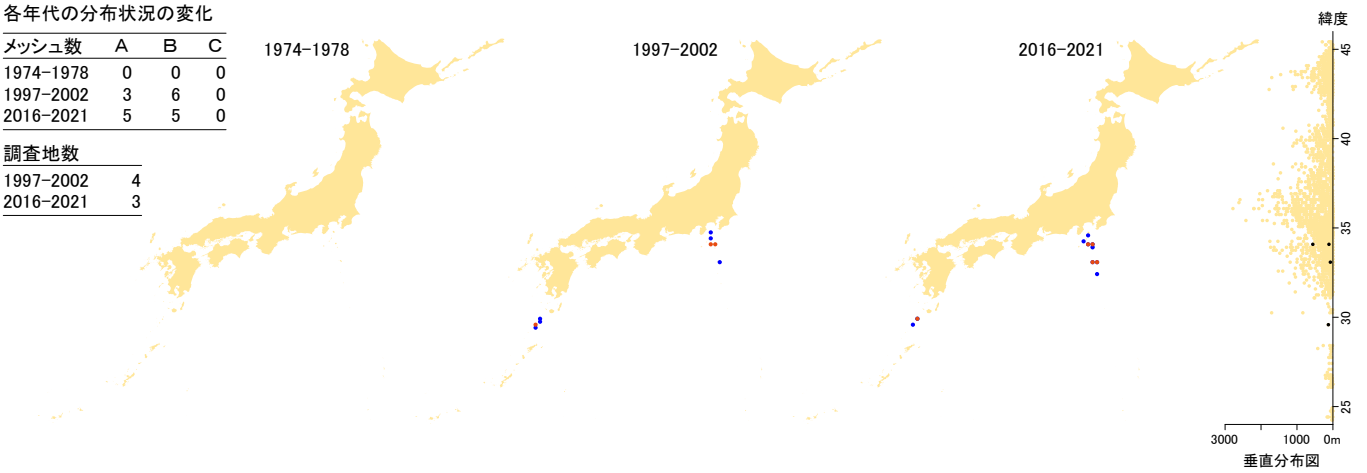
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	3	6	0
2016–2021	5	5	0

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	3



伊豆諸島とトカラ列島に夏鳥として分布する。樹冠がよく茂り連続した林に生息し，特に照葉樹林を好む。ヤシャブシやウツギなどの枝上に球形の巣をつくって営巣する。コウチュウ目，ハチ目などの昆虫類，クモ類を捕食し，雑草の種子を採食することもある。2010 年代調査では，伊豆諸島の記録メッシュが増加しているが，本調査と連携して伊豆諸島での詳細な調査が行なわれたためで，分布の拡大を示しているわけではない。

メグロ　分類:スズメ目メジロ科　Bonin White-eye　*Apalopteron familiare*

全長:14cm　翼長:60–72mm　ふ蹠長:23–26mm　体重:13–17g

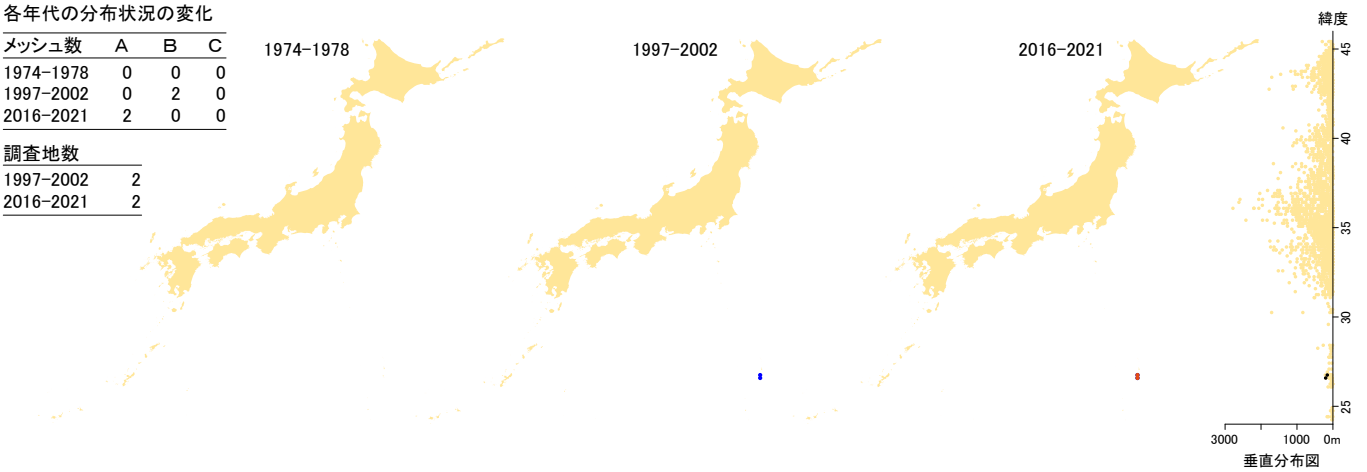
環境省レッドリスト:　絶滅(亜種メグロ)，絶滅危惧 IB 類(亜種ハハジマメグロ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	2	0
2016–2021	2	0	0

調査地数

1997–2002	2
2016–2021	2



亜種ハハジマメグロが小笠原群島の母島，向島，妹島に留鳥として分布する。かつては姪島にも同亜種が分布していたが，現在では絶滅した。亜種メグロは小笠原群島の聟島，嫁島，父島に分布していたが，現在では絶滅した。分布が局所的なため，本調査からは分布や個体数の変化はわからない。

メジロ　分類:スズメ目メジロ科　Warbling White-eye　*Zosterops japonicus*

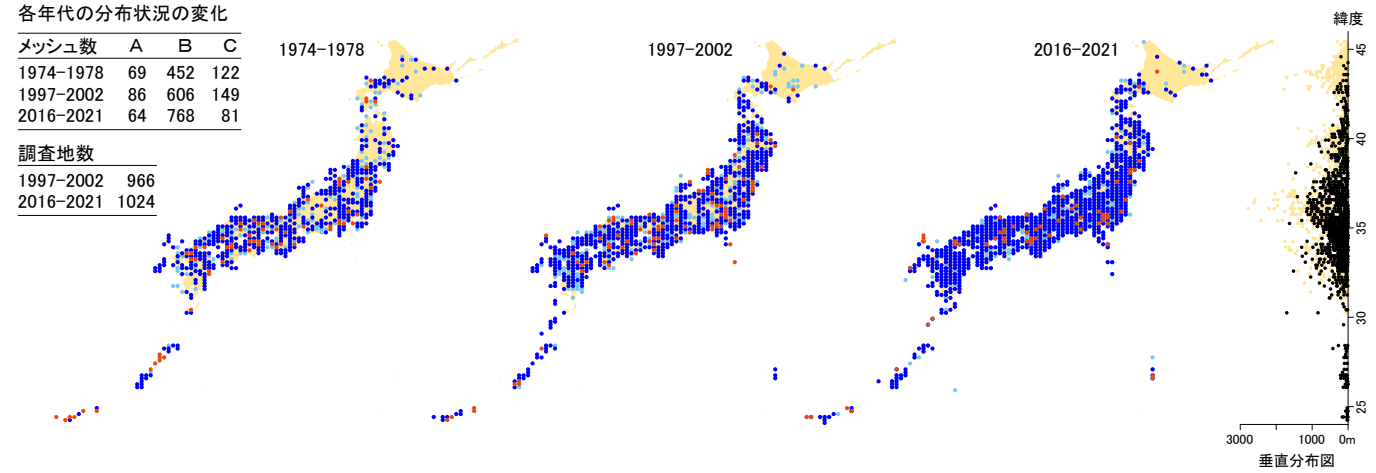
全長:11.1±0.3cm　翼長:56.9±1.4mm　ふ蹠長:17.9±0.5mm　体重:11.3±1.9g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	69	452	122
1997-2002	86	606	149
2016-2021	64	768	81

調査地数	
1997-2002	966
2016-2021	1024



全国に留鳥として分布する。伊豆諸島に亜種シチトウメジロが，硫黄列島に亜種イオウトウメジロが，大東諸島に亜種ダイトウメジロが，種子島からトカラ列島に亜種シマメジロが，奄美諸島以南の南西諸島に亜種リュウキュウメジロが，そのほかの地域に亜種メジロが分布する。小笠原群島には亜種シチトウメジロ，イオウトウメジロが移入されている。南鳥島には亜種イオウトウメジロが移入されている。1990 年代調査と比べて 1000m程度の比較的標高の高いメッシュで分布を拡げていた。

マキノセンニュウ　分類:スズメ目センニュウ科　Lanceolated Warbler　*Locustella lanceolata*

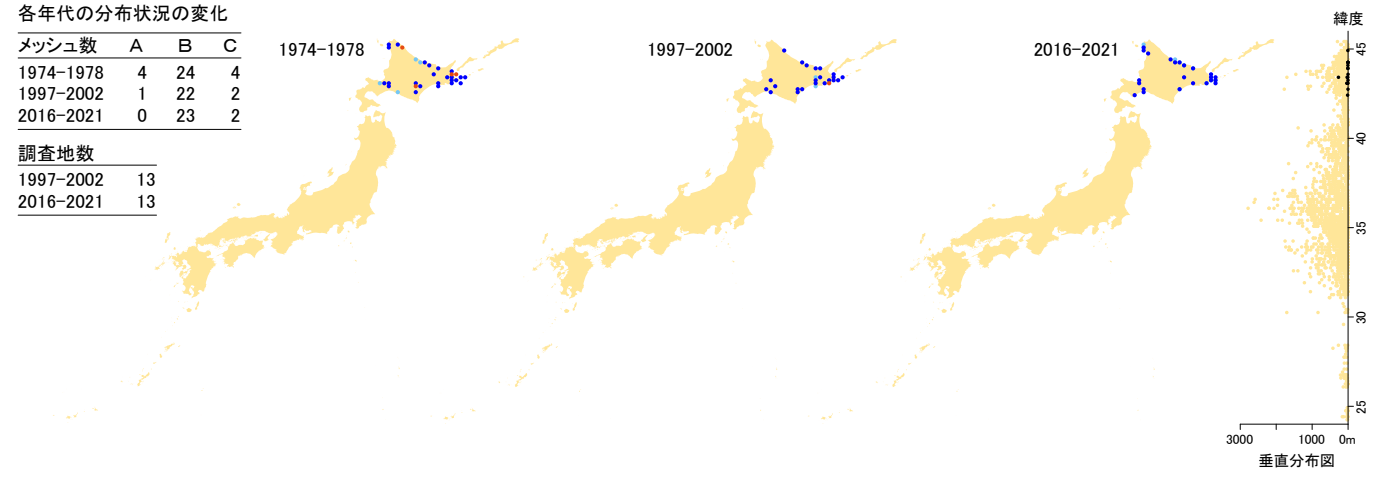
嘴峰長:9-12mm　翼長:53-62mm　ふ蹠長:17-20mm　尾長:41-52mm

環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	4	24	4
1997-2002	1	22	2
2016-2021	0	23	2

調査地数	
1997-2002	13
2016-2021	13



北海道に夏鳥として分布する。大河川中・下流部の河川敷や，海岸沿いの湖沼周辺にある草原，牧草地や麦畑で標高 200m 以下の場所に生息する。過去 3 回の調査の間に記録メッシュ数の変化は少ない。

シマセンニュウ　分類:スズメ目センニュウ科　Middendorff's Grasshopper Warbler　*Locustella ochotensis*

全長:14.5–15.8cm　翼長:70–76mm　ふ蹠長:20–25mm　体重:18–23g

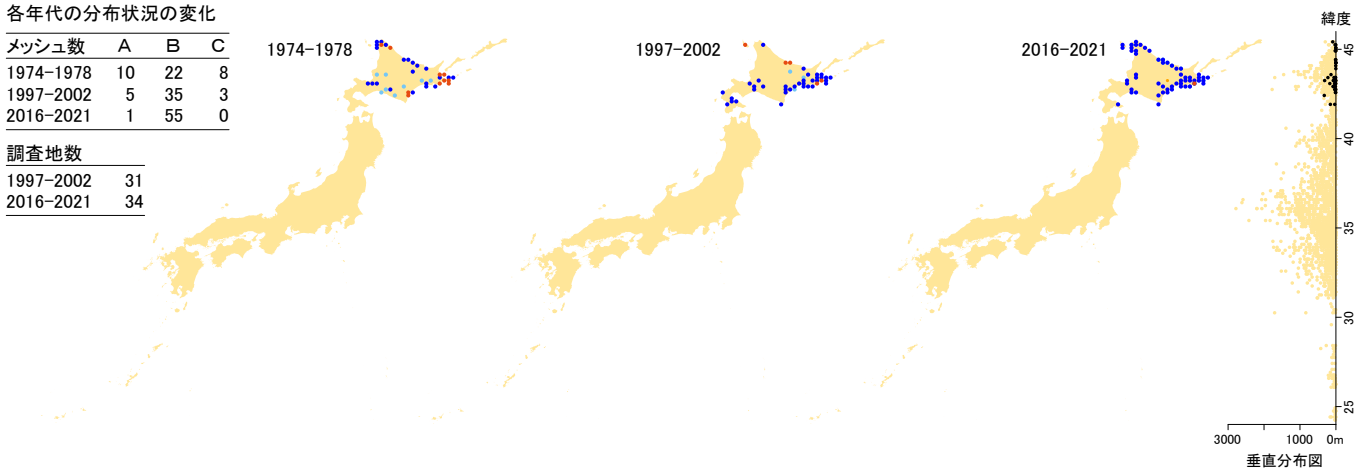
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	10	22	8
1997–2002	5	35	3
2016–2021	1	55	0

調査地数

1997–2002	31
2016–2021	34



北海道に夏鳥として分布する。1970 年代はウチヤマセンニュウをシマセンニュウの亜種として分布図に含められていたが，データを容易に区別することができるため，今回の分布図では，それらをシマセンニュウからは削除し，ウチヤマセンニュウのデータとして扱った。2010 年代はオホーツク海側の地域に分布が拡大していた。

ウチヤマセンニュウ　分類:スズメ目センニュウ科　Styan's Grasshopper Warbler　*Locustella pleskei*

翼長:♂70.0±1.55mm ♀65.4±1.38mm　ふ蹠長:♂24.5±0.65mm ♀23.9±0.60mm　体重:♂22.8±1.38g ♀ 22.3±2.30g

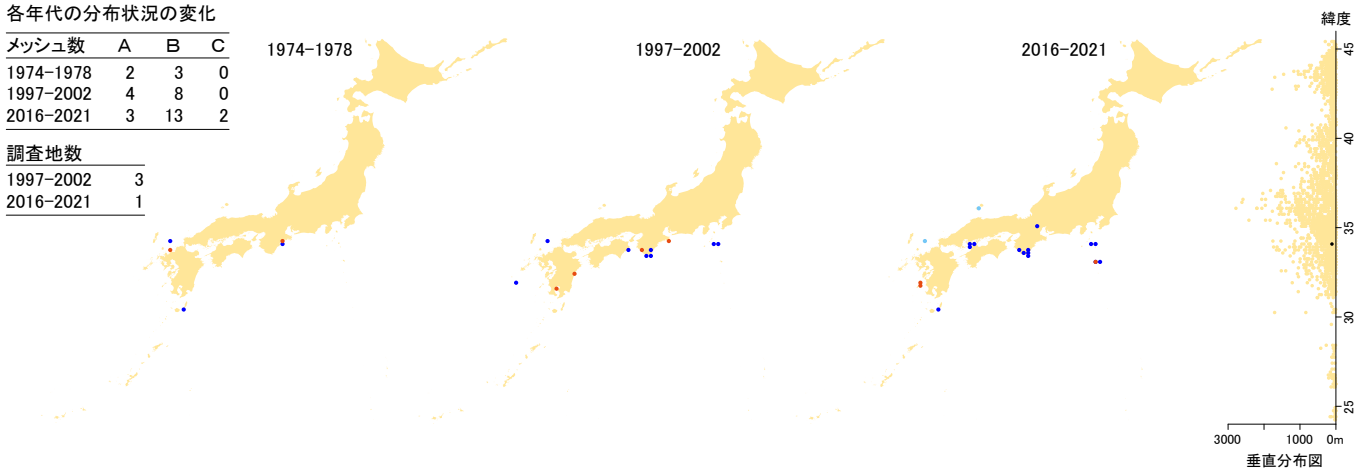
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	3	0
1997–2002	4	8	0
2016–2021	3	13	2

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	1



九州と紀伊半島周辺の沿岸の島嶼，伊豆諸島に夏鳥として分布する。九州や紀伊半島の沿岸の島嶼では丈の低い海岸性照葉樹林に生息する。三宅島ではササ藪やススキ原に生息する。確認メッシュ数は増加しているが，無人島に生息することが多いため，分布が拡大しているのか，情報が充実したためかは明らかでない。

オオセッカ　分類:スズメ目センニュウ科　Styan's Grasshopper Warbler　*Locustella pleskei*

全長:♂12.6cm ♀11.9cm　翼長:♂53.3mm ♀48.8mm　ふ蹠長:♂20.1mm ♀18.9mm　体重:♂14.5±0.8g ♀12.6±1.5g

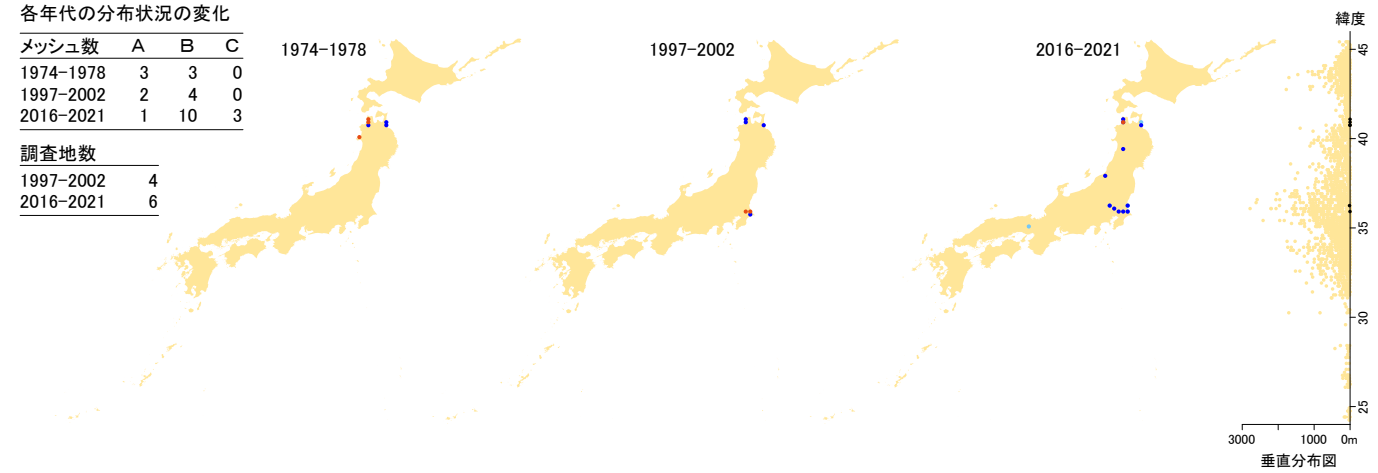
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	3	0
1997–2002	2	4	0
2016–2021	1	10	3

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	6



本州中部以北に局所的に分布する。北東北で繁殖する個体は東北や関東で越冬する。北関東で繁殖する個体は留鳥として分布するが，一部は東海地方に南下して越冬する。河川敷，湖岸，放棄水田などの湿性草原やヨシ原に生息する。主にヨシから成る上層植生の草丈や密度が低く，スゲ等から成る下層植生が豊富な二層構造の湿性湿原を好む(三上 2012)。2010 年代では過去 2 回と比べて記録メッシュ数が約 2 倍に増加した。

エゾセンニュウ　分類:スズメ目センニュウ科　Gray's Grasshopper Warblerr　*Locustella fasciolata*

全長:17.0–18.5cm　翼長:79–87mm　ふ蹠長:26–28mm　体重:24–31g

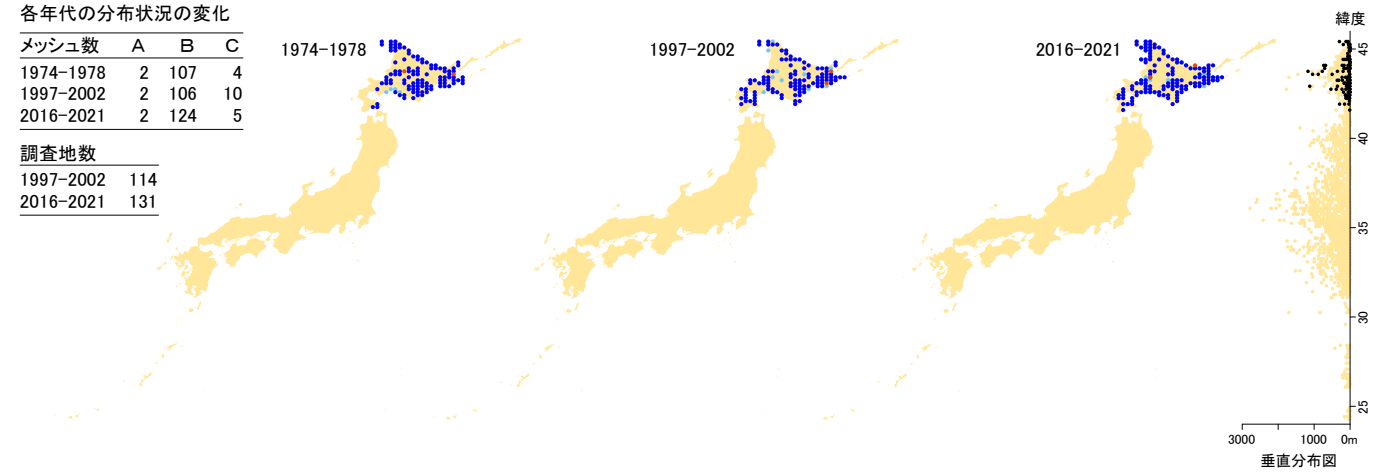
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	107	4
1997–2002	2	106	10
2016–2021	2	124	5

調査地数

1997–2002	114
2016–2021	131



北海道に夏鳥として分布する。平地の藪，特に湿原の周縁，川辺の低木林に生息する。これまでの調査では，分布に大きな変化は見られていない。

オオヨシキリ　分類:スズメ目ヨシキリ科　Oriental Reed Warbler　*Acrocephalus orientalis*

全長:♂18.4cm ♀17.4cm　翼長:♂82.1–87.8mm ♀79.1–82.7mm　ふ蹠長:♂28.4–31.0mm ♀27.1–29.0mm　体重:♂24.6–31.6g ♀23.4–30.4g

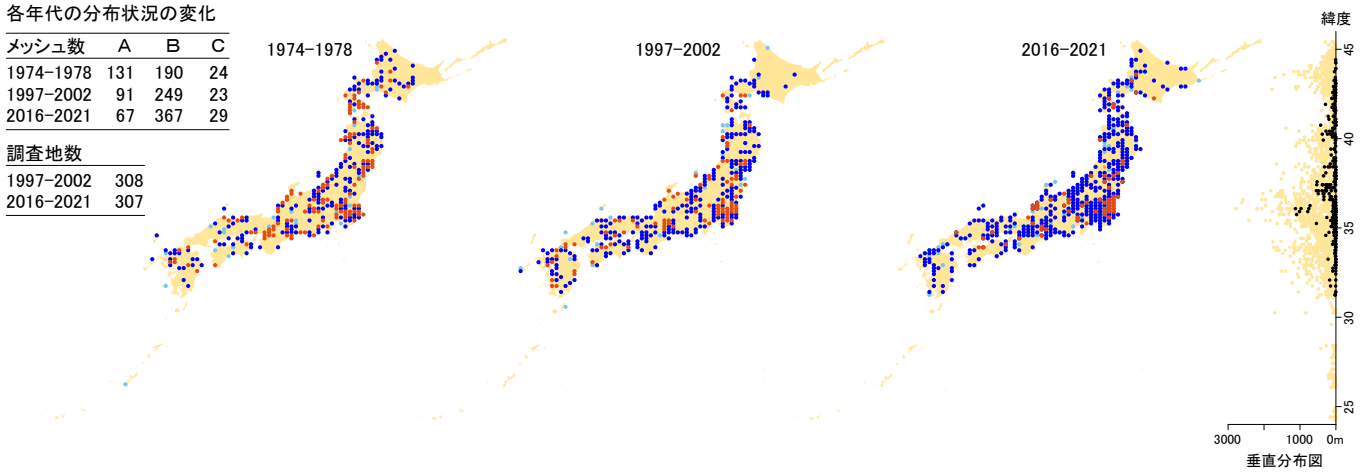
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	131	190	24
1997–2002	91	249	23
2016–2021	67	367	29

調査地数

1997–2002	308
2016–2021	307



九州以北の全国に夏鳥として分布する。河口域，河川，湖沼のアシ原のほか，埋め立て地や荒れ地のアシ原など草丈のある場所に生息，営巣する。2010 年代は前回 2 回の調査と比べて記録メッシュ数が 100 メッシュ近く増加しており，北日本での分布拡大が顕著である。北海道では以前は分布していなかった道東域にも分布するようになった。

コヨシキリ　分類:スズメ目ヨシキリ科　Black-browed Reed Warbler　*Acrocephalus bistrigiceps*

全長:13.5cm　翼長:♂51.0–56.7mm ♀49.3–53.8mm　ふ蹠長:♂19.9–23.0mm ♀19.3–22.1mm　体重:♂9.3–12.1g ♀ 8.4–12.9g

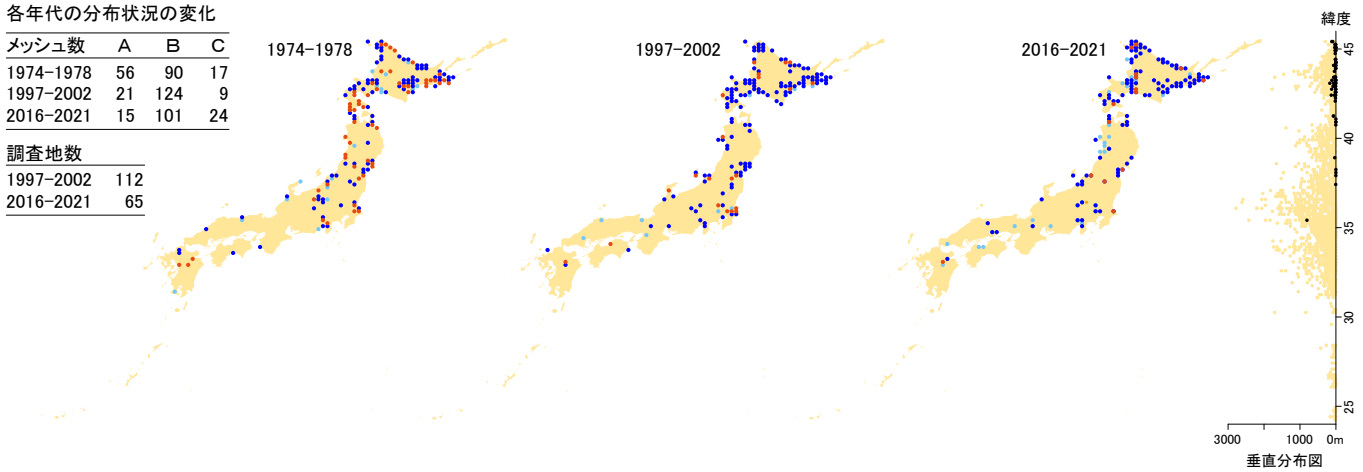
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	56	90	17
1997–2002	21	124	9
2016–2021	15	101	24

調査地数

1997–2002	112
2016–2021	65



九州以北の全国に夏鳥として分布する。低地から高原の湿地や草原，放棄水田などに生息する。オオヨシキリと比べてやや草丈の低い場所で繁殖する。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，コヨシキリが記録できた地点は，112 地点から 65 地点へと減少しており，特に分布の南側で減少傾向が強い。

セッカ　分類:スズメ目セッカ科　Zitting Cisticolar　*Cisticola juncidis*

全長:11.2–13.0cm　翼長:♂52.56±1.75mm ♀46.99±6.11mm　ふ蹠長:19–23mm　体重:♂10.62±0.83g ♀9.90±1.08g

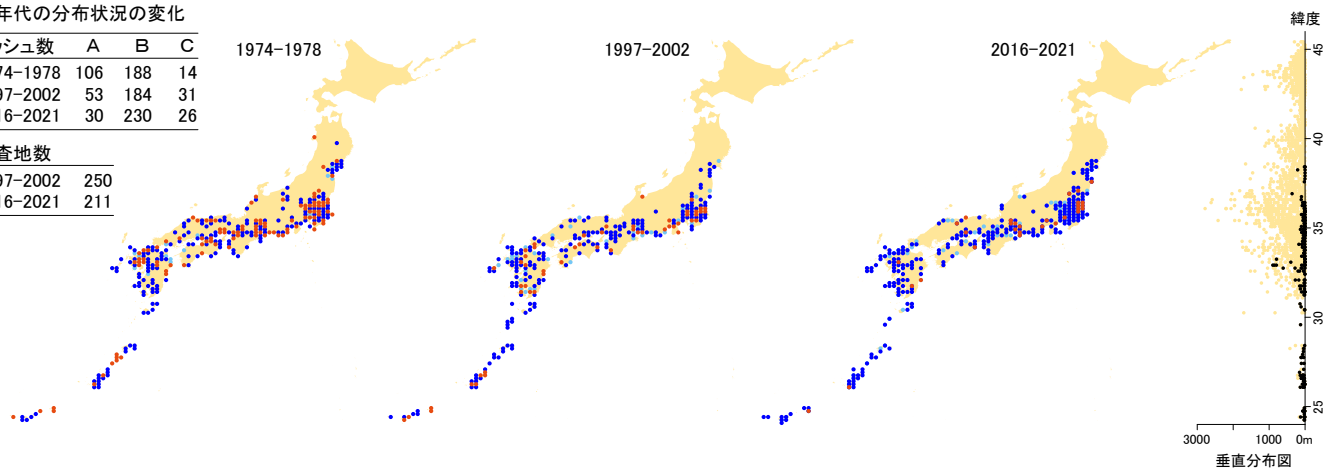
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	106	188	14
1997–2002	53	184	31
2016–2021	30	230	26

調査地数

1997–2002	250
2016–2021	211



北海道と伊豆諸島を除く全国に夏鳥として分布する。南方系の種で，南西諸島では優占種となっており，太平洋側に多く，日本海側は少ない。チガヤやススキの草原，河川敷や埋め立て地の草地などに生息する。一夫多妻で，一夫十一妻になった例もある(Ueda 1984)。

ゴジュウカラ　分類:スズメ目ゴジュウカラ科　Eurasian Nuthatch　*Sitta europaea*

全長:12.6–14.0cm　翼長:72–83mm　ふ蹠長:17–18mm　体重:17–23g

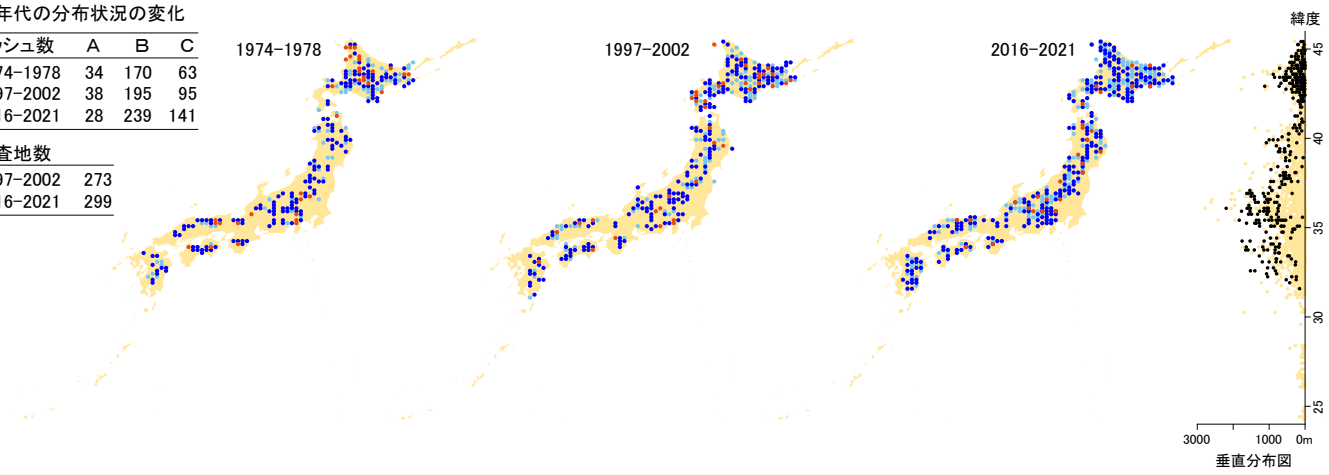
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	34	170	63
1997–2002	38	195	95
2016–2021	28	239	141

調査地数

1997–2002	273
2016–2021	299



九州以北の全国に留鳥として分布する。北海道に亜種シロハラゴジュウカラが，本州，四国，隠岐，九州北部に亜種ゴジュウカラが，九州南部に亜種キュウシュウゴジュウカラが分布する。山地の落葉広葉樹林に生息するが，北海道では低地にも生息する。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数が増加しており，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，273 地点から 299 地点へと増加していた。

キバシリ　分類:スズメ目キバシリ科　Eurasian Treecreeper　*Certhia familiaris*

全長:11.9–13.8cm　翼長:60–66mm　ふ蹠長:15–16mm　体重:7–11g

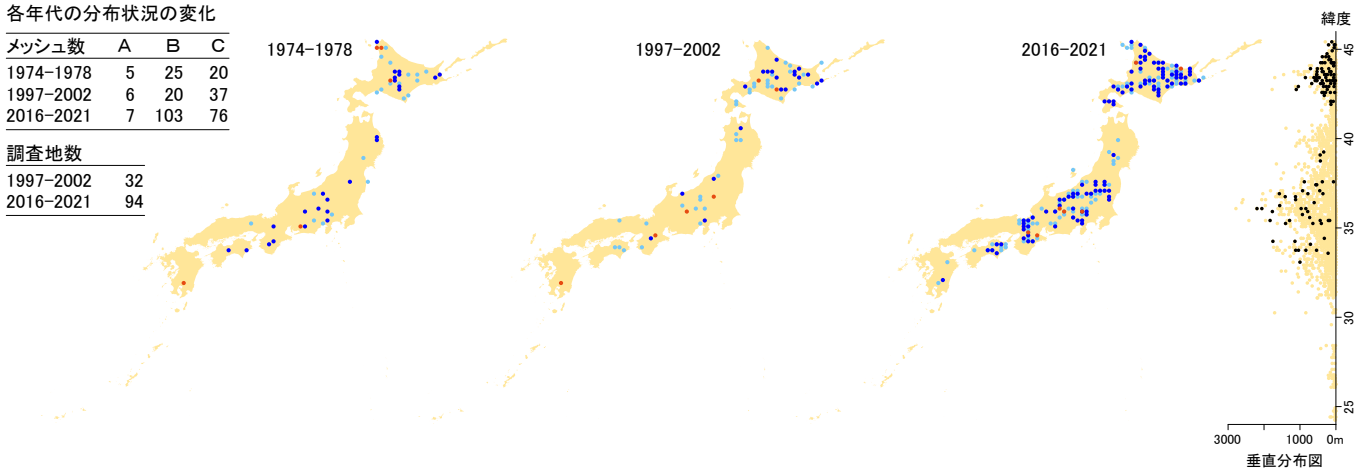
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	25	20
1997–2002	6	20	37
2016–2021	7	103	76

調査地数

1997–2002	32
2016–2021	94



九州以北の全国に留鳥として分布する。中国地方にはほとんど生息しない。北海道に亜種キタキバシリが，その他の地域に亜種キバシリが分布する。主に山地の針葉樹林，落葉広葉樹林，針広混交林に生息し，北海道では低地にも生息する。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数が増加傾向にあり，1990 年代と 2010 年代では 63 メッシュから 186 メッシュと 3 倍近く増加した。特に標高の低い地域への分布拡大が顕著だった。

ミソサザイ　分類:スズメ目ミソサザイ科　Eurasian Wren　*Troglodytes troglodytes*

全長:9.9–10.9cm　翼長:45–53mm　ふ蹠長:17–19mm　体重:6.8–10.9g

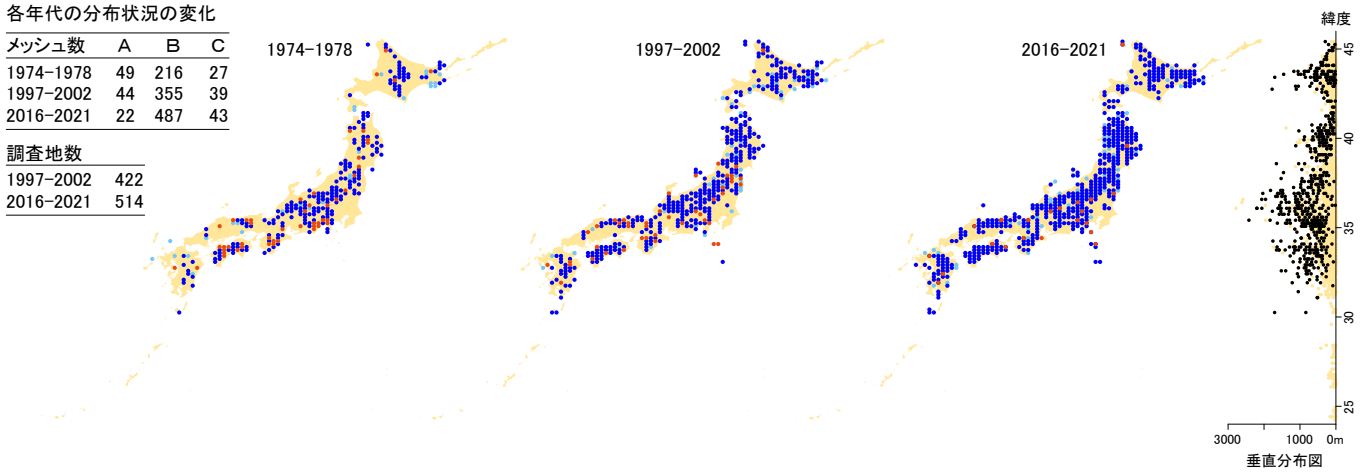
環境省レッドリスト:　絶滅(亜種ダイトウミソサザイ)，絶滅危惧 IB 類(亜種モスケミソサザイ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	49	216	27
1997–2002	44	355	39
2016–2021	22	487	43

調査地数

1997–2002	422
2016–2021	514



屋久島や伊豆諸島以北の全国に留鳥として分布する。伊豆諸島に亜種モスケミソサザイが，屋久島と種子島に亜種オガワミソサザイが，その他の地域に亜種ミソサザイが分布する。大東諸島には亜種ダイトウミソサザイが分布していたが絶滅した。繁殖期には低山帯から亜高山帯の針葉樹林や針広混交林で，渓流沿いなど林床が苔むした場所を好んで生息する。過去 3 回の調査を通じて全国的に記録メッシュ数が増加している。

ムクドリ　分類:スズメ目ムクドリ科　White-cheeked Starling　*Spodiopsar cineraceus*

全長:22.5-24.3cm　翼長:♂128.9±2.8mm ♀124.9±2.6mm　ふ蹠長:27-31mm　体重:67.5-97.5g

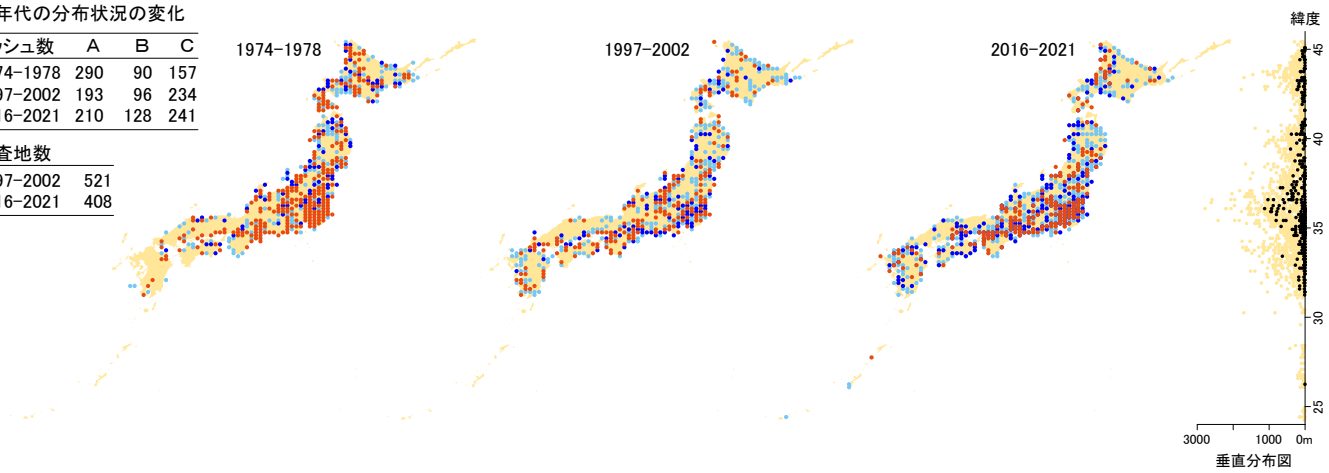
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	290	90	157
1997-2002	193	96	234
2016-2021	210	128	241

調査地数

1997-2002	521
2016-2021	408



主に九州以北の全国に留鳥として分布する。南西諸島では主に冬鳥として分布するが，まれに繁殖記録もある。主に低地の市街地から農耕地などに生息し，山地には生息しない。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数に大きな変化はないが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の総個体数は 12,155 羽から 7,729 羽に減少しており，都市部で増加している一方，農村部で減少していた。

コムクドリ　分類:スズメ目ムクドリ科　Chestnut-cheeked Starling　*Agropsar philippensis*

全長:18.3-19.8cm　翼長:♂106.76±2.12mm ♀104.55±2.36mm　ふ蹠長:♂24.09±0.91mm ♀23.89±0.95mm　体重:♂46.70±2.77g ♀47.22±3.88g

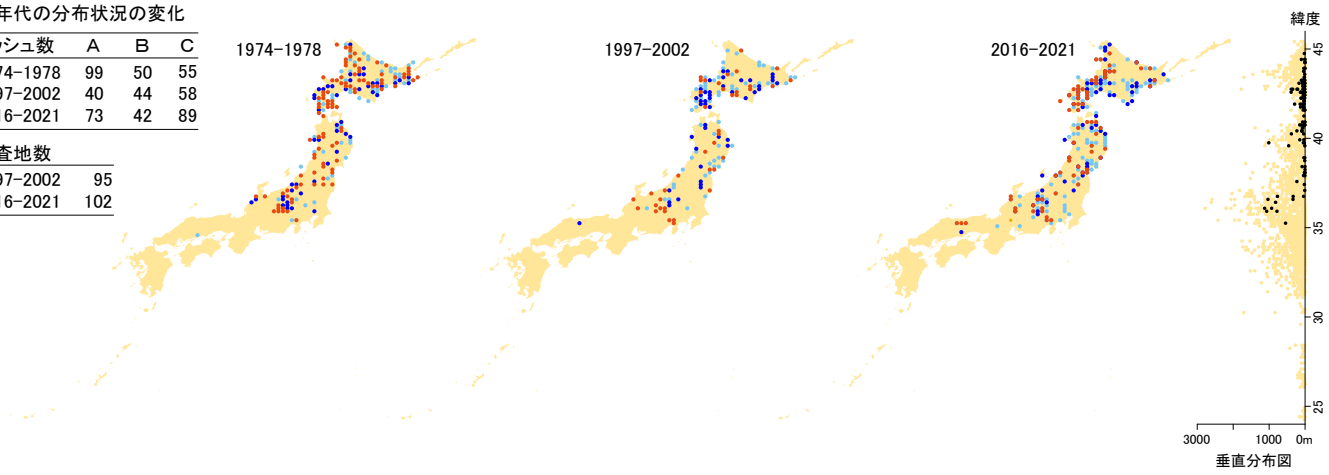
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	99	50	55
1997-2002	40	44	58
2016-2021	73	42	89

調査地数

1997-2002	95
2016-2021	102



主に本州中部以北に夏鳥として分布する。記録メッシュ数は本州中部では標高 1000m 付近で多いが，東北や北海道では低地で多い。山地では牧場や高原周辺の林で，低地では農耕地や河川の周辺の林に生息し，茂った森林には生息しない。温暖化の影響で繁殖時期が早まっている(Koike & Higuchi 2002)。

カワガラス　分類:スズメ目カワガラス科　Brown Dipper　*Cinclus pallasii*

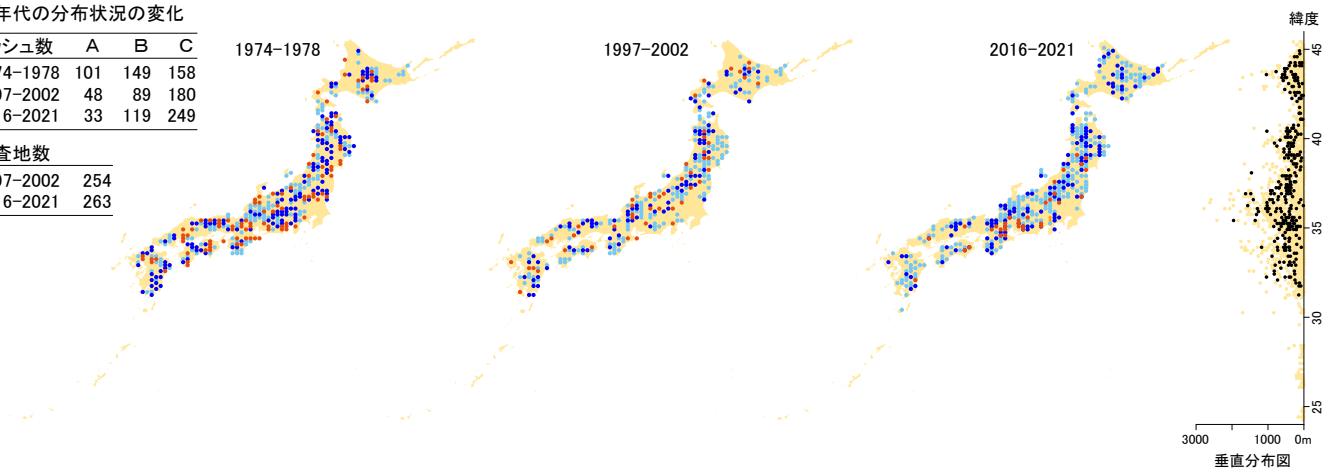
全長:20.3–22.5cm　翼長:100–105mm　ふ蹠長:30–33mm　体重:66.4–90.8g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	101	149	158
1997–2002	48	89	180
2016–2021	33	119	249

調査地数	
1997–2002	254
2016–2021	263



屋久島以北に留鳥として分布する。山地の渓流に生息し，岩棚や崖，石垣，橋の裏などに営巣する。1990 年代の記録メッシュ数は 1970 年代や 2010 年代と比べて少ないが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると大きな違いがなく，分布の変化は明らかでない。

マミジロ　分類:スズメ目ヒタキ科　Siberian Thrush　*Zoothera sibirica*

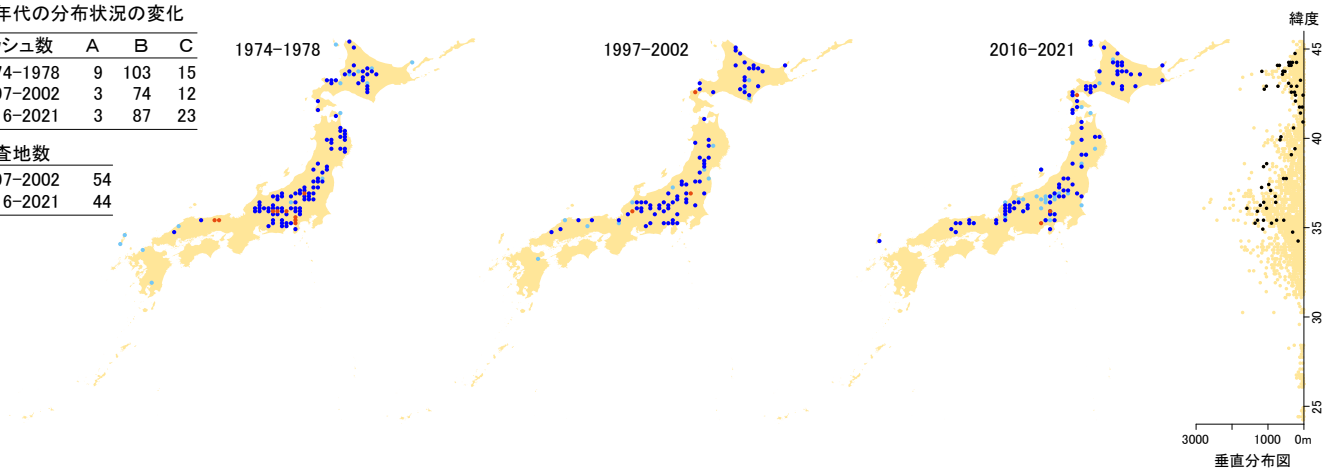
全長:22.1–24.5cm　翼長:115–128mm　ふ蹠長:28–31mm　体重:63.8–86.3g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	9	103	15
1997–2002	3	74	12
2016–2021	3	87	23

調査地数	
1997–2002	54
2016–2021	44



主に本州中部以北に夏鳥として分布する。本州では標高 1000m 程度の山地に多く，森林限界付近まで生息する。北海道では低地でも繁殖する。1990 年代の記録メッシュ数は 1970 年代や 2010 年代と比べて少ないが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると大きな違いがなく，分布の変化は明らかでない。

トラツグミ　分類:スズメ目ヒタキ科　Scaly Thrush　*Zoothera dauma*

嘴峰長:23.0–27.0mm　翼長:149.5–165.0mm　ふ蹠長:29.5–34.5mm　体重:116–158g

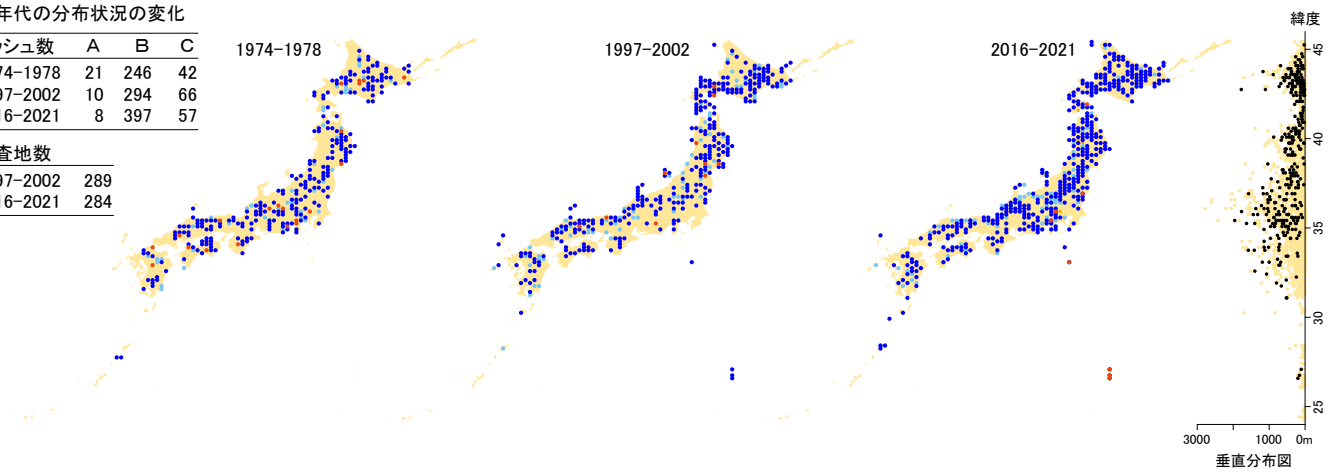
環境省レッドリスト:　情報不足(亜種コトラツグミ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	21	246	42
1997–2002	10	294	66
2016–2021	8	397	57

調査地数

1997–2002	289
2016–2021	284



九州から本州にかけてと小笠原群島に留鳥として，北海道に夏鳥として分布する。今回は，亜種オオトラツグミも別の分布図として示しているが，この分布図はオオトラツグミも含んだものである。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数が増加している。

オオトラツグミ　分類:スズメ目ヒタキ科　Amami Thrush　*Zoothera dauma major*

嘴峰長:21.3–30.2mm　翼長:158.5–171.0mm　ふ蹠長:41.0–44.7mm　体重:170.0–216.0g

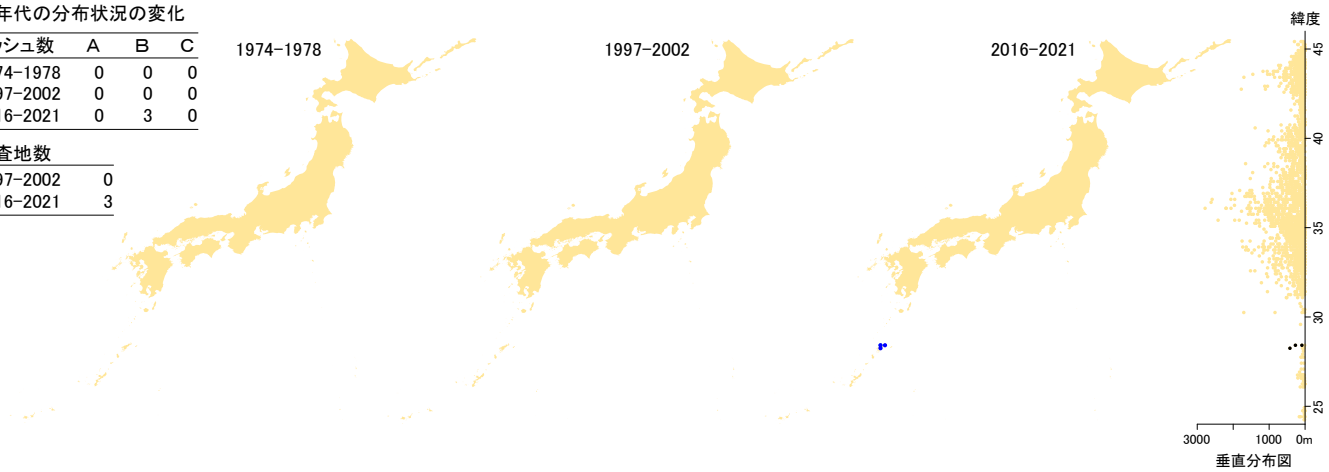
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	3	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	3



奄美大島に留鳥として生息する。トラツグミの亜種だが，別の分布図として示した。1990 年代以前の調査ではトラツグミとして記録されていたため，分布図には示されていない。林齢の高い広葉樹林を好んで生息する。奄美大島ではマングースの防除が進むと同時に森林の伐採が減少して森林が回復したことによってオオトラツグミの分布範囲や確認数が増加している(水田　2015)。

カラアカハラ　分類:スズメ目ヒタキ科　Grey-backed Thrush　*Turdus hortulorum*

嘴峰長:18-22mm　翼長:110-112mm　ふ蹠長:29-34mm　尾長:74-89mm

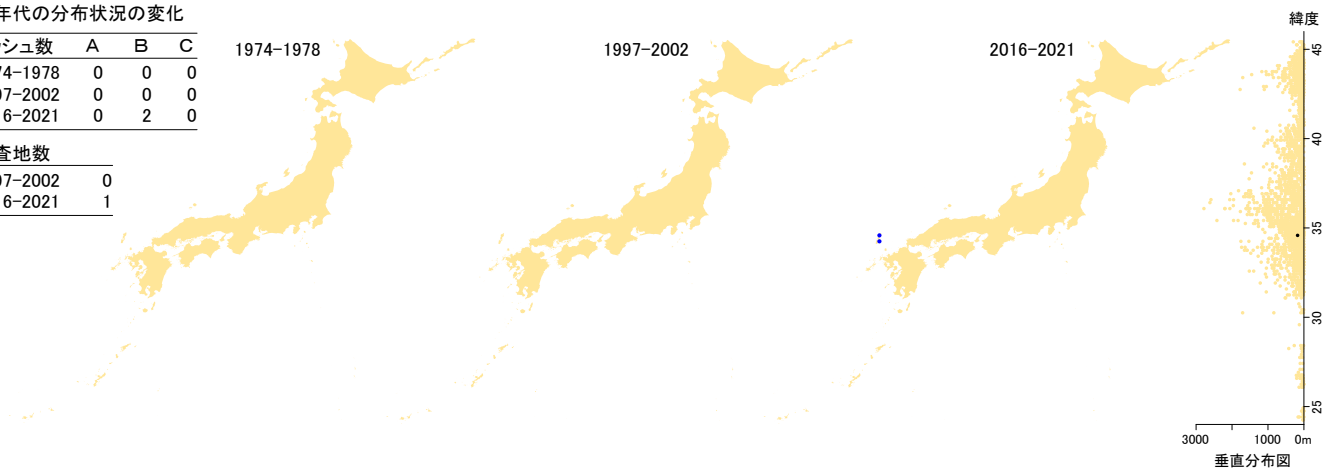
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	0	0	0
1997-2002	0	0	0
2016-2021	0	2	0

調査地数

1997-2002	0
2016-2021	1



対馬で繁殖期に確認された。日本での繁殖確認記録はないが，繁殖している可能性がある。

クロツグミ　分類:スズメ目ヒタキ科　Japanese Thrush　*Turdus cardis*

全長:21.0-22.5cm　翼長:♂111.3±2.9mm ♀108.9±3.1mm　ふ蹠長:♂30.6±0.9mm ♀29.9±1.2mm　体重:50-65g

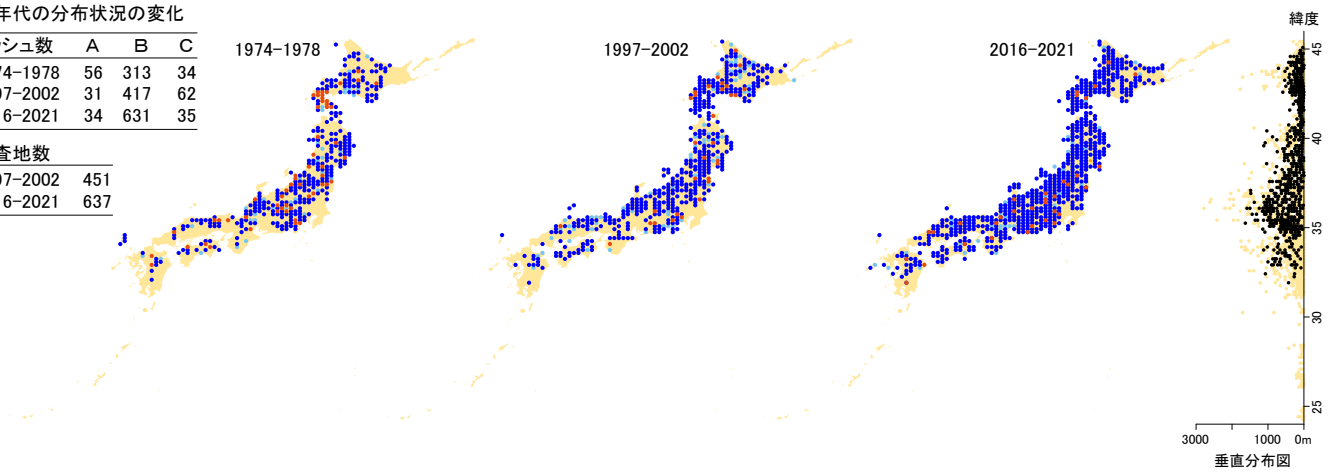
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	56	313	34
1997-2002	31	417	62
2016-2021	34	631	35

調査地数

1997-2002	451
2016-2021	637



九州以北の全国に夏鳥として分布する。平地から山地の針広混交林や広葉樹林，針葉樹の植林地などに生息し，北海道や東北では河畔林などにも生息する。過去 3 回の調査を通じて記録メッシュ数が増加しており，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，451 地点から 637 地点へと増加していた。

シロハラ　分類:スズメ目ヒタキ科　Pale Thrush　*Turdus pallidus*

全長:23.4–25.2cm　翼長:120–130mm　ふ蹠長:30–32mm　体重:63.8–92.6g

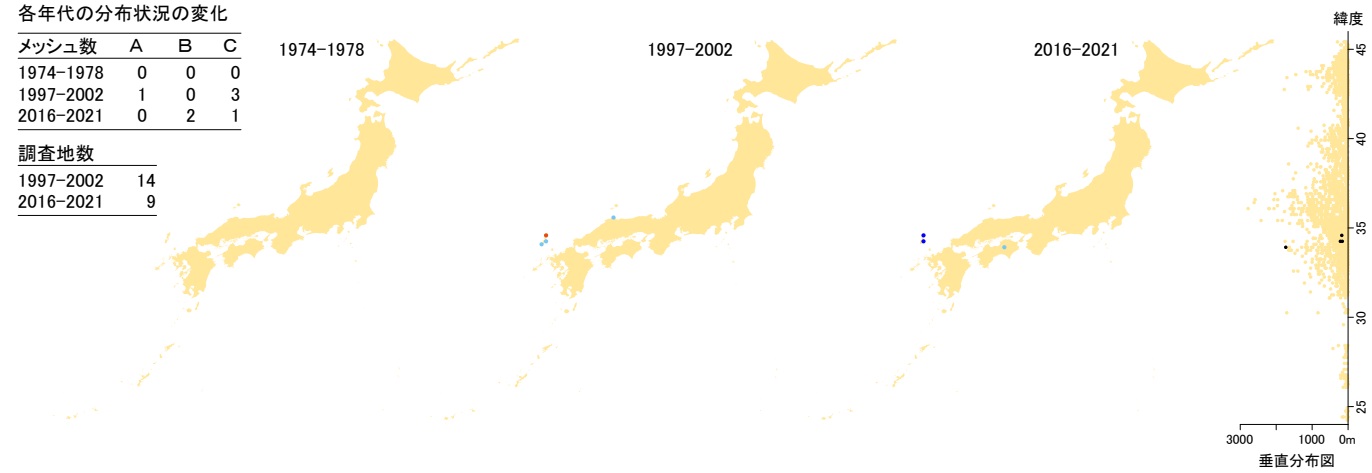
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	0	3
2016–2021	0	2	1

調査地数

1997–2002	14
2016–2021	9



対馬などで繁殖期に記録された。中国山地で繁殖記録がある(上野ほか 1993)。やや開けた森林に生息し，枝上に椀形の巣をつくって営巣する。昆虫類やクモ類を捕食するほか，様々な植物の漿果や種子を採食する。

アカハラ　分類:スズメ目ヒタキ科　Brown-headed Thrush　*Turdus chrysolaus*

全長:22.5–24.6cm　翼長:120–125mm　ふ蹠長:30–35mm　体重:61.1–88.1g

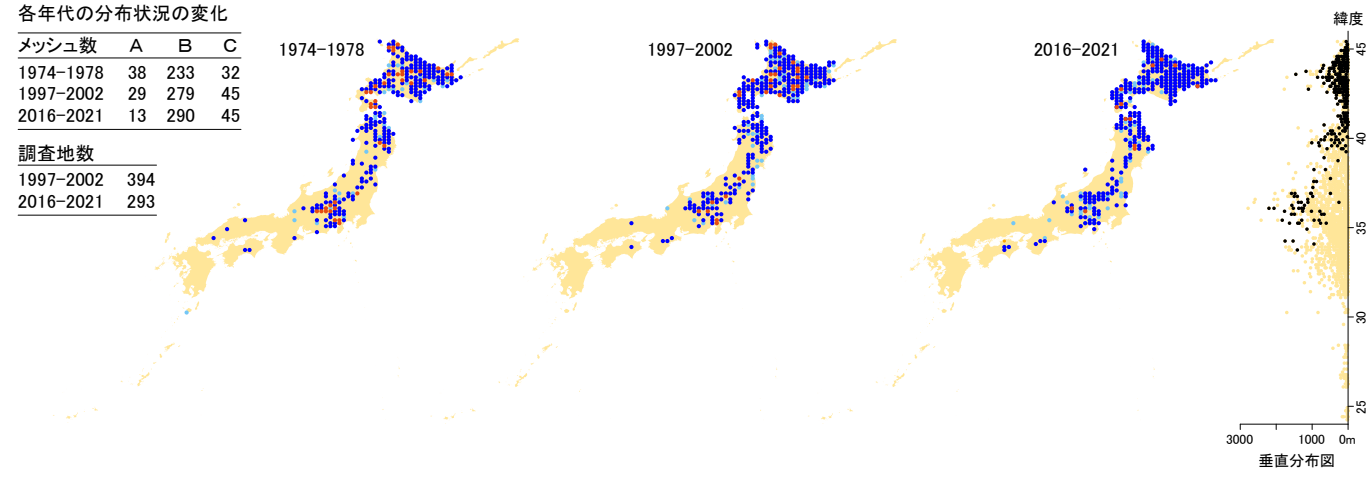
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	38	233	32
1997–2002	29	279	45
2016–2021	13	290	45

調査地数

1997–2002	394
2016–2021	293



主に本州中部以北に夏鳥として分布し，中国山地や四国山地，紀伊半島でも記録メッシュがある。本州中部では標高の高い山地で繁殖するが，東北や北海道では平地でも繁殖する。過去 3 回の調査期間に記録メッシュ数は大きく変化していないが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，記録された地点は，394 地点から 293 地点へと減少しており，個体数も 1,611 羽から 785 羽に減少していた。

アカコッコ　分類:スズメ目ヒタキ科　Izu Thrush　*Turdus celaenops*

全長:23cm　翼長:♂112.0–124.0mm ♀108.0–117.0mm　ふ蹠長:♂31.9–35.8mm ♀32.5–33.7mm　体重:♂73.7–81.3g ♀65.9–93.1g

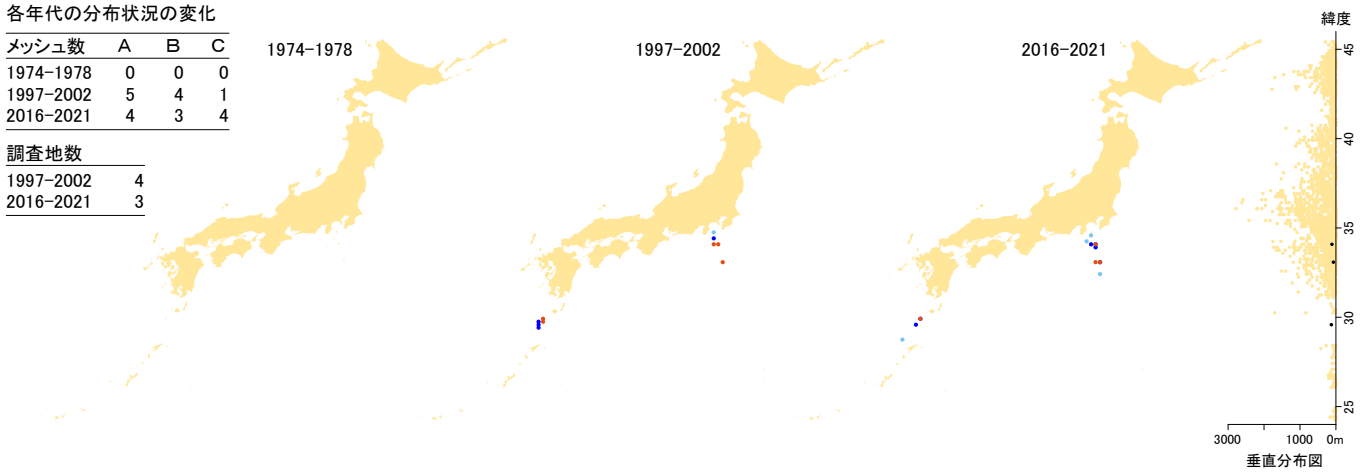
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	5	4	1
2016–2021	4	3	4

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	3



トカラ列島および伊豆諸島に留鳥として分布する。屋久島や男女群島でも観察記録がある。照葉樹林や広葉樹林の自然林から二次林までの様々な環境に生息し，特に，照葉樹林に多い。伊豆諸島三宅島では 1970 年代から 1980 年代に生息地にイタチが導入されたことによって繁殖成功率が下がっており，生息密度も低下した(高木・樋口 1992)。また，三宅島では 2000 年代に起きた火山活動によっても生息地が減少している。

コマドリ　分類:スズメ目ヒタキ科　Japanese Robin　*Luscinia akahige*

全長:13.0–14.6cm　翼長:71–78mm　ふ蹠長:27–29mm　体重:13.1 –20.6g

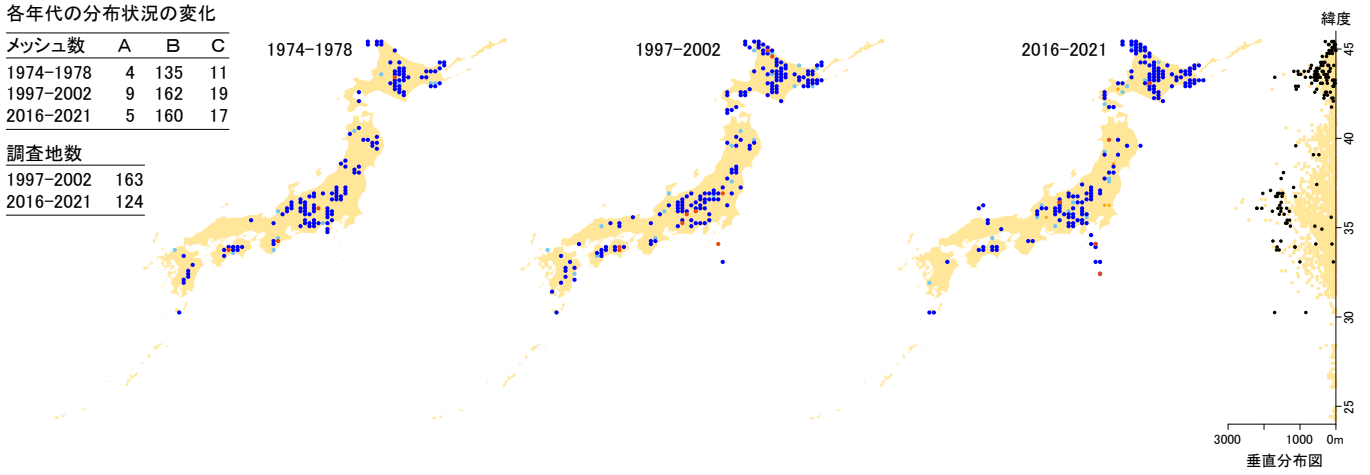
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類(亜種タネコマドリ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	4	135	11
1997–2002	9	162	19
2016–2021	5	160	17

調査地数

1997–2002	163
2016–2021	124



屋久島，種子島と伊豆諸島に亜種タネコマドリが，九州以北の全国に亜種コマドリが夏鳥として分布する。屋久島では標高 1000m 以上のスギ林に，伊豆諸島では常緑広葉樹林に生息し，その他の地域では主に針広混交林に生息する。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，コマドリが記録できた地点は，163 地点から 124 地点へと減少していた。減少の一因としてシカによる下層植生の摂食が考えられている(Hino 2000)。

アカヒゲ　分類:スズメ目ヒタキ科　Ryukyu Robin　*Luscinia komadori*

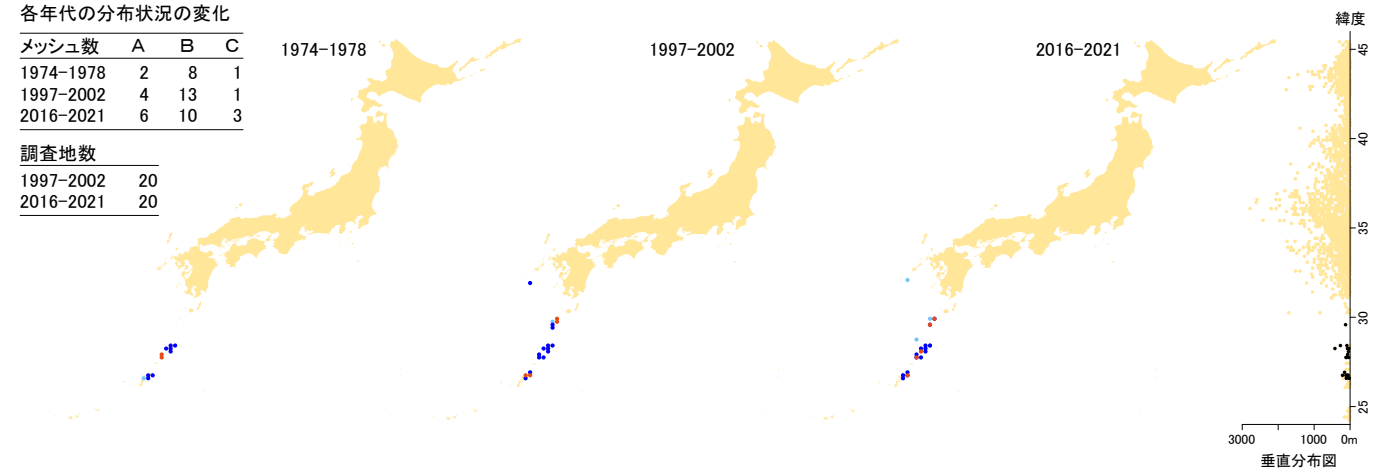
翼長:♂75.5±1.6mm ♀72.5±1.6mm　ふ蹠長:♂28.3±0.7mm ♀27.9±0.7mm　体重:♂23.0±1.3g ♀24.4±2.4g

環境省レッドリスト:　絶滅(亜種ウスアカヒゲ), 絶滅危惧 IB 類(亜種ホントウアカヒゲ), 絶滅危惧 II 類(亜種アカヒゲ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	8	1
1997–2002	4	13	1
2016–2021	6	10	3

調査地数	
1997–2002	20
2016–2021	20



亜種アカヒゲが奄美諸島とトカラ列島, 男女群島に夏鳥として分布する。亜種ホントウアカヒゲは沖縄島北部に留鳥として分布する。下層植生が発達した照葉樹林に生息し, トカラ列島では, リュウキュウチクの林にも生息する。1970 年代の記録メッシュ数が少ないのは島嶼調査が不十分だったためと考えられる。

ノゴマ　分類:スズメ目ヒタキ科　Siberian Rubythroat　*Luscinia calliope*

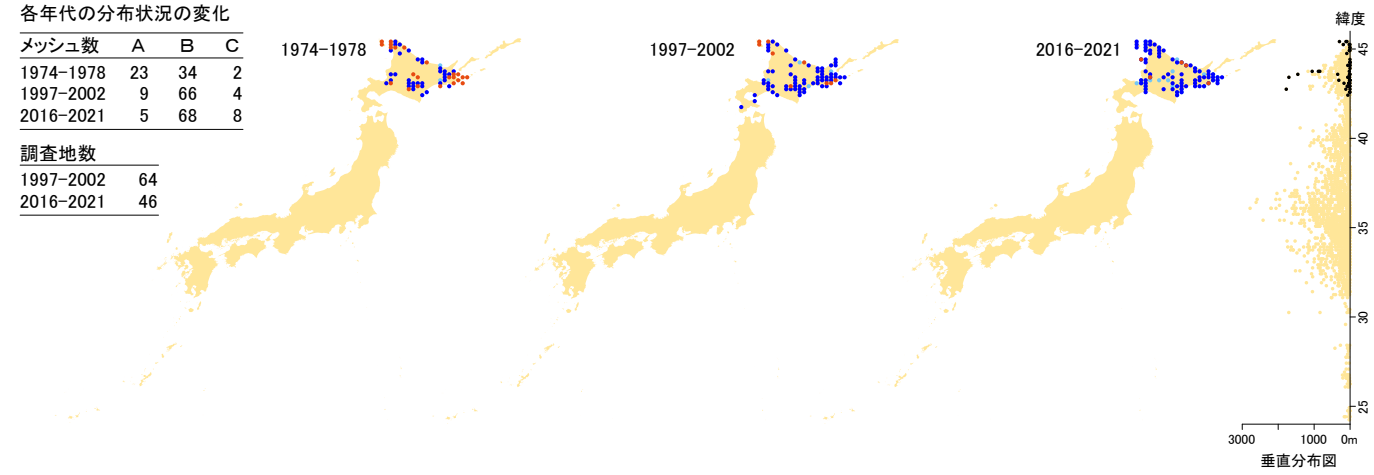
全長:14.2–16.2cm　翼長:75–80mm　ふ蹠長:28–33mm　体重:15–23g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	23	34	2
1997–2002	9	66	4
2016–2021	5	68	8

調査地数	
1997–2002	64
2016–2021	46



北海道に夏鳥として分布する。海岸や河川敷, 農耕地などの低木が混じる開けた環境から高山のハイマツ帯まで幅広い環境に生息する。3 期をとおして, 記録メッシュ数に大きな変化は見られていない。

コルリ　分類:スズメ目ヒタキ科　Siberian Blue Robin　*Luscinia cyane*

全長:12.9–14.4cm　翼長:71–81mm　ふ蹠長:25–27mm　体重:13–20g

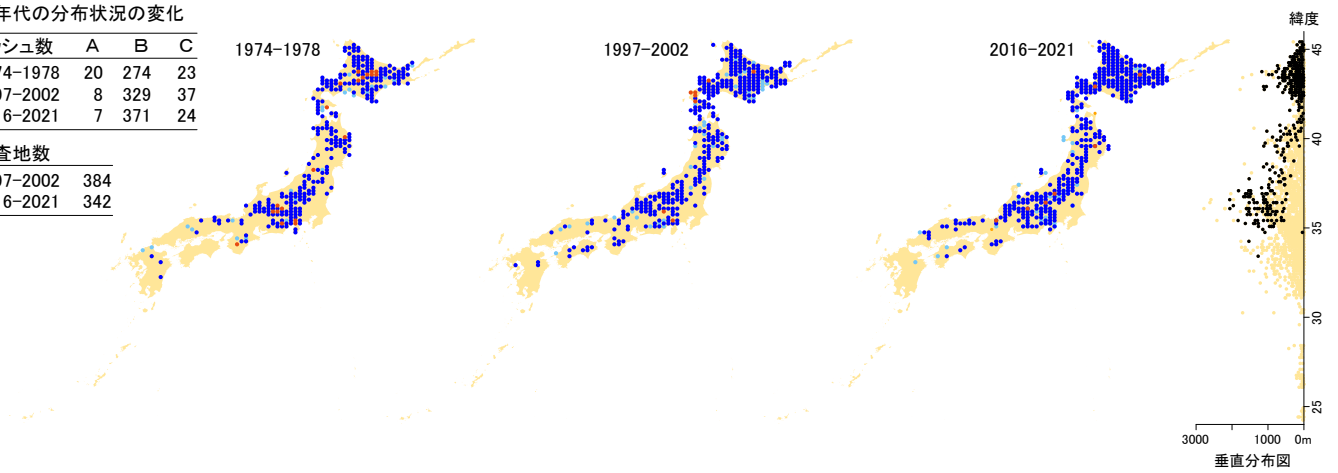
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	20	274	23
1997–2002	8	329	37
2016–2021	7	371	24

調査地数

1997–2002	384
2016–2021	342



四国と中国地方以北に夏鳥として分布する。本州では主に高標高の山地に生息し，北海道では平地にも生息する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数は増加しているが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，384 地点から 342 地点と，わずかに減少していた。シカの摂食の影響により林床植生の減少した場所では個体数が減少していることが知られており（植田ほか 2019），シカの影響による生息地の減少が懸念されている。

ルリビタキ　分類:スズメ目ヒタキ科　Red-flanked Bluetail　*Tarsiger cyanurus*

全長:14cm　翼長:♂75.5–84.0mm ♀72.0–79.0mm　ふ蹠長:♂21.1–24.0mm ♀21.0–24.1mm　体重:♂11.0–15.2g ♀10.0–17.8g

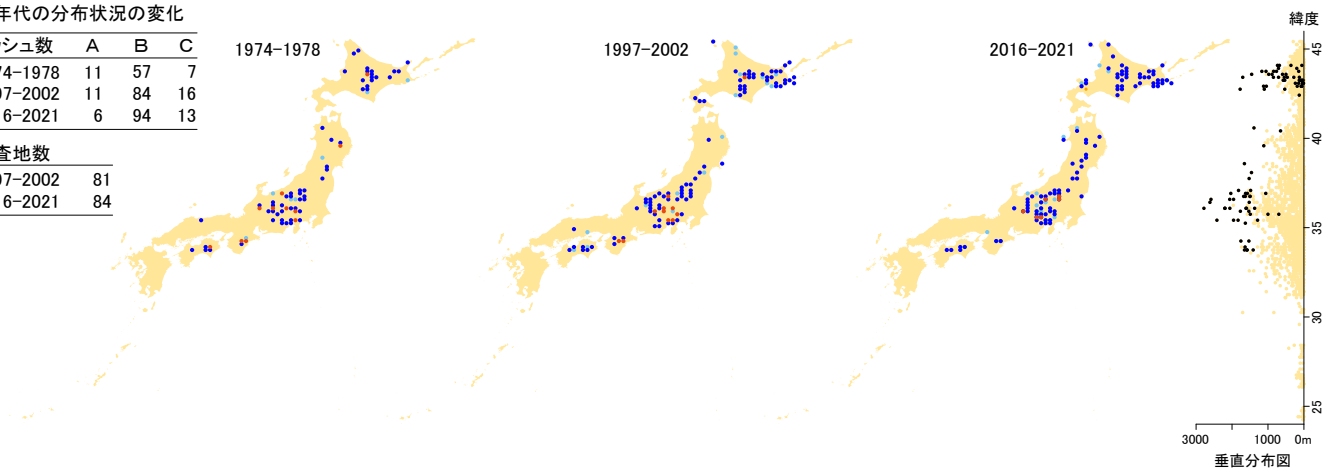
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	11	57	7
1997–2002	11	84	16
2016–2021	6	94	13

調査地数

1997–2002	81
2016–2021	84



四国以北の全国に分布する。本州では標高 1500m 以上の亜高山帯から高山帯にかけての針広混交林や針葉樹林，森林限界付近の針葉樹の低木林などに生息する。北海道では比較的標高が低い場所にも生息する。2010 年代調査の分布状況は 1990 年代と比べて大きな変化はなかったが西日本の記録地点がやや減少していた。

ジョウビタキ　分類:スズメ目ヒタキ科　Daurian Redstartl　*Phoenicurus auroreus*

全長:14–15cm　翼長:65.5–77.0mm　ふ蹠長:21–24mm　体重:11–20g

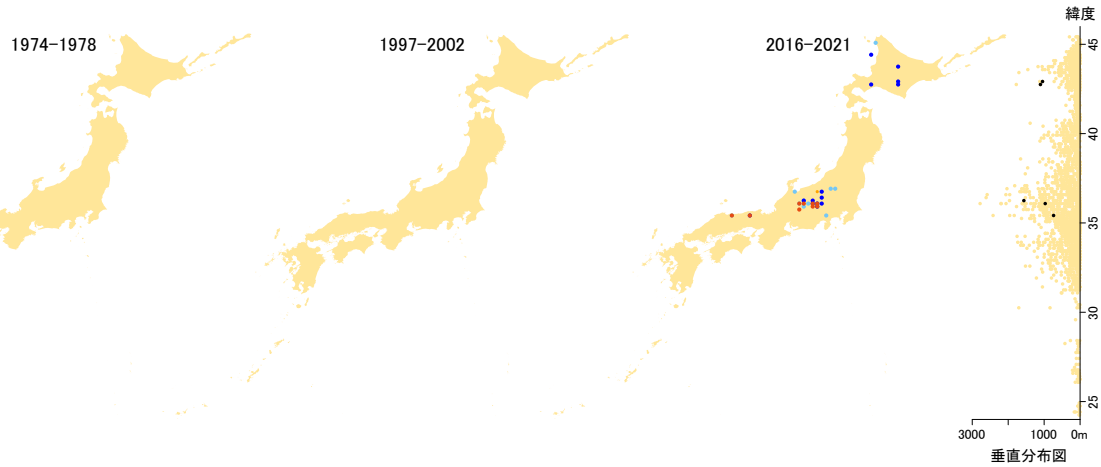
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	9	10	7

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	5



国内では 1983 年に北海道上士幌町糠平で繁殖が確認されたが(川辺　1994)，定常的な繁殖地はなかった。それが 2010 年代には中国山地や岐阜県，長野県，北海道などで定常的に繁殖するようになった。本州では，居住者のいる建物などの人工物の隙間で繁殖し，巣箱を利用することもあるが(山路・林　2018)，北海道では山地の森林内で観察されており，営巣環境は異なっていると考えられる。

ノビタキ　分類:スズメ目ヒタキ科　Siberian Stonechat　*Saxicola torquatus*

全長:13cm　翼長:64–71mm　ふ蹠長:21–23mm　体重:12–16g

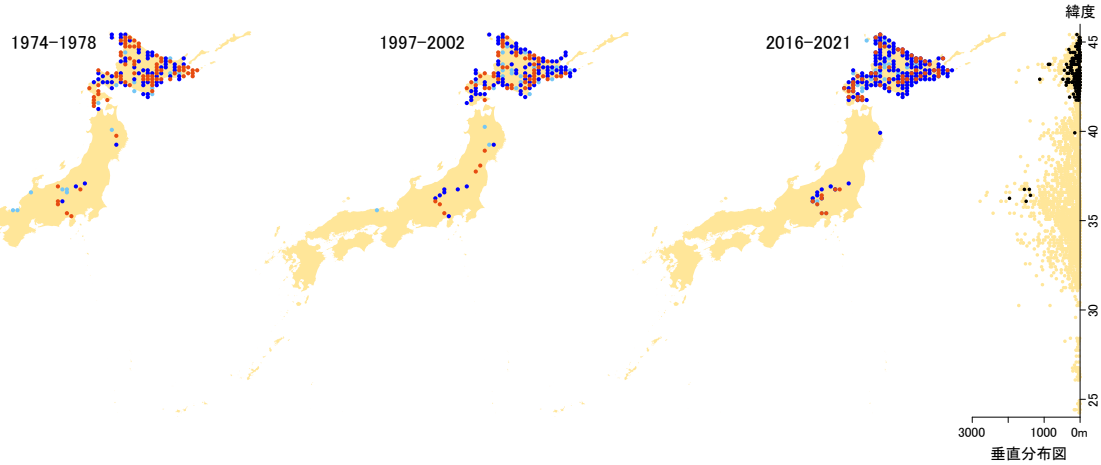
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	76	67	17
1997–2002	54	91	23
2016–2021	60	124	18

調査地数

1997–2002	170
2016–2021	182



本州中部，北部の高地と北海道の全域に夏鳥として分布する。本州では主に高原で繁殖し，北海道では海岸草原や農耕地などの開けた環境で繁殖する。1990 年代から 2010 年代にかけて，本州ではメッシュ数が減少していたが，北海道では記録メッシュ数が増加していた。

イソヒヨドリ　分類:スズメ目ヒタキ科　Blue Rock Thrush　*Monticola solitarius*

全長:♂21.5–23.2cm ♀21.2–22.7cm　翼長:♂115–130mm ♀111–121mm　ふ蹠長:♂29–34mm ♀29–32mm　体重:♂57–69g ♀47–63g

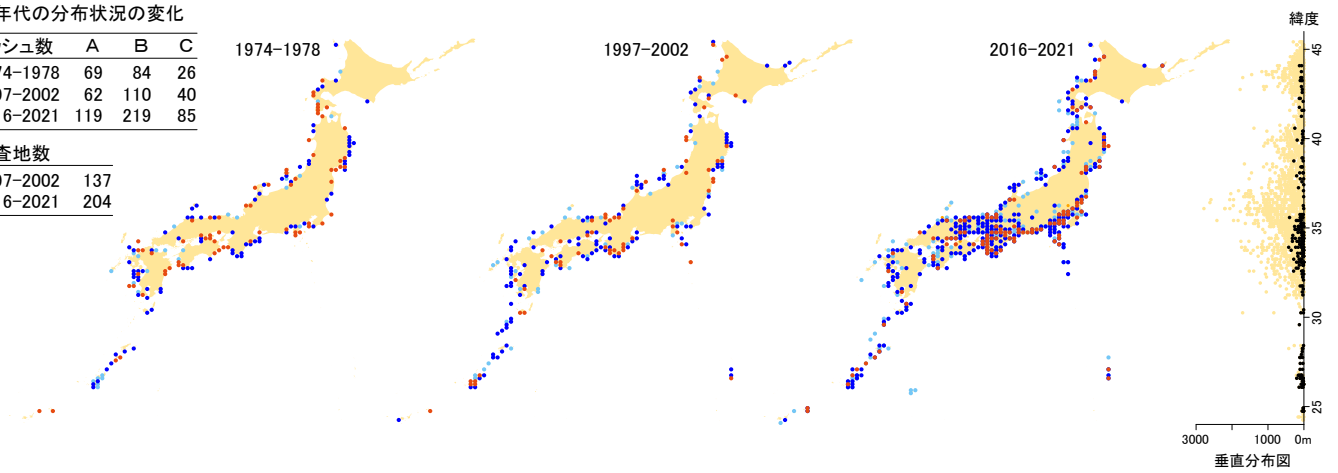
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	69	84	26
1997–2002	62	110	40
2016–2021	119	219	85

調査地数

1997–2002	137
2016–2021	204



北海道では夏鳥，その他の全国に留鳥として分布する。主に海岸の岩場に生息していたが，近年は海岸から離れた内陸部への進出が著しい。内陸の都市部では高層の建物があり草地などの開けた環境が隣接する場所に生息する(鳥居・江崎 2014)。こうした内陸への進出の影響もあり，過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数が大幅に増加した。

サメビタキ　分類:スズメ目ヒタキ科　Dark-sided Flycatcher　*Muscicapa sibirica*

全長:12.7–14.0cm　翼長:75–82mm　ふ蹠長:12–15mm　体重:12–18g

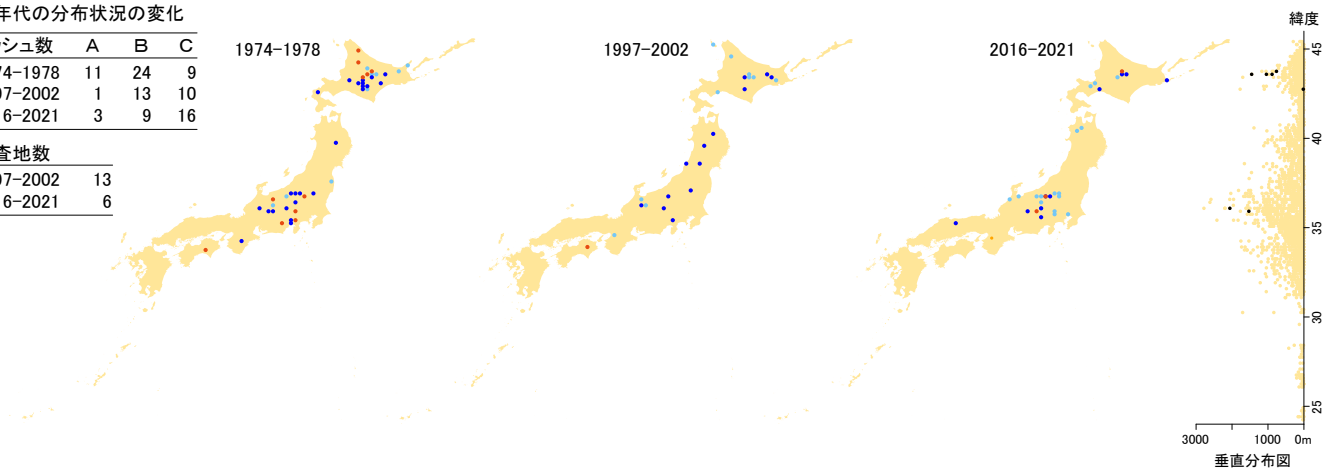
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	11	24	9
1997–2002	1	13	10
2016–2021	3	9	16

調査地数

1997–2002	13
2016–2021	6



主に本州中部以北に夏鳥として分布し，亜高山帯の針葉樹林，針広混交林で繁殖する。針葉樹やニレなどの落葉広葉樹の梢近くの水平な枯れ枝上で営巣する。飛翔中の昆虫類を飛びながら捕食する。1970 年代と比べると記録メッシュ数が減少した。

コサメビタキ　分類:スズメ目ヒタキ科　Asian Brown Flycatcher　*Muscicapa dauurica*

全長:12.0–13.5cm　翼長:65–76mm　ふ蹠長:12–15mm　体重:10–15g

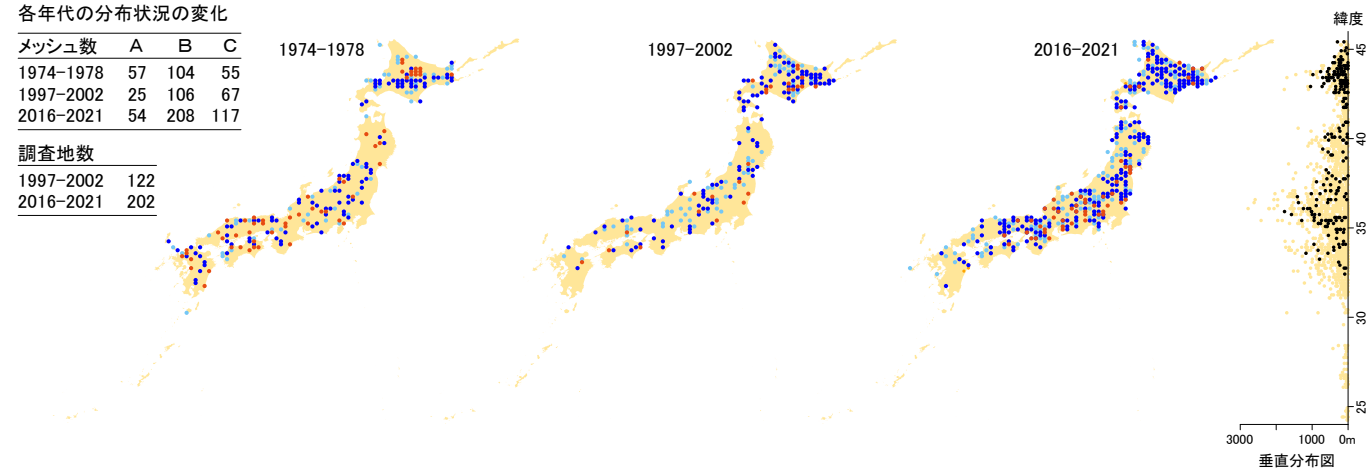
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	57	104	55
1997–2002	25	106	67
2016–2021	54	208	117

調査地数

1997–2002	122
2016–2021	202



九州以北の全国に夏鳥として分布する。主に標高 1000m 以下の低山帯に生息する。樹上の水平な枝上に営巣する。飛翔中の昆虫類を捕食する。1970 年代と 1990 年代は記録メッシュ数が 200 前後であったが，2010 年代は 379 メッシュへと大幅に増加した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，コサメビタキが記録された地点は，122 地点から 202 地点へと増加していた。

キビタキ　分類:スズメ目ヒタキ科　Narcissus Flycatcher　*Ficedula narcissina*

全長:12.0–13.5cm　翼長:♂75.9±1.9mm ♀70.7±1.9mm　ふ蹠長:♂16.3±0.5mm ♀16.4±0.4mm　体重:♂14.9±0.9g ♀16.1±1.1g

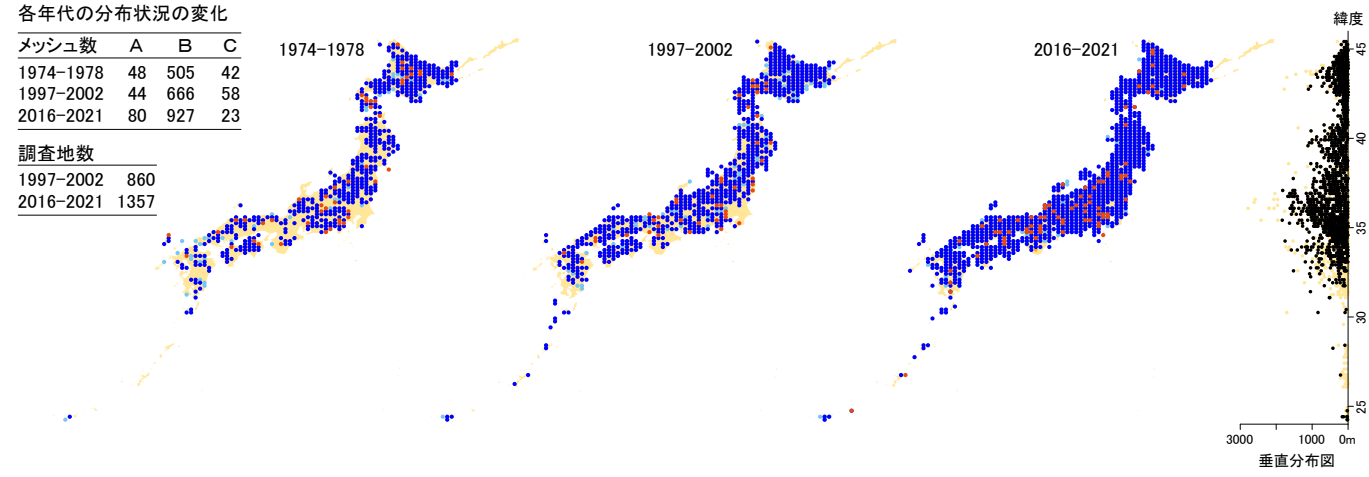
環境省レッドリスト:　情報不足(亜種リュウキュウキビタキ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	48	505	42
1997–2002	44	666	58
2016–2021	80	927	23

調査地数

1997–2002	860
2016–2021	1357



南西諸島に亜種リュウキュウキビタキが留鳥として，その他の伊豆諸島・小笠原群島を除く全国に亜種キビタキが夏鳥として分布する。ただし屋久島やトカラ列島の繁殖集団は夏鳥だと考えられている。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数が大幅に増加し，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，860 地点から 1,357 地点へと大きく増加していた。

オオルリ　分類:スズメ目ヒタキ科　Blue-and-white Flycatcher　*Cyanoptila cyanomelana*

全長:16–17cm　翼長:♂80–97mm ♀72–99mm　ふ蹠長:♂14.6–16.8 ♀14.8–16.5mm　体重:♂19.0–23.0g ♀15.2–22.2g

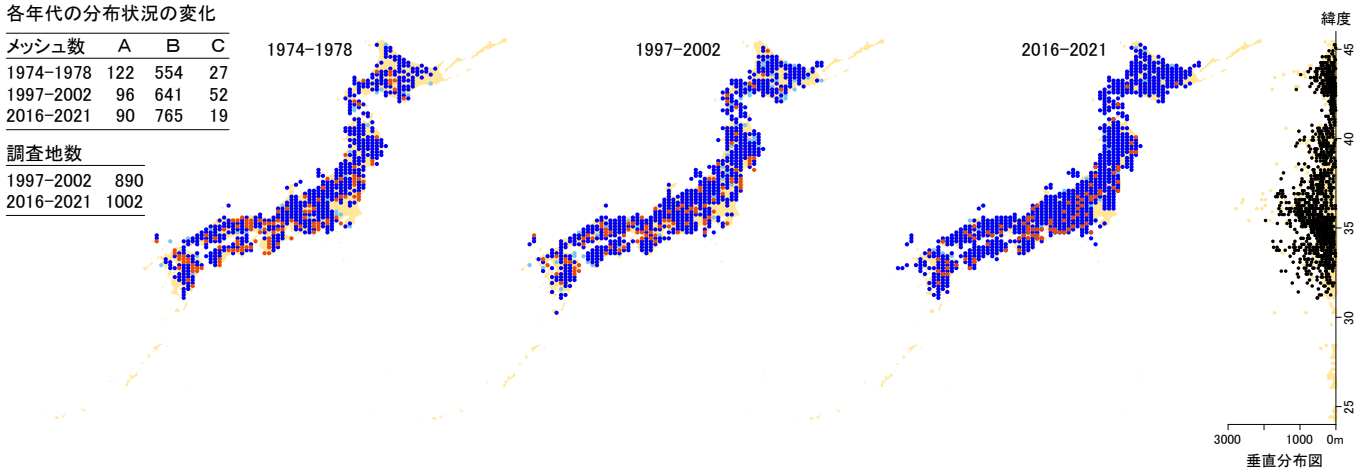
環境省レッドリスト: —

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	122	554	27
1997–2002	96	641	52
2016–2021	90	765	19

調査地数

1997–2002	890
2016–2021	1002



南西諸島と小笠原群島を除く全国に夏鳥として分布する。低山帯の沢の近くや湿地近くの低木林や疎林に生息する。記録メッシュ数は増加しており，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，890 地点から 1,002 地点へと増加していた。

イワヒバリ　分類:スズメ目イワヒバリ科　Alpine Accentor　*Prunella collaris*

全長:16.8–18.7cm　翼長:97–107mm　ふ蹠長:23–25mm　体重:32–46g

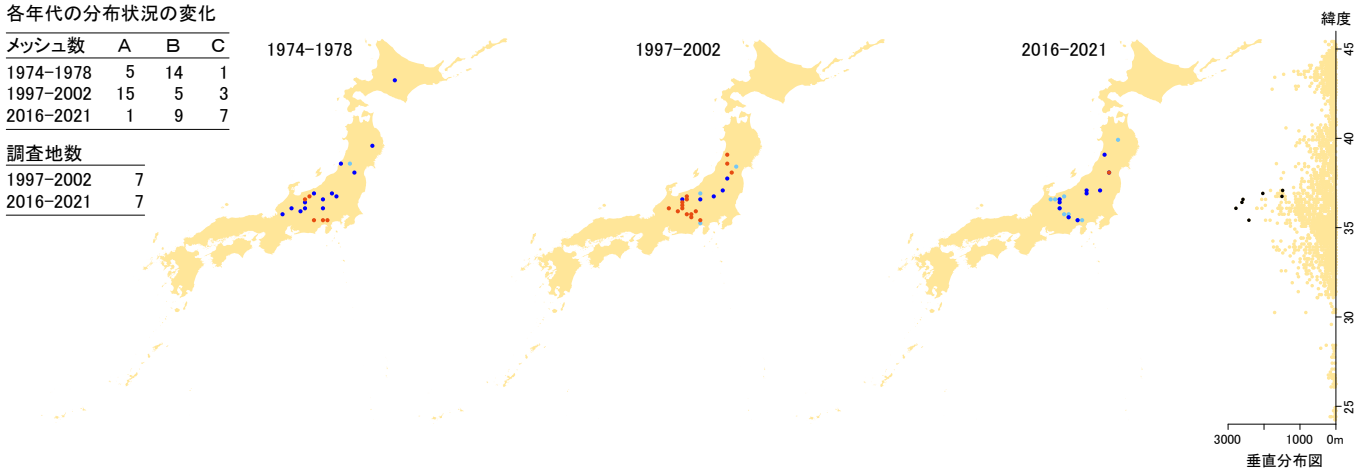
環境省レッドリスト: —

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	14	1
1997–2002	15	5	3
2016–2021	1	9	7

調査地数

1997–2002	7
2016–2021	7



本州の高山帯の森林限界よりも標高が高い場所に生息し，冬期はやや標高が低い場所に移動する。2010 年代の記録メッシュ数は減少していたが，現地調査の観察地点数には変化はなかった。イワヒバリは調査地の少ない高標高域に分布し，記録メッシュ数はアンケートへの依存が高いため，実際の分布の変化は不明である。

カヤクグリ　分類:スズメ目イワヒバリ科　Japanese Accentor　*Prunella rubida*

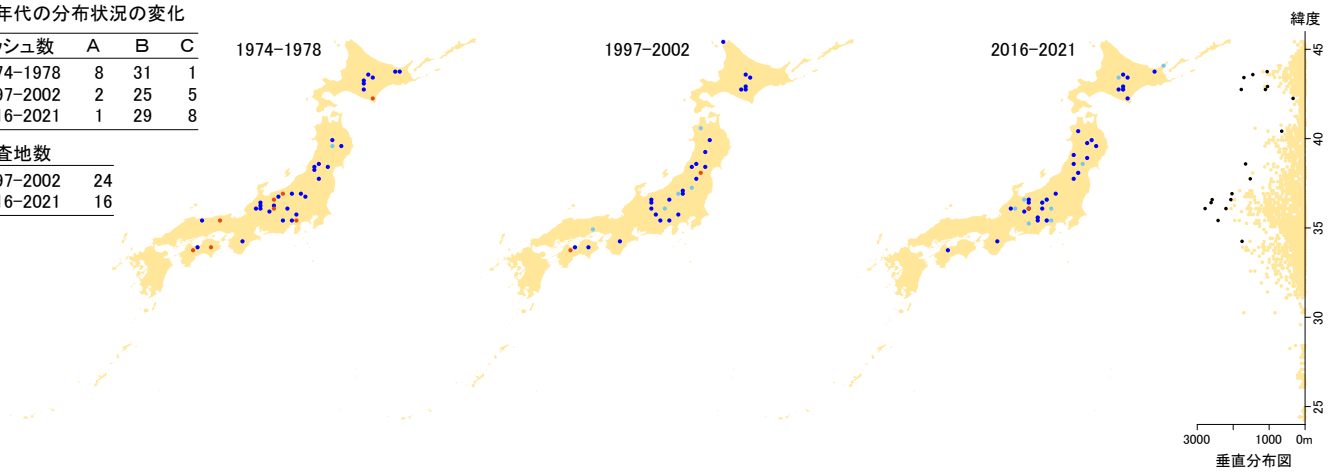
全長:13.4–14.6cm　翼長:66–70mm　ふ蹠長:20–22mm　体重:13–20g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	8	31	1
1997–2002	2	25	5
2016–2021	1	29	8

調査地数	
1997–2002	24
2016–2021	16



四国と本州，北海道に留鳥として分布する。亜高山帯の低木林やハイマツ林で繁殖する。ハイマツなどの枝上に営巣する。記録メッシュ数に大きな変化は見られていない。

ニュウナイスズメ　分類:スズメ目スズメ科　Russet Sparrow　*Passer rutilans*

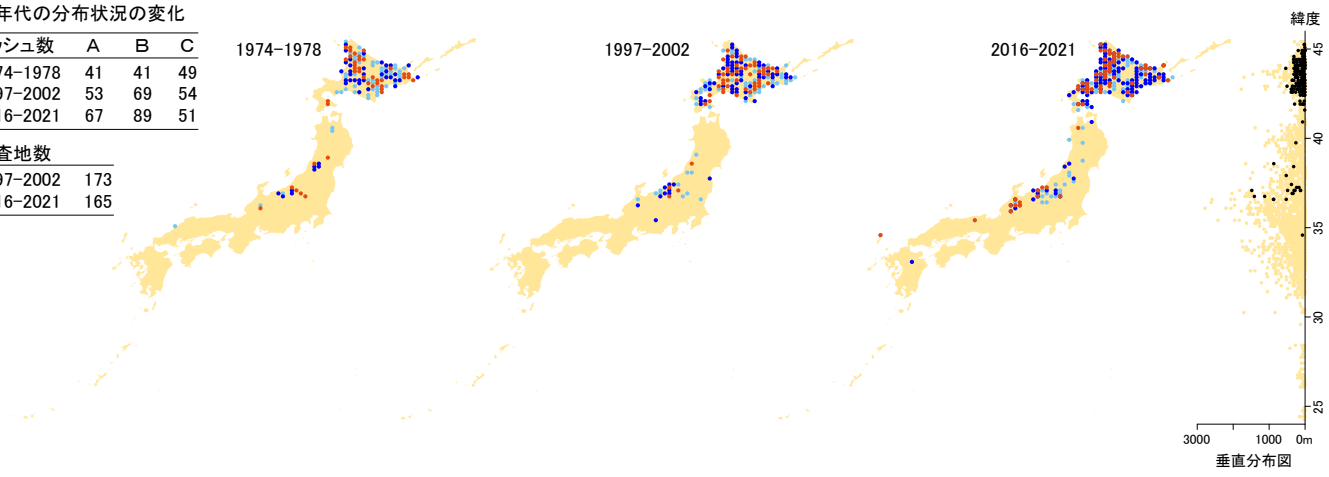
全長:13.1–14.4cm　翼長:67–75mm　ふ蹠長:16–18mm　体重:18–26g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	41	41	49
1997–2002	53	69	54
2016–2021	67	89	51

調査地数	
1997–2002	173
2016–2021	165



主に本州中部以北で繁殖するが，対馬でも繁殖が確認され，九州でも繁殖行動が確認された。農耕地，住宅地，河畔林，落葉広葉樹林などに生息する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数が増加している。

スズメ　分類:スズメ目スズメ科　Eurasian Tree Sparrow　*Passer montanus*

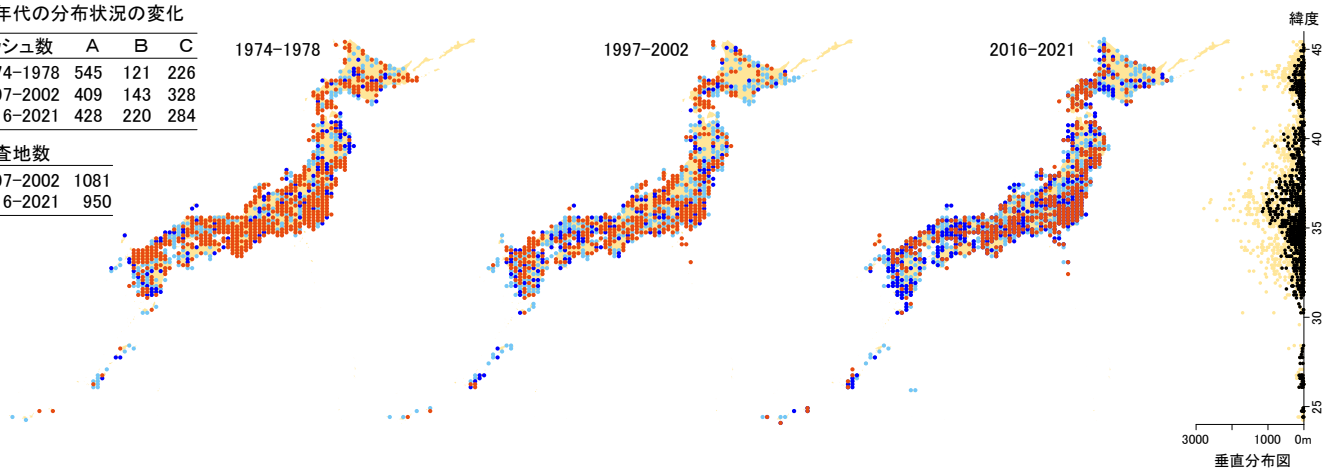
全長:14–15cm　翼長:65–73mm　ふ蹠長:16.7–18.9mm　体重:24g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	545	121	226
1997–2002	409	143	328
2016–2021	428	220	284

調査地数	
1997–2002	1081
2016–2021	950



小笠原群島を除く全国に留鳥として分布する。農耕地，市街地，住宅地など人間の居住地近くに生息する。人家の軒や瓦の間，電信柱や信号機の腕金や巣箱などを利用して繁殖する。記録メッシュ数には大きな変化はないが，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると，記録個体数が 31,159 羽から 20,627 羽へと大きく減少しており，個体数が減少している可能性が示された。スズメの減少は三上(2009)にも示されている。

イワミセキレイ　分類:スズメ目セキレイ科　Forest Wagtail　*Dendronanthus indicus*

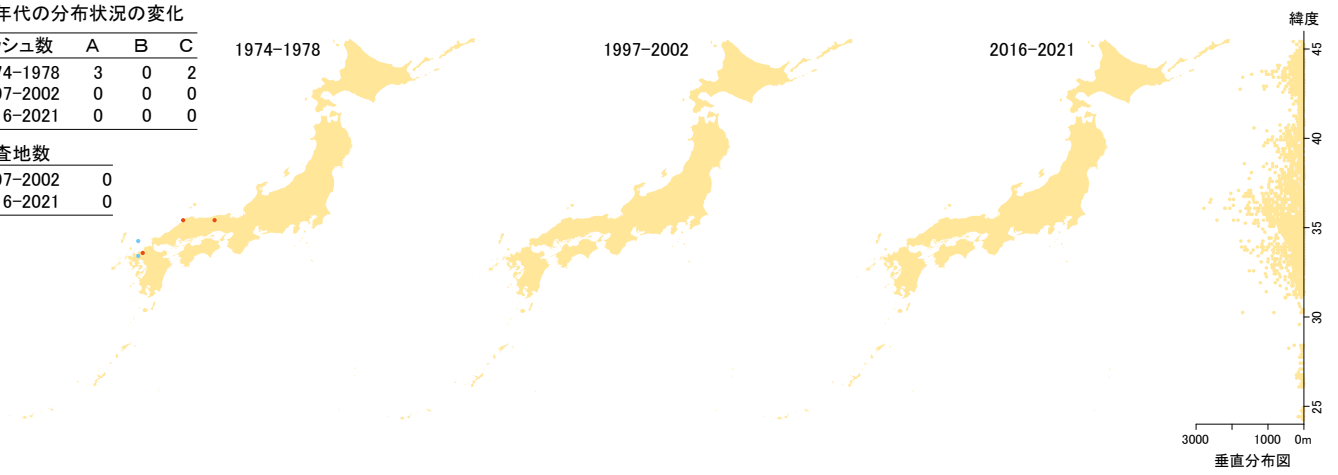
嘴峰長:12.5–14.8mm　翼長:71–83mm　ふ蹠長:19–24mm　尾長:63–72mm　体重:13–18g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	0	2
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数	
1997–2002	0
2016–2021	0



落葉広葉樹林，常緑広葉樹林，農耕地などに生息する。森林や疎林，果樹園などで木の枝上に椀状の巣をつくって営巣する。主に昆虫類を捕食する。1970 年代では九州や中国山地で繁殖記録があるが，その後の調査では記録されていない。

ツメナガセキレイ　分類:スズメ目セキレイ科　Western Yellow Wagtail　*Motacilla flava*

嘴峰長:12–15mm　翼長:77–87mm　ふ蹠長:23–27mm　尾長:64–78mm　体重:13–23g

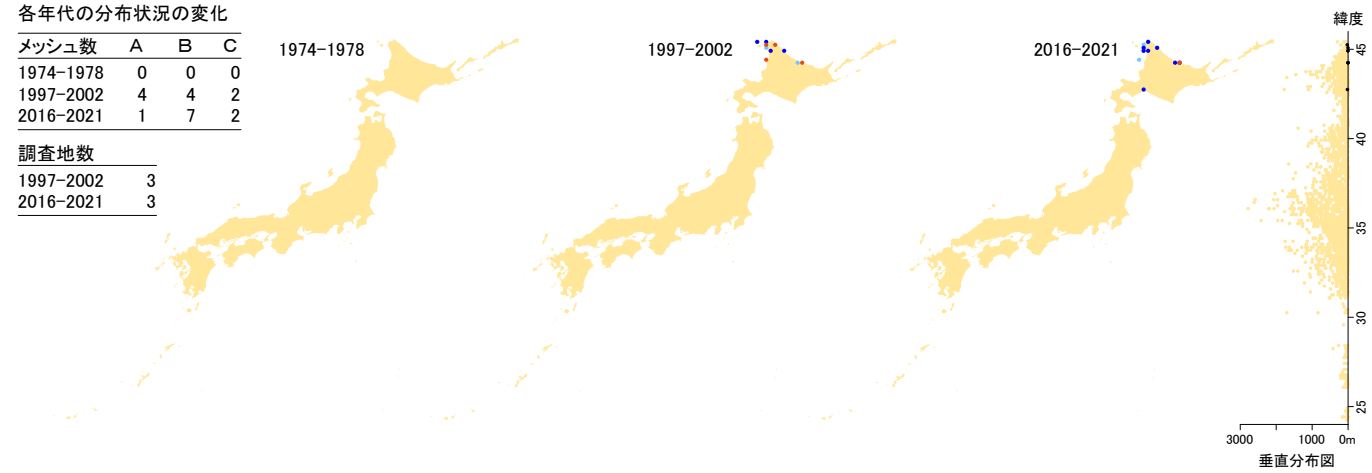
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	4	4	2
2016–2021	1	7	2

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	3



主に北海道北部で局所的に分布する。北海道で繁殖するのは亜種ツメナガセキレイと亜種マミジロツメナガセキレイであるとされる。農耕地や水辺に近い草原で営巣する。地上を歩きながら昆虫類を捕食する。

キセキレイ　分類:スズメ目セキレイ科　Grey Wagtail　*Motacilla cinerea*

全長:18.3–20.8cm　翼長:76–86mm　ふ蹠長:18–22mm　尾長:86–99mm　体重:15–24g

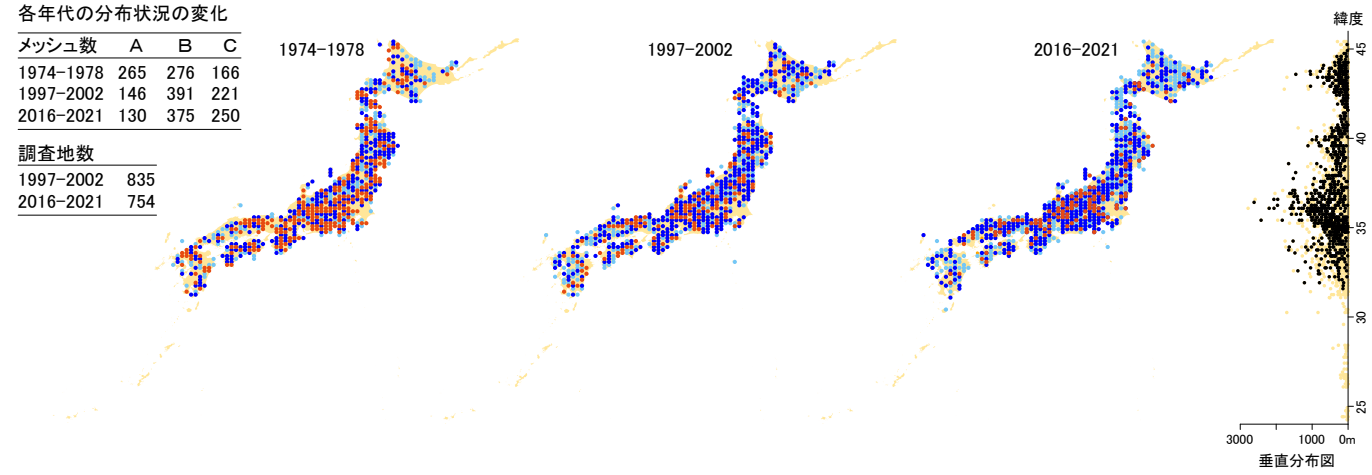
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	265	276	166
1997–2002	146	391	221
2016–2021	130	375	250

調査地数

1997–2002	835
2016–2021	754



九州から本州にかけて留鳥として，北海道に夏鳥として分布する。低山から山地の河川の上流域，高標高の裸地まで広く生息し，セキレイ類の中で最も分布が広い。木の枝上，地上の石のかげ，人家の隙間などに営巣する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数に大きな変化はなかった。

ハクセキレイ　分類:スズメ目セキレイ科　White Wagtail　*Motacilla alba*

全長:19.7–21.4cm　翼長:♂96.58±0.55mm ♀89.93±0.89mm　ふ蹠長:22–26mm　尾長:♂98.30±0.50mm ♀92.29±2.46mm　体重:25.5–34.5g

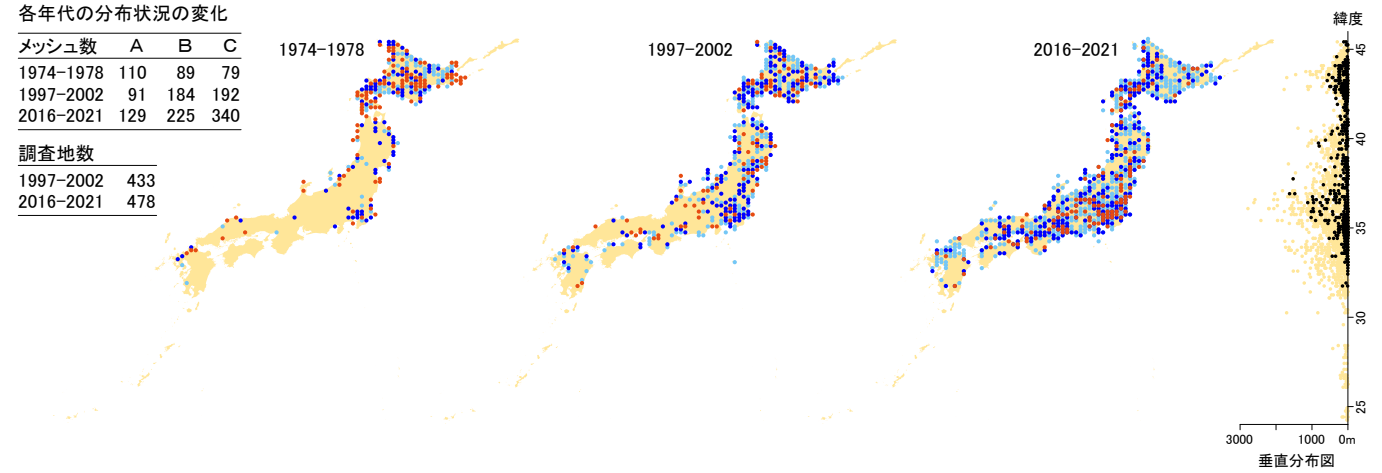
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	110	89	79
1997–2002	91	184	192
2016–2021	129	225	340

調査地数

1997–2002	433
2016–2021	478



九州以北の全国に留鳥として分布し，北部の個体は冬期は南へ移動する。海岸，湿地，草原，農耕地，市街地などの開けた場所に生息する。セグロセキレイと比べて，採食行動において河川への依存度が低く，より乾燥した場所で採食することが多い。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数が大幅に増加した。新たにハクセキレイが記録された現地調査地点の割合は西日本に行くほど多く，北日本からの分布の拡大が顕著である。

セグロセキレイ　分類:スズメ目セキレイ科　Japanese Wagtail　*Motacilla grandis*

全長:21.1cm　翼長:♂96.8±2.0mm ♀92.7±2.0mm　ふ蹠長:♂26.4±0.9mm ♀25.0±0.8mm　体重:♂31.2±2.3g ♀28.0±1.5g

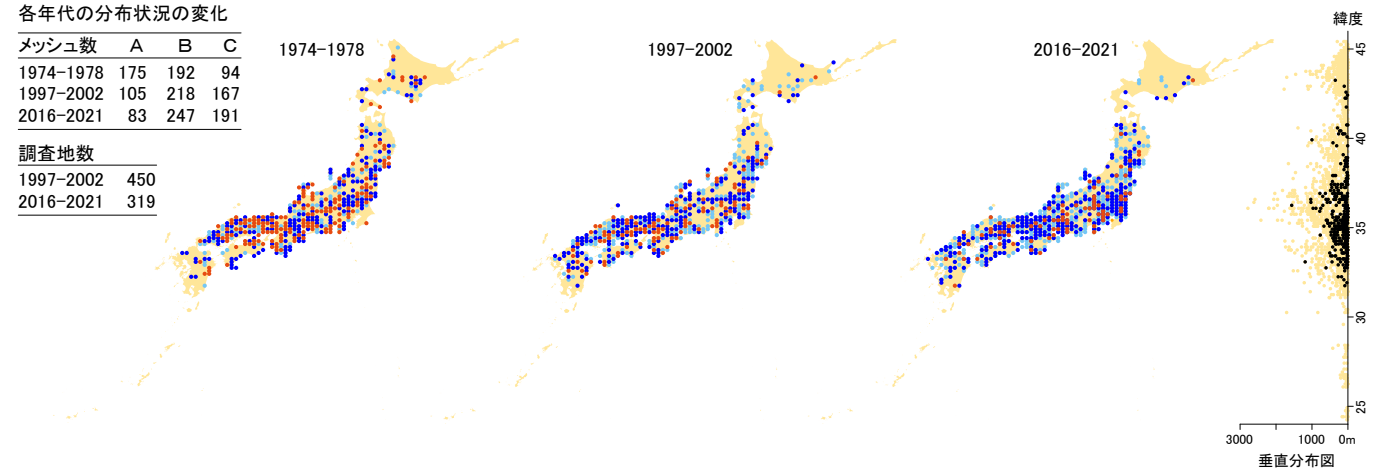
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	175	192	94
1997–2002	105	218	167
2016–2021	83	247	191

調査地数

1997–2002	450
2016–2021	319



九州から本州にかけて留鳥として，北海道に夏鳥として分布する。平野部から山地の河川，湖沼，農耕地，住宅地に生息する。特に，砂礫地が発達した河川を選好し，ハクセキレイと比べて採食行動において河川など水域への依存度が高い。記録メッシュ数は北海道で減少している以外は大きな変化はないが，比較可能な現地調査の結果では 450 地点から 319 地点と減少しており，減少傾向にあると考えられる。

ビンズイ　分類:スズメ目セキレイ科　Olive-backed Pipit　*Anthus hodgsoni*

全長:14.7-16.3cm　翼長:81-90mm　ふ蹠長:18-24mm　尾長:57-66mm　体重:19-26g

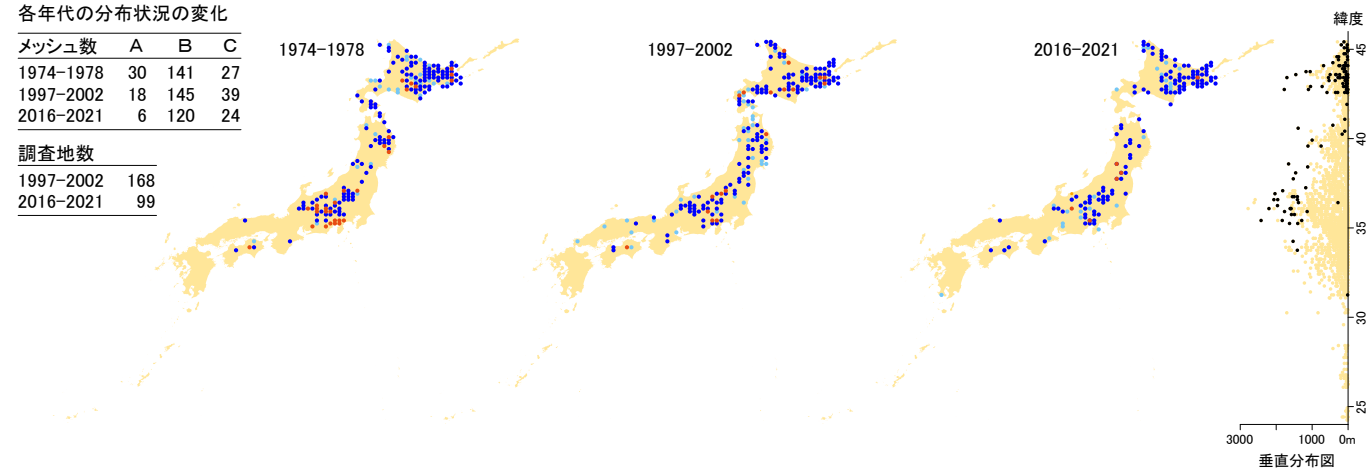
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	30	141	27
1997-2002	18	145	39
2016-2021	6	120	24

調査地数

1997-2002	168
2016-2021	99



主に本州中部以北に分布し，本州の太平洋側や四国では留鳥，そのほかの地域では夏鳥。針葉樹の混じる開けた明るい林に生息する。本州では高山帯の森林や草原で繁殖し，北海道では低地でも繁殖する。1970 年代と 1990 年代には約 200 メッシュで生息が確認されていたが，2010 年代では 150 メッシュに減少した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，168 地点から 99 地点へと減少しており，特に標高の低い場所での減少が顕著だった。

カワラヒワ　分類:スズメ目アトリ科　Grey-capped Greenfinch　*Chloris sinica*

全長:12.5-14.4cm　嘴峰長:10-12mm　翼長:75-84mm　ふ蹠長:15-17mm　体重:17-25g

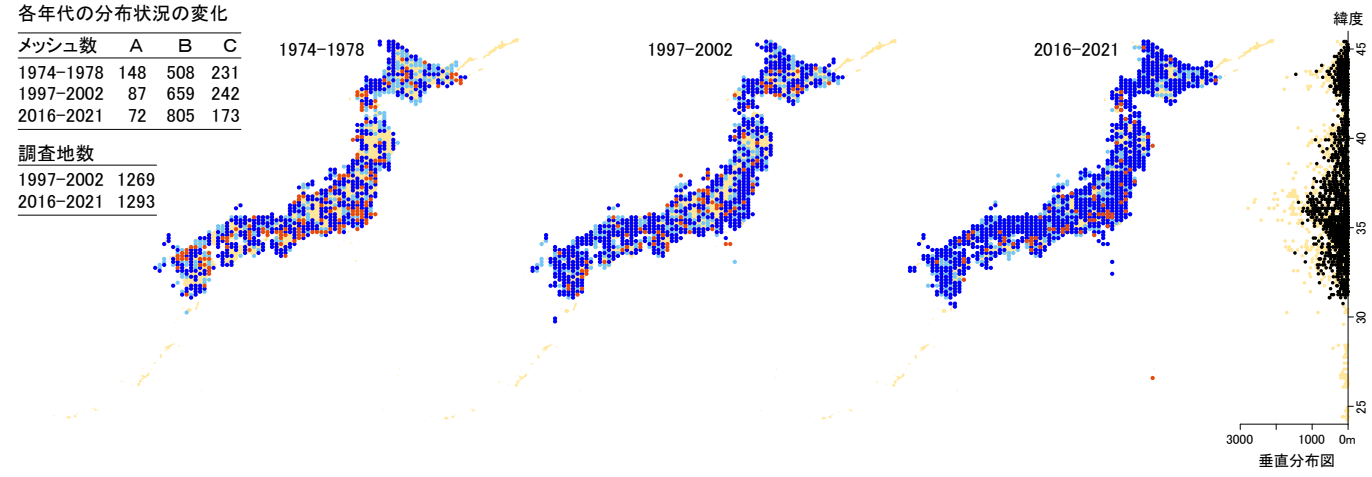
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類(亜種オガサワラカワラヒワ)

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	148	508	231
1997-2002	87	659	242
2016-2021	72	805	173

調査地数

1997-2002	1269
2016-2021	1293



トカラ列島以北の全国に留鳥として分布する。北海道では夏鳥。今回は，小笠原群島に生息する亜種オガサワラカワラヒワを別の分布図として示しているが，この分布図はオガサワラカワラヒワも含んだものである。疎林，農耕地，河川敷，灌木草原，住宅地などに生息し，枝上に椀状の巣をつくって営巣する。過去 3 回の調査期間を通して記録メッシュ数は増加しているが，現地調査の 1990 年代と 2010 年代の比較では，明確な傾向はみられていない。

オガサワラカワラヒワ　分類:スズメ目アトリ科　Ogasawara Greenfinch　*Chloris sinica kittlitzi*

嘴峰長:12–13.5mm　翼長:72–77.5mm　ふ蹠長:16.5–19mm　尾長:44–49mm

環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0

小笠原群島の母島列島および硫黄列島に生息する。カワラヒワの亜種とされているが，DNA を用いた研究から約 106 万年前に分岐したと推測され，別種とすることが提案されており(Saitoh et al. 2020)，別の分布図として示した。カワラヒワは草の種子などを採食するが，オガサワラカワラヒワはくちばしが大きいため，樹木の種子などを食べていると考えられている。個体数が急激に減少しており，クマネズミが生息する島には分布しないことから，クマネズミによる捕食が原因で個体数が減少していると考えられている(川上 2019)。

マヒワ　分類:スズメ目アトリ科　Eurasian Siskin　*Carduelis spinus*

全長:11.7–13.0cm　翼長:71–75mm　ふ蹠長:13–15mm　体重:11–16g

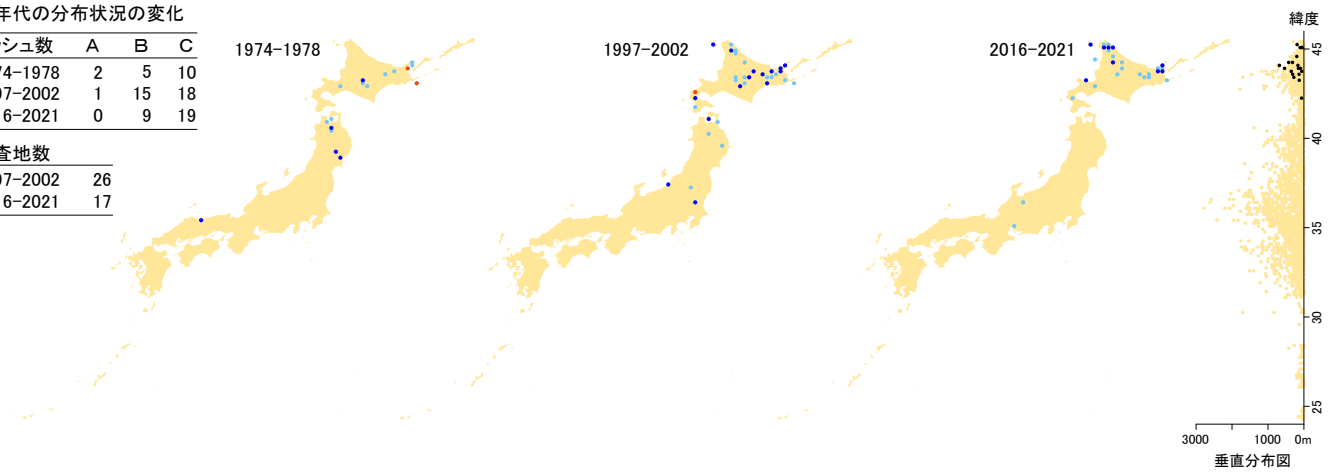
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	5	10
1997–2002	1	15	18
2016–2021	0	9	19

調査地数

1997–2002	26
2016–2021	17



全国に冬鳥として渡来し，北海道と本州の一部で局所的に繁殖する。亜高山帯の常緑針葉樹林や針広混交林で繁殖する。巣は枝の先端近くにつくることが多い。主に針葉樹や草本の種子を採食する。局所的に生息し，また，繁殖個体と冬鳥個体の区別も難しいため，分布変化については不明である。

ベニマシコ　分類:スズメ目アトリ科　Long-tailed Rosefinch　*Uragus sibiricus*

全長:14.5–15.8cm　翼長:65–72mm　ふ蹠長:16–18mm　体重:15–21g

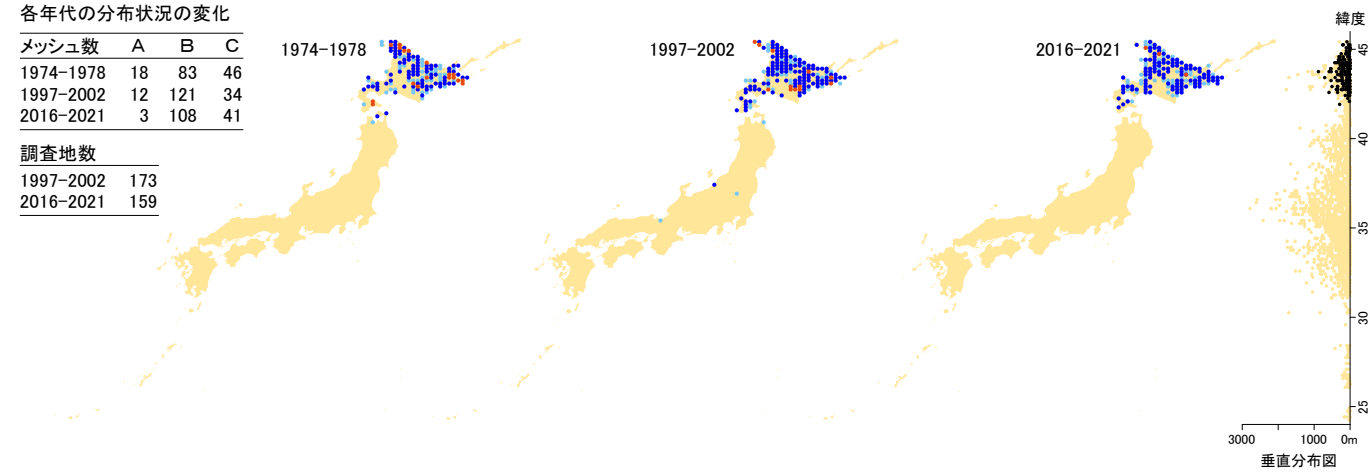
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	18	83	46
1997–2002	12	121	34
2016–2021	3	108	41

調査地数

1997–2002	173
2016–2021	159



主に北海道に夏鳥として繁殖し，全国で越冬する。低地の湿地や河川や海岸の近くにある灌木草原，林縁，林のある農耕地などに生息する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数に大きな変化はなかった。

ギンザンマシコ　分類:スズメ目アトリ科　Pine Grosbeak　*Pinicola enucleator*

嘴峰長:15–16.5mm　翼長:100–108mm　ふ蹠長:20–23mm　尾長:74–86.5mm

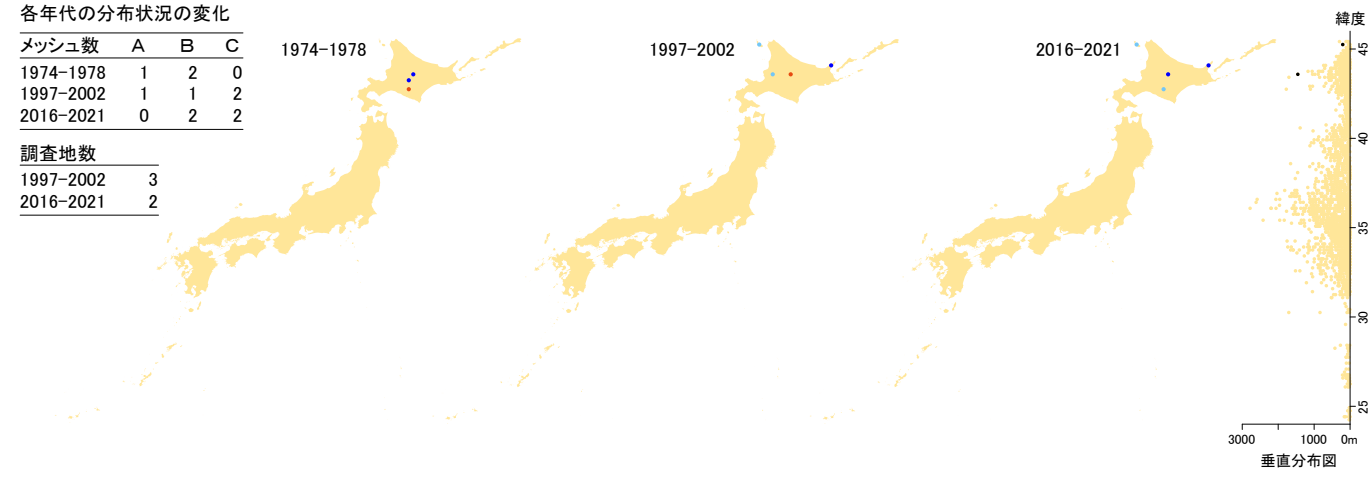
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	2	0
1997–2002	1	1	2
2016–2021	0	2	2

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	2



北海道の高山にあるハイマツ林で繁殖し，冬期にはより低地の針葉樹林に移動する。昆虫類を捕食するほか，ハイマツなどの種子，芽，木の実などを採食する。局所的に分布する種のため，その増減については本調査からは明らかでない。

イスカ　分類:スズメ目アトリ科　Red Crossbill　*Loxia curvirostra*

全長:17–19cm　翼長:♂86.9–100.7mm ♀85.8–92.7mm　ふ蹠長:♂17.1–21.4mm ♀17.4–20.4mm　体重:♂22.5–44.6g ♀25.8–47.2g

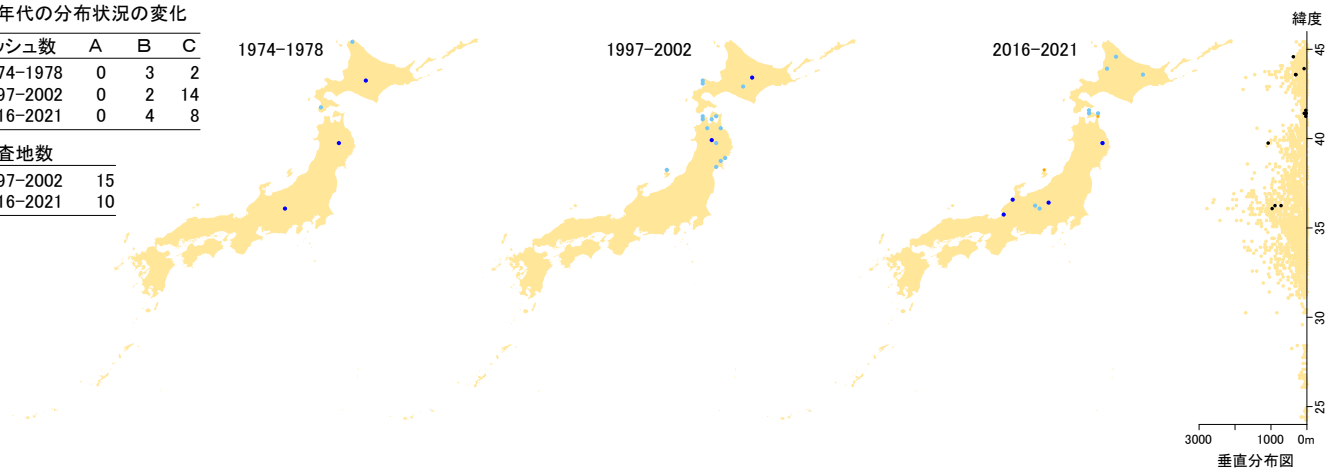
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	3	2
1997–2002	0	2	14
2016–2021	0	4	8

調査地数

1997–2002	15
2016–2021	10



冬鳥として渡来し，本州中部以北と北海道で局地的に繁殖する。針葉樹林に生息し，特にマツ林を好む。2010 年代は中部地方でも繁殖行動が観察されているが，局所的に繁殖する種のため，その増減は明らかでない。

ウソ　分類:スズメ目アトリ科　Eurasian Bullfinch　*Pyrrhula pyrrhula*

全長:14.8–16.1cm　翼長:79–88mm　ふ蹠長:15–17mm　体重:21–30g

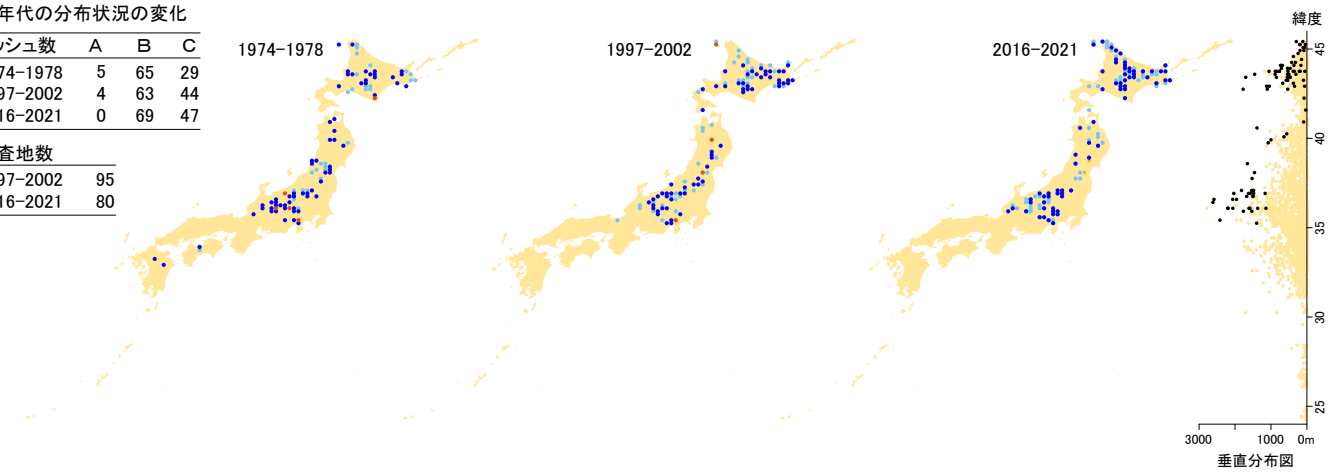
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	5	65	29
1997–2002	4	63	44
2016–2021	0	69	47

調査地数

1997–2002	95
2016–2021	80



主に本州中部以北に留鳥として分布する。亜高山帯の針葉樹林や針広混交林に生息する。本州では標高 2000m 程度の亜高山帯のオオシラビソやコメツガなどの針葉樹林で繁殖するが，北海道では低地でも繁殖し，特に道東では海岸近くの針葉樹林でも繁殖する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数に大きな変化はなかった。

シメ　分類:スズメ目アトリ科　Hawfinch　*Coccothraustes coccothraustes*

全長:17.9–19.2cm　翼長:95–108mm　ふ蹠長:20–22mm　体重:45–64g

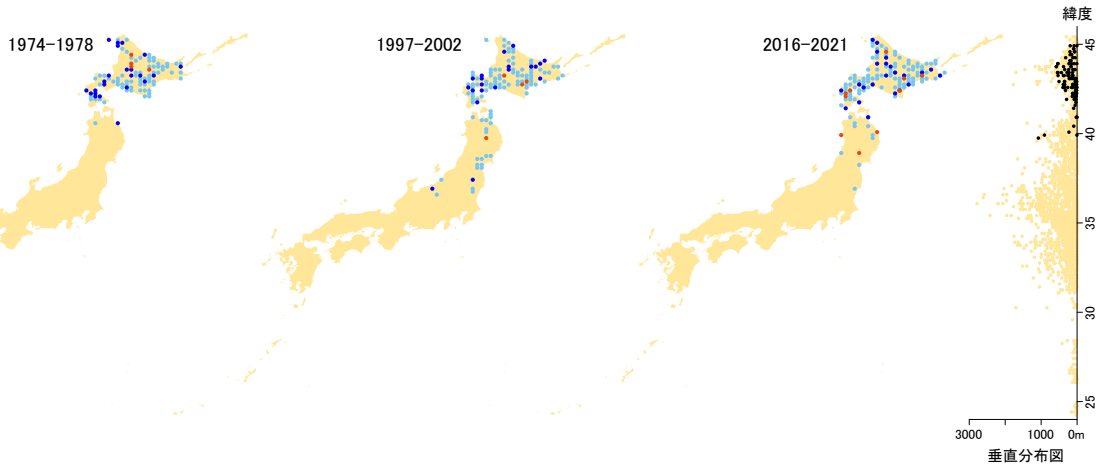
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	4	23	71
1997–2002	4	20	97
2016–2021	10	22	98

調査地数

1997–2002	98
2016–2021	95



主に北海道で繁殖し，標高 500m 以下の落葉広葉樹林や針広混交林に生息する。過去3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数に大きな変化はなかった。

コイカル　分類:スズメ目アトリ科　Chinese Grosbeak　*Eophona migratoria*

嘴峰長:17–21mm　翼長:94–102mm　ふ蹠長:20–22.5mm　体重:47–57g

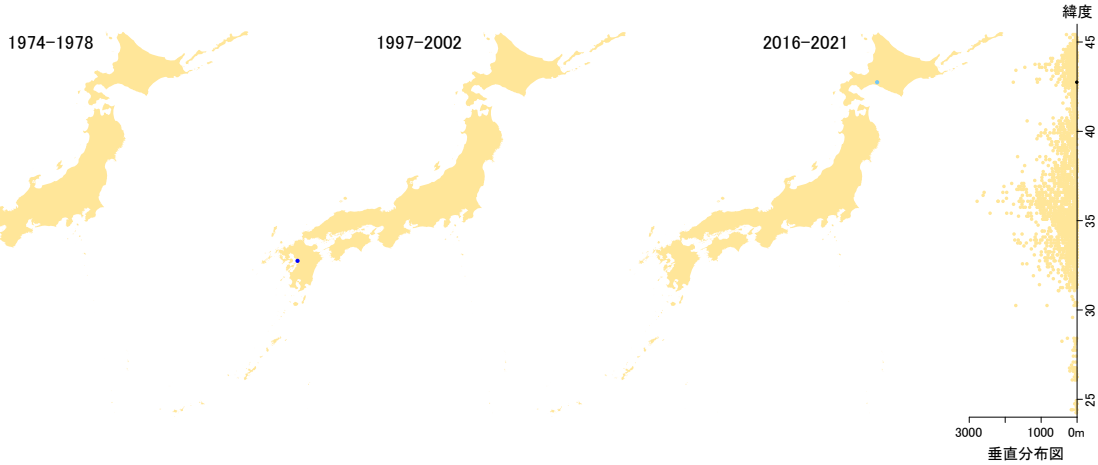
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	0
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



主に冬鳥として生息する。日本では，島根県，熊本県など各地で偶発的な繁殖記録がある。2010 年代の調査では，北海道勇払郡での現地調査で観察されたが，偶発的な記録種という状況に変化はない。

イカル　分類:スズメ目アトリ科　Japanese Grosbeak　*Eophona personata*

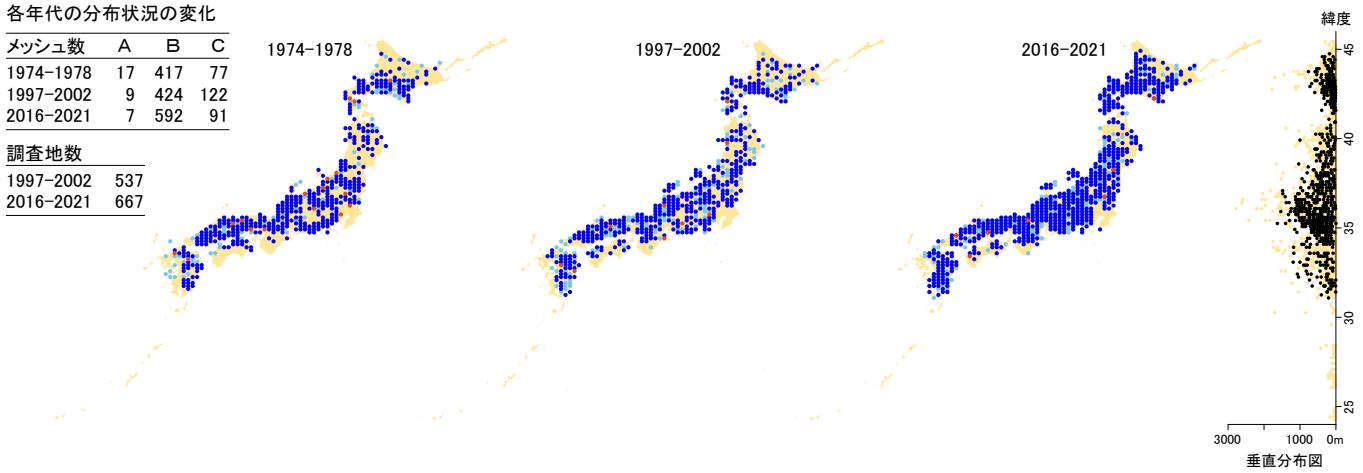
全長:22.0–23.5cm　翼長:106–115mm　ふ蹠長:22–25mm　体重:60–86g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	17	417	77
1997–2002	9	424	122
2016–2021	7	592	91

調査地数	
1997–2002	537
2016–2021	667



九州以北の全国に留鳥として分布する。平地から低山の落葉広葉樹林，針広混交林の樹上で繁殖する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数が増加している。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，イカルが記録できた地点数は，537 地点から 667 地点へと増加していた。

ホオジロ　分類:スズメ目ホオジロ科　Meadow Bunting　*Emberiza cioides*

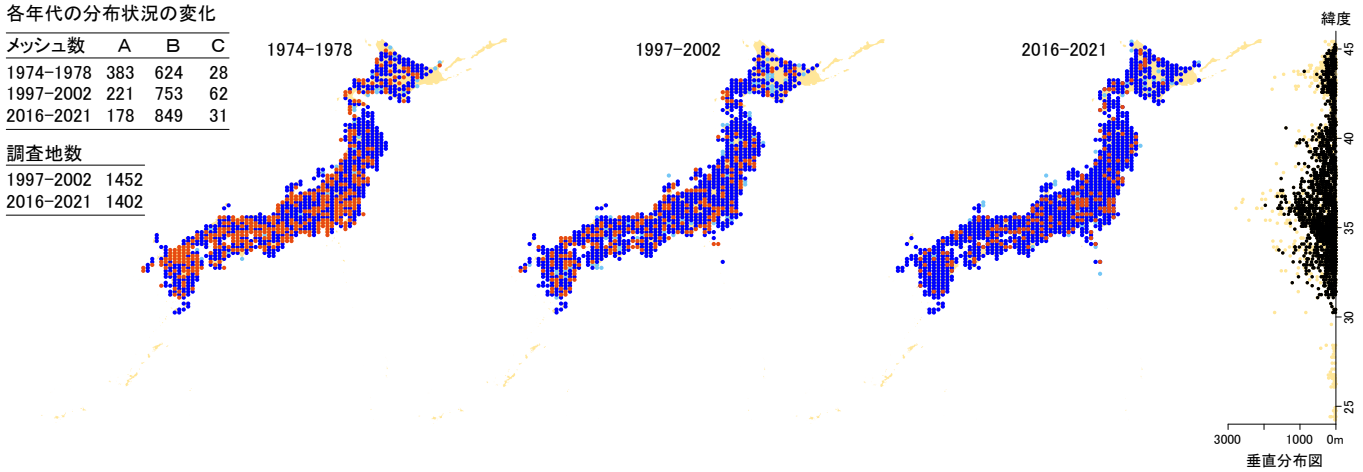
全長:15.8–16.8cm　翼長:71–81mm　ふ蹠長:18–20mm　体重:20–26g

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	383	624	28
1997–2002	221	753	62
2016–2021	178	849	31

調査地数	
1997–2002	1452
2016–2021	1402



屋久島から本州と伊豆諸島にかけて留鳥として，北海道に夏鳥として分布する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数は 1,000 か所程度で安定しているが，繁殖確認メッシュ数は減少した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の総個体数は，13,987 羽から 10,830 羽へと減少した。山地では伐採地の減少および遷移に伴う開けた場所の減少，低地では，都市での空き地の減少などが影響していると考えられる(植田 2019)。

ホオアカ　分類:スズメ目ホオジロ科　Chestnut-eared Bunting　*Emberiza fucata*

全長:14.8-16.5cm　翼長:68-78mm　ふ蹠長:20-22mm　体重:19-26g

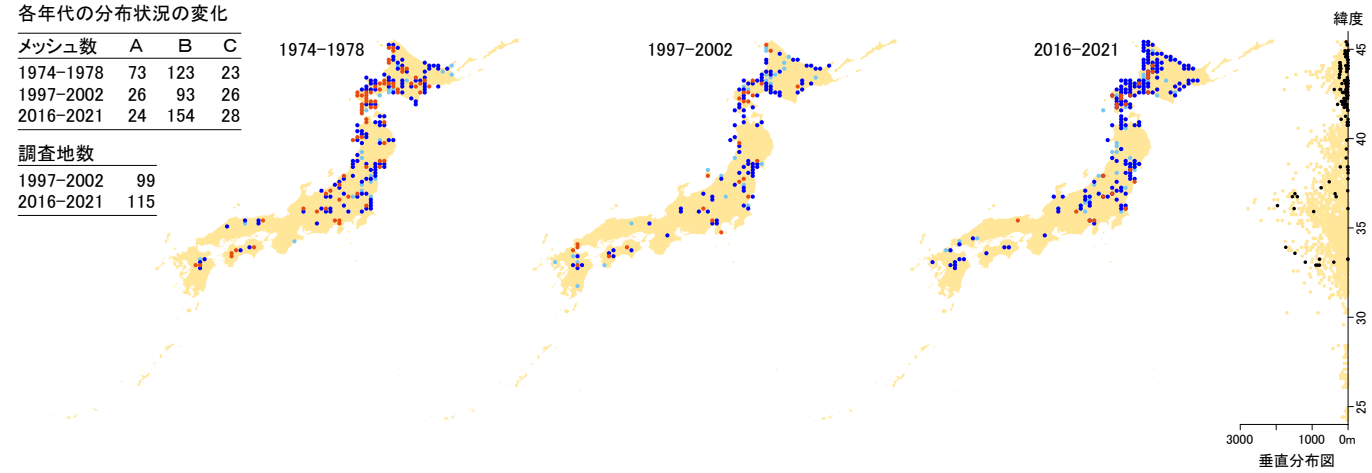
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	73	123	23
1997-2002	26	93	26
2016-2021	24	154	28

調査地数

1997-2002	99
2016-2021	115



九州から本州にかけて留鳥として分布し，北海道に夏鳥として分布する。山地などの灌木草原や農耕地に生息し，地上や低木に営巣する。記録メッシュ数は 1970 年代から 1990 年代にかけて減少したが，2010 年代にかけてはやや回復した。特に分布の中心域である東北から北海道の地域での回復が顕著だった。

ミヤマホオジロ　分類:スズメ目ホオジロ科　Yellow-throated Bunting　*Emberiza elegans*

全長:14.7-16.4cm　翼長:70-78mm　ふ蹠長:18-20mm　体重:17-24g

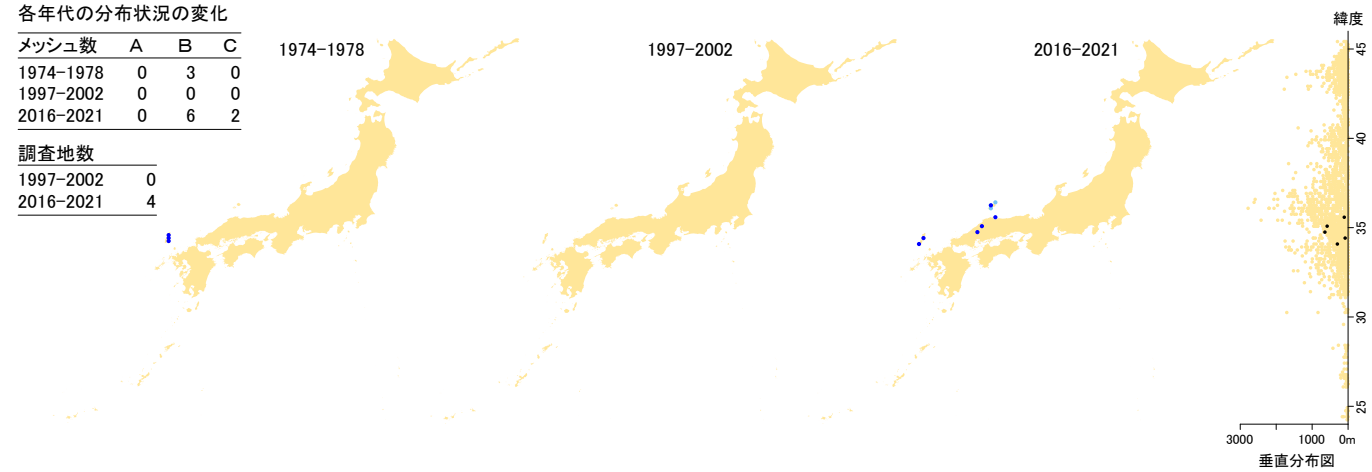
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	0	3	0
1997-2002	0	0	0
2016-2021	0	6	2

調査地数

1997-2002	0
2016-2021	4



繁殖期に対馬や山陰地方で記録された。対馬や隠岐諸島，中国山地で繁殖記録がある。以前は対馬でしか繁殖記録がなかったため，分布が拡大していると考えられる。

シマアオジ　分類:スズメ目ホオジロ科　Yellow-breasted Bunting　*Emberiza aureola*

嘴峰長:10–13mm　翼長:♂72–82mm ♀69–75mm　ふ蹠長:17.5–22mm　尾長:53–63.5mm

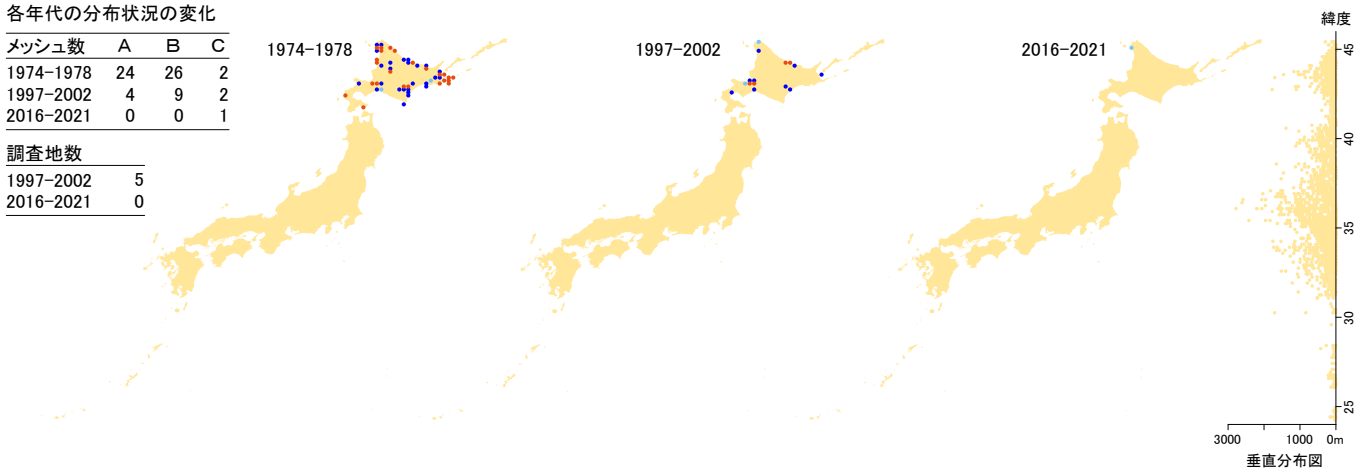
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IA 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	24	26	2
1997–2002	4	9	2
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	5
2016–2021	0



北海道の一部に夏鳥として分布する。河川敷，湖岸や海岸の草原，高層湿原，牧草地などに生息する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数が激減した。日本だけでなく世界的に激減しており，渡り経路である中国での食料としての大量捕獲が原因の1つと考えられている(Kamp et al. 2015)。

ノジコ　分類:スズメ目ホオジロ科　Yellow Bunting　*Emberiza sulphurata*

全長:13–14cm　翼長:♂65.5–73.5mm ♀63.0–71.0mm　ふ蹠長:♂17.2–19.9mm ♀17.4–19.7mm　体重:♂13.4–18.3g ♀13.8–16.5g

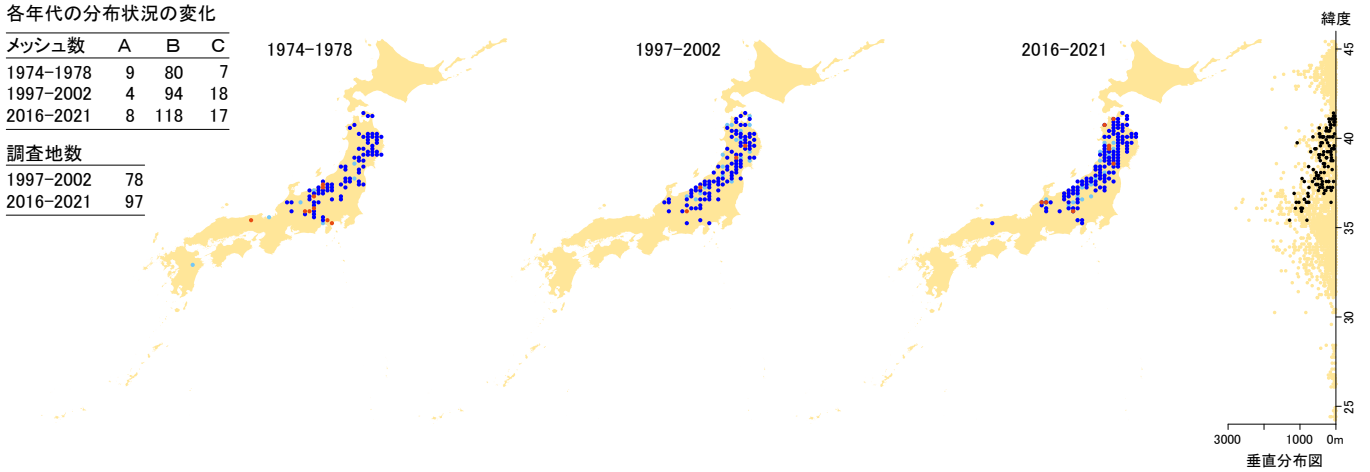
環境省レッドリスト:　準絶滅危惧

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	9	80	7
1997–2002	4	94	18
2016–2021	8	118	17

調査地数

1997–2002	78
2016–2021	97



夏鳥として主に本州中部以北の多雪地帯に分布する。低山帯の沢沿いの林縁や，湿地近くの低木林および疎林に生息する。過去 3 回の調査期間を通じて記録メッシュ数は増加した。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，ノジコが記録された地点数は，78 地点から 97 地点へと増加していた。

アオジ　分類:スズメ目ホオジロ科　Black-faced Bunting　*Emberiza spodocephala*

全長:15.1-16.3cm　翼長:70-74mm　ふ蹠長:18-22mm　体重:18-25g

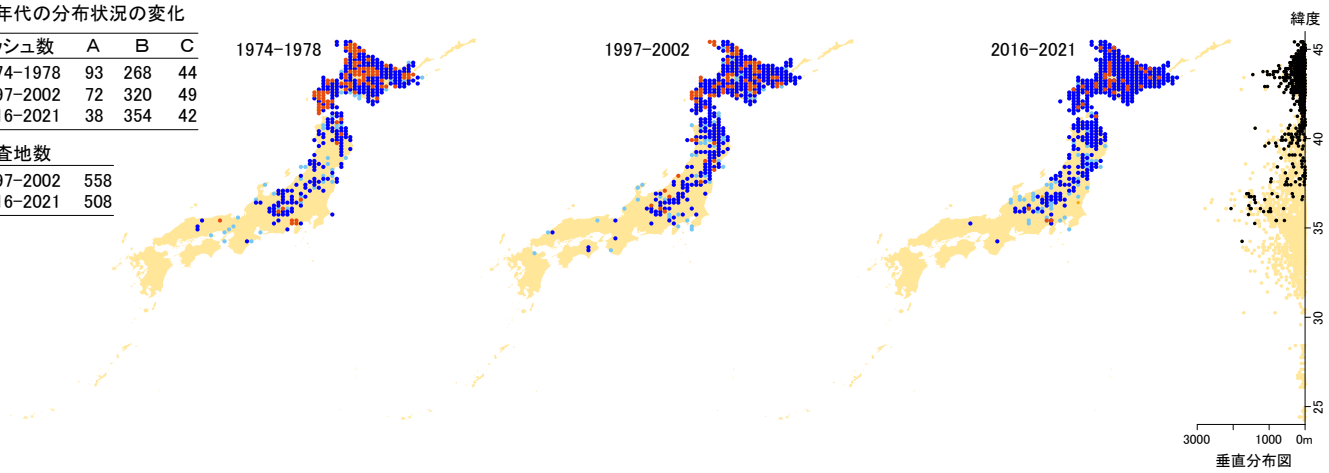
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	93	268	44
1997-2002	72	320	49
2016-2021	38	354	42

調査地数

1997-2002	558
2016-2021	508



主に本州中部以北に留鳥として，北海道に夏鳥として分布する。疎林，林縁部，灌木草原，農耕地などに生息する。北海道では最も記録メッシュ数の多い鳥である。記録メッシュ数には大きな変化はないが，分布域の南部では記録されなくなった場所が増えている。また，ロシアでは分布が北上しており，個体数も増えているという情報もあり（P Ktitorov & A Antonov 私信），分布が北にシフトしている可能性がある。

クロジ　分類:スズメ目ホオジロ科　Grey Bunting　*Emberiza variabilis*

全長:16.0-17.6cm　翼長:76-90mm　ふ蹠長:20-22mm　体重:21-32g

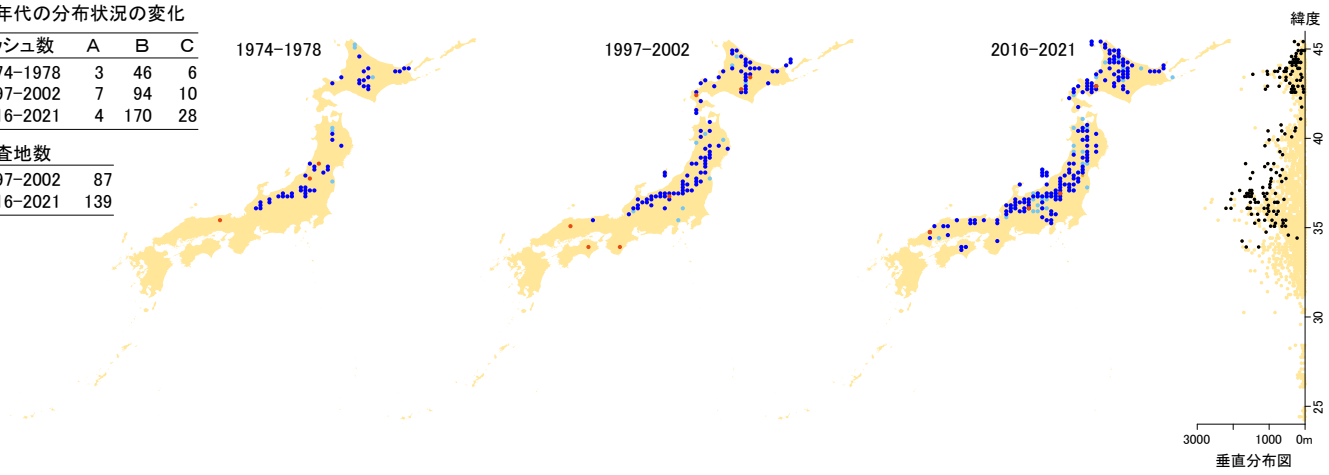
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	3	46	6
1997-2002	7	94	10
2016-2021	4	170	28

調査地数

1997-2002	87
2016-2021	139



四国以北の全国に留鳥または夏鳥として分布する。本州では標高 1000m を超える下層植生が発達した落葉広葉樹林や針広混交林に生息する。2010 年代では過去 2 回の調査と比べて記録メッシュ数が大幅に増加し，1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ても，87 地点から 139 地点とクロジが記録された地点は大きく増加していた。

コジュリン　分類:スズメ目ホオジロ科　Japanese Reed Bunting　*Emberiza yessoensis*

全長:13.9–14.8cm　翼長:63–68mm　ふ蹠長:18–20mm　体重:14–20g

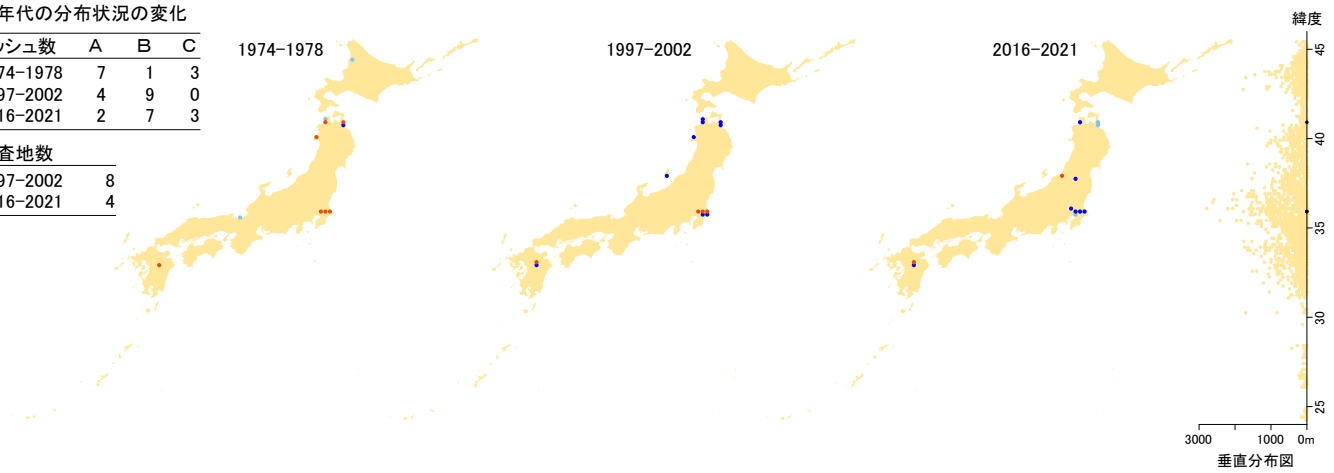
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 II 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	7	1	3
1997–2002	4	9	0
2016–2021	2	7	3

調査地数

1997–2002	8
2016–2021	4



本州中部以北と熊本県の開けた草原環境で局所的に繁殖する。過去 3 期にわたって記録メッシュ数に大きな変化は見られなかった。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録は，8 地点から 4 地点と減少していた。

オオジュリン　分類:スズメ目ホオジロ科　Common Reed Bunting　*Emberiza schoeniclus*

全長:14.9–16.3cm　翼長 75–85mm　ふ蹠長:19–21mm　体重:20–26g

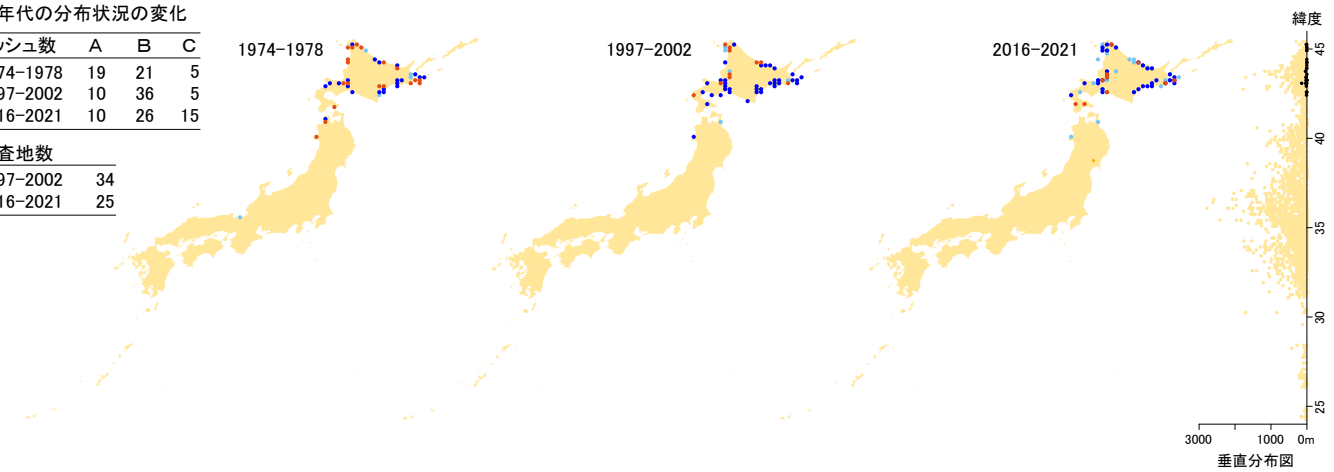
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	19	21	5
1997–2002	10	36	5
2016–2021	10	26	15

調査地数

1997–2002	34
2016–2021	25



東北地方の一部と北海道に夏鳥として分布する。低地の湿潤な草原に生息する。3 期をとおして記録メッシュ数に大きな変化はなかったが，1990 年代と 2010 年代の比較可能な現地調査結果を見ると 34 地点から 25 地点へと減少していた。本調査では湿地の鳥に減少傾向にある種が多かったので(161 ページの図 8 を参照)，今後の変化を注視する必要がある。

コジュケイ　分類:キジ目キジ科　Chinese Bamboo Partridge　*Bambusicola thoracicus*

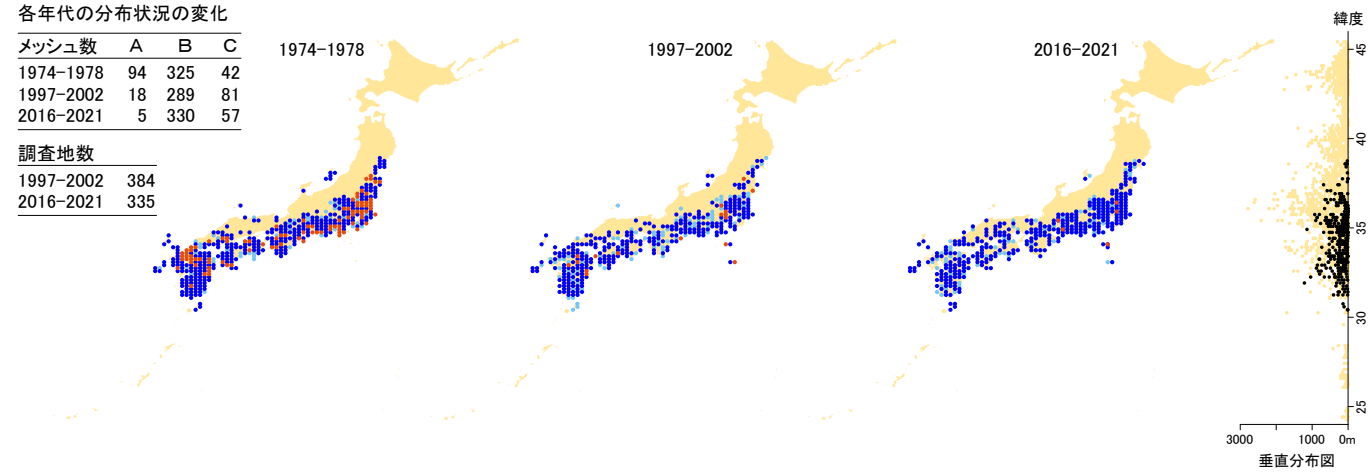
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	94	325	42
1997–2002	18	289	81
2016–2021	5	330	57

調査地数

1997–2002	384
2016–2021	335



九州，四国，本州と周辺離島の，高標高の場所や積雪が多い場所を除く全国に留鳥として分布する。1915 年に東京都で飼育されていた個体が逸出して以降，1919 年に東京都で放鳥されてから個体数が増加した。1930 年以降は狩猟鳥として全国で盛んに放鳥された。平地から山地の藪の多い落葉広葉樹林の疎林や林縁に生息する。記録メッシュ数には大きな変化はないが，東京の小規模な緑地では，生息しなくなった場所が増えている(植田　2020)。

インドクジャク　分類:キジ目キジ科　Indian Peafowl　*Pavo cristatus*

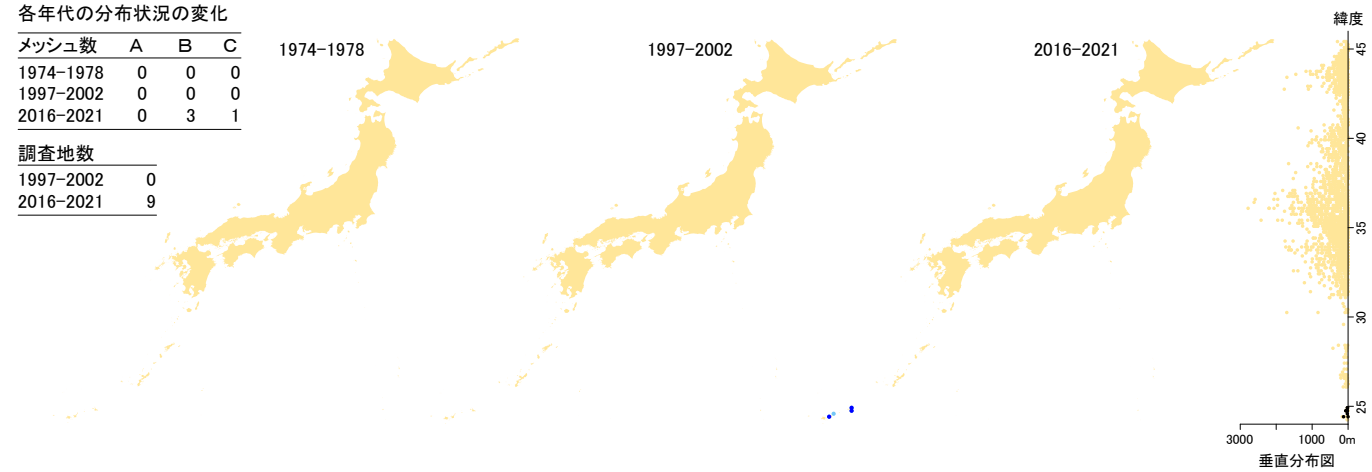
環境省レッドリスト:　—　総合対策外来種

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	3	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	9



沖縄県与那国島，黒島，新城島，小浜島，石垣島，伊良部島，宮古島，鹿児島県硫黄島に留鳥として分布する。リゾート施設や学校などから逸出した個体が 1980 年ごろから各地で増加した。農耕地，草原，森林に生息する。様々な昆虫類やカタツムリ，爬虫類や小型の哺乳類，植物の芽や種子，果実などを食べ，生態系への影響が心配されている(沖縄県　2020)。

コリンウズラ　分類:キジ目ナンベイウズラ科　Northern Bobwhite　*Colinus virginianus*

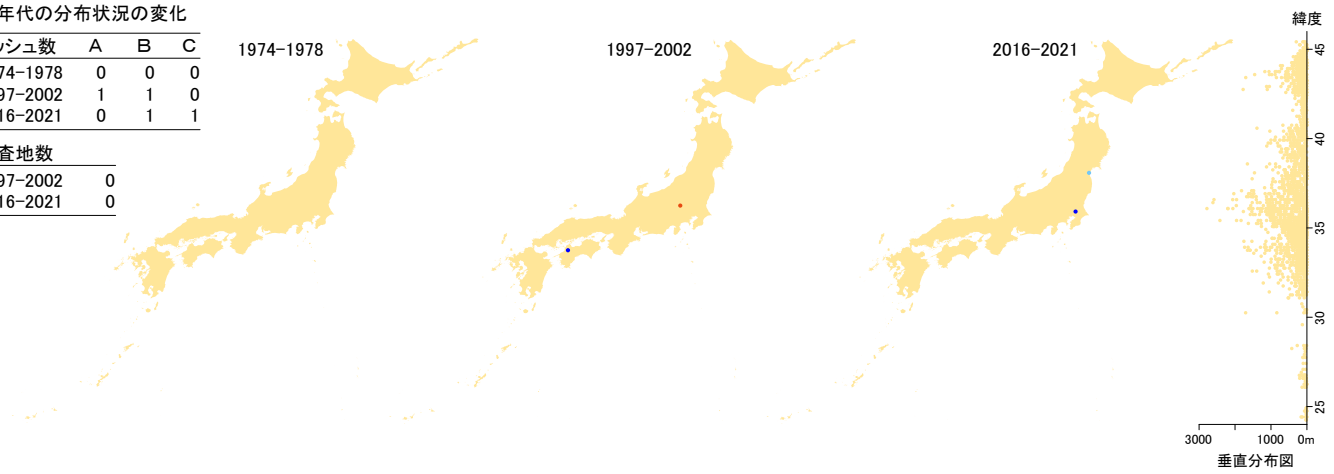
環境省レッドリスト:　—　総合対策外来種

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	1	0
2016–2021	0	1	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



猟犬の訓練用などとして 1980 年頃から放鳥されるようになった。森林，ヨシ原，河川敷，草原に生息する。

コクチョウ　分類:カモ目カモ科　Black Swan　*Cygnus atratus*

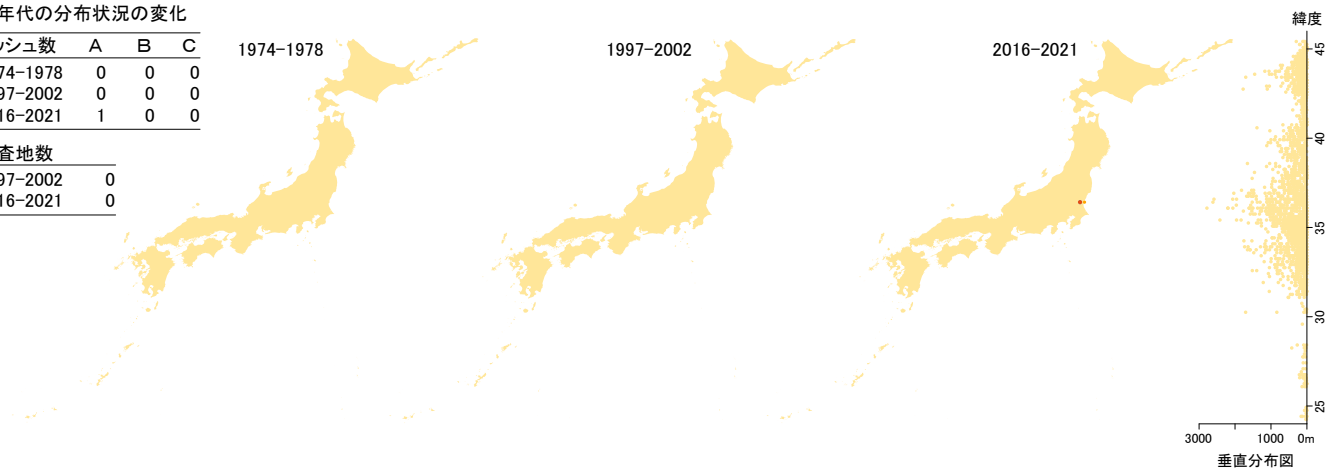
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



1955 年から 1960 年にかけて京都府，東京都，大阪府において，食用および愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出した。現在では茨城県で繁殖が確認されている。日本では秋から冬に繁殖する。

コブハクチョウ　分類:カモ目カモ科　Mute Swan　*Cygnus olor*

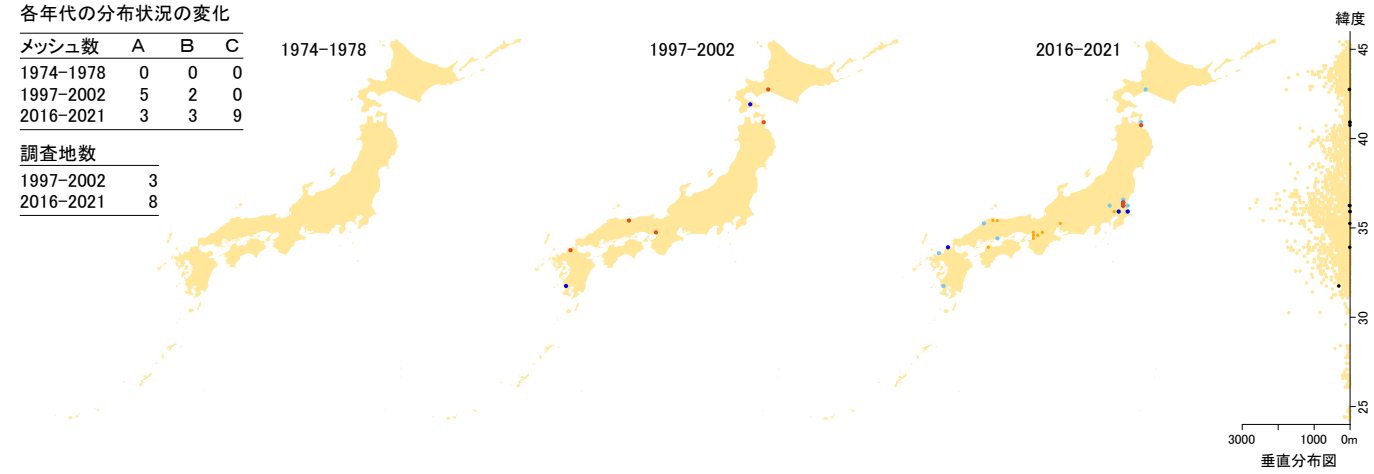
環境省レッドリスト:　―　総合対策外来種

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	5	2	0
2016–2021	3	3	9

調査地数

1997–2002	3
2016–2021	8



1952 年に皇居外苑の堀に放鳥され，それ以降，各地で放鳥された。ウトナイ湖では 1978 年から繁殖が確認されている。近年，千葉県や茨城県で繁殖地が拡大している。湖沼や河川に生息し，岸辺の草地の地上で営巣する。

カワラバト(ドバト)　分類:ハト目ハト科　Rock Dove　*Columba livia*

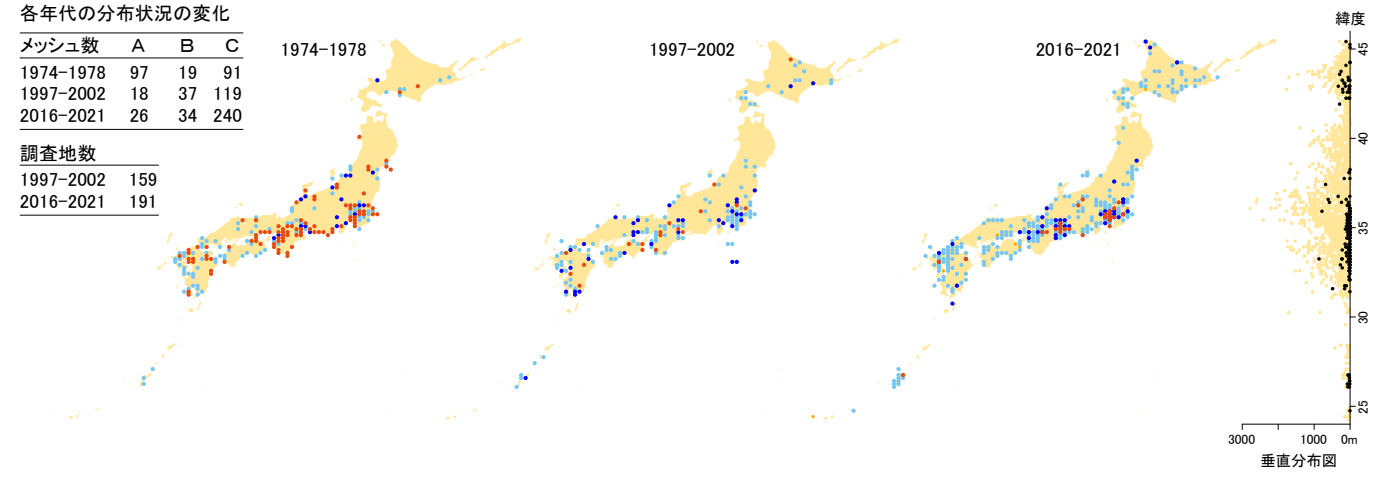
環境省レッドリスト:　―　日本の侵略的外来種ワースト 100

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	97	19	91
1997–2002	18	37	119
2016–2021	26	34	240

調査地数

1997–2002	159
2016–2021	191



伊豆諸島・小笠原群島を除く全国に留鳥として分布する。日本では平安時代以降にドバトと考えられる記述があり，江戸時代には輸入されたことが確実にわかっている。農村部から都市に生息する。1990 年代と 2010 年代でほぼ同じコースを調査できた現地調査の記録を見ると地点数は大きな変化はないが，個体数は，6,031 羽から 2,539 羽と大きく減少していた。餌付けをする人が減り，大きな群れにならなくなったことが原因の 1 つとして考えられるが明確な減少要因は不明である。

シラコバト　分類:ハト目ハト科　Eurasian Collared Dove　*Streptopelia decaocto*

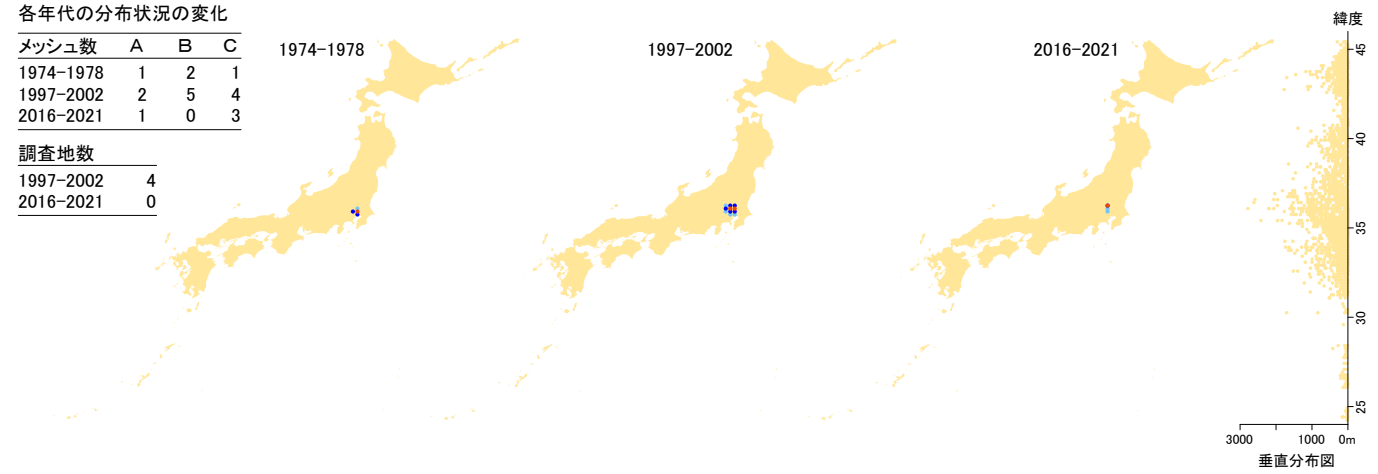
環境省レッドリスト:　絶滅危惧 IB 類

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	2	1
1997–2002	2	5	4
2016–2021	1	0	3

調査地数

1997–2002	4
2016–2021	0



1956 年に,「越谷のシラコバト」として国の天然記念物に指定された。埼玉県の荒川以東と熊谷市などの林のある農耕地に局地的に生息する。養鶏場や畜舎で穀類を食べることが多く,養鶏場の減少や,鳥インフルエンザ防除対策により,鶏舎への出入りが困難になったことで個体数や分布が縮小していると推測されている(小峯 2016)。

セキセイインコ　分類:インコ目インコ科　Budgerigar　*Melopsittacus undulatus*

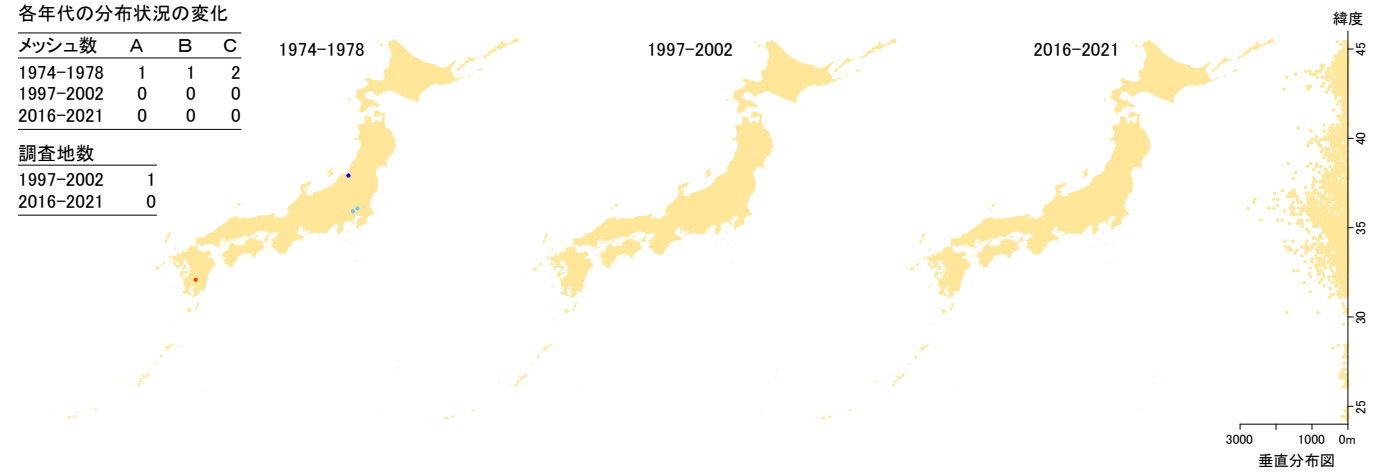
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	2
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1981 年より以前に侵入したとされるが,詳しい侵入時期は不明。2010 年代には確認されなかった。

ホンセイインコ　分類:インコ目インコ科　Rose-ringed Parakeet　*Psittacula krameri*

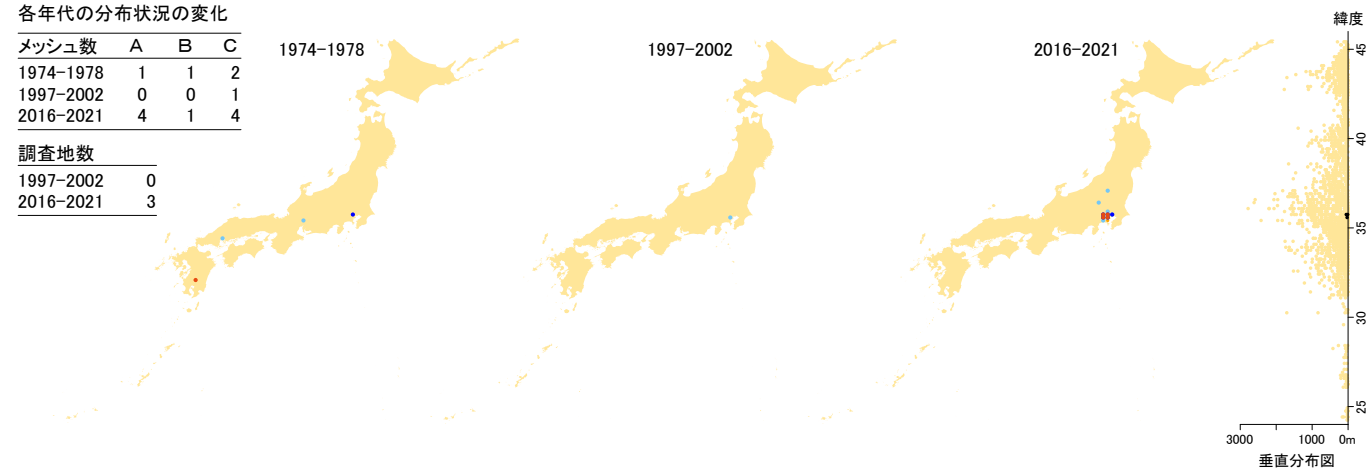
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	2
1997–2002	0	0	1
2016–2021	4	1	4

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	3



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。日本では 1969 年に初めて東京都で記録されてから亜種ワカケホンセイインコが各地で記録されるようになった。現在は東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県，群馬県に留鳥として分布し，分布は拡大傾向にある。ムクドリやアオバズクなどほかの樹洞営巣性鳥類と営巣場所をめぐる競合が心配される(藤井 2011)。

ダルマインコ　分類:インコ目インコ科　Red-breasted Parakeet　*Psittacula alexandri*

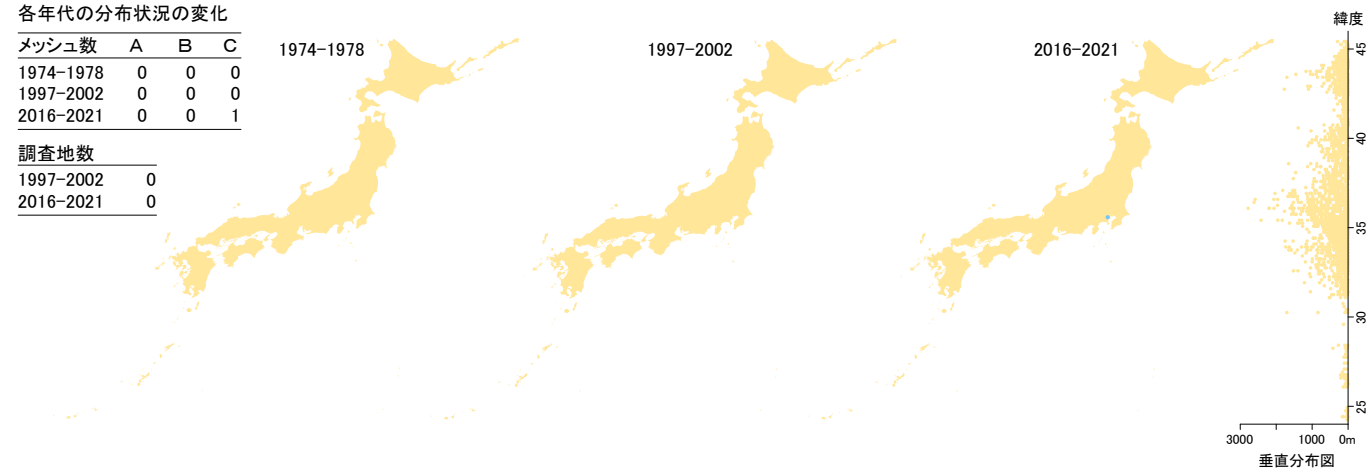
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1961 年から 1981 年のあいだに首都圏の野外で観察記録がある。東京都で繁殖記録があり，神奈川県でも生息が確認されている。

オキナインコ　分類:インコ目インコ科　Monk Parakeet　*Myiopsitta monachus*

環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0

愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。侵入年代は不明。兵庫県と神奈川県，三重県などで記録がある。

ヤマムスメ　分類:スズメ目カラス科　Taiwan Blue Magpie　*Urocissa caerulea*

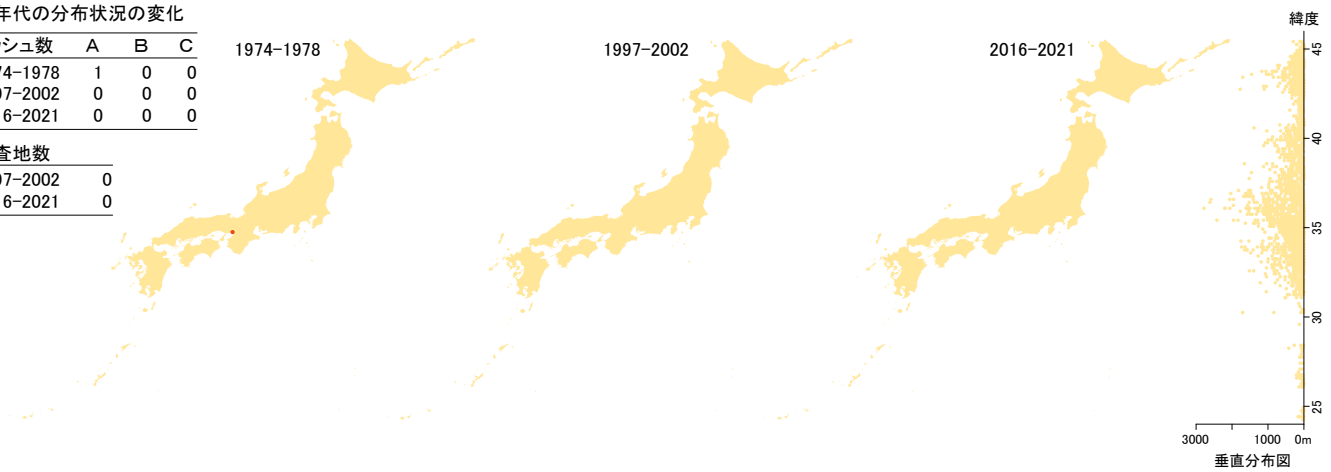
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1976 年から兵庫県で観察記録がある。1990 年以降には繁殖は確認されていない。

サンジャク　分類:スズメ目カラス科　Red-billed Blue Magpie　*Urocissa erythrorhyncha*

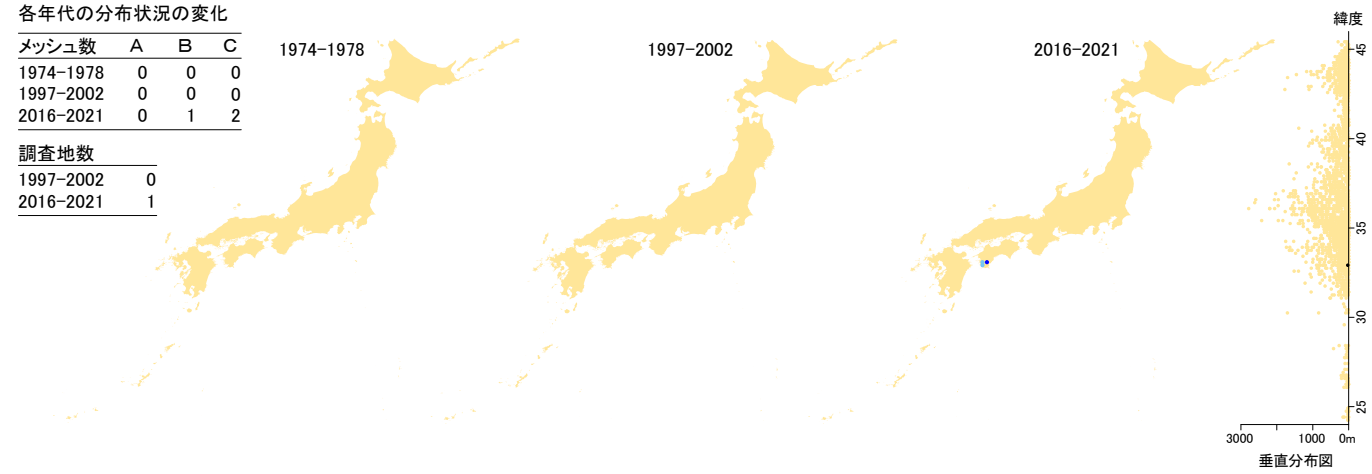
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	1	2

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。2000 年代から観察記録があり，現在は四国西部で確認されており，2015 年と 2016 年には幼鳥と巣立ちビナが観察されている(佐藤ほか 2018)。

ガビチョウ　分類:スズメ目チメドリ科　Chinese Hwamei　*Garrulax canorus*

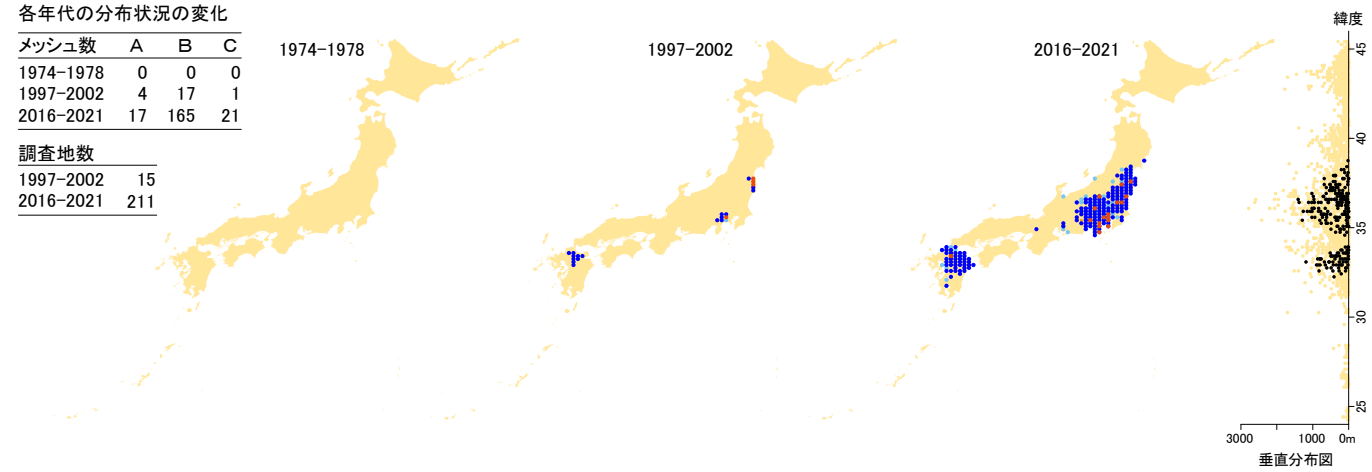
環境省レッドリスト:　—　日本の侵略的外来種ワースト 100　特定外来生物

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	4	17	1
2016–2021	17	165	21

調査地数

1997–2002	15
2016–2021	211



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。日本では江戸時代から輸入の記録がある。野外では 1980 年代に北九州市で観察されて以降，各地で分布を広げている。記録メッシュ数は 1990 年代に 22 メッシュであったが 2010 年代には 203 メッシュにまで急増した。地上採食性で留鳥性が強いため，積雪の少ない場所に分布していたが，最近は季節移動する個体が積雪の深い場所で繁殖期に観察されるようになっている(155 ページ参照)。

ヒゲガビチョウ　分類:スズメ目チメドリ科　Moustached Laughingthrush　*Garrulax cineraceus*

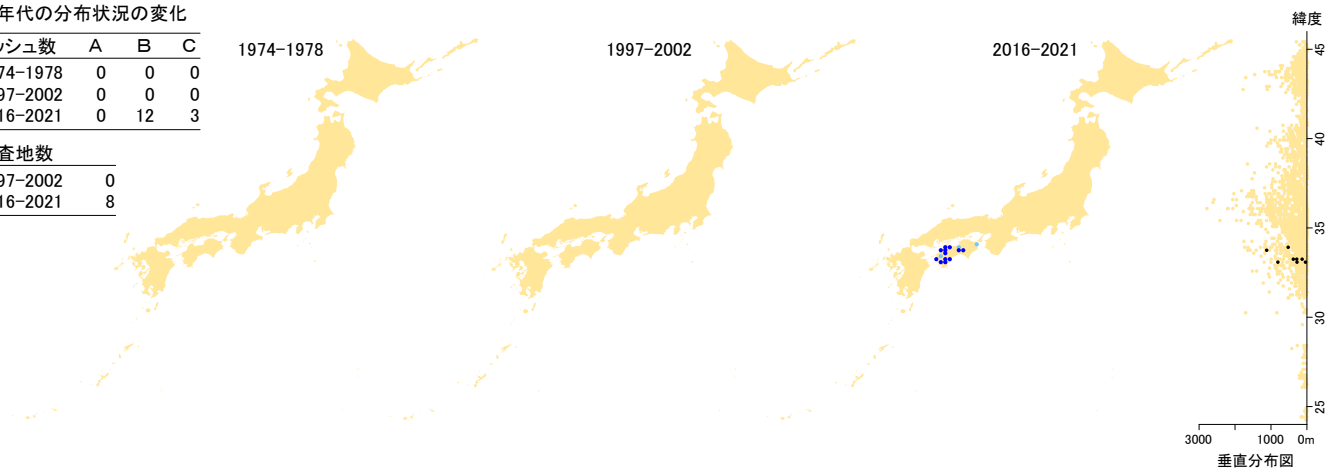
環境省レッドリスト:　—　特定外来生物

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	12	3

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	8



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1998 年から記録があり，高知県，愛媛県，香川県で生息が拡大している。アカマツ林，スギ林，落葉広葉樹林などの下層植生が発達した場所に生息する。

カオグロガビチョウ　分類:スズメ目チメドリ科　Masked Laughingthrush　*Garrulax perspicillatus*

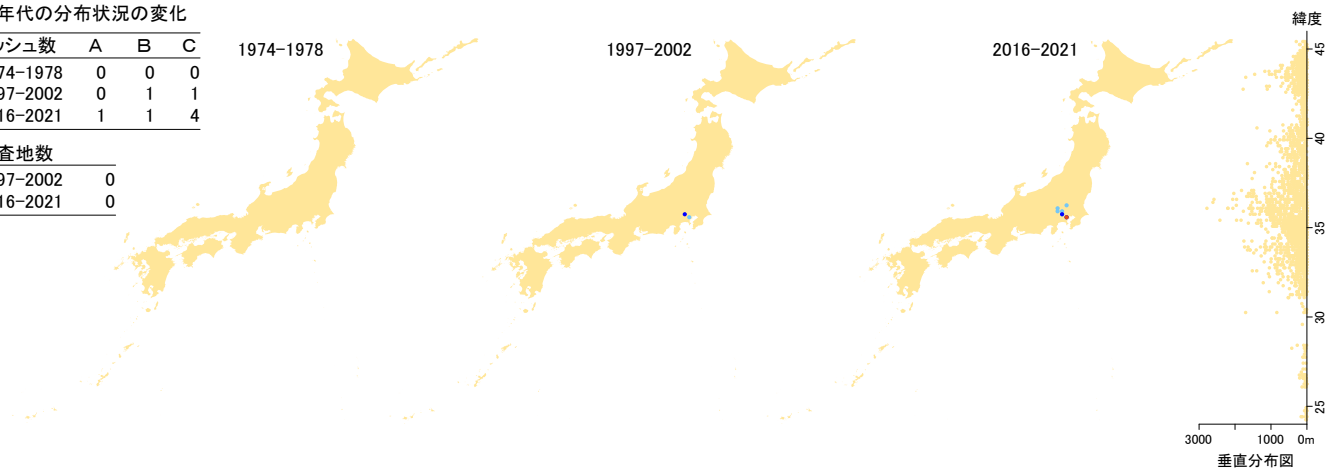
環境省レッドリスト:　—　特定外来生物

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	1
2016–2021	1	1	4

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1980 年頃から神奈川県で鳴き声が記録され始め，1988 年に三浦半島で初めて観察された。分布は拡大している。低山帯や平野部の低木林や竹林，農地などに生息し，低木の樹上や竹藪で営巣する。

カオジロガビチョウ　分類:スズメ目チメドリ科　White-browed Laughingthrush　*Garrulax sannio*

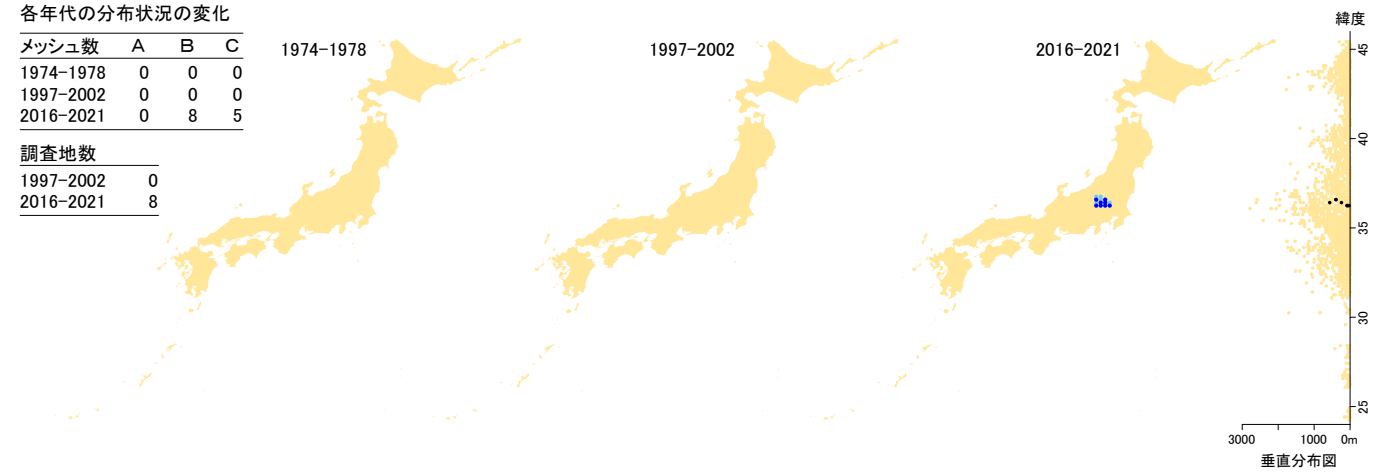
環境省レッドリスト:　―　特定外来生物

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	0	0	0
1997-2002	0	0	0
2016-2021	0	8	5

調査地数

1997-2002	0
2016-2021	8



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1994 年に群馬県赤城山で初めて記録され，分布は拡大している。低木層が発達した低地林，樹木の多い住宅地や公園などに生息する。

ソウシチョウ　分類:スズメ目チメドリ科　Red-billed Leiothrix　*Leiothrix lutea*

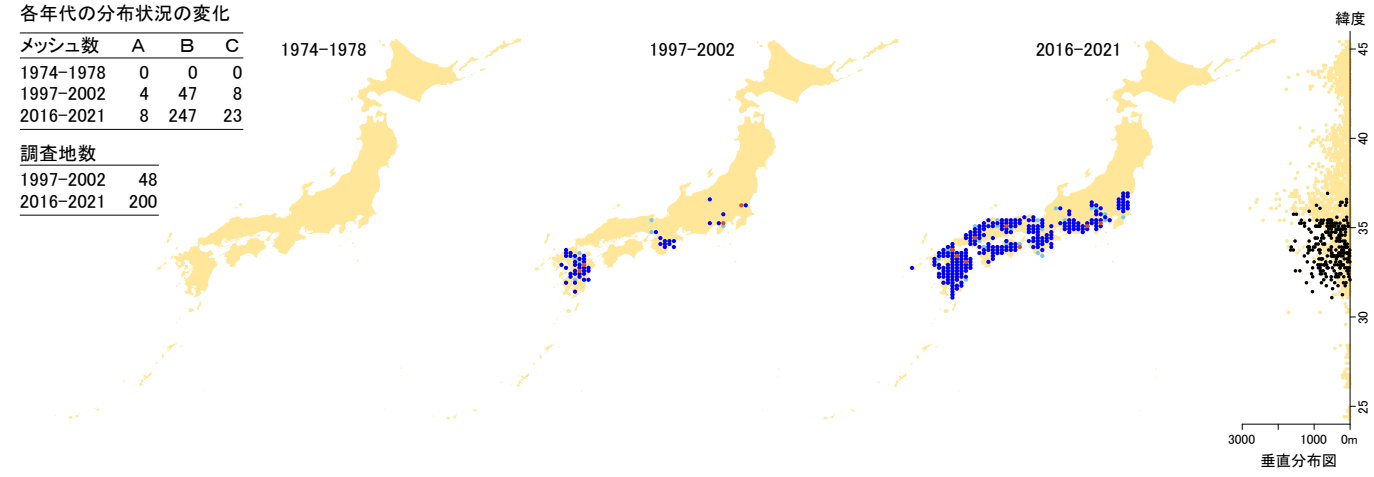
環境省レッドリスト:　―　特定外来生物

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974-1978	0	0	0
1997-2002	4	47	8
2016-2021	8	247	23

調査地数

1997-2002	48
2016-2021	200



西日本と太平洋側の広い範囲に留鳥として分布する。日本には江戸時代中期から飼い鳥として輸入され，1980 年ごろから急速に分布を拡大している。各地で侵入初期にはスズタケなどの下層植生が発達した標高 1000m 前後の落葉広葉樹林や照葉樹林に生息し，個体密度が増加するとより標高が低い地域でも繁殖するようになり，九州では低標高のスギやヒノキの人工林でも繁殖が確認されている(天野 2008)。ササ群落の中でササ類の茎や低木の枝に椀状の巣を作って営巣する。

ハッカチョウ　分類:スズメ目ムクドリ科　Crested Myna　*Acridotheres cristatellus*

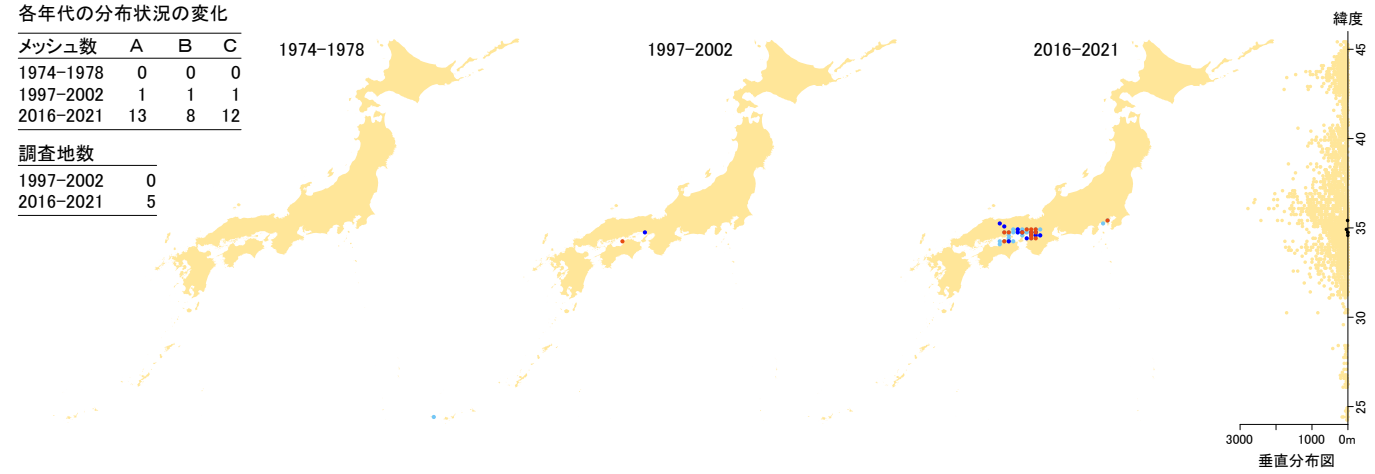
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	1	1
2016–2021	13	8	12

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	5



先島諸島の記録は自然渡来の可能性があるが，そのほかの地域は飼い鳥が逸出したと考えられる。林がある住宅地，ヨシ原，河川敷，農地などに生息し，樹洞や人工物の隙間などで繁殖する。江戸時代前期から飼い鳥として輸入された記録がある。1970 年代から京都府で，1980 年代から神奈川県で繁殖記録がある。現在は瀬戸内海東部周辺地域と神奈川県で記録されている。2010 年代には過去の調査と比べて瀬戸内海東部周辺地域で記録メッシュ数が増えた。

インドハッカ　分類:スズメ目ムクドリ科　Common Myna　*Acridotheres tristis*

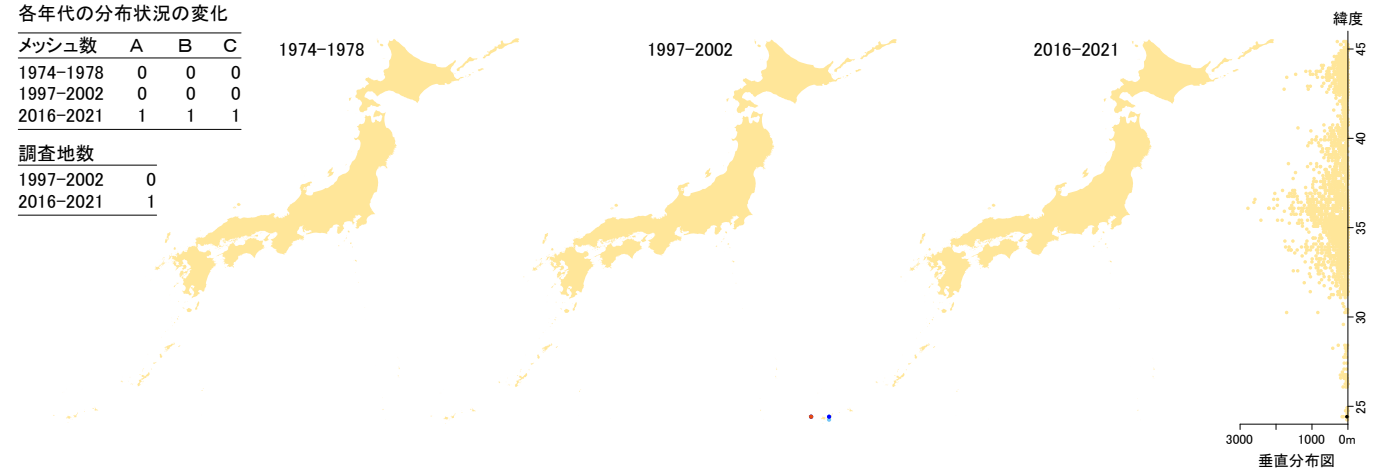
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	1	1	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



関東地方や沖縄県で繁殖記録がある。農耕地や住宅地に生息する。二次樹洞営巣性で，樹洞やキツツキ類の古巣，人工物の隙間や巣箱などで営巣する。愛玩用や観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。台湾でも同様に逸出し、個体数が増えているため、台湾から南西諸島に分布を広げている可能性も考えられる。

キンランチョウ　分類:スズメ目ハタオリドリ科　Orange Bishop　*Euplectes orix*

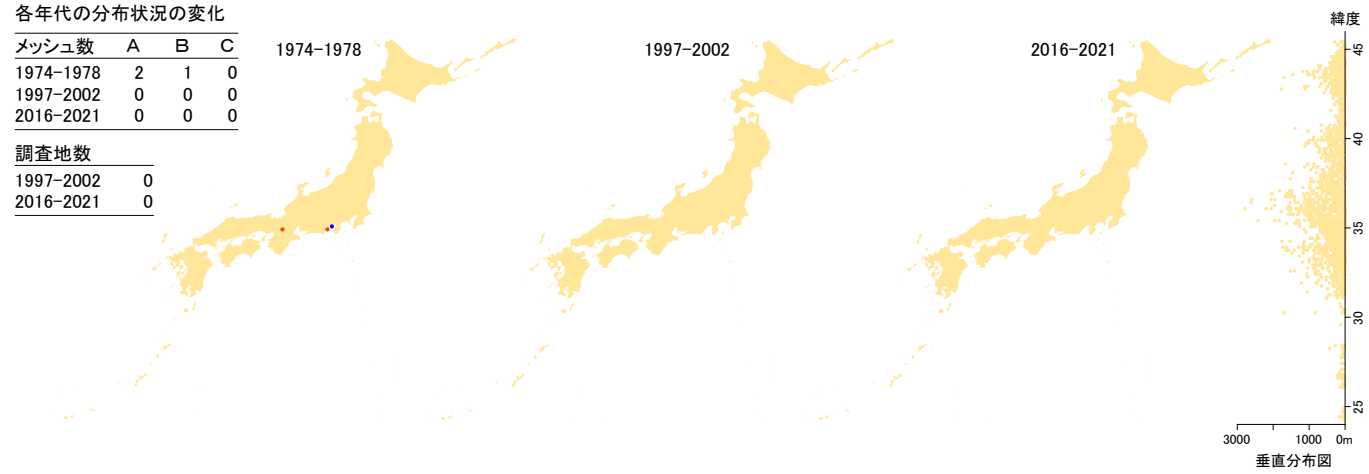
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	2	1	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1973 年に神奈川県で観察された。近年は観察記録がない。高茎草地や水辺植生，穀物畑などに生息する。草の茎に営巣する。様々な昆虫類や種子を食べる。

ベニスズメ　分類:スズメ目カエデチョウ科　Red Avadavat　*Amandava amandava*

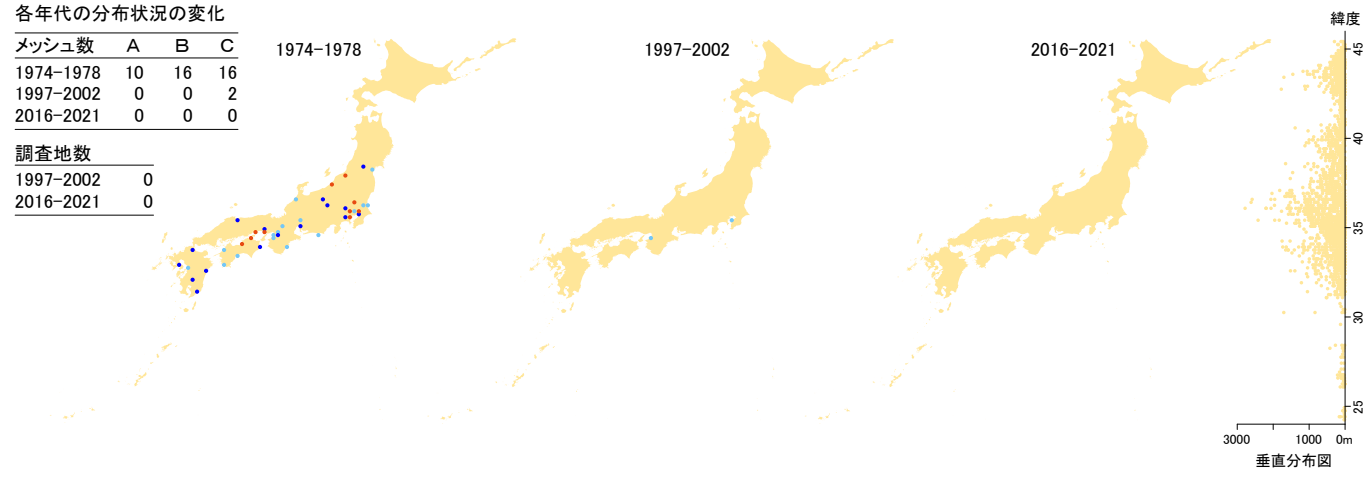
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	10	16	16
1997–2002	0	0	2
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。草原やヨシ原，灌木林，埋め立て地などに生息する。国内では秋に繁殖し，ヨシに巣をかけて営巣する。草本の種子や昆虫類を採食する。1970 年代では全国各地で生息が確認されていたが，その後，減少し，2010 年代では確認されなかった。国内には江戸時代前期から飼い鳥として輸入されていた記録がある。1960 年ごろからは多摩川や荒川の河川敷で頻繁に観察されるようになり，同時期に兵庫県では連続して繁殖が確認された(国立環境研究所 online)。

コシジロキンパラ　分類:スズメ目カエデチョウ科　White-rumped Munia　*Lonchura striata*

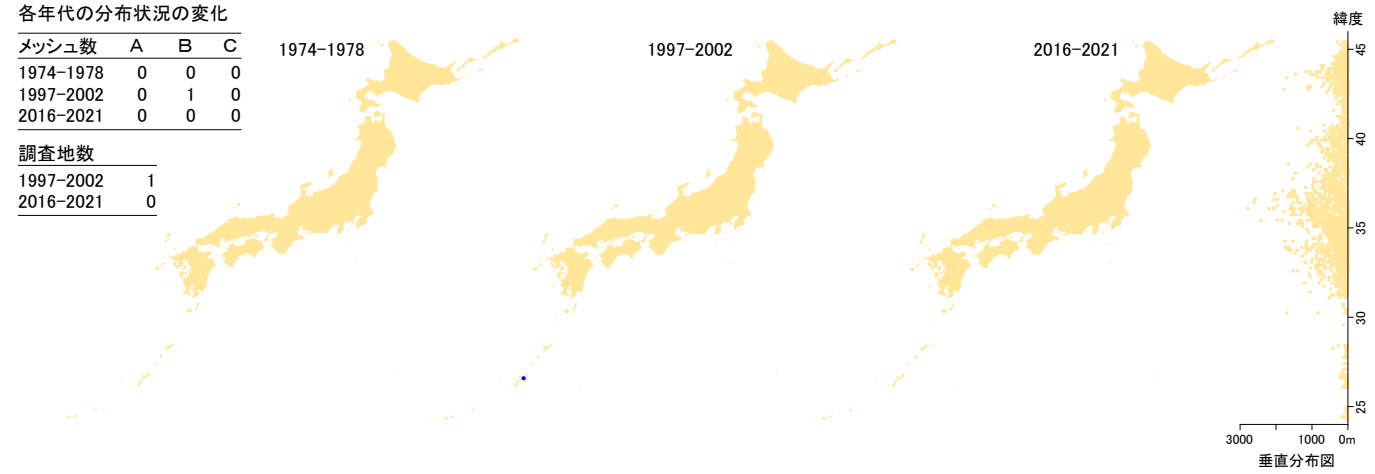
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	1	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	1
2016–2021	0



1980 年代から 1990 年代の間に愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。石垣島，沖縄島，奄美大島に分布する。草地，農耕地，灌木林に生息する。樹上にボール状の巣をつくって営巣する。

シマキンパラ　分類:スズメ目カエデチョウ科　Scaly-breasted Munia　*Lonchura punctulata*

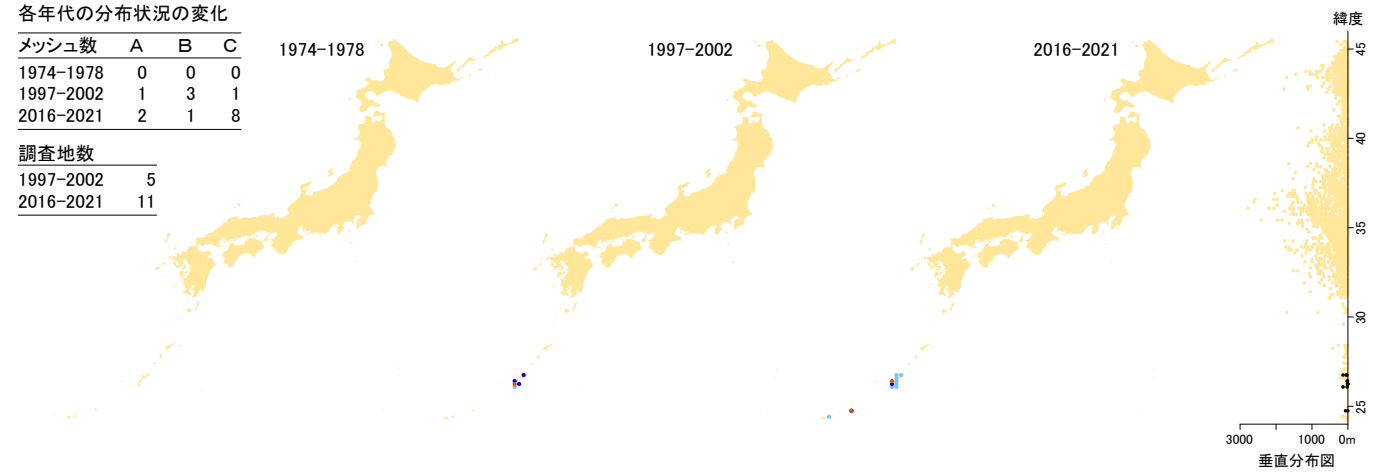
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	1	3	1
2016–2021	2	1	8

調査地数

1997–2002	5
2016–2021	11



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。沖縄県では 1988 年から記録がある。農耕地，草地，ヨシ原，灌木林，市街地の周辺などに生息する。サトウキビ畑と街路樹や森林の林縁部がある場所に多い。街路樹などの樹上にドーム状の巣を作って営巣する。

ギンパラ　分類:スズメ目カエデチョウ科　Tricolored Munia　*Lonchura malacca*

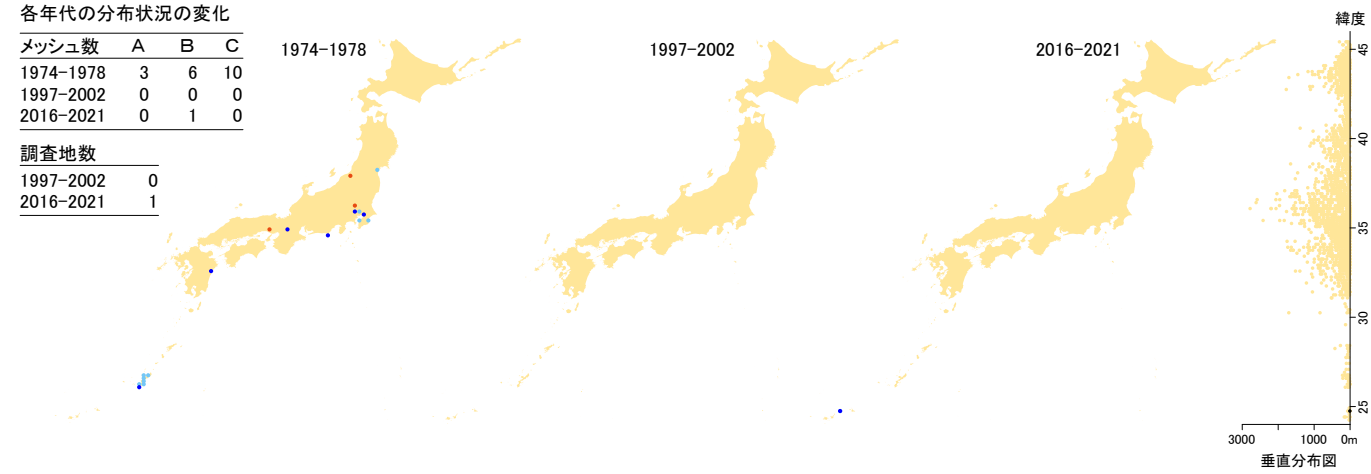
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	3	6	10
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	1	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。農耕地，草地，ヨシ原，低木林に生息する。高茎草本の茎に営巣する。

キンパラ　分類:スズメ目カエデチョウ科　Chestnut Munia　*Lonchura atricapilla*

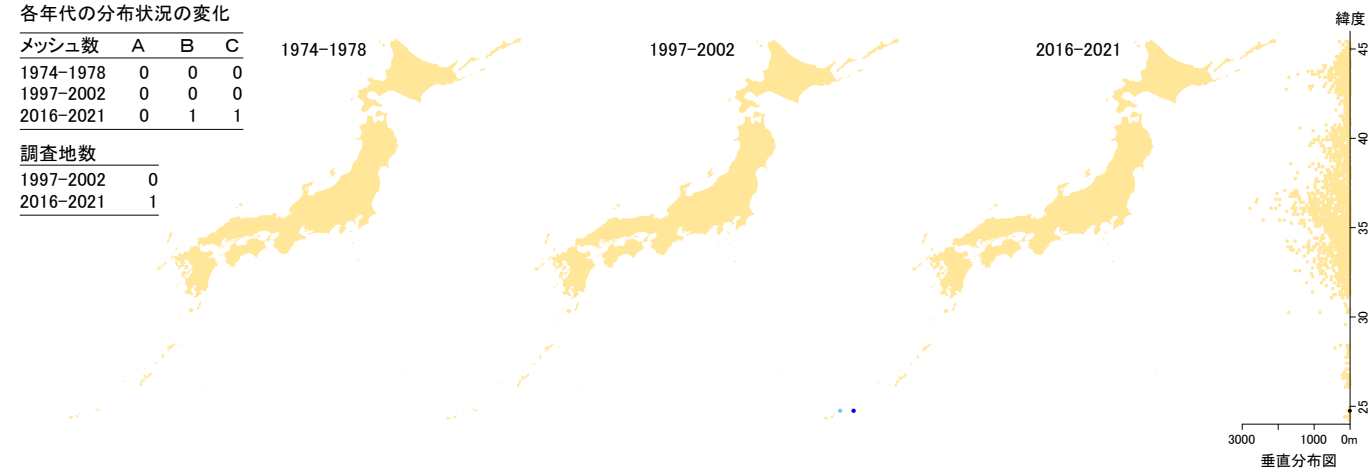
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	1	1

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	1



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1910 年頃に東京都で野生化した群れが観察されている。沖縄県では 1988 年から記録がある。サトウキビ畑などの農耕地や草地，ヨシ原，低木林に生息する。主に種子を採食する。海外の移入先では農作物の被害が報告されている(国立環境研究所 online)。

ヘキチョウ　分類:スズメ目カエデチョウ科　White-headed Munia　*Lonchura maja*

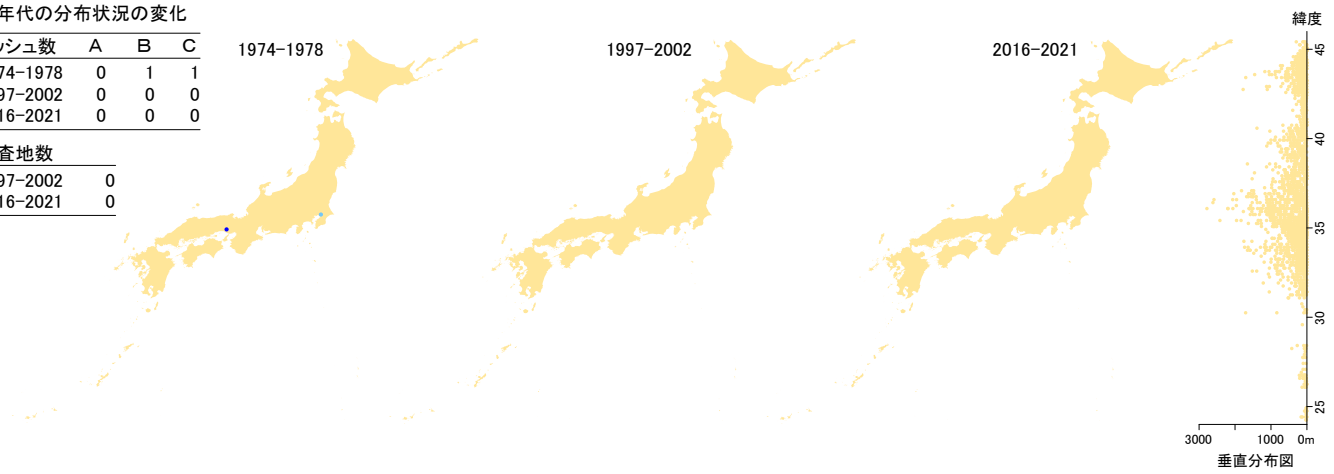
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	0	1	1
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1960 年代から兵庫県で観察されていたほか，1961 年から 1981 年の間に首都圏でも観察されていた（国立環境研究所 online）。草原や農耕地，市街地，河川敷，ヨシ原などに生息する。

ブンチョウ　分類:スズメ目カエデチョウ科　Java Sparrow　*Lonchura oryzivora*

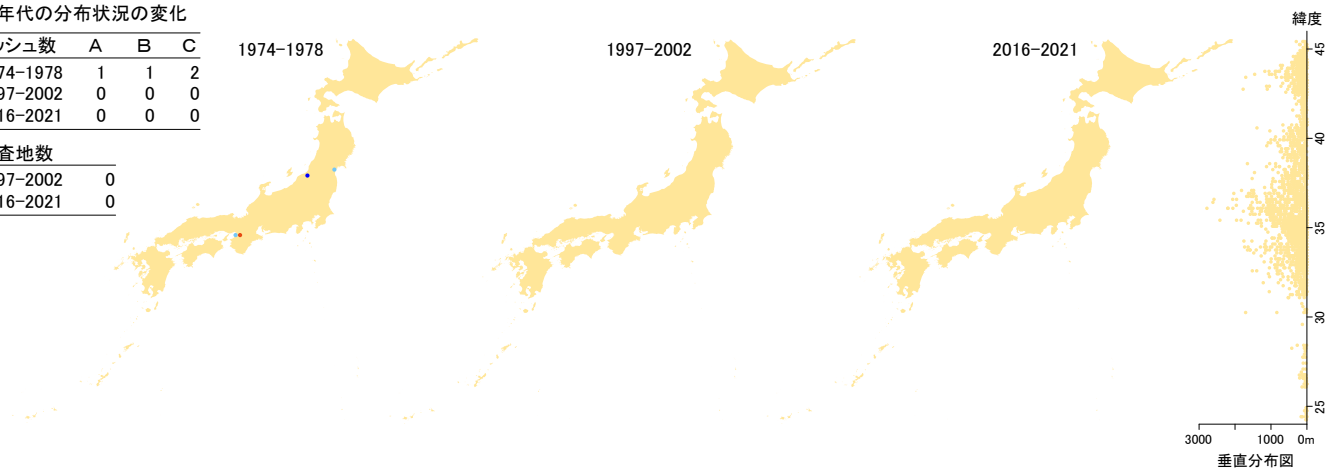
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	1	2
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1910 年頃に東京都で野生化した群れが観察されている。1964 年には神奈川県でも観察された（国立環境研究所 online）。疎林や藪のある草原，住宅地などに生息する。樹洞や建物の穴などに半球形または球形の巣を作って営巣する。

コウカンチョウ　分類:スズメ目カエデチョウ科　Red-crested Cardinal　*Paroaria coronata*

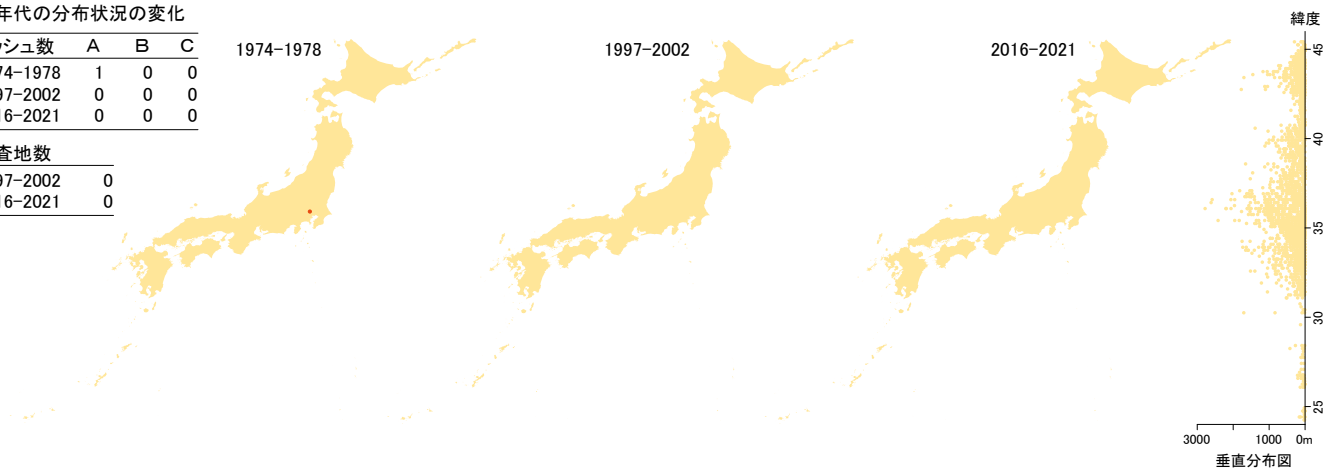
環境省レッドリスト:　—

各年代の分布状況の変化

メッシュ数	A	B	C
1974–1978	1	0	0
1997–2002	0	0	0
2016–2021	0	0	0

調査地数

1997–2002	0
2016–2021	0



愛玩用・観賞用に輸入された飼い鳥が逸出したと考えられる。1961 年から首都圏で観察されている(国立環境研究所 online)。低木林, 藪, 公園などに生息する。

1. 日本の鳥の現状

(1)緯度による鳥の分布状況

日本は亜熱帯から亜寒帯まで南北で気候帯が異なる。各現地調査地点の記録種数や個体数を緯度別に集計すると，北ほど種数が多く，夏鳥（主に国外で越冬する長距離渡りの種）の割合も高かった（図 1）。南西・小笠原諸島の種数が少ないのは，島の鳥の種数が少ない「島の効果」がある影響も大きいが，全国的には，気候により，照葉樹林，落葉広葉樹林など植生が変化する影響が考えられる。

総個体数については，種数のような緯度にともなう明瞭な影響はなく，南西・小笠原諸島については逆にやや多い種数と異なるパターンが見られた。

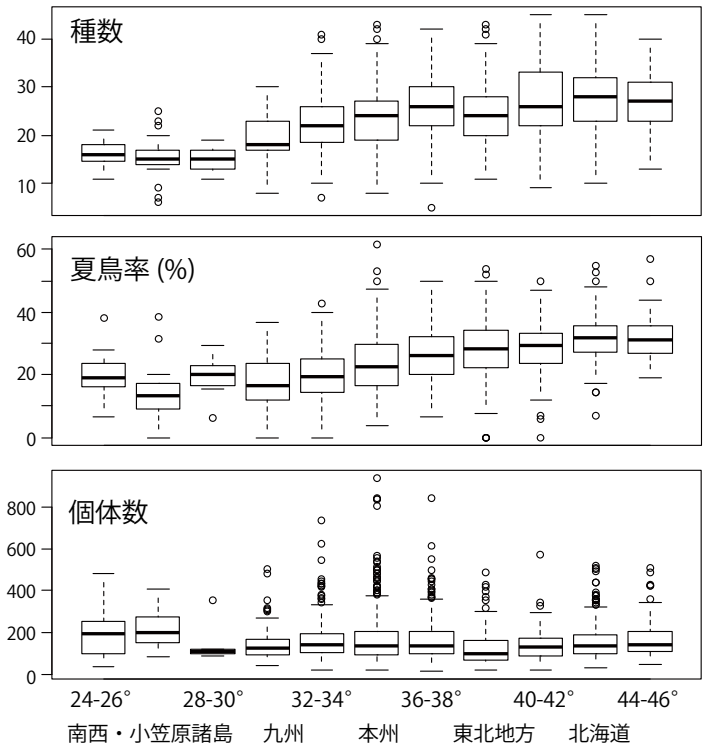


図 1.　各調査地で記録された鳥の種数や個体数と緯度との関係

(2)日本の鳥の優占種

日本の鳥の優占種を分布の広さと，数からみた。分布の広さは各種の記録メッシュ数の上位種を集計した。分布でみた最優占種は 1970 年代調査からいずれもウグイスだった（表 1）。それ以外の種を含めた経年変化をみると，1970 年代調査では 2 位だったホオジロの順位は，1990 年代，2010 年代は 6 位に下がっていた。樹林性の種が占める割合が増加し，ホオジロ，ハシボソガラス，スズメ，カワラヒワ，モズといった開けた場所に生息する種の上位 10 種に占める種数は，1970 年代調査では 5 種だったが，1990 年代は 4 種，2010 年代は 3 種と減っていた。

表 1. 1970年代調査以降の記録メッシュ数上位10種の変化. 緑が樹林性の種

1974–1978		1997–2002		2016–2021	
種名	メッシュ数	種名	メッシュ数	種名	メッシュ数
ウグイス	1,062	ウグイス	1,159	ウグイス	1,181
ホオジロ	1,035	ヒヨドリ	1,112	ハシブトガラス	1,166
キジバト	1,022	キジバト	1,080	ヒヨドリ	1,148
ヒヨドリ	1,000	シジュウカラ	1,055	キジバト	1,133
シジュウカラ	995	ハシブトガラス	1,042	シジュウカラ	1,117
ハシボソガラス	932	ホオジロ	1,036	ホオジロ	1,058
スズメ	892	カワラヒワ	988	カワラヒワ	1,050
カワラヒワ	887	コゲラ	935	キビタキ	1,030
ハシブトガラス	887	ハシボソガラス	921	コゲラ	1,027
モズ	838	スズメ	880	ハシボソガラス	1,003

個体数の多い種は，比較可能な現地調査地点 1,947 地点の総個体数で示した。最優占種はヒヨドリで，メッシュ数では上位には入らなかったスズメやツバメといった身近な場所では密度の高い種も上位に入った（表 2）。1990 年代調査と 2010 年代調査を比較すると，スズメ，ツバメ，ムクドリといった開けた場所に生息する種の総個体数が大きく減少しているのに対し，ヒヨドリ，ウグイスといった樹林性の種の減少度合いは小さかった。

表 2. 総個体数の上位10種

1997–2002		2016–2021	
種名	総個体数	種名	総個体数
ヒヨドリ	33,900	ヒヨドリ	33,151
スズメ	31,159	ウグイス	23,422
ウグイス	25,025	スズメ	20,627
ツバメ	14,978	ハシブトガラス	12,396
ホオジロ	13,987	ホオジロ	10,830
ハシブトガラス	12,387	キジバト	10,544
ムクドリ	12,155	シジュウカラ	10,318
カワラヒワ	11,429	カワラヒワ	10,023
キジバト	10,931	ツバメ	8,987
メジロ	10,475	メジロ	8,857

(3) 地域による優占種の違い

こうした優占種は，地域によって異なる。北海道，東日本（東北地方，関東地方，中部地方），西日本（近畿地方，中国地方，四国地方，九州地方），南西諸島の 4 地域に区分して，同様に記録地点数と総個体数を示した（表 3）。北海道は記録地点数，総個体数ともに，アオジが上位に入る点が他地域と異なっていた。また，センダイムシクイやツツドリといった夏鳥が上位に入る点にも違いがあった。

南西諸島もセッカやアカショウビン，リュウキュウツバメが上位に入るなど，大きな違いがあり，ヒヨドリ，メジロ，ヤマガラといった常緑樹林に多く生息する種が北に行くとランクが下がっていく傾向もみられた。

表 3. 地域別の記録地点数，総個体数上位10種．カッコ内の数字は調査地数

北海道（486）		東日本（1,023）		西日本（760）		南西諸島（75）	
記録地点数							
アオジ	460	ウグイス	949	ヒヨドリ	720	ヒヨドリ	73
キジバト	458	ヒヨドリ	934	ウグイス	715	メジロ	71
ウグイス	445	シジュウカラ	883	ハシブトガラス	629	ハシブトガラス	69
ツツドリ	440	キジバト	860	シジュウカラ	623	キジバト	68
センダイムシクイ	417	ホオジロ	837	ホオジロ	618	セッカ	58
キビタキ	406	ハシブトガラス	807	ヤマガラ	608	アカショウビン	58
シジュウカラ	379	キビタキ	768	カワラヒワ	559	スズメ	52
ハシブトガラス	378	ヤマガラ	664	コゲラ	556	リュウキュウツバメ	50
アオバト	358	コゲラ	662	キジバト	542	サンコウチョウ	48
カワラヒワ	348	カワラヒワ	646	メジロ	541	イソヒヨドリ	48
総個体数							
ウグイス	6,257	ヒヨドリ	18,024	ヒヨドリ	16,548	ヒヨドリ	2,635
センダイムシクイ	6,140	スズメ	12,229	ウグイス	10,693	ハシブトガラス	1,606
アオジ	5,353	ウグイス	10,755	スズメ	8,750	メジロ	1,430
キジバト	3,723	ホオジロ	6,462	ハシブトガラス	5,375	キジバト	1,077
キビタキ	3,217	シジュウカラ	6,246	メジロ	5,145	スズメ	934
ハシブトガラス	2,457	ムクドリ	5,742	ホオジロ	5,047	セッカ	838
カワラヒワ	2,433	ツバメ	5,195	ツバメ	4,900	シロガシラ	821
ヒヨドリ	2,353	ハシブトガラス	5,192	カワラヒワ	4,738	ウグイス	809
ツツドリ	2,220	カワラヒワ	4,954	ヤマガラ	4,601	リュウキュウツバメ	428
ハシボソガラス	1,886	キジバト	4,896	シジュウカラ	4,109	イソヒヨドリ	409

(4)標高による優占種の違い

優占種は南北方向だけでなく，標高によっても異なる。ただし，分布図ページで示した垂直分布図でも，南の地域では標高の高い場所に分布する鳥が北の地域では低い場所にも分布することからわかるように(たとえば 118 ページのコルリの垂直分布図を参照)，全国でみると標高による優占種の違いが分かりにくくなってしまう。そこで関東地方，中部地方，近畿地方のデータから標高による優占種の違いを示した(表 4)。標高 100m以下は市街地や農地が多くを占めているためか，スズメ，ツバメなど開けた場所に生息する種が多いが，それより高くなると，樹林性の鳥が多くなり，1000m以上になると優占種がヒヨドリからヒガラへと変化していた。

優占種の上位を占めている種のうち，近縁のカラ類の個体数比率を標高別にみると，シジュウカラは低標高で優占度が高く，ヤマガラが中標高で，ヒガラとコガラは高標高で高くなっていた(図 2)。

表 4. 関東地方から近畿地方における標高別の記録地点数上位10種. オレンジは開けた場所に生息する種

0–100m (267)		100–250m (131)		250–500m (169)		500–1000m (169)		1000–1500m (63)		1500m以上 (33)	
スズメ	253	ヒヨドリ	130	ヒヨドリ	149	ヒヨドリ	163	ヒガラ	61	ウグイス	30
ヒヨドリ	253	ウグイス	127	ウグイス	142	ウグイス	159	ウグイス	57	ヒガラ	28
ツバメ	247	ホオジロ	117	シジュウカラ	141	シジュウカラ	156	キビタキ	57	メボソムシクイ	28
ハシボソガラス	245	シジュウカラ	116	キビタキ	130	ヤマガラ	153	シジュウカラ	56	ミソサザイ	26
ハシブトガラス	239	ハシブトガラス	114	ホオジロ	129	オオルリ	149	オオルリ	54	ルリビタキ	25
キジバト	235	メジロ	111	キジバト	128	キビタキ	148	カケス	53	コガラ	22
カワラヒワ	226	ヤマガラ	109	ヤマガラ	126	ホオジロ	143	ホオジロ	47	ホトトギス	22
ウグイス	211	キジバト	106	ハシブトガラス	119	コゲラ	136	ミソサザイ	46	カケス	21
ホオジロ	199	カワラヒワ	105	メジロ	116	カケス	136	コガラ	46	カッコウ	21
カルガモ	192	キビタキ	104	オオルリ	116	ヒガラ	134	ヒヨドリ	45	キセキレイ	19

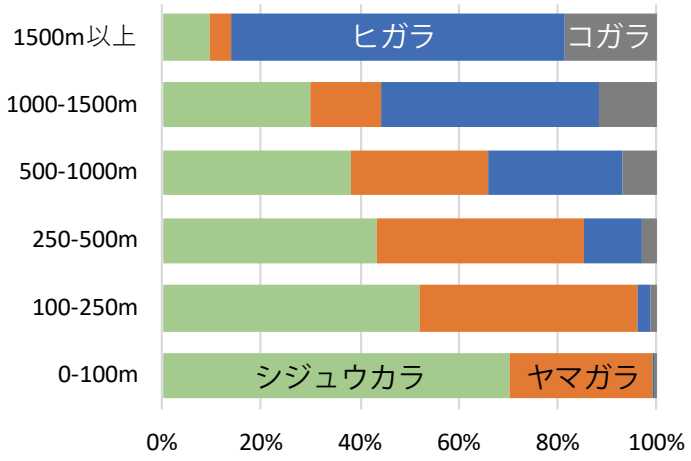


図 2. 標高別のカラ類の優占度の変化

2. 増減種とその共通点

比較可能な現地調査地点 1,947 地点の結果をもとに，1990 年代調査（1997–2002 年）と 2010 年代調査（2016–2021 年）の記録地点数および対象地点の総個体数（コースおよび定点の個体数の合計）の増減傾向をまとめた。50 地点以上記録された種を対象に，下記のとおり算出した増減率（数）の高かった 15 種について示した。

・記録地点数の増減率：（2010 年代調査の記録地点数－1990 年代調査の記録地点数）
÷1990 年代調査の記録地点数×100

・総個体数の増減：2010 年代調査の総個体数－1990 年代調査の総個体数

(1) 増加した種

記録地点数の増加率は，外来鳥であるガビチョウおよびソウシチョウが上位を占めた。上位種は樹林性の種が大半を占めており，樹林性の種以外ではカワウが 3 位に入ったのみであった（表 5）。また，樹林性の種は総個体数も増加しており，キビタキやセンダイムシクイが特に大きく増加していた。記録地点数が 50 地点未満で，同程度の分布の増加率を示しているものとしては，セグロカッコウ（1→9 地点），ヤイロチョウ（10→32 地点），カンムリカイツブリ（8→21 地点），オジロワシ（13→31 地点），タンチョウ（9→21 地点），キンバト（7→14 地点）などであった。

表 5. 1990年代調査と2010年代調査で，ほぼ同じ経路で調査できた1,947地点の結果に基づく増加した種 15種

分布の変化（記録地点数）

種名	1997–2002	2016–2021	増減（%）
ガビチョウ	15	211	1306.7
ソウシチョウ	48	200	316.7
カワウ	104	306	194.2
キバシリ	32	94	193.8
サンショウクイ	190	478	151.6
ヨタカ	19	43	126.3
ヤマゲラ	38	78	105.3
サンコウチョウ	204	411	101.5
アオバト	410	799	94.9
アカショウビン	171	312	82.5
クマゲラ	36	60	66.7
コサメビタキ	122	202	65.6
フクロウ	35	56	60.0
クロジ	87	139	59.8
キビタキ	860	1357	57.8

個体数の変化（総個体数）

種名	1997–2002	2016–2021	増減
キビタキ	3,520	8,521	5,001
センダイムシクイ	3,778	6,391	2,613
ヤマガラ	4,737	6,694	1,957
アオバト	1,284	2,465	1,181
ガビチョウ	54	1,105	1,051
サンショウクイ	694	1,700	1,006
オオルリ	3,359	4,281	922
ソウシチョウ	621	1,507	886
ヒガラ	3,833	4,591	758
クロツグミ	1,383	1,981	598
ミソサザイ	1,693	2,263	570
ホトトギス	1,957	2,469	512
アオサギ	2,967	3,438	471
エゾムシクイ	926	1,393	467
アオゲラ	1,201	1,623	422

・外来鳥の増加

特定外来生物であるガビチョウ，ソウシチョウが顕著に増加したほか，ヒゲガビチョウ，カオグロガビチョウ，カオジロガビチョウといったチメドリ科の種も増加しており，コブハクチョウ，ホンセイインコ，ハッカチョウも徐々に分布を拡げていた。一方で，ベニスズメ，コシジロキンパラなどカエデチョウ科の多くの種は記録されなくなっていた。

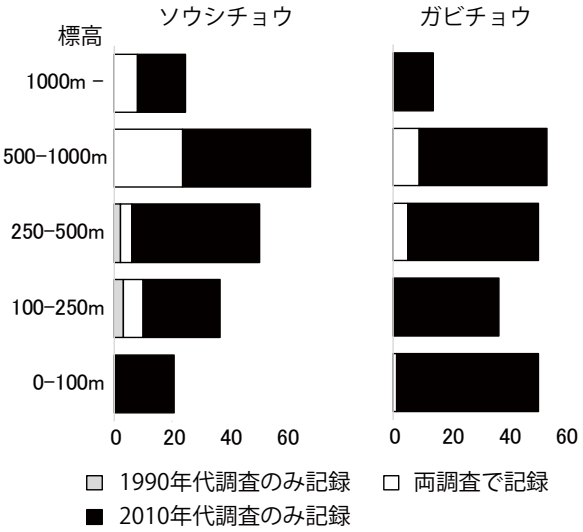


図 3.　ソウシチョウおよびガビチョウの標高帯別の記録地点数の変化

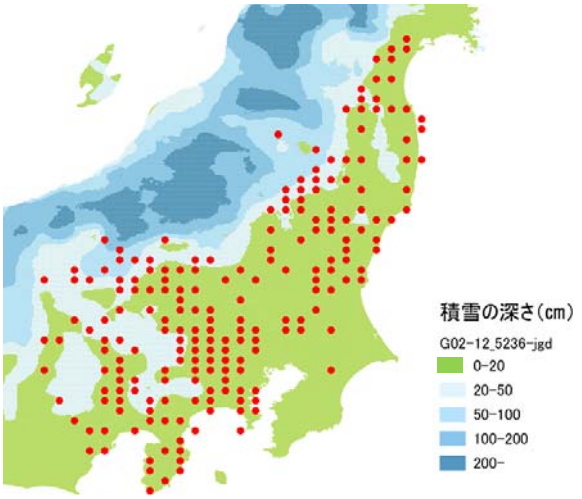


図 4.　2010 年代調査におけるガビチョウの記録メッシュ（●）と積雪の深さとの関係

ガビチョウやソウシチョウは全体的に分布が拡大していたが，1990 年代調査ではほとんど記録されていなかった低標高域へも分布を拡大しており，ガビチョウは高標高域へも分布を拡大していた（図 3）。

また，ガビチョウは積雪の少ない地域を中心に分布を拡大していた（図 4）。通年同じ場所に生息し，地上で採食することが多いため，越冬期の生息が困難な積雪の深い地域を避けるように分布を拡げたと考えられるが，夏期のみに生息し，冬期には生息しない場所や既に積雪の深い場所でも生息が確認され始めているため，今後の分布動向をモニタリングしていく必要がある。

カエデチョウ科の種が記録されなくなったのは，輸入量や野外に逃げる数が減ったことが影響している可能性が考えられた。また，1970 年代調査時には，生息が確認されていた草地が埋め立て等により減少した事例もあり，生息地の変化が影響している可能性も考えられた。

・樹林性の種の増加

記録地点数の増加上位種の大半は樹林性の種であり，1980 年代から 1990 年代に減少が心配されていた夏鳥（遠藤 1993）も，1990 年代調査の結果を受けて 1998 年に環境省レッドリストに掲載されたサンショウクイを含め，多くの種の記録地点数および総個体数が増加していた。林野庁の統計資料でも森林蓄積量は年々増加しており（図 5），森林が成熟しているため，樹林性の種にとっては生息しやすい状況にあると思われる。

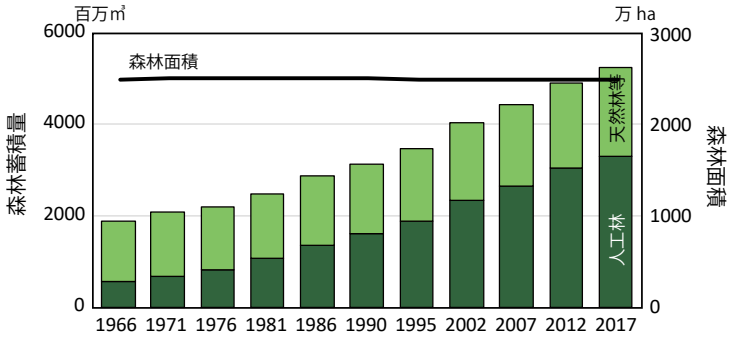


図 5.　日本の森林面積および森林蓄積量の変化（林野庁の統計資料をもとに描く）。

・大型の魚食性の種の増加

記録地点数の増加上位種に入った唯一樹林性でない種はカワウであった。カワウは大型の魚食性の種だが，同様の生態を持つダイサギ（記録地点数の増加率：48.6%）やミサゴ（同 43.5%）なども記録地点数が増加しており，記録地点数が 50 地点未満の種では，カンムリカイツブリやオジロワシも増加していた。アオサギも大きく増加していた。こうした大型の魚食性の種の増加は，1990 年代調査でも指摘されており，その傾向が現在も続いているものと考えられる。1970 年代は農薬や水質汚染，開発の影響によって，世界的に猛禽類や魚食性の種が急減し，特に魚食性の種と鳥類食性の種でその傾向が顕著だったことが知られている（Newton 1998）。日本でも同様の変化がカワウやサギ類で示されており（成末 1992，福田ほか 2002），今回の増加傾向は，減少後の回復と考えられた。

(2) 減少した種

分布の縮小の顕著な種はコアジサシ，アマサギ，コサギ，ゴイサギとサギ類が上位を占めた。メボソムシクイも 7 位（-52.0%）と上位に入ったが，1990 年代調査では，同一種の扱いだったメボソムシクイとオオムシクイは今回の調査からは別種として扱っており，増減の判断が難しいことから，対象から除外した。また，記録地点が 50 地点に満たない種では，アカモズ（15→3 地点），ショウドウツバメ（35→17 地点），シロチドリ（22→9 地点），ヒメアマツバメ（25→12 地点），クロサギ（15→9 地点），カヤクグリ（24→16 地点）の減少がみられた。

スズメ，ツバメなどの身近な鳥類では，総個体数も大きく減少していた。

表 6. 1990年代調査と2010年代調査で，ほぼ同じ経路で調査できた1,947地点の結果に基づく減少した種15種

分布の変化（記録地点数）

種名	1997-2002	2016-2021	増減（%）
コアジサシ	59	15	-74.6
アマサギ	117	38	-67.5
コサギ	239	93	-61.1
ゴイサギ	236	93	-60.6
ハイタカ	48	19	-60.4
ササゴイ	45	20	-55.6
バン	87	42	-51.7
ハリオアマツバメ	46	23	-50.0
オナガ	68	35	-48.5
アマツバメ	145	84	-42.1
コヨシキリ	112	65	-42.0
ビンズイ	168	99	-41.1
ヤマセミ	82	51	-37.8
イソシギ	117	75	-35.9
コシアカツバメ	70	46	-34.3

個体数の変化（総個体数）

種名	1997-2002	2016-2021	増減
スズメ	31,159	20,627	-10,532
ツバメ	14,978	8,987	-5,991
ゴイサギ	6,197	738	-5,459
トビ	7,021	2,401	-4,620
ムクドリ	12,155	7,729	-4,426
イワツバメ	7,855	4,002	-3,853
ウミネコ	5,562	2,048	-3,514
カワラバト(ドバト)	6,031	2,539	-3,492
アマサギ	3,591	239	-3,352
ホオジロ	13,987	10,830	-3,157
コサギ	3,488	510	-2,978
オオセグロカモメ	3,470	780	-2,690
エナガ	6,778	4,440	-2,338
ハシボソガラス	10,060	8,012	-2,048
ウグイス	25,025	23,422	-1,603

・小型の魚食性の種の減少

分布が縮小した上位種の多くは小型の魚食性が占めた。同所的に生息・繁殖する大型の魚食性の種は増加しているため，小型の魚食性の種が食物とする小さな魚が減少している可能性がある。外来魚のオオクチバスやコクチバス等により小型の魚類が減少していることが知られているため，そうした影響が出ている可能性がある。実際に，外来魚が増えた場所で魚食性の小型の種が減少していることも報告されている（嶋田ほか 2005）。

また，増加傾向にある大型の魚食性の種との食物をめぐる競争や営巣場所をめぐる競争による影響も考えられる。サギ類は大型のサギも小型のサギも同じ環境に集団繁殖地をつくって繁殖する。そしてサギ類の繁殖開始時期は，大型の種ほど早く，小型の種は遅い。早く繁殖をはじめる大型の種がより良い営巣場所を占めると，小型の種は条件の悪い場所での営巣を強いられる可能性が高く，カラス類などによる卵の捕食や，強風による巣や卵の落下などにより，繁殖成績が低下している可能性がある。

また，農地の変化も考えられる。小型の魚食性の種の一部は水田で魚を捕えることも多く，水田の近代化も影響している可能性がある。土地改良され排水性を高めた水田では，水路から水田に生物が入れなくなるなど，鳥類の食物になる水生生物が減少することが知られており（Lane & Fujioka 1998），食物の減少が個体数に影響した可能性も考えられる。

・飛行採食性の種の減少

ハリオアマツバメ，アマツバメ，ツバメ，イワツバメ，ショウドウツバメ，ヒメアマツバメ，コシアカツバメと飛行採食性の種の減少が目立った。南西諸島に分布するリュウキュウツバメを除けばツバメ類，アマツバメ類の全種が減少傾向にあった。また，地域別にみても一部の地域ではなく，全国的に減少傾向にあった。

これらの種には夏鳥であるという共通点があるが，前述したように，樹林性の種では夏鳥でも分布の拡大がみられていることより，減少傾向に影響しているのは，飛翔性の昆虫を捕食する飛行採食性であるという共通点の可能性が高い。昆虫については，モニタリングサイト 1000 里地調査によりチョウ類の減少傾向などは示唆されており（環境省自然環境局生物多様性センター 2019），定量的な情報は少ないが，食物の減少がこれらの鳥の減少につながっている可能性がある。

・農地など開けた場所の種の減少

アマサギ，ツバメ，ムクドリ，スズメなど，農地など開けた場所を利用する種の個体数が減少していた。アマサギは大規模な水田地帯にのみ生息する種であり，農地の面積率での生息状況の比較を行うことが現実的でないため，さまざまな農地率の場所にも生息している 3 種について，コース周辺の 1990 年代調査時の農地の面積割合と各種の個体数変化を比較した（図 6）。その結果，ムクドリは農地割合が最も高い部分のみやや減少度合が低くなったが，それ以外の種は，農地割合が高くなるほど，減少度

合が高くなった。

農地で鳥が減少する原因として，環境省レッドデータブック 2014 では，例えば，サシバでは減少要因として耕作放棄が指摘されている。農地割合が低い中山間地では耕作放棄が増えているが，農地割合が高いところはそうした影響は大きくないと考えられ，農地の質的な変化が起きている可能性がある。例えば東京では作物が麦から野菜類に変わったことで東京のヒバリが減少した可能性が示唆されている（植田ほか 2005）。ヨーロッパでは麦が春播きから秋播きに代わったことで，繁殖期の草丈が高くなり，好適な生息地でなくなってしまったためにヒバリが減少したり（Donald 2004），農業の大規模化により農地環境が均質化したことで，農地に生息する種が減少したりしたことが知られている（British Trust for Ornithology 2007）。

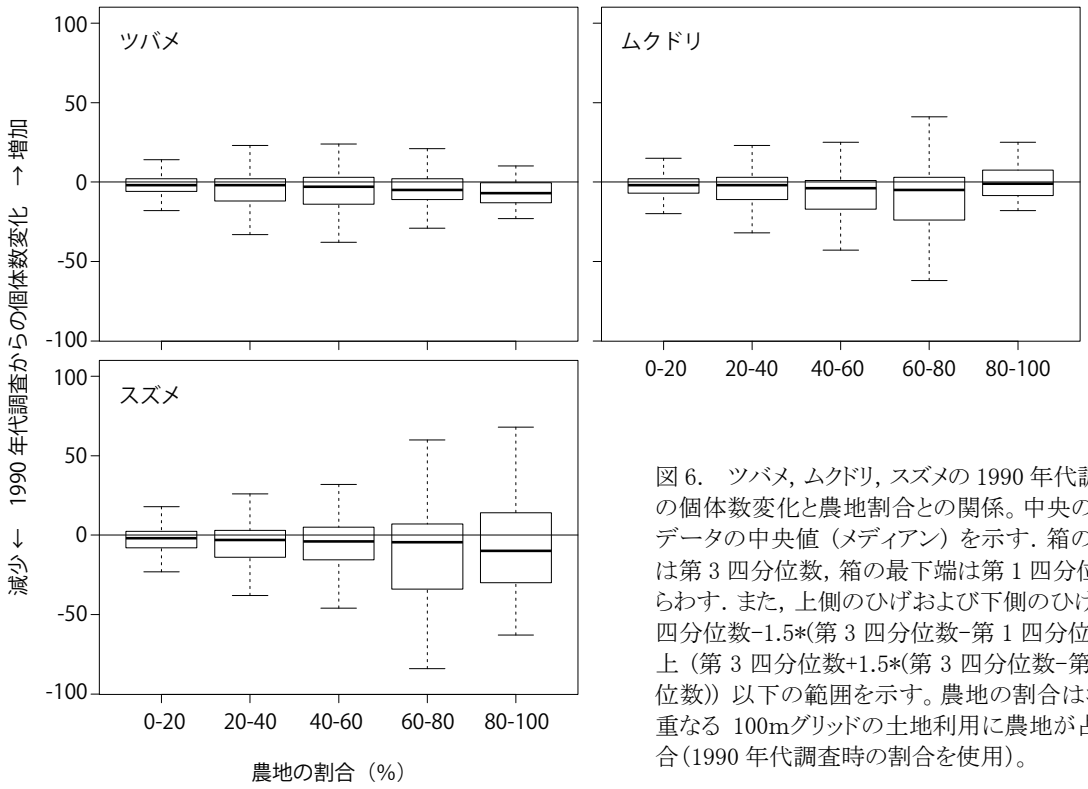


図 6.　ツバメ，ムクドリ，スズメの 1990 年代調査からの個体数変化と農地割合との関係。中央の太線はデータの中央値（メディアン）を示す．箱の最上端は第 3 四分位数，箱の最下端は第 1 四分位数をあらわす．また，上側のひげおよび下側のひげは第 1 四分位数−1.5*(第 3 四分位数−第 1 四分位数)）以上（第 3 四分位数+1.5*(第 3 四分位数−第 1 四分位数)）以下の範囲を示す。農地の割合はコースと重なる 100mグリッドの土地利用に農地が占める割合（1990 年代調査時の割合を使用）。

また，前述したように，土地改良され排水性を高めた水田では，水路から水田に生物が入れなくなり，鳥類の食物になる水生生物が減少することが茨城での調査で明らかにされている（Lane & Fujioka 1998）。農地を主な生息地とするアマサギはこの影響を受けている可能性があるが，それ以外の 3 種については影響は大きくないと考えられる。

オランダでは，ネオニコチノイド系の農薬使用による昆虫類の減少が，農地を使う昆虫食の種の個体数にも影響する可能性が示されている（Hallmann et al. 2014）。また，除草剤の影響により種子食の種の食物が減少していることも指摘されている（Newton 1998）。もともと農地で採食していたが，農地の採食地としての質の低下で，ほかの環境が主要な採食地になったとすると，農地割合の高いところで減少率

が高いことにつながるかもしれない。

なお，ムクドリの個体数変化については，農地割合よりも住宅地割合の方が顕著で，住宅地割合の高い場所ほど個体数が増加していた（図 7）。街路樹などの都市の樹木が生長し樹洞ができたことにより，営巣場所が増えた影響の可能性もあるが，農地が採食地として適さなくなり，公園緑地の植栽木の果実が重要な採食物になり，分布が変化した可能性もある。なお，スズメも東京都において 1km メッシュスケールで行われた分布調査で，都心部で増加傾向にあり，農地割合の高い郊外部で減少傾向にあるという同様の傾向が認められた（植田・佐藤 2017）。こうした影響を明らかにするには，耕作放棄や作物の変化，農薬の利用有無など，より詳細な情報を収集する必要がある。

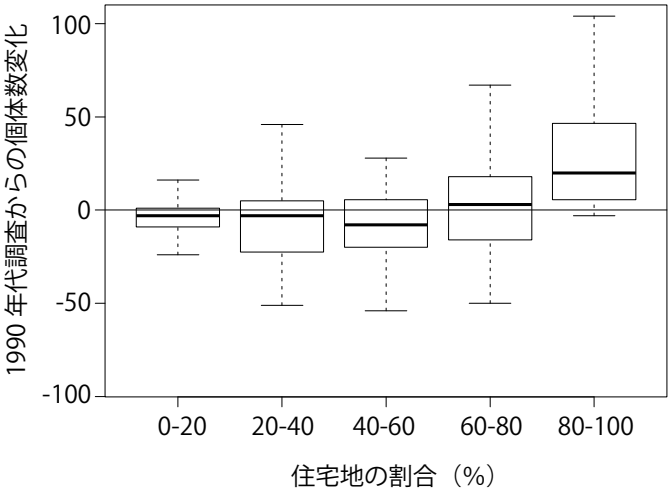


図 7.　ムクドリの 1990 年代調査からの個体数変化と住宅地割合との関係。中央の太線はデータの中央値（メディアン）を示す．箱の最上端は第 3 四分位数，箱の最下端は第 1 四分位数をあらわす．また，上側のひげおよび下側のひげは第 1 四分位数−1.5*(第 3 四分位数−第 1 四分位数)) 以上（第 3 四分位数+1.5*(第 3 四分位数−第 1 四分位数)) 以下の範囲を示す。住宅地の割合はコースと重なる 100mグリッドの土地利用に住宅地が占める割合（1990 年代調査時の割合を使用）。

・人との関係の深い種の減少

トビやカワラバト，ウミネコといった人からの餌付けや生ゴミに食物を依存する種の個体数が減少していた。これらの種は 1990 年代調査時に，地点あたりの個体数が多かった場所で，減少が顕著だという傾向があった。

トビは港やゴミ捨て場の生ゴミなど，カワラバトは餌付けに依存して多くの個体が 1 か所に集まる傾向がある。廃棄物が適切に処理されるようになったり，餌付けが減ったりしたことがこのような結果につながった可能性がある。ウミネコは，集団繁殖地での個体数の減少も指摘されているが（Senzaki et al. 2019），トビと同様のことが影響している可能性も考えられる。

(3) ホオジロ類の変化

ここまで，全体的な増減の特性について示してきたが，増加している樹林性の種と，減少している農地などの開けた場所の種では，食物に大きな違いがあったり，属する種の分類群が大きく異なったりしており，それが環境の影響なのか，それとも食物や分類群の影響なのかはっきりしない。そこで，同じ分類群で，樹林性から湿地性まで幅広いホオジロ類の増減傾向をみた。

図 8 は，ホオジロ類の分布の変化を示したものである。樹林性のクロジから湿地性のオオジュリンまで並べ，1990 年代調査（1997–2002 年）からの記録地点数の変化を示すと，右下がりのグラフとなり，樹林性・疎林性のホオジロ類は増加傾向にあり，草原性・湿地性のホオジロ類は減少傾向にあることがわかり，全体で示された傾向と一致していた。近縁で食物も類似しているホオジロ類の中でもこうした傾向がみられたことは，こうした傾向は環境が起因している可能性が高いことを示唆している。

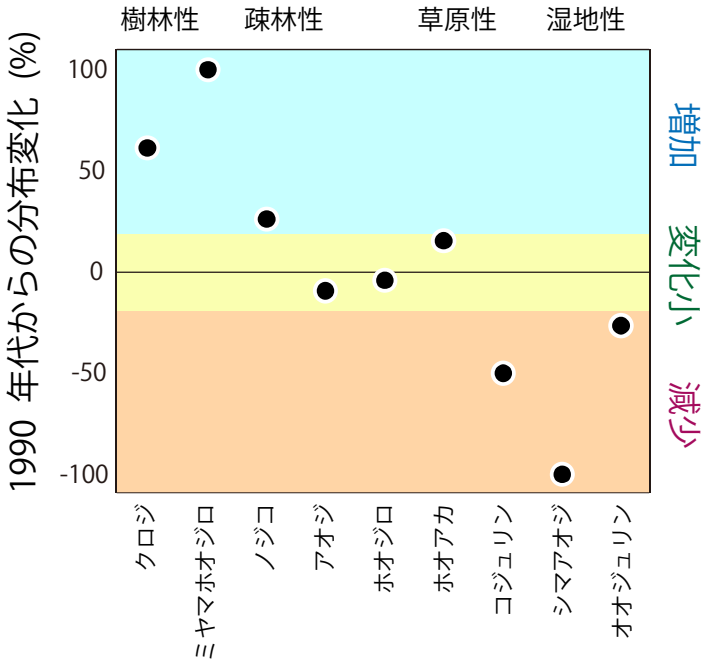


図 8.　ホオジロ類の分布の変化　変化は 1990 年代調査（1997–2002 年）から 2010 年代調査（2016–2021 年）にかけての記録地点数の変化。

3. レッドリストに着目した種の変化

(1) レッドリスト掲載種

環境省レッドリスト2020掲載種の1970年代調査からの確認メッシュ数の変化および，ほぼ同じコースを調査できた調査地点における記録地点数の変化を表 7 に示した。現地調査で十分な情報収集のできない海鳥類と亜種として掲載されている種は除いた。減少種が 5 種，増加種が 10 種，減少後に増加していた種が 4 種であった。減少種については，アカモズとコアジサシが急激に減少していた。増加種については，ヤイロチョウ，オジロワシ，クマゲラ，サンショウクイ，ミサゴの増加が顕著であった。ただ，クマゲラは北海道では増加していたが，本州の個体群は危機的な状況にあるため，注意が必要である。

表 7. 環境省レッドリスト2020掲載種のメッシュ数および現地調査のコース数の変化
赤: 減少，青: 増加，緑: 減少後増加。海鳥および亜種として掲載されている種を除く

種名	カテゴリ	メッシュ数の変化			現地調査の比較	
		1970年代	1990年代	2010年代	1990年代	2010年代
オオヨシゴイ	CR	6	0	0	0	0
カンムリワシ	CR	3	5	2	5	2
ヤンバルクイナ	CR	0	2	3	3	5
ノグチゲラ	CR	1	3	4	5	7
チゴモズ	CR	48	10	20	4	2
シマアオジ	CR	52	15	1	5	0
サンカノゴイ	EN	0	5	6	2	0
クマタカ	EN	80	123	139	32	31
チュウヒ	EN	13	26	37	12	11
ライチョウ	EN	7	3	8	2	3
オオクイナ	EN	0	2	5	2	3
キンバト	EN	3	5	11	7	14
ブッポウソウ	EN	73	41	60	10	8
ヤイロチョウ	EN	5	29	73	10	32
アカモズ	EN	99	21	11	15	3
アカコッコ	EN	0	10	11	4	3
オオセッカ	EN	6	6	14	4	6
ウチヤマセンニュウ	EN	5	12	18	3	1
ミゾゴイ	VU	28	21	70	4	7
ズグロミゾゴイ	VU	0	2	2	3	0
オジロワシ	VU	8	22	65	13	31
サシバ	VU	371	295	296	173	126
ハヤブサ	VU	45	100	160	30	41
ウズラ	VU	46	5	13	0	0
タンチョウ	VU	13	24	32	9	21
タマシギ	VU	79	42	49	1	1
シロチドリ	VU	119	70	93	22	9
アカアシシギ	VU	2	3	1	3	1
アマミヤマシギ	VU	1	2	6	1	0
セイタカシギ	VU	6	8	12	2	5
ツバメチドリ	VU	3	8	10	2	4
コアジサシ	VU	99	89	70	59	15
クマゲラ	VU	48	53	102	36	60
サンショウクイ	VU	330	230	536	190	478
アカヒゲ	VU	11	18	19	20	20
イイジマムシクイ	VU	0	9	10	4	3
コジュリン	VU	11	13	12	8	4
ヨシゴイ	NT	62	49	58	8	4
チュウサギ	NT	66	101	111	95	73
ミサゴ	NT	64	150	252	92	132
ハチクマ	NT	57	108	168	49	33
オオタカ	NT	57	192	226	59	53
ハイタカ	NT	79	86	75	48	19
ヒクイナ	NT	159	50	123	19	29
オオジシギ	NT	178	180	190	155	137
カラスバト	NT	17	37	59	25	22
ヨタカ	NT	290	127	208	19	43
マキノセンニュウ	NT	32	25	25	13	13
ノジコ	NT	96	116	143	78	97
オシドリ	DD	80	134	180	58	76
エゾライチョウ	DD	69	49	65	25	30
ケリ	DD	60	93	130	57	48

(2) レッドリスト非掲載種

環境省レッドリスト 2020 非掲載種のうち，現地調査での記録地点数の減少率の高い種を表 8 に示した。これらの種について詳細を以下に述べる。なお，メボソムシクイも減少の大きい種に含まれていたが，過年度調査ではメボソムシクイとされていた種が分類体系の変化に伴い，メボソムシクイ，オオムシクイ，コムシクイに分割されたこと，過去の記録には渡りの途中の記録も多く含まれていると考えられたことから，増減の判断が難しく，ここには含めなかった。

表 8. 環境省レッドリスト2020非掲載種で減少率の大きかった種の現地調査および過去からのメッシュ数の変化

	現地調査の地点数			現地調査の総個体数		メッシュ数の変化		
種名	1990年代	2010年代	減少率*	1990年代	2010年代	1970年代	1990年代	2010年代
アマサギ	117	38	33.8	3,591	239	83	125	71
コサギ	239	93	30.5	3,488	510	189	219	155
ゴイサギ	236	93	30.3	6,197	738	196	250	180
ササゴイ	45	20	27.8	102	35	92	88	77
バン	87	42	25.9	202	84	211	182	173
ハリオアマツバメ	46	23	25.0	169	78	129	44	43
オナガ	68	35	24.3	342	99	162	102	108
アマツバメ	145	84	21.0	2,668	1,429	120	106	110
コヨシキリ	112	65	21.0	935	640	163	154	140
ビンズイ	168	99	20.5	568	316	198	202	150
ヤマセミ	82	51	18.9	129	69	236	172	138

＊10年間の減少率を計算

・アマサギ，コサギ，ゴイサギ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに大きく減少していた。これらのサギ類は集団繁殖地をつくって繁殖する種のため，面的に広く分布しているというよりは，局所的に多くの個体が分布するという分布形態をしている。そのため，集団繁殖地の位置の変化が調査結果に大きく影響し，実際には減少していない場合でも，記録地点数，総個体数は減少傾向を示す可能性がある。本調査は調査地点数が多いため，そうした影響は相殺できていると考えられるが，データの偏りが含まれている可能性があることについては注意が必要である。そこで，サギ類の集団繁殖地における個体数の変化をみると，最大の繁殖域の 1 つである茨城県の集団繁殖地では，アマサギとコサギは 2002 年から 2011 年にかけて減少がつづいていた(Mashiko & Toquenaga 2013)。したがって，これら 2 種は近年，大きく個体数が減少していると結論付けてよいものと考える。ゴイサギについては，茨城県では個体数の増減の明確な傾向はみられなかった。

ただし，いずれの種も 1970 年代調査から 1990 年代調査にかけて記録メッシュ数は増加しており，その後減少に転じたと考えられる。

・ササゴイ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに大きく減少していた。ほかのサギ類と比べると，大規模な集団繁殖地はつくらないため，集団繁殖地の位置が，記録地点数，総個体数の増減傾向に与える影響は小さいと考えられる。記録メッシュ数も，1970 年代調査以降，継続して減少しており，一

貫して減少していると考えられる。

・ハリオアマツバメ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに大きく減少していた。地域でみると，関東以西では 1990 年代調査に記録された 7 地点全てでみられなくなっており，全国的に減少しているが，特に，分布の南側では大きく減少していると考えられる。記録メッシュ数も 1970 年代調査から継続して減少しており，特に 1970 年代調査から 1990 年代調査にかけて大きく減少していた。

・バン

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに大きく減少していた。南西諸島を含め全国的に分布しており，地域でみると，東北地方と中四国を除けば全国的に減少していた。記録メッシュ数も 1970 年代調査以降，一貫して減少していた。

・オナガ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに大きく減少していた。記録メッシュ数も 1970 年代調査以降，減少しているが，1990 年代調査と2010 年代調査は変わらなかった。これは，主要な生息地である関東周辺で減少しており，それ以外の地域では減少していないためと考えられる（図 9）。つまり，減少はしているが，メッシュ単位で分布が変化するほどではない可能性が考えられる。

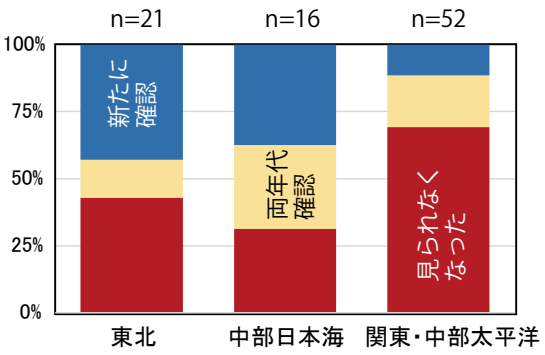


図 9. オナガの分布および個体数変化の地域的な違い

オナガの分布の減少傾向は，本調査だけではなく，東京都において本調査と同様の方法で実施された 1km メッシュ単位でのオナガの分布調査でもみられており（植田・佐藤 2019），モニタリングサイト 1000 里地調査（環境省生物多様性センター 2019）でも報告されている。

・アマツバメ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに減少していた。北海道や東北地方の記録数が多いものの，南西諸島まで分布しており，地域的には中国地方を除けばどの地域でも減少していた。記録メッシュ数も 1970 年代調査以降，減少していたが，1990 年代調査から 2010 年代調査にかけては，あまり変化はなかった。

・コヨシキリ

1990 年代調査と比べ，記録地点数，総個体数ともに減少していた。記録メッシュ数も 1970 年代調査以降，継続して減少していた。本種は，モニタリングサイト 1000 森林・草原（陸生鳥類）調査においても個体数を記録しているため，本調査から得た分布の変化とモニタリングサイト 1000 森林・草原（陸生鳥類）調査から得た個体数の変化について，地域別に集計してまとめた。その結果はいずれも，南ほど減少度合が大きく，分布の南端から減少が進んでいるものと考えられた（図 10）。

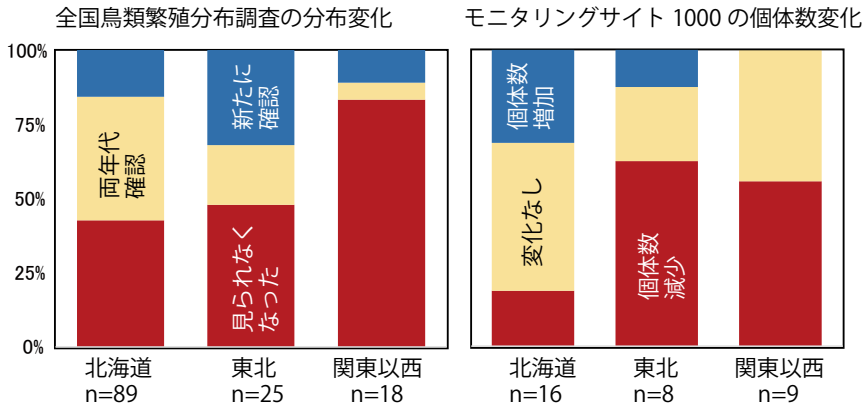


図 10.　コヨシキリの分布および個体数変化の地域的な違い。

・ビンズイ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに減少していた。また，記録メッシュ数も 1970 年代と 1990 年代は変わらなかった，2010 年代にかけて大きく減少した。地域的には，どの地域も減少傾向にあったが，1990 年代調査と 2010 年代調査の垂直分布をみてみると，西日本の標高の低い場所では，ほとんどみられなくなっていた。

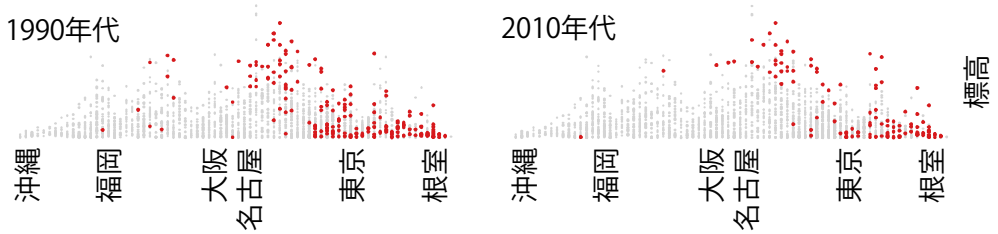


図 11.　ビンズイの垂直分布の変化。横軸が経度，縦軸が標高。灰色が調査地の分布，赤がビンズイの確認された場所の分布。

・ヤマセミ

1990 年代調査と比べると，記録地点数，総個体数ともに減少していた。また，記録メッシュ数も 1970 年代調査以降，継続して減少していた。地域的には，北海道や東北地方ではあまり減少していないが，それ以外の地域では減少傾向にあった。

4. 繁殖分布の緯度方向，標高方向の変化傾向

アオジは，分布が徐々に北上していると考えられた（図 12）。アオジは日本では，北日本を中心に繁殖する種だが，本州中部以西でも標高の高い場所では繁殖しており，そうした場所での分布が縮小していた一方で，ロシアでは分布が北上し，個体数も増えており（A Antonov，P Ktitolov 私信），分布が北上していることが考えられた。また，ビンズイは，西日本や低標高部分で分布が縮小していた（図 11）。

こうした変化には，気候の影響が考えられるが，繁殖期の分布変化に気候が及ぼす影響は，積雪や凍結によってその場所が利用できなくなるような直接的な影響が現れる冬期と違い，その関係性はわかりにくい。長期的に少しずつ変化する気候変動等により，生息地の状況が短期的に大きく変わるとは考えにくいからである。しかし，気候変動により，春に暖かくなる時期が早くなるなどした場合，鳥が繁殖するタイミングと食物となる昆虫の発生時期がずれ，食物不足による繁殖成績の低下を通して個体数が減少する可能性（Both et al. 2006）や，夏鳥と留鳥の繁殖時期の重なりが大きくなり，競争が激しくなる可能性（Ahol et al 2007）などの間接的な影響が示唆されている。こうした影響は，時間をかけて徐々に表れてくると考えられるため，長期的な調査が必要である。

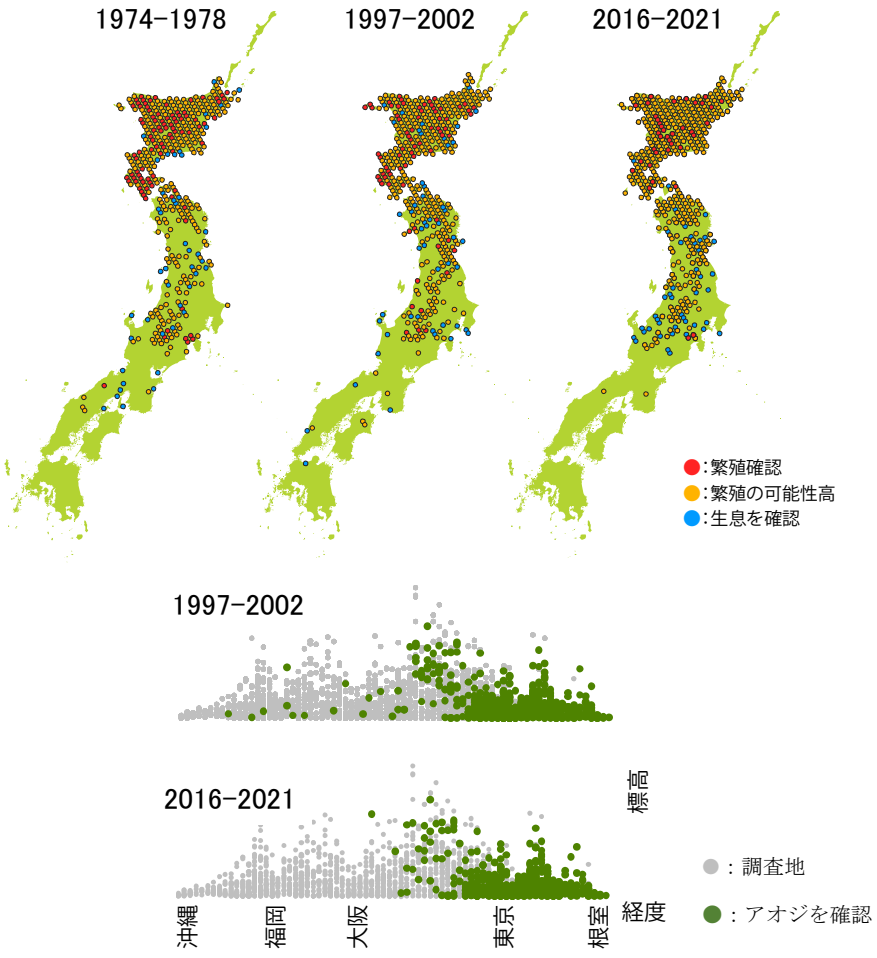


図 12.　アオジの分布の水平分布（上），垂直分布（下）の変化。

これまでに公開された成果およびデータの利用

今回の調査に基づいた種々の成果はニュースレターや年次報告，YouTube 報告，雑誌記事としてまとめられている。それらは以下のホームページより閲覧あるいはリストを見ることができる。

https://www.bird-atlas.jp/pub.html

図 13.　これまでに発行された年次報告

これから進められる詳細な解析により，さらに多くのことが明らかになると思われ，それらの成果についても逐次，上記ホームページに掲載していく予定である。

また，すでに東京都のレッドリストの改定に本調査のデータが使われたが，今後も様々な保全施策に提供していき，それらの成果もホームページで公開していく予定である。

保全や研究，普及啓発等に本データを利用することができる。利用したい場合は本報告に掲載された 20km メッシュのデータについては，環境省のいきものログで公開されており，だれでもダウンロードすることができる。

また，現地調査のデータなどより詳細なデータを利用したい場合は，申請することで利用することができる。希望される方は以下のデータ公開論文をご覧の上，申請いただきたい。

植田睦之・植村慎吾・葉山政治・荒　哲平・高川晋一・川路則友・梶田学・仲村昇・田畑早紀・内山優奈（2021）全国鳥類繁殖分布調査で収集された 20km メッシュの鳥類の繁殖分布のデータ. Bird Research 17: R5–R9.　https://doi.org/10.11211/birdresearch.17.R5

引用文献

Ahol MP, Laaksonen T, Eeva T & Lehikoinen E (2007) Climate change can alter competitive relationships between resident and migratory birds. J Animal Ecology 76: 1045–1052.

天野一葉 (2008) 生態図鑑 ソウシチョウ. バードリサーチニュース 5(8): 2–3.

Azumi S, Watari Y, Oka N & Miyashita T (2021) Seasonal and spatial shifts in feral cat predation on native seabirds vs. non-native rats on Mikura Island, Japan. Mammal Research 66: 75–82.

Both C, Bouwhuis S, Lessells CM & Visser ME (2006) Climate change and population declines in a long-distance migratory bird. Nature 441: 81–82.

British Trust for Ornithology (2007) Creating fields of plenty. BTO News (271): 14–15.

Brooke M (2004) Albatrosses and petrels across the world. Oxford University Press.

Deguchi T, Suryan RM, Ozaki K, Jacobs JF, Sato F, Nakamura N & Balogh GR (2014) Early Successes of Translocation and Hand-Rearing of Endangered Albatrosses for Species Conservation and Island Restoration. Oryx 48: 195–203.

Del Hoyo, Eliott A & Sargatal J eds (1992) Handbook of the Birds of the World Volume 1. Lynx Edicions, Barcelona.

Del Hoyo, Eliott A & Sargatal J eds (1994) Handbook of the Birds of the World Volume 2. Lynx Edicions, Barcelona.

Del Hoyo, Eliott A & Sargatal J eds (1996) Handbook of the Birds of the World Volume 3. Lynx Edicions, Barcelona.

Del Hoyo, Eliott A & Sargatal J eds (1997) Handbook of the Birds of the World Volume 4. Lynx Edicions, Barcelona.

Donald PF (2004) The Skylark. T & AD Poyser, Long.

遠藤公男 (1994) 夏鳥たちの歌は, 今. 三省堂, 東京.

榎本佳樹 (1941) 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部. 大阪.

藤井幹 (2011) 生態図鑑 ホンセイインコ. バードリサーチニュース 8(6): 4–5.

藤岡正博 (2006) 生態図鑑 アマサギ. バードリサーチニュース 3(4): 4–5.

福田道雄・成末雅恵・加藤七枝 (2002) 日本におけるカワウの生息状況の変遷. 日本鳥学会誌 51: 4–11.

福田佳弘 (2010) ケイマフリ. バードリサーチニュース 7(7): 4–5.

長谷部真 (2015) ウミガラス. バードリサーチニュース 2015 年 7 月: 2.

Hallmann C, Foppen R, van Turnhout CAM, de Kroon H & Jongejans E (2014) Declines in insectivorous birds are associated with high neonicotinoid concentrations. Nature 511: 341–343.

浜地歩・植村慎吾・仲地邦博・高木昌興 (2017) 宮古諸島におけるカッコウ科鳥類 2 種の観察記録. Bird Research 13: S27–S33.

浜口寛・石川正道・小西恭子・永井敏和・大鹿裕幸・川上和人 (2014) 愛知県西三河地域におけるミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の生息環境モデル. 日本鳥学会誌 63: 33–41.

橋本啓史 (2013) 生態図鑑 オオバン. バードリサーチニュース 10(2): 6–7.

原星一 (2016) 生態図鑑 アカモズ. バードリサーチニュース 2016 年 5 月: 1.

Higuchi H, Shiu H, Nakamura H, Uematsu A, Kuno K, Saeki M, Hotta M, Tokita K, Moriya E, Morishita E, Tamura M (2005) Migration of Honey-buzzards *Pernis apivorus* based on satellite tracking. Ornithological Science 4: 109–115.

Hino T (2000) Bird community and vegetation structure in a forest with a high density of Sika Deer. Japanese Journal of Ornithology 48: 197–204.

平野敏明 (2018) 渡良瀬遊水地における繁殖期のサンカノゴイ雄の減少. Bird Research 14: A13–A22.

石田健 (2010) ルリカケス. バードリサーチニュース 7(4):4–5.

石田健 (2015) 奄美大島の侵略的外来種マングースの防除と鳥類の保護. バードリサーチニュース 2015 年 9 月: 1.

Kamp et al. (2015) Global population collapse in a superabundant migratory bird and illegal trapping in China. Conserv Biol 29(6): 1684–1694.

環境省 (2004) 特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編). 日本野鳥の会, 東京.

環境省自然環境局生物多様性センター (2004) 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. http://www.biodic.go.jp/reports2/6th/6_bird/6_bird.pdf

環境省自然環境局生物多様性センター (2019) 重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト 1000) 里地調査 2005–2017 年度とりまとめ報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田市.

環境省自然環境局野生生物課 (2012) 猛禽類保護の進め方(改訂版). 環境省, 東京.

Kasahara S et al. (2020) Rice fields along the East Asian–Australasian flyway are important habitats for an inland wader's migration. Sci Rep 10: 4118.

笠原里恵・加藤和弘 (2007) ヤマセミ *Ceryle lugubris* の育雛に釣り人の存在が与える影響. 日本鳥学会誌 56: 51–57.

Katayama N, Odaya Y, Amano T & Yoshida H (2020) Spatial and temporal associations between fallow fields and Greater Painted Snipe density in Japanese rice paddy landscapes. Agriculture, Ecosystems & Environ-ment 295: 106892.
川上和人 (2019) 小笠原諸島における撹乱の歴史と外来生物が鳥類に与える影響. 日本鳥学会誌 68: 237-262.
川上和人・鈴木創・堀越和夫 (2018) 南硫黄島におけるアカアシカツオドリ *Sula sula* 集団営巣の国内初記録. 日本鳥学会誌 67: 249-252.
川辺百樹 (1994) 糠平温泉での繁殖記録. 野鳥(575): 11.
清棲幸保 (1965) 日本鳥類大図鑑 増補改訂版 I, II, III. 講談社, 東京.
Koike S & Higuchi H (2002) Long-term trends in the egg-laying date and clutch size of Red-cheeked Starlings *Sturnia philippensis*. Ibis 144: 150-152.
国立環境研究所 (online) 侵入生物データベース. https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/toc2_birds.html
小峯昇 (2016) 生態図鑑 シラコバト. バードリサーチニュース 2016 年 11 月: 3.
神山和夫 (2017) ホシハジロ. バードリサーチニュース 2017 年 2 月: 4.
神山和夫 (2019) ハジロ類の潜水ガモの減少. バードリサーチニュース 2019 年 10 月: 2.
越山洋三・伊関文隆・先崎啓究・渡辺靖夫 (2020) フィールドガイド日本の猛禽類 vol. 5 カタグロトビ. フィールドデータ, 赤磐市.
黒沢令子・堀本富宏 (2015) 北海道胆振地方におけるカササギの分布の変遷. 山階鳥類学雑誌 46: 83-88.
Lane JS & Fujioka M (1998) The impact of changes in irrigation practiceson the distributionof foraging egrets and herons (Ardeidae) in the rice fields of central Japan. Biological Conservation 83: 221-230.
真木広造・大西敏一・五百澤日丸 (2014) 決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京.
Mashiko M & Toquenaga (2013) Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail 29: 71-77.
Mikami K (2016) Morphometric variation in the Pericrocotus minivets of northeast Asia. Ornithological Science 15: 23-28.
三上かつら・植田睦之 (2011) 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. Bird Research 7: A33-A44.
三上修 (2009) 日本におけるスズメの個体数減少の実態. 日本鳥学会誌 58: 161-170.
三上修 (2012) 仏沼干拓地におけるオオセッカの繁殖期環境選択: 植生の季節変化にともなう変化. 山階鳥類学雑誌 43: 153-167.
水田拓 (2015) 生態図鑑 トラツグミ. バードリサーチニュース 2015 年 10 月: 4
水谷晃・仲地邦博・河野裕美 (2019) 南西諸島におけるヒメクロアジサシ *Anous minutus* の繁殖初記録. 日本鳥学会誌 68: 375-378.
Monk JF (1963) The past and present status of the Wryneck in the British Isles. Bird Study 10: 112-132.
長嶺隆 (2003) ヤンバルクイナを守る獣医師の取り組み. 日本獣医師会雑誌 56: 295-299.
成末雅恵 (1992) 埼玉県におけるサギ類の集団繁殖地の変遷. Strix 11: 189-209.
中濱翔太 (2013) 生態図鑑 カンムリカイツブリ. バードリサーチニュース 10(7): 2-3.
中村一恵 (1987) シロハラクイナの日本列島への分布拡大と定着. 神奈川県立博物館研究報告 自然科学 (17): 1-11
Newton I (1986) The Sparrowhawk. T & AD Poyser, London.
Newton I (1998) Population Limitation in Birds. Academic Press, San Diego & London.
日本野鳥の会 (online) オオジシギ保護調査プロジェクト.
https://www.wbsj.org/activity/conservation/endangered-species/oojishigi-project/?gclid=CjwKCAjw9MuCBhBUEiwAbDZ-7rQwDn4JkBp5-MjR-KB3_GJ603Tf9SeeD0x9oJGn62XDTiN0gZnlQhoCFlsQAvD_BwE
日本野鳥の会東京支部 (2015) カワセミ 一時は姿を消した東京のカワセミ. ユリカモメ (719): 16-18.
野中純・植田睦之・東淳樹・大畑孝二 (2012) アンケート調査によるサシバの生息状況(2005-2007). Strix 28: 25-36.
小田谷嘉弥 (2014) 生態図鑑 ヤマシギ. バードリサーチニュース 11(11): 4-5.
沖縄県 (2020) 沖縄県外来種対策行動計画に基づくインドクジャク 防除計画. 沖縄県, 那覇.
大倉史雄 (2017) 北海道におけるオオヨシゴイの確実な初繁殖記録. 日本鳥類標識協会誌 29: 47-51.
Saitoh T, Alström P, Nishiumi I, Shigeta Y, Williams D, Olsson U & Ueda K (2010) Old divergences in a boreal bird supports long-term survival through the Ice Ages. BMC Evolutionary Biology 10: 35.
Saitoh T, Kawakami K, Red'kin YA, Nishiumi I, Kim C & Kryukov AP (2020) Cryptic Speciation of the Oriental Greenfinch Chloris sinica on Oceanic Islands. Zoological Science 37: 280-294.
佐野清貴 (2012) 生態図鑑 カンムリワシ. バードリサーチニュース 9(2): 4-5.
佐藤重穂・濱田哲暁・谷岡仁 (2018) 四国西部におけるサンジャクの野生化. Bird Research 14: S1-S5.
佐原雄二 (2005) 生態図鑑 カイツブリ. バードリサーチニュース 2(6): 4-5.

佐原雄二 (2013) 生態図鑑 ヨシゴイ. バードリサーチニュース 10(1): 4-5.
Senzaki M, Kitazawa M, Sadakuni T & Takahashi M (2021) Breeding evidence of the vulnerable Swinhoe's Rail (*Coturnicops exquisitus*) in Japan. Wilson Journal of Ornithology 132: 711-717.
Senzaki M, Terui A, Tomita N, Sato F, Fukuda Y, Kataoka Y & Watanuki Y (2019) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International 30: 434-446.
嶋田哲郎・進東健太郎・高橋清孝・Bowman Aaron (2005) オオクチバス急増にともなう魚類群集の変化が水鳥群集に与えた影響. Strix 23: 39-50.
嶋田哲郎・藤本泰文 (2009) オオクチバスによる小鳥の捕食. Bird Research 5: S7-S9.
高木昌興・樋口広芳 (1992) 伊豆諸島三宅島におけるアカコッコ *Turdus celaenops* の環境選好とイタチ放獣の影響. Strix 11:47-57.
高橋雅雄・蛯名純一・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・高田哲良・堀越雅晴・大江千尋・叶内拓哉 (2018) 関東地方におけるシマクイナ *Coturnicops exquisitus* の冬季の生息状況. 日本鳥学会誌 67: 109-116.
田口翔太・島田湧志・神尾三徳・大塚彩加・元永康誠・小林万里 (2020) 国内初のコミミズク繁殖確認. 東京農大農学集報 65(3): 83-86.
Takahashi M & Ohkawara K (2007) Breeding behavior and reproductive success of Grey-headed Lapwing *Vanellus vinereus* on farmland in central Japan. Ornithol Sci 6: 1-9.
高山裕子 (2020) 北海道旭川の春の渡り期におけるオオムシクイの通過時期. Bird Research 16: S7-S9
田中啓太 (2011) 生態図鑑 ジュウイチ. バードリサーチニュース 8(5): 4-5.
立石淑恵 (2017) チゴハヤブサの 営 巣数減少の 要因はなにか？ バードリサーチ研究支援プロジェクト 2017 報告. https://www.bird-research.jp/1_event/aid/repo/BR-aid_report2017open.pdf
鳥居憲親・江崎保男 (2014) イソヒヨドリのハビタットとその空間構造―内陸都市への進出―. 山階鳥類学雑誌 46: 15-24.
内田博 (1992) 河原にすむイカルチドリの惨状. Birder6(11):50-56.
内田博 (2017) 埼玉県東松山市周辺でのコサギ *Egretta garzetta* の減少. 日本鳥学会誌 66: 111-122.
Ueda K (1984) Successive nest building and polygyny of Fan-tailed Warbalers *Cisticola juncidis*. Ibis 126: 221-229.
上野吉雄・東常哲也・山本裕・日比野政彦・飯田知彦 (1993) 西中国山地におけるシロハラ *Turdus pallidus* の繁殖. 日本鳥学会誌 41: 17-19.
植田睦之 (2013) ツミの分布と環境利用の変遷.樋口広芳(編)日本のタカ学. 東京大学出版会, 東京.
植田睦之 (2019) セッカとホオジロの分布変化. バードリサーチニュース 2019 年 2 月: 2.
植田睦之 (2020) 緑地の孤立化が影響？ 減少続く東京のコジュケイ. バードリサーチニュース 2020 年 4 月: 3.
Ueta M (2020) Avifauna at Ooyamazawa: Decline of Birds that Forage in Bushy Understories. Sakio H (ed) Long-term Ecosystem Changes in Riparian Forests. Springer Ecological Research Monograph.
植田睦之 (2021)「鳥獣関係統計」で収集された全国の傷病鳥の保護数のデータ. Bird Research 17: R1-R.
植田睦之・葉山政治・串田卓弥 (2019) ニホンジカの下層植生摂食の影響が宿主を通して托卵鳥へ. Bird Research 15: S11-S16.
植田睦之・松野葉月・黒沢令子 (2005) 東京におけるヒバリの急激な減少とその原因. Bird Research 1: A1-A8.
植田睦之・佐藤望 (2017) 増加するホンセイインコやガビチョウ。スズメも都心部で増加 ～東京都鳥類繁殖分布調査 スタート～. バードリサーチニュース 2017 年 6 月: 1.
植田睦之・佐藤望 (2019) 繁殖分布調査をレッドリストに活かす ～東京都の事例～. バードリサーチニュース 2019 年 1 月: 2.
植田睦之・佐藤望 (2021) 東京都鳥類繁殖分布調査報告書 2016-2021. バードリサーチ, 府中.
渡辺義昭・時田賢一 (2003) 硫黄島におけるヒメクロアジサシ *Anous minutus* の繁殖初確認について. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 11: 35-45.
山路公紀・林正敏 (2018) 八ヶ岳とその周辺におけるジョウビタキの繁殖状況と環境の特徴. Bird Research 14: A23-A31.
Yamamoto T, Kohno H, Mizutani A, Yoda K, Matsumoto S, Kawabe R, Watanabe S, Oka N, Sato K, Yamamoto M, Sugawa H, Karino K, Shiomi K, Yonehara Y & Takahashi A (2016) Geographical variation in body size of a pelagic seabird, the streaked shearwater *Calonectris leucomelas*. J Biogeography 43: 801-808.
山階鳥類研究所 (2014) 金網と巣箱で海鳥を守る ～岩手県宮古市日出島のクロコシジロウミツバメの保全～. http://www.yamashina.or.jp/hp/kenkyu_chosa/kurokoshijiroumitsubame.html
吉岡俊朗・蛯名純一・高橋雅雄・宮彰男・三戸貞夫・関下斉 (2017) 青森県東部におけるオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の本州初の繁殖例. 日本鳥学会誌 66: 187-190.

調査協力者

調査にあたっては，2,106 人（団体を含む）の方の協力を得た。これらの参加者の協力なしには調査は実施することはできなかった。以下にお名前を列記して，お礼に代えさせていただく（敬称略，漢字コード順）

Renevander Wal，アカコッコ館，マリアノ・クルス，リトルターン・プロジェクト，阿河眞人，阿部若葉，阿部峻大，阿部仁美，阿部清典，阿部誠一，阿部則之，阿部智，阿部愼太郎，渥美美保，安ヶ平奈緒美，安井睦美，安食一歩，安増直美，安田耕治，安田佐登子，安田直美，安島博，安藤温子，安藤宣朗，安藤都，伊関文隆，伊石昌弘，伊藤綾子，伊藤恭宣，伊藤恭博，伊藤康史，伊藤浩，伊藤浩志，伊藤滋，伊藤信明，伊藤晴康，伊藤多美子，伊藤百合香，伊林早苗，伊澤泰彦，依田昌晃，衣川直美，衣斐継一，井ノ口博司，井奥恵三，井戸浩之，井坂宏，井山明，井山有三，井手口和満，井上かよ子，井上遠，井上幹男，井上喜重郎，井上賢三郎，井上志香，井上宗士，井上勝巳，井上伸之，井上仁美，井上太志，井上拓海，井田義裕，井田明人，井灘志げ子，井守美穂，磯海弘子，磯貝和秀，磯崎進，磯崎静子，磯部浩，一色安義，一町田智也，稲垣章子，稲田菊雄，稲田浩三，稲葉一将，宇井文代，宇野竜司，羽地邦雄，羽地京子，羽村俊夫，羽山聡美，臼井英夫，臼田正，浦野秀幸，瓜生篤，雲野明，影山克己，影山秀雄，永井壯茂，永井洸暉，永山孝明，永村春義，永田千恵子，永野建次郎，益子美由希，益子芳江，越後弘，越川重治，越膳淳，榎本博子，園村茂夫，園田正斉，園田美保子，延近吉富，延原有紀，延江勝彦，猿子正彦，遠藤英之，遠藤剛，遠藤菜緒子，遠藤禎人，遠藤典子，遠藤瞳，遠藤美浩，遠藤理，塩月絵梨香，塩見拓栄，塩川桐子，塩嶋保二，奥山正次，奥川奈津子，奥村次夫，奥村由美子，奥村和男，奥津竹彦，奥津百合子，奥田純子，奥畑充幸，奥本健吾，奥野俊博，奥野美帆，押元誠，横佐古智紀，横山昌太郎，横山美津子，横山陽子，横大路淳，岡井義明，岡嘉弘，岡垣大志，岡健司，岡憲司，岡崎一也，岡崎雅幸，岡崎誠，岡山嘉宏，岡村拓輝，岡村和子，岡田愛，岡田章恵，岡田成弘，岡田登美男，岡田美那，岡田里江子，岡田浩郎，岡八智子，岡部恵子，岡部和比古，岡望，岡本寛志，岡本健二，岡本浩太朗，岡本寿信，岡本俊，岡本真帆，岡本佶，岡野直美，岡﨑雅幸，沖浩志，沖田絵麻，沖田公佳，沖優佳，荻原千恵美，荻野正明，荻野未來，下原孝美，下村礼介，下田康生，下田昭，下土居知子，下平宏，加島陸子，加藤ななえ，加藤益子，加藤岸男，加藤貴大，加藤義則，加藤暁子，加藤敬一，加藤幸洋，加藤治男，加藤俊哉，加藤俊之，加藤匠，加藤晴弘，加藤正敏，加藤太一，加藤智子，加藤貞和，加藤美奈子，加藤峯男，加藤芳隆，加藤利明，加藤律子，加藤倶彦，加納璃奈，河合廣，河上智也，河村和洋，河端正太郎，河地辰彦，河藤昌子，河内直子，河辺典子，河野郁央，河野恭，河野公子，河野通浩，河野美樹，河野文子，花輪万智，迦統美陽子，会沢美奈子，海老原公子，海老原信一，皆吉悦夫，芥川元，開作秀敏，外山雅大，柿本真樹子，角田真穂，笠井誠吾，笠原里恵，笠川多佳子，樫尾悦子，梶田あまね，葛西義夫，蒲原留美，鎌田幸子，茅野百合子，寒川洸太，巻幡幸成，関下斉，関光洋，関口知彦，関口裕，関口律子，関口佳子，関高史，関根一広，関上秀雄，関伸一，館懌二，丸山健司，丸山真理子，丸山隆，岸岡智也，岸久司，岸本年郎，岸野聡，岩井滿夫，岩元さよ子，岩元信孝，岩崎みゆき，岩崎加奈子，岩切久，岩切康二，岩倉真未，岩代綾太，岩田悟，岩淵さえ子，岩本愛夢，岩本孝，岩本昌憲，岩本富雄，岩本文子，岩澤光子，亀山弘貴，亀田ひとみ，菊地弘保，菊地智久，菊地悌久，菊池菊子，菊田雅晴，菊田清子，菊島正彦，吉井一仁，吉井啓亮，吉岡宏之，吉家奈保美，吉居清，吉原俊雄，吉原早苗，吉原努，吉崎幸一，吉川義弘，吉川明宏，吉村正則，吉村豊，吉沢雅宏，吉中康展，吉田みつ子，吉田貴子，吉田恵人，吉田宗史，吉田純，吉田茂夫，吉田亮，吉田良平，吉田和人，吉武蓮太郎，吉木務，吉野智生，吉郇隆資，久下直哉，久高将洋，久住勝司，久保賢一，久保清司，久保田広治，久保廣晃，久野雅代，久野公啓，久野敏己，久留島昭彦，宮越俊一，宮越和美，宮原明幸，宮崎朋子，宮崎良久，宮地要子，宮田聡，宮田國敬，宮島仁，宮浜誠，宮本誠一郎，宮本勇，宮林英子，宮林泰彦，牛込祐司，牛根奈々，牛山克巳，牛山武美，京谷和弘，橋越清一，橋元正彦，橋本清澄，橋本泰博，橋本智明，橋本了次，橋本和司，橋本實，玉置顕，玉田つかさ，玉田克巳，桐生一樹，近藤義孝，近藤敬一，近藤健一郎，近藤朱美，近藤梢馬，近藤慎一，近藤真澄，近藤多美子，近藤貞雄，金子はる子，金子雅幸，金子凱彦，金子俊彦，金子証，金子正，金子博子，金子博臣，金仁海，金沢正幸，金谷千賀子，金野やよい，金澤晋一，駒田峰子，隅谷修，串田卓弥，櫛田一夫，掘田美紀，窪田一仁，窪田茂，熊崎詔之，熊代直生，熊谷佳二，熊谷久美子，熊谷建一，熊谷佐枝子，熊谷潤，熊谷正弘，熊田那央，熊野神社探鳥会，隈部修，栗岡武史，栗山実，栗林菊夫，栗林美知子，栗林和子，桑原景子，桑原重吉，桑原和寿，桑森亮，桑田和典，刑部節，犬丸瑞枝，犬飼浩，見瀬浩子，元吉司，原口研治，原星一，原田正之，原田量介，原靖之，原裕之，古屋直子，古舘和幸，古口大雅，古山隆，古山諒，古川セツ，古川紀美子，古川賢一，古川浩二，古川靖晃，古谷孝，古田原真理，古田浩行，古田美奈子，古田和生，古木勇，戸川信吾，戸澤章，五十嵐亜由，五十嵐悟，五十嵐千穂，五十嵐勉，五百藏聡，五百藏由美子，後藤淳，後藤彰子，後藤二三，後藤博子，後藤靖，後藤勇，後藤由香，後藤裕子，後藤洋枝，御手洗望，鯉渕仁子，光吉潔，工義尚，工藤恵嗣，工藤正義，工藤文江，工藤芳郎，工藤和彦，広永輝彦，広瀬弘一，広瀬美香，広塚忠夫，広友詞子，弘津聖也，恒成愼一，江上実花，江口初男，江川浩之，江藤公俊，溝口文男，溝田浩美，甲村真理，甲斐谷俊，紅林重光，荒井悦子，荒井浩，荒映子，荒川さくら，荒川洋一，荒哲平，香西宏明，香川の野鳥を守る会，高岡奏多，高岡祐也，高岡和弘，高橋ひろみ，高橋ゆう，高橋嘉明，高橋喜久雄，高橋輝男，高橋健，高橋康太，高橋晃，高橋昇，高橋新一，高橋清志，高橋誠，高橋美保子，高橋邦年，高橋満子，高橋遼，高橋令子，高橋和也，高山俊春，高山裕子，高次智宏，高須英之，高倉博史，高津佳史，高塚大，高田馨里，高田大貴，高田年宏，高田陽，高畑晃，高美喜男，高文子，高木憲太郎，高木昌興，高木慎介，高木眞，高野佳子，高野信久，高野茂樹，高柳勝明，高柳和江，高梨敏子，高澤綾子，黒河理佳，黒水茂明，黒川康子，黒川章，黒沢信道，黒沢隆，黒沢令子，黒田弘章，黒田治男，黒田聖子，黒木道子，黒澤正明，黒澤優子，今井健二，今井光昌，今井正，今井創，今井智康，今井博樹，今兼四郎，今森達也，今村美由紀，今堀英明，今里順一郎，根岸隆一，根上ひさ子，根本幸子，根本由美子，佐久間仁，佐久川望，

佐原雄二，佐々嘉子，佐々木均，佐々木高寛，佐々木司，佐々木秀信，佐々木潤，佐々木伸宏，佐々木仁，佐々木朋子，佐々木麻耶，佐々木務，佐場野裕，佐川貴久，佐竹一秀，佐竹清夫，佐竹洋，佐藤ひろみ，佐藤亜州花，佐藤郁子，佐藤一博，佐藤華音，佐藤義則，佐藤健三，佐藤賢二，佐藤公生，佐藤幸子，佐藤司，佐藤七重，佐藤重穂，佐藤春幸，佐藤潤子，佐藤瑞奈，佐藤征男，佐藤征夫，佐藤正英，佐藤創一，佐藤大規，佐藤達夫，佐藤道子，佐藤道代，佐藤武，佐藤望，佐藤哲郎，佐藤満，佐藤明雄，佐藤悠子，佐藤由佳，佐藤裕子，佐藤理夫，佐藤和人，佐藤和明，佐藤暁樹，佐伯元子，佐伯紗栄子，佐伯彰光，佐武好美，佐野清貴，佐野誠一，佐野裕彦，斎藤京子，斎藤憲二，斎藤史之，斎藤寿幸，斎藤修，斎藤譲，斎藤力，細江崇，細山美代子，細沼航平，細谷千鶴子，坂井寛，坂井健，坂井三夫，坂口里美，坂倉輝子，坂田樹美，坂東英代，坂東誠，坂本孝晴，坂本哲理，坂野恭子，坂野晶，坂梨仁彦，阪口佑太，坂部和久，榊原貴之，桜井恵子，桜井浩，桜井千代子，桜庭一憲，笹間俊秋，笹原裕二，笹倉千江花，笹谷俊章，笹野義一，笹野聡美，三ツ井政夫，三ツ矢政夫，三井田進，三浦スミエ，三浦圭史，三浦憲悦，三浦隆，三間久豊，三原学，三戸貞夫，三好安恵，三好康恵，三好邦範，三枝景子，三上かつら，三上修，三曽田明，三村啓子，三宅通明，三宅武，三宅茂子，三宅和子，三谷栄治，三谷明子，三冨一裕，三木敏史，三輪晴英，三輪芳己，山下弘樹，山形達哉，山形博則，山口めぐみ，山口英芳，山口寛登，山口喜盛，山口孝，山口森音，山口誠，山口誠治，山口波子，山口洋，山口藍，山口力弘，山根昭，山根善雄，山根靖正，山根和親，山際康介，山崎久美子，山崎康一朗，山崎章弘，山崎誠，山崎多世子，山崎敏子，山崎歩，山崎法子，山村英人，山村勉，山村由美子，山地みのり，山中克子，山中旅人，山田孝一，山田紗彩佳，山田勝，山田勝巳，山田清，山田洋治郎，山田瑠美，山道真人，山本かおり，山本栄治，山本貴仁，山本紘司，山本寿美子，山本勝，山本拓実，山本敏夫，山本芳夫，山本裕，山本裕美，山本和紀，山路公紀，山鷲仁志，山澤健一，山﨑久美子，山﨑多世子，山﨑歩，山﨑法子，山﨑優佑，山﨑悠一，姉崎悟，市原晨太郎，市川昭，市川仁，市川洋子，市塚友香，志賀野千歳，志人克人，志村英雄，氏名不詳，糸数多寿子，糸嶺宏子，糸嶺篤人，寺沼豪，寺谷有香，寺島光雄，寺尾日那，寺本徹，寺本明広，時田賢一，鹿間信弘，宍戸沙桜里，室井秀久，篠原盛雄，篠原由紀子，篠崎芳夫，篠崎雄彦，篠塚武雄，篠﨑雄彦，柴坂鷹雄，柴田栄，柴田佳秀，柴田絵里，柴田正義，柴田敏夫，若林ちづる，若林ちづ子，若林秀男，若林秀雄，守屋照司，守屋年史，手井修三，手塚雅文，手塚樹理，手塚睦，手塚理一郎，手嶋洋子，酒井義弘，酒井敬治，酒井浩二，酒井淳一，酒井泰和，酒井博子，酒本みどり，酒本輝夫，宗像晶子，秋元玲子，秋山登，秋山勉，秋田宏幸，秋田滉介，舟山幸枝，舟山忠夫，住田代志也，住本徹，住友順子，住友福子，十一正雄，十亀茂樹，渋鍬啓，渋江奈緒美，重原美智子，重松圭三，重松尚紀，重松麻理子，重森洋子，重村みわ，重村勇作，祝原光雄，出口さおり，出口敦司，出口翔大，春田清美，春日井英樹，所崎聡，諸藤聡子，小河内麻衣，小海涼子，小笠原久美子，小笠原宏晃，小笠原稔，小関弥生，小宮山節夫，小駒洋子，小見山節夫，小原静，小高信彦，小坂里香，小山晶裕，小山信行，小山正人，小山卓郎，小山美佳，小山留美，小枝琢三，小室巧，小室智幸，小松恒，小松周一，小松祐太，小杉山晃一，小杉美樹，小西敢，小西幸宏，小西広視，小西浩司，小川綾 ，小川加代，小川潔，小川次郎，小川直樹，小川直亮，小川洋子，小川理，小泉金次，小泉俊江，小倉暁雄，小瀧賢作，小池一男，小池雅之，小池宏美，小池幸弘，小池幸雄，小池康司，小池重人，小池順子，小池正明，小池美香，小池美和，小田谷嘉弥，小島みずき，小島久佳，小島康弘，小嶋聡，小嶋明男，小嶋隆太郎，小峯昇，小堀脩男，小野安行，小野新子，小野沢満，小野島学，小野和加子，小柳まや，小柳恵，小柳守男，小柳優奈，小林しげる，小林みどり，小林めぐみ，小林雅裕，小林秀樹，小林成光，小林正人，小林繁樹，小林美博，小林茂樹，小林忠人，小澤建一，小澤秀勝，小柳守男，小柳静代，小又省二，庄山守，庄司俊朗，松永聡美，松岡幸恵，松岡幸江，松岡弘起，松岡和彦，松下一弘，松丸一郎，松宮祐秋，松宮裕秋，松原一男，松原始，松川由香，松村雅行，松村俊一，松村俊幸，松村茂生，松沢友紀，松田映子，松田久司，松田秀和，松田隆明，松島雅之，松尾昌祐，松平晶子，松本英子，松本経，松本康秀，松本昇也，松本晶子，松本祥子，松本真美，松本正喜，松本芳文，松本明，松本明男，松澤ゆう子，沼野正博，沼里和幸，上沖正欣，上関正子，上崎聡敏，上崎聰敏，上山義之，上出貴士，上西庸雄，上村耕一郎，上村左知子，上谷川則男，上田恵，上田恵介，上田健一，上田聡美，上田楓子，上田隆，上野あや，上野のりえ，上野吉雄，上野俊士郎，上野尚博，上野百合子，上野邦夫，上野友紀，城戸美智子，城所聡，城石一徹，植松永至，植松晃岳，植村慎吾，植田潤，植田睦之，織田歩，新井実保子，新井真，新井裕二，新屋修一，新橋拓也，新妻勉，新山英憲，新倉夏美，新谷幸嗣，新谷実，新田雄司，新田和夫，新堂雅彦，新名亨，森井浩樹，森永光直，森下英昭，森下英美子，森下巌，森口紗千子，森航大，森山賀代子，森山宣子，森初恵，森田衣久美，森田尚，森田清次，森田明義，森本嘉人，森本孝，森本章男，森茂晃，森由香，森眞，深井宣男，深水義弘，深水知子，深瀬徹，深沢敬，深谷治，深津恵太，深澤和基，真砂奈波，真鍋直嗣，神吉務，神原文，神山和夫，神森康之，神尾雄二，秦智秋，進士実穂，仁禮晃子，諏訪部幸子，須田桂子，須田由美，須藤キミ，須藤清子，水越文孝，水崎和美，水上健太，水村春香，水谷吉男，水野寛美，水野毅，水野哲男，水野桃，水野歩，嵩原建二，嵩畑晃，数沢淑子，杉浦康，杉浦真弓，杉歌帆，杉原隆子，杉山みどり，杉山好子，杉秀樹，杉奈緒子，杉本晏敏，菅原貴徳，菅原典子，菅原美奈子，菅原利喜男，菅原隆，菅谷勝芳，菅野康太，雀ヶ野孝，瀬口三樹弘，瀬崎千晶，成定真太郎，成末雅恵，成田英経，星野七奈，星野大剛，星野悠太，星野由美子，星野隆弘，正木伸二郎，清家久好，清原誠，清水貴史，清水伸彦，清水博之，清水敏弘，清水保子，清沢るり子，清野信行，清野節子，西宇亮，西永佳弘，西垣博充，西教生，西窪遥海，西原亜理沙，西出隆，西条自然学校，西川葵，西川清，西川光一，西川博幸，西村英一，西村健汰，西村公志，西村幸雄，西村朔，西村四郎，西村泉，西村文男，西村眞一，西田好恵，西藤正直，西尾喜量，西尾直美，西部亜紀子，西本奈央，西本由佳，西野正義，西澤彩香，青山輝久，青山夕貴子，青木一夫，青木秀武，青木則幸，青木美那海，青木雄司，青野悟，青栁隆，青栁良子，斉藤けい子，斉藤一清，斉藤昭，斉藤誠，析田一実，石井省三，石井隆，石井瞭，石下亜衣紗，石郷岡卓哉，石原浩一郎，石原渉，石原隆志，石戸谷芳子，石崎友紀子，石山義浩，石山健一，石城孝弘，石川義典，石川滋，石川真理子，石川芳美，石川邦夫，石川皓，石谷匠美，石塚貴久，石塚敬二郎，石塚始子，石田ハルゥ，石田愛子，石田健，石田裕一，石渡賢一，石部久，石本史子，石﨑友紀子，速水良一，赤城貴子，赤城真由美，折田一実，設楽健一，千村章彦，千代文也，千田幹太，千田典文，千葉晃，千葉博光，千葉舞，千葉勇人，千葉裕，千葉夕佳，千葉孝仁，千葉槇子，川井博，川原直嗣，川原佑菜，川原洋平，川股賢司，川口秀美，川口誠，川口大朗，川口哲男，川口悠太，川根有機，川崎佳子，川崎康弘，川崎実，川崎慎二，川崎里実，川上保，川瀬浩，川村研也，川村芳治，

川村靖，川沢祥三，川島賢治，川内桂子，川内博，川南勉，川畑房夫，川俣雄大，川又利彦，川路則友，川﨑正大，川﨑千代子，泉守，浅井さおり，浅井しおり，浅海友貴，浅原熙，浅川千佳夫，浅田晴男，浅野俊雄，浅野涼太，船橋功，船瀬茂信，前坂和子，前川ゆみ，前田ちえ，前田育夫，前田雅子，前田幹雄，前田潤一，前田尚子，前田伸一，前田篤史，前田美紗，前田芙紗，前田和浩，前田聰，前島雅子，前島健吾，前迫大也，前畑晃也，前澤昭彦，曽我茂樹，組頭五十夫，倉山穀蔵，倉持初子，倉千春，倉川典夫，早坂榛名，早坂泰夫，相原由美，相田直人，相澤明，相澤良子，増子礼子，増川勝二，増田浩司，増田裕，増本二巳一，蔵田康彦，村井孝臣，村井敏郎，村井勇介，村越知子，村山暁，村山力，村上義徳，村上賢治，村上正志，村中政文，村田愛子，村田希巳子，村田孝道，村田明美，村尾嘉彦，村尾雅宏，村尾史子，村本和之，村木てつ子，村濱史郎，多田英行，太田佳似，太田晶子，太田信行，太田達夫，太田峰夫，太田裕美子，太田和己，大井はるえ，大井智弘，大羽康利，大河原吉衛，大岩慶治，大岩憲治，大久保亜紀，大久保健治，大久保香苗，大久保信幸，大宮正太郎，大橋マミ子，大橋雅英，大橋譲治，大橋正明，大橋千菜美，大橋日出男，大隅梨央，大原庄史，大坂英樹，大坂純一，大阪純一，大崎隆義，大山里咲，大出水幹男，大沼隆夫，大城まり子，大城勝吉，大森栄子，大森美寿男，大森茂男，大瀬戸光明，大西永倫，大西五十二，大西順子，大西敏一，大西武，大石淳平，大倉亨太，大倉昌幸，大倉節子，大村洋一，大沢八州男，大谷吉次，大谷蘭，大谷力，大塚郁恵，大塚啓子，大塚真由，大塚之稔，大塚豊，大塚邦雄，大塚祐二，大塚利昭，大塚惠子，大槻佳生，大槻恒介，大槻浩，大庭弘毅，大田黒摩利，大島理惠，大嶋奈穂，大嶋裕子，大内晴，大畑孝二，大畠文雄，大平満，大木克行，大木繁夫，大門聖，大野喜久男，大野真澄，大野美香，大矢樹，大林恭子，大和一彦，大和瀬泰，大和政明，大嶽若緒，大澤八州男，鷹野綾，滝沢和彦，滝澤三郎，瀧川二士男，瀧本宏昭，沢島武徳，辰巳文吾，谷岡仁，谷岡隆，谷貝昌三，谷口秀樹，谷口真一，谷口陽香，谷川昭司，谷地森秀二，谷地森神楽，谷畑藤男，谷本洋子，丹羽敬子，丹羽康勝，丹下浩，丹彰子，丹野輝英，丹野弥生，端田賢二，池永祐二，池尻明美，池田寛美，池田憲治，池田志穂，池田俊典，池田小春，池田昇，池田昇平，池田千榮子，池田朝美，池野進，竹下将明，竹丸勝朗，竹原文子，竹重志織，竹重龍一，竹前朝子，竹中定雄，竹田憲正，竹田山原楽，竹内寛，竹内康作，竹内江利子，竹内時男，竹内邦彦，竹浪了，中井節二，中井和彦，中岡利恭，中岡利泰，中元市郎，中原ゆかり，中原聡，中根敏雄，中根未来，中根由香里，中山司，中山正則，中山誠司，中山和也，中西康，中西章，中西正和，中西榮子，中川守，中川宗孝，中川洋，中村さやか，中村郁雄，中村栄，中村敬子，中村健三，中村幸子，中村剛，中村司，中村順子，中村昌義，中村照男，中村進，中村仁，中村正男，中村聡，中村多喜子，中村智子，中村忠昌，中村忠夫，中村豊，中村弥彦，中村洋子，中村陽子，中村隆，中村和世，中辻摩耶，中田達哉，中島慶二，中島健志，中島賢一郎，中島浩之，中島拓，中島拓人，中島直，中島遊鳥，中嶋順一，中南秀樹，中尾久人，中尾禎志，中北国人，中本聰，中野晃生，中野隆一，中里準治，中林光生，仲山洋一，仲真晶子，仲西康，仲村昇，仲地邦博，仲町康正，仲田立，朝倉俊治，長慶一郎，長船裕紀，長沢新二，長谷川勝徳，長谷川信美，長谷川博之，長谷川美貴子，長谷部真，長谷部和宏，長塚美代子，長田佳礼，長縄なるみ，長野康之，鳥居賀与，鳥居憲親，鳥飼久裕，鳥田陽子，直井一希，直井清正，直井陽子，陳有，津久井克美，津山紗央莉，津森宏，津村幸子，津村真由美，椎野宣子，槌野日呂志，塚越哲也，塚原和之，塚田京子，塚田啓一，塚島栄示，塚島律子，塚本右源治，塚本英夫，辻秀之，辻揚子，坪井信澄，坪井祐子，坪島遊，鶴谷暢子，貞國利夫，天野弘朗，田儀耕司，田熊彩乃，田恵人，田原博，田原茂己，田口康大，田口浩行，田阪知子，田崎紀克，田尻浩伸，田川亨，田村耕作，田村智恵子，田村比呂志，田村邦夫，田代憲次，田代省二，田沢馨，田谷昌仁，田端光幸，田端順子，田中マチ子，田中寛一，田中丸雅雄，田中恵美子，田中弘，田中耕太郎，田中伸一，田中正一，田中正晴，田中千暉，田中智，田中智也，田中忠，田中直義，田中哲郎，田中美和子，田中勉，田中豊成，田中佑奈，田中優，田中洋子，田中葉子，田中利彦，田仲謙介，田島基之，田島奏一朗，田畑伊織，田部田勉，田米開隆男，田邊宜久，田辺裕司，田野井翔子，田澤一郎，渡部晋子，渡部通，渡部藤雄，渡辺恵，渡辺健三，渡辺憲一，渡辺幸久，渡辺康太，渡辺俊郎，渡辺進，渡辺正之，渡辺正比古，渡辺誠，渡辺哲見，渡辺徹，渡辺仁，渡辺美郎，渡辺明美，渡辺裕幸，渡辺雄一朗，渡辺眞次，渡邊宏之，渡邊充夫，渡邊麻里恵，渡邊由希太，渡邉修治，渡邉由佳，渡邉里衣，渡邉眞次，土井雅文，土井寛大，土屋若葉，土屋尚，土屋正起，土岐隆信，土居克夫，土田芳昭，奴賀俊光，島崎楽，島崎康広，島村香，島村直子，島村隆，島田恵実，島田明英，島田洋，島﨑楽，嶋孝弘，嶋崎暁啓，嶋崎太郎，嶋徹，嶋田昌行，嶋田哲郎，嶋田百合子，嶋田和明，東出芳廣，東常哲也，東島忠澄，東有子，東竜一郎，東良一，東條秀徳，湯浅健，湯浅芳彦，藤井格，藤井幹夫，藤井薫，藤井香織，藤井聖三，藤浦芳江，藤岡エリ子，藤岡純治，藤巻啓二，藤巻裕蔵，藤間勇，藤原郁久，藤原貞弘，藤江昌代，藤江直行，藤崎富代，藤川久美子，藤谷俊仁，藤塚道秋，藤田君雄，藤田薫，藤田剛，藤田淳子，藤田泰宏，藤田裕子，藤田和彦，藤島光俊，藤島牧子，藤波不二雄，藤本義博，藤本尚子，藤本陽子，藤野和孝，堂岸綾子，堂跡あやこ，徳永年彦，徳田英雄，頓宮千穂子，頓宮理沙，内田初江，内田博，内田理恵，南一朗，南雲敏夫，南航平，南崎由任，楠瀬雄三，楠木憲一，日向治子，日高綾乃，日高哲二，日比野晃祥，日比野政彦，日名義人，入船憲一，如澤昌子，納家仁，能見謙太郎，波多野玄，馬場喜代己，馬場清，馬男木嘉久，馬田勝義，梅浦一美，梅原進，梅津節夫，楳田昭，萩原賢一，萩原哲也，萩野小夏，萩野正明，萩野谷典敬，柏崎安男，柏木敦士，白井康夫，白水博，白石ひとみ，白石健一，白石泉，白川郁栄，白川恵，白川美翠，粕谷和夫，幡俊雄，畑中浩一，畑中朋子，八次雄一朗，八重樫理彦，八木岡忠，八木聡，塙洋一，伴野正志，半田智子，板垣杉子，板谷喜人，板谷浩男，畔上正一，繁田真由美，飯室健，飯田貴浩，飯田直己，飯島大智，飯澤可奈江，比嘉雅彦，比津智絵，肥塚喜弘，肥塚澄江，飛鳥和弘，飛田やすひろ，飛田憲一，飛田泰寛，樋口孝城，樋口香穂，樋口星路，樋口陽子，尾形静江，尾形大智，尾崎邦彦，尾崎和子，尾中潔，菱沼一充，菱沼洋子，百瀬浩，浜谷まり子，浜谷武雄，浜地歩，浜野建男，富川徹，富沢直浩，富田悦子，富田恵理子，冨永准子，冨永誠，冨永敦，冨岡千鶴子，冨川潤，冨田恭司，布川耕市，布留川毅，武原仁美，武市絵美，武村功，武谷由紀子，武田真澄美，武田隆治，武藤健一，武内秀仁，武内順子，風間健太郎，風間麻未，伏見英俊，伏見直将，服部利也，福井強志，福井大，福井亘，福岡実加，福原瑞生，福田佳弘，福田貴之，福田光男，福田伸子，福田篤徳，福田由美子，福田和夫，福本幸夫，福本健，福本明美，福留千穂，平井喜彦，平井克亥，平井正子，平井正志，平井和之，平岡考，平山恵子，平山太刀也，平子久美子，平出恒夫，平城常雄，平泉秀樹，平中直也，平田正嗣，平田豊治，平野賢次，平野智江，平野敏明，米山富和，米須拓哉，米田桂子，米田保子，米澤輝晃，片岡真智子，片岡美貴，片桐実，片桐和雄，片山一，片山秀策，片山繁子，片山芳伸，片野文明，穂井

田敏哉，穂刈祐一，宝田延彦，峯光一，方波見守一，芳賀朝子，芳賀敏博，豊川尚子，豊田健太郎，豊田敏則，望月英夫，望月工房，望月通人，望月武，北井崇文，北川捷康，北川直樹，北村吉朗，北村亘，北沢宗大，北尾祐介，北本和子，北野直希，牧野紀子，牧野清助，牧野田節子，堀浩明，堀田雅貴，堀田昌伸，堀内和啓，堀本徹，堀本富宏，本間昭次，本郷哲郎，本多孝成，本多里奈，本田行男，本田敏夫，本島修道，麻島江美子，麻畑久人，又野淳子，末永やすこ，末永やす子，末永靖子，末崎朗，万中美子，満田信也，満田實，箕輪貴一，湊重成，名執修二，明日香治彦，鳴海真澄，綿引清雄，茂木瑞稀，茂木大樹，網谷由美子，網中照美，木下徹，木下芳春，木原真弓，木山小学校，木子雅水，木曽野真紀，木村雅世，木村孝志，木村耕，木村麻美子，木谷重信，木谷由美子，木本みき枝，木本祥太，木本誠一，木野瀬依子，門口一雄，門前孝也，門脇進，野口さとみ，野口真麿子，野口直樹，野崎研，野上佳子，野村恵子，野村出，野村淳一，野村正史，野村由紀子，野嶋宏一，野辺佳子，矢口功，矢吹正，矢吹勉，矢田栄史，矢田新平，矢田部浪枝，矢島早苗，矢部周蔵，矢本賢，矢野孝一，矢野真志，柳原將男，柳町邦光，柳田一郎，柳田紀行，柳田弘子，柳田秀雄，柳田直子，柳田唯翔，柳田和美，柳堀弘，柳堀弘他，藪内喜人，油田克也，友岡周一，友澤圭介，有田修大，有田智彦，有馬宏幸，有澤達博，涌島英之，涌島洋子，涌嶋英之，葉山雅広，葉山久世，葉山政治，頼ウメ子，落合はるな，落合孝之，落合修，落合野鳥の会，藍沢司，李剛，陸陽子，立川直樹，立野昌宏，両角英晴，緑葉，林絵梨花，林啓子，林恵治，林孝，林航，林行正，林貢平，林克之，林聡彦，林直樹，林奈津美，鈴川文夫，鈴木ゆう，鈴木一江，鈴木紀雄，鈴木健司，鈴木健真，鈴木宏芳，鈴木三郎，鈴木彰，鈴木伸子，鈴木仁，鈴木瑞穂，鈴木正文，鈴木千代子，鈴木直孝，鈴木篤博，鈴木美智代，鈴木明子，鈴木由清，鈴木由美子，鈴木洋子，鈴木利幸，鈴木遼太郎，歴本郁子，和泉和子，和沢淑子，和田岳，和田浩一，和田千代，和田靖夫，脇啓人，脇坂英弥，脇田信雄，鷲沢澄雄，鷲田善幸，鷲野春美，國永知裕，國友靖彦，岑村森悟，廣瀬光子，廣川茜，廣田行雄，揉井千代子，枷場ゆかり，梵珠ふれあいセンター，榮川政彦，榮村奈緒子，椹宏介，櫻井佳明，櫻井恵子，櫻井俊司，澤村信之，澤田純平，澤田宏一，澤田宗一郎，澤祐介，濱屋勝則，濱孝志，濱伸二郎，濱田哲暁，濱優衣，礒野翔太郎，齋藤京子，齋藤紘輝，齋藤修，齋藤純子，齋藤信，齋藤息吹，齋藤統，齋藤敏郎，齋藤武馬，齋藤楓華，齋藤悠太，齋藤力，笈部達也，簗川堅治，齊木孝，濵屋勝則，濵砂佐織，濵砂淳人，髙井正明，髙橋宏明，髙橋伸夫，髙橋瑞紀

付表 分布図掲載種と計測値の出典，撮影者．計測値は 1：バードリサーチ生態図鑑，2：榎本(1941)，3：清棲(1965)，4：Del Hoyo et al. (1992)，5：Del Hoyo et al. (1994)，6：Del Hoyo et al. (1996)，7：Del Hoyo et al. (1997)

種名	計測値	撮影者
エゾライチョウ	1	藤井薫
ライチョウ	1	堀田昌伸
ウズラ	1	渡辺美郎
ヤマドリ	1	三木敏史
キジ	1	渡辺美郎
オシドリ	1	三ツ井政夫
オカヨシガモ	3	渡辺美郎
ヨシガモ	2	渡辺美郎
マガモ	1	渡辺美郎
カルガモ	1	渡辺美郎
ハシビロガモ	2	渡辺美郎
シマアジ	2	渡辺美郎
コガモ	2	藤井薫
ホシハジロ	1	渡辺美郎
キンクロハジロ	2	三木敏史
シノリガモ	3	三木敏史
ミコアイサ	2	三木敏史
カワアイサ	2	藤井薫
カイツブリ	1	高木昌興
アカエリカイツブリ	2	三木敏史
カンムリカイツブリ	1	渡辺美郎
アカオネッタイチョウ	3	福田佳弘
シラオネッタイチョウ	3	中村咲子
カラスバト	1	中村豊
キジバト	1	三ツ井政夫
キンバト	3	高木昌興
アオバト	1	湯浅芳彦
ズアカアオバト	3	貞光隆志
コアホウドリ	3	福田佳弘
クロアシアホウドリ	2	福田佳弘
アホウドリ	2	中村咲子
シロハラミズナギドリ	3	中村咲子
オオミズナギドリ	1	貞光隆志
オナガミズナギドリ	3	中村咲子
セグロミズナギドリ	4	中村咲子
アナドリ	3	貞光隆志
クロコシジロウミツバメ	3	中村咲子
ヒメクロウミツバメ	2	中村咲子
コシジロウミツバメ	1	中村咲子
オーストンウミツバメ	3	中村咲子
コウノトリ	2	三木敏史
アカアシカツオドリ	3	矢田新平
カツオドリ	1	矢田新平
ヒメウ	2	三木敏史
チシマウガラス	3	福田佳弘
カワウ	1	上山義之
ウミウ	1	三木敏史
サンカノゴイ	2	三木敏史
ヨシゴイ	1	矢田新平
オオヨシゴイ	2	貞光隆志
リュウキュウヨシゴイ	3	貞光隆志
ミゾゴイ	1	高木昌興
ズグロミゾゴイ	3	小林雅裕
ゴイサギ	1	湯浅芳彦
ササゴイ	1	三木敏史
アカガシラサギ	3	矢田新平
アマサギ	1	小峯昇
アオサギ	1	湯浅芳彦
ムラサキサギ	3	小林雅裕
ダイサギ	2	渡辺美郎
チュウサギ	1	渡辺美郎
コサギ	1	渡辺美郎
クロサギ	2	河端正太郎
トキ	1	園村茂夫
タンチョウ	1	三木敏史
シマクイナ	3	先崎理之
オオクイナ	3	小林雅裕
ヤンバルクイナ	6	小高信彦
クイナ	2	三木敏史
シロハラクイナ	3	小林雅裕
ヒメクイナ	2	小林雅裕
ヒクイナ	1	豊田敏則
バン	2	渡辺美郎
オオバン	1	桑森亮
オニカッコウ	7	浜地歩
ジュウイチ	1	小笠原惇六
ホトトギス	2	吉村正則
セグロカッコウ	7	川又利彦
セグロカッコウ	7	川又利彦
ツツドリ	2	吉村正則
カッコウ	2	高山裕子
ヨタカ	1	内田博
ハリオアマツバメ	2	藤井薫
アマツバメ	2	三木敏史
ヒメアマツバメ	1	宮本和也
タゲリ	2	三木敏史
ケリ	1	三木敏史
イカルチドリ	1	三木敏史
コチドリ	1	三木敏史
シロチドリ	1	三木敏史
セイタカシギ	3	三木敏史
ヤマシギ	1	三木敏史
アマミヤマシギ	1	貞光隆志
オオジシギ	1	松本経
アカアシシギ	2	藤井薫
イソシギ	2	三木敏史
タマシギ	1	三ツ井政夫
ミフウズラ	3	高木昌興
ツバメチドリ	2	三木敏史
クロアジサシ	3	仲地邦博
ヒメクロアジサシ	3	仲地邦博
ウミネコ	1	三木敏史
オオセグロカモメ	1	三木敏史
オオアジサシ	3	高木昌興
コアジサシ	1	大塚之稔
マミジロアジサシ	3	浜地歩
セグロアジサシ	3	守屋年史
ベニアジサシ	3	渡辺美郎
エリグロアジサシ	3	大塚之稔
アジサシ	2	三木敏史
ウミガラス	1&2	福田佳弘
ケイマフリ	1	高木昌興
ウミスズメ	2	貞光隆志
カンムリウミスズメ	1	貞光隆志
ウトウ	1	三木敏史
エトピリカ	2	福田佳弘
ミサゴ	2	福家桃

付表 つづき

種名	計測値	撮影者
ハチクマ	1	豊田敏則
カタグロトビ	5	小林雅裕
トビ	1	三木敏史
オジロワシ	1	福井和二
カンムリワシ	1	小林雅裕
チュウヒ	1	三木敏史
ツミ	1	三ツ井政夫
ハイタカ	1	西村四郎
オオタカ	1	藤井薫
サシバ	1	加藤俊之
ノスリ	1	後藤二三
クマタカ	1	三木敏史
オオコノハズク	2	三木敏史
コノハズク	2	三木敏史
リュウキュウコノハズク	1	高木昌興
フクロウ	2	小野安行
アオバズク	2	三木敏史
トラフズク	2	三木敏史
コミミズク	2	藤井薫
アカショウビン	1	上山義之
カワセミ	2	池永祐二
ヤマセミ	1	中林光生
ブッポウソウ	1	畔上正一
アリスイ	1	三木敏史
コゲラ	1	藤井薫
コアカゲラ	3	藤井薫
オオアカゲラ	1	平野敏明
アカゲラ	1	藤井薫
クマゲラ	1	土屋尚
アオゲラ	2	三木敏史
ヤマゲラ	2	貞光隆志
ノグチゲラ	1	小高信彦
チョウゲンボウ	1	三木敏史
チゴハヤブサ	3	高橋ゆう
ハヤブサ	1	三木敏史
ヤイロチョウ	1	三木敏史
サンショウクイ	2	小松周一
リュウキュウサンショウクイ		大塚之稔
サンコウチョウ	2	所崎聡
チゴモズ	2	高橋ゆう
モズ	1	三木敏史
アカモズ	1	内田博
カケス	2	三木敏史
ルリカケス	1	三木敏史
オナガ	1	内田博
カササギ	1	三木敏史
ホシガラス	2	三木敏史
ハシボソガラス	1	渡辺美郎
ハシブトガラス	1	三木敏史
キクイタダキ	2	三木敏史
ハシブトガラ	1	三木敏史
コガラ	1	小松周一
ヤマガラ	1	小松周一
ヒガラ	2	大塚之稔
シジュウカラ	1	豊田敏則
ヒバリ	1	池永祐二
ショウドウツバメ	2	福家桃
ツバメ	1	渡辺美郎
リュウキュウツバメ	3	小松周一
コシアカツバメ	2	三木敏史
イワツバメ	1	三木敏史
シロガシラ	3	三木敏史
ヒヨドリ	1	藤井薫
ウグイス	1	小松周一
ヤブサメ	1	城石一徹
エナガ	1	三ツ井政夫
オオムシクイ	1	高山裕子
メボソムシクイ	1	三木敏史
エゾムシクイ	3	三木敏史
センダイムシクイ	2	内田博
イイジマムシクイ	3	園村茂夫
メグロ	1	植田睦之
メジロ	1	藤井薫
マキノセンニュウ	3	藤井薫
シマセンニュウ	2	三木敏史
ウチヤマセンニュウ	1	中村豊

種名	計測値	撮影者
オオセッカ	1	佐々木均
エゾセンニュウ	2	藤井薫
オオヨシキリ	1	橋本和司
コヨシキリ	1	藤井薫
セッカ	1	神尾雄二
ゴジュウカラ	2	福家桃
キバシリ	2	平城常雄
ミソサザイ	1	三木敏史
ムクドリ	1	藤井薫
コムクドリ	1	佐々木均
カワガラス	2	三木敏史
マミジロ	2	三木敏史
トラツグミ	1	斎藤誠
オオトラツグミ	1	環境省奄美野生生物保護センター
カラアカハラ	3	三木敏史
クロツグミ	1	畔上正一
シロハラ	2	三木敏史
アカハラ	2	大塚之稔
アカコッコ	1	高須英之
コマドリ	2	豊田敏則
アカヒゲ	1	貞光隆志
ノゴマ	2	藤井薫
コルリ	2	加藤俊之
ルリビタキ	1	池永祐二
ジョウビタキ	1	神尾雄二
ノビタキ	1	三木敏史
イソヒヨドリ	1	川崎慎二
サメビタキ	2	三木敏史
コサメビタキ	2	三木敏史
キビタキ	1	今兼四郎
オオルリ	1	所崎聡
イワヒバリ	2	内田博
カヤクグリ	2	大塚之稔
ニュウナイスズメ	2	大塚之稔
スズメ	1	藤井薫
イワミセキレイ	3	貞光隆志
ツメナガセキレイ	3	三木敏史
キセキレイ	2	大塚之稔
ハクセキレイ	1	湯浅芳彦
セグロセキレイ	1	高橋ゆう
ビンズイ	2	大塚之稔
カワラヒワ	2	高橋ゆう
オガサワラカワラヒワ	3	Islands care
マヒワ	2	三木敏史
ベニマシコ	2	三木敏史
ギンザンマシコ	2	藤井薫
イスカ	1	三木敏史
ウソ	2	神尾雄二
シメ	2	小松周一
コイカル	3	三木敏史
イカル	2	三木敏史
ホオジロ	2	大塚之稔
ホオアカ	2	佐々木均
ミヤマホオジロ	2	豊田敏則
シマアオジ	1	三木敏史
ノジコ	1	橋本和司
アオジ	2	神尾雄二
クロジ	2	三ツ井政夫
コジュリン	2	佐々木均
オオジュリン	2	高山裕子
コジュケイ		大塚之稔
コリンウズラ		桑森亮
インドクジャク		小林雅裕
コクチョウ		植田睦之
コブハクチョウ		水谷吉男
カワラバト(ドバト)		植田睦之
シラコバト		内田博
セキセイインコ		谷英雄
ホンセイインコ		阿部仁美
ダルマインコ		谷田部佑
オキナインコ		谷英雄
ヤマムスメ		小峯昇
サンジャク		谷岡仁
ガビチョウ		橋本和司
カオグロガビチョウ		内田博
カオジロガビチョウ		平野敏明

種名	撮影者
ヒゲガビチョウ	谷岡仁
ソウシチョウ	所崎聡
ハッカチョウ	渡辺美郎
インドハッカ	小林雅裕
ベニスズメ	祝原光雄
コシジロキンパラ	大塚之稔
シマキンパラ	渡辺美郎
ギンパラ	大塚之稔
キンパラ	浜地歩
キンランチョウ	
ヘキチョウ	佐々木均
ブンチョウ	小峯昇.
コウカンチョウ	小峯昇.

各種鳥類の鳴き声図鑑と生態図鑑へのリンク（各種のページのQRコードと同じリンク）

種名	鳴き声図鑑	生態図鑑
エゾライチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/157	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_1_bonasia.pdf
ライチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/185	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_3muta.pdf
ウズラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/21	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_10_japonica.pdf
ヤマドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/221	https://www.bird-research.jp/1/seitai/yamadori.pdf
キジ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/22	https://www.bird-research.jp/1/seitai/kiji2.pdf
オシドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/238	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_10galericulata.pdf
オカヨシガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/240	
ヨシガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/241	
マガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/244	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_2platyrhynchos.pdf
カルガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/246	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_x_poecilorhyncha.pdf
ハシビロガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/248	
オナガガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/249	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_12acuta.pdf
シマアジ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/250	
コガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/252	
ホシハジロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/256	https://www.bird-research.jp/1/seitai/14_2_ferina.pdf
キンクロハジロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/260	
シノリガモ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/265	
ミコアイサ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/272	
カワアイサ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/273	
カイツブリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/1	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_6_ruficollis.pdf
アカエリカイツブリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/156	
カンムリカイツブリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/276	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_7cristatus.pdf
アカオネッタイチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/279	
シラオネッタイチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/280	
カラスバト	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/176	https://www.bird-research.jp/1/seitai/13_4_janthina.pdf
キジバト	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/39	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_8_orientalis.pdf
シラコバト	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/189	https://www.bird-research.jp/1/seitai/13_11_decaocto.pdf
キンバト	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/286	
アオバト	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/40	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_9sieboldii.pdf
ズアカアオバト	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/195	
コアホウドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/293	
クロアシアホウドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/294	
アホウドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/295	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_6_albatrus.pdf
コアホウドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/293	
シロハラミズナギドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/303	
オオミズナギドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/305	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_10_leucomelas.pdf
オナガミズナギドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/306	
セグロミズナギドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/315	
アナドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/317	
クロコシジロウミツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/319	
ヒメクロウミツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/320	
コシジロウミツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/321	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_2_leucorhoa.pdf
オーストンウミツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/322	
コウノトリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/326	
アカアシカツオドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/330	
カツオドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/331	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_8leucogaster.pdf
ヒメウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/332	
チシマウガラス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/333	
カワウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/2	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_1_carbo.pdf
ウミウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/334	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_6capillatus.pdf
サンカノゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/3	
ヨシゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/4	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_1sinensis.pdf
オオヨシゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/338	
リュウキュウヨシゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/339	

各種鳥類の鳴き声図鑑と生態図鑑へのリンク（各種のページのQRコードと同じリンク）

種名	鳴き声図鑑	生態図鑑
ミゾゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/5	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_12_goisagi.pdf
ズグロミゾゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/196	
ゴイサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/6	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_8_nycticorax.pdf
ササゴイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/7	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_7_striata.pdf
アカガシラサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/342	
アマサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/343	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_4_ibis.pdf
アオサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/8	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_9_cinerea.pdf
ムラサキサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/344	
ダイサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/345	
チュウサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/346	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_3intermedia.pdf
コサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/347	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_3garzetta.pdf
クロサギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/348	
トキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/351	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_1nippon.pdf
タンチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/23	https://www.bird-research.jp/1/seitai/red-crowned crane.pdf
シマクイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/188	
オオクイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/215	
ヤンバルクイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/194	
クイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/26	
シロハラクイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/29	
ヒメクイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/211	
ヒクイナ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/27	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_11_fusca.pdf
バン	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/28	
オオバン	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/183	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_2_atra.pdf
ジュウイチ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/41	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_5fugax.pdf
ホトトギス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/44	
セグロカッコウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/371	
ツツドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/43	
カッコウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/42	
ヨタカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/49	https://www.bird-research.jp/1/seitai/yotaka.pdf
ハリオアマツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/50	
アマツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/165	
ヒメアマツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/173	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_6_affinis.pdf
タゲリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/373	
ケリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/374	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_11_cinereus.pdf
イカルチドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/31	https://www.bird-research.jp/1/seitai/ikaruchidori.pdf
コチドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/30	https://www.bird-research.jp/1/seitai/charadrius_dubius.pdf
シロチドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/32	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_1alexandrinus.pdf
セイタカシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/385	
ヤマシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/36	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_11_rusticola.pdf
アマミヤマシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/37	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_y_mira.pdf
オオジシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/38	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_x_hardwickii.pdf
アカアシシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/402	
イソシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/34	
タマシギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/161	https://www.bird-research.jp/1/seitai/tamashigi.pdf
ミフウズラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/436	
ツバメチドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/437	
クロアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/438	
ヒメクロアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/439	
ウミネコ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/456	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_7_crassirostris.pdf
オオセグロカモメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/158	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_9_schistisagus.pdf
オオアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/467	
コアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/198	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_7_albifrons.pdf
マミジロアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/471	
セグロアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/472	

各種鳥類の鳴き声図鑑と生態図鑑へのリンク（各種のページのQRコードと同じリンク）

種名	鳴き声図鑑	生態図鑑
ベニアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/473	
エリグロアジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/474	
アジサシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/475	
ウミガラス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/486	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_7_aalge.pdf
ケイマフリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/489	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_7carbo.pdf
ウミスズメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/491	
カンムリウミスズメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/492	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_9_wumizusume.pdf
ウトウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/497	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_z_cerorhinca.pdf
エトピリカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/499	
ミサゴ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/9	
ハチクマ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/500	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_9_ptilorhyncus.pdf
カタグロトビ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/501	
トビ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/10	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_10migrans.pdf
オジロワシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/199	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_2_albicilla.pdf
カンムリワシ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/16	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_2cheela.pdf
チュウヒ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/17	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_5_spilonotus.pdf
ツミ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/13	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_2_gularis.pdf
ハイタカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/210	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_6nisus.pdf
オオタカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/12	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_2_gentiles.pdf
サシバ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/15	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_5_butastur.pdf
ノスリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/14	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_11buteo.pdf
クマタカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/513	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_12nipalensis.pdf
オオコノハズク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/184	
コノハズク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/162	
リュウキュウコノハズク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/46	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_7elegans.pdf
フクロウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/48	
アオバズク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/47	
トラフズク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/45	
コミミズク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/201	
アカショウビン	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/51	https://www.bird-research.jp/1/seitai/ruddy_kingfisher.pdf
カワセミ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/52	
ヤマセミ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/193	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_3_lugubris.pdf
ブッポウソウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/160	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_8_orientalis.pdf
アリスイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/53	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_8_torquilla.pdf
コゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/58	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_5_kizuki.pdf
コアカゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/212	
オオアカゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/57	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_4_owstoni.pdf
アカゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/56	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_5_major.pdf
クマゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/55	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_12martius.pdf
アオゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/54	
ヤマゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/192	
ノグチゲラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/529	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_4_noguchii.pdf
チョウゲンボウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/168	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_8tinnunculus.pdf
チゴハヤブサ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/18	
ハヤブサ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/172	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_12_peregrinus.pdf
ヤイロチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/197	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_9_brachyura.pdf
サンショウクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/69	
リュウキュウサンショウクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/650	
サンコウチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/109	
チゴモズ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/203	
モズ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/71	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_6_bucephalus.pdf
アカモズ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/204	https://www.bird-research.jp/1/seitai/lanius_cristatus.pdf
カケス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/142	
ルリカケス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/186	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_5_lidthi.pdf

各種鳥類の鳴き声図鑑と生態図鑑へのリンク（各種のページのQRコードと同じリンク）

種名	鳴き声図鑑	生態図鑑
オナガ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/143	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_6_cyana.pdf
カササギ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/177	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_7_pica.pdf
ホシガラス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/174	
ハシボソガラス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/145	https://www.bird-research.jp/1/seitai/1_4_corone.pdf
ハシブトガラス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/146	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_7_corax.pdf
キクイタダキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/103	
ハシブトガラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/111	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_x_palustris.pdf
コガラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/112	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_9_montanus.pdf
ヤマガラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/114	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_z_varius.pdf
ヒガラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/113	
シジュウカラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/115	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_3_parus.pdf
ヒバリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/59	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_3_arvensis.pdf
ショウドウツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/202	
ツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/60	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_4_rustica.pdf
リュウキュウツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/187	
コシアカツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/61	
イワツバメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/62	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_9dasypus.pdf
シロガシラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/190	
ヒヨドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/70	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_y_amaurotis.pdf
ウグイス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/91	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_2_dephone.pdf
ヤブサメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/90	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_8_squameiceps.pdf
エナガ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/110	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_7caudatus.pdf
メボソムシクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/100	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_11Phylloscopus1.pdf
オオムシクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/569	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_11Phylloscopus1.pdf
エゾムシクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/101	
センダイムシクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/102	
イイジマムシクイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/175	
メグロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/119	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_5familiare.pdf
メジロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/118	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_5_japonicus.pdf
マキノセンニュウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/97	
シマセンニュウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/94	
ウチヤマセンニュウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/95	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_5_pleskei .pdf
オオセッカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/92	https://www.bird-research.jp/1/seitai/10_11pryeri.pdf
エゾセンニュウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/93	
オオヨシキリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/99	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_8_orientalis.pdf
コヨシキリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/98	https://www.bird-research.jp/1/seitai/11_12_bistrigiceps.pdf
セッカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/96	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_5_juncidis.pdf
ゴジュウカラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/116	
キバシリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/117	
ミソサザイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/73	https://www.bird-research.jp/1/seitai/Troglodytes.pdf
ムクドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/141	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_2cineraceus.pdf
コムクドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/140	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_9_philippensis.pdf
カワガラス	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/178	
マミジロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/84	
トラツグミ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/82	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_10_dauma.pdf
オオトラツグミ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/83	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_10_dauma.pdf
カラアカハラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/586	
クロツグミ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/85	https://www.bird-research.jp/1/seitai/7_10cardis.pdf
シロハラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/87	
アカハラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/86	
アカコッコ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/164	https://www.bird-research.jp/1/seitai/3_9_celaenops.pdf
コマドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/75	
アカヒゲ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/163	https://www.bird-research.jp/1/seitai/9_1komadori.pdf
ノゴマ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/76	

各種鳥類の鳴き声図鑑と生態図鑑へのリンク（各種のページのQRコードと同じリンク）

種名	鳴き声図鑑	生態図鑑
コルリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/77	
ルリビタキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/78	https://www.bird-research.jp/1/seitai/4_4_cyanurus.pdf
ジョウビタキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/79	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_11_jobitaki.pdf
ノビタキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/80	https://www.bird-research.jp/1/seitai/nobitaki.pdf
イソヒヨドリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/81	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_8solitarius.pdf
サメビタキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/106	
コサメビタキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/107	
キビタキ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/104	https://www.bird-research.jp/1/seitai/12_6_narcissina.pdf
オオルリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/105	https://www.bird-research.jp/1/seitai/ooruri.pdf
イワヒバリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/205	
カヤクグリ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/74	
ニュウナイスズメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/138	
スズメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/139	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_4_montanus.pdf
イワミセキレイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/616	
ツメナガセキレイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/63	
キセキレイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/64	
ハクセキレイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/65	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_1_alba.pdf
セグロセキレイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/66	https://www.bird-research.jp/1/seitai/2_x_grandis.pdf
ビンズイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/67	
カワラヒワ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/130	
マヒワ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/131	
ベニマシコ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/134	
ギンザンマシコ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/214	
イスカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/133	https://www.bird-research.jp/1/seitai/15_1_curvirostra.pdf
ウソ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/135	
シメ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/137	
コイカル	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/209	
イカル	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/136	
ホオジロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/120	
ホオアカ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/122	
ミヤマホオジロ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/124	
シマアオジ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/126	https://www.bird-research.jp/1/seitai/6_4_aureola.pdf
ノジコ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/125	https://www.bird-research.jp/1/seitai/nojico.pdf
アオジ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/127	
クロジ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/128	
コジュリン	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/121	
オオジュリン	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/129	
コジュケイ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/147	
コリンウズラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/663	
インドクジャク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/664	
コブハクチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/233	
カワラバト(ドバト)	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/149	https://www.bird-research.jp/1/seitai/13_3_feralpigeon.pdf
ホンセイインコ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/148	https://www.bird-research.jp/1/seitai/8_6krameri.pdf
サンジャク	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/655	
ガビチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/150	
カオグロガビチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/216	
カオジロガビチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/217	
ヒゲガビチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/218	
ソウシチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/151	https://www.bird-research.jp/1/seitai/5_8_lutea.pdf
ハッカチョウ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/651	
シマキンパラ	https://db3.bird-research.jp/saezuri/birdsong/detail/656	

五十音順の分布図目次

アオゲラ 83
アオサギ 39
アオジ 135
アオバズク 77
アオバト 24
アカアシカツオドリ 31
アカアシシギ 57
アカエリカイツブリ 20
アカオネッタイチョウ 21
アカガシラサギ 38
アカゲラ 82
アカコッコ 116
アカショウビン 78
アカハラ 115
アカヒゲ 117
アカモズ 89
アジサシ 65
アナドリ 28
アホウドリ 26
アマサギ 39
アマツバメ 52
アマミヤマシギ 56
アリスイ 80
イイジマムシクイ 104
イカル 132
イカルチドリ 54
イスカ 130
イソシギ 58
イソヒヨドリ 120
イワツバメ 99
イワヒバリ 122
イワミセキレイ 124
インドクジャク 137
インドハッカ 146
ウグイス 100
ウズラ 12
ウソ 130
ウチヤマセンニュウ 106
ウトウ 67
ウミウ 34
ウミガラス 65
ウミスズメ 66
ウミネコ 61
エゾセンニュウ 107
エゾムシクイ 103
エゾライチョウ 11
エトピリカ 68
エナガ 101
エリグロアジサシ 64
オオアカゲラ 82
オオアジサシ 62
オオクイナ 44
オオコノハズク 75
オオジシギ 57
オオジュリン 136
オーストンウミツバメ 30
オオセグロカモメ 61
オオセッカ 107
オオタカ 73
オオトラツグミ 113
オオバン 47
オオミズナギドリ 27
オオムシクイ 102
オオヨシキリ 108
オオヨシゴイ 35
オオルリ 122
オガサワラカワラヒワ 128
オカヨシガモ 14
オキナインコ 142
オシドリ 13
オジロワシ 70
オナガ 91
オナガミズナギドリ 27
オニカッコウ 48
カイツブリ 20
カオグロガビチョウ 144
カオジロガビチョウ 145
カケス 90
カササギ 91
カタグロトビ 69
カツオドリ 32
カッコウ 50
ガビチョウ 143
カヤクグリ 123
カラアカハラ 114
カラスバト 22
カルガモ 15
カワアイサ 19
カワウ 33
カワガラス 112
カワセミ 79
カワラバト（ドバト） 139
カワラヒワ 127
カンムリウミスズメ 67
カンムリカイツブリ 21
カンムリワシ 71
キクイタダキ 93
キジ 13
キジバト 23
キセキレイ 125
キバシリ 110
キビタキ 121
キンクロハジロ 18
ギンザンマシコ 129
キンバト 23
キンパラ 149
ギンパラ 149
キンランチョウ 147
クイナ 45
クマゲラ 83
クマタカ 74
クロアシアホウドリ 25
クロアジサシ 60
クロコシジロウミツバメ 29
クロサギ 42
クロジ 135
クロツグミ 114
ケイマフリ 66
ケリ 53
コアカゲラ 81
コアジサシ 62
コアホウドリ 25
コイカル 131
ゴイサギ 37
コウカンチョウ 151
コウノトリ 31
コガモ 17
コガラ 94
コクチョウ 138
コゲラ 81
コサギ 41
コサメビタキ 121
コシアカツバメ 98
コシジロウミツバメ 30
コシジロキンパラ 148
ゴジュウカラ 109
コジュケイ 137
コジュリン 136
コチドリ 54
コノハズク 75
コブハクチョウ 139
コマドリ 116

コミミズク 78
コムクドリ 111
コヨシキリ 108
コリンウズラ 138
コルリ 118
ササゴイ 38
サシバ 73
サメビタキ 120
サンカノゴイ 34
サンコウチョウ 88
サンジャク 143
サンショウクイ 87
シジュウカラ 96
シノリガモ 18
シマアオジ 134
シマアジ 16
シマキンパラ 148
シマクイナ 43
シマセンニュウ 106
シメ 131
ジュウイチ 48
ショウドウツバメ 97
ジョウビタキ 119
シラオネッタイチョウ 22
シラコバト 140
シロガシラ 99
シロチドリ 55
シロハラ 115
シロハラクイナ 45
シロハラミズナギドリ 26
ズアカアオバト 24
ズグロミゾゴイ 37
スズメ 124
セイタカシギ 55
セキセイインコ 140
セグロアジサシ 63
セグロカッコウ 49
セグロセキレイ 126
セグロミズナギドリ 28
セッカ 109
センダイムシクイ 103
ソウシチョウ 145
ダイサギ 40
タゲリ 53
タマシギ 58
ダルマインコ 141
タンチョウ 43
チゴハヤブサ 85
チゴモズ 88
チシマウガラス 33
チュウサギ 41
チュウヒ 71
チョウゲンボウ 85
ツツドリ 50
ツバメ 97
ツバメチドリ 59
ツミ 72
ツメナガセキレイ 125
トキ 42
トビ 70
トラツグミ 113
トラフズク 77
ニュウナイスズメ 123
ノグチゲラ 84
ノゴマ 117
ノジコ 134
ノスリ 74
ノビタキ 119
ハイタカ 72
ハクセキレイ 126
ハシビロガモ 16
ハシブトガラ 94
ハシブトガラス 93
ハシボソガラス 92
ハチクマ 69
ハッカチョウ 146
ハヤブサ 86
ハリオアマツバメ 51
バン 47
ヒガラ 95
ヒクイナ 46
ヒゲガビチョウ 144
ヒバリ 96
ヒメアマツバメ 52
ヒメウ 32
ヒメクイナ 46
ヒメクロアジサシ 60
ヒメクロウミツバメ 29
ヒヨドリ 100
ビンズイ 127
フクロウ 76
ブッポウソウ 80
ブンチョウ 150
ヘキチョウ 150
ベニアジサシ 64
ベニスズメ 147
ベニマシコ 129
ホオアカ 133
ホオジロ 132
ホシガラス 92
ホシハジロ 17
ホトトギス 49
ホンセイインコ 141
マガモ 15
マキノセンニュウ 105
マヒワ 128
マミジロ 112
マミジロアジサシ 63
ミコアイサ 19
ミサゴ 68
ミゾゴイ 36
ミソサザイ 110
ミフウズラ 59
ミヤマホオジロ 133
ムクドリ 111
ムラサキサギ 40
メグロ 104
メジロ 105
メボソムシクイ 102
モズ 89
ヤイロチョウ 86
ヤブサメ 101
ヤマガラ 95
ヤマゲラ 84
ヤマシギ 56
ヤマセミ 79
ヤマドリ 12
ヤマムスメ 142
ヤンバルクイナ 44
ヨシガモ 14
ヨシゴイ 35
ヨタカ 51
ライチョウ 11
リュウキュウコノハズク 76
リュウキュウサンショウクイ 87
リュウキュウツバメ 98
リュウキュウヨシゴイ 36
ルリカケス 90
ルリビタキ 118

自然環境保全基礎調査

全国鳥類繁殖分布調査報告　日本の鳥の今を描こう　2016-2021 年

2021 年 10 月 24 日　発行

発行：鳥類繁殖分布調査会*

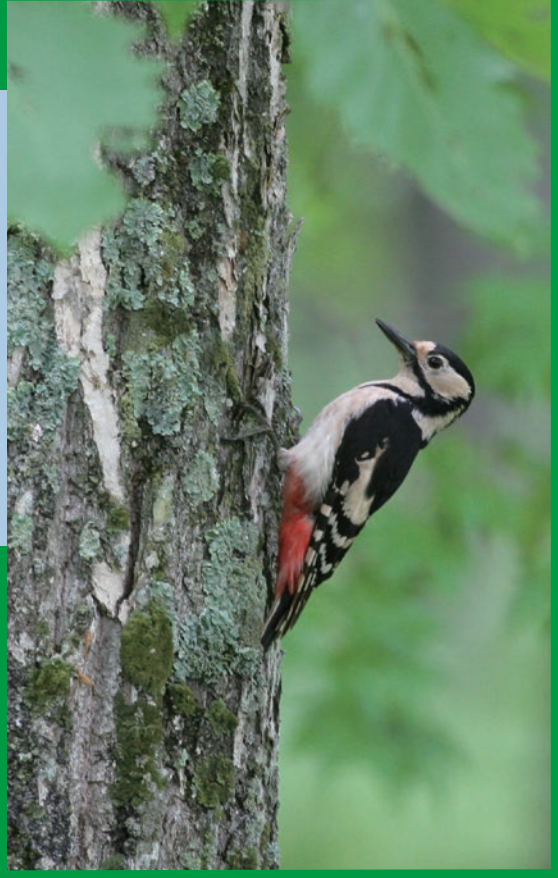
事務局：特定非営利法人　バードリサーチ
〒183-0034　東京都府中市住吉町 1-29-9

本文執筆：植田睦之・植村慎吾

ロゴマーク　表紙デザイン：重原美智子

編集協力：榎本博子，大橋美幸，菊池菊子，小泉俊江，御堂明日実

＊ 主催団体
特非）バードリサーチ，公財）日本野鳥の会，公財）日本自然保護協会，日本鳥類標識協会，公財）山階鳥類研究所，環境省生物多様性センター



全国鳥類繁殖分布調査

日本の鳥の今を描こう

bird-atlas.jp